ポケットモンスター　メディター

Karyu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケットモンスター　メディター

【Ｎコード】
Ｎ２５５４Ｉ

【作者名】
Ｋａｒｙｕ

【あらすじ】
わずか三日にしてこの世界はロケット団に乗っ取られてしまった。メディターを目指す少女ルカの日常は奪われてしまったのだ。これは夢を追い続けながらも悪と立ち向かう少女ルカの物語―――。【ゲーム設定を遵守しアニメの世界観とポケスペの世界観を両方交えています】

イーブイの最終進化形態は全部で？（前書き）

はじめましてＫａｒｙｕと申す者です。

以前は「ポケットモンスター　神々の奇跡」を執筆しておりましたが、新しいポケモン小説を書き始めました。

大体がシリアス調になっておりますので、どうぞ心行くまでお楽しみください。

それでは、はじまります！

イーブイの最終進化形態は全部で？

ポケモン歴００００年。教科書にはそう書かれている。

なんでも２０ＸＸ年前に天変地異が起こったみたいで、世界はリセットされたんだとか。

わかんないけどね……。ただ私が覚えなきゃいけないのはポケモン歴００００年に、天変地異【イニシャルインシデント】が起こったってことだけ。だって明日のテストにでるんだもん、覚えとかなきゃね。

デスクライトが照らす学校の教科書とノートに目を通す。赤で線を引いたり、蛍光ペンでいろいろ囲ったりと結構彩色賑やかなノートに書かれた情報を頭にインプットしていく。

「えっと、イーブイの最終進化形態は……シャワーズでしょ、サンダースに、エーフィ、リーフィア……えっと、えっと～」

指を折りながら数えていくも、７体いるうちの４体しか名前が出てこない。

「なんでこんなにイーブイって進化するの～～～？」

と愚痴ってもイーブイがかわいそうなだけなので、ぶつぶつ言いながらも残りのブースター、ブラッキー、グレイシアの名前を暗記する。

テーブルの上に置いてあったココア入りマグカップを口元に運ん

で、しばしの休憩。

「ふぅ……温まる～」

窓の外では部屋の中からの光のせいで見えないけど雪が降っているはず。

「明日も寒くなりそうだなー」

と一人口にして、

「雪がたくさん降って学校休みになんないかな……」

などと淡い希望を抱きつつ、私は授業で取ったノートに目を走らせる。

時計はもうすぐ真夜中の１２時に差し掛かろうとしていて、私はカチカチ言いながら進む秒針をＢＧＭに手を動かしてテスト勉強にいそしんだ。

ベッド下のバスケットに入れてあるモンスターボール内の主はもうすっかりと熟睡中のことだろう。

「よ～し、もう一頑張り！」

気合いを入れなおして、私は明日に備えるのであった。

翌日：

今日も今日とてポッポやオニスズメの鳴き声で目を覚ます。

冬だっていうのに元気だなー、と思いつつ私は冷え切った頭をぬくぬくの布団の中へと埋もれさせる。

「ルカー、起きなさーい。遅刻するわよー」

階下から透き通るようなお母さんの声が鼓膜に触れる。

「むぅ……でも、もうちょっとだけー」

と、なぜか一日の中でもこの時ばかりは自分にとてつもなく甘い私は瞼を閉じて再び夢の中へとダイブイ――――――

「起きろ、アホルカ」

ボスンっ！

「んぎゃっ」
「お、まるでキャタピーが車に轢かれた時のような音……」
「ちょっと！？　変な例えしないでよ！！」

唐突に私の頭にのしかかってきた重みに私は乙女としてはあるまじき奇声を放った挙句、想像もしたくないような説明書きまで聞かされる。

大声を上げながら布団から起き上がった私は、重みの原因である鞄を押しのけてお兄ちゃんを見上げる。いや、睨み上げる。

「おお、こわっ……。さっさと着替えて降りてこい、飯だぞ。しかも今日は豪勢にも朝から焼き魚だ。来ないんなら俺がお前の分も食っといてやるよ、じゃな」

言いたいだけ言って、お兄ちゃんは私の部屋から出ていく。お兄ちゃんの肩にはお兄ちゃんのニューラが私を見下ろしながら卑下た嗤い声をあげていた。

「うぅ、最悪……」

大抵お兄ちゃんのニューラがあんな表情をするときは、あまり良いことが起きない。

「私の魚とらないでよ！！」

しかし、快適な目覚めを取られても快適な朝食まで取られてなるものか。

私は、ばっ！　とベッドから降りて制服に着替えて下へと降りる。

白地のブラウスに赤い紐型リボン、スカートは夏の時より裾を少しだけ伸ばして紺色のニーソックスをはく。そして冬用の上着を着れば家の中だとぽかぽかして丁度良い。

階段を軽妙に駆け降りると同時にダイニングへとダイブイン、すぐさま自分の席に座る。

「いっただっきま～す！」

箸を手にとって合掌。ご飯の入ったお茶碗を持ちあげてほかほかのお魚に箸を通して身を解(ほぐ)す。

「お前って飯の時、いっつもテンション高いよなー（もぐもぐ）」

「いいじゃない、元気があって」

「うざいだけ」

お兄ちゃんとお母さんのやり取りを片耳で聞き流しつつ、私は点けてあったテレビで流れるニュースを眺める。

「今朝早く、ハナダシティにて窃盗グループ約5名による強盗事件がありました。犯人達は青いバンで逃走、警察はポケポリと共に共同捜査に乗り出した模様。ポケポリによりますと、窃盗グループは凶悪テロ組織ロケット団との関与が高いとし、警察との共同捜査に――――――」

お母さんがキッチンからお味噌汁を運んできて私達の目の前に置いて、不安の色を露わにする。

「あらあら、朝から物騒ね」

「ポケポリも出るなんて、大事だな」

ポケポリとはポケモンポリス。名前はかわいらしいんだけど世界ナンバーワンの警察組織である国際警察の別称……。えっと、確かこの街にもポケポリ勤めの知り合いがいたような、いなかったような……。

「まあ、でもポケポリが動いてるなら安心だよ。お母さん、おかわり！」

「あら、はいはい」

「太るぞ」

「うっさい、バカ兄（にい）」

「んだと！」

お母さんは私から茶碗を受け取って、台所の方へと向かう。お母さんは３０後半だっていうのに全然２０代前半の若さを保っていて、子供の私も羨（うらや）む程の美人さんなんだよねー。まあ、少し天然っぽいところもあるけど。

ちょっとだけ茶味がかった黒の長髪で、目元は少しだけ垂れ気味……ただそこで立っているだけでボーっとしているようなそんな印象を受けるけど、そこがまたお母さんの三大魅力の内の一つ。

そして私の隣で勝手に騒いでいるのがお兄ちゃんのケン。私より３つ年上の、今年トレーナーズスクール最長学年。バトルの腕はピカ一なんだけど、性格が駄目。失格。論外。結構背が高くて、髪は中ぐらいの黒。コンタクトにすればいいのに、なぜか眼鏡。本人曰（いわ）く、「オシャレだよ、オ・シャ・レ」とかなんとか。ちなみに１８才。相棒のニューラが床でおいしそうにお母さん特性のポケモンフーズを堪能している。

「あっ！！」

そしてそこで気付く。

「ごめんね、ガーディ。はい、朝ごはんだよ～」

「ガウ」

ボールから出されたガーディはちょっと拗ねたような顔と声を上げて、私に振り返りもせずに朝ごはんの入ったボウルへと行ってしまう。

「あうぅ」

「お前ってひどい主人だよな」

「うぅぅ……」

この時ばかりはお兄ちゃんに反論できない私だった……。ごめんねガーディ、お兄ちゃんがあんなこと言うから慌ててごはん上げるの遅くなっちゃったの。決して私が悪いわけじゃないの、ね、許して？

そんな脳内謝罪を手を組んでお祈りしている姿を傍（はた）から見ていたお兄ちゃんは、

「さて、学校行くか」

と、ため息と共に立ちあがり私を置いてさっさと出かけてしまった。

「あらあらケンくん、もう出るの？」

「ああ、なんか朝からバトル申し込まれたからな。ちょっくら行ってくる」
「頑張ってね、はいお弁当」
「サンキュ、じゃあ行ってくる」
「いってらっしゃ～い」

お母さんがお兄ちゃんを見送り、お兄ちゃんは駆け足でこの寒い中学校へと行ってしまう。相棒のニューラは外に出るのが待ち遠しかったみたいで嬉しそうに後をついていく。さすがは氷タイプ……。そしてお兄ちゃんはお兄ちゃんで雪玉を作ってはニューラに投げて遊んでいる。バカみたい、あんなにはしゃいじゃって。

「ルカちゃんは？　今日はカナちゃんと一緒に行かないの？」
「あ……そうだった」

ドアが閉まるまでお兄ちゃんのバカ兄っぷりを見ていた私はお母さんの一言で思い出す。

「もう。あんまり遅れないようにしなさいね？」
「は～い。あむあむ、もぐもぐ」

勢い良く残りの朝ごはんを平らげて、それと同時にガーディも終わったらしく、

「ワン！」

と、ごちそうさまのつもりで吠えていた。

「あらあらガウくん、ありがとう」

ちなみにお母さんはガーディのことをガウくんと呼ぶ。そしてお母さんはポケモンの気持ちがわかるんだとか……だからさっきのがごちそうさまって言っているのがわかったんだけどね。

「よーし、ガーディ行くよっ！」
「ガウ！」

お腹が満たされれば機嫌も良くなる。

厚めのコートを着て、首にマフラー、両手には手袋を装備して玄関へと出る。

「はい、お弁当」
「ありがとー、行ってきます！」
「いってらっしゃ～い」

お母さんの極上弁当を手に取り、私はガーディと共に雪の積もる通学路へと躍り出る。

元気良く駆け足で、途中ガーディと一緒に大きな雪の塊を見つけたらかけあって遊んでいて気付く。

『わ、私もバカ兄と同レベル……』

もしもガーンという背景文字とどよ～んとした感じのレイヤーがあればぴったしな心境……。

でも、まあ楽しいからいっか。

親友のカナの家までもうすぐ。昨日朝一緒に行く約束をすっかり

忘れてしまっていた。

結構人だかりも多い通学路なんだけど朝ともなれば別で、同じトレーナーズスクールに通う他の生徒達がちらほらといるだけ。

空は清閑で雪なども降らなくて、お日様が地面の雪を真っ白く輝かせている。

「う～ん、良い一日になりそう」

ニューラのあの嗤い声を忘れてしまうほどに、そう感じた。

すると突然背後からクラクション音が鳴り響き、私は後ろを振り向く。

「！？」

雪を跳ね退けながら突進してくる青いバンに危うく轢かれそうになるも、とっさに身をよじらせてなんとか接触を免(まぬか)れる。

「あ、あっぶな～……！」

「ガウ？」

心配そうにガーディが私を見上げてくる。

「だ、大丈夫だよガーディ。でも、本当にあっぶないなー」

過ぎ去っていく青いバンを遠目に、私は軽い既視感に襲われる。

「あれ、あのバンって……」

首を傾げてみる。でも思い出せないので気にしないことにする。

「それよりも早くカナ迎えにいかないとっ！」

少しだけ時間をロスしてしまった。

「行くよガーディ」

「ワン！」

私はガーディを連れて、さっきよりもダッシュをかけて雪道の通学路を駆けていく。

まだまだ一日はこれからだ。

イーブイの最終進化形態は全部で？（後書き）

ルカ「はじめまして、主人公のルカでーす！」

はじめましてＫａｒｙｕでーす！

ルカ「なんか私が主人公って恐れ多いような気もするけど、頑張っていきたいと思います！」

自分も、頑張っていきたいと思います！

ルカ「どうせまた何も考えてないんでしょ？」

いや、今回はちゃんと考えた！！

ルカ「おお！　なにをなにを！？」

タイトルを！

ルカ「……えーっと、これからもポケットモンスター　メディターをどうぞよろしく～」

あ、ちょっ、シカトはきつい！！

※自分のわがままを、どうか、どうか……お許しください……。

敵が水タイプの時、自分の手持ちが電気タイプなら気をつけることは？（前書き

どうも御無沙汰しております、Ｋａｒｙｕで～す♪

ルカ「さーて、二話目だね～」

そうだねー。片手に湯飲みを持って、日本懐かしの緑茶をすすっておりますＫａｒｙｕです。

ルカ「後は煎餅（せんべい）があれば万々歳だねー」

あ、俺煎餅派じゃないから。

ルカ「なんで？！」

そこそんなに食いつくこと？！

ルカ「煎餅ｉｓおいしい！」

ルカ、俺丁度アメリカいるから英語勉強しような？　な？　た、頼むから！

ルカ「ドントウォーリー」

……二話目、始まりです。

敵が水タイプの時、自分の手持ちが電気タイプなら気をつけることは？

「カナー！」

なんと、トレーナーズスクールから徒歩三分のところにある豪邸……そこがカナの家。

ここハナダシティは西側にお月見山の生み出す断崖に面する街。今は冬だからお月見山の登頂には雪が降り積もり、普段ならその独特な山脈が落とす夜の影は不気味に感じるけど……今は愛着すら感じる程に真っ白な帽子をかぶっているみたいでかわいく思える。

カナの家の前で一際大きな声を上げる。

カナは玄関先で待っていてくれていたみたいなのか、ささっと玄関から出てくる。

「お、おはよう……ルカちゃん」
「おはよ、カナ」
「ガーディもおはよう」
「ガウ！」

テンドウ　カナミ、皆様ご存じの通りこのハナダシティハナダジムジムリーダーをしているテンドウ　カスミさんの妹様なのだ！

カスミさん一家曰く、カナミは私達と違ってとても恥ずかしがり屋さんで内気な子だからルカちゃんよろしくお願いね……とお願いされたのを未だに覚えている。

お願いされたからとかそういうのじゃなくて、私はカナとは幼稚園の頃からの仲だからそんなのあんまし意味ないんだけどね。

「それじゃ、いこっかカナ」
「うん」

地面にしゃがみながらガーディの頭を撫でるカナは嬉しそうで、ガーディも喉を上に向けてここぞとばかりに甘える。

カナが私の横に並ぶように歩いて、彼女の黒い長髪からは柑橘(かんきつ)系の甘い匂いが伝わってくる。

「あ、カナ、シャンプー変えたでしょ」
「え……？　あ、う、うん、アヤメお姉ちゃんが新しいの買ってきてくれたから」
「へぇ～、なんて言うの？」
「えっとね……オレンオレンシャンプーだったかな？」
「へー、今度お母さんに聞いてみよ」

カナの家はもちろんジムリーダーの家ということで、五人姉妹で住んでいる為に家は大きい。上のお姉さんからサクラさん、アヤメさん、ボタンさん、カスミさん、カナミ……と続いている。でも、確か今はカスミさんこの街にいないんだよね。

「カスミさんはいつ帰ってくるの？」
「お姉ちゃん？　……まだ、わからない」
「そっか」
「ごめんね」
「ううん、そんなカナが謝るようなことじゃないよ」
「そ、そうだね」

彼女の照れ隠し笑いに若干引っかかるところもあったけど、今は気にしないことにして登校する。

「それにしてもさ、カナ……」
「なに、ルカちゃん？」
「テスト勉強した……？」
「う、うん……一応。ルカちゃんは？」
「うーん、したことにはしたんだけどね……自信ないかも」
「ル、ルカちゃんならきっと大丈夫だよっ……！」

両手で拳（こぶし）を作り、鞄（かばん）と共に胸元まで上げて私を直視してくるカナの仕草の可愛さに、私は思わず

「ありがとう、カナー！」
「あ、きゃっ！」

カナに抱きついて頬を重ねてすりすりする。

そうやって朝からキャーキャーやってたら、いつの間にか校門の中に入ってしまっていた。

普段ならもっとたくさんの生徒が校舎へと続く道を歩いているんだけど今日は違った。

校舎の横から続くグラウンドの方へと生徒の足が運ばれていき、かすかにではあるけど歓声と衝撃音が聞こえてくる。

「あー、そうだった、今日はお兄ちゃんがバトルしてるんだった」
「え、ケンさんが！？　い、行こう、行こうよルカちゃん！」

カナの態度からわかるとおり、カナはなぜかうちのバカ兄にホの字なのだ。どこがいいのか、私にはさっぱりわからないけど。

「えー」

「お、お願い、ルカちゃんっ！」

愚図(ぐず)るも、カナからそうお願いされた断れるわけないから私はしぶしぶ人だかりのできている方へと歩いていく。

ちなみにトレーナーズスクールには練習用のバトルフィールドが存在していて始業ベル前と放課後以降は常にオープンされている。

そしてお兄ちゃんは週に2、3回は他の人からのバトルの申し込みを受けている。

人混みの中には同級生の子達や先輩達の姿も見られ、これはいつしか恒例の行事的なものになりつつあった。

「ちょっと失礼しま～す」

いくらなんでも私とカナの身長じゃ、この人垣の向こうで行われているバトルを観ることなどできないから人の間をカナの手を取って縫っていく。

「お、ケン妹」

「あ、ルカちゃんおはようー」

「テンドウさん、おはようっす！」

「おはよ～、あ、ちょっと通らせてねー。ほらガーディ逸(はぐ)れちゃ駄

目だよ」
「お、おはよう、ございます……」
「ガウ！」
この年になっても顔見知りする傾向にあるカナはそれでも挨拶の返事を返す。
最前線に出れた私とカナは早速フィールドで行われている戦闘に注目する。
私から見て右にお兄ちゃん、そして左には確か同じクラスで学年実力ナンバーワンの……えっと、名前なんだっけ……。
まあ、とにかくその子が使っているポケモンはリザード。対するお兄ちゃんは相棒のニューラ。
えっと……相性的にはリザードの方が有利だね。
「ケン先輩、勝ってみせますよ！」
「やってみろ。金はもらっても、容赦はないぜ？」
何格好つけてるんだろバカ兄は……。眼鏡をくいっと片手であげて、びしっと相手の子を指さして。
「ケ、ケンさん格好良い」
「ええ～……」
そして周りの女子群からもバカ兄に歓声を上げている。
駄目、駄目なんだよ皆！　あんなバカ兄つけあがらせたら一体何

をしでかすか、わかってないんだよ！

「リザード、【陽炎】！」

「オリジナル技か……。なら俺達も見せてやるか、ニューラ」

リザードの尻尾の炎が急激に勢いを上げて、威嚇するように尻尾を振りまわす。フィールドに積もった雪が炎の熱気で蒸発し、それが空気中の密度を狂わして光が屈折をはじめる。【陽炎】、それは対象の視覚を狂わす技みたいね……。メモメモ。

「リザ」

「ニュラ！」

「リザード、【火炎放射】！」

「ニューラ、【切り裂く】」

リザードの【火炎放射】は【陽炎】の補助効果で、ありえない屈折率を見せてニューラに迫る。

でも、まあお兄ちゃんのニューラには意味無いと思うけど……。

「ニュ」

余裕の表情で一閃されるニューラの右腕。それはニューラに直撃する直前に左へと大幅に【火炎放射】が曲がった場所だった。

「なっ！？」

「リザ！？」

そしてそんな豪快で軌道を読み切るのも難解な技を、お兄ちゃん

はいとも簡単に切り裂いてしまう。

【火炎放射】を切り裂いて、その炎の直流を真っ二つにしたニューラの顔はいかにもお兄ちゃんみたいに獰猛で好戦的な笑みを浮かべていた。

本当、二人共格好つけすぎ。

「ニューラ、【騙し討ち】」

そして見た目重視なお兄ちゃんとニューラが一番得意な技が炸裂する。

一気にリザードとの距離を縮めたニューラは、敵の懐に右拳をめり込ませて、右足を自分の左足で薙ぎ払ってバランスを崩させる。

そしてそのすきにリザードの背後を取って完全に動きを封じる。

「俺の勝ちだ」

「くそっ！」

ここにてまたも大きな歓声。まあ、本当にお兄ちゃんは強いなーっておもわされるけどね。隣のカナの目は爛々（らんらん）と輝いている。

「ほわぁー、ケンさんすごい……」

まあ、そうかもしれないけど、うーん、あんなバカ兄がこのトレーナーズスクールで一番強くて良いのかなーーー？？　不安しか募らないのは私だけ……？

「やあやあ皆ありがとうありがとう。次の対戦を俺とご所望な人はこの用紙にサインして、一番金の積立が多い人と明後日勝負しますよー」

と、ここで登場する金の亡者発言。

そう、バカ兄は自分の用意した用紙に自分に挑戦したい生徒に名前を書かせる。名前を書いた欄の横には金額と書かれており、明日の放課後までに一番大きな金額を記載させた生徒が勝負をできる。なぜたくさんの生徒がバカ兄にあまでして挑むのかというと、なんとバトルに勝てばレートが十倍で自分に返ってくるシステムになっているからだ。

「はぁ……もう行こうよカナ」

「う、うん、あ、あとちょっとだけ……」

私に腕を引っ張られながらもカナの視線はお兄ちゃんにたびたび向けられる。

ガーディはボーっとしながら歩いてるし……。

『はぁ……』

頭の中で漏れたため息は、寒い冬空の中白い靄（もや）となって上へと漂っていく。

テスト

そして早速授業が始まる。といってもテストからなんだけどね……。用紙が先生によって配られていく。

教室は大学のレクチャールームみたいになっていて、先生を斜めに見下ろすような形でテーブルが段ごとに並んでいる。

だから教室も大きくて、先生がレクチャーするのに使っているプロジェクターや電子ボードは大きくて見えやすい。

『よし、頑張る！！』

昨日あれだけやってきたんだから、できて当たり前！　自分の前に伏せられるテスト用紙を睨んで、伏せられても透けて見えてくる問題文を読もうとして必死になる。

「はい、はじめ」

先生の声が教室中に響き、皆が一声にテスト用紙を捲（めく）る音が重なり合う。

【質問1：イーブイは合計で七匹の最終進化形態を得ることができる。その進化する七匹全部の名前とどういった条件下にて進化するのかを下記に述べよ】

『え……？』

鉛筆を握る指が硬くなる。

『……え？　え？？』

そして手から嫌な汗がにじんでくる。

昨日必死に覚えた内容は、山場の問題一問目の半分しか答えられない。

なんとか質問1の七匹の進化形態を書き終えて、うろ覚えながらに知っている知識をなんとか答えとして書き込む。

『サンダースは雷の石で、ブースターは炎の石で、シャワーズは水の石……の、残りは……わ、わからないよ～～～！！』

第一問から意気消沈した私に追い打ちをかけるように次の問題へと進む。

【質問2：対戦相手のポケモンが水タイプで自分のポケモンが電気タイプの時、一番注意しなければならない点は次の内どれか？　下記より一つ選び、その理由を述べよ。

・電気タイプの技を使う時、周りに発火物がないかを確かめる。
・室内ではなく屋外での戦闘を心がける。
・相手が放った水属性の攻撃で辺りが濡れていないか確かめる。

・自分のポケモンが電気タイプの技をコントロールできない場合、使用しない。】

『わ、私達のスクールってこんなに難しい問題出るの……？』

精神的ダメージを急所に受けながらも、私は自分の今の一番のパートナーである鉛筆（ロコンとガーディのプリントが入った可愛い赤とオレンジの）と共に難攻不落と思われるテスト用紙に立ち向かっていった……。

敵が水タイプの時、自分の手持ちが電気タイプなら気をつけることは？（後書き

ルカ「駄目、脳が死んじゃう……」

まあ、でも序盤は良い滑り出しのバトルが見れたから良かったじゃん。

ルカ「あんなバカ兄のバトル見たってつまんないだけだよ」

ケン「言ったなお前」

ルカ「あ、ごめんなさいお兄ちゃん！　今日の放課後はどこに、どこに行くの？」

ケン「今日もらった試合料目当てでおごってもらおうとしている魂胆がばればれなんだよ」

ルカ「ちぇ、ケチ兄」

ケン「黙れネコババルカ」

お前らって本当仲良いよな～。ズズズ（お茶をすする音）

ルカ・ケン「「どこが？！！」」

そこが。

「裏」：青色のバン（前書き）

やたらめったらと、更新。

ルカ「早いね」

まあ、短いからね。

ルカ「私、出ないもんね……」

まあね。

今回のサブタイについている「裏」：はこれからちょくちょく使っていきたいと思っています。まあ、いわゆる別サイド視点ってことですね。ポケ神の時みたいに主人公は一人なので、違う視点に移る時はこの「裏」：を使用します。

ルカ「ややこしいねー」

まあ、慣れてくださいw

ルカ「ずうずうしいねー」

それでははじまりはじまり〜

「裏」：青色のバン

キキーーー！！　ボゥン！！

「あー、やってらんない、やってらんないわーーー」

ハナダシティ、地元の人ぞ知るソネザキ家……その隣の庭先の垣根にぶち込まれた一台の青きバン。今朝、強盗の疑いをかけられた容疑者五人組が乗っていたと思われる青色のバン。その中から長身の女性が現れる。

黒いフィットスーツを着用し、きりっと吊りあがった黒縁眼鏡に後ろで束ねられた赤橙色の長髪が彼女が運転席から出ると同時に揺れ、跳ねる。

「ちょっと、カンナさん！　安全運転！！　私死ぬところでしたよ？！」

そして助手席（垣根に諸にぶつかっていた場所）から出てくるのはハナダジムジムリーダーのカスミ。昔はお転婆マーメイドと呼ばれていた幼き頃からのカスミからは一転、以前ボーイッシュに切り揃われていた橙色の髪は肩の位置にまで下ろされていた。

「うっさいわね、あんた達全員運転できないから私がやってるんでしょうが」

頭を掻きながら面倒くさそうに愚痴るカンナに、カスミは彼女を見上げながら頬を膨らませる。

「あらあら、カンナ……アンズちゃんが気を失ってしまいましたよ？」

後部座席からは物腰穏やかながらもタマムシジムジムリーダーを務めているエリカがアンズを引っ張りだしながら現れる。頭に赤いヘアバンドをつけている彼女は、失神しているアンズをどこか楽しげに見下ろしながら脇下に腕を通して引きずり出す。

普段ならば常に着物な彼女だが、ここにいる一同は全員がそろって黒いフィットスーツを着用している。

そして最後に現れたのは、黙って車内から降りてくるナツメであった。

「あら、大丈夫？」

しかしカンナもアンズの安否を気にし、アンズの変わりにナツメが小さく呟く。

「大丈夫……」

「あら、ならいいわね」

そして自分の家の敷地内で突然の衝突音が起これば、身に出ない家主などいないであろう……

「なんや、なんや！？　何が起こったんや！！」

玄関先から現れた男をカンナが睨み、にっと口元に笑みを作る。

「確保よ、ナツメ」

「はい」

ナツメがユンゲラーを繰り出し、男はそのまま身動きが取れずに硬直する。

「うわっ！」

カスミがゆっくりと男の傍まで歩いていき、男は初めてそこで彼女達の存在に気がついたかのように更なる困惑と恐怖に苛(さいな)まれていく。

「カ、カスミ！？　それに、ナツメ、エリカ、アンズにカンナまで！」

なぜカントー地方の女ジムリーダー達と四天王のカンナが自分の家の前で、全員が黒いフィットスーツを着用しているのか？　そして、今朝から騒がれている青いバンが自分の庭に衝突しているのか？

「すみませんマサキさん、これも任務の内ですので。ね？　カスミちゃん」

「そうね。マサキさん、悪いけど身柄を拘束させてもらうわ」

カスミがニョロトノを繰り出し、エリカがクサイハナを取り出す。

「ニョロトノ【催眠術】」

「【眠り粉】お願いね」

「ニョロ」

「ハーナッ」

「や、やめろお前た――――！！」

抵抗することもできずに、マサキは深い眠りへとついてしまう。

「全く、なんで私達だけこんな任務ばっかりなのよ」

悪態をつくカンナは、その片脇にしっかりとアンズを抱えている。

「そう言わないの、カンナ。これも、あの人の為、私達の為じゃない。それではそろそろ行きましょうか」

エリカがクサイハナをしまい、カンナを諭す。

「そうね……。ナツメさん、お願いできる？」

ニョロトノをボールへと戻して、カスミはマサキを拘束しながらナツメに問う。

「……（こくり）」

ナツメが静かに頭を上下に振ったのを見届け、四人プラス二名（気絶しているアンズとマサキ）が集結する。

「【テレポート】」

そう呟いたナツメの指示に従い、ユンゲラーはその場にいた全員を一気に別の指定場所へと瞬間移動させる。

数分遅れてやってくるポケポリと警察の車両やヘリはただただ衝突した青いバンと主無き家を見つめることしかできなかった。

「裏」：青色のバン（後書き）

次はルカの意気消沈ぶりをお楽しみにw

ルカ「あんなのひどいよ！」

まあ、現実問題、頭良くなかったら良いトレーナーにはなれないしね。

ルカ「うぅ……」

てなわけでして、俺も勉強しよ。

攻撃の能力育成にもっともすぐれている性格は？（前書き）

今回はビッグにルカの絵を描いたので、更新が遅かったです！！

ルカ「わーい！」

でも、先に絵を描いたので多少文脈と繋がりませんがお許しください。

ルカ「えー」

まあ、今日から三連休だからできたことなんだけどねw

ルカ「お疲れ～」

さあ、絵は後の方ですがまずはテストの続きをやり終えてしまいましょうw　皆さんは何問解けるかな？

ルカ「わ、私できるもん！」

攻撃の能力育成にもっともすぐれている性格は？

テスト：

【質問３：ポケモンを捕まえる時、ゲットに用いるのはモンスターボールであるがモンスターボール以外にあるボールの種類と補助効果を五つ記入せよ】

『えっと、ボールの種類かー……。スーパーボールに、ハイパーボール……。あ、そういえばカナが珍しいの持ってたな～、たしか、ルアーボール……だったっけ？』

うわ覚えながらも知っているボールの種類と効果を鉛筆で書いていく。

私が良くカナと行くフレンドリィショップではいろいろなボールが売られていて、一つ一つがシェルフに並べられている。やっぱり需要の一番高いモンスターボールから始まって、値段と希少価値が高い順に並べられている。

でもさすがに私のお小遣いだと3カ月は溜めないと、普通にハイパーボールには手が出せない。それに、ハイパーボールで捕まえようと思うポケモンにも出逢わないしガーディの世話をする為の用具とか買っているからさして困らないんだよね。

っとと、物思いにふけっている場合じゃなかった。

【質問４：あなたが所持している手持ちポケモン一匹の名前と特性を下の欄に記入せよ。そしてそのポケモンの進化系・または進化前

の名前と違いを述べよ】

『なんだ、こんなの簡単じゃん。えっと、名前はガーディで、特性は威嚇と貰い火。私のガーディは貰い火だったよね……。それと進化系はウィンディで……違いは、う～ん、かっこよくなる……？』

指示通りに回答欄に鉛筆を走らせ、私は４問の文章問題を終える。

そしてラストスパートの選択問題へと挑む。

※ここからは読者の皆様も是非是非ご参加くださいｗ（作者Ｋａｒｙｕより）

【１：攻撃力の能力育成にもっともすぐれている特性は何か？
・臆病
・寂しがり
・腕白
・陽気】

【２：ポロックまたはポフィンを二つの木の実で作る場合、美しさがもっとも上がりやすい組み合わせは次の内どれか？
・カゴの実ｘザロクの実
・ブリーの実ｘクラボの実
・シーヤの実ｘモコシの実
・ヨロギの実ｘパイルの実】

【３：特性で「持たせた道具の効果があらわれない」ものは次の内どれか？
・忘れん坊
・不器用
・天然
・怠け】

【４：バトルにおいて、審判のいない時はどうやって勝敗を決める？
・個人の判断での瀕死状態確認
・ポケギア・ポケナビ・ポケッチに内蔵されているバトル審査モードをお互いにＯＮした状態で確認
・第三者に審判をお願いする
・ポケモンが倒れ、１０秒間立ちあがらなかった時に瀕死と判断】
【５：ジムで対戦を希望する時に一番初めにしておかなければならないのは？
・ジム対戦の予約をポケモンセンターで済ませる
・対戦するジムリーダーのスケジュール把握
・ジムリーダーのプロフィール確認
・ジムリーダーとお友達になる】
【６：次の技の内、技マシンに無いものは？
・穴を掘る
・毒々
・フラッシュ
・火炎車】
【７：飛行タイプを持っていて【空を飛ぶ】を覚えないポケモンはいるか？
・いる
・いない】
【８：化石から復元されるポケモンが実在するが、ツメの化石から復元されるポケモンはどれか？
・カブト
・アノプス
・タテトプス
・プテラ】
【９：ケムッソはその性格によってカラサリス・あるいはマユルドに進化するか別れるか否か？
・別れる

・別れない】
【１０：確認、あるいは伝記されているポケモンの種類は全てで５００体以上いるか否か？
・いる
・いない】

『……何これ？』

選択問題の一番ひどいところ、それは異常無きまでに難しいということ。

『わ、わかんないよ～……』

泣きそうになるぐらいに、手も足も出ない。でも、選択問題だから１／４は正解するはず……。アルセウス様お願い！！

神様に願えば、なんでも叶うんだから！！

そんな自暴自棄（じぼうじき）になった私の行く末は……知るわけないじゃんそんあの……。ううぅ、私の昨日の努力が～～～……。

そして無情なチャイムは私に解放という音色ではなく、撃沈という名の鐘音をもたらした。

昼休憩：

先生がテスト用紙を回収。私達は今から昼休憩のため、各々に席から立ち上がったり談笑を始めたりする。

「だ、大丈夫、ルカちゃん？」

心配げな瞳で私に話しかけてくるカナ……。

「う、うん……」

「そんなに、駄目だったの？」

彼女のそんな無垢なる視線が痛い……。

「あ、あはははは、あはははははは」

カナから視線をそらして、虚空を見上げるように乾いた笑いがこみ上がる。

「だ、だったらご飯にしよ？　ね？　お腹いっぱいになったら気分も良くなるよっ」

私を気遣ってくれるカナ。

「うん」

元気な時ならば抱きついてはいるけれど、今は体が非常に重くてだるかった……。

私はカナに手伝ってもらって立ち上がり、重い足取りで食堂へと向かった。

食堂：

「ほ、ほらルカちゃん、ご飯ちゃんと食べないとお昼の授業体持たないよ？」

私を心配するとともに焦りを見せ始めたカナはその手にミックスサンドをかわいらしく握っていた。

「あーん……」

「え？」

私は右頬をテーブルに突っ伏したまま横にカナを見上げながら口

をあける。

「ほ、欲しいの？」

カナが自分の持つサンドイッチと私の口元に視線を二、三往復させて尋ねてくる。

「（こくり）」

何も言葉では発さずに私は顎を上下させる。

「じゃ、は、はい」

カナはなんだか辺りを確認するように首を左右にせわしなく向けた後、私の口元にサンドイッチを運んでくれる。

お母さんがいたら「お行儀悪いわよルカちゃん」って言ってくるだろうけど、そんなこと気にしている程に心に余裕などなかった。

カナのサンドイッチの柔らかいパンの食感とハムときゅうりが生み出すもにゅもにゅ感としゃきしゃき感を堪能して私は顔を上げる。

「きゃっ、ル、ルカちゃん？」

私の突然の行動にカナはびっくりしたようで、手に持つ水筒をずるりと落としてしまいそうになる。

「帰る」

「え？」

「もう、帰る！」

「だ、だめぇ〜〜〜！！」

席をそそくさに立ちあがり食堂から出ようとする私に縋(すが)るようにカナが私の服を両手でしっかりと掴んで逃がさんとする。

「もう、私は嫌なの！」

「あ、諦めちゃダメだよ！　人生、諦めたら終わりだよ！」

と、何の因果で生まれたかわからない意味不のプチ劇場が食堂の昼に行われた。

『テスト、怨むべし』

放課後：

放課後、私は全ての授業から解放された。

しかし心だけは絶望という名の檻に監禁された。

カナとは昼からの授業とは別れるため、下校するのは私の方が若干早い。

一人とぼとぼ学校から出て家へと変える通学路を逆進行していると、後ろから慣れ親しみ過ぎてケンのする声が投げかけられる。

「おい、帰るぞ～」

そう、一番一緒に帰りたくない時に現れる私のお兄ちゃんであった。

「……ちっ」

「おい、なんだよお前。お兄様見て第一声が舌打ちとは良い度胸じゃないか？　あ？」

「離せこのバカ兄ー！」

会うなり私の髪をがしっと掴むお兄ちゃん。

「はっは～、まさかお前今日のテスト出来悪かったんだな？」

「なんで知ってるの？！」

「カナから聴いたぜ」

『カナめーーー！！』

ちなみにカナは昼からの授業の一つのカリキュラムだけお兄ちゃんとクラスが一緒なのだ。

「お前また勉強しなかったのか？」

お兄ちゃんが喋る度に真っ白い靄（もや）が虚空を漂い、霧散する。

「したもん！」

「どうだか」

話せば話すほどに機嫌も気分も悪くなっていく……。うぅ、最悪！！

「なあ、おい」
「何よっ！！」

私がお兄ちゃんの先を速足で歩きだしたら、お兄ちゃんが後ろから呼びかけてくる。

「オクタン焼き奢ってやるよ」

一瞬お兄ちゃんの言っていることが理解できなくて、口をあんぐりとさせて数秒。

「本当っ！？」
「ああ、ってことで行くぞ」
「うんっ！」

家へと続く道の間にある商店街の方へと方向回転して、私はルンルン足取りでスキップしながらお兄ちゃんの手を取り先導した。

『テストは死んじゃったけど、オクタン焼き～♪』
「ここまで機嫌変わるなんて、女って理解できないよな……」

お兄ちゃんが後ろで何かつぶやいていたけど今の私は気にしないことにした。

家：

「「ただいま～」」

「あら、おかえりなさ～い」

私とお兄ちゃんは玄関でマフラーやらジャケット・コートを脱いで掛ける。

「あらあら、二人で帰ってくるなんてどこか行ってたの？」

「うん！　お兄ちゃんオクタン焼き買ってくれたー」

「あら、ケンくん偉いじゃない」

「まあな……ルカの奴、テスト死んだみたいだしな」

「うっ……」

「あら……」

お兄ちゃんめー、要らない情報を……。

お母さんは眉をひそめちゃうし……。

「大丈夫、ルカちゃん？」

「え、あ、私？　私は大丈夫だけど、テストは……駄目でした」
「昨日あんなに頑張ってたのにね。まあ、次があるわよ。ほら二人共、ココアできてるからね」
「サンキュー」
「あ、ありがとうお母さん！」

お兄ちゃんは鞄を肩に担いだまま、玄関からリビングの方に行ってしまう。私は優しすぎるお母さんの胸元に抱きついて、感謝の意を表現する。

「ルカちゃんも、ココア早く飲まないとケンくんに飲まれちゃうわよ？」

私を受け止めて、頭を撫でてくれているお母さんの言葉をきいて私はにやけていた表情から一転、

「お兄ちゃん私のココア飲まないでよー！」

という掛け声と共にリビングへとダッシュした。

「二人共ちゃんと手洗いうがいするのよー」

そんないつもの日常が、あった。

自室：

「おいでガーディ」

「ガウ！」

ココアで温まった私は自分の部屋に戻ってガーディをボールから出してあげる。鞄も勉強机の横に卸して、デスクランプも点ける。

ガーディは四肢を伸ばして、大きく欠伸を一つした後、私の胸元へと飛び込んでくる。

「それじゃブラッシングしよっか」

「ガウ！」

私はガーディを抱き寄せたまま、私は椅子に座ってガーディの毛繕(けづくろ)いを始める。

気持ちよさそうに表情を和ませるガーディの顔を見ながら、私も今日のテストのことも忘れて癒されてしまう。

「明日を頑張ればいいんだよね」

「ガウ？」

ふと零れた独り言に、ガーディは耳をぴくんと動かして反応してくれる。

「明日も頑張るぞ～、ガーディ～」

「がうぅぅ～」

ガーディを抱きしめて私は立ちあがってくるくると周り始める。

「よーし、今日あったことは全部全部忘れよー！」

「ガウ！」

>i2208|363<

オーディオのスイッチを入れて、私は流れるポルカ・オ・ドルカのリズムに身を委ねる。

「おいルカ、明日なんだけどよ……カナにこれ返し――――」

突然お兄ちゃんが私の部屋のドアを開けて、手にはカナの物であるタオルが握られていた。

でもお兄ちゃんは言葉を全部言い切る前に私とガーディを見て硬直し、

「お前、お気楽もんだよな（ふっ……）」

嫌みたっぷりに（顔芸込み）私をバカにしてから部屋を出て行った。

「う、うるさーい！！」

私は顔を真っ赤にお兄ちゃんに叫び返すも、それは扉に阻まれ…

…今日お兄ちゃんにオクタン焼きを奢ってもらった恩などただの気まぐれと片付けてしまって、頭を沸騰させるのであった。

攻撃の能力育成にもっともすぐれている性格は？（後書き）

絵の方は、まあ活動報告で詳細を載せます。

ルカ「私ってこんなんだったんだねw」

自分のイメージするルカはこんな感じです。でも、ただ一つ気になる点は……自分の色のセンス……。

ルカ「まあ、うん」

それでは皆様、次話でまたお会いいたしましょうw

ルカ「ばいば～い」

※ちなみに答えはルカのテスト返却時に明らかになりますw

カビゴンのゲップの音は？（前書き）

と、なんだか最近更新頻度が多い割にはストーリーは全く持って進展しないのに疑問を抱いているＫａｒｙｕです。

ルカ「今日は絵は～？」

いや、そんなにすぐには描けないって……；；

ルカ「え～」

まあ、今回はスクールでの授業風景を捉えてみようと思ってね。

ルカ「そっか。でも毎日ほとんど変わらないからつまんないよ」

それでも二話にわたってお送りいたします。

ルカ「ではではどうぞ～」

カビゴンのゲップの音は？

『ああ、今日ももふもふの暖か暖か羽毛布団〜♪』

頭の上まで被った布団の中で私はぬくぬくと冬のみでしか味わうことのできない至福の温もりを堪能する。

でも、いつもながらにこの至福は長くは続かない。

うん、わかってるわかってるよ……。

「起きろっつってんだろ、アホルカ」

「どふっ」

「お、まるでカビゴンがゲップしたかのような———」

「うるさーい！」

鳩尾（みぞおち）に直撃する昨日より重たい鞄……。

「スクール行くぞ」

「うぅ……」

「さっさと着替えろよ」

「わかってるもん！」

お兄ちゃんのいつもの起こされ方に、私は嫌々ベッドから出る。

「うぅ……寒いなー」

窓のカーテンを開けて、その向こうに広がる銀世界に心を奪われそうになるも部屋のひんやりとした床の冷たさに引き留められる。

「あ、今日ってテスト返ってくる日じゃん……」

またも一気に肩が重くなるように感じる。

「はぁ、もう行きたくない……」

なんて愚痴っている間にも手は勝手にパジャマのボタンをはずしていく。

「ごはんよルカー」

「はーい！」

下から聞こえてくるお母さんの声に返事して、私はガーディをボールから出して降りていく。

部屋を出てすぐ左にある階段を下りて、ダイニングへと入る。

「おはよー、お母さん」

「おはようルカちゃん。はい」

「ありがとー」

私はお母さんからお茶碗とガーディのトレイを受け取って自分の席につく。

「はい、ガーディ」

「ガウ！」

私は床にしゃがんでガーディにごはんを上げた後に自分の席につく。

「いっただきまーす」
「そういえば、今日って実技指導だったよな」
「あっ……」

私は箸で摘まんだきゅうりの漬物をお茶碗の上に落してしまう。

「覚悟しとけよ、ルカ」
「絶対、絶対にバカ兄には教わらないから！」
「ほざいてろ」

そう、今日は月に一度の実技指導。

いつもなら先生達から指導を受ける私達生徒だけど、月に一度は上級生の教育実習の授業の一環として下級生に実技バトルを教えるクラスがあるのだ。

そしてなぜかは知らないけどお兄ちゃんはいつもその時は私の指導係になって横でネチネチと嫌味たっぷりに指示してくる。

『今月は絶対に優しくて良い先輩に教えてもらうんだから……！』

そう胸に刻んで、私は朝ごはんをかきこんでいく。

「あらあら、ルカちゃんそんなに急ぐと健康に悪いわよ」
「おかわり！」
「あら、はいはい」
「やけ食いかよ……」
「うっちゃい」

隣で口を挟むお兄ちゃんを右目だけで一瞥して反抗するも、口にご飯が入っていたためそんな声が出てしまった。

「ニュラ！」
「ガウ！」

そんな賑やかないつもの食卓。

『突然ですがニュースです』

食卓の前のテレビから速報が流れてくる。

『昨日ハナダ銀行での強盗5人組は青いバンで逃走。更にはソネザキ　マサキさんを拉致した可能性も出ており、ポケポリもますます捜査態勢を強化すると共に今後の対応に追われています。尚、銀行が強盗にあったとき5名の一般人が重傷を負い病院へと搬送されましたが今朝病院から姿を消すなどの不可解な事件も起きています』

「あら……最近本当に物騒ね。ルカちゃんもケンくんも気をつけてね」
「わかってるって」
「大丈夫だよー」

そう言いながら私は残りのご飯を喉に通していく。

一時限目　一般講義：

私のスケジュールは日ごとに違っていて、今日の授業はポケモン全般についての講義から始まる。

ここで習うことはこの世界で住む為には必須の常識を学ぶ授業……つまりは、昨日受けた試験が返ってくるクラス。

「ほら、今日は昨日のテストを返すぞ。クラスの平均は８５点だ。まあまあだな、次も頑張れよ」

「「「はーい」」」

先生がボードにクラスの最高得点、最低得点、平均点をボードに記してテストを配り返す。

「だ、大丈夫ルカちゃん？」

「カナ、私きっと死んでるよ……」

「そ、そんなに駄目だったの……？　そんなに難しくなかったような気もしたんだけど……」

『カナ様、あなたは何者でおらっしゃいますか？！』

私は驚愕の事実をさらりと口から零してしまうカナに、己の無能さを呪いながらテストの答案が返ってくる前に机の面に頭を消沈させた。

「ル、ルカちゃんっ……？」

「テンドウ、お前はクラスで唯一の百点越えだ。頑張ったな」
「あ、はい、ありがとうございます」
「おい、ハヤミ……お前はもう少しテンドウを見習え」
「うぅ……すみません……」

私は泣く泣く先生からテストを受け取り、右上に赤く書かれている45という文字に心を砕かれる。

「はぅっ！」

へなへなと力が抜けていく私を、カナが必死に支えてくれるも……私の手から回答用紙が滑り落ち、ひらりとふんわりと床へと落ちる。

「ル、ルカちゃん！　気を確かに！！」
「もう駄目なのよカナ……。私は世界を———」

と、昨日の食堂で起こった唐突なるプチ茶番劇はしばしの間の講演となり、幕を閉じた。

※ちなみに、ルカの答案用紙を見てみましょうw
【質問1：エーフィは十分になついた状態で朝か昼にLv．アップ。ブラッキーは十分になついた状態で夜にLv．アップ。リーフィアはハクタイの森にてLv．アップ。グレイシアは217番道路にてLv．アップ。これぐらい常識だ、覚えとけ】

【質問2：周りが相手ポケモンの水系の技で濡れていないかを確かめ、自分の電気タイプポケモンの攻撃による感電を未然に防ぐのは正解だ。よくできたな】

【質問３：スーパーボールはモンスターボールより効率が良くて高い。ハイパーボールはスーパーボールより効率が良くてめちゃくちゃ高い。ってハヤミ、お前な……。まあいい、ルアーボールの例を出したのは良かったぞ、でもなお前が他の例に書いたハートボールってのは無い。きっとラブラブボールとフレンドボールをごっちゃにしたんだろうな？　ラブラブボールは性別の違うポケモンが捕まえやすくて、フレンドボールは捕まえたポケモンの懐き度が上昇するぞ】

【質問４：お前、カッコよくなるって答えて点もらえると思うか？】

【選択問題　回答：
１：寂しがり
２：シーヤの実ｘモコシの実
３：不器用
４：第三者に審判を依頼する・ポケギア・ポケッチに内蔵されているバトル審査モードをお互いにＯＮした状態で確認（これは先生が選択肢を間違えたからな、どちらかに丸しても正解だ）
５：ジム対戦の予約をポケモンセンターで済ませる
６：火炎車
７：いる
８：アノプス
９：別れる
１０：いる】

【総合回答率：５０点中２２．５点】

二時限目　コンテスト講義：

教室を移動して、次の授業はコンテストについての基礎講座。トレーナーを目指す生徒もコーディネーターを目指す生徒も、ブリーダーを目指す生徒も皆が皆一般教養は身につけておかなきゃいけない。

「コンテストかー……。見る分には良いんだけどねー」
「ルカちゃんは魅せるよりも診る方だもんね」
「まあねー。だから朝の授業全部苦手……」

私がなりたいのはトレーナーでもなく、コーディネーターでもなく、メディター。

いわゆる、ポケモンのお医者さん。

なぜかはわからないけど、私はポケモン達の心情に敏感で病気や怪我をしているとすぐにわかってしまう。

「カスミお姉ちゃんが言ってたけど、ルカちゃんみたいな子は将来大物になるって言ってたよ」
「カ、カスミさんがっ？！　えへへー、そっか～私大物になるんだ

ー」

『あ、ちょっと励ましすぎちゃったかな……？』

カナが何か複雑な表情を後からするけど、私は朝の授業とは違ってテンションが上がる。

「ポケモンコンテストではポケモン達の魅力とパフォーマンスを競い合う競技です。ホウエンとシンオウで発生した競技ですが、今ではどの街でも開催されていますね」

先生の声が襟元のスピーカーを通して、後ろの方に座っている私達にも明確に聞こえる。

「カナはやっぱりコーディネーターになりたいの？」

「う、うん……」

「人前に出るの苦手なのにねー」

「で、でも……私はポケモン達にもっともっと輝いてほしいの」

「そっか。そうだよね、それがカナだよ」

そんな感じで、先生は遠方にいるから友達と喋っててても叱られないという特典があったりするのです。

午後　特別授業：

「遂に来てしまった……悪夢の時間」

「だ、大丈夫ルカちゃん？」

朝に話していた指導実技の特別授業。

授業に使うバトルフィールド場に私達９年生がぞろぞろと集まり、すでにそこで待っていた１２年生達の集団へと向かっていく。

９年生は私達の学年。それでもってお兄ちゃんの学年が１２年生。スクールは１年生から１２年生までの生徒が同じ学校で授業を受ける。

ま、私はまだ１５だからいいんだけどお兄ちゃんみたいに１８で最終学年の人は今年が正念場みたい。いろいろと進路とか将来について奮闘してる……私のお兄ちゃんはいつも通りに自由気ままに過ごしてるっぽいけど……。

「さあそれでは特別授業に入ります。上級生の子は、今回は番号を引いてくださいね。それと同じ番号の子と組んでもらいます」

「「「はーい」」」

『や、やった、今回はくじで決まるんだ！』

「わ、私ケンさんとなりたいな」

「なってなって、私は絶対になりたくないから」

「う、うん！　頑張る！」

おーおー、かわいいねー、一図な女の子ってかわいいね～。

そして渡される番号付きの紙を見ると２３番。

お兄ちゃんが向こうで手を振り掲げる番号も２３番。

「カナ、変えよう！」

「えっ？」

あいにく、お兄ちゃんもカナも私の番号を知らないから神速のインパルスで取り換える。

私は今日は絶対に優しくて格好良い先輩に面倒見てもらうんだから！

カビゴンのゲップの音は？（後書き）

さてさて、次回はどうしよっか。

ルカ「え、考えてないの？」

いや、そういうことじゃなくてルカと組む上級生生徒のことについて。

ルカ「かっこよくて、優しくて、面倒見のいい先輩がいい！」

まあ、そうなることはまずないけどねー。

ルカ「いじわる！」

いやね、登場させる子が今後のストーリーのキー要素となれるか否か的なね

ルカ「そんなの自分で決めてよ！」

あーあ、拗ねてるよ。

これはなんの骨かわかるか？（前書き）

若干遅れました～。

ルカ「今日はバトルに授業に大変だー」

そうだね。でも、こういうのって楽しいｗ

ルカ「Ｋａｒｙｕってなんか変だよね」

そ、そう？

ルカ「さあ？」

……；；　まあ、そんなこんなで第六話目、始まりです

ルカ「です！」

これはなんの骨かわかるか？

授業用　バトルフィールド：

「えっと、１２番の人ー？」

私がカナと（無理矢理）とっ換えた紙を見るとそこに書かれていた数字は１２。

「あ、は～い、私でーす」
「お、ケンケンの妹」
「うっ……。そ、その声は……」

お兄ちゃんのことをケンケンと呼び、なおかつ私のことを知っている上級生であてはまるのは……

「リョウさん……」
「よろ～」
「ま、まあバカ兄じゃない分マシかな」
「ん？」
「いえいえ、なんでもないですよ！　ご指導よろしくでーす」
「そうかー？」

お兄ちゃんとはスクールに入ってから今までずっと一緒に授業を受けていたリョウさん。実力もお兄ちゃんと同じぐらいなのに、リョウさんはこんな性格だから常にこう言っている。

『俺？　俺じゃあケンケンの足元にもおよばんって。あ、それよりもな、この間出た新作のゲームな―――』

といった感じですぐに話を切り替えられるらしい。

でも、リョウさんはそれなりに格好良いし、優しくて面倒見いいからいっかなー。私のタイプじゃないけど。

「特別授業ってあんまし得意じゃないけどな。ビシビシいくぜ」

「うぅ……」

特別授業の内容は至って簡単。指導を受ける生徒同士がフィールドで実際にバトルして、上級生が隣で必要なアドバイスや知恵を貸してくれるというもの。

つまり、指導が上手ければ上手いほど生徒の実力が引き出されて強くなるし、同時に上級生にとって同級生達とも指導の出来を競い合えることができる。

「じゃあ、誰と対戦すーだ？」

ちなみにリョウさんは、ここカントー地方から遥かに西のハイア地方（日本地図で言うと中国地方にあたる）から来ててたまにハイアの方言が出てくるらしい。

「あ、じゃあカナとする」

「げっ、ケンケンとかー。まあ、いいか」

「わーい、じゃあカナよろしくー！」

私は、顔を赤く染めながらもお兄ちゃんと懸命に会話しているカナを見つけて手を振る。

「お、早速相手はルカとリョウみたいだな」
「あ、そうみたいですね。よろしくね、ルカちゃん！」
私とカナは対面するようにフィールドに立って、ボールを取りだす。
「あの子って確かカスミさんの妹さん？」
「そうだよー、カナって言うの」
「おしっ、なら負けーか？」
「なんで？！」
な、なんで初っ端から負けようなんて言ってるんですか？！
「大丈夫だよ、リョウさん。それに、そんなこともう一回言ったら先生に言うからね」
「むっ……。わかったわかった、真面目にやーろ」
「そそ」
私は再度カナと対面し、ボールをフィールドへと放る。
「お願いガーディ！」
「ガウ！」
「シャワーズ、行って！」
「フィ～」
カナが出したのはカナがカスミさんから小さい時にもらったシャワーズ。私も良く覚えてて、ガーディとも大の仲良し。でも、授業って言ったって負けるわけにはいかないんだから。
「ちゃんと見て、指導してくださいよリョウさん！」

「おお、気合い入ってんなー」
「もちのろん！　ガーディ、【火の粉】！」
「ガウ！」

威勢良く指示した通り、ガーディの口から数個の火球がシャワーズめがけて飛んでいく。

「シャワーズ、地面に【水鉄砲】」
「フィ！」

カナの指示された通りにシャワーズが地面に勢い良く放出された水がぶつかり、反動で弾け返った水飛沫（みずしぶき）がガーディの【火の粉】を掻き消してしまう。

「ひゅ〜、魅せーねー。カスミさんの妹君はコーディネーター志願だな」
「さ、さすがカナ……。でもこっちだって負けてられないんだから！　ガーディ、【体当たり】！」
「ガウゥ！」

小さな四肢を懸命に使って、ガーディはシャワーズへと猛進していく。

「シャワーズ、【溶ける】」
「フィイ」
「ガウっ？！」

ガーディの特攻はシャワーズをとらえることができないどころか、シャワーズの姿はフィールドから消えてしまった。

「え、え？　ど、どこ？」
「やーれたな……さっきの【水鉄砲】は下準備ってことかよ。さすがはカスミさんの妹君」
「感嘆しないで手伝ってくださいよ！」
「ん？　ああ、そうだな……とりあえずガーディの体内の炎を放出させてフィールドの水を蒸発させてみな」
「そんな難しいことできませんって！」

と、隣にいるリョウさんと言い争っている内に動きがあった。

「シャワーズ、ガーディに【水鉄砲】！」
「フィー！！」
「あ、ガーディ【吠える】！」
「ガウゥゥゥ！！　ガウっ！！」
「フィっ？！」

一気に形勢が揺れる。

ガーディのすぐ後ろの水たまりから姿を現したシャワーズは跳びあがって、上からガーディを狙った。

でもガーディの威嚇でシャワーズが【水鉄砲】を使うのを躊躇(ためら)って、体勢を崩してしまって地面へとぶつかる。

「シャワーズ、落ち着いてもう一度【溶ける】です！」
「させないわよカナ！　ガーディ、【体当たり】！」

シャワーズが体勢を立て直す時間を与えずに、すぐさま連続攻撃を繰り返すことで優位に立つ！

「ガウっ！」
「フィー！！」
私の方へ吹っ飛ばされてくるシャワーズを私はしっかりと観察する。
「あ、シャワーズ、は、早くルカちゃんから離れて！」
「フィ？！」
カナが警戒してくる声が聞こえてくるけど、ごめんね……これで私の勝ちだよ！
「ケンケン妹の得意技、しっかりと見させてもらーよ」
「お好きにどうぞ！　シャワーズ、右前足の膝に若干の脹らみ有り。さっきの打撲だねー」
「へえ……これが噂に聞く瞬間診察か……すごいな」
リョウさんは本当に指導してくれる気、あるのかな？
まあ、いいや。シャワーズの弱点はわかったし、後はそこを狙うだけ。
「ガーディ、いつものお願いね」
「ガウ！」
「シャワーズ、ガーディを狙って！」
「フィイ？」
「こりゃ、ルカの勝ちかな……」
さすがのお兄ちゃんも諦めちゃったみたいだね。あっはっは、カ

ナ破れたり！

そしてガーディが駈け出す。私とガーディが習得してきたテクニック見してあげるんだから！

「【嗅ぎ分ける】から【噛みつく】！」

「ガウ！」

一点集中攻撃。それは力弱きものでも、技劣るものでも勝利をつかむことのできる唯一の戦法。

ガーディの甘噛みがシャワーズの右前足の足首に決まって、シャワーズは動けなくなる。

「ちゃんと加減してる、ガーディー？」

「ガ～ウー」

「大丈夫、シャワーズ？」

「フィ～」

なんかガーディとシャワーズがいつものようにじゃれ合いはじめたけど……まあ、いっか。

いやー、それにしても勝った勝った～♪

「いやー、それにしてもさすがはケンケンの妹だな」

「おい、リョウ。お前ちゃんと授業やれよ」

「ルカちゃん、やっぱり強いよ」

「えっへん！」

リョウさんは目が開いているのか開いていないのかわからない目

つきで、ほんとに線……いや、糸だっけ？　そんな感じ。でもお兄ちゃん並みに強いんだよねー……。

そして結局何も指導してくれなかったリョウさんにフィールドの端からやってきたお兄ちゃんと、その背後に隠れながらてこてこついてきたカナが合流する。

「まあまあ、そうおこーない、おこーない」
「別に怒ってないけどな……。いいか、カナ？　手応えは掴んだか？」
「は、はい！」

カナは必死にお兄ちゃんに背伸びして答えて、かわいーなー。

「まあ、シャワーズもコンテストに備えているからポケモンバトルの為のスタミナはついてないしな。長期戦はやっぱし厳しいか」
「ねえねえ、それは私とガーディにも言えることなのでは？」

聞き捨てならないので一応お兄ちゃんに問いただす。

「お前はカナと違っていっつも馬鹿やってるんだから、アホルカパワー満載だろ」
「なによそれー！」
「おお、喧嘩喧嘩。俺はケンケン妹に１００円。テンドウさんはどうすー？」
「わ、私ですかっ……？！　え、えっとケ――ル、ルカちゃんに１００円……」
「「ちょ、お前ら？！」」

またも、お兄ちゃんとハモってしまった……。

午後　授業　医：

科学実験室と教室を合体させた、更に大きな教室で私は一人ポツンと無駄に横に長い机で立膝をついている。

今からはメディターとしての個別授業。カナはコーディネーター志願だからそっち系の授業を今取っている。

「はいはい、今日は骨の仕組みについてやるぞー」

担任の先生が何やらポケモンのスケルトンを運びこみ、そこから授業が始まる。

「うへー、なんの骨ですかそれ～？」

なにやらピカチュウらしい骨模型をまじまじと見つめながら先生に尋ねると、

「ピカチュウだ」
「「「え〜〜〜！！」」」
私の他にも上がる驚嘆の声。
う、嘘っ？　ほ、本当にピカチュウ？？
「といってもプラスチックだけどな。本物は所持するのも大変だからな」
そう、ポケモンリーグ協会……実質この世界の政治、経済、社会の司令塔となっている機関では法律が発行されている。
「だからプラスチックなわけだ。だが本物のと寸分変わらない再現率だから安心しろ」
でもピカチュウって骨だけでも結構かわいいかも。私達の骨とは全然違うなー。
ピカチュウの骨模型の隣には人骨模型が置かれる。
「さあ、まずは私達人間のように男と女では骨の働きや外見が異なる。それはポケモンでも同じだ。まあ、性別不能なポケモン達や骨を有さないポケモン達については特例だからまた違う時に話すぞ」
私たちは先生のテキパキとした説明を必死に聞き取り、ノートにペンを走らせていく。
「ピカチュウでオスとメスの違いを見分けるのに用いられている尻尾だが、これはこの模型を見てみてもわかるな。さあ、この模型は

オスかメスかわかるか？」

先生がモニターに出すピカチュウの模型の拡大版では尻尾の骨の先端が妙に小さくてまるっぽく見える。

「はーい、女の子～」

私がそう言うと先生は私の方を振り返り、

「そうだ、なぜかわかるか？」

「尻尾の骨が小さくて、まるっぽいから？」

「そう！　まずは尻尾を良く見てみろ。そしてこれはオスの尻尾がどうなっているかわかる写真だが――――」

こうして、午後の昼下がり……私はメディターになるための授業を受けながら猛勉する。

自分の知りたいことを知ることができるって、やっぱり楽しいな。

これはなんの骨かわかるか？（後書き）

ルカ「ピカチュウの骨って小さくてかわいいよー」

骨見てそんなこと言う人って少ないと思うよ。

ルカ「えー、そうかなー？」

うん、大体は。

ルカ「ガーディの骨とかどうなってるんだろうなー？」

ガーディ「ガウ？！」

ル、ルカ？　そ、そんな怖くて恐ろしい好奇心旺盛な目でガーディを見ないであげて……；；

ルカ「どうなってるのかな？」

……。次回はメディターの授業内容が濃密に語られますw　それではお楽しみに！

電気袋が蓄電袋の役割をしているのですか？（前書き）

今回はメディターの授業内容とグダグダな展開で進み、それだけです。

ルカ「私は楽しかったけど？」

まあ、そうだね。でもここからが本始動ですよ。

ルカ「そ、そうなの？」

ここで日常編を終わらせて、次回からはいろいろと物語の真核へと迫る序章らしきものがスタートです。

ルカ「紛らわしい」

うっ……そんなわけで第七話、スタート！

電気袋が蓄電袋の役割をしているのですか？

メディターの授業にて：

先生がピカチュウの骨の部位をポインターで指しながら授業を続ける。

「もちろんピカチュウの骨のほうが私達人間より軽い。それは骨自体に空洞が多く見られるのもあるし、穴の多いもの、構成の割合の変化も組み込まれているな。それとピカチュウの場合は後ろ足にも注目しておけよ」

良く見れば、ピカチュウの足裏である足踏まずはかなりの流曲を見せている。

「ピカチュウやコラッタのような素早さの早いポケモンは足踏まずが大きい。それは早く走るためでもあるがピカチュウの場合は地面と接触する面積を小さくすることで、放出する電気を逃がさないようにもしている」

「へえ～、なるほどー」

私はカリカリとロコンとガーディのプリントが施された鉛筆をノートに走らせる。

「それとタイプによってもポケモンの体の仕組みも異なってくる。ピカチュウのような電気タイプは体内に蓄電臓器、あるいは蓄電袋を持っているのが多い。そこに電気を溜めているということだな」

先生がモニターのスライドを動かして、ピカチュウやエレキッド、

ライボルトの写真が映し出される。

「先生、ピカチュウの場合はやっぱり頬の電気袋が蓄電袋の役割をしているのですか？」

私の横隣、二席左に座るクラス一の優等生の子が質問する。

「ああ、そうだ。ピカチュウのような電気タイプは空気中に漂う電子を呼吸する度に吸い込んでいて溜めていく。常に微々ながらに一方的に溜まるらしいからな……溜めすぎた電気を逃がす時は地面に尻尾をつけるか、体をへばりつかせる。アースの役割を果たすんだな」

ピカチュウってそうなんだー。

「だから電気ポケモンを持っている生徒は知っていると思うが、大体電気を溜めるのは寝ている時だ。無駄に動かないし電気も溜まりやすい……だから朝一番に電気ポケモンに触ると自分の髪が、冬は特に逆立つのはそういった理由だ」

ほおほお。それはそれで面白うそうで見てみたいかも。

でも私は電気ポケモン持ってないからな～、わかんないや。知り合いにも……いないなー。

「おっと、今日は電気タイプについての講義になったな。予定は狂うが、それもいいだろう。他に質問とかあれば答えるぞ？」

おお、今日は先生乗り気だー。じゃあ、質問しよ～っと。

「ん、なんだハヤミ？」
「電気タイプのポケモンの骨って他のポケモンより具体的に大胆に何が違うんですか？」
体の仕組みが違うなら、骨の構造も若干違うのかな～という疑問を解消させよう。
「そうだな。電気タイプポケモンの場合は、骨の違いというよりも皮膚だな。感電しないような性質でできてるが、それはまた次の授業でやるとしよう」
先生はそう閉じて、結局はあんまり何も質問に答えてもらうことができずに授業は続いていく。
「このピカチュウの骨みたいに、他のポケモンなら骨の形が違う。当たり前だがな。だから覚えることはたくさんある。しかし共通して言えることは大体の骨の仕組みは一緒だ」
先生はピカチュウの頭、肩、肋、背骨、骨盤をポインターで順に指して、
「大抵の脊椎動物はこの基本的な構造は一緒だ。後はタイプに応じて腕や脚が変形しているものも出てくる」
良く見れば、ノートは鉛筆の芯で真っ黒になっている。
「まあ、今日はこんなところだろ」
そこで授業の終了を知らせるチャイムが鳴った。

下校時間：

将来の夢を馳せる若者達が毎日通うトレーナーズスクールでは午後からは専門授業になることが多い。その為、それぞれの科目によってスケジュールも変わるために下校時間がまちまちになっている。

前にも言った通りだけど、主に学科が分かれるとしたらトレーナー科、コーディネーター科、ブリーダー科、レンジャー科、育て屋科、メディター科、他にもいろいろある。

それに何もポケモン関連の仕事でも構わないから政治経済を取る生徒もいるし、弁護士、お医者さん、料理人、エンジニアみたいな職業につきたい場合も授業が分かれている。

私もメディター科の授業が終わって教室で帰り支度をしていると、教室にカナがやってきた。

「ルカちゃん、今日は暇？」

最後のホームルームでカナが私に話しかけてくる。
「ぅん？　あ、うん、暇だけど？」
今日は特に何もないと思うし。
一応ポケギアを開いてすけじゅ～るを確かめる。
「うん、ないない。どこか行きたいの、カナ？」
私はノートを鞄に入れて、校舎の出口へと続く廊下をカナと一緒に歩く。
「ううん。そういうわけじゃないんだけど……ちょっと相談があって……」
カナが少し表情を曇らせるのを見て、私は察する。
「うん、わかった任せて！」
「あ、ありがとうルカちゃん」
カナが相談するとしたら、大抵はお兄ちゃんのことなんだけど（というか勉強の相談はいっつも私の方からしてるし……）。
二人で一緒に学校を出て、カナの家の方まで歩いていく。
「そういえばカナの家も久しぶりだな～」
「そう、だったっけ？」
カナ、本当に何かあったのかな？　なんだか、元気なさそうだし。

やっぱりお昼の後にあったお姉さんからの電話が原因なのかな？

そう……特別授業の後にカナは職員室に呼ばれてそれっきり放課後まで会うことはなかったから。

カナの家は丁度ハナダジムの隣に建てられている。いつも思うけど、大きい家だなー。

「ルカちゃん、今日はこっち」

私がカナの家の前でぼーっと玄関の門を見上げていると、カナは家を通り越してジムのほうを指さす。

「あ、ごめんごめんー」

少し駆け足になってカナの横に並び、

「ジム？」

「うん」

ジムへと進む度にカナの足取りが少しずつだけど重くなっていくような気がして、それは私にも同調する。

「もしかして、何か怖いこと……？」

私は急に自分の身も心配になってきてカナに尋ねる。

「えっ、う、ううん！　ち、違うのっ……」

「あ、そ、そうだよねー、そうにきまってるよねー」

ごまかし笑いを上げながら、そんなことを言っている内にジムに辿り着いてしまう。

二重の自動ドアを抜けて、ジムの中へ。

いつもながらに感嘆させられる程の巨大なフィールドに加えてのハナダジムならではのプールのバトルフィールドは広大。プールに浮かぶ複数の黄色のブイが静かな波に揺れて、ぷかぷかと漂っている。

「ルカちゃん、あのね……」
「う、うん」

誰もいないジムの中で、カナは少し瞳を潤わせて私を見上げる。

ごくりっ……私は固唾をのみ込む。

「お願い、手伝ってっ！！」
「……へぁいっ？？」

て、手伝う……？

「な、何を？」
「きょ、今日ケンさんに授業の時に指導してもらったからお礼がしたいって言ったの」
「えー、いいよ、あんなバカ兄にお礼なんて」
「するの！」
「あ、は、はい……」

カナって普段恥ずかしがり屋なのに、やる時はやる子だもんね～。

というか一図だからなんだけど。
「で、でもね、何をあげたらいいかわからなくて……ケンさんって何が好きなの？」
う、うーん、お兄ちゃんが好きなもの？
食べ物は……基本なんでも食べるし、それに知っているとすればお兄ちゃんの嫌いなものばかり。
「なんでも良いと思うよ？　カナが自分で必死に考えたものなら、バカ兄も喜んでくれるって」
「そ、そうかな？」
「うん、そうだよ。だから、あの、そろそろ両手を離してもらってもいいかな……？」
「あ、う、うん……ごめんね」
そっか、まあ大事じゃなくて良かったなー。あ、でもそれにしてもなんでジムなんだろう……？
「ねえねえ、カナ？」
「うん」
「なんでここなの？」
「あ、えっと、特別授業の後電話があってお姉ちゃん達急用ができたから家にいないんだって」
「だ、だから？」
「うん」
家の鍵も持たせてもらえないなんて……っ。

「鍵ないの？」
「お姉ちゃん達がいるっていうから置いてきちゃった」
「あ、そ、そっかー、そうだよねー。それじゃ、私の家に来る？」
「え、いいの？」
「うん。それにカナ一人このままジムに置いていくってのもなんかあれだし」
「ありがとう」
「いえいえどういたしましてー」

というわけで、私の家へ移動～。

家：

「あら、カナちゃんいらっしゃい」
「お邪魔します」
「ただいま～」

そういえばカナも私の家に来るの久しぶりだなー。

「お姉さん達はお元気？」
「あ、はい。今日は皆用事でいませんけど」
お母さんとカナが世間話をしている間に、私は自分の部屋へと駆け昇っていく。
だって、ほら、きたなかったら嫌だし？　見かけだけでも、きれいに、ね？
幸い、部屋は綺麗に整頓されていた。あれ、でも昨日結構散らかしたような――？
「ルカちゃんったらお部屋のお掃除もしないで、服とかも全部脱ぎっぱなしだったのよ今朝」
「ええ、そ、そうだったんですか？」
階段の下から聞こえてくる会話が耳へと届き、
「ちょっと、お母さん？！」
「あらあら、ルカちゃんが怒って降りてくる前に退散するわね。ゆっくりしていってねカナちゃん」
「はい、ありがとうございます」
私はどたどたと階段を下りてお母さんをウガーっと睨むも、さすがは私のお母さん……すでに撤退していた。
「カ、カナっ、あ、あのね今朝はねちょっと寝坊しちゃったっていうか、その、ほら人間誰しも失敗はあるし――」
「うんうん、そうだね。わかってるわかってる」

「うぅ……カナまで……」

普段ならば逆の立場であるのに、今日はカナに少し弄(いじ)られた私だった。

そのあと、私とカナは遊んで夕食も一緒に食べた。

お兄ちゃんと一緒の食卓なのかはわからないけど（多分絶対そうだけど）カナは少し俯き気味だった。きっと照れてるんだろうけど、お兄ちゃんが背筋は伸ばして食べろよーと注意したら顔を真っ赤にして背筋をピンっ！　と立てたカナは可愛くて笑っちゃった。

冬だから夜も早くて、お母さんがカナの家に電話してお兄ちゃんが送っていった。恥ずかしそうだけど嬉しそうなカナを見送った後、私はお風呂に入って自室へと戻る。

きっとカナのことだから指導のお礼の他にも、今日送ってもらったお礼もするとか言ってくるんだろうなー……などと考えながら。

「あー、楽しかった～」

ガーディとベッドの上で遊びながら、ふと何かが頭をよぎる。

あれ、何か忘れているような……？

時が数秒流れ、脳内を電撃が駆ける。

「宿題っ！！」

こうして眠れない一夜が始まったのである。

電気袋が蓄電袋の役割をしているのですか？（後書き）

今思ったんだけどさ。

ルカ「何？」

俺って小説執筆している時に、タイトルって決めなきゃいけないんだけど――――

ルカ「ああ、サブタイのこと？」

ううん。投稿する前の執筆中の文章は別のタイトルで保存できるんだよ。

ルカ「へー。それで？」

このお話の執筆中時のタイトルは「じょあお」になってた。

ルカ「な、なぜゆえに？！」

謎だ……。

ルカ「ま、つまり話すネタがないってことだね～」

はっきりと言わないで！

「裏」：白色のバン（前書き）

さてさて、休日なわけで……時間あったから、短くてもいいから「裏」を執筆。

ルカ「やった～」

まあ、「裏」なのでルカ達は出てこないけど。

ルカ「また……？」

でも、まあ新キャラが一気に三人も増えるという大事に。

ルカ「た、大変……」

なんだか最近のポケモンの小説数が半端ないよねー

ルカ「いいことじゃん」

楽しみが増えて嬉しい限りですw

ルカ「それでは、どうぞー」

「裏」：白色のバン

イニシャルインシデント　伝記より：

【イニシャルインシデントにより、世界は破滅を迎えた。

ポケモン歴０年、創造を司(つかさど)るアルセウスは大地に一粒の種を植えた。

その種から一本の大樹が育ち、地面奥深くまで伸びる根からは新たな樹木が芽生えていった。

それが今のジョウト、ウバメの森が生まれた経緯(いきさつ)である。

ウバメの森は始まりと再生の森。

汝、一人たりともウバメに迷い込むなかれ。そこは神聖なる領域、終わりと終焉を嫌う森】

史伝イニシャルインシデントより抜粋

ハナダシティ：

「おい、早くしろジン」
「あ、は、はい！　先輩、ちょっと待ってください」
「あんまりジン君をいじめないいじめない」
「うっせえ」

成人二人と１６か１７ぐらいの少年が言い合いながらハナダジムの中から出てくる。

「ったく、初任務が……仲間の尻拭いかよ」

時は少し遡(さかのぼ)り、ルカとカナがジムを出てルカの家へと遊びに行っている間のことである。

ジムの駐車場で停まる白いバンに乗り込みながら、少年が大き目のボストンバッグを二つ下ろす。

三人は全員がカジュアルでラフはいまどきの若者のファッションに身を包み、一番口の悪い男が煙草を取り出す。若干全員の髪が濡れているようにも見える。

「しっかし、あいつも馬鹿な奴だよな……。なんでわざわざ任務中にジム挑んで大事な部品プールに落っことすなんてよ」
「まあまあ、そんなこと言ったってはじまらないよ？　それに、こ

れで任務終了なんだから」
「そ、そうですね」

助手席に座る煙草をつけた男は椅子のリクライニングを下げてくつろぎ、穏やかな調子で煙草の男をなだめつつ運転席に座る女と後部座席でちょこんと座る少年。

彼らは一体何の為に、ここへと現れたのだろうか？　そして、その理由とは？

「さあて、とっとと帰るか……。しっかし、まさか誰か来るとは思っても無かったな」
「そ、そうですね……。折角ジムの管理者には外出を促すガセを入れたっていうのに」
「まあ、結果オーライでしょ？　それに、二人共かわいらしい子だったじゃない」
「モモ、お前良くそんなのチェックしてんな」

煙草を指二本で車窓の外で叩(はた)きながら、ガイがぼやく。

「私は黒髪の長い子がタイプだなー」
「けっ、お前あんなガキが好きなのかよ……。ほんと、ロリでレズだな」
「可愛い女の子が好きなだけよ♪」
「同じだっつの」

先輩（といっても年関係のみではあるけれど）ジンは後ろでモモが言ったのとは違う少女の方を思い返していた。

『僕的には、あの少し茶味がかった髪の子がタイプだなあ……』

バンの窓から外の景色を眺めながらジンは物思いにふける。つまりはルカのことをジンは考えているのであった。

「しっかし、良くフィルターに巻き込まれずに鉄柵に挟まってたもんだ……」

ガイがジャケットの胸ポケットから手の平サイズ程の機械部品を取りだす。

「まあ、私達下っ端にはこういった雑用ばっかり押しつけられるのも……世の中の性よね〜」

「けっ」

「これからはどこへ行くんですか？」

舌打ちするガイに、少しおどおどしつつもジンがモモに尋ねる。

「無人発電所で雷鳥の捕獲……らしいわよ？」

「あんな化けもん捕まえてどうするってぇんだよ？」

「海の神を誘き出すため……とかですか？」

雷鳥、それは稲妻（いなずま）と共に降臨せし伝説のポケモン、サンダー。

海の神、それは嵐を纏（まと）い地上へと舞い戻る伝説のポケモン、ルギア。

この三人が何を言っているのか。それはこの世界を揺るがすことになるロケット団なる組織の下っ端三人にもわからない。だが、世界は知ることになる……彼らの組織のことを。ロケット団という組織はその名をこの世界に知らしめるのだ。

「けっ、どうでもいいぜ俺はよ。給料さえもらえりゃ、言うことねぇよ……それ分ちゃっかり働く」

ガイは口で吹かしていた煙草を車内の灰皿（？）にぐりぐりと押しつけてそう言いながら足を組む。

「まあガイくんはそうよね。私は、う～ん……楽しそうだし」

モモは鼻歌を交えながらハンドルを握ってアクセルを踏む。

「ぼ、僕は……世界を救うためです」

ばかげていても真剣に気持ちを込めるジンの言葉に、ガイとモモは何を言うでもなく。

「けっ」

「～♪」

白いバンはハナダシティを抜け、東側の９番道路へと走っていく。

「裏」：白色のバン（後書き）

伏線も拾ったことだし、次回からルカ達が頑張るよー。

ルカ「いぇーい」

それと、少し君に色をつけようかと思って。

ルカ「おー。なになに？」

ケンの挿絵が完了いたしました。

ルカ「？」

ケン「やっとかよ」

まあ、これでオクタン焼きの約束覚えてるよな？

ケン「ああ、三つだろ？」

そうそう

ルカ「ちょっと、私は？！　私の色は？　絵は？！」

第一章：崩れゆく日常　Ⅰ：お正月（前書き）

新章スタートということでして、いままでのサブタイ……疑問形に終わる日常編は終了です。

ここより、本業発揮ということで皆よろしくね！

ルカ「どんとこーい」

ケン「まあ、いいぜ」

カナ「が、頑張りますっ」

リョウ「おー、おもしろそうだな」

そして今回はどどんとケンの挿絵と？

ケン「？」

ルカの挿絵も一緒だぜー

ルカ「ほんとー？！」

うん。今までで一番良く描けたw

ルカ「天狗にはならないでね」

はい、気をつけます。

それではどうぞ！

第一章：崩れゆく日常　Ⅰ：お正月

～時は少し過ぎ、元旦～

ルカ宅：

自分の部屋のベッドの中、私は丸くなって羽毛布団に優しく包まれながら目を覚ます。

きっとお母さんはごはんを作り終えてるとは思うけど、私は耳を澄ませながら静かに瞼を閉じる。

そして始まる私の至福のじか――――

「毎日毎日同じことさせんな――――」

「はっは、しかし今日の私は違う！　鞄白刃取り！　ふんぎゅっ！？」

お兄ちゃんが来るタイミングを見計らって、私は布団から飛び出して振り下ろされる鞄を両手で受け構える。

でもタイミングがずれて私は思いっきり頭から鞄を受け止めてしまう。

い、痛すぎる……。ぐすん。

「お、痛そうだ……」

「うきゅうぅ……。って、あれ？　今日学校だっけ？」

両手で頭を抱えながら、私は痛みを抑えてお兄ちゃんを見上げる。お兄ちゃんの肩にはニューラがのっかり、眠そうながらもキリっとした表情を向けている。

「招集だ」

「あ、そなんだ。いってらっしゃーい」

「行ってくる」

私の部屋から出ていくお兄ちゃんを見送りながら、私はきょとんとベッドの上で手を振りながら考える。

「……結局無駄起き?！　って、なんで起こしにきたのよバカ兄！」

最後に聞こえたのはお兄ちゃんが静かに笑った空気の音と、パタンと閉じるドアの音だった。

食卓：

「結局バカ兄は私をいじめてるだけなんだよ！　（むしゃむしゃがっつがっつ）」

朝ごはんのお餅を口で噛み切りながら、箸を振りまわしてお母さ

んに講義する。

「あらあら、ルカちゃんゆっくり食べないと喉につまるわよ？」

お母さんはお母さんで湯飲みのお茶を可憐にすすっている。

「だって、学校もないのに私を起こしにくるなんて狂気の沙汰としか思えないでしょ？！　絶対私をいじって楽しんでるんだ！！　んーーー！」

お椀の中から掬（すく）ったお餅を口でちぎろうとするも、びよーっとお餅は伸びてしまう。

「折角のお正月なのに学校で活動なんて、ケンくんは大忙しね」

お母さんはテレビのリモコンで電源を入れて、モニターには近場の神社前の中継が流れる。

『ただいまハナダ神社前は物凄い人だかりです。新年を迎えた為着物を着た人たちも多く、大変にぎわっております———』

私はお兄ちゃんのせいで慌てていたのか、箸とお椀を下してお母さんの方を向く。

いけない、新年のあいさつをバカ兄との騒動でかんっぺきに忘れてしまっていた。

「あ、あけましておめでとうございます」

「はい。あけましておめでとうございます」

ちょっと遅いかもだけど、食卓を挟んで私とお母さんは小さなお辞儀を交わす。

「そういえばカナちゃんと初詣に行くのよね？」

「うんっ。でも昼前に行こって言ったから、お母さん着付けして～」

「はいはい。いいわよ」

「わーい」

私はお気に入りの黒豆と数の子と一緒にお餅を食べ終える。

テレビ画面では中継の最中に画面上にニュース速報が流れるが、私もお母さんもその字幕には気がつかなかった。

『先々週起こった大停電の原因はカントー発電所内の電盤回路の部品が欠損していたことが判明。尚、発電所は何者かに荒らされた形跡があり、ポケポリは最近多発しているテロ集団との関連性を調べることを決定――――』

お母さんの部屋：

私は食後数十分後に着物の着付けをしてもらうためお母さんの部屋へと入る。

「今年はちょっとしたプレゼントがあるわよ」

「本当っ？！」

「ええ。ほら、いらっしゃい」

お母さんが私の目の前に差し出すのはスターミー型の髪飾り。

「うわー、きれ～い」

「お母さんが昔使っていたものだけど、ルカちゃんにあげるわね」

「ありがとう、お母さんっ」

私はお母さんの胸の中に飛び込みながら、着物の着付けをしていく。その時、私はお母さんが少しだけだけど寂しそうに笑ったことに気がつかなかった……。

先ずは足袋を履いて、お母さんに髪のセッティングをしてもらう。後ろで髪を束ねて、スターミーの髪飾りをつけてもらう。スターミーの髪飾りからは水の結晶をモチーフにしたアクセサリが垂れてて、清らかな感じが漂う。

「はい、できあがり」

「ありがとうー」

私はセッティングされた髪で鏡に向かって角度を変えてみたりする。

「あら、ルカちゃんまた胸大きくなったんじゃない？」
「そ、そうかな……？」
着物に着替える際、ブラジャーは針金入りのものだと着付けができない上に苦しいから私はお母さんが使っているのと同じ着物や浴衣用の和装ブラへと付け替える。
「お胸が大きいと赤ちゃんが良く育つって言うのよ。はい、これ着て」
「はーい」
長襦袢（ながじゅばん）を先に羽織って、腰紐、伊達紐の順に巻いていく。
着物の袖に腕を通して、お母さんの正面を向く。
「はい回って」
一回転しながら腰紐を巻いて、お母さんがおはしょりを作り皺（しわ）を伸ばしてくれる。
そして伊達紐を巻いて結んで、帯、帯締めの順に巻いていく。
お母さんが私の胴回りに腕を通すので、私は両腕を案山子（かかし）みたいにピンって伸ばす。袖って結構重いから疲れる……。
帯揚げを最終的に巻いて帯の中へと押し込んでいき、お母さんが要らない皺（しわ）を伸ばしてくれる。後ろにお太鼓を帯びに差し込んで、着付け完了。
「はい、完了よ」

「わーい、ありがとう～」

私はくるくると袖を遊ばせるように二、三回転して喜ぶ。

結構お腹辺りがきついけど、安定感があって私は着物を着るのが好き。

時間を見れば、もうそろそろ１１時。

「あ、そろそろだ……。行ってくるね」

「はい、いってらっしゃい。あ、そうだわ……はい、これ。お年玉」

「わ～、ありがとうー。あっ……。ありがとうございます」

「楽しんでらっしゃい」

「うんっ！」

私はいったん自室に戻って、ベッドの上で朝ごはんを満喫してすやすやと転寝（うたたね）しているガーディを起こす。

「神社で迷子にならないとは思うけど、出しといたら他の人に迷惑になるかもしれないし……。ごめんね、ガーディ」

「ガウっ」

わかってくれたのか、ガーディは元気に一回吠えて私がボールを出しても嫌な顔をせずに戻ってくれる。

私は巾着を持って、中にポケギア、お財布とガーディのモンスターボールを入れる。

玄関で草履を履いて、お母さんが最後に何かを言い渡してくれる。

「最近何かと物騒だから、気をつけてね。特に人混みは危ないから、ちゃんとカナちゃんと一緒にいるのよ？」
「はーい。私もう１５だよ？　大丈夫だってー」
「そうね。それじゃ気をつけて行ってらっしゃい。ケンくんに会ったら私も出掛けるから夕方辺りまでは戻らないって言っといてくれる？」
「はーい。それじゃいってきまーす」

私は小さく手を振って家を出る。私に手を振ってくれるお母さんはいつも通りの笑顔を向けてくれた。その笑顔をもう見ることが叶わないと知ったのはもっと先のことになるけれど……。

首に巻いた首巻きはぬくぬくしていて寒い風が吹いてきても大丈夫。雪は降らず、でも雲を見上げればいつ氷の結晶が舞い落ちてきてもおかしくはないように感じる。

カッカッと草履が綺麗に除雪された歩道を軽やかに鳴らす。ハナダ神社はスクールの近くで、スクールがお月見山に連なる山の一つを訓練所に使っている為、ご近所になる。

でも、なんで神社とかお寺っていっつも山の中か近くなんだろう？

と、ふと疑問に思うも構わず歩き続ける。

道中ではないけど、神社はスクールの近くだけど通学路延長線上にないためカナの家の前を通ることはない。

私は巾着の中からポケギアを取り出してカナの番号を見つけて通話ボタンを押す。

ピピピピピピピピ

軽快な電子音が耳元で響きながら、数秒後にカナが出る。

「ルカちゃん？」

「うん、おはよーカナ。もうすぐで神社に着くから」

「あ、うん、わかった。待ってるね」

どうやらカナはもうすでに到着しているみたい……。やっぱり、早いな～。

私はポケギアを巾着にしまって神社までの歩幅を早める。

ハナダ神社：

「ルカちゃーん」

「あ、カナ～。お待たせ、待った？」

「ううん。大丈夫だよ」

カナは私の群青と紫紺で染められた大人しい着物ではなく、桃色と紅で色鮮やかな着物を着ていた。

「うわー、カナかわいい～」

「ルカちゃんも大人っぽくて綺麗だよ」

私とカナは賽銭箱に小銭を放って、鈴(れい)を鳴らして二拝二拍手一拝で拝礼を済ませる。

「お腹も空いてきたし、何かたべよっか？」

私がそう提案するとカナも「うん」と答えたので、神社の両幅に展開されている屋台を見渡す。

「でも、やっぱりお正月はコイキング焼き（注意：タイヤキに酷似したもの）かなー」

「私はオクタン焼き（注意：たこ焼きに酷似したもの）久々に食べようかな」

それぞれに思い思いの食べ物を購入してあったかい内に食べる。

「ルカちゃん、オクタン焼き一個食べる？」

「うん、あ～ん」

「はい」

カナに爪楊枝(つまようじ)でオクタン焼き一つ口に入れてもらい、

「じゃあ、お返し～」

「っ……。あ、おいしい」

「でしょ～？　この餡子(あんこ)が尻尾の先までぎっしり入っているのはこ

のハナダ神社の出店だけなんだよっ！」
「そ、そうなんだ……」
私の熱弁の隣でカナは若干苦笑いを向けるも、楽しそうに食べ物を食べ終える。
「あ、そういえばカナは初夢どうだった？」
「え、私……？」
少しだけびっくりして眉をひそめるカナがそこにはいた。
「私は……夢見なかったよ」
「そうなの？　私はねー、ピジョット二匹にお月見山まで行ったんだけど肝心の三なすびがなかったよ……」
私が項垂れる中、カナは少しだけ顔を青ざめさせていた。
「どうしたのカナ？　大丈夫？」
「うん。ちょっと寒くなってきたかなって思って」
「そう……？」
私はそんなに温度の変化を感じることはなかった。でも空を見上げれば、ちらほらと雪が降ってきた。
「わー、雪だよ雪〜」
私は腕を天に延ばして雪にいち早く触れようとして、カナも雪の登場で心境が変わったのかいつもの表情に戻った。
しかしこの時、私はまだ訪れるであろう悪夢については何も勘付

くことはできなかった。

第一章：崩れゆく日常　Ⅰ：お正月（後書き）

ケン「新章というわりには普通だな」

これからですよ、これから。

ルカ「それにしてもバカ兄は何しに学校にいったの？」

まあ、それは次回のお楽しみですよw

ルカ「ずるーい」

ケン「お前は知らなくてもいいことなんだよ、アホルカ」

ルカ「黙れ、バカ兄！」

ケン「んだと！」

お前達出すといっつも喧嘩して終わる……；；

第一章：崩れゆく日常　ＩＩ：崩れ行く……（前書き）

さてと、シリアスだね～。

ルカ「あんまり悠長なこと言ってられないような気がするけど？」

まあ、シリアス書いといて前書き・後書きで遊ぶ訳にもいかないので。

ルカ「それでは、どうぞー」

第一章：崩れゆく日常　ＩＩ：崩れ行く……

全木の実大百科より：

【この世に存在する幻の木の実は五つ。

荒げる猛火の如く攻を与えしナゾの実。それはかっこよさを極めし。

乱れる雷撃の如く防を与えしレンブの実。それはたくましさを極めし。

駆ける春風の如く速を与えしイバンの実。それはかわいさを極めし。

輝ける水晶の如く念を与えしミクルの実。それはうつくしさを極めし。

栄える森林の如く智を与えしジャポの実。それはかしこさを極めし。

すべての実を食し、受け入れられしポケモンこそ真の覇者とならん――――】

全木の実大百科より抜粋

ハナダ神社：

舞い降りる雪のカーテンに包まれて、私とカナは嬉々とした笑い声をあげる。

「今年もよろしくね、カナ」
「うん。私もよろしくお願いします」
「へへっ」
「ふふっ」

カナの表情には笑みが戻って、私もほっとする。

「よーし、それじゃ～デパート行こっ。お年玉もらったでしょ？」

私はカナの手を人混みの中で引っ張りながら尋ねる。

「うん……お姉ちゃん達皆がくれたから」
「えっ、よ、４人分？！」
「う、うん……」

そ、そんな……さすがはハナダジムを経営している美人四姉妹……。

「そ、それじゃ、お、おいくらぐらい……？」
「え？　このぐらいだよ？」
「っ！？」

私も少なくないぐらいもらっているのに、私のお年玉を軽く凌駕する……。

うわ～ん、なんなのこの差はー？

でも黄昏てるわけにもいかないので、私は若干心を挫(くじ)かれつつも私とカナはハナダシティ一充実したデパートへと辿り着く。

今日はおっかいものー！

ハナダデパート：

神社から歩いて１０分とかからないところに目的地はある。

ハナダシティで一番大きなハナダデパート。近くにヤマブキシティもあるから品揃えはとっても充実。流行の最先端には少し劣っちゃうけど、ヤマブキシティとそんなには大差ない。それでもやっぱりファッションだと、一日の遅れが命取りなんだよねー。

見上げる建物は８階建てのデパートビル。

自動ドアを抜けて中へと入る。

「ふぅわー、あったかーい」

「うん、あったかいね」

入った瞬間に髪や首巻きについた雪の結晶がゆっくりと溶けていくぐらいの暖房がきいたデパートの中、私達は3階へと続くエスカレーターの方へと足を向ける。

デパートや建物の類にはプロテクトセンサーが設置されていて、ある規定外以上の大きさのポケモンや重さのポケモンがいたらボールから出せなくなるようになっている。

恐らくどのデパートも1階は化粧品売り場なんだろうな。私も新しいの欲しいけど、お母さんと一緒の時に選んでもらおっと。

「カナはやっぱり、新しいの買うの？」
「うんっ。結構珍しいの買えそうだし」
「そっかー。3階だよね？」
「うん」

カナは無類の木の実マニア。

そう、カナの部屋にはたくさんの木の実が標本で並べられている。

木の実の数は全部で６４種類。そしてジョウト地方には特別に見受けられるぼんぐりもカナは集めている。結構大小様々に分かれているから、見た目は悪いんだけど……それはカナがコーディネーターを目指しているということで自分を納得させる。

「あ、見て見てルカちゃんっ！　これ、ベリブの実だよ！」
「ベ、ベリブ……？」

じゅ、授業で一回か二回聞いたような聞いていないような……。

「で、でも結構大きくない……？」

普通の木の実なら手で握れる程の大きさなのに、このベリブの実はケースに入っている所為もあるけど長さが３０ｃｍもある。

「そうかな？　でも、この木の実滅多に手に入らないし、前から欲しかったの」

「そっか。なら、買っちゃう？」

「うんっ」

嬉しそうな表情でベリブの実をまじまじと見つめたり、ケースを掲げるカナを見て私も自然と頬を緩める。

カナの家の庭ではカナが自分で木の実を育てている。カナが言うには珍しくて高級な木の実ほど、それに順応した気候や肥料を準備しなきゃいけないみたいで……なにより根気とマメさが試されるみたい。わ、私には無理かも……。いや無理、絶対無理。

カナ自身、高級な木の実は１個や２個程度できっとこのベリブの実っていうのも高価なものみたい。

「ちなみに、いくらなの？」

「え？　あ、えっとね、５万８千円」

「ごっ……５万８千円！？」

「ル、ルカちゃん、しっー！」

そ、そんなにするの？！

う、うわー、なんかすごくついていけない……。

でも……木の実の組み合わせと育て方をマスターしてこそ一人前のコーディネーターだって先生言ってたな……。骨や筋肉覚えるみたいな感じなんだろうな、カナにとっては。

カナが大事そうに木の実を売っているお店の店頭に置いてあったベリブの実入りのケースを抱えてレジへと向かう。

まあ、限定1個って書かれてたら興味は注がれるけどねー。

だってモモンの実なんて1個100円で売られてるし……。あ、干しキーの実がある。

「お待たせー。ルカちゃんは、何買うの？」

「あ、そうそう。私は新しいアプリ欲しくて」

「アプリって、ポケギアの？」

「そうそう、ポケギアの最新アプリケーション。自分のポケモンの骨のデータを取れるんだって」

「すごいね」

えっと、確かアプリケーションが売ってある階は5階だったかな？

私はエスカレーター近くにある地図を見ながら階を確かめる。

お正月であってもデパートにとっては1日でも多く開店して売上を伸ばしたいのだろうか……？　でも、こんな日だから着物でいてもあんまり違和感無くて目立たないなー。

「そういえば……今朝のニュース見たルカちゃん？」

「ニュース？」

エスカレーターでぼけっとしていた私は唐突に言われたカナの言葉に反応が遅れる。

「うん。最近大きな街でおかしな事件が多いんだって」
「へえー、そうなんだ。でも、大事じゃないんでしょ？」
「う、うん……。でも、犯人は捕まってないんだって。なんでも集団犯行みたいだよ？」
「そうなんだ。でも、今日はお正月なんだから楽しまなきゃ」
「そ、そうだよね」

また神社の時に見たカナのどこか暗そうな表情が垣間見える。

そして、その時悲劇は始まった。

私の人生を揺るがす程の惨劇が……私の日常が崩れたのだ———。

ドドン！！　ゴオオオォォ！

「きゃあっ！」
「ル、ルカちゃんっ！！」

突然と揺れる私達の足場。

エスカレーターが停止したのかどうかすらわからない程の衝撃と

轟音が私達に襲いかかる。

手摺(てすり)に必死にしがみついて、私とカナは衝撃に耐える。でも、デパートの電気は停まって微弱ながらも予備電力が復活する。

「な、なにっ？」

「カ、カナ、とりあえずエスカレーターから降りよう！」

「う、うん！」

わからない。何が起こっているのかはわからないけど、ここにいたら危険。

私とカナは残り少ない段数を着物の裾を持ち上げて上りきる。

すると、またも……衝撃。今度はビルの東側から。

ドォン！！

という震動と共に鼓膜を危険信号を知らせる音に鳴り響かせる。

天井からはパラパラと破片が散り落ちてくる。

「ルカちゃんっ」

カナが必死に私の袖を握ってくる。

私達周辺の他のお客さんも悲鳴を上げたり、店の人も何が起きているのかは理解できないみたい。

「カナっ……」

私もカナの握ってくる手を握り返して、その場にへたり込んでしまう。

そして、3度目の衝撃が容赦なくビル全体を襲う。

ドオン！！

ついには予備電力も切れたのか、一瞬の点滅を最後に電気が消える。

視界は暗くなり、デパートへと流れ込む陽光は雪も降っていることから微弱。

悲鳴と悲鳴が重なり合って、更なる衝撃音に掻き消され揉み消される。

そして遂には天井が崩れ始めた。

目の前を落ちていく上階の床。

その上にどれくらいの人が乗っていたのか、わからない。でも、その人達は堕ちていった。そして下敷きにされる人も落ちていく。

視界が暗い。

そ、そうだ、こんな時にガーディを。

私はガーディを呼び出す為に巾着をあさってボールを取り出す。でも手が震えていたのか、ボールがぽろっと手から滑り落ち、床の

上をころころと転がっていく。

「あ、ガーディ！」

「ル、ルカちゃん、危ないよ！」

必死にボールへと追いついて、私は四つん這いになりながらもしっかりとボールを抱える。

すっぽりと、天井が崩れたところは大きな穴が開いたようで喧騒と鳴りやまない衝撃音に皆が慄いていた。

「ガーディ、お願い辺りを照らして」

「ガウっ」

【火の粉】を辺りにまきちらすわけにはいかない。でも、口で溜めることによって若干の視界は確保できる。

他のお客さんもポケモンを出して明かりを出したり、力のあるポケモンで瓦礫をどかしたり、飛行タイプのポケモンを持っている人は足に掴まって下へと降りて行ったりし始める。

私達も非常階段を使って、脱出しなきゃ。

恐怖はあった。でも、それ以上にこの場から抜け出したいと思った。カナと一緒に、生きたいと。こんなところで死ぬわけにはいかないもん。

私は立ち上がって、カナの方へと戻ろうとする。

その時、私は見た。ガーディが仄かに照らし出す天井の床が、丁

度カナの頭上へと落下していくのを――――。

第一章：崩れゆく日常　ＩＩ：崩れ行く……（後書き）

さて、どうなる?！

ルカ「カナーーー！！」

カナ「私、どうなっちゃうの……？」

うおっ、カナが後書き初登場。いらっしゃい。

カナ「お、おじゃまします……」

ルカ「カナは私が護るからね！」

カナ「ルカちゃん……」

さて、次話はどうなるか。というか本当はこの続きも全部書く予定だったんですが、本編の一話一話を規定の文字数で執筆しているので次話まで引き越しです。

それでは

第一章：崩れゆく日常　ＩＩＩ：私の知らないこと（前書き）

この二日に一回のペースでの更新が保てればいいなと思っています！

ルカ「いっつもテンション高いよね、Ｋａｒｙｕって」

まあ、そうじゃなきゃ楽しめないじゃん！

ルカ「うーん……？」

と言いつつもちょっと頭痛気味です。

ルカ「あらら」

ってか、アメリカじゃ今日はＨａｐｐｙ　Ｈａｌｌｏｗｅｅｎ！

皆様、Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　Ｔｒｅａｔ！！

あなたが選ぶはいたずら？　それともあま～いお菓子ですか？

第一章：崩れゆく日常　ＩＩＩ：私の知らないこと

全木の実大百科より：

【この世に存在する伝説の木の実は五つ。

大海の力を秘めしチイラの実。

大陸の力を秘めしリュガの実。

大空の力を秘めしカムラの実。

全生命の力を秘めしヤタピの実。

世界のあらゆる謎を秘めしズアの実。

すべての実を食し、受け入れられしポケモンこそ真の王者となら

ん――――】

全木の実大百科より抜粋

ハナダデパート：

私の目の前で、カナが天井が崩れ落ちてその下敷きになるイメージが脳裏を過る。

カナの顔の表情一つ一つが鮮明に見える。

一瞬の出来事が、なぜか長く感じる……。

いやだ、イヤだ、嫌だ……！！

「ウィンディ、【神速】！」

え……？

瓦礫がカナの上に降り注がれる一瞬前、大きな影が私とカナの間に割って入る。

暗い視界の中で轟音と天井が瓦礫として崩れ落ちる様子が視界に映る。

「ありがとう、ウィンディ」

私の隣で指示を出す大人の女の人。

私より若干背が高くて、長いコートを着ている。髪は被った帽子のせいと、コートの中にも隠れている為にどれほど長いかはわからない。

顔はやっぱり見えなくて、影を落としている。

その人のウィンディが口にカナを服を咥(くわ)えて戻ってくる。

「カナ！」

「ル、ルカちゃんっ……！」

私はウィンディからカナをあずかって、カナを強く抱きしめる。

「あ、ありがとうございますっ！」

私は女の人に振り返ってお礼を言う。

「いいのいいの、私も助けることができたから」

私にはその人が言っている意味はわからなかった。でも、カナは一人その人に顔を上げて

「え？」

と、ちょっと驚いた風な声を出す。

「どうしたのカナ？」

私はカナがどこか怪我をしたのか心配して声をかける。

「う、ううん」

そうは言ってくるカナは、でも、ウィンディの顔を撫でて癒している女の人から視線を外さない。

ドオン！

そして、もう何発目になるかはわからない衝撃。

「きゃあっ！」
「ルカちゃんっ！」
「嘘っ……ここで、終わりじゃないの？」

女の人が状況を冷静に判断して、少し戸惑いながらウィンディへと目配りする。

突然、足場が失われる。

ビル全体が……崩れた。

床の崩壊……。壁の倒壊……。人々の落墜。

声も出ない程のいきなりの浮遊感。私が唯一持つ感触はカナに触れる手と手。

「二人共、ウィンディに掴まって！」
「「えっ？」」

戸惑い、何もしない私達の腕と手を引っ張ってウィンディの背中

の毛にしがみつかせられる。

「離さないでね！」

「「っ、は、はい！」」

見えるのはコンクリートの瓦礫が崩れていく様。でも女の人は冷静にウィンディに掴まって、ウィンディは瓦解するビルを瓦礫に飛び乗り降りていく。

カナのベリブの実が入った紙袋が奈落へと落ちていくけど、今はそんなことを気にしている場合ではなかった。

「サーナイト、【サイコキネシス】！」

物凄い早業でボールからサーナイトを出して、サーナイトの【サイコキネシス】が落ちていく瓦礫全てを念で凝固させる。つまり、吹き飛ばされたコンクリートの破片が集まり巨大な足場を作った。

私達以外の人たちもサーナイトによって形成された平たいコンクリートの足場にゆっくりと下される。

「シャワーズ、【冷凍ビーム】」

そしてウィンディをボールに戻し、シャワーズを取りだした女の人はサーナイトが念で固めていた足場を氷漬けにしてしまう。

ビルの崩壊は3階からだったみたいで、3階より上はまるで氷花が咲いたかのように私達の足場が丁度花弁にあたるように見える。

「す、すごい……」

私から漏れるのはそんな言葉だけ。

「うそっ……そんな———」

でも一人、カナだけは余計に混乱したように助けてくれた女の人を見上げる。そしてその人のシャワーズへと視線を移す。

私とカナはウィンディから降りたけど、腰が抜けて足場でぺたりと座りこんでいる。

「戻ってシャワーズ、サーナイト」

サーナイトは黙礼を、シャワーズは甲高く1回鳴いてボールへと戻る。

あれ？

「そろそろ、時間か……。気をつけてね、二人共」

深く被らされた帽子からは口より上が見えない。でも、その女の人の体からは光の粒子がぽわーと浮かんで透けていく。

「あ、待って、名前をっ！」

私が咄嗟に腕を伸ばして女の人にしがみつこうとしても、女の人は微動だにせず口を微笑ませて動かした。

それが私に向けられたものではなく、カナに向けられたものであったことはすぐにわかった。

なぜなら、カナはその唇の動きを見ただけで涙を流したのだから。

そして女の人はウィンディと共に消えてしまった。彼女の痕跡など一つとして残すことなく。伸ばした手はただ空を切る。

消えた……？　そんな、でも、どうして？

さまざまな疑問が頭を逡巡する。でも、それよりもカナがなんで泣いているのか、その原因を確認しなきゃ。

「カナ、どうしたの？　大丈夫？」

カナは「うっ、ひっく」と涙を喉の奥で殺して、私を見上げる。

私へと伸びるカナの手は、震えていた。

「カナ？」

私はカナの顔へと覗き込む。

「ルカちゃん……私に、何かあったらシャワーズをお願い」

「え？　カナ、何言って――――」

「ごめんね、ルカちゃん……。私は、私はルカちゃんのことが大す――――っ！！」

カナが何かを抑えるように口から必死に絞り出す声を私は聞き届けることができなかった。カナの目が大きく見開き、終えることのない言葉は押し殺された空気となって漏れる。

カナはゆっくりと私の胸の中へと倒れこんでくる。

彼女の涙が宙に滴（しずく）となって残されて、零れていく。

「カナっ？！」

カナの倒れこんできた上半身を受け止めながら、私はカナの肩を持ちあげて顔を覗き込む。

カナは目頭に涙を溜めて、眼が見開いて口が開いていた。

「カナっ……？」

私は恐る恐る彼女の背後へと目を向ける。

するとそこには太い針のようなものが二つ、カナの背中に突き刺さっていた。

「なんだよ、仕留め損ねたんか……」

そして冬空の寒い外風と共に私の耳に流れ込んできたのは、とても馴染みのある声。

私は声のする方角を、信じたくない予感と共に見上げる。

すると、そこには一人の黒尽くめの青年が立っていた。彼の足元には一匹のサンドパンがこちらを睨んでいる。

私とカナ以外の生存者の方へと振り向くと、彼らも全員が倒れ伏していた。

視線をすぐさま黒尽くめの青年へと戻して、震える唇が勝手に動き出す。

「リョウ、さん……？」

私の声が聞こえたのか、いつもの無垢な笑みで私へと向くリョウさん。

「ああ、そげそげ。久しぶりだの、ケンケンの妹。さすがって言うべきかいな？」

普段とは違う口調。黒い何かに満ちた、深い声……。それは私の心に重くのしかかる。

「なんで、まさか、リョウさんが……？」

リョウさんの着るブーツ、ズボン、コート、帽子、すべてが黒い。そして、上半身に着ているシャツには大きなRの赤文字。

見たことのない井出達（いでたち）と風貌に、私には更なる混乱と困惑しかおそってこない。

「ああ、こーも任務なんだがん。悪うおもーなよ。大丈夫、死にはせんけん……ただ、一生をベッドで過ごすだけだけん」

見開かれていないリョウさんが私の方へと腕を伸ばす。

リョウさんと私の距離感は約２０メートル。でも、伸びている腕は私に向けてではなくサンドパンへの指示みたいであった。

「やれ、サンドパン。【毒針】だ」
「サン」
サンドパンが攻撃態勢に入る。それを私は自慢の視力で見極めてしまう。
私はカナの背中に気を使いながら、サンドパンから移出される【毒針】を横に転がって避ける。
「ひゅー。なにぃや、瞬間診察はそういう使い方もできーだな。やっぱりわが倒さんといけん奴かいな」
恐らくリョウさんは私の瞬間診察を考慮して、離れているのかもしれない。
「でも、なんでリョウさんがっ！！」
リョウさんはまるでその微笑みを崩さずに、サンドパンを後退させる。
「ケンケンには借りがあーけーな、教えたーわ。わ達はロケット団。この世界の支配者だ」
リョウさんがきっぱりと言い切る。
普段なら、普段のリョウさんからの言葉がそれだったら皆が皆冗談だと思って笑い飛ばすだけなのに……今の言葉は私の胸にぐさりと突き刺さる。

「ま、ケンケンに会えたらよろしく言っといてーな」

何か意味深に私に告げるリョウさん。

「どういうことですか……？」

「いんや、別にどーもせんけん。それに聞いてーやろ？　最近各地で起こってる不可解な事件……そげは全部わ達の仕業だけん」

カナの言葉が脳裏をよぎる。

最近起こっている集団犯行。それが全部全部リョウさんの言うとおりだとしたら、犯人はロケット団……リョウさん達。

「何が目的なんですか」

「聞いてなかったんか？　わ達はこの世界を支配する」

本気だった。

リョウさんの声は本気だった。

私の額を一縷の汗が伝う。

全身からは嫌な汗が湧き出て、着物がぴっちりと肌にくっついて重い。

「わの任務は邪魔者の排除。だけん、ここに来た」

リョウさんがサンドパンをボールに戻して、入れ替えるようにサイホーンを出す。

私の実力だと、リョウさんには敵わない。そして戦いたくもない。

なんで、なんでこんなことになってるの？！

「サイホーン、【火炎――――ん？」

リョウさんが途中で言葉を切る。耳にイヤホンがついていたのか、それに指をあてて眉を若干しかめる。

「ちっ。わーたわーた、もどーりゃいいんだが？　どーすっだ、ほっとけ？　ちっ、わーたわーた」

悪態をつくリョウさんを私は初めて見るかもしれない。

「じゃーな、ケンケンの妹。運が良いってのはこういうことだが……。サイホーン戻れ、プテラっ！」

リョウさんはプテラを出して、そのまま肩を掴まれて飛び去ってしまう。

私は取り残された。

灰色の雲から降る雪が、今はとても切なく……冷たかった。

私はその場にへたり込み、冬の寒さと恐怖に震えながら……どんどんと冷たくなっていくカナの手を握っていた。

わずかに伝わるカナの鼓動は、私を硬直させた。

「カナっ……」

私はカナを護れなかった、の……？

一粒の涙がぽろっと目から落ちて、雪の結晶と混じりながら氷で覆われたコンクリートに溶け込んでいく。

耳に届けられるのは、ヘリの旋回音。それとうるさいと感じていたサイレン音が冬の大空に掻き消されていく不可解な雑音だった。

第一章：崩れゆく日常　ＩＩＩ：私の知らないこと（後書き）

ルカ「……」

よしよし

ルカ「うぅっ……」

皆様、それでは次話お会いいたしましょう。

ストーリーはまだ始まったばかり。

これから、ルカとメディターの始動です。

では

第一章：崩れゆく日常　ＩＶ：託された言葉（前書き）

なんだか、とことん日中でも眠いＫａｒｙｕです。

ルカ「えぇ、何それ……」

なんか、うーん……なんだろ、眠いや。

ルカ「ちゃんと寝ないと駄目だよ」

そうだね。

ルカ「今日はあんまりしゃべるネタないんだね」

うーん。そうかも……；；

ルカ「……第一章って後どれくらいまであるの？」

え、結構あるよ？

ルカ「え……？」

第一章：崩れゆく日常　Ⅳ：託された言葉

【キナギ昔話より抜粋：

この世界が創造されてから幾年が過ぎた時、神が地上に現れん。

その時、神に認められしは二人の人間。

一人は世界を救う救世主に。もう一人は世界を壊す破壊者となるだろう。

そして世界は、人間とポケモンは、己の歩む道を選ぶ

それは共存か？　或いは拒絶か？　はたまた許容か？　混沌か？

さあ、待つがよい。世界が生まれ変わるその瞬間（とき）を】

ハナダシティ：

ヘリが私の視界に次々とは現れ、中からロープを伝って今では氷花と貸したハナダデパートへと降り立つ。

「君っ、大丈夫か？！」

十、二十と現れる救助隊の人々の中に私とカナの方へと駆け寄ってくる影が一つ。

「チーフ、全員が【毒針】をくらっています！」

「ちっ、よくもやってくれたなロケット団！　いいか、一刻も早く全員を病院へ搬送しろ！」

「「はっ！」」

切迫とした風景をただ茫然と眺める。

「君っ！　手を放してくれないか？」

耳元で上がる大きく急(せ)いた声をきいて、私はカナを握る手に力を込める。

「君はこの子の友達なのかい？！　だったら、君も一緒に来なさい！　君も早く治療を――――！」

「いい。早くその子を連れていけ」

野太くも芯のある声。その声にレスキュー隊員の人の私に対する言葉は遮られる。

「はっ？　し、しかし！」

「いいから、行けっ」
「はい！」
私からカナを掻っ攫うようにレスキュー隊の人はカナを奪ってヘリへと速足に戻っていく。
目の前にはグレイのコートに無精ひげの男の人が私を見下ろしてくる。まるで、狼のような鋭い眼光は密かに私を見下ろして洞察する。
「おいっ」
氷の刃のように、触れるだけで胸の奥が痛むその声に、私は寒さ以外の震えを覚える。
ヘリの旋回音がうるさく、さっきのレスキュー隊の人が大声をあげていたのにもかかわらず、目の前の人の声は小さくとも鮮明に耳の中へと入ってくる。
「お前が、やったのか？」
やった？　何を？　私が、何をやったっていうの？
そんな思考が頭を巡り、口からは何も発さない。
「そうか……。悪かったな……」
男の人は私の頭の上に、大きな手を乗せる。
その手は、さっきの眼光とは裏腹にとても優しくて温かかった。

「行こう。君の友達も大丈夫だ」

男の人がゆっくりと私の手を取って、私を担ぐ。

お姫様だっこのような格好で、私は無気力なままにヘリへと乗せられる。

「連れてけっ」

「はい！　チーフはどうされますか？！」

「俺はもう少し現場を見てから戻る。早く、患者を病院へ」

「はい！」

ダンディで、色黒い肌は褐色が良くて黒い短髪がヘリのプロペラから生み出される旋風に揺れる。

チーフと呼ばれる、私のことを運んできてくれた人は最後に私を一瞥してからヘリの扉から離れていく。

私はお礼の言葉も述べることもできずに、ヘリに連れられてハナダ病院へと連れて行かれた。

首を動かさずじっとしていた私の視線に映るのは、無機質なヘリの中身とけたたましい旋回音。そして、連絡の途絶えないトランシーバーの通信音だった。

ハナダ病院：

私は一人だけ、集中治療室以外の場所で検査を受けた。

外傷はなし。そして、次に私が連れられてきたのは精神科。そして、そこでも異常は見つからなかった。

メディターの授業を受けていた時に、授業の一環としてこのハナダ病院にたびたび訪れたこともあったから、複数の知り合いの先生にも会った。でも、先生達は私に優しい言葉を投げかけてきてくれただけだった。

そして必ず心配げな表情を私に向けて、忙しそうに駈け出して行く。

あいまいな記憶が残って過ぎていく。

なんにも感じられなくなった手で、一人、合成革で作られた椅子に座って前かがみになる。

「うぇっ……。んっ、う、ああ、うぁああ……」

抑えきれなくなった嗚咽が、胸の奥底から湧きあがって漏れる。

「ルカちゃん」

知り合いの先生が優しく私の背中をさすってくる。でも、それは何の助けにもならない。

「ガナはっ……？　せんせぇ、カナは、カナは、どこっ？」

「カナちゃんは今手術中よ。でも安心して、ここの病院の治療は万全よ。ルカちゃんも知ってるでしょ？」

でも、そんなの関係ない。カナは、カナは大丈夫なの？　本当に、本当に大丈夫なの？

まるで、自分の一部が抜け落ちてしまったかのように。私は暗中、それを探す。まるで抜け出てしまった自分の眼球を探すように、私は……私は……。

「邪魔するぞ」

突如、聞き覚えのある声が私と先生がいる病室へと入ってくる。

「今は、診療中ですよ！　関係のない方は――――」

「国際警察だ」

私の後ろでそんなやり取りが行われて、私はゆっくりと後ろを振り返る。

「俺についてこい、ハヤミ　ルカ」

その人は、さっきハナダデパートで私を睨みつけていた男の人だ

った。

ハナダ病院　廊下：

私はただただ無言で国際警察の男の人の後ろをついていく。

エレベーターに乗って、なぜか上へ。私とその人は屋上へとやってくる。

外では灰色の空から、本当に灰塵のようにぼとぼとと地面を真っ白く汚していく。

「なん、ですか？」

私の口から絞り出されるのはそんな言葉だけ。

「何……少し、話がしたくてな。いるか？」

「……ありがとうございます」

男の人がコートのポケットから缶コーヒーを出して渡してくれる。

少しだけ悴(かじか)んできた指先を温かい缶があたためる。

屋上のフェンスに腕と肘をかけて、男の人はコーヒーをすする。そのフェンスの間を吹き抜けてくる冷たい冬風が私の頬をチリチリと痛く撫でつける。

「君は、どうして助かったんだ？」

やっぱり、デパートであったことを聴かれるんだ。私はそう理解して、俯く。

「何……疑っているわけではないんだ。ただ、あそこで何が起きたかを知っていて、今喋れる人間は君だけだ」

でも、私は口に出したくなかった。

いや、思い出したくなかった。

「無論、辛いことはわかっているさ。ただ、君が話してくれれば俺達も動ける。さっきのようなことを未然に防ぐことができるかもしれないんだ」

言われている理屈はわかる。

わかる、けど……。

私は俯いたまま、その男の人を見ないで黙る。

見えないけど、多分その男の人は優しげな笑みを未だに向けてくれているんだと思う。

「一つ、いいか？」

「……え？」

私は、不意に顔を上げる。

「俺の名前はシラヌイ。シラヌイ　ゲンだ」

「え、あ、あの……？」

いきなり名前を言われても、私は戸惑うしかない。

「俺も、お前と同じ境遇にあったことがある」

シラヌイさんがそう話を切って、私は言葉を飲み込む。

「俺は家族を失った。一番の親友だと思っていた奴にだ……目の前で殺された。知らないか？　２０年前のマサラでの――――」

知っている。２０年前のマサラタウンの出来事を。あの事件は、人類史上最悪の事件として知られている。まさか、シラヌイさんはあの事件に関与していたの……？

でも、シラヌイさんの話を聴いて私の頭の中にリョウさんの姿が思い浮かぶ。

「すまんな、こんな引き出すような話をして」

「いえ、私も喋ります……。私はカナのおかげで、助かりました……」

カナに【毒針】が刺さる直前の顔と言葉が頭によみがえり、私は下唇を噛む。

「そうか。悪かったな……」

「なんで、謝るんですか？」

「……そうだな。謝るほうがよっぽど、どうかしてる」

「ロケット団って、一体、なんなんですか？」

そう、私は知りたい。私からカナを奪った連中を。私から日常を奪った連中を。

シラヌイさんは、一度だけ目を固く閉ざして眉間にしわを寄せてから力強く目を開ける。

「ロケット団は、テロリスト集団だ。最近になってその存在が知られるようになった……。俺達もまだそんなに情報は手にしていない。何しろ、巧妙なネットワークシステムを築いている」

テロリスト……。その言葉が私の目を覚ます。

常に、テレビの向こう側の世界だと思っていた。でも、それはちゃんと実在していて……現に今私に襲いかかってきた。

「ロケット団の奴は、誰か覚えているか？」

私は一瞬、リョウさんの名前を出せばいいのか迷った。

言わなければならない。でも、口が動かなかった。

だって、リョウさんはそんなに付き合いはなかったけどお兄ちゃんの親友で、優しくて、マイペースで、常に笑顔が絶えるようなことがない人だったのに……。

息するのと同じように、何も感じずに、何も考えずに私を殺そうとした。

「リョウさん……。サカキ　リョウ……」
「な、に……？」
「その人がカナや他の人達を【毒針】でおそった人です」

シラヌイさんは顎に手をあてて、黙り込んでしまう。

「そんな馬鹿な……。あいつが……」
「あの、シラヌイさん？」

私の問いかけに、シラヌイさんは我に返ったのか、私の方を向いて

「ああ。いや、大丈夫だ。話してくれて感謝する」
「い、いえ……あの」
「なんだ？」
「なんで私によくしてくれるんですか？」

ただ私が生存者だから話をしたいんだとは思えない。

「やはり、君は俺に似ている……。君の目の色が、俺と同じだった。それだけさ」

私の方へと歩みよってきたシラヌイさんは私の頭に手を乗せる。
それはとっても温かくて、大きくて、懐かしかった。

「さあ、帰ろうか。綺麗な着物も煤(すす)だらけだ……」
「あ、本当だ……」
見下ろした着物はあちこちが破けて、傷だらけ……。折角お母さんが用意してくれたのに。
「下の連中がデパート周辺の落し物を回収し終えた。君の荷物があるかもしれないから、見ていってくれ」
「はい……。あ、でも、カナが」
「君の友人は無事手術が終了した。だが、助かった人は全員が面会謝絶だ」
「そ、そんなっ……！」
私は理不尽だという声を発そうとしたのがゲンさんはわかったのか、私の背中に手を添える。
「さあ」
私は両手で抱える缶コーヒーを強く握る。握りながら、私はエレベーターの中でずっと沈黙を押しとおした。
シラヌイさんに優しくエスコートされながら、私は病院のロビーに集められた品々を眺める。
青いビニールシートに乱雑ながらにも丁寧に並べられた荷物を見て、私は破れた紙袋からのぞき見えるケースを見つける。
「ベリブの実……」

そしてその紙袋の隣で落ちていたのはカナの着物とおそろいの赤色の巾着。

私は両手で煤と埃でまみれた巾着をそっと拾い上げて中身を見る。

そこにはカナのポケギアに財布と、ひとつのモンスターボール。

『私に、何かあったらシャワーズをお願い』

カナ、なんであんなこと言ったの？

シャワーズの入ったボールを両手で掲げて、私の口が震える。

「なんで、あんなこと言ったの？　カナ……」

お椀型にした両手でちょこんと収まっているボールの上に、私の涙がぽとりと一粒落ちて表面を優しく撫でるようにして伝っていった。

第一章：崩れゆく日常　Ⅳ：託された言葉（後書き）

本当は第一章は後数話で終わるはずが、今話があんまり進まなかったため前書きで言った通りに第一章は続いていきます。

ルカ「全部で何章ぐらいの予定なの？」

それは言うわけにはいかんでしょうに。

ルカ「えぇー」

しかし毎回書いている抜粋されている記事は結構リサーチして書いていますw

ルカ「そうなんだ。どれくらい？」

木の実の奴は、書くのに三十分ぐらいかかった；；

ルカ「え……」

そして今話は書いている途中でデータ消えて意気消沈しました。

ルカ「あらら」

それでは、また次回

第一章：崩れゆく日常　V：一縷の望みと一抹の不安（前書き）

あ、危ない……もうすぐで二日に一回更新のペースを崩すところだった……；；

というわけで、日本でいうと朝のいつもの時間帯に更新できなくてごめんなさい；

ルカ「どうかしたの？」

いや～昨日バクフーンさんとのコラボ作品投稿してて楽しくてついw

ルカ「……」

後、アメリカが冬時間になったので一時間は遅れるようになりました。

ルカ「あんまり無茶しないでね？」

うん。ありがと

第一章：崩れゆく日常　V：一縷の望みと一抹の不安

ハナダ病院　ロビー前：

「送ろうか？」

「いえ、結構です。ありがとうございました……」

「そうか？　いいのか？」

「はい……」

無気力にそう返す。

私はシラヌイさんの好意を断って、歩き出す。

右手にかろうじて持ち運べるボロボロの紙袋にカナのベリブの実を入れて、左手には私とカナの巾着が揺れる。

草履がアスファルトの道路を擦る。歩くたびに削られていく草履裏の木屑（きくず）みたいに、私の心がどこかへと擦り減って置いてかれる……。

喧騒と鳴らされるパトカーのサイレン音やネオンをよそに、行き交う人々の波にも呑まれずに私はとぼとぼとその重く遅い足取りを続けて、ふと顔を右へと向ける。

見えるはハナダジム……そしてカナの家……。

「カスミさん……」

そう呟きながら私の足は不意にカナの家の方へと進んでいく。

道中の記憶などなかった……。ただ機械的に家のベルを鳴らして、誰かが現れるのを待つ。

「ルカちゃんっ？！　ルカちゃん、無事だったのね！　良かった、良かったっ！！」

サクラさんが扉を開けて私の姿を見るなり、涙を両目に浮かべて抱きついてくる。

「サ、クラさ…ん……。う、うあぁ、ぁっ」

私は泣いた。わからない、でも両頬が熱くて、目を開けてられなくて、胸の奥から湧きあがってくる熱が溢れるように顔から放出される。

「カナは、大丈夫だった？」

サクラさんから優しく問われた質問に、私は答えを躊躇（ためら）ってしまう。

「手術が終わったって……。でも、会わせてもらえなかった……」

「……そう。ありがとう。上がっていく？」

「……で、でも……」

「少しだけ、カナの話も聴きたいし。カスミはジムリーダー達の招集がかかって街を出ちゃったし……」

言いにくそうにサクラさんが口を紡ぐ。

「……はい」

でも、断るわけにはいかない。だって、サクラさんはカナのお姉さんなんだもん。家族、なんだから。

普段ならカナの家に上がっての第一声は「すっご～い」の連発だったのに、そんな気持ちは微塵も浮かび上がってはこない。

居間の方へと通されて、ボタンさんが電話越しに「はい、はい、わかりました……」とか細い声で話している声とソファに座り込んで頭を抱えるアヤメさんが視界に入る。

「カナ、ちゃん……？」

アヤメさんが私に腫れあがった瞼越しに見上げてくる。私は、直視できずにわずかに目をそらしてしまう。

カナの親友ということで私はハナダジムのテンドウ四姉妹とは知り合い……。でも、今は逆にそれが辛い。

私はソファに座らされて、温かいココアを出される。

ゆっくりと掠れる声で私は話しだす。カナとお参りしたこと、デパートで買い物をしたこと、そしてその時起こったことも……。

話をじっと聞いてくれた三人はそれでも、泣かずに私を見守ってくれた。

「そう……。ありがとうルカちゃん、話してくれて」

「……いえ」

もう誰とも視線を交わすことなどできなかった。俯いて、着物の裾をぎゅっと握る。爪が着物の生地に食い込んでいく。流したい涙も枯れて目頭がただただ熱気を帯びていく。

「カナの、カナの部屋に行って、いいですか？」

絞り出す声に、誰も最初は反応してくれなかった。でもボタンさんが「うん、いいよ」と声をかけてくれた。

私はこの場から逃げ出したい気持ちに駆られながら、よたよたと居間を抜けてカナの部屋の前へと歩いていく。

ドアノブを回して、カチャという音が静寂を支配する。

カナの部屋にはいつも通り、今までに集められた木の実の標本がケースに保存されたのが並べられている。

小さいものから中くらいのものまで、きちんと整理されて部屋中に置かれている。

私は一歩一歩、部屋の中心へと歩み寄る。

そして私は前方に倒れる。体の前面が跳ね上がり、バネの軋む音を反動に私は冬布団の厚い毛布に受け止められる。

横目で見るカナの部屋は、本当に綺麗だった。でも、触れてしまえばもう壊れて粉々になりそうなほどに繊細だった。この場所を残しておかなければならない……カナの居場所なんだから。

ふと視界に一つの大学ノートが目に留まる。

カナの机の上に並べられる教科書やノートの中に、背表紙に夢日記と書かれたものがあった。

『あ、そういえばカナは初夢どうだった？』

『え、私……？』

ハナダ神社で会話した内容が頭の中で蘇る。

『私は……夢見なかったよ』

『そうなの？　私はねー、ピジョット二匹に――――』

カナは言った……夢を見なかったって。でも、あの時見せた表情が引っかかっていた。

震える指先がカナのノートに触れる。

引き出すように、私は夢日記と油性ペンで題されたノートを手に取る。

ゆっくりと表紙を捲（めく）っていく。

『１２月１２日　モモンの実
ケンさんと一緒に公園で腕相撲をする夢。なんでか知らないけど私が勝っちゃったw』

『１２月１３日　白ぼんぐり
今日は夢、見なかったな。疲れてたのかな？　あ、もしかしたら昨日カスミお姉ちゃんと一緒にジムのプール掃除手伝ったせいかも。』

短い行に書きこまれたカナの文字。

私は一つ一つを目で追いながら、今日の日にちが書きこまれたところを見つける。

『1月1日　チイラの実

怖い夢を見た。ルカちゃんと一緒にお買いものしてたら、目の前が真っ暗になっちゃう。自分の視点のはずなのに、私はベッドの上にいていくら待っても何も喋ってくれない。今日はお正月なのに、嫌な初夢。正夢にならないといいな。だって今日はルカちゃんと一緒に初詣にいくんだから。』

最後の丸の上に、私の涙が落ちる。

なんで……なん、で……？

信じられなかった。

枯れたはずの涙が、またも滴る。

自分が何を感じて、何を考えているのかもわからなかった。ぐちゃぐちゃだった。吐き気がした、目がくらんだ、頭が痛い……？

違う、もっと嫌な感触。

カナは知っていたのかな？　それでも、何も言わないで……？

『ルカちゃん……私に、何かあったらシャワーズをお願い』

だからなの？　だから、カナは最後にあんなことを言ったの？

カナは知っていて、でも私のわがままに付き合ってくれて、私を庇ったの？

握るノートがくしゃ、くしゃと音を立てながら変形することすら私は気付かずに胸を嫌な怖気が襲う。

『ごめんね、ルカちゃん……。私は、私はルカちゃんのことが大す――――っ！！』

カナが残した一言一句の全てが頭の中で再生される。

ごめんは私の方なのに。謝らなきゃいけなかったのは私の方だったのに。

ノートを強く胸に押し当てて、私は嗚咽をこぼしていく。

ぶら下げていた巾着からボールが一つ顔を見せる。

『シャワーズ……』

そう、シャワーズの入ったボール。

カナに託された言葉……。それは今、形として私に託される……。

ぶれる視界、その中からまたしても目に入る背表紙の文字。

全木の実大百科。

それは私がカナに付き合って書店で買ったことのある本。

重い重いといっていたカナのことを思い出す。でも、なんで気にかけるんだろう……気がつけばその大百科に手をかけていた。

パラパラとページをめくり、たどりつく一つの木の実。

【チイラの実】

カナの今日の日記に書かれていたチイラの実。

その説明文に目を通す。

【大海の力を秘めしチイラの実。大海の加護を受けしこの木の実は滅多に人前に姿を現さない。この実は食した人間、あるいはポケモンに癒しを与える。どんなひどい怪我も、重篤の病もこの木の実を食すことで完治すると言われている。伝説の実である為に、出現場所は幻島と言われている】

一語一語を読み取る。

チイラの実。

幻島。

伝説の木の実。

夢見事だとはわかっている。でも、もし本当にそうだとしたら……。

カナが私を庇って受けた【毒針】は背中に深く刺さっていた。

あれを受けたら、恐らくカナは植物状態……。このままだったら一生目も開けることなく、歩くこともできない。でも、この木の実さえあれば――――。復活しないと言われている神経を、取り戻させてくれるかもしれない。

私は自分の足に血が流れていくのがわかった。自分の意志で今、自分は立っている……そんな感触が戻ってくる。

『待っててね、カナ』

私はカナのノートと大百科をもとの位置に戻して部屋を出る。

サクラさん達にお礼を言って、私は家を出る。ちゃんとベリブの実をカナの机の上に置いて。

自然と足が速くなっていた。自分の家へと赴(おもむ)く足が駈け出して行く。

ルカ宅：

「ただいまっ！」

時間はもう夕方。

お母さんもお兄ちゃんも帰っている時間のはず。なのに、何も返事が返ってこない。

ふと、嫌な予感が自分の中で増幅する。

「お母さん？！　お兄ちゃんっ？！」

大声を出してみるも、家の中は無音。

ポケギアを取り出す。衝撃には強い為、あんなことがあった後でも使える。

お兄ちゃんにまずは電話。

でも、繋がらない……。

次はお母さんに。

コール音が耳元で繰り返されて、誰も出ない。

「なんで……？」

玄関で立ちすくむ。

もしかしたら、お兄ちゃんとお母さんも被害を受けたの……？

嫌な汗が私の肌をなぞっていく。

希望の糸を手繰(たぐ)り寄せたと思っていた。でも、違う糸が途切れそうになってしまう。

突然、体が震えだす。

私は自分の部屋に駆けこんで、ベッドの上に潜りこむ。

着物が汚いとか、そんなことはみじんも頭をよぎらない。

両腕を抱えて、体の震えを抑えようとする。でも、次から次へと悪い妄想が勝手に浮かび上がって不安に蝕まれていく。

いや、いやぁ、いやだ、いやだよ、早く、早く帰ってきて。誰か、帰ってきて。

すると勝手にガーディとシャワーズがボールから飛び出す。

「グゥゥ」

「フィー……」

ガーディとシャワーズは私に寄り添う。ガーディは私の胸あたりで。シャワーズは私の背中で首をのせて。

「う、うぅ……」

ガーディの落ち着きの温もりとシャワーズの癒しの涼しさが私の傷ついていく心を優しく抱擁してくれる。

それが嬉しくて、自分が情けなくて、今が怖くて、私はまた泣いた。

第一章：崩れゆく日常　V：一縷の望みと一抹の不安（後書き）

続きます。

ルカ「うぅ……」

思った以上に重い第一章です。

ルカ「重すぎ」

しかし、それを乗り越えた時、メディターははじまる。

ルカ「……」

なので皆様、どうぞお付き合いください。

ルカ「頑張る」

第一章：崩れゆく日常　ＶＩ：再会と出逢い　そして驚愕（前書き）

遅れてしまい申し訳ないです！

ルカ「うわー、４日遅れ～」

ですが無事試験も終わり、いや～良かった良かった。

ルカ「まあ、まだ高校生だもんねー」

はい。受験生ですねー。でもこっちにいるから受験は来年。つまり今の日本の高校二年生と同じ扱いになっちゃいます。

ルカ「皆ー、Ｋａｒｙｕが必死でこういうの説明してるのは言い逃れたいからだよー」

言うな！　言わないで！！

ルカ「それでは、第一章最終話だね？」

そうです！　やっと第一章が終わり、第二章へ！

第一章：崩れゆく日常　ＶＩ：再会と出逢い　そして驚愕

【幻島伝説記より抜粋：

幻島、それはまるで自分に意思があるように姿を隠したり現したりする。

何を待っているのか、何を恐れているのか、その島は己が認めし者の前に自ずと姿を示す。】

2日後：

3日……。

事件が起きてから3日め……。

誰も、家に帰ってこなかった……。

あの後、夜になってもお兄ちゃんもお母さんも帰ってこなかった。家にも連絡がなくて、夜が明けた……。

あの時の着物のまま、３日が過ぎた……。何も口にせず、何も飲まず、片手にはポケギアが強く握られたまま。見ればポケギアの充電は残り１０パーセントを切っている。

ガーディとシャワーズもずっと私の傍についてくれていた。ガーディが小さく鳴いて私の頬を舐め上げてくれる……でも、３日も水も何も食していないガーディの舌は乾燥していた。

シャワーズの肌も潤いを無くしてきているのがわかった。

わかっている。

起き上がらなきゃいけないことを。自分のしないといけないことを。わかってる。わかってる……でも、どうしようもない……。

まるで奈落に突き落とされたかのように、私は憔悴しきった体で横たわる。

外の様子もわからない。ただポケギアの電池が生き続ける限り、私はずっと待ち続ける。

もう誰からも連絡が入ってこないということを知りながら。

霞んでいく視界。遠のく意識。自分の呼吸の一つ一つが少しずつ衰弱していくのが聞き取れる。

手からこぼれおちるポケギア。密着していても感じることのないガーディとシャワーズの心拍。力の糸が切れたように崩壊していく体。

『……お、にい、ちゃ、ん』

なんで最後にお兄ちゃんの顔が浮かんだのかはわからない。でも、それでいいんだって思った。

静かに、穏やかな時間が私を優しく包み込む。

これで私も皆のところへいけるかな……？

「ルカっ！」

バンっ！　という勢い良く扉を開け放つ音が弱っていく聴覚に激

しく訴えかける。

バタバタと階段を駆け上がる音、開いていた自室の扉を抜けて良く知っている人物が入ってくる。

「ルカっ！　っつ、くそっ！　おい、大丈夫か？！」

お兄ちゃんの懐かしい声が私の意識を引き留める。私は、乾ききった瞳を潤して必死に舌と口を動かす。

「お兄、ちゃ、ん？」

がばっと私を強く抱きしめるお兄ちゃん。ガーディとシャワーズも弱弱しくお兄ちゃんを見上げる。

「悪かった……。今すぐ、この家を出るぞ。準備、できるか？」

「え？」

ぎゅっと体にくいこんでいくお兄ちゃんの指がとっても暖かくて力強かった。

「俺は、あいつらに狙われてる……。リョウに、会っただろ？　悪い、今は説明している時間がない。これ、飲めるか？」

お兄ちゃんが学校に行く時に使っている大きめのボストンバッグからストロー付きのボトルを出してくれる。

私は小さな赤ちゃんみたいにストローの端を唇ではさんで前歯で固定する。頬に力を入れて、徐々にあがってくる液体を喉へと滴らせる。

不思議と、それを呑んだだけで枯れていた喉に潤いが、脱力した体に活きが、霞んだ視界に鮮やかが、遠くなった聴覚に鋭さが舞い戻ってくるような気がした。

「これって……？」

「栄養ドリンクだ。チイラの実っていう珍しい木の実が少量使われてるって話だ。効くだろ？」

「チイラの、実？」

「あ、ああ」

私はお兄ちゃんにしがみ付くように聞き返す。

これが、チイラの実の効果……。今、自分の体をもってしてその凄さが、幻といわれている由縁がわかった。

「お兄ちゃん、これっ……」

私はもっと問い詰めようとした。でもお兄ちゃんのポケギアが鳴ったとたん、お兄ちゃんは私の肩を強く握る。

「いいか、ルカ。時間がない。今はガーディとシャワーズにそのドリンクを飲ませて必要なものを鞄に詰めろ。いいな？」

「え、でもお兄ちゃん……」

「頼む。言うとおりにしてくれ」

「……うん、わかった」

「悪いな」

お兄ちゃんはそう言って、私の部屋を出ながらポケギアを耳にあてる。

「間に合いそうですか？　……。　わかってます、こっちも１０分で準備できるんで。　……。　はい、お願いします」

お兄ちゃんの会話が聞こえてくるけど、私はベッドから立ち上がってすぐさまガーディとシャワーズに同じドリンクを飲ませる。

人間用って言っていたのに、このドリンクは生き物であれば誰にでも効果があるみたい。

「ガウっ！」

「フィ～！」

二匹ともに元気になって、私は二匹をぎゅっと抱きしめてからボールに戻した。謝罪と感謝の意を目一杯つぎ込んで。

でもそれでそのドリンクはなくなってしまった。

私は急いで煤だらけの着物を脱ぎ払って、普段から身につけているラフな私服へと着替える。

「あっ……」

着物を脱ぐ時には気がつかなかった。でも、もうぐちゃぐちゃになっちゃった髪の上にはお母さんがくれた髪飾りがあった。

「お母さんっ」

私は全身鏡の前で奥歯を噛みしめて、もう泣かないように髪飾りを丁寧に下す。

そしていそいそと旅行用鞄（ボストンバッグみたいな、キャスター無しの）に着替えを詰め込んでいく。

ガーディ用のブラシやトリートメント。私もあんまり使わないけど買い溜めちゃった化粧用ポーチにポケギアの充電器、お気に入りのメディターデータブック（電子ブック）、お母さんの髪飾り、アクセサリー（髪留め、ゴム、ネックレス、ブレスレット、ｅｔｃ）、そしてガーディ用の薄いブランケットを収納する。

そしてアウトワーク用にスクールで準備するようにいわれたウエストポーチを腰辺りに装着する。

中には予備である空のモンスターボール５個、スーパーボール２個、ハイパーボール１個が入っている。そして記念のプレミアボールとお兄ちゃんが誕生日にくれたスピードボールが１個ずつ。傷薬が５個。なんでも治し（一番の出費……）が５個。カナがくれた木の実がざっと６種類各３個ずつ（持ち運び用に最大限に効果が得られていて尚且（なおか）つ持ち運びに便利）。トレーナーズカード（スクールの生徒全員に配布されるカード、いわゆるＩＤあるいは身分証明書）と簡単な治療用に使われるセットポーチが１つ。

ガーディとシャワーズをボールに戻して、それをウエストポーチの横についているホルダーへと装着する。

今ならシャワーを浴びたいって思うんだけど、無理だよね。

少しだけ自分の怠惰を反省しつつも、お兄ちゃんが帰ってきてくれたからこそ今自分がこういう風に自分を馬鹿にできるんだと改めて思う。

「準備、できたか？」
「うん」
お兄ちゃんも着替えたのか、普段休みの日に来ているトレーナー用の服に身を包んでいた。
そういえば、さっきは気付かなかったけどお兄ちゃんは制服姿の時、腕にけがを――――。
「腕の怪我は……？」
「あ、ああ、包帯で処置はしたから大丈夫だ。それより、もうすぐ迎えが来るぞ」
「え？」
私は荷物を全部持ってお兄ちゃんの部屋へと入る。
「ラルトス」
「らるぅー」
あれ？　お兄ちゃんってラルトス持ってなかったのに……。
「借りてるのさ。目印だ」
「め、じるし……？」
「ああ。そろそろだ」
シュンっ――――。
突如、ラルトスのすぐ隣にエルレイドとエルレイドやラルトスと同じ翡翠色の髪をした女の人が現れた。

「世話になります、ミツルさん」
「ううん。それよりも間に合ってよかったよ、行こうか」
あれ……？
「男の人？」
腰まで長く伸びた綺麗な翡翠の髪の毛に、つぶらな瞳とすっきりとした顔立ち。少し幼さが残るも決して童顔でもなく、中立的でいて透き通るような白い肌……。
「あ、うん。君がケンくんの妹さんだね？　僕はミツル。よろしくね」
「……は、はい」
「ラルトス、戻って」
「らる～」
差し延ばされた手を握り返して、私はミツルさんの笑みに吸い込まれそうになる。
「ルカ、そのままミツルさんに掴まっておけよ」
「え？」
「捕まっといてくださいね、ルカちゃん。それじゃ、エルレイド頼むね」
「（こくり）」
視界が一気に切り替わる。
これが【テレポート】？

私達が現れた場所、それは広大な研究室のような部屋。

たくさんの機械がせめぎ合っているのに誰一人他に見当たらない。いや、ポケモンが一匹いた。お兄ちゃんが連れていたのとはまた違うラルトスが。

「ここは……？」

「ここはマサラタウンのオーキド研究所だよ」

「大丈夫か、ルカ？」

オーキド研究所……。誰一人としてこの場所を知らない人間はいないだろう。なぜならここは歴史上において一番最悪で悲惨な事件が起きた場所なのだから。

「でも、なんで……？」

でも、私はわからなかった。なんでここなのか。そしてなんで【テレポート】をしなければいけなかったのか。

お兄ちゃんは肩にかけた荷物をおろして、深々と腰をコンピューターモニター用の椅子へと下す。

「ルカ、お前はいつロケット団に襲われた？」

質問したいのはこっちなのに、なぜかお兄ちゃんから尋問される。

「お正月だよ」

「っ……。やっぱり、そうか」

「なんなの？　ねぇ、お兄ちゃんっ！」

お兄ちゃんは黙って立ちあがって、深呼吸をして私を向く。

「ロケット団が世界を掌握した」

「え……？」

ロケット団が世界を掌握した……？　それってつまり――――

「ああ……この国は、ロケット団に乗っ取られた。たったの3日で、世界は変革した」

お兄ちゃんの言葉が私に覆いかぶさってくる。

ミツルさんの方を向けば、彼も沈痛な表情で床を見つめる。拳をぎゅっと握っているのがわかった……。

私がベッドに横たわって衰弱していた3日間の内に、世界はロケット団に乗っ取られていたのだ――――。

第一章：完

第一章：崩れゆく日常　ＶＩ：再会と出逢い　そして驚愕（後書き）

第一章　完。

ルカ「助かったと思ったのに」

まあ、うん。そだね。

ルカ「それにしてもミチルさんって綺麗な人だよね」

うん。ミチルは皆様ご存じの通りルビー・サファイア・エメラルドに出てくる病弱だった彼の大人バージョンです。髪の毛が長いのは、でも似合うと思うんですよ。

ルカ「うん。違和感ない」

それでは今日はここいらで。

第二章はルカが過ごした3日の間、ケンに何があったのかを書いていきます。ケン兄ファンは必見！

ルカ「じゃあね～」

では！

第二章：語られる3日　Ⅰ：裏切りと離別（前書き）

な、なんとか、書けた……。

ルカ「なんか切羽詰まってるねー」

忙しすぎる。テストもあるのに、夜疲れて寝ちゃうし、このままじゃ悪夢を日中に見そうだ……。

ルカ「あらら」

それにしても第二章はルカから視点を置いてケンの視点から語っていこうと思います。ちょっと無理矢理詰め込んでいるところもありますが、ご了承ください。

ルカ「ご了承ください」

それでは、どうぞ

第二章：語られる3日　Ⅰ：裏切りと離別

3日前：

元旦から大事な用ってなんなんだよ……？　ったく……今日はルカをいじりながら初詣行こうと思ってたのにな。

冬空が肌に沁みる……。

ふぅー、さみいなやっぱ。

首元のマフラーをたくしあげて冬風をしのぐ。

しっかし、ニューラは元気だよな……さすがは氷ポケモン。

自分の目の前ではしゃぐニューラにため息まじりの笑みをこぼす。

集合場所はトレーナーズスクール。確か、最終学年とかそこらの連中が来るって話だけど……本当になんだってんだよ。

見えてくるスクールの校門には知っている同学年の生徒がちやほや見える。

「よっ」

「あ、ハヤミくん、あけおめー」

「おう、あけおめ」

校門へ入るところでばったり会った同じクラスの女子と言葉を交わして中へと入っていく。

「それにしても何の集会なんだろうね？」
「さあな。折角の正月だってーのに」
「ねー」

だんだんと人だかりのあるところへと行けば、集められた生徒は全員がポケモントレーナー専攻で実力の高いやつらだらけだ。

なんだ？　何かバトルでもやらせるのか？

そんな疑問がふと頭をよぎって、俺は咄嗟に持ってきたボストンバッグで後ろ向きに背中を護防ぐ。

「がっ！」
「うっ！！」
「な、なんだ？！」
「おい、あれっ！」

すぐそばで倒れる生徒達。さっきまで俺に話しかけていた女子も俺の足元で崩れ落ちている。

ゆっくりと鞄をおろせば、そこには2本の【毒針】が深々と刺さっていた。

「ちゃんとあたってもらわんとこまーごせ」

【毒針】が飛んできた方向を見れば、見慣れない黒尽くめのスーツに身を包んだリョウの姿があった。

「リョ、ウ……？」

「やあケンケン」
「てめえ、何して」
「任務遂行中だがん」
「任務……？」

俺同様に助かった生徒達にも動揺が走っていた。

「なんでリョウが……？」
「おいっ、てか倒れた奴ら大丈夫なのか？！」
「なんなのよ、一体！？」

そしてリョウの後ろから現れるのは同じ黒服に身を包んだ大人の男女達。

「坊っちゃん、ここは我々が」
「そうか？　なら、頼むけん」
「はっ」
「その前に……ケンケンはわーの手で終わらせーけん」
「はっ！」

リョウの後ろで威勢良く返事をする男は明らかに俺達よりもでかい大人。そんなやつらが十数人、俺達生徒３０人程を囲んでいる。

「おい、リョウ。お前何言ってやがる」
「任務だっていっとーがん」

ぼりぼりとあどけない表情で後ろ頭を掻くリョウ。

「任務……？」
「わーはロケット団。この世界を支配すーんだけん……すごいだろ

？」
「だったら、なんで俺達を……」
リョウは俺をまっすぐと見据え、にたっと笑う。
「近い将来、わー達の脅威になりうー種を潰したいけん」
「おまえ、何言って―――」
「ぐあっ！」「きゃあ！！」
俺の後ろで上がる次なる悲鳴。
振り向けば、他の黒尽くめの連中が生徒達へと【毒針】を放っているのが見える。
「大丈夫大丈夫。別に命まで取るつもりはないけん。ただ、一生ベッドの上だろうけどね」
「くっ！　てめえ！！　ニューラ！」
「ニュラ！」
俺は足元で戦況を観察していたニューラを呼ぶ。
そしてそれを合図に他の生徒達も各々のボールを構える。
「やーっと本気になってくれただ？　サンドパン」
「サンっ！」
リョウのパートナーであるサンドパンが、普段とは違った獰猛な表情を浮かべているのがわかる。

「【氷の礫(つぶて)】！」

両手を後ろに、ニューラはグラウンドを疾走する。

ニューラの右手に冷気が宿り、ボクシンググローブ並の氷塊が現れる。

「【砂嵐】」

サンドパンの足元から吹き荒れるグラウンドの砂が辺り一帯を包み込む。

「ちっ、目暗ましか……」

リョウとサンドパンを守るように出現する巨大な【砂嵐】は俺達生徒を囲んでしまう。

「真っ向勝負だとケンケンには勝てんけん。サンドパン、【毒針】だ」

「サンっ！」

砂塵の障壁を突き抜けて飛翔してくる【毒針】を見切れずにまたも倒されていく生徒……。

髪が風圧で押しのけられ、目に入る砂が完璧に視界を奪う。しかしニューラが【冷凍ビーム】で作りだした氷の壁を盾に【毒針】の乱連射を防ぐ。

全方位から飛ばされてくる【毒針】に対処しきり耐え抜いたのはたったの三人。

俺の他に残ったのはサイドンの厚い皮膚装甲に守られた男子生徒一人に【毒針】を見切り切り落としたストライクのトレーナーである女生徒一人。

「おいケンケン、こいつらやばいぞ！」
「逃げた方が良い」
「ああ、そうみたいだな。……リョウは俺を狙ってる、囮になるからお前達は逃げろ」

そう、俺達の実力じゃこいつら全員を相手にはできない。どんなに強くたって数では劣れば負ける。

「悪い、頼む」
「ありがとうケンくん」
「チャンスを作る。いいか、しくるなよ？」

血気盛んな男と淡々と言葉を連ねる女と俺……。全員が生き残るには、あいつに頼むしかないか。

「ニューラ、戻れ！　行けっ、キュウコン！！」

１０００年生きるといわれているキュウコンは、年を重ねるごとにその毛艶を金色に変えていく。

「黄金のキュウコン……」
「綺麗」

「いいか、俺が合図を出したら全速力で離脱しろ」
「オーケイ、わかった」

「了解」

俺はキュウコンに目配りし、キュウコンは意図を読み取ってくれたのかゆっくりとうなずき返してくれる。

さすが、俺のパートナーだ。

「キュウコン、【鬼火】！　そして【神通力】！」

何年生きればここまでおびただしい数の【鬼火】を作れるのだろうか？　過去に最高で１０作りだされればすごいと言われてきた【鬼火】……。だけど今は５０もの火の玉が拡散して【砂嵐】を吹き飛ばす。

「今だ！」

俺の合図と共に、男はサイドンの【穴を掘る】で、女はピジョットに掴まって去っていく。

幾人かのロケット団員が空を見上げて追撃しようとするも、キュウコンの【神通力】が炸裂、全員が頭を抱えて地面でのたうちまわる。

「さっすがケンケン、あれぐらいじゃ死なんか。それにしても、逃がしてしまったがん……」

「てめえリョウ、ふざけんなよ」

俺の怒りはピークに達しようとしていた。なぜリョウにだけ【神通力】が効かないのか、そんなことはどうでもよかった。ただ、今すぐこいつをぶん殴ってやる。

「わはいつでも本気だけん。それに、ここでケンケン潰さなきゃ親父に面目ないけんな」
「親父、だと……？」
「おしゃべりが過ぎたな。サンドパン、【切り裂く】！」
ニューラの時とは逆に、こちらへと向かってくるサンドパン。
「キュウコン、【火炎放射】！」
待ちかまえて放った【火炎放射】は一直線上に、サンドパンおろかリョウにまで襲いかかる。
「おお、すごいな」
【火炎放射】を避けずにリョウは涼しげな表情のまま立ちつくす。業火はリョウを包み込むも、炎はリョウに直撃することなく不可視の壁に妨げられる。
「そういうことかよっ」
リョウに【神通力】が通じない理由、それはリョウの背後にエスパータイプのポケモンがいたから。
「そろそろ終いにしたいけん。じゃあなケンケン」
リョウの背後から顔を見せるは今までに見たことのないポケモン……。
人、なのか……？　いや、人型の白いポケモン……。長い尻尾に

大きな太もも、シャープな顔立ちに首とは別に存在するもう一つの頭部と連結している管。

なんだ？　なんなんだあいつは？　見ているだけで自分の心が今までに味わったことのない畏怖にさいなまれる。

そして俺は知っている。どこかで見たことがある……何かに似ている……俺が昔読んだ文献に似たようなポケモンがいた……。

「あばよケンケン。ミュウツー、【サイコウェーブ】」

突き出される三つ指の長い腕。

そこから放出された念の波動は【サイコウェーブ】などという生半可なものではなかった。たったの数射の波動で地面は抉れ、念波が強風を巻き起こし、不可視の衝撃波が爆発を引き起こす。

「くっ！！」

俺とキュウコンは直撃は避けるも、その広範囲な攻撃によりまともに吹き飛ばされる。

「ジ・エンド」

リョウが自分の右手でスナップをするのが垣間見える。俺は吹き飛ばされ、宙に浮いている間にキュウコンをボールへと戻す。

「ミュウツー、【シャドーボール】」

生み出される暗黒の波動玉。俺へと射出されたその黒球を、俺は

ぎりぎりまで避けずに丁度リョウと俺との間に【シャドーボール】が割って入るタイミングと距離間を見計らって第三のボールを取り出す。

頼むぜ、ケーシィ。

強く念を送り、俺の体はケーシィの【テレポート】により瞬間移動する。

エスパータイプのポケモンが使う【テレポート】……それにはさまざまな制限が加えられる。レベルが高くなければ物や人はおろか、自分の【テレポート】もままならない。

更に、自分以外の生き物と共に【テレポート】するにはかなりの錬度が要求される。そして移動場所のイメージも明細でなければならない。

一日の大半を眠って過ごすケーシィにとって、一回分の【テレポート】分の念力は蓄えられている。だがケンが行使した【テレポート】では行き先も安全性も全く保障されてはいなかった。

ケンは一か八かに賭けたのだ。

ケンが消え、もともといた空間に【シャドーボール】が爆発する。

リョウは密かに笑みを浮かべて、膝をつくミュウツーへと見やる。

「やっぱ、まだまだ長時間のボール外活動には制限があるんな」

リョウは懐から取り出した紫色のボールを取り出してミュウツー

を戻す。

「情けないなわいら、しっかりしてごしない」

リョウは未だに倒れている自分の部下達を見下ろしながら、遠方に見えるハナダデパートを見据える。

「次はあそこな……」

第二章：語られる3日　Ⅰ：裏切りと離別（後書き）

ケンの視点で書くとか言っておきながら次回は「裏」を久々に書きます。

ルカ「おお、久々ー」

というかケン視点から書いている時点で、「裏」と個別にしなくてもいいとは思うんですが、またまたご了承ください。

ルカ「ご了承ください」

それにしても、早く復習しなきゃいろいろと明日やばい！

ルカ「頑張れ～」

では！

ルカ「じゃねー」

第二章：語られる3日　「裏」：三人の結束、青白き氷花（前書き）

「裏」久々！！

ルカ「皆覚えてるのかなー？」

一つ言いますと、「裏」に出てくるこの三人はこれからも出てきます。

そして何より俺のお気に入りの三人ですw

ルカ「えー、私はー？」

うーん。両天秤。

ルカ「え、えー、えー！　なんで悩むの！」

それではどうぞーw

第二章：語られる3日　「裏」：三人の結束、青白き氷花

ハナダデパート周辺：

ハナダデパートを少しぐらい見上げるくらいのビルの屋上に、見慣れた三人組がフェンスに寄りかかって時を待っている。

冬の寒空が零す雪の結晶に入り混じり、煙草の白煙がガイの口から洩れては舞い上がる。

「あらら、あんなに大きいのを壊すの？　勿体無いじゃない、結構良い物売ってるのに」

若干眉をひそめて寂しそうにハナダデパートを眺めるモモ。しかしその口元は少し楽しげでもある。

「けっ、知るかよ！　ただ今回の仕事はギャラが良いんだ。さて、ぶっ壊すぞ……命令実行時間だ」

ガイが鋭く尖った眼光でハナダデパートを見据える。

言い渡された任務は既定の時刻にハナダデパートへの奇襲を仕掛けること。目的は単純……ただの破壊。その街で一番大きな建物の破壊……子供のように単純な理屈、だがそれが最も効果的なのである。

三人が片耳につけているトランスシーバーから発される通信の行き交いにジンは戸惑っていた。

「でも、中の人は……」
モモはジンの言っていることがわかったのか、寂しげな笑みと共に
「ちゃんとご冥福をお祈りしないとね」
「ああ、仕事だ」
年上の先輩二人は心得ていた。端から、覚悟の上だった。でもジンはそうはいかなかった。
「で、でも……」
ためらいがちに零れるジンの後ろめたさに、ガイはジンの方へと向き直り猟奇的でいて冷酷な眼光がジンを突き刺す。
ガイが煙草をギリっと噛み切りながらジンの胸倉をつかんで持ち上げる。
「仕事だっつってんだろ？　割り切れよな？　あ！？」
「うっ……」
フェンスへと叩きつけられるジンの体。ジンはうめき声を上げながら、両足が宙に浮く。
「まあまあ、そんぐらいにしときなさいよガイくん。ジンくんはなんでロケット団に入ったの？」
なだめつつも、モモは核心へと迫りながらジンへと歩みよる。
長くも短い沈黙が流れる。

暫くした後、ジンは首元を抑えながら息を吐き出すように声を絞り出す。

「僕は咎人ですから……。もう、表社会では生きていけないんです」

モモとガイはそれ以上言及することなく、だが核心へと更に迫っていく。

「でも、ならなんでロケット団なの？　私達がやっていることはわかっていたんでしょ？」

そう、ロケット団の所属する大手ボールメーカーのシルフカンパニー社に就職するということは全ての裏事情を知った上でなければならない。そしてある一定のキーワードを挟んだ上での面接を経てロケット団採用試験を受けることができる。

人殺しもろくにできないひよっこが表社会で生きていけないからという理由だけではロケット団へと入る動機になるとは到底思えないのだ。

「そ、それは……」

「けっ、別におめぇのことなんて知ろうともおもわねぇさ。でもな、そのおめぇが抱えている重荷を俺達にも担がせようってんなら……まずはおめぇからぶっ殺すぞ」

見られるだけで心臓が止まりそうな程に、寒風より底冷えする氷柱の如く突き刺さる。

「っ……」

ガイから逃げるように視線を逸らすジンを勢いよく放りだすガイ。
「ジンくん。ごめんね、これが私達が歩む道なの。もしジンくんがついてこらないなら、見捨てるしかないの」
そう、自分が選んだ道ならば例えどのような障壁が待ちかまえていようともぶち壊し、乗り越えなければならない。
頭の中ではわかっていた。心の中では決めていた。
でも、現実はそれらを軽くあしらうように決意を粉砕してくれる。
「……やります」
コンクリートの屋上に両拳を握り固めながらジンは自分の意志を露わにする。
「そうこなくっちゃな」
「もう……ガイくんったらまたジンくんをいじめてー」
「お前も乗っただろうが」
ジンのことを試していたのだろうか？　だが、ジンはちゃんと答えを見つけた。自分の意志を確固たるものとして定めた。
そんな自分のことを。何もかもに諦めかけていた自分にガイとモモは、多少手荒な真似だったかもしれないが、助けてくれた。手を差し伸べてくれた。それは本当に愛の鞭としてジンの心に刻みこまれた。

ガイの手がジンの頭の上に乗せられて、くしゃくしゃと撫でられる。

「頼むぜ、リザード」

ガイのボールから出てくるのはリザード。

「お願い、カメール」

モモが出すのはカメール。

「行くよ、フシギソウ」

ジンが繰り出すのはフシギソウ。

この三人が1つのグループとして配置されたのは、三人のポケモンバランスによるものもあったのかもしれない。だが、今この三人の繋がりは深まった。

ガイが口から吐き出した煙草を靴の裏で潰し、声を張り上げる。

「ほら、木炭だ」

「リザ」

「【火炎放射】！」

リザードがガイと同じように木炭を煙草の要領で口に含んで息を大きく吸い込む。

口から火花が飛び散る。

そしてバチバチと鳴らしながら放たれる【火炎放射】は一直線にハナダデパートへと向かい、直撃する。

「行くよ、フシギソウ。【成長】……【エナジーボール】！」

「フッシー」

増幅されたエネルギー弾がフシギソウから射出されてリザードの【火炎放射】を追うようにデパートを追撃する。

「ありゃ、出遅れちゃったね。カメール、【ラスターカノン】」

「カメー！」

続いてモモ達も攻撃を繰り出す。

いくらデパートといえども、数か所に及ぶ同時攻撃に耐えうることなど皆無に等しく……時がたつにつれてデパートのビルが大きく振動する。

今回の任務はハナダデパートの破壊。

数か所に分けられたグループが一斉に攻撃を始めることで一気にビルを壊す作戦。

そして数回か繰り返された攻撃により、デパートビルそのものが上階から崩れ落ちる。

それはあっという間のことだった。

押しつぶすように外れたデパートの上階部分が瓦解し、そして次の瞬間すべてが停止する。

「えっ？」
「なんだありゃ？」
「すごーい」

ジン、ガイ、モモがそれぞれに信じられないといった風な声を漏らす。

それもそのはずであった。

更に瞬き一つの間に崩れるビルの断片が氷に包まれ、あっという間に華の花弁のような氷花が作り上げられる。

数秒の後に三人の耳に流れてくる怒号や命令にガイは舌打ちする。

「ちっ、ずらかるぞ。戻れリザード」
「潮時みたいね。ありがとうカメール」
「は、はいっ！　行くよフシギソウ」

三人は急いで屋上からビルの中へと戻り、下まで駆け降りてモモが運転するバンに乗り込む。

勢い良くハナダデパートから遠ざかっていくバンに一般人は不可解な視線を向けるも、何より今しがた忽然と形勢されたハナダデパートの氷花にくぎ付けにされる。

ジンも後部座席からその偉業の風景を窓越しに眺めながらハナダシティを去っていく。

「本社に戻るって？」

「ああ、そうらしい。ったく、なんだってんだありゃ」

助手席に座るガイがサイドミラーを通してジンと同じようにデパートを一瞥して睨みつける。

モモが握るハンドルは小刻みな調整を繰り返しながらも、一直線にハナダからヤマブキへと続く車線のアスファルトを駆け抜けていった。

「後味わりぃか、ジン？」

ガイが新しい煙草を箱から取り出しながら首を少し左回転させてジンに尋ねる。

唐突ではあったが妙に優しげの込められたガイの言葉に、ジンはすんなりと素直に答えてしまった。

「はい……」

ライターの火が煙草の先端に灯って煙を込め上げる。

「でも、そんなことも……この作戦が成功すりゃおもわねぇよ」

「はい。そう、ですね」

『ガイも結局ジンくんに自分を重ねちゃってるのかしらね』

密かにモモがわからないような微笑を浮かべる。

モモが目をやるバックミラー越しに一匹のプテラがデパートの上から飛び立つのと、それとすれ違い様にいくつもの黒いヘリコプタ

ーが降り立つ。

第二章：語られる3日　「裏」：三人の結束、青白き氷花（後書き）

次はいつあげれるかわからんです……。

ルカ「忙しいよね」

うん。テストがクラスで最下位でした。

頑張って勉強して70点取ったのにクラス最下位って……；；

皆頭良いんだなー；；

ルカ「……そ、そうだねー；；」

お互い頑張ろうぜルカ。

ルカ「うぅ……はい……」

では、皆様また次回w

ルカ「じゃーねー」

第二章：語られる3日　II：真実と真相（前書き）

さてさて、なんとか執筆できて一安心してます！

ルカ「わーい、久々だー」

まあルカは出番無いけど

ルカ「うぅ……」

かわいそうだから名前だけは出したよ。

ルカ「それって慰めにもならないよね」

え、あ、う？　ま、まあ、どうぞ！

ルカ「あ、はぐらかした！」

第二章：語られる3日　II：真実と真相

ナナシの洞窟：

「くっ！！」

瞬間移動……それは味わったことのない未知なる重力に体を引っ張られるようで、精神的にも肉体的にも堪える。

それにこんな体じゃ、【テレポート】するだけでぶっ壊れそうだ……。

俺がケーシィによって移動させられた場所……。

辺りは真っ暗。まだ目が慣れていないのかよくはわからない。でも、洞窟かもしくは穴の中だというのはわかった。

座ったままの状態で後ろの壁に寄りかかり、手が触れる地面はひんやりとした土の匂いと肌触りがする。

一体、ここはどこだ……？

頭の登頂から生温かい血がたらりと流れてくる。汗かと思ってぬぐったら、手には赤黒い染みがつく。

ちっ……。

「キュウコン、頼めるか？」

腰のベルトからキュウコンを取り出す。

「きゅー」

「見張りと視界の確保頼む」

キュウコンの九尾から仄かな炎が灯り、辺りを照らす。

もとより黄金の毛を有するキュウコン。日の光を吸収していたその体毛は暗闇の洞窟内でもかすかに光を放つ。

「っ！！」

キュウコンが確保してくれた視界ではっきりと見える……。ここがどんな場所で、いかに来てはいけなかった場所かが……。

ついてねえな……。ナナシの洞窟かよ……。

ハナダシティ北西部にある、いついかなる時も立ち入りを禁止されている聖域。

聖域……なのかはわからない。けど、大人達から街の子供は皆そう教えられる。そして一般人が入れないように洞窟の前には検問が敷かれている。

そして俺の視界から眺める限り見えるのは血に飢えたかのような、息の荒く目が充血した野生のポケモン達。

「絶体絶命ってこういうことかよっ……」

そんな状況なのに血が騒ぐってのは、俺の悲しい性かもな。ちっ

くしょー、体が動かねえ。

指に力を入れて動かそうとするも、斬られた脇腹や裂傷した腕の痛みでわずかにしか動かない。

「ハゥ！！」

まるで空気を呑みこむかのような威嚇でキュウコンが吠える。

すると全てのポケモン達は口惜しむように、しかしおびえるようにして立ち去っていく。

そうか……。

「ありがとな、キュウコン。お前が長生きでよかった……」

「きゅう」

ポケモン達の野生の勘が働いたんだろう。妙齢１０００年を生きるといわれているキュウコン……。そのキュウコンの生きてきた年数とそれにより纏われたオーラにポケモン達が畏怖したのだ。

こんな現象、トレーナーのポケモン達ならありえねえのにな……。

だが、それはたった一難が過ぎたのみだ。

早く、回復してここを出ないとな。くそっ……。とまんねえ。

ミュウツーの【サイコウェーブ】の威力がここまでとは思わなかった。そもそも、あのポケモンは一体何なんだ……？

やっべ、意識がもたな――――

「君、大丈夫？！」

鼓膜をくすぐるのは焦燥の入り混じった綺麗な声。

「キュウコン、君がこの子の主人かい？」

「きゅう」

決死に開く視界には綺麗な翡翠の色をした髪と中世的な顔立ちをした……女なのか？　男なのか？　髪が長いから女なのかもしれない……。

「ひどい怪我だ……。これは、エスパータイプの攻撃……？　それにしても、この波長は……」

何を言っているのか、俺には理解できなかった。ってか、波長って何の話だ……？

「とりあえず先生のところへ行こう。キルリア、この子のサポート任せられる？」

「きる～」

「キュウコンもついておいで。お願い、サーナイト」

「さう」

「よし、行こう。サーナイト【テレポート】」

俺は目の前の人に肩を担がれ、キルリアが俺の怪我した場所に何か念を送っているのが感じられる。

キュウコンが初対面の人間の言うことを聴くってことは……危険

な人じゃないってことだよな……。わり、もう意識がもたねえ。

【テレポート】が行われ、その際にどこか別次元に引っ張られるような感覚と共に俺の意識はそこで途絶えた。

2の島：

懐かしく感じる程に心地の良い波の音。

窓から吹きこみ顔を撫でるのは優しく暖かい風と潮の香り。

ここは……？

目を覚まし、天井を見上げる。木目の見える頑丈そうに作られた屋根が見える。

「おお、起きたか。さすがは男子じゃのお、回復が早いわい。ほっほっほ」

聞き慣れない老人のようなしゃがれた声と笑い……。俺は声の主の方へと振り返る。

「うおっ！？」

「何をそんなに驚いとるんじゃ。ほれ、薬じゃ飲め」

目の前にはどこかの部族衣装に身を包んだ女の老人だった。細身の割には高い身長、そして見慣れない部族……いや、集落か？　そんな服装をした人間から薬と言われて受け取ったものを飲めるか？　飲めるわけねえ。

「あの、どなたですか？」

良く見れば、頭の上には包帯が巻かれ、肩から右腕にかけて、そして脇腹には頑丈なガーゼが巻かれているのがわかった。

「ふむ……そうじゃの、先ずはそちも情報が欲しかろう。まあ、先ずは飲むんじゃな。ほっほっほ」

その笑い方をやめてほしかったが、状況判断からしてみても世話をしてくれたのはこの老人みたいなのでためらいながらも薬を嚥下（えんか）する。

「こ、これ……」

なんとも不思議な味がした……。体の奥底から沁み渡るように体中に活気がよみがえる。

「効くじゃろ？　チイラの実を使った秘薬での……。効果は覿面（てきめん）じ

や。ほっほっほ」

お椀を老人に返しながら、俺はいろいろと聴くことにした。

「あの、一体何がどうなって―――」

老人は手に持つ杖を俺の方へと向けながら、一瞬目を細めながら俺を睨む。

「いいじゃろう、教えてやらんこともない。お主はミツルにここへと連れてこられ早2日意識を失っておった。わしが治療したがの……面白いものを見れたわい。ほっほっほ」

しゃくりながら上げる笑い声に抗体ができつつ、俺は更に詳しく聴いていく。

「面白いもの？」

「うむ。お主の裂傷はどれもエスパータイプの攻撃によってできたものじゃ。エスパータイプの技のことは知っておろう？」

エスパーポケモンが攻撃する際に用いる特殊な念波……それはα波、β波、γ波の融合とも言われているが何かしらの特殊な脳波を具現化して攻撃に用いるものとされている。そして必ずと言ってもいいほどにエスパータイプの技をくらった人間・ポケモンには微弱ながらに体内に影響がもたらせられる。

格闘タイプがエスパー攻撃に弱いのは、一説によると筋細胞が弱められる為とも言われている。

「ああ……。それがどうしたって―――」

「かすった程度で良かったのじゃが、それにしてもそれほどの裂傷を生み出させるポケモンなどわしは見たことがないのでな。いろいろと研究させてもらったわ。ほっほっほ」

やけにその老人の笑い声に恐怖を覚えた俺は反射的に自分の脇腹を守るように抑える。

「お主、誰にやられた……？」

直球すぎるその質問に、俺は答えるのに少しばかり時間を有した。回帰するように記憶を巡らせ、俺はリョウが口にしていたポケモンの名前を思い出すように口に出す。

「ミュウツー……」

「ミュウツー？」

「ああ、リョウはそう言ってた……」

「興味深いのう……」

老人が顎をさすりながら熟考する姿を見て、俺はがばっと起きながら一番重要なことに気がつく。

「ハナダシティは？！　ハナダシティはどうなったんだ！？」

起き上がる時に力を入れた腹筋は思い通りに働かず、逆に枷となり痛みを訴え出す。

「うっ！」

「病人はちゃんと寝ておけ。少し安静にしておれば、さっきのチイラが効いてくるからの……」

話をそらすかのように気を使われる……。

「ハナダシティはどうなったんですか！」

老人は固く目を瞑り、そして目を開ける。

「テロじゃよ」

「テ、ロ？」

「ロケット団なる組織が協会を乗っ取ろうとしているんじゃ。そして各主要都市ハナダ、タマムシ、ヤマブキ、セキチクがやられた。そして４の島も……」

なんだって……？

俺は数秒理解に苦しんだ。

「そしてロケット団は今やポケモンリーグへと進行している。もはや止められん……。世界はテロの脅威とさらされ、実質乗っ取られるじゃろうな」

そんな馬鹿な……。いくらなんだっていきなり出てきた組織に協会がやられるなんてこと……。チャンピオンのシゲルさんだっているってのに……。

「そしてカントーのみではない。ジョウト、ホウエン、シンオウ、ハイア（※ハイアはオリジナル地方で中国地方にあたります）でも同じことが起こっておる」

……ルカ、母さん。

「ここはどこなんだ？」

低く唸るように俺の喉から言葉が放たれる。

「2の島、岐波の岬じゃ」

「そうか……。俺はハナダに帰ります。いろいろとお世話になりました」

「何を言っておるのじゃ……。お主はまだ動ける体じゃなかろうに」

「妹が、母さんがハナダにいるんだ。こんなところでじっとしてられっかよ！」

「落ちつくのじゃ」

突きつけられると共に放たれた忠告に俺はぐっと言葉をかみ殺す。

「そんなに家族が心配か？」

「あったりまえだろ！」

大声を放つ度に痛みがこみあがってくる。

「それなら……のう、ミツル？」

「はい」

どこにいたのか、同じ部屋の中にいた翡翠の髪を持ったやつに俺は再度出会う。

「これから作戦会議だ、ケンくん」

なぜ俺の名を知っているのか、この際どうでもよかった。

ただ俺の直感が訴えた……こいつは強い……。

やつの瞳に宿された怒りと不屈の色に俺はただ圧倒されて、浮かしていた腰をベッドの上へと情けなく下した。

第二章：語られる3日　ＩＩ：真実と真相（後書き）

次回は更に説明口調が増えていくでしょうね。

それとエスパータイプに関しての記述は俺がそうなんじゃないのかなーと空想したものなので事実と違っていたら申し訳ないです＞＜

それになぜ毒とかに効くかまではわからいですし……；；

ルカ「Ｋａｒｙｕお腹空いたー」

はい、飴。

あ、それとただいま「あなたのモンスターボール」企画（１１月１４日～１１月２８日）進行中ですｗ

ルカ「たっくさんボールの案きたよねー」

うん。俺もびっくりｗ

ルカ「興味ある方はバシバシ送ってきてくださいねー」

はい。詳細は「あなたのモンスターボール」という題名でやっておりますので～。では！

ルカ「ばいば～い」

第二章：語られる3日　ＩＩＩ：マサラの悲劇（前書き）

ルカ「なんか、シリアスって暗いから嫌だー」

う、うん。まあ、そうなんだけど頑張ってくれ。

ルカ「うぅ」

ちょっと今回は説明とかが多いです。ごめんなさい。

ルカ「そんなことといったら読んでくれない人もでちゃうかもよー？」

え？　あ、ああ……。でも、実際そうだしねーｗ

ルカ「そっか。じゃあシリアスなんだねー」

そうだねー。ショッキングな内容とならなければいいんだけどね。

第二章：語られる3日　ＩＩＩ：マサラの悲劇

2の島　岐波の岬：

「キワメ師匠から大体の話は聞いたね、ケンくん？」

目の前のやつに圧倒されながらも、俺はかろうじて首を上下させる。

「ああ。あんたは……？」

「僕はミツル。こちらは僕の師匠であられるキワメさんだよ」

何気に胸を張って自分をアピールしているキワメさんを俺は傍目で片付けながら、ミツルと名乗った人物に視線を戻す。

「男だったんですね。びっくりしましたよ」

髪が長く、綺麗な顔立ちに一瞬女だと思ってた俺が情けないな。

「助けてもらってありがとうございました。それで、俺に何か？」

さっきの目は明らかに俺を測っていたような目だった……。

「いや……警戒させちゃったみたいでごめんね。ただ、君のキュウコンを見てね……強いんだね、君」

「……ありがとうございます。でも、ミツルさん程ではないですよ。きっと……」

俺もお返しするように見つめ返す。

「ほっほっほ、面白いのお。お主程の実力者ならミツルに敵わんとわかっておっても、きっと、と言うか。ほっほっほ」

ああ、そうさ。やってもいないのに絶対なんて言えるかよ。

俺の好戦的な血がふつふつと目の前の男に対して湧きがってくるのを感じる。

「君は面白いね。でも、今はそのことで張り合っている場合じゃないんだ」

急に真剣な表情へと切り替えるミツルさんを見て、俺は緊張していた背筋と手を緩める。

「大監獄８の島で初の脱獄者が出た」

大監獄８の島。

７つの島で構成されている地域ナナシマではあるが、一般市民は行くことの許されていない島が１つある。それが、８の島。

重罪人や犯罪者を隔離、収容している島である。

島まるごとが巨大な監獄として利用されており、脱獄者など出たこともなかった大監獄８の島……そこから逃げ出した者が出た。

「君も知ってるでしょ？　オーキドって人を」

っ！？

「あの、オーキドが逃げたのかよ！？」

オーキド。以前オーキド博士として偉大なるポケモン研究分野の権威の持ち主であったが、「マサラの悲劇」と呼ばれる事件の主犯とされ逮捕、投獄されたと教えられた。

「２０年前の「マサラの悲劇」……。その主犯が今になって逃げ出して姿をくらませてから今日で一週間。そしてロケット団の同時多発テロ……。裏があるとしか思えない」

オーキドの名前が出た時に、キワメ老人の表情が微弱ながらに変わったような気もした。でも、今は……

オーキド博士が住んでいたマサラタウンの研究所……そこには研究の為に集められたポケモン達が暮らしていた。研究、といってもポケモンの生態を観察するというものであったと皆が思い知らされていた。

しかし裏で、オーキドはポケモン達を用いて何らかの実験を行っていたのだ。

ポケモンの生命エネルギーを使っての新たなる生命エネルギー体の創生。ある日、数日もの間オーキドを見かけずにおかしいと思っていたマサラの住人が研究所を訪ねた。

そこで住人が見たものは想像を絶する光景。魑魅魍魎の塊が無造作に山となったポケモン達の死骸。無様にも研究のために利用されたポケモン達の亡骸……。

唯一研究所で動いていたのはコンピューター器具の稼働音と狂ったように背を丸め嗤い、研究衣に身を包んだオーキド博士。

「オーキドはあの後すぐに逮捕、監獄されたはずだろ？　なのに、どうやって」

「それはわからない。でもロケット団が深くかかわっている……。そして、あのマサラの悲劇で隠ぺいされた人間が一人いるんだ」

「え……？」

ミツルの言うところの意味は理解できなかった。

「シルフカンパニー社社長のサカキ。昔の文献を読み返していたんだけどね……彼が二十数年前にオーキドを尋ねにいったらしいんだ。そして……その時からオーキドは人前へ出てくることが少なくなってしまった」

知らされる意外な事実……。しかしどうしてこの人は俺にこんなことを———？

「僕は君の腕を買いたい。このテロの裏にこびり付いた真相を僕は知りたい」

彼の目は直視できない程にまっすぐで、俺は一瞬その眼力に吸い込まれそうになってしまう。

「でも、なんで俺なんですか？　俺より腕の良い奴は五万といますよ？」

少し嫌味な言い方かもしれない……けど、事実だ。

「都合の良い言い方で悪いけど、君はロケット団に襲われて逃げていたんだろう？　だとしたら、また狙われる可能性がある……それも、ロケット団の中枢に繋がりのある連中とね」

……リョウのことか？　リョウ？　リョウの名字は……サカキ。

「そのサカキっていう奴に子供っているのか……？」

「調べたところによるといるみたいだね。君と同い年ぐらいだと思うよ」

「そうですか……。そのサカキっていう奴がロケット団の首領なんですか？」

「ああ。先日自らがテレビで公表していたよ」

俺は内心舌打ちし、リョウにもう一度会いたいという念が一気に膨張する。

「そういうことですか。なら協力します。俺もあいつは自分の手でぶん殴ってやらないと気がすまないんで」

「そうか。なら、よろしくねケンくん」

差し伸べられる手を俺は力強く握り返す。奥歯で苦い思いをかみ殺しながら、俺の心には新たなる闘志が湧き上がる。

「よろしくです、ミツルさん」

俺はしっかりとベッドから立ち上がり、ものの数分であのチイラの効果が現れてきているのを実感して驚く。

「痛みが、消えた……」

俺の言葉にキワメは今までにないぐらいの一際甲高い声で笑う。
「ほっほっほ！　じゃろうじゃろうて！」
「キワメさん、またそんなに笑うと顎外れちゃいますよ」
「ほっほっほ……あがっ！？」
「あ、キ、キワメさん、大丈夫ですか！」

なんなんだこの茶番は……？　と思いつつ、先ほどまで真剣そのものだったミツルとキワメ老人のギャップに俺は冷や汗を流す。

それにしても、例えオーキドをロケット団が逃がして協力させていたとしても全国支配なんてできるのか？　かなり危うい立場にあることは知っている……でも、そんな一勢力の力をもってしてここまで劣勢に陥るなんて……。

俺の目の前で顎を両手で抱えようとして痛がるキワメとあたふたと対応しているミツルを放っておいて俺はベッド横に置かれた俺のバッグを見下ろす。

バッグの片側に突き刺さった【毒針】によって空けられた穴は、ちゃんとあのコトが夢ではなかったことを物語る。

あのリョウが、ロケット団で一番偉い奴の息子かよ……。それにあいつが持っていたミュウツーってポケモンに、オーキドの脱獄。それとオーキドが研究していた新たなるエネルギー生命体の謎……。

でも今気にかけなきゃなんねえのは、ロケット団の強大な力とその勢い。

それと……ルカ……。

拳をぎゅっと握る。

無事でいてくれよ。

「ミツルさん、それでこれからどうするんですか？」

彼には背を向けたまま、俺は問いかける。

そしてミツルは待っていましたと言わんばかりに、穏やかな口調で言い返す。

「君はどうしたい？」

……。

「ロケット団の調査も大事ですけど、俺は自分の家族のことが心配です……」

「そうだね……。ロケット団のことは謎だらけだけど、先ずは君の家族のことが心配だ」

「お願いします」

「うん。皮肉な情報だけど、今までにたくさんの死者が出てきたんだけど……不可解な点があるんだ」

「不可解な点？」

ミツルは顎をもとに戻したキワメの横を通り過ぎてテレビのダイヤルを回してスイッチを点ける。ってか、古っ。

「うん。まあこれを見て」

【ニュースをお伝えいたします。先日協会へと声明を発表したロケット団なる組織はカントー地方においてハナダ、タマムシ、セキチク、ヤマブキ、４の島へと同時多発テロ活動を敢行しました。死者は出ておりますが、遥かに重軽傷者が多く付近の病院やポケモンセンターでは手が回らなくなっています。そしてロケット団のリーダーがポケモンボール製作株式会社シルフカンパニーの社長であるサカキ氏であることも判明。警察、ポケポリ、協会がロケット団の鎮圧に力を注いでおりますも劣勢に陥っております―――】

流れている昼のニュースは各地の街で行われたテロ活動の惨劇を中継で流す。

そしてハナダシティのニュースでは謎の巨大氷花の出現が大々的にスクープされていた。

「何かに気付いたかい？」

ミツルがテレビを消して聞き返してくる。

その答えは頭の中にさっきのニュースで理解していたが、その理由が俺は見つけられなかった。

「まるで緊張感がない……」

「そう」

そう……。さっきのニュースを読みあげていたキャスターにはまるで声に緊張感がこもっていなかった。まるで傍観者のように、観測者のように……ただ淡々と……。

「それと、重軽症者の多さ」

「そうだね。あんなに派手なテロ行為を行っているにもかかわらず死者が少ない。少なすぎるんだ」
「つまり協会の対応を遅らせて撹乱するのが目的ってことですか？」
「……かもしれない。でも、もっと何かありそうだね」

そうだ。確かに不可解な点が多過ぎる。

テロなんだ。なのに、どこかよそで他国同士が戦争をしている程度並の緊張感しか伝わってこない。

それに協会が劣勢で負けているというのに、あんなに抑揚された声で……？

もちろんニュースキャスターに求められるのは的確にニュースを視聴者へと知らせることだ。けど、あれはおかしい。おかしすぎる。

「急がないと、本当に変なことが起こりそうだね」
「ふむ、そうじゃの」
「そうですね。だったら急ぎましょう」

俺はバッグを肩にぶら下げて、背筋をしっかりと伸ばす。

「うん。それでは行ってきますキワメ師匠」
「気をつけての」
「はい」

ミツルが先頭に立ってキワメの家の玄関から出ていき俺も後に続く。

「ケンよ、待て」

「はい？」

急に呼び止められ俺は不意を突かれる。

「これを持っていくがよい」

「これは……？」

手渡されるは頑丈そうな青色の容器。

「チイラの実で作った特性ドリンクじゃ。まだまだ本調子ではなかろう？　持っていくがよい」

「……ありがとうございます」

「何、礼ならチイラの実を送ってくるハギにでも言うんじゃな。ほっほっほ」

「はい。それじゃ」

「うむ、頼んじゃぞ」

俺はキワメから受け取ったドリンクを鞄に入れて外へと出る。

「それじゃ、行こうか……ハナダシティへ」

「はい」

ミツルが俺に一つのモンスターボールを手渡す。

「これは？」

「中にラルトスが入ってる。もし何かあった時には、役に立つから。あ、それと僕の番号ね」

「あ、はい。ありがとうございます」

俺はミツルから渡された番号をポケギアに登録し、ラルトスの入

ったボールを腰へと装着する。その間にミツルはエルレイドを取りだす。

「ケンくんはなんで度の入っていない眼鏡をかけてるの？」

「オシャレですよオシャレ」

「そっか。エルレイド、お願い【テレポート】」

エルレイドがうなずくと共に俺は体と意識もろとも持っていかれる感覚に陥って2の島から瞬間移動する。

二人が去った後、キワメが一人家の外へと出て空を見上げる。

「オーキドよ……お主はどこで人の道を踏み外したんじゃ？」

遠くの旧友を懐かしみ、憐れむその切ない声は儚くも岐波の風に運び去られてしまう。

これは、ロケット団が全国を支配する1日前の出来事……。

第二章：語られる3日　ＩＩＩ：マサラの悲劇（後書き）

次回の更新はいつもながらに不定期と答えていつも通りかもです。

ルカ「あいまいだなー」

まあ、ご勘弁をｗ

今日は短めに、それでは！

ルカ「じゃーねー」

第二章：語られる3日　ⅠＶ：出逢いと再会　そして驚愕（前書き）

うーん、やっぱり小説を書くのに俺は週末は不向きだと思う。

ルカ「えー、そうなの？」

うーん。なんか週末の方がいろいろとやることが多い気がする……；；

ルカ「私は、うーん小説書かないからわっかんないやー」

そ、そうですか……。まあそうだよね。

ルカ「それじゃ、第二章はこれでおしまい？」

そうだね。次に「裏」を書いてそこで第二章はおしまいです！

ルカ「では、どうぞー」

第二章：語られる3日　Ⅳ：出逢いと再会　そして驚愕

ナナシの洞窟：

「ただいまラルトス」

「らる～」

ケンを2の島へと連れて行く時にミツルが置いていったラルトスの元へと【テレポート】で転移する。

「うおっ……なるほど、こうやって転移場所を確保してるってわけか」

本当に役に立つな。【テレポート】使用時の出現ポイントの不安定さを身内のエスパー同士で補う……俺にはできない芸当だ。

俺は辺りを見回しながら、ミツルさんの指示を仰ぐ。

俺が意識を失ってから2日。つまり今日は1月3日。正月を入れて、今日で3日……。ルカは無事なのか？

「まずはここから出よう。ラルトス、戻って」

ミツルさんがボールにラルトスを戻し、サーナイトが出口へと俺達を引率する。

ミツルさんのサーナイトがいかにレベルの高いかが、野生ポケモン達の行動でわかる。恐れている……。そして俺の目から見ても、どれくらいサーナイトがミツルさんと共に数々のバトルをこなして

きたかがわかる。

くそっ……。やっぱ、歯が立たねえんだろうな。

ふと、そんなことを考えてしまう。

「多分、ナナシの洞窟は監視されていると思う」

「え？」

ミツルさんが俺にささやいてくる。

「僕がここを調査していたのは、実はロケット団に関することなんだ。この洞窟の最深奥……そこから何か微弱で特殊な念波をサーナイトが感じ取ったんだ」

「それで……？」

となると、俺はミツルさんが調査し終わったところを助けられたということになる。

「何もなかった。でも、確かに念はそこから感じ取れた……。微弱でも、とても凶暴な念だった」

「そうだったんですか」

一度深く瞼を閉じるミツルさん。

「でも、ここがロケット団……いや、サカキの思惑との因果があることは確かなんだよ」

「……どうしてミツルさんはこんなに詳しいんですか？」

２の島にいた時も、ミツルは昔の文献を読んだと言っていた。そ

れはどういうことなのか？　見るからにあの場所には古い文献はあるかもしれないが、ここまでの情報があの島にあったとは思えない。

「ああ、ごめんね。僕はホウエン地方のチャンピオンであるダイゴさんの片腕として動いてるんだ」

「チャンピオン、ダイゴ？」

「そう。彼からの依頼でね……最近のサカキの動きがあやしいことを睨んで、ダイゴさんが僕を頼ってきたんだ。彼は忙しいし、ホウエンリーグからは抜け出せないからね」

「そうだったですか……」

ホウエンチャンピオンでありホウエン地方の管轄を任されているチャンピオンダイゴ。彼の実力は遠く離れたカントーにも十二分に名前が知れ渡っている。鋼鎧の達人の異名を持つ、チャンピオンの中では一番攻撃型に徹しているチームを組んでいることも有名だ。

そんな実力者とミツルさんが知り合いってことは、強いはずだよな……。

「ここの入り口できっとロケット団が張っていると思う。幸い、僕のラルトスには人目にもポケモン達にもわかりにくい場所で待機していてもらったからね……。僕が先に出て囮になるから、ケンくんは早く家族の安全の確認をしてきて」

「はい……」

「ポケギアで連絡を取ってもらったら、さっき僕が渡したラルトスを出しといてね。【テレポート】で迎えに行くから」

「わかりました」

俺はベルトから保険用にニューラのボールを手中に収める。

「それじゃ、行ってくるね。少ししたら、入口から出ても問題ないと思うから」
「お願いします」
「じゃあ、また後でね」
「はいっ」

ミツルさんがサーナイトと共に駆けだす。

暗闇の中の若干奪われた視界で、俺の聴覚は逆に繊細になる。

聞こえてくるのは洞窟の外で繰り広げられる激声や大声、そして爆発音。ミツルさんが如何に派手に囮役をこなしているかが嫌って程にわかる……。

洞窟内部にいた複数のロケット団メンバーも外の様子をうかがう為に外へと出ていく。

俺のいる場所からは入り口がしっかりと見え、尚且つ後ろは壁で覆われており安全な上に最高の観察場だ。

よし、俺も行くか……！

膝腰の体勢から俺は立ち上がり、光の漏れてくる洞窟から抜け出す。

が、

「うがっっ！！」

突然肩を襲う衝撃……。俺は無防備だったため、勢い良く地面を

転げる。

上体を起こして、攻撃の来た方を睨みつける。

「まったくー、こんな調子じゃ襲撃されても仕方がないにょろ」

聞き慣れない語尾に果てしなく幼稚な活舌（かつぜつ）。

洞窟内で慣れてきた目が俺の敵をはっきりと捉える。

成人には達していない身長に長い裾のした黒服に身を包んだ少女。胸元には赤いRの文字に、頭の上にはニョロモをモチーフにした渦巻きがぐるぐるととぐろを巻いている帽子がちょこんと被せられている。

「お前はっ……？」

目の前の信じられない光景を整理したくて、ふとそんな言葉が出てしまう。

「あたしはロケット団幹部の一人〜、レイハにょー」

レイハ……。さっきの攻撃もこいつがやったのか？

「まったくー、皆軽率にょー。あれ程の爆音……いきなりあんな大きな音が聞こえてくるはずないにょー。見張りはたくさんいるにょろ〜、聞こえてくるならもっと最初は小さくにょー」

子供だと思って油断したら痛い目にあいそうだな。こいつ、切れる……。

「だから邪魔者は排除にょー。ニョロボン、【投げつける】～」
「ニョロ！！」

大きく振りかざされるニョロボンの剛腕。超高速で飛来してくる物体を俺はよけきれず、腕をかすめられる。ビュン！　という空気を裂く音と共に俺の右裾が裂かれる。

ニョロボンが握るはヌンチャク。それも棒と棒の間のチェーン部分が異様に長かった。

戦況は先手と不意を取られたために圧倒的に不利……。一計逃げるに如かず……！

「ニューラ、【冷凍ビーム】！」
「ニュラ！！」

丁度背後に洞窟の出口がある。

俺はニューラに俺とレイハの間に氷の壁を作りだし、ナナシの洞窟から抜け出す。

片腕で傷を抑えながら、俺は駆けだす。

足元を過ぎていくは気を失ったロケット団員達と彼らのポケモン。

中には重症でうめき声を上げている連中もいたが、そんなのに構っている暇などなかった。

「くっ、おい！　お前！！」

そしてなんとか無傷で過ごせた連中がケンを発見し、追いかけてくる。

「ニューラ、【霰(あられ)】！」

時間稼ぎになるならそれでいい。今は、一刻も早く家に戻る！

ナナシの洞窟付近からは一本の橋がかかっており、それを渡ればハナダシティへと行くことができる。

近々正式にナナシの洞窟がハナダシティの一部だと認められハナダの洞窟と改名されるらしいが、そのニュースがやっていたのも遠く感じてしまう。

入り組んだ路地街を駆け抜け、家への近道を走る。

さすがのロケット団でもここの地元でなければ知りつくすことは不可能なルート……俺はそれをいままでに信じられない速さで進んでいた。

これも、あのチイラの実の効果なのか……？

一軒の生け垣を越えて、見えてきたのは赤い屋根の家。俺の家だ。

ポケットから鍵を出しながら、俺はドアノブをガチャガチャと回して鍵穴に差し込む。

強く開け放った扉の中へ入り、大声で、

「ルカっ！」

しかし返事は無い……。

靴を脱ぎ捨てて俺は上階へと駆けあがる。

ルカの部屋のドアを開け放ち、そこに映るのは着物姿のルカとガーディにシャワーズ。

「ルカっ！　っつ、くそっ！　おい、大丈夫か？！」

ルカの横たわるベッドまで行き、衰弱しきったルカの顔をのぞく。

「お兄、ちゃ、ん？」

俺はルカを強く抱きしめてやる。弱弱しいルカの視線が俺には痛く、俺も自分が情けなくなってしまう。でも今は……

「悪かった……。今すぐ、この家を出るぞ。準備、できるか？」

「え？」

最後に更に少しだけ強くルカを抱く腕に力を込めてから、俺は続ける。

「俺は、あいつらに狙われてる……。リョウに、会っただろ？　悪い、今は説明している時間がない。これ、飲めるか？」

バッグからキワメさんにもらったドリンク剤をルカへと手渡す。

「これって……？」

「栄養ドリンクだ。チイラの実っていう珍しい木の実が少量使われてるって話だ。効くだろ？」
「チイラの、実？」
「あ、ああ」

チイラの実に反応したらしきルカが俺の腕を掴んでしがみついてくる。

「お兄ちゃん、これっ……」

ルカが更にせがんでくる時、俺のポケギアが鳴りだす。

「いいか、ルカ。時間がない。今はガーディとシャワーズにそのドリンクを飲ませて必要なものを鞄に詰めろ。いいな？」
「え、でもお兄ちゃん……」
「頼む。言うとおりにしてくれ」
「……うん、わかった」
「悪いな」

ルカに今必要最低限のことを教え、俺はポケギアを取り出す。

「どうだいケンくん？　ちょっとばかし戦況が悪くなってきたよ」
「間に合いそうですか？」
「うん。まだかかりそう？」
「わかりました、こっちも１０分で準備できるんで」
「わかった。それじゃ１０分後に」
「はい、お願いします」

案の定ミツルさんからの着信を受け、俺は自室へと戻る。

応急箱から包帯と傷薬を取り出して、さっき謎のロケット団幹部にやられた傷を治療する。

「ちっ……しみるな」

服を脱いで新しいのに着替えながら、傷口を包帯で巻いていく。

ぐっと包帯を結び、俺はバッグの中身から教材やら何やらを取り出して着替えや必要なものを詰め込んでいく。

この家にはもういれないだろうしな。それに、母さんは一体どこに行ったんだ？

「準備、できたか？」

「うん」

準備ができたであろうルカと共に俺の部屋へと入れる。

「腕の怪我は……？」

「あ、ああ、包帯で処置はしたから大丈夫だ。それより、もうすぐ迎えが来るぞ」

「え？」

俺の腕を心配をしてくれたのか……。自分の方がひどく弱ってたってのに、俺もまだまだ兄貴失格だな？

「ラルトス」

「らるぅー」

ボールからラルトスを取り出す。

「借りてるのさ。目印だ」

ルカの驚いたような顔に俺は補足するために言葉をかける。

「め、じるし……？」

「ああ。そろそろだ」

シュンっ――――。

目の前に現れるのは【テレポート】で転移してきたミツルさん。

俺とルカはその後ミツルさんに連れられてオーキド研究所へと行く。

「ってのが、俺の3日間だ……」

オーキド研究所の地下研究室で俺はルカに告げる。

「そ、そうだったんだ……」
「ああ。寂しい想いさせちまったな……悪い」
「ううん。大丈夫だよ、だってお兄ちゃんはちゃんと来てくれたし」
寂しげに、でも優しい笑みを俺に向けてくるルカ。
「ああ、そうだな。それより……母さんがどうなったか知らないか？」
「ううん。連絡、取れなかった」
「そうか……」
冷たい程の無機質さを誇るこの研究所では何を話したとしても良い方向には転じないんだろうか？
俺とルカが話をしているとミツルさんのポケギアが鳴る。
「ちょっとごめん」
俺達に断りを入れてミツルさんが通話を始める。通話というより、向こうから一方的に話が流れてきたんだろう……だんだんとミツルさんの顔色が悪くなっていくのを俺とルカは目撃してしまった。
「ケンくん、ルカちゃん……大変なことになった」
「「え？？」」
そしてその後、俺達は想像だにしなかったこのテロ事件の真相を聴くことになる。

第二章：語られる3日　Ⅳ：出逢いと再会　そして驚愕（後書き）

新キャラレイハちゃんにつきましては今後の活躍をご期待ください。

ルカ「ニョロモ少女？」

にょろ～

ルカ「にょろ～」

なんか使ったみたかったこういう特殊な語尾キャラ。

ルカ「まあ、結構敵側に多いよねー」

まあねー。さすがに主人公でこういうのは無理だしー。

ルカ「んにゅー」

……身内ネタはいいから；；

ルカ「んにゅー？」

第二章：語られる3日　「裏」：茶灰なる研究所（前書き）

裏はやっぱり書いてて楽しいなーw

ルカ「私ので・ば・ん～～～！！」

あったじゃん

ルカ「少なすぎ！！」

いやー、なっはっはw

ルカ「笑った！！」

さて、次回からは第三章ですねーw

ルカ「なんか、最近私おちょくられてる気がする」

第二章：語られる3日　「裏」：茶灰なる研究所

ナナシの洞窟（ハナダの洞窟）：

片手でぐるんぐるんと円を描きながら、ニョロボンはヌンチャクをもてあそぶ。

「にょろー。追うべきー？　でもボスからそんな任務出されてないし、いいにょー」

自分の目の前に出来た氷壁に一人言を漏らしながらレイハは続ける。

「それにしても、あの子結構できるにょ。出る杭は熱いうちに打てって言うにょー」

ケンのことを思い出しながら、レイハはニョロボンを一瞥。

「ぶっ壊していいにょ」

「ニョロ！！」

空気を小刻みに裂くヌンチャクが一気にニューラの作った壁を粉々にぶっ壊す。

「さてとー、ボスに報告するにょろ～」

ニョロボンをボールへとしまいながら、慌てて自分のことを心配にしにくる部下達に囲まれながらレイハは本部へと戻って行った。

「面白くなってきたにょー」

トキワシティとマサラタウンを結ぶ国道1番道路：

そこに一台の白いバンが轍を刻みながら疾走する。

「本部に戻ったら戻ったで、またこんな下っ端仕事かよっ」

乱暴に愚痴るは煙草の煙を窓の外へと吹かすガイ。

「まあまあ、お仕事なんだからしょうがないでしょ」

そしてガイをなだめるモモ。

「でも、どうして今更……？」

ジンは後部座席の方で今回の任務内容に疑問を抱いていた。

シルフカンパニー本社がロケット団の本部となっているが、そこ

ヘハナダデパートの襲撃任務を終えたジン達に言い渡されたのが以下のような任務であった。

【マサラタウンのオーキド研究所にて指定されたファイルの奪還、及び研究所の破壊遺棄】

「オーキドってよ……あの気持ちわりぃ実験して捕まったジジイのことか？」

白煙を口から放出しながらガイがサイドミラーを眺める。

「はい。本名はオーキド・ユキナリ、ポケモン研究の第一人者。T大学理学部卒業後、同大学院生物学教室研究員を経て、以前まではタマムシ大学、携帯獣学部教授。マサラタウンに自らの研究所を構えていた人物です」

自分のポケギアのデータブックからの情報をジンは読み上げる。

「へぇー、頭良いんだねー」

他人事のように鼻歌交じりにモモは流す。

「そうですね。オーキド博士のおかげで以前よりポケモン達の生態もわかってきましたし」

ジンは少し憧れの念を持ってオーキドのことを熱く語る。

「へっ……どーでもいいけどよ、データブックつったってたくさんあんだろ」

先端の灰を車窓の外へと落としながら、ガイは問いかける。
「そうだよねー。私そんなに機械詳しくないしー、ガイくんよろしくねー」
モモは慣れた手つきで車のハンドルを切りながら、砂利の混じった道沿いを運転していく。
「あ？　俺だってしんねぇよ。ジン、やれ」
脚を乱暴に組みながら、ガイはバックミラー越しにジンを睨む。
「ぼ、僕もそんなには……」
そうジンが漏らした瞬間、モモが勢いよくブレーキを踏む。
キキイーーー！
姿勢の悪かったガイが真っ先に反動に耐えきれず頭をフロントガラスにぶつける。
「ってーな！　なにすんだよ！」
おでこを抑えながらガイが煙草を噛み切らん勢いでモモに突っかかる。
「だったらこの任務無理じゃん」
一方ガイの激昂に物怖じせずにモモは概論を言ってのける。

「そ、そうですね……」

ジンも客観的にモモとガイを見つめながらそう結論付ける。

「だったらどうすってんだよ！？　このまま手ぶらでヤマブキまで戻るのかよ！？　いくらかかると思ってんだ！」

頭痛に加えて手ぶらで本部へ戻ることが減給しか意味しないとわかったガイは更に声を荒げる。

ヤマブキから車を飛ばして延々４時間。さすがに何もなかったでは帰れない程の時間と距離を走ってきた。

「ええー、じゃあ行く？」

面倒臭そうにモモが愚痴り、ジンも流れに流され、

「そうですね」

と弱弱しく補足する。

「てめぇジン、はっきりしろ！！」

「は、ひゃいっ！」

「あ、噛んだ」と恥ずかしげに内心思うも、全てお見通しのガイにとってそんな間違いも火に油を注ぐわけで――――

「とっとと行け！！」

「はーい」

「……」

粗ぶるガイの一連の激昂に諸ともせず、さすがというかなんというか……モモは今度は一気にアクセルを踏む。

興奮して狭い座席の上に立ちあがろうとしていたガイは、またもその反動に敵うことなく思いっきり体をシートへと叩きつけられる。

「おいモモ、てめぇ！」

「運転中はちゃんと席に座り、シートベルトを着用くださ〜い♪」

声色を使ってのアナウンス調のモモの反論に、ガイは遊ばれる。

しかしここでまた逆上すればモモの思うつぼであり、

「はっ！」

どっしりと座りなおしたガイは素直にシートベルトを荒々しくつけて、新しい煙草を取り出す。

『生きた心地しないなー、やっぱし……』

と、未だにこの二人に慣れきっていないジンは心の中でそう呟いてため息をつくのであった。

オーキド研究所：

マサラタウンの丘陵に建てられているオーキド研究所は町全体を見渡すのに最適な場所であり、見晴らしが優れていた。

２０年の時を経たこの町の巨悪の根源、憎悪の塊となった研究所ではあるが協会からのお達しもあり取り壊されず放置されている状態になっている。

なんでもオーキドがどんな研究を行っていたのか２０年の年月を経ても尚わからない状態のため、むやみに取り壊し作業を行えない……というのが幾数年前に新聞の記事に書かれていた。

マサラの住人は物珍しく、最近では誰も立ち寄らないオーキド研究所に向かっていく白いバンを見送りながら、また協会の人でも来たのか？　と憶測を立てていた。

モモは研究所の前にバンを停める。助手席から降りたガイは黄色いテープ（ＫＥＥＰ　ＯＵＴ）を強引に引き裂きながら玄関を開ける。

重厚そうな扉が埃をまきちらしながら、軋みの悲鳴を上げる。

「ええ、汚い……」

モモがご自慢の白桃色の長髪を気にしながら、研究所へと踏み入るのを躊躇う。

「後でシャワーでも浴びろ」

「まあ、それもそうだねー」

そういうところは無頓着なんだ……と、ジンはモモとガイの会話を聞き及びながら結論づける。

「それよりも、本当に放置されっぱなしだったんですね」

まだ昼間だというのに、研究室内は真っ暗。窓も板で閉ざされ、至るところが埃で蔓延(はびこ)っていた。

ジンはモモとガイの後をついていくように辺りを見渡す。

「ああ……みてぇだな。にしても、ひでぇ荒れようだな」

乱雑に散らばった書類は茶けきり、無数の機械類はすでに何の機能もしていなかった。

「さてと、さっさと終わらせちゃいましょ。さっき来る時に見かけた喫茶店に寄っていきたいし」

モモはカッカッと先を急いで研究所の奥にある扉を開ける。

研究所は玄関から入れば二階建て程のスペースが筒抜けになっており、そこで主にポケモン達の生態を研究する程の空間が確保されている。

しかしそれも今となっては見る影もない。
荒廃した研究所と未だに空気と混じりどんよりとまとわりつくような重い臭(にお)いが嗅覚を刺激し不快感を与える。
「あら？」
入った研究所で一つしかない扉のドアノブに手をかけたモモは、ふと首をかしげる。
「どうした？」
後からついてきたガイが散乱した紙きれを蹴飛ばしながらモモに問いかける。
「いやー、あのね、なんか話し声が聞こえてねー」
「……何？」
一瞬で獰猛な顔に変え、警戒するように眉をしかめる。
「僕達の他にも誰かが……？」
ジンも慎重そうに声を小さくする。
「同業者じゃねぇな……。ぬかるなよ」
「わかってるって」
「はいっ」
モモがゆっくりとドアを開き、地下へと続く長廊下へと目を凝ら

す。

「いるね」

確信するようなモモの声。

「ああ」

ガイもモモに寄り添い、聴覚を集中させる。

「本当だ……」

聞こえてくるのは微かではあるが、しっかりと聞こえる。

「ボール、出しとけよジン」

ガイがリザードの入ったボールを右手に収めながら、ジンに警戒する。

「行くよ」

モモが先陣をきり、3人は声のする地下通路を抜け、階段をゆっくりと降りて行った。

第二章：完

第二章：語られる3日　「裏」：茶灰なる研究所（後書き）

さて、この三人組は良いですよねー。

ルカ「なんで同意を求めるの？」

いやーだってー、好きw

ルカ「私とどっちの方が好き？」

そりゃー……。もちろん、ルカだよ！

ルカ「……」

なんですかそのじと目は……？

ルカ「ううん、なんでもー」

気になるじゃん！

ルカ「それじゃーね～」

あ、ちょ！

第三章：一人で……　Ｉ：唐突の別れ（前書き）

いやー、良いＴｈａｎｋｓＧｉｖｉｎｇでしたｗ

ルカ「いいなー」

ああ、まあルカはラジオ出れなかったからねー

ルカ「私も七面鳥食べたかった……」

まあ来年があるさ

ルカ「来年……それまでメディターやってるの？」

あ……うーん。どうだろうねｗ

ルカ「むぅ……」

それでは第三章、幕開けです！

第三章：一人で……　Ⅰ：唐突の別れ

オーキド研究所　地下：

私は真剣ながらも若干の動揺を浮かべているミツルさんの瞳に、嫌な悪寒を覚えてしまう。

きっとミツルさんの口から発せられる言葉が絶対に心地よいものではないってわかっちゃうから……。

「今回の一連のテロ事件の真相がわかったよ」

ごくりと私とお兄ちゃんが固唾をのみ込む音が聞こえる。

「ポケモンリーグ協会とロケット団がグルだった……っ」

語尾の最後を強く噛みしめるように、ミツルさんは悔しそうに私達に告げる。

うそっ……。

それが私の第一声だった。

「協会とロケット団がグルだったって、どういうことですか……？」

私と同じくらいに衝撃を受けているはずなのに、お兄ちゃんは更に核心へと迫っていく。

「カントーチャンピオンのシゲルを知っているね？」

カントーチャンピオンシゲル。バランスの取れたチームを扱うバトルを行うのであれば一番難攻不落といわれるカントー地方を任されている現チャンピオン。

「「はい」」

私達は同時に首を縦に振る。

「彼がオーキドの孫だってことも知ってるね？」

そういえば、そうだった。

聞いた話によるとだけど、カントーチャンピオンシゲルは幼少の頃にオーキドが逮捕されたことによりいじめを受けていた。それをバネに、皆に認められるようなトレーナーになってチャンピオンになったっていう話を聴いたことがある。

「オーキドが自分の孫とリンクを持ち、尚且つ昔にロケット団のボスであるサカキとも繋がっていたとしたら説明がつく」

改めてそう言われて、合点の行く点が次々と浮かび上がる。

ミツルさんの手がポケギアを強く握り、機械特有のぎしっという唸り声を上げる。

でも、そう言われて私の頭に最大の疑問が浮かび上がる。

「も、もしかして、ジムリーダー達もグルなんですか？！」

協会がグルなのであれば、チャンピオンの下につく四天王とジムリーダー達もグルってことになっちゃう。それがもし事実なら……

「そうだね。ジムリーダー達含め四天王達もグルになる……」

「そ、そんな……だったら、だったらカナはっ！！」

そう、そうであるならカナは自分のお姉ちゃんによってあんな姿になったってことになる……。

「落ちついてルカちゃん。それにジムリーダー全員が今回のことに加担しているわけじゃないんだ」

「え……？」

「どういうことですか？」

私は涙があふれようとする瞳をミツルに向ける。

「ダイゴさんはきっとこうなることを予測していたからだと思うんだけど、自分でそれぞれの地方に協力者を得ていたんだ」

私とお兄ちゃんが黙ってミツルさんが続けてくれるのを待つ。この事件の真相を。

「少し話が戻っちゃうけど、ロケット団は５つの地方で急襲を仕掛けた。でもね、落ちたのはまだ４つなんだ」

ミツルさんが右手を掲げ、広げた指の内４本を内側へと折る。

「つまり、まだ残っているのはホウエン地方？」

「ケンくんの言うとおり、まだダイゴさんが統括しているホウエン地方は落とされていない。でも、時間の問題みたいだね……四天王

達がロケット団側についちゃったから」
「「っ！！」」
更なる衝撃が私達に襲いかかる。
「ダイゴさんは最初からサカキの動向に目を向けていたんだ……。でも今回の電撃急襲は予期せぬことだった……。そしてサカキに集中していた分、自分のところの四天王が裏切ったことも見落としてしまった」
それは、チャンピオンの座を手にする実力者にも勝る工作活動をロケット団が有しているということである。
「さっき話したけど、僕が言った襲撃された場所の名前を覚えてる？」
ロケット団の攻撃を大々的に受けた街の名前を思い出していく。
「ハナダシティ、タマムシシティ、ヤマブキシティ、セキチクシティ、それに4の島……」
「そう……。その中でもシルフカンパニー社のあるヤマブキとセキチクは被害が最小限に抑えられていた。ヤマブキはジムだけだったし、セキチクなんて数軒の道場が破壊されただけだったからね」
どういうこと……？
私にはまったくもって見えてこなかった。
「ダイゴさんがカントーで協力を得た人物は5人。ハナダジムのカスミ、タマムシジムのエリカ、ヤマブキジムのナツメ、セキチクジ

ム次期リーダーのアンズ、そして４の島が故郷の四天王カンナ」

出される５人のカントー最強美女グループの名前を聞き、私はその中にカスミさんの名前が入っていたことに驚きもするけど安堵する。

それにまだまだわからないことがたくさんある。

「他にもまだいるけれど、話したいことはそんなことよりもっと重要なんだ」

そう。ただそれだけでは全ての説明は全部つかない。

「君達はジョウト地方のチャンピオンが誰か、知っている？」

ジョウトチャンピオン……。そういえば、最近新たに就任したとは聞いていたけど……

「ジョウトチャンピオン、シルバー……」

「その人も確か、サカキの……」

そう。リョウさんのほかにもサカキの息子はいた……。なんで、今のいままで忘れていたんだろう？　ううん、違う。最初からサカキには息子がいることがわかっていた……その人の名前がシルバーだったから、リョウさんは名字だけが一緒なだけだと思っていた。だって、あんな有名人の子供が私達と同じスクールに通ってるって思わなかったから。

「このテロ事件は何年も前から計画されていたってことですね……」

お兄ちゃんが重たい口調でそう告げる。

「うん、そういうことになるね……。２０年も昔から、この計画は進んでいた……」

「くっ……」

重たい空気が私達３人を包み込む。

「……あの」

それでも、このまま沈黙を続けるわけにはいかなかった。ううん、私がそれに耐えられない。

「これから、どうするんですか？」

これからのことを、私達は考えないといけないと思うから。

「……この国を取り戻すことは、難しいだろうね」

「そ、そんな」

ミツルさんが出した結論に、私が抱いていたわずかな望みは一蹴される。

「ああ。この国で一番強い人間がロケット団側についてしまった……。桁が違いすぎる……例え、対抗してくれる人達がいたとしても、戦況は簡単には覆れないだろうな」

お兄ちゃんも冷静に、でもつらそうに事実を述べる。

「でも、そしたら皆がっ！」

そう、ロケット団に支配されてしまってはどうなるかわからない。

「悔しいけど、それの反論も難しいんだ」

ミツルさんが更に唇を噛んで話を始める。

「協会がロケット団と協力しあい同盟を築いたなら、この国はそれ以上にパニックには陥らない。リーダーも今までと変わらず、新たにその力が大きくなるだけだからね……。ケンくんの言うとおり、反抗する人達もいるだろうけど、多勢に無勢なんだ」

「そ、そんな……」

だから、私が家に閉じこもっていた3日間は静かだったの？

「それにサカキはダイゴさんを悪人に仕立てるつもりらしい」

「え？」

ミツルさんは続ける。

「ロケット団がテロ集団というのは前々からニュースには上がっていた。でもサカキはその時のロケット団がダイゴさんによって使われていたというシナリオを書いたんだ。つまり、ダイゴさん達がテロ集団の主導者……その為に真のロケット団が協会とくっついて共闘しているという設定みたいだね」

「そうか……。だから、あの時のニュースも……。くそっ、打つ手なしなのかよ」

お兄ちゃんが何かを思い出して舌打ちするも、それ以上に私は絶望の淵へと落とされるような錯覚に陥る。ってことは皆が騙されて

いるってこと？

「でもね、だからといって何もしないじゃ済まされない。難しいからと言って諦める訳にはいかない……。例えこの国のリーダーが変わるからって彼らがしたことは正しくはない。ただ武力を行使しての恐慌は、いずれ廃るんだ。それはダイゴさんも言っていたことだしね」

ミツルさんがそう語るも、私には何がどうあれば良いのかわからなくなってきた。

「でも、でもだったらどうするんですか……？」

私はミツルさんに問いかける。

「僕はケンくんに手伝ってもらっていろいろと突破口を探っていきたいと思ってる」

「……はい」

お兄ちゃんが立ち上がり、私の方へと振り向く。

「え……？」

「悪いな、ルカ……。俺はあいつらに顔が割れてる。お前に危険な目に遭ってほしくない」

え？

「ここからは別行動にしよう」

「はい」

「ま、待ってよ二人とも……。ど、どういうこと？」

話の顛末が見えてくる……。また一人は嫌。

「ルカ、お前は母さんの実家に行っててくれ。お前はロケット団に狙われてもいないし、きっと大丈夫だ。それに国を取り返そうとすれば俺達が悪人扱いされるだろうしな」

「いや、嫌だよ！　もう一人は嫌！！」

私はお兄ちゃんにしがみつく。でも、お兄ちゃんは表情を曇らせたまま。

「ルカ、聞いてくれ。世界は変わった。あっという間にな、俺達の知る由もないところで……変わっちまったんだ。だからお前は待っていてくれ……俺達が帰ってくるのを、な？」

嫌だ嫌だ嫌だ……。

「やだっ！」

「いざという時に溜めてた金だ。これで数年なら過ごせる……」

「いらない！　いらないよ、お金なんて！！　私も連れてってよ！」

涙が出てくる。

「聞けっ！！　ルカっ！！」

今までに無いほどのお兄ちゃんの叫び声に私は怖くなって後退してしまう。

「わかってくれ。わかってくれよ」

お兄ちゃんの寂しそうな声に、私は反論できない。そしてこんなに弱気なお兄ちゃんを私は初めて見たから。ううん、それほどまでに私のことを気にかけてくれるってことがわかったから。

「僕達は早くに行かなきゃならない。ごめんね、でもルカちゃんなら一人で行けるよね？」

お兄ちゃんは私の手に黙って通帳を渡す。

「この子をルカちゃんに託すね」

そしてミツルさんが私に手渡してきたのは一つのモンスターボール。

「中にはラルトスが入っている。君の力になってくれると思う……」

「じゃあな、ルカ。絶対に迎えに行くからな」

お兄ちゃんはミツルさんの傍に付く。

「待って、お兄ちゃんっ！！」

でも、私の呼びかけ虚しくお兄ちゃんとミツルさんは【テレポート】を使って転移してしまう。

その時お兄ちゃんが見せた私を心配してくれる表情に、私の胸はただただ冷たく締め付けられる。

一人取り残される私。

また、大切な人が一人私の目の前から去ってしまった。

手元にあるのは1つのモンスターボールと1つのヤマブキ銀行の貯金通帳。

なんで、皆行っちゃうの？　私を置いていかないでよ……。

何もいない。誰もいない研究所の真ん中で私はまたも一人ぼっちになってしまった。

そんな私の目の前で、閉ざされていたはずの扉から3人の人が入ってくる。

でも溢れてきた涙のせいで視界は歪み、3人の様子はまったくもってわからなかった。

第三章：一人で……　Ｉ：唐突の別れ（後書き）

さて、ミツルとケンが行ってしまいましたね。

ルカ「また私一人ー？」

うん。

ルカ「えー」

大丈夫、新キャラ出るから！

ルカ「本当！？」

うん。恐らくきっとたぶんね。

ルカ「え……？」

それでは！

第三章：一人で……　ＩＩ：現れる３人（前書き）

なんか、タイトルを思い浮かぶ能力がだんだんと損なわれていくような気がしていく……。

ルカ「最初からセンスないだけじゃない？」

ぐさっ！！

ひ、ひどい！

ルカ「つーんだ」

まあ、しかしこんなことして拗ねているルカが一番かわいいのだけれどね。

ルカ「何言ってんの？！」

と、からかうのもまたおもしろいですｗ

ルカ「Ｋａｒｙｕがいじめる～～～」

ああ、あ、ごめん、ほら本編始まるから泣くなって！

ルカ「……それでは本編すた～とーーー！」

嘘泣きかよ！

第三章：一人で……　ＩＩ：現れる３人

オーキド研究所　地下：

「お前、なんでここにいる？」

前の方から聞こえてくるのは若い男の人の声。その声質に宿る言葉の荒々しさが私の脳内で人物像を創り上げる。

「ひっ、うっ……」

涙だけだと思っていたのに次にはしゃくり声も口から洩れてくる。

知らない人の前なのに、なぜか止まらない。

「ガイくん、この子泣いちゃってるじゃない。乱暴なこと言わないの、まだまだ子供なのに」

「けっ……」

私に膝を曲げて顔を向けてくるのは白桃色の髪を持った綺麗な女の人だった。

胸の中に私を抱き寄せて、彼女の体の温もりに私は最後に一筋の涙を流す。

「ジンくん、ハンカチ」

「は、はい！」

小走りに私に寄ってくるお兄ちゃんぐらいの人からハンカチを受

け取る私。

「ありがとぅございます……」

「う、ううん。どうぞ」

私はハンカチで涙を拭い、頭を上げて3人を直視する。それぞれが違った冬用の服装で、皆服の趣味もバラバラだけどそんなことを気にかけている場合じゃなかった。でも、それでも慌てることがなかったのはその人達から感じる温かさからだからもしれない。

「あら、ジンくんったら照れてるのー？」

「そんな訳ないです！　変なこと言わないでください、モモさん！」

ジンと呼ばれる人はミツルさんよりは男っぽいけど中立的な顔立ちをしていた。

対するモモと呼ばれる女性はスタイルも良くて首に巻いている桜桃色のマフラーがかわいらしくて、私よりも断然に背が高い。

「ふざけてねぇで、とっとと仕事終わらせっぞ」

そして二人の後ろの方で壁に背を預けている人は私のことを睨んだまま口だけを動かす。

「データブックのバックアップデータが必要なんだろ？」

「あ、はい、そうです」

「でもそんなのどこにあるの？」

ガイ、ジン、モモが私から一旦離れて辺りを探しはじめる。

「あ、あの、何を探してるんですか？」

私は立ちあがって、ハンカチを借りたジンさんの方へと歩みよる。

「あ、えっと、それは……」

「ここの研究所のデータよ」

私の問いかけにモモさんが答えて、慌ててガイさんが声を荒げる。

「おい、モモ！　何勝手にしゃべって――――」

「まあまあ、いいじゃない。それにルカちゃんにも手伝ってもらった方が早いでしょ」

ガイさんを宥(なだ)めながらモモがジンさんの方へと目配りをする。

そしてモモさんはガイさんのところへ行って二言か三言話しかける。その時のモモさんの無邪気な横顔とガイさんの面倒くさそうな目つきが視界をかすめる。

「あ、じゃあ……手伝ってくれる、えっと名前は――――？」

「ハヤミ　ルカです……」

「僕はヒイラギ　ジン。よろしくね、ルカちゃん」

「あ、はい」

私はジンさんが向けてくる手を握り返す。なんだか、ジンさんが頬を少し染めてるように見えたけど、私もなんだかジンさんの顔に見入ってしまう。

そうして私はジンさんやモモさんにガイさんと一緒に研究所のありとあらゆるコンピューターの起動を試みるも、さすがに老朽化が

激しくどれも音沙汰一つ出なかった。
「でも、２０年も前だったのに使われてたコンピューターが今の一般家庭用並だったなんてすごいですね」
私はジンさんの後ろにつきながら、そう疑問に思ったことを口にする。
「……言われてみれば、そうだね。それにスペックはどれも昔だと最先端のものだった……これだけあればあんな実験も行えたわけだよ」
「あの……」
「？」
私は立ち止まってジンさんを呼び止める。
「ジンさん達はどうしてここに？」
「……協会からの依頼でね。この研究所を破棄するから、もし研究所に残っていたデータがあったら持って帰るのとここを破壊しろって言われてね」
「ジンさんってもうお仕事なされてるんですね」
「え？　あ、うん、まあね……」
尊敬の念を込めて私は笑みを浮かべたんだけど、それに返してきたジンさんの言葉と表情は曇ってしまう。
「おい、ジン！」
すると後方の機材の後ろの方からガイさんの声が飛んでくる。

「はい！　どうしたんですかガイさん？」
「もう燃やしちまおうぜ」
「は、早くないですか……？」

まだ探しはじめてから１０分も経ってない。

「うーん、でも前に一度組織と協会が調べたって言ってるんだしもう何もないんじゃない？」

モモさんがふと漏らした組織という名がひっかかったけど、でもそれはジンさん達が雇われているところだと自分を納得させる。

「そう、かもしれないですね。それじゃ出ましょうか……ルカちゃんも行こう」
「あ、はいっ……！」
「ジンくんったらすっかり頼れる男の子になっちゃたわねー」
「知るか。ってか、どこまであいつと関わる気だ？　一般人が関わっていいようなもんじゃ――――」
「まあまあいいじゃない」

モモさんとガイさんを先頭に、私は自分の荷物を抱えながらジンさんについて外に出る。

やっぱり長年無人であったために所々の老朽化はひどかった。最初から地下へと転移してきたため、上の状態がわからなかってけど……すごいぼろいんだなー。

「さて……このデカブツを燃やしちまう前に聴きてぇことがある」

ガイさんが私のことを真正面から見据え、彼の獰猛な目線が私を

射抜く。

「なんでてめぇはあそこにいた」

深く抉るような目つきが私の心臓を締めあげる。

これにはジンさんもモモさんも一歩後退して、私が口を開くのをじっと見てる。

でたらめな嘘ではこの人達には信じてもらえない……。私はそう直感した。

「旅をしていて……。ここに来た時にロケット団のニュースを聞いちゃって、知ってる人もいないし怖くなって、ここで隠れてました」

それが、私が今精一杯に考えられた嘘だった。

ガイさんは眉一つ動かさずに私をただ見つめる。

「この町に来たのはいつだ？」

「今日です……」

「なぜここを選んだ？」

「人が来なさそうだったから……」

「お前、地下で誰かと喋ってたよな？」

ガイさんの問いかけに、私は必死で動じぬようにした。

ここで動揺しちゃえば、もっと疑われちゃう。ジンさん達は協会の仕事でって言っていた。それは、もし変なことをしてたりなんかしてたら通報されちゃうかもしれない……。だから、

「喋ってません」
「あ……？」
「喋っていません……」
「てめぇ、何ふざけて―――」
「はいはい、いいじゃないのガイくん。ほらジンくん」
「あ、はいっ！　ルカちゃん、ごめんね」
「い、いえ……」

モモさんがガイさんの首襟を引っ張って、私の傍にジンさんが駆け寄る。

「おい、待ちやがれ！　ぜってぇ今のは俺の方が正しいだろが！」
「あんな小さい娘に対してキレるなんてガイくんは大人じゃないんだから……はぁ」
「おい、モモ！　俺をそんな顔で見んじゃねぇ！！　てか、放せ！！」

ずるずるとモモさんに連れ去られながらガイさんが怒鳴り散らす。後ろ向きに引っ張られながら、ガイさんはあたふたとモモさんの腕を追っ払おうとする。

「あの、ガイさん！　まだ仕事終わってないですよ！」
「あ、そうだった……」
「……ちっ、調子狂う。って！？」
「あ……」

どこにそんな腕力があるかわからないけど、モモさんが引っ張っていたガイさんのパーカーを放す。するとバランスの取れてなかったガイさんは地面へと尻餅をつく。

「ってぇな、てめぇ！」
「怒ってないで早くしなさいよ」
「てめぇ、モモ……。ちっ、リザードやるぞ」

髪をガシガシと掻きながら、ズボンの泥を落とすと共にリザードの入ったボールを地面へと軽く投げつけるガイさん。

「リザっ！」
「ほら、木炭だ」
「ザァー」

リザードは放られた木炭を右手でパシッと受け取り口に含む。

「離れてろよお前ら、リザード【火炎放射】」

ジンさんと一緒に数歩、後退（あとずさ）ってガイさんのリザードを見つめる。

ガイさんのリザードの体つきを私は観察する。

普通のリザードよりも筋肉が発達していて特に腕力が強そう……。性格は腕白か図太いかな……？　攻撃系よりも我慢強い感じがする……。

おかしいな、いろいろあったのにやっぱりポケモンを見ると細かく観察しちゃう。

リザードが胸一杯に空気を吸い込み、木炭をじゃりっと噛む音の後に凄まじい火力の業火が口から迸る。

「おい、ジンも手伝え」
「あ、はい！」
ガイさんの命令にジンさんは即座に答えてベルトからフシギソウを出す。
ジンさんのフシギソウ……。おっとりとしていて、でも背中に背負う葉っぱは青々としていて蕾は綺麗に膨れている。フシギソウの特徴ともいえる体の深緑の斑点も瑞々しい。
ジンさんは地面に屈んでフシギソウの頭を優しく撫でながら、指示を出す。
「フシギソウ、【日本晴れ】」
「ふし～」
背中の葉を精一杯に広げ、それに呼応するように私達のいる場所の日光が増える。冬の寒い天候にフシギソウの【日本晴れ】はぽかぽかと体があたたくなってくる。
さすがに老朽化が進んでいただけあって、研究所は勢い良く炎上する。やっぱり冬なだけあって辺りは乾燥してるんだろうな、パチパチじゃなくてバチバチという豪快な音が心地よく聞こえてくる。
「す、すごいっ……」
「あらら～、結構強いわね……。カメール、一応スタンバイしといてね」
「カメ！」
モモさんが出すのはカメール。

キュウコンが千年生きるといわれれば、カメールは万年を生きるとされている。そんなモモさんのカメールは特徴である尻尾がふわふわとしていて真っ白い。まだ幼さが残っているも毛艶がとってもしっとりとしてきている。生きれば生きる程に尻尾の色合いが深みのある色になるといわれているが、それまでに至るにはまだまだ時間がかかりそう……。でも、なんだかクールな感じがするな。

モモさんの首に巻く白桃色のマフラーが炎上する研究所の茜色を吸収する。

私もジンさんも近くには寄っていないけど、熱気がどんどんと伝わってくる。

あ、フシギソウにはちょっと熱すぎるのかな。苦手そうな顔して後ろに下がってる。

そうしてただ黙々と炎上し、倒壊する研究所を見ながら私は蒼穹（そうきゅう）を見上げる。

冬のしんとした青空に舞い上がっていく火の粉が紅の満点の星空を見るようにきらきらとして消えては、また舞い上がってくる。

漏れる吐息が白い軌跡を残しながら、私はこの3人との出会いに後々感謝して後悔することをまだ知るよしもなかった。

第三章：一人で……　II：現れる3人（後書き）

つまり、皆様が予想していたのとは違った結果に終わったと思っております。

ルカ「優しかった～」

でしょーw

ルカ「ガイさん以外」

ww

ルカ「でも、ジンさんすごいなー。お兄ちゃんと同い年くらいでもうお仕事してるんだよー」

そうだね……。

ルカ「あれ？」

まあ、それでは次回更新は？

ルカ「早ければ明後日で遅くても日曜日だね」

はい！　それでは？

ルカ「じゃーね～」

では！

第三章：一人で……　ＩＩＩ：勝負　ルカ対ガイ（前書き）

えっと、ぎりぎりセーフ？

ルカ「まえの後書き通り遅くても日曜日だったからねー」

そうだねｗ

今日はモールへ行っていろいろと冬服を買ったりしてきましたｗ

ルカ「私も～」

いやー、買い物は楽しいからいいねｗ

ルカ「ねーｗ」

というわけで、今回は久々にバトルですｗ

ルカ「私頑張る！」

第三章：一人で……　ＩＩＩ：勝負　ルカ対ガイ

オーキド研究所跡：

炎上、そして倒壊に至るまで１時間程度で済んだオーキド研究所は巨大な炭の山となって跡形をなくした。

「後は、ここの警察と自治体に任せときゃいいだろ」

ガイさんがリザードをボールに回収して、懐のポケットから煙草を取り出す。

「そうねー。カメール、一応水をかけといて」

「かめぇー」

モモさんがマフラーを上げながら、カメールに指示を送る。結構な量の水がオーキド研究所の残骸にかかり、ところどころで白い煙が上がる。

「ルカちゃんは、これからどうするの？」

フシギソウの頭を撫でながら、ジンさんが私の方を見上げて尋ねてくる。

「私ですか……？」

まだ、考えていなかった。

ハナダを離れる時、お兄ちゃんと一緒に逃げるんだって思ってた

……。それにお兄ちゃんとミツルさんが残した言葉を思い返せば、もうハナダには戻れない。

お兄ちゃんはお父さんの実家に行けって言った。

お父さん……私は自分のお父さんに会ったことがない。でも、実家のおじいちゃんおばあちゃんの家には何度も行ったことがある。お父さんの写真とかは全部無くて、お母さんも自由奔放な人だったのよね、としか教えてくれなかった。

お父さんの実家……それは、ここマサラタウン。そう、今いる町……。

でも、私にはやらなきゃいけないことがあるんだ。

「私はホウエン地方に行きます」

ジンさんを見つめ返して、私はそう告げる。

「え……ホウエン？　でも、今すっごく治安が悪いって聞くよ？」

ジンさんが気遣ってくれるのに感謝しながらも、私はまたも嘘をつく———。

「ホウエンのジムに挑みたいんです」

私の身なりは一応、トレーナーとしては最低限道具も服装も備わっている。それに私がトレーナーじゃないっていうことを3人は知らない。

「へぇ……お前、トレーナーなのか」

咄嗟に声のした方へ振り向くと、ガイさんが興味深そうな笑みで私を見ている。

「……はい」

ガイさんが煙草を一旦手で口から離す。

「バッジは今何個だ？」

「ぜ、０個です」

「そうか……ホウエンで鍛えるってか」

「はい」

一歩一歩と私の方へと近づいてくるガイさん。私はまた何か質疑応答させられるのかと思って、一歩後ずさる。

「俺と、勝負しろ」

至近距離で私が少しガイさんを見上げて、ガイさんが私を見下ろすような位置でそう言われる。

「え？」

そして突然のことに私の口からは情けない声が出ちゃう……。

「またー？　ごめんねルカちゃん。ガイくんってルカちゃんみたいな年の子がトレーナーだってわかるとすぐバトルしたくなるのよ」

モモさんが若干呆れつつも私にそう補足してくれる。

「ガイくんって見栄っ張りだからねー。子供いじめて、バトルに勝ってストレス発散してるの……本当に子供〜」
「うっせぇ、黙ってろモモ」

芯の通った一喝するまでもなく相手を怖気つかせる冷たい声に、私の肩はびくっと跳ね上がる。

「どうなんだ？　トレーナーならバトルに勝ってなんぼだろ？」

ガイさんは私が嘘ついているのに気付いた……？　もし何人もトレーナーを見てきた人なら、私がトレーナーじゃないってわかるかもしれない……。

「その前に1つ、良いですか？」

私は震えあがりそうな自分の体を必死に足に力を入れて抑えながら、ガイさんを真正面から見上げる。

「あ？」

口元が歪み、続きを催促するガイさんの返事。

「ガイさん達はこの後、どこかへ行きますか？」

仕事で来たってジンさんは言っていた。だったら、来た手段もあるはず……。

「は？」

でもガイさんは私を不思議な目で見る。

「私達はヤマブキからあの白いバンで来たわよ、ルカちゃん」

モモさんは私の意図がわかったのか、最後にウィンクをして返事をしてくれる。

「だったら……」

口を紡いで、もう一度息を吸い込む。図々しいかもしれないけど、

「ガイさんに私が勝ったら、私を一緒にヤマブキまで乗せていってもらえませんか？」

私は一刻も早くホウエンに行かなきゃ駄目だから。

「……はっ。バッジ0個の奴が生意気な口きくじゃねぇか」

笑い声を上げながら、ガイさんは私を睨み返す。

「いいぜ、お前がもし俺に勝ったらどこへでも送り届けてやるよっ！」

自分が仕掛けた余興に更に加熱していくガイさん……なんか敵の悪役みたいだな……。

そんなことをふと思いながらも、私は胸を張って言い返す。

「見くびらないでください」

ウエストポーチからボールを取り出してガイさんに向ける。
「良い度胸じゃねぇか。おい、ジン」
指の間で煙を出し続けていた煙草を口の間に戻しながら、ガイさんがジンさんを呼ぶ。
「はい」
「審判やれ」
「……わかりました。ルカちゃん、頑張ってね」
ジンさんは私の方へ心配げな瞳を向けて、応援の言葉をかけてくれる。
「はい！」
私はそれが嬉しくて、熱が入る。
「あらら、面白くなってきた～♪」
対するモモさんは傍観者として、ジンさんの後についていく。
「ここは研究所だったんだ、フィールドの一つや二つはあんだろ。行くぞ」
「はいっ」
そして私はガイさんの後ろについていきながら、バトルフィールドへと向かう。

オーキド研究所　裏　バトルフィールド：

もともとはちゃんと整備されていたバトルフィールドだったのかもしれない……。

授業で習ったけど、バトルフィールドの基本的な定義は自然の一部分。だから、これもこれで一番まともなフィールドなのかもしれない。

鬱蒼と生い茂る雑草に、ひび割れや雨でぬかるみ禿げた大地、白線の掠れ……これも２０年の時が生み出した産物なのかな？

オーキド研究所が所有していた放逐用の山の一歩手前にあるバトルフィールド……トレーナーが入るゾーン（トレーナーがポケモンに指示を出すことのできる既定の空間）が辛くもここがフィールドだと訴えかけてくる。

「ガイさん、本当にやるんですか？」

呆れつつもジンさんがガイさんに尋ねる。

「ああ。バトル売って買われたんだ、やるしかねぇ」
肩を落としながら、ため息をつくジンさんに
「ジンさん、ごめんなさい。でも、お願いします」
私はジンさんを見ずにガイさんを見据える。
すでにガイさんのいるゾーンとは正反対側へと辿り着いて、私は肩から下げていた鞄を下しながら腰あたりのポーチへと手を回す。
「やる気満々じゃねぇか。腕が鳴る」
両手を合わせ、ポキッポキと拳を鳴らせてガイさんが少しだけ腰を落とす。
「それではこれよりバトルを行います。ハナブキ　ガイ対ハヤミルカ……1対1のワンオンワン、バトルスタート！」
ジンさんが両手を上げて素早く振り下ろす。それが公式戦のスタートの合図……トレーナーが互いにモンスターを出す！
「お願い、シャワーズ」
「行ってこいリザード」
なんとしてでもガイさんに勝って、ホウエンに早く行く！
「なるほど……タイプの相性で攻めてくる、マニュアル通りってやつか？」

挑発するように、ガイさんがカナのシャワーズを視界にとらえ、対するリザードは欠伸をかく。

余裕ってことかな……？　でも、負けないんだからっ。それに、マニュアルじゃないもん……カナのシャワーズと一緒に勝つんだ。

「シャワーズ、頑張ろうね」

「フィイ！！」

シャワーズも私の意思をくみ取ってくれたみたいで、活きこんだ返事を返してくれる。

「実力の差ってのを見せてやるよ」

「りざぁ」

ガイさんが右手を目の前に掲げ、リザードは堂々とした態度でシャワーズを睨む。

「かかってきな」

言ったな～。よしっ！

「シャワーズ、フィールドを凍らすよ！　【冷凍ビーム】！」

「ふぃいいい！！」

口中から放たれる氷結のビームはフィールドの草や花、大地を凍らせて薄い氷の層を作りだす。さすがカナのシャワーズ……技を出す時もちゃんと体の動作を大胆で鮮やかにジャンプを交えてフィールド全体を満遍なく凍らせていく。

リザードは軽くジャンプしてシャワーズの攻撃を回避するも、着地する時に少しだけ氷で滑ってバランスを崩してしまう。

「フィールドで優位性を補うか……でもな、関係ねぇ！　リザード、【メタルクロー】」

「りざ！」

両手が鋼銀色に光り、四足でシャワーズへと迫るリザード。両手の【メタルクロー】が氷の層を貫いて、リザードは滑ることなく……更には掴めるものができているため更なる加速を生み出す。

「シャワーズ、迎えうって！　【水鉄砲】！」

「ふぃ！」

リザードの猛突を阻止しようとするけど、リザードは【メタルクロー】で放たれる水流を弾いちゃう。シャワーズの描く水流の放物線は例えリザードによって遮断されても、弾かれる水の粒までもがフィールドの氷に反射されてきらきらと舞う。

「うそっ！？」

でも今までに見たことのない攻撃に、私は声をあげてしまう。

「攻撃は最大の防御ってな！」

ガイさんのリザードがそのまま猛進してシャワーズを目指す。

「シャワーズ！」

未だに水を吐き続けるシャワーズ……。でも今ここでシャワーズが攻撃をやめればその隙にリザードが攻めてくる。

リザードが弾く水分は辺りへと散らばり、氷一面となったフィールドを濡らしていく。

さっきガイさんのリザードを見た時に、氷程度ではガイさんのリザードは例え攻撃をくわえられても後退はしないことはわかっていた……。強靭な足腰で、しっかりと足の爪を氷へと食いこませている。

リザードがフィールドの半分以上を渡りきって来る。

このままだと力負けしちゃう……。

「最初の威勢はどうした？　つまんねぇな、つまんねぇよ……。決めてやれリザード、【切り裂く】！」

【水鉄砲】の右側へと回り込み、そのまま駆けだして右手を構えるリザード。シャワーズは必死にリザードに【水鉄砲】を向けようとするけどぎりぎりのところでかわされ続ける。

「決まりだ！」

ガイさんの虚勢が耳に届く。

でも、私だって負けられない！

「シャワーズ、【溶ける】！」

「ふぃ！」

リザードの【切り裂く】が空を掠める。

シャワーズのいた空間からシャワーズが消えて、リザードはきょとんと辺りをしきりに見回す。

「ちっ」

ガイさんの舌打ちが聞こえてくるけど、私は次の手を必死で考える。

フィールドの外ではジンさんが両拳を握って戦況を見守っている姿と、モモさんが片手で口元を覆いながらほくそ笑んでいるような感じが視界の端に垣間見える。

「ハヤミ　ルカ、ね……」

「何か言いましたかモモさん？」

「ううん。なんでもなーい……それにしてもガイくんの攻撃を避けるなんてさすがね」

「……そうですね」

モモさんとジンさんの会話は耳には流れ込んでくることはなかったけど、戦況は私が一手先。このまま、奇襲をかけるんだから！

第三章：一人で……　ＩＩＩ：勝負　ルカ対ガイ（後書き）

まあ、次まで持ち越しですｗ

ルカ「カナのシャワーズは良く育てられてるんだから！」

まあ、でもコンテストに出るために育てられてきたシャワーズ。一体どんな戦法を見せてくれるのか楽しみですねｗ

ルカ「なんでＫａｒｙｕそんな風に言うの？」

いやー、俺自身楽しみだからｗ

ルカ「Ｋａｒｙｕの執筆スタイルって絶対おかしいと思う」

へ？

ルカ「じゃーね～」

あ、ちょっと！

第三章：一人で……　ＩＶ：魅せる戦い（前書き）

うーん……？

ルカ「ん？」

ちょっと説明がましくなっちゃったかなｗ

ルカ「それがＫａｒｙｕメディタークオリティ～」

そういうこと～ｗ

なので、どうぞｗ

ルカ「バトルだー」

第三章：一人で……　ＩＶ：魅せる戦い

バトルフィールド

「リザード、【ビルドアップ】！」

「リザァ！！」

手足に力を込めて雄叫びをあげるリザード。

「おもしれぇ戦い方すんじゃねぇか」

私に向けられた言葉に称賛の意が込められている。でもガイさんの余裕を持った声が私を逆に焦らせる。

筋肉強化系の補助技はドーパミンを多量に脳内へと送るために活性化させる。その分、疲労も重なるけど短期戦型のポケモン達に備わっているスタミナの前では長期戦は期待できない。

それに、【ビルドアップ】……。確か先生が言っていた———。

『いいか、筋肉強化系の補助技……【ビルドアップ】、【ヨガのポーズ】、【遠吠え】などは別に自分の筋肉を増やすわけじゃない。俺達人間もそうだが、普段の生活において生物はどんなに踏ん張っても筋肉を１００パーセント使いきれはしないんだ。それは脳が筋肉を１００パーセント使えばその後の回復も大変だし、何より疲労が溜まるってのをわかって制御しているからだ』

筋肉関連の授業で、生物の体の仕組みをしていた時の受講内容……。

『でもな、聞いたことあるだろ？　火事場の馬鹿力。その時俺達の脳内は凄い興奮状態になり、判断力を損なわないために血液もだが神経伝達物質が過剰に分泌される。もっとも多いのはアドレナリンだ』

アドレナリン。一般には外敵から自分を守るために出るホルモン……。幽霊屋敷に行ったり、怪奇現象を体験する時に出るびくびくしたりする反応のことも含むけどね。闘争か逃走……その判断を迫らせる神経伝達物質アドレナリン。

『人間もアスリートは良く大声を出す。それも一種の闘争時における、自分の力を引き出すための動作だ。アドレナリンを脳内に分泌させ、ドーパミンをも働かせて短期的な筋肉増強と興奮状態を用いる戦法……それが攻撃系補助技の一般的解釈だ。主な効果として、筋力増強、代謝能力の増加、感覚が鋭敏になり――――』

すごいパワーアップを促してくれる技……でも何事にも弱点はあるんだよね。

アドレナリンが引き起こす「闘争か逃走」反応では体内の内臓が上手く働かなくなる。つまりは余分な動作をしなくなる……だから怖い時には吐き気とかお腹が気持ち悪くなったりするし、下痢もしやすい。

なら！

「シャワーズ、【水遊び】！」

「ふぃいっ！」

リザードの左斜め後ろの水たまりから飛び出すシャワーズは垂直に飛び上がって更に水をまきちらす。

「リザード、狙え！　【メタルクロー】！」

「リザァ！！」

リザードが方向転換と共にシャワーズを追撃する。その素早さはさっきより遥かに上をいくんだけど、地面が凍っているために若干のラグが生まれる。

そしてその隙にちゃぽんってシャワーズは【溶ける】を再度利用して敵の攻撃を免れる。

それにしても、本当に優雅だなぁ……カナのシャワーズ。彼女の一挙一動に繊細された美しさとしなやかさが垣間見えちゃう。

「ちっ！　リザード、【火炎放射】で氷諸共蒸発させろ」

「りざ！」

ガイさんのリザードが肺一杯に空気を取り込もうとする、でもっ――。

「がぁう、がっ、ざっ！！」

リザードは咳込んでしまう。

「どうした！？」

今までになかったんだろうな、こんなこと……。少しだけ焦るガイさんを一直線上に直視する。

「あらら、さっきの【水遊び】かもね」
「そうですね……【水遊び】は炎タイプ技の威力を弱めてくれる。でもその理屈は大量の水蒸気によって炎タイプポケモンが上手に酸素を取り込めないようにする為……」

モモさんとジンさんが状況の解釈を互いに交換しあってくるのが聞こえてくる。

バトルフィールドは大体トレーナー間の距離があるからトレーナーが指示した声は聞こえてはこない。だからガイさんはさっきシャワーズが出した技が【水遊び】だとはわからなかったはず。

トレーナーは特に実戦と経験あるのみだ、っていう格言が存在するのはたくさんのポケモン達の攻撃や癖を見極められることが必要とされているからかもしれないね……。そういう私も実践と経験を積まなきゃ駄目なんだけどっ！

私は気付かないうちにバトルに没頭しはじめていた。他人とのバトル……それは極限の緊張感を共に闘えるパートナーがいるからかもしれない。

「シャワーズ、行くよ！　【体当たり】！」

リザードが隙を見せている間に指示を出す。

「ふぃ！」

真正面から突撃していくシャワーズ、これで少しはダメージをっ！

「リザード、受け止めろ」

咳をかみ殺しながら、リザードがシャワーズをとらえる。

「ふぃ？！」

「【地球投げ】！」

「りざあ！」

リザードがシャワーズを抱えたまま大きく跳躍、そして背負い投げをするような要領でシャワーズを放る。

「溶けて！」

シャワーズの体が水の分子となって、またもフィールドの一部と同化しダメージを回避する。

「ひゅーっ、やるなぁ」

でもここで気を緩めちゃいけないことぐらいわかってる。ガイさんのリザードを倒すには、裏の裏の裏を読まなきゃ駄目なんだから。

「シャワーズ【雨乞い】から【水鉄砲】！　【電光石火】！」

少し気合いを入れて指示を出して、ガイさんも聞きとっちゃったのか、にやりと口元で笑みをつくる。

だけど今は特攻あるのみ！

「リザード、【煙幕】！　【カウンター】！」

やっぱり辺りが湿っているから、そんなには【煙幕】は出てこないけど……それはシャワーズとリザードの姿を確認できなくさせるには十分な量だった。

シャワーズの【水鉄砲】は黒い【煙幕】の中へと吸い込まれていき、シャワーズはリザードのいるであろう場所めがけて猛突していく。

お願い、決めてっ！

「リザァ！！」

「ふぃ～～～っ！！」

でも聞こえてくるのは痛々しそうなシャワーズの鳴き声。でも私は覚えている、カナとの練習試合で見せられた一回だけの逆転劇を……。

カナは実際のバトルよりも戦術を組み立てるのが本当に上手だったから、いつも実践練習は積んでなかったけど理論的にいえば相当なドッキリ攻撃を用意していた。これも、その一つ！

【煙幕】が晴れて、視界も戻った時、リザードの右拳がシャワーズの腹部に減り込んでシャワーズの目は見開いて苦しそうに口を開けて項垂れている。

でも、堪えた。

だから――――。

今しかない！

「一発でノックダウンか。ま、準備運動程度の慣らしにはなったぜ」

リザードもシャワーズを払いのけ、シャワーズは慣性の法則に従って水浸しとなったフィールドに倒れ込む。

「決まりですね……。勝者は―――」

ジンさんもちょっと憐れみの表情は浮かべながら、ガイさん側のサイドに向けて右手を上げかける。

「シャワーズ、あの時の技を見せてあげて！！」

「……ふぃっ！！」

カナが私とガーディの時に用いた戦法……それの応用版が今ガイさんに取っていた戦い方。

でも、ここからはカナのシャワーズの独壇場。シャワーズの曲芸に、あの時の私とガーディを魅了して且つ敗北に追いやられたコンビネーション技……。

シャワーズが空中に向けて鳴き声を上げる。それは技の【鳴き声】じゃなくて、とっても澄み切った鳴き声……。

「ざぁ？」

リザードがガイさんのゾーンへと戻っていく途中でシャワーズの立ち上がった姿へと振り返る。

「スタミナあんな」

ガイさんはまたも面白そうに笑みを深める。

「ふぃぃぃぃぃっ♪」

一体何をやろうとしているのかわからなくさせる状況。でも、これは全部計算に入れてるんだから。

「リザ？！」

突如上がるリザードの驚きの声。

まあだってそりゃフィールド上の水が自分の足に絡まり始めたら驚くよね。

「なっ！？」

ガイさんも状況を理解したのか、同じような声を上げる。

「初めて見るわね」

「そう、ですね……」

モモさんとジンさんも同じリアクションを取るのがわかる。

「ふぃぃぃぃ♪」

自由に水を扱えるポケモン、シャワーズ。体の構成が水の分子と似ているシャワーズは水を操れるという能力をも備えている。そのシャワーズの特性を利用した、魅せる技。

その為にフィールドの下準備も万全にしたんだから。

歌声の旋律に合わせて、水も動いてくれてるのかな……。？　そんな感じがする……前はびっくりしすぎて気付かなかったけど。

シャワーズの歌声に合わせて、蛇のように水がリザードの四肢へと絡んで凍らせる。

「リザ！！」

「リザード、ぶっ壊せ！」

ごめんね、でも慌てているようなら抜け出せないんだから！

「シャワーズ！」

「ふぃっ！」

そしてそのままシャワーズはリザードの腹部めがけて飛び込む。

「ザあっ！！」

【ビルドアップ】をした時の体調の変化……付け入るところはそこしかなかった。

だから内臓への強烈な一撃で相当なダメージになるはず。

シャワーズの【体当たり】がリザードを氷の枷ごと吹っ飛ばす。

「やった！」

瞬間診察……一点集中攻撃……。ガーディの方が精度も上がる

けど、でもガーディと戦ってきたシャワーズも要領はわかってくれたはず。

のけぞりかえるリザードが後ろへと倒れ込んでいくのを見ながらそんな感じに思う。

「なるほどな……。才能はあるみてぇだな」

でもガイさんは別に動じることもなく、リザードに一言喝を入れるように叫び出す。

「おい、リザード！　決めてやれ！！」

一瞬だった。

「え？」

そんな言葉が言い終える前にシャワーズは吹っ飛ばされてＫＯされちゃう。

あんなに下準備をしても、圧倒的なパワーの前には壊されちゃう。そんな感じがした。一発のアッパーされる【メタルクロー】がシャワーズの胸部をとらえていた。

倒れこむ際に足を氷に食い込ませてからの間合いを詰める動作は、シャワーズの扱う水のようにしなやかで迅速だった。

「シャワーズ！！」

異常な程の瞬発力……。ポケモンの体を見れば、どの程度の身体

能力を使えるかわかるはずなのに……見失っていた？

ううん、違う……。これほどまでに強いポケモンと戦ったことがなかったから――――。

「おい、ジン」

きっと睨むガイさんにすぐさま反応してコールがなされる。

「勝者、カブチ　ガイ！」

シャワーズを膝上に抱きあげながら、私はそっと頬を撫でて「ありがとう」と声をかける。

「負けちゃいました……」

必死に笑みをつくろうとするけど、やっぱりぎこちなくなっちゃう。

「ううん、大丈夫よルカちゃん。ほら、早く４人でクチバまで行こう」

モモさんは私に優しげに微笑みかけてくれて、そう言ってくれた。

「え？　で、でも――――」

「ガイくん相手にあそこまでやる新人ちゃんなんて私見たことなかったからね～。きっとガイくんがルカちゃんみたいな年の時戦ってたらガイくん絶対負けてるし～」

「うっせぇぞモモ！」

「あー、ほらほらガイくんが来ちゃう前に車に乗っちゃお。行くよ

ジンくーん」
「あ、はい！」
若干速足に遠のいていくモモさんを私は駆け足で背中を追いかけながらモモさんに追いつく。
「あ、あの、ありがとうございます！」
モモさんを斜め上に見上げながら、私はお礼を言う。
「ううん。楽しくなってきたしね」
「え？」
「ううん、なんでもな～い」
彼女が最後に残した言葉が、その時だけは妙に頭の中で反芻した。

第三章：一人で……　ＩＶ：魅せる戦い（後書き）

さて、いつも本編を書いている時に前書きや後書きで書こうと思っていることはあるのにいざ書くときになると忘れてしまう。

ルカ「アルツハイマーの可能性が―――」

いやいや、俺まだ若いですし。

ルカ「そう言う人は大抵が年よりなのですよ。ふぉふぉふぉ」

ルカ、キャラを変えないでくれ；；；

ルカ「……私も無茶あったかも；；」

なんかｇｄｇｄ。でもそれもまた？

ルカ「メディタークオリティ～」

ではｗ

第三章：一人で……　「裏」：悪の白と黒（前書き）

皆さま遅れましたがメディター更新ですw

ルカ「待ってたよー」

いやーごめんごめんセナの誕生日もあったし、結構大変でしたw

ルカ「それならいいけど」

セナもルカに頑張ってって言ってたよ。

ルカ「セナ先輩、ありがとうございますっ！」

さて、「裏」ですがやっぱり書き方がポケ神の時と一緒なんで楽ですねw

ルカ「えええー」

まあまあw

今回は悪側ですが、今の設定としたら悪では無く正なんですよね。

しかしそんな彼らにも思うところはある。そんなエピソードです。

ルカ「いつもよりちょっと短いけどね」

うん；w

それでは？

ルカ「どうぞ！」

第三章：一人で……　「裏」：悪の白と黒

マサラタウン：

ルカ、ジン、ガイ、モモの四人が白いバンの中へと乗り込む。

「それじゃルカちゃん、クチバへレッツゴーでいいんだよね？」

モモが運転席越しにルカに尋ねる。

「ほ、本当に良いんですか……？」

ルカが恐る恐る後部座席の方でジンの隣に座りながらガイの様子をうかがいつつ聞き返す。

ホウエンへと行くのであれば、ヤマブキまでとは言わずモモはルカをクチバへと連れて行くつもりらしい。

「いいよいいよ～。それに私もこんなに可愛いルカちゃんを一人旅させたくないもん」

モモはそんなことを言いながらアクセルを踏み込む。

「そ、そんな……」

モモの賛辞にルカは頬を薄い朱色に染め、おもしろくなさそうにガイが

「けっ……」

と車窓の外へと視線を移す。

そしてそれを聞いてルカはびくっと肩を跳ね上げて縮こまる。

「ガイくんってホント子供〜」

「うっせぇ」

モモが左目でガイの方をじとーと睨みながら、ガイは更にトーンを低くして言い返す。

「大丈夫だよルカちゃん、そんなに怖がらなくてもガイさんはルカちゃんを取って食うようなことはしない……と、思うから」

ジンが必死にルカをなだめようとするも、自分の言葉の最後に自信がなくなってガイの方を恐る恐る見上げてしまう始末。

「てめぇジン、俺がなんだと思ってやがる」

低く唸るような猛獣の声に、ルカとジンは共に震えあがる。

「前方ご注意くだ〜い、車が跳ねまーす」

しかし束の間、モモのおどけた声と共に車がグワン！と一瞬だが段差を乗り上げて宙に浮く。

「あがっ……つぅー、てめぇモモわざとしやがったな！？」

さっきの衝撃で舌を歯で挟んでしまったガイはかみ殺さんとする勢いでモモに詰め寄る。

「注意警報は出したでしょう？　それにー、ちょっかい出すからそんなことになるのよー。自業自得因果応報悪いのはガイだよ」

微妙に最後の三つ目は四字熟語で終わらなかったが、ガイも差し詰め自覚があったのか押し黙って助手席に深々と座りこむ。しかしバックミラー越しにルカの姿を確認しながら。

一方ルカはガイに恐怖心を抱くも、隣にジンがいることで味わったことのない緊張感にさいなまれていた。

「あ、ごめんねルカちゃん。でも、さっきのバトルは凄かったね。バッジ０個だなんて信じられないよ」

ジンが繕うように会話を始める。そしてジンに褒められて、ルカは嬉しくなって頬を染めてしまう。

「ぁ、ありがとうございます」

「教え方の上手な先生だったの……？　えっとハナダだったっけ？」

ジンにとってもルカと話せることは興味深いし、胸が躍っていた。

「えっと……お兄ちゃんがバトル強くて。その影響だと思います」

ルカはしかしここでカナの名前は出さなかった。それほど、カナとのことは人には知られたくなかったのだ。

「そうなんだ。お兄さんがいるんだね」

「はい……丁度ジンさんと同じ年です」

和やかな雰囲気が二人の間に流れ、ガイは面白くなさそうに、モモは二人の会話を楽しそうに聞きながらハンドルを回す。

マサラからクチバまでおよそ数時間。

その間、ジンとルカの会話は続いた。

ジンの出身地やフシギダネとの出会い、趣味や夢。

「僕はホウエンの出身なんだ」

「え？　そうだったんですか……？」

「うん、まあ今はここに引っ越してきたんだけどね」

「そうなんですか」

ルカも自身ことやケンのこと、ガーディとの出会いなどで話は続いていった。

「お兄ちゃんってひどいんですよ、いっつも私のことばっかりいじめて……」

「あはは、でもきっとお兄さんはルカちゃんのことが大切だから構ってくれるんじゃないかな？」

「え……？」

「大切な人の傍にいたい……。なら何かをしていないといけないって思うんじゃないかな……構うのもその意思表示みたいなものだよ」

若干ジンのその言葉に陰りがあることをルカは見逃しはしなかった。だが、ここでそれを追い詰めるのは無粋だと感じた。

「そう、なのかな……？」

「きっと、そうだよ」

車体が塗装されていない道路を走ればガタガタと小刻みに揺れる。
「ジンさんの趣味ってなんですか？」
ルカのそんな質問にもジンは優しく丁寧に答えていく。
「そうだね……。時間があったら自分でものを作るのが楽しいかな」
「どんなのを作るんですか？」
「そうだね……今は新しいボールを作ろうかなと思ってね。派遣会社だから、いろいろと勉強させてもらってるんだ。事務雑用ばかりだから」
「凄いです」
「え？」
「お兄ちゃんと同い年くらいなのに、もうお仕事されてて……尊敬します」
「……ありがとう」
しかし寂しげにジンは笑う。
「ジンさんの夢は何なんですか？」
ルカは目を輝かせる。
「僕の夢は……発明家になりたいと思ってる……。いろんな人に使ってもらえたらなと思うから」
だがまたしてもそう口にするのが辛そうに、ジンの言葉は細々しい。

「ジン、さん……？」
「ううん……。ルカちゃんの夢は？」
話を逸らすようにしてジンはルカへと話題を振る。
「私、ですか？　私は……メディターになりたいと思ってます」
恥ずかしそうに、でもちゃんと自分の意志を持ってそう告白する。
「メディター……か。凄いね、僕の夢よりよっぽど立派だよ」
自虐めいたようにジンはルカを称賛する。だがルカは、
「そんなこと言っちゃ駄目です！　夢があって、そこに向かっていくのは皆一緒です。だから、その夢に優劣なんてないです！！」
「……う、うん。そうだね」
ちょっとだけ驚いてしまうジンは、再度自分が情けなくなってしまう。
『年下の子に説教くらうなんて、駄目だな、僕は……』
そう感じてしまうジンの傍ら、ルカは
『あ、ジ、ジンさんい向かって偉そうに言っちゃった……。うぅ、どうしよぅ、は、恥ずかしい……』
互いに目を合わさずにそう思いながら、モモとガイもそれぞれに想っていたことがあった。

『発明家か……。ま、夢みる分には悪くねぇかもな』
『ジンくんったらルカちゃんにはちゃんと打ち解けられるんだねー。お姉さんちょっと嫉妬かも～♪』

目を合わせ辛くとも、ルカとジンはまたも話をぎこちなくながらも再開させる。

そして幾時間後、ルカは寝息を立てていた。

バックミラーで後部座席を確認したモモは早速口を切る。

「で、どうするの？」
「何がだよ？」

ガイもわかっているが、外の景色を見つめながらそう返す。

「この子、どうするかってことよ」
「処分するか？」
「……え？」

モモとガイの会話にジンはルカの寝顔に見とれていて遠のいていた意識を現実へと戻す。

「それもかわいそうよね～。別にばれてないわけだし」
「俺達の任務を見られた」
「そ、そんなっ……！」

ロケット団としてとシルフカンパニー社としての対応は違う。そして今回も表向きは会社として裏ではロケット団の活動を全うしていた。

そこに入ってきたのがルカだった。モモがルカを送ろうかと言ったのも、自分達の監視下に置くため……無様にも一人で行かせるなんていうヘマはしない。

「ジン、てめぇもわかってんだろ。でも、まあ別に行かせてやってもいいだろ。この世界はもう俺達のもんだ……。俺達にもまだ実感ねぇのにな、3日で本当に俺達の組織は世界を掌握できたのかってな」

そう。ガイ達にもまだ実感がなかった。

本当に自分達がこの国を手に入れたのかを。まだホウエンでは仲間達が頑張っている……だが、それ自体もなぜか実感が湧かない。

志高くロケット団へと入団した。それはこの国を変革したいから……。だが世界は変わった。自分達が何かをしたかと問われれば、ハナダのビルを破壊しただけ。それだけで世界が手に入ったと勧告されても実感が湧くはずもないのだ。

現実世界に逆らっていた自分達が世界を動かす者となった。

それは自分達が何かをしたわけでもなく、トップが何かできたから……。

「そうかもね……。これから私達が進む道はどうなるのかしらね？
現実が嫌だから、波乱や混乱が欲しかったのに全てを通り越しちゃったからね」

モモも何かを感じていたことをそのまま口にする。

「それは……そうですね。僕も、実感がないです。組織としての目標は達成、成就されたのに……僕達はどうなるのかなって思います」

ジンも同じ風に感じていた。

そして彼らはまだ知らない。自分達の脅威となりうる存在が同じ車内に乗っているということを。彼らが出会い、同じ時間と空間を共有したこと———それは後々四人全員に襲いかかる。

健やかな寝息を立てるルカ自身もそのことはまだ知らない。

世界は変わり、常に変動していくものなのだ。

全ての人の意志をまるで無視するかのように、流れ、変わり、うごめいていく。

第三章：一人で……　「裏」：悪の白と黒（後書き）

ルカ「次回の更新は？」

いつもながらにわかりませんw

ルカ「ですよねーー」

ですねー

ルカ「それじゃ、皆さんまた」

お会いいたしましょう！

第三章：一人で……　V：豪華客船サント・アンヌ号（前書き）

いやー、今回はポケ神を懐かしんで書いてみました。

ルカ「迷惑だよ」

ええええ。

ルカ「でもこれで第三章は終わり……？」

うーん、そうだね。

ちょっと裏を最後に挟んで終わりたいと思います。ケンほったらかしだし。

ルカ「え、バカ兄に戻るの？」

まあまあ。ルカの船旅は第五章へと引き継がれます。

ルカ「むぅ……。まあ、いっか」

あ、それと冒頭部分のこの国の歴史は俺が勝手につくっちゃいました……；；　勝手に漢字なんかも当てちゃいましたが、もっと良い言い回しがあるような気がしてならないです；；

ルカ「これテストに出なくて良かったー……」

そっちかい；；w

まあ、では、どぞ～

ルカ「どうぞー」

第三章：一人で……　Ｖ：豪華客船サント・アンヌ号

大二教徒戦争：

―ポケモン歴６８０年―

イニシャルインシデントより人々とポケモンは共存を成し遂げていた。

しかし世界は大きく二つの教徒によって二分される。

一つはアルセウス教。文字通り、神アルセウスを崇拝しこの世全ての理（ことわり）は神の下に成り立っているという思想理念。つまりは森羅万象は神の手によって創られたと信ずる者達。

アルセウス教の信者はポケモン達を神の従獣（つかい）とし、共に心を通わし合い初めて信徒としてポケモンの技を行使することを教会から許されていた。

世界を生み出したのが神アルセウス……。そしてアルセウス教の信者達は様々な建造物を後世へと残した。現代の科学では到底解析できないような建造物も、その当時では完成していた。

アルセウス教は現代の芸術、技術、信仰心の基礎を築いたとされている。

彼らは神が王として君臨されし土地として……神王、シンオウ地方に拠点を置き、発展してきた。その為、今尚シンオウ地方では時空を超克せし神を崇める神殿や建造物が残っている。

そしてもう一つはスウセルア教。アルセウス教とは正反対に位置する宗教では神を信じず、全ての理は自然の下に成り立っているという思想理念。つまり森羅万象はなるべくしてなりたったと信ずる者達。

スウセルア教の信者はアルセウス教より離反した者達によって形成された。神を信じず、ポケモンも人間も全ては自然の産物として考える理念である。

スウセルア教は現代の科学や数学の基礎を生み出した教徒であり、アルセウス教が良しとしなかったメディターの生みの親ともいえる。

彼らは豊かな自然の恵みが円を描くように循環されるとして……豊円、ホウエン地方に住みつくようになった。その為、今尚ホウエン地方では大地、大海、大空が自然の三大基盤として覚(さと)られ続けている。

スウセルア教の由来は言うまでも無く、神を背徳するとして恐れ多くもアルセウスの名を逆さにしてつけられた名である。

長きに渡り二つの教徒は小さな小競り合いや紛争を繰り返し、ポケモン歴６８０年に国を巻き込んでの戦争が勃発した。

人間とポケモンを巻き込んでの大戦争は後に聖戦と呼ばれ、この国の歴史にその名が刻まれる。

聖戦は長期に渡り、何十年も続いた。二つの教徒の戦力消耗は激しく、戦争はどちらの勝利となることも無く停戦となった。

そして停戦の背景として平和主義を掲げる勢力も増えてきたこともあげられるが、それはまた別の話である。

こうして二つの宗教はこの戦争を折りに和解を始め、互いの存在を国の発展へと貢献することを決め認め合うことを定めた。

これは後に【聖戦締約】として知られることとなる。

聖戦史より抜粋

クチバシティ：

私達の乗った白いバンがクチバの港沿いを走って、巨大な客船付近の駐車場で停止する。

時刻は夕方前の太陽が２０度程傾きかけている頃合いで、水面は

未だに陽光をきらきらと反射させてる。晴れとは言っても、この時期は真冬。だから外を出歩く人々は厚手のコートや防寒服に身を包んでいる。

私は途中で眠っちゃったけど、遂さっき起きて車窓から見る景色からここがクチバシティなんだって理解できた。

港に停船しているのは豪華客船サント・アンヌ号……この国の富豪達しか乗船できないことで有名な船。

「いいなぁ～、一度でいいからああいうの乗ってみたいわよね～」

ハンドルに両手と頭を乗せながら、モモさんがフロントウィンドウから巨大な白船に見とれる。

「どうせ堅っ苦しい連中しかいねぇんだろ？　なら乗ったって疲れるだけだ」

とは言いつつも、ガイさんは傍目でちらっとサント・アンヌ号の威風堂々な井出達を見つめている。

「でもすごいですね……。実物は本当に大きい」

ジンさんも圧巻されつつも高く聳(そび)える客船をマジマジと見上げてる。

「ぁ、え、えっと……」

うぅ、三人の会話の後じゃ言いづらいよぉ……。

昔ソネザキさん主催のビンゴパーティで一等賞のサント・アンヌ号フリーチケットをもらってて今まで取っておいたなんて……い、言えない！！

それで恐れ多くもこれでホウエンまで行けたらいいなーなんて、思ってるけど思ってないから！

……なんだか私だけ良い思いするみたいで恐縮だけど、そろそろ乗りこまないと間に合わなそうだし……。えぇい！

「あ、あの、私あの船に乗ってホウエンまで行くので送ってもらってありがとうございました！！」

私は勢い良く立ち上がると共にモモさんとガイさんのいる座席に向かってお辞儀をする。そしてすかさずジンさんの方にも向こうとして頭を上げたら———

ゴツン！！

「あ、うっ！？　い、いぁぃ……」

「だ、大丈夫ルカちゃん？！」

早口だったから聞きとってもらえなかったかな、なんてジンさんの介護を受けながら私は頭を抱える。

でもちゃんと聞こえていたみたいでモモさんとガイさんはぽかんと私を凝視している。モモさんに至っては、

「うっそ〜？！」

仰天するような声をあげるモモさんに、私とサント・アンヌ号を交互に見つめ返すガイさん。

ジンさんは痛くないように私の頭を撫でてくれる。撫でるというか、擦(さす)ってくれる。

痛みが段々と引いてきた私は少し涙を浮かべながら、片目を開けてうなずく。

「は、はい……」

私の肯定する言葉にモモさんは更に声色を変えて目を輝かせる。

「もしかしてルカちゃんってとんでもないお嬢様……？」

えっとぉ、そういうことじゃないんだけど……。

「い、いえ、えっと、懸賞で当たって……」

本当のことだから、そうとしか言えない。

「でも、だとしたらルカちゃん急がないとっ！」

ジンさんが私を急かすように慌てだす。本当にその通りで、私もあたふたとしながら鞄を手に取る。

その時私はガイさんがジンさんへと見せた目配りに気付かなかった。

車の外からは船の汽笛が聞こえてくる。

「ルカちゃん、また会えるかどうかわからないけど、これを持っていって」

ジンさんから受け渡されるのは1つの小さな小型機械。シャープな流線形を描く種のようなフォルムで真ん中には青色の光電子体が埋め込まれている。

「これは……？」

片手に収まる程の機械をまじまじと見つめながらジンさんの方を向く。

「まだ僕の試作品だけど、ホウエン地方とハイア地方の地図のデータが入ってるんだ。カントーのも入れようと思ってたんだけど時間が無くてね……もし良かったらルカちゃんに使ってもらいたくて」

ジンさんの言葉を最後まで聞かなくても私は心底胸が熱くなって、ジンさんの首元に抱きついていた。

「ありがとうございます、大切に大事にしますね！」

「あ……う、うんっ」

私の顔も真っ赤なんだろうけど、なぜかジンさんの顔も少しだけ熱を発しているようにも感じた。

「それではモモさん、ガイさん、ありがとうございました」

「若いっていいわよねー、ねえガイくん？」

「俺に聞くなっ」

二人のやり取りも、今日だけだったけど聞けなくなると思うと寂しくなった。

「気をつけてね、ルカちゃん。また縁があったら会いましょ♪」

「とっとと行け」

モモさんが私の両手を自分の両手の中でしっかりと握ってくれる。

「は、はいっ！」

嬉しくなって、つい舞い上がっちゃって私は噛んじゃうけどそう答える。

「じゃ、行ってらっしゃい」

「はい。行ってきます」

そう告げて、私は一目散にサント・アンヌ号へと走っていく。

潮風が私の髪を横に凪ぐ。

やっぱり寒いな……。でも、潮のにおいがする。

見れば本船に乗り込む為の階段型の梯子の入り口付近で船員がしきりに大声を出して最後の乗船者がいないか確認している。

「のりまーす！　その船、のります！！」

肩から提げるショルダーバッグが走る度に背中の上で小さく跳ねる。

腰のウエストポーチに入っている財布からチケットを見せると、船員さんはちょっと驚くような顔をしてから笑顔で迎え入れてくれる。

「良き船旅をお過ごしください」

「あ、ありがとうございますっ」

丁寧な挨拶に私は恐縮しちゃってお辞儀までしてお礼を言う。

あぅあ、こういう時ってどうすればいいんだろ……？

船へと乗り込んでいく階段を上がりながら、私は港で停車しているモモさん達の白いバンを見下ろす。

目を凝らすと後部座席の窓から小さくジンさんが手を振ってくれるのが見えた。

私は嬉しくなって、満面の笑みを浮かべて大きく手を振る。甲板へとあがって、モモさん達の方向にお辞儀をする。

外の風が冷たいけど、私は甲板に残って船が出港してバンが見えなくなるまでそこにいた。

乗船する時も思ったけど、さすがは豪華客船だけあってモモさん達の白いバンを囲むように黒い高級そうな車が一杯並んでいた。

中にはキリンリキの馬車もあったけど……すごいなぁーお金持ちって。

でもその中でも私は一つだけ気になった乗り物を見つけた。

人力車……？　ジョウト地方のエンジュシティにしかないと思ってたけど、やっぱりお金持ちになるといつでもどこでも好きな物に乗れるようになるのかな、なんて思っちゃった。

黒と赤色で質素ながらにも気品溢れているつくりのそれは、少しだけ私の頭の中に残り続けた。

クチバの港からサント・アンヌ号は離れて、今じゃもうクチバシティが小さなブロックみたいに見える。

潮の香りと共にまた風が吹いて、私は思わず身震いしてしまう。

「お客様、お寒くはありませんか？　どうぞ中へ」

清楚なタキシード型の制服に身を包んだ船員さんが私をエスコートしてくれる。

「あ、ありがとうございます」

「いえ、お客様には快適な船旅を送っていただきたいので当然です。風邪をお引かれでもされましたら、せっかくの旅も億劫でしょう？」

若干冗談交じりにそう返事をしてくれる船員さんに私は笑みを浮かべて「はい」と答える。

船内に入る木造で金飾の施された扉を開けてもらって、私は異世界へと歩みこむ。

「ほわぁ……」

どこかの超スーパーでリッチですっごいすっごい高いホテルのラウンジよりも綺麗！

あまりの興奮状態に私の語弊は支離滅裂になってきてる気がするけど、気にしない！

でも、これでなんで皆がビンゴ大会の時に目をぎらぎらと血眼にしてた理由がわかったような気がする……。

右手に握る乗船券をまじまじと見つめなおす私。

一回乗ればクチバシティまで一周して帰ってくるまで自由にできる。ごはんもただで、寝泊まりもただ、施設利用のほとんどもただ、カジノ、買い物、スペシャルオーダー以外はお金がいらないってマサキさんも言ってたっけ。

「お客様、あまり長く扉の前で立たれますと他のお客様のご迷惑になりますので———」

「……あ、は、はい、ごめんなさい！」

あまりの凄さに驚いてて立ち止まっちゃってたや……。

でも、ビンゴに勝てて良かったかも。こんな船旅、一生で一度くらいしか味わえないよ！

第三章：一人で……　Ｖ：豪華客船サント・アンヌ号（後書き）

思えば、来週の月曜から俺日本じゃないか。

ルカ「おお、ということは……？」

二週間程更新ができません。

ルカ「うわぁ、結構痛いね」

そうだね。俺が二週間以上も小説を書かなかったことがあるのか……？！

ありそうで怖い。

ルカ「ちょっと；；；」

そんなわけでして出発前に裏はなんとしてでも書いて出たいと思ってます。

ルカ「皆Ｋａｒｙｕの都合でごめんね」

ではではー

ルカ「ではでは～」

第三章：一人で……　「裏」：世界の変色（前書き）

今回は裏事情をちょこちょこと発表していきます。

ルカ「私が出てないーーー」

まあ「裏」ですから

ルカ「うぅ」

なんかこんなやり取り前もしたような気がする。

ルカ「だって私の出番ないんだもん」

まあ、そ、そうだけどさ。

ルカ「それよりも、今後の予定だよ」

あ、そうでした。活動報告でも書きますが、この話の後は2週間程更新ができなくなるやもしれません。

ルカ「頑張って日本でネット喫茶探してきなよ」

いや、そんな時間があるかもわかんないし。それよりもネット喫茶行ったことがないので、どんなところかわからない；；

ルカ「こんな作者でごめんね、皆」

昨日も言ったよな、それ。

ルカ「まあまあ。それでは」

おたのしみください！

第三章：一人で……　「裏」：世界の変色

クチバシティ　港：

「どうして発信機なんて渡した……？」

ガイがジンの方を片目で睨んでそう聴く。

「私が言っといたんだー。ジンくんとルカちゃんの気持ちを利用するみたいでごめんねー」

モモがそうおどけながらに答えるも、目は全然笑ってはいない。

「いえ……仕事ですから……」

と自分に言い聞かせるように、下唇を噛みながらジンは俯く。

ルカが乗船し、船が出てからの会話。

ジンがルカに渡した電子地図には発信機が埋め込まれている。それはモモがジンの器用さを買って、ルカが熟睡中にジンに細工させて作らせたものであった。

小型の発信器でルカの居場所が常に監視下へと置かれるように……。

そしてルカ自身が変に思わないように、ルカが地図を操作する時に出る自分の現在位置を示す赤い点滅がそのままこちら側へと座標として送信されてくるような細工も施されている。

『逆らったら、モモさんに殺される……』

そうジンは思った。

そして事実、モモはそういう類の人間でもある。

モモ自身も相当の覚悟の上でロケット団へと入ったのだ。そしてその覚悟の身の上はこの車内の誰よりも高く、そして敵わない程に荒れている。

「でも、どうしてつくらせた？」

モモがジンに発信機を作らせたのはわかったが、ガイはなぜかはまだ聞き及んではいない。

ＧＰＳの組み込まれたパネルを操作して、クチバ港の地図から一転してデータバンクのような画像が表示させるモモ。

タッチスクリーン型のパネルに指を走らせて、モモは二つの写真とプロフィールデータを探し出す。

「こ、これは……！」

その画像に一番最初に食いついたのはジンだった。

車の前方まで体を乗り出して、パネルにくぎ付けにされる。

【ハヤミ　ケン】
【ハヤミ　ルカ】

その二つの名前と、先ほどまで会っていた少女の写真が映し出されている。

そして二人のプロフィール部分には赤字で、【監視対象】と書かれていた。

「監視か……。あんなガキに何ができんだよ」

ルカが監視対象であることに若干の驚きを感じたガイであっても、ルカがそれほどまでに組織の脅威対象になるとは思えずにいた。

「あら、何言ってんのよガイくん。ルカちゃんとバトルしたんでしょ？　あの子なら5年も修行を積んだら、化けるわよ～」

面白そうに指を唇にあてながら、モモはルカとケンの写真を交互に見比べる。

「でも、どうして2人が監視対象に……？」

ジンはわからなさそうにモモに尋ねる。

「それはね……」

モモは声を低くして、神妙な顔つきになる。

「「それは？？」」

ジンとガイの声が重なり、ジンに至っては固唾をも飲み込む。

「……私もわかんな～い」

目一杯の明るい声に、ジンは呆気に取られガイはずるっと1センチ程肩を座席で滑らせて舌打ちをする。

「けっ……でも任務ってんならしょうがねぇな。帰るぞ」

足を組み直し、ガイは大きな欠伸をすると共にそう提案する。

「そうね、帰りましょっか」

そしてモモも何事も無かったかのようにスクリーンをヤマブキまでのルートを地図へと出す。

「……」

ジンに至っては無言で後ろで座りなおしてシートベルトをつけ直す。

『ルカちゃん……』

ルカの身の上を心配しつつもジンは少しだけ良かったと思っていたことがあった。

それはモモに発信機を付けろと言われた時に、ジンは薄々と感じ取っていた。だから2人の目を盗んで新たな細工を施していた。

それがいつ吉と出るか凶と出るかはわからない。

だが、ジンはルカに惹かれていた。そして何かをしてあげたいと

思っていた。だからかもしれない、と自分に言い聞かせるジン。

『頑張れ、ルカちゃん』

そしてジンを乗せた白いバンは颯爽とクチバの港を駆け抜けていく。

他人のことを想うこと……。しかしそれはジンにとっては一番辛いことであった。

自分にそんな資格がないことはわかっていても、でもジンはルカのことを想ってしまう。彼女が最後に自分にくれた温もりも、まだ首回りに残っているような気がして。

軽快なエンジン音に揺られ、ジンもまた、静かにルカが座っていた同じ場所でうとうとと眠りはじめる。

ヤマブキシティ　シルフカンパニー社本社　ロケット団本部：

モンスターボールをはじめとする様々な薬品や道具を開発し、今や人間とポケモンの橋渡しとして無くてはならない存在……それがシルフカンパニー社。

ここ数十年で大きな拡張化を見せ、実力のある社員はどんどんと上まで駆けあがれることのできるシステムにおいて、さまざまな魅力ある商品が生まれていった。

そして現在のシルフカンパニー社社長はサカキ、先日声明を出したロケット団のボスである。

世間への表向きはシルフカンパニー社とポケモン協会が同盟を結び、これからの些細な国事の体制の見直しを提示したのみとなっている。

だが裏では、協会がサカキによって買収されてもおくしくはないといったようなことが起きていた。

つまり、各地方の統括は今まで通りではあるが重要決定事項の判断は今まで各地方のチャンピオンが相談しあっていたのを全てサカキが判決するといった具合だ。

そして今、サカキの野望を成し遂げようとせん為サカキはある協力者と話し合う。

「研究の方は進んでいるのか？」

サカキがシルフカンパニーの社長室窓からヤマブキシティ全体を見下ろす。

「進んではおるがの……しかし、ムショが長すぎて全快になるまでには少しかかるのう」

協力者……マサラの悲劇の当事者であるオーキドが白衣に身を包んでそう報告する。

「そうか……。ミュウツーはどうだ？」

後ろで手を組み、サカキは足元で座っているペルシャンの頭を撫でる。

「ボールから出て5分は大丈夫じゃの。それと技の種類も5つに増えたぞ……。御子息のリョウ殿が素晴らしい研究報告を持って帰ってくれるからのう、こちらとしては助かっている」

ペルシャンが嬉しそうに鳴き、

「そうか」

と、サカキは一言そう答える。

サカキがオーキドと結託したのはマサラの惨劇が発覚する数カ月前のこと。

ミツルが言っていた通り、サカキが一度マサラタウンに訪れた時……そこからサカキの計画は進行していた。

非公開ではあったが、当時シルフカンパニーは人工的にポケモンを創りだすことに成功していた。

そう、ポリゴンである。

その研究データと実物のポリゴンを見せられたオーキドは歓喜した。今までに取得することのできなかったポケモンのデータが、人工的に創り上げられたポケモンから取りやすくなると思ったからである。

そしてサカキはこう提示した。

ポリゴンと研究データを引き換えに、更に優れた生命エネルギー体をポケモンからつくって欲しいと。

そうすれば、更に優れた知力と生命力を持ったポケモンを人工的に創り上げることができると。

後は簡単だった。

オーキドはいままでに自分が集めてきたポケモンのデータを元に、まずはポリゴンを解析し、ポリゴンの疑似生命体をより生物らしくする為の研究に乗り出したのだ。そう、自分のところのポケモン達を使って。

もう少しの所で、研究は成し遂げられようとしていた。

しかし、オーキドは協会によって逮捕されてしまう。

オーキドに研究を任せていたサカキは、なんとかしてオーキドがいままでに完成させていた疑似生命体と研究データを入手するも……さすがはポケモン研究の権威を持っていたオーキドなだけあり、

シルフカンパニー社の研究員では完璧に理論を理解することができなかったのだ。

それでもオーキドのデータを参考に、シルフカンパニーはそれからもポリゴン2とポリゴンZを創り上げることに成功するも、サカキが目指す最強のポケモンには程遠かった。

「金と時間はくれてやる。だから、わかっているだろうな？」

背後のオーキドにそうサカキが重く伝える。

「わかっておる。それにこれはわしにとっても最高の研究場所じゃ。お主も少しは子供達と話をするんじゃぞ？」

そしてそう言い残してオーキドは入ってきた扉から出て、研究所のある最下層までエレベーターを使って降りていく。

雪がヤマブキシティを染め始めようとする時、サカキは黙って下界を見下ろし、

「余計なお世話だ……」

と、静かに言葉で零した。

カントーニュース：

【先日、協会にハナダデパートを爆破するという脅迫状を送りつけてきた男によって大破されたハナダデパートはシルフカンパニー社の援助もあり早急な復旧作業へと移っています。脅迫状を送りつけてきた男はすでに逮捕済みだということです。

続きまして、シルフカンパニー社の内部組織のロケット団と協会所属のジムリーダーと四天王達は脅迫状を送ってきた男の共犯者として5人の容疑者を公明発表しました。その5人はハナダジムジムリーダー　テンドウ　カスミ。タマムシジムジムリーダー　ミドリ　エリカ。ヤマブキジムジムリーダー　シンカイ　ナツメ。セキチクジム準ジムリーダー　シノビ　アンズ。そして氷結の四天王で知られるハレシノ　カンナの以上5名です。目撃された方々は最寄りの警察へ報告してください。

各地方で被害を被りました施設や建物は以前より取り壊しの決まっていた為、再建の目処（めど）は破壊されたハナダデパート以外はありません。そしてヤマブキシティの新しいジムは元ヤマブキジムの隣で開業していた格闘道場に移ります。ハナダジムは容疑者カスミの姉妹が継続。彼女達の事件への関与はゼロとされています。次にセキチクジムは容疑者アンズの父親シノビ　キョウがこれまで通りジムリーダーを担います。そしてタマムシジムと四天王1人の座はただいま協会で審議中とのことです。

それでは明日の天気です――――】

人々はすでに、変革された世界を受け入れようとしていた……。

第三章：完

第三章：一人で……　「裏」：世界の変色（後書き）

ちなみにただいま俺の住んでいる地域は豪雪です。すでに1フット＝30センチ以上積もっちゃいました。

これで月曜日まで降ると……飛行機が出なくなるなんていう可能性もあるんですが、大丈夫だと祈ります。。。

それでは皆様

ルカ「私喋ってないよー」

ああ、なにか言うことある？

ルカ「更新されなくても私のことだけは忘れないでね、皆！」

……；；

是非とぞよろしくお願いいたします。

それでは皆様、またお会いいたしましょう。

行って参ります！！

第四章：打倒ロケット団　Ｉ：バンジーなる特訓（前書き）

恐怖心に打ち勝つには、更なる恐怖を体験すること！！

ルカ「新年明けて結構経つのに何言ってるの？」

……皆様、新年明けまして、おめでとうございます！！

ルカ「あけおめ～」

こら、挨拶はしっかりと！

ルカ「まあまあ。それにしても結構あいちゃったねー」

うっ……。まあ、俺もゆっくりと休養させていただきました。

ルカ「の割には出来はいまいちでーす」

おい。ケンの話だからってそんなにツンツンしなくてもいいじゃないか。

ルカ「ふんだ」

……やっぱりまだまだルカは子供だなー。

ルカ「むかっ」

そうやってすぐ口に出すところとかねｗ

ルカ「むぅぅ！」

それでは、新年最初のメディターをどうぞ！

ルカ「……どうぞ！」

第四章：打倒ロケット団　Ｉ：バンジーなる特訓

２の島：

ルカと別れて俺とミツルさんは２の島まで戻ってきた。

「やはり戻ってきおったか……。待っておったぞ」

岐波の岬、そこに建っている一軒の家屋。キワメ老人の住処。

「キワメさん……。お願い、できますか？」

ミツルさんが一歩前に踏み出しながら、キワメさんと相談に移る。

俺はただじっと、肩にぶらさげた鞄の紐をぎゅっと握る。

ルカ……ごめんな。

「そうか……お主が認める程じゃからのぅ。よかろう、鍛えてやろう」

「ありがとうございます、キワメさん」

二人の話の型がついたみたいで、二人とも振り返ると共に開口一番に俺の名を唱和する。

「ケンくん」

「ケン」

なんか、同時に名前呼ばれるのってアレだよな……。

「はい」

でも、まあ答えないわけにもいかないよな。

「修行じゃ」

キワメさんのその言葉に俺はすぐに反応できなかった。

「は？」

と、そんなそっけない返事をしてしまう。

「は？　ではないわ。今から打倒ロケット団の為の特訓じゃ」

キワメさんは右手に持つ杖を俺に向け、隣のミツルさんは意味気な笑みを浮かべて立ち構えている。

「修行？」

修行……？　特訓ってことか？

「ケンくん、今の僕達だと明らかに戦力不足なんだ。だから、君には更に力をつけて欲しい」

ミツルさんの言葉に、俺はどうしようもなく共感せざるを得なかった。

下準備ってことか……。俺がまだまだってことだよな、やっぱし。

「わかりました。キワメさん、よろしくお願いします」

きちんと腰を折ってお辞儀をする。

けど、俺が顔を上げる直前、俺の足首に数本の糸が絡まる。

ん？

それからは一瞬だった。

俺の視界はぐいっと空へと強制的に向けられ、体は強引に引っ張られる。

そして物理の法則が狂ってるんじゃないかと思わせる程の不規則的な円を描かされた俺はそのまま崖←まで飛ばされる。

「は？　って、ちょっとまてえぇぇぇいいい！？」

そこからは岩に波打つ大海へと一直線。俺が最後に崖の上に見たのは、得意げな表情を浮かべるキワメさんとトランセルが一匹。

「精神を鍛える特訓その一じゃ」

そこから俺の地獄が始まった――――。

岐波の岬　崖上：

「はぁ〝ーはぁ〝ーはぁ〝ーっ！！」

波打つ海水に晒された俺の髪はずぶ濡れて、俺は下降していくのとほぼ同じスピードで崖の上まで戻された。

あの時俺が体感した上下感覚の狂いは、ただ単に俺の三半規管を弄んで臓器機能を狂わしただけに終わったような気がする……。いや、してならない。

「ふむ……。失神せんだけでも、良い玉じゃの」

いきなり、何すんだよ……。死ぬかと思った……。

「さて、もう一回行くとするかの」

「は……？　うおぉあああ！？」

そしてまたも俺の足首に太いトランセルの糸が絡みつき、ぐいっと引っ張られる感覚と共に俺の意識は吹っ飛ぶぐらいの浮遊感に苛まれる。

「怖くなくなるまで続けるからの」

そう言ったキワメさんの言葉が俺の頭の中で繰り返されると共に、俺はまたも崖下へと急降下していった。

一体なんだってんだよ！？

標高何メートルあるのかどうかわからない、果てなきバンジーに俺の体は宙へと舞って落ちていった。

そう、俺の眼鏡と共に……。

「眼鏡っ！！」

キワメの家：

とりあえず十数回繰り返されたバンジージャンプの後、俺は家に入ることができた。

あったま、いてぇ……。眼鏡も海の藻屑になっちまった……。

「恐怖心を払拭する訓練じゃったが、あまりお主には意味無かったかのう」

キワメさんはキワメさんで上の空だし……。

「あの」

俺はベッドに腰かけていた体を立ちあがらせてキワメさんを直視する。

「まじでこれで特訓になってるんですか？」

そんな疑問を抱くのも当たり前だろう。

「うむ。ミツルも通った道じゃ」

キワメさんがそう言いながら、手前の杖をもてあそびながらそう答えてくる。

へぇ……というかミツルさんならマジで死んじまうんじゃ……。

ん？　そういえば、ミツルさんの姿が見当たらないな。

「ミツルはダイゴに会いに行きおった。情報収集もかねての。あやつらが返ってくるまで、わしがお主に徹底的に教え込んでやるから覚悟せい」

なるほどな……。

でもこんなんで本当に強くなれるのか？

「さあ次はこれを飲むんじゃ」

そして差し出されるのは以前にもらった栄養ドリンク。

「あっ、ありがとうございます」

渡されたドリンクを受けとって、それを飲み干す。

キワメさんの特性ドリンクの効果は立証済みだから、俺は一気にいく。

「ほうほう良い飲みっぷりじゃの。さて、次の特訓へと行くぞ」

「え？」

窓の外を見ればもう夕暮れ。

もう、心身ともにクタクタに……って、あれ？

「ドリンクの効用が出てきたみたいじゃのぅ。ほれ、行くぞ」

はめられた……。

「とっとと来るのじゃ」

ガシッ！

俺の襟首に杖の先端にあるフックが食い込んで、俺はそのまま家

の外へと連れ出されていく。
「ちょっ、苦しいですって！」
「若いもんが何をごちゃごちゃと」
この人見かけによらずに力あるだろ！？
ヨボヨボな皮膚と華奢な体から出るとは思えない程の腕力に俺は成す術もなく連れ回される。
キワメさんの家のすぐ外にある草むらへと駆り出される俺はぽいっと投げ出される。
「お主、炎、水、草タイプのいずれかのポケモンを持っておるかの？」
キワメさんはキワメさんで着こんでいる民族衣装っぽい装束の袂をまさぐっている。
持ってるといえば、
「キュウコンがいますけど」
俺はベルトからキュウコンの入ったボールを取り出す。
「ふむ……。まあ良いじゃろう。出して見なされ」
言われるがままにキュウコンを取り出す。
「クゥゥン」

夜の帳の落ちかけてくるこの時に、黄金に輝く体毛が綺麗に照らし出される。

「ほぅ、これはなかなか……。じゃが、問題はお主にありそうじゃのぅ」

持った杖を俺の顔面につきつけて、キワメさんはそう意味ありげに微笑む。

「俺に、問題ですか？」

キュウコンは凛としてただ俺の方を見上げてくる。

「これの特訓の最終目的はの、お前さんにわしの最終奥義の一つを伝授することじゃ」

キワメさんから告げられる事実に、俺はきょとんとするしかなかった。

「最終奥義？」

最終奥義ってのはあれか？　瀕死に陥った主人公が敵のボスキャラに最後の最後で逆転できるスーパーアタックのことか？

「お主が何を考えているのかはわからんが、ほうじゃの。炎タイプポケモンの最終奥義、【ブラストバーン】。それはポケモンとトレーナーが心身一体となった時に発動できる最強の技じゃ。しかし……」

キワメさんはそう呟いて、俺はキュウコンの方を向く。

キュウコンがもしその技を覚えれたなら、確かに戦力は大幅に変わる……。

相手がロケット団という組織で、何人もの構成員が存在するとしたら……バトルは免れない。実際、ポケモンの方が人間より何倍も強い為、バトルに勝てば相手を能無しにするのと同じことだ。

でも、キワメさんは最後にこう言った。

「しかし？」

そう、しかし……。何かがある。

「しかし、問題はお主にある。このキュウコンは最終奥義を覚えれる程の実力者じゃ。わしもこんなに凛々しく、立派なキュウコンを見るのは初めてじゃ。でものぅ、この技を扱える技術と気力、その両方の実力をお主はまだ身につけてはおらん。だからこその特訓じゃ」

確かにそれは否定できなかった。

キュウコンは俺が捕まえたポケモンだけど、こいつの昔の生い立ちを俺は知らない。

そしてキュウコンの実力を十分に発揮できないことも十重に承知していた。

そうだな……リョウ達に襲われた時も、あいつらは数で押し寄せ

てきた。

「今から夜明けまで、お主には野生ポケモンとバトルをしてもらう」

はい？

「大丈夫じゃ、わしも付き合うからの。メガニウム、【甘い香り】じゃ」

岐波の岬を支配する野生ポケモンの宝庫と言われる岐波の草原。自然の産物と言われているこのナナシマ地帯、野生ポケモン達がたくさん住みついている。

ってか、【甘い香り】って……！

「ほれ、襲ってくるぞ？」

やっぱり、そうだよな！

「キュウコン、【火炎放射】！」

「コンッ！！」

燃え盛る業火が襲ってきたクサイハナに炸裂する。

「最初から飛ばし過ぎると最後にばてるかもしれんぞ？」

キワメさんがそんな皮肉めいた助言をしてくるも、俺は葛藤していた。

いや、反発なのかもな。わかってはいるけど、その理屈を覆した

いって思う気持ちってやつか。

俺とキュウコンならやれる！

「キュウコン、【鬼火】！」

「コン！」

辺りを覆う炎攻撃の横行に野生ポケモン達は立ち向かってはやられていく。

そして、最初は個別に襲ってくるポケモン達もしだいに統率がなされ、数も瞬く間に増えていく。

「ほれほれ、まだまだ夜明けまでは時間があるぞぉ？」

やっぱりキワメさんの差し金ってことか。

でも、これならロケット団のような組織相手でも対処できる為の特訓なんだろう？　なら、夜明けまでやってやる！

「キュウコン、やるぞ！」

「クゥン！！」

視界３６０。、全てを把握して最小限の攻撃で相手を倒す！！

「ほぅ、さすがに飲みこみが早いのぅ。これは面白くなってきおったわい」

キワメさんのそんなつぶやきは俺の耳には入ってはこなかった。

でも、あの人がメガニウムの背中に寄り添って明らかになりつつあ

る空の月を見上げていたのが、俺の視界の端に映ったのを俺は忘れない。

第四章：打倒ロケット団　Ｉ：バンジーなる特訓（後書き）

区切り区切りに話を進行するスタイルというのは俺の中に定着しつつあるのかもしれませんが、メディターはポケ神とは違った区切り方にして進行しております。

ルカ「まあ、常に新しいことに挑戦して自分のスタイルに合うのを模索するのがＫａｒｙｕ流だよねー」

まあ、編み出せるまで時間がかかりかかるわけだけどね。

ルカ「そんなこんなで、今度からはペースあげてね」

頑張ります……。そろそろ時差ボケも治ってきたしねｗ

ルカ「それはいいことだー」

でも、もうすぐ期末なので悠長なことも言ってられませんが頑張りますｗ

ルカ「両立両立～」

感嘆に言ってくれるな……；；

ルカ「なんかいつにもまして前・後書きが長いけど、まあいっか～」

まあいいさー。それでは皆様、また次回！！

ルカ「じゃーねー」

第四章：打倒ロケット団　ＩＩ：タクティクスなる特訓（前書き）

えっと……お騒がせして申し訳ありませんでした。

ルカ「全く、ねー」

う、うん……あははｗ

ルカ「あははｗ」

ルカ、目が笑ってない；；；

ルカ「私達を。ううん、私をほっぱらかして先輩達の方に専念する？　ふざけないでよ、Ｋａｒｙｕに何の権限があるっていうの？！」

いや、ごめん、ごめんなさい！　心入れ替えますから！

ルカ「何考えてんの！？」

ちゃんとメディターをやっていって、新章の方は細々とやらせていただきます。

ルカ「最初っからそうしてよね」

は、はい；；；

これからもこんな俺ですが、どうぞルカともどもよろしくお願いいたします。

ルカ「よろしくねー！」

第四章：打倒ロケット団　ＩＩ：タクティクスなる特訓

岐波の岬：

キュウコンの放つ炎タイプの技以外で俺が視界を確保できる手段はない。

すっかり夜も暗黒の世界を生み出す程までの時間となった。

けど、野生ポケモン達は夜行性が多いご様子で……。

「はぁ……、はぁ……、はぁ……！」

くそ、息が上がる。

もうこれで何時間経ったのか、一体いつまで続くのか、なんて考えても今はしょうがないんだろ？

キュウコンの様子を見れば、まだまだやる気が残ってる。俺がばててちゃ話にもならないからな！

「キュウコン、【砂かけ】！　それから【神通力】！」

今、迫るポケモンは六匹。こいつら、いつの間にか最初の頃より統率感が生まれてきている。

キュウコンが足元から巻き上げた砂の粒子が【神通力】によってコントロールされて、迫るニャース達を追い払う。

「よしっ！」

一気に六匹という数で攻めてき始めるポケモン達に応じて、こっちも戦法をどんどん変えていかなきゃな……。きついけど、やるしかない！

夜明け前：

足に力が入らない。

視界がぼやけてかすんでいる。

呼吸もリズムを崩し、思い思いのところで息を吸っている。

ちくしょう……限界、かよ。

「ほれほれ、もう終わりか？　もうすぐ夜明けじゃぞ？」

耳に千切り千切りに飛び込んでくるのはキワメさんの言葉。

薄目でキュウコンを見れば、俺よりは全然元気そうでも今までにない特訓のせいかばててはきている。ていうか、お前本当に強いんだな。

目の前に広がるのはこれまで倒してきたと思っていたのに、すぐに体力を回復させ、まるで軍隊のような統率をなせる野生ポケモンの小隊。

上空には三匹のオニドリルに後続する九匹のオニスズメ。

地上では真ん中にペルシアンが率いる六匹のニャースとバックアップを務めているかのようなナゾノクサとクサイハナの混合部隊。左翼と右翼に展開するのはゴルダック率いるコダック隊とヤドラン率いるヤドン隊。

おいおい、いくらなんでも野生でこれはないだろう？

冗談と思いたい。最初は一匹一匹倒していったやつらも、俺との戦闘あ長引くにつれて段々と集団をなしていったんだからな……。本当に野生かよ。

「……やるぞ、キュウコン。満身創痍ってのはこういうのを言うんだろうけど……ここいらが正念場ってやつみたいだ」

「コン」

良い返事をしてくれるな。

よし！

俺が集中力を高めたのが野生ポケモンに伝わったのか、軍団のそれぞれのリーダー格であろうオニドリル、ペルシアン、ゴルダックとヤドランがそれぞれに鳴き声を上げて合図を繰り出す。

最初に迫ってくるのはキュウコンへと急降下してくうオニスズメ三匹、切り込み役であろうニャース二匹、コダックとヤドン達は一斉に【水鉄砲】を繰り出し、後続のナゾノクサ達は何やら準備をしているように見える。

へ、なんだかわかんないけど全体を見渡せる洞察力ってのがついたみたいだ。全部、相手の一挙一動が見える！

「キュウコン、【威張る】！」

「……コンっ！！」

一体ポケモン達はどうやってこの技に作用されるのはわからない。だけど、相当頭には来ているのは奴らの態度からして一目瞭然だった。

混乱していたとしても、たった一匹の敵なんだ。早々に狙いをミスったりはしない。

でもキュウコンに【威張る】をさせたのは敵を混乱させて自滅させるためじゃない。あくまでも指揮による統率を崩すため！

案の定、先遣隊を担っていたポケモン達に続いてリーダー格達も全員でキュウコンめがけて襲いかかってくる。リーダーをこっちの手の内に踊らせることができたら、それは勝機をもこっちに手繰りよせたようなものだ。

「キュウコン、【怨念】から【身代り】！」

キュウコンは技を繰り出す速さが手持ちの中では一番早い。それほどまでに、どれほどの経験値を積んできたのかはわからない。だけど、いや、だからこそ頼れるパートナーだ。

すばやく自分の分身をつくって後方へと逃げるキュウコン。そしてその瞬間の後、ポケモン達が一斉にキュウコンの【身代り】に容赦なく技を繰り出す。

「ほぅ……。面白い戦法じゃの」

キワメさんの称賛の声が聞こえてくる。でも、俺はこうやって指示を出すのも精一杯だ。

「決めるぞキュウコン、【炎の渦】！！」

渾身の叫びで俺は体全体を震わす。

「……コォーーーーン！！！」

猛烈な程の業火がキュウコンの口中で生み出され、巨大な渦巻きを描いて乱れた隊列となった野生ポケモン達に浴びせられる。

逃げ惑ったり、奇声を上げながら逃げたり戦闘不能に陥る敵を見ながら俺の体は一気に弛緩する。

「やっ……た……」

ぐったりと脱力する俺の下半身は一気に崩れ、俺は地面に膝をつく。

「きゅう？」

地面にどっさりとひれ伏す俺の頬にキュウコンが心配して鼻の先を当ててくる。

「……だい、じょうぶさ」

でも言う言葉とは裏腹に俺の視界は更に霞んでいって、そして俺の意識はそこで途切れる。

「ふむ、たいしたもんじゃわい」

そんな言葉が最後に聞こえてきたような気がした。

キワメ老人宅：

また、同じ感触を背中に感じる。

俺、また意識が無くしたのか……？　最近、こういうのばっかだな……。

「んっ……」

瞼を開き、そこにあるのはしわしわでよれよれの――――

「うおっ？！」

瞳孔が開いて、俺は素っ頓狂な声を上げてしまう。

「おっ、起きたかの」

そりゃ、そんな顔近寄られたら起きるっての！！　心臓に悪いぜ。

「良く頑張ったの、特訓その二終了じゃ」

キワメ老人がそう告げて、俺はあれが特訓の一部分に過ぎないことだと知り脱力感を覚える。

「ふむ、しかしこの特訓を最後までやり遂げたのはお主も含めて三人目じゃぞ？」

三人？　その人数が自棄に耳についた。

「三人ですか？」

キワメさんは窓際に置いてある観葉植物の葉を撫でながら外を見つめる。

「うむ。まあ、それほどまでにわしの訓練は厳しいということじゃ」

何人中の何人かもわからないのにどうかこうかは言えないけど、確かにこれは地獄だ……。体が鉛みたいに重くなる。

「さっきの訓練を終えれば、後のもんはお主にとっては楽じゃろう。それにさっきの訓練で、お主の能力の一つが開花されたみたいじゃのう」

新しい、能力？

「お前さん、兄弟は？」

キワメさんが俺の方へと振り向いて尋ねてくる。

「妹が一人……」

でもそれがなんの関係が……。

「お主の妹は何か特異的な何かを持ってはおらぬか？　たとえば、そうじゃのう……目とか？」

目？

もしかして、瞬間診察のことか……？

「あります。ポケモンの弱点を瞬時に見抜けます」

そこでキワメさんが笑みをつくるのと、若干眉を動かすのが見えた。

「ほぅ……珍しいのぅ。にしても、変わった能力じゃ」

でも、なんで目なんだ？　別に、俺はそんな……。

「お主が他とは稀なる才能を発揮したのは、最後のバトルの時じゃの。あの時、お主が開花させた稀なる洞察力の賜物……敵の一挙一動を全て把握する。そして敵の位置も的確にじゃ……さもなければ、あのキュウコンの【炎の渦】でポケモン達全員を仕留めることはできなかったからのう」

思い返せば、そうだったかもしれない。けど、あんまし覚えてはいない。

「それに【怨念】と【身代り】で敵ポケモンの技を封じると同時に囮としての役割を果たせる……なかなかの戦術でもあったしのう」

キワメさんがしっかりと俺の目をとらえて、続ける。

「人間は限界地点を突破し、その壁を乗り越えた時、何をしでかすかわからんからのぅ」

この時、俺は絶対にこの特訓をやり遂げてみせると自分自身に誓った。

「さしずめ、お前さんの能力は【イーグルアイ】かのう。じゃが、

若干違うような気もせんでもない。ミツルの奴め、面白いもんを持って帰ってきおった」

イーグルアイ。それがどんな意味を成すものなのかはわからない。

けど、

「ありがとうございます」

「ん？」

俺はベッドから起きあがって、ちゃんとしてキワメさんに一礼する。

「絶対に、奥義を伝授させてもらいます」

「お主結構図々しいのう」

「それが取り柄ですから」

やらなきゃならない。この世界を取り戻す為、ルカを迎えに行くためにも、絶対に。

「そうか。それなら、次の特訓に行くかのう」

「はい！」

2の島　ゲームコーナー：

「え？」

俺は昼なのにもかかわらず豪華絢爛な装飾で彩られたゲームコーナーを目の前にして、思わずたじろぐ。

そしてそんな俺の様子にお構いなしで、キワメさんは店内へと入っていく。

「ほれ、早くせんか」

「は、はい……！」

中に入ると、そこはさまざまなスロットの台とさわがしいＢＧＭが鳴り響いていた。

「キワメさん、一体ここで何を？」

いや、本当にここで何をするっていうんだ？

「もちろん、これじゃ」

キワメさんが杖代わりとして使っている杖が向けられたのは、やはりスロットの台。

「へ？」

キワメさんはさっさと自分の席へと座り、懐から大き目の袋を取り出す。

「見ておれ」

キワメさんがコインを一つ台へと挿入し、スロットを回す。

ぐるぐるとめぐる数字や絵文字の羅列に俺は一瞬目を回しそうになるが、キワメさんがそれぞれのラインのボタンを順に押していく。

７、７、７と。

まじ？

けたたましいファンファーレの音楽と共に出るわ出るわのコインの数。

３００枚の賞金コインがどばどばと下の方のスロットからあふれ出てくる。

「これを１０連続で出来るようになれば、特訓は終わりじゃ」

一体これが何になるのというのか？　はたまたなんなのか……この時の俺は理解できるわけがなかった。

第四章：打倒ロケット団　ＩＩ：タクティクスなる特訓（後書き）

お礼はまた活動報告の方で申告させていただきます。

ルカ「いつまで特訓編あるの～？」

もうちょっとだから、辛抱だよ。

ルカ「え～～～」

えっと、まあ、まだまだ全然ストーリーの序章な感じですが頑張っていきたいと思います。執筆スピードは速くなる兆しはまだないです。申し訳ありません。

ルカ「今お話書いてる暇でもないのにねー」

うぐっ……。

ルカ「それじゃーね、また～」

それでは！

第四章：打倒ロケット団　ＩＩＩ：スロットなる特訓（前書き）

遅くなっちゃいましたｗ

ケン「第四章が短すぎる」

まあまあ

ケン「ま、修行の成果を見てくれ」

そういうことですな。

若干忙しいかもしれないね

ケン「自業自得だろ」

ま、そうだねｗ

プレゼント問題実施中なのでもし良かったら挑戦してみてください。

では

第四章：打倒ロケット団　ＩＩＩ：スロットなる特訓

ゲームセンター：

キワメさんに言い渡された最後の特訓内容、それは……

『これを１０連続で出来るようになれば、特訓は終わりじゃ』

これ、とは即ちスロットにおいてのスリーセブン（７７７）を１０連続ということだ。

マジか……。

さっきキワメさんが稼いだ３００枚のコインを受け取り、俺は一台のスロットの前で鎮座する。

耳を劈（つんざ）くＢＧＭとスロット特有の音に包まれながら、俺は人生で初のスロットに挑戦する。っていうか、１８歳になってて良かったぜ。

スロットは列記とした風俗営業であり、確か協会の定めた風営法っていうのにひっかっかっている。１８歳未満は立ち入りはおろか、遊戯機の使用も禁じられている。

はじめてだけど、やるしかない。キワメさんはさっさと家に帰ってしまい、どうもこれは課題をクリアしなきゃいけないみたいだな。

若干高揚感も覚えた俺の指が早速スロットのコイン挿入口に台専用の金貨を入れる。

ガシャンという音と共に三つある列全てが回り始める。

ぐるんぐるんと回るスロット。

列それぞれの下に設置されたボタン……。キワメさんは瞬時にボタンを三回連打して見事７７７をかましだした。

なら、俺も。

おりゃ！！

流れる柄のパターンを意識して、７の赤い文字のくるタイミングを見計らってボタンを押す。

ピタっと止まったスロットが表示する文字は７ではなく、サクランボ。

ん？　サクランボ？　サクランボって、何だ？

俺は台に描かれているコインの枚数チャートを確かめる。

サクランボｘいずれかｘいずれか＝３枚

さ、三枚？　あ、でも二枚設けたわけか。

俺は多少なりとも挫けながら、残りの二つのボタンを押して出てくるコイン三枚を受け取る。

先は長そうだな……。

一時間後：

「む、無理だ……」

チャリン、と取り出し口に出てくるのはまたもサクランボによる3枚のコイン。

そして、これが最後の3枚となる。

一体、どうなってるんだ？　何回やっても、タイミングがずれる……。

俺は一旦目を瞑り、考えを巡らせる。

もし7を敵だと見做して、他のを敵の攻撃だとするなら……本体を見極めれば良い。そういうことか？

自分をそう納得させて、俺はコインを挿入する。

ガコンという音と共に、スロットがまたも動き始める。

流れる絵柄。一つ一つが敵の繰り出す攻撃。【影分身】による、ダミーだと思えば！！

敵の本体を掴む！！

ポチっと勢い良く押したボタンが止まり、左端の真ん中に7の文字が止まる。

よし！

この調子で！

知らない内に、俺はスロットにのめり込んでいた。

次第にバックで流れる音楽と他の人がスロットを回す音が俺を高揚させる。

汗ばむ手が、指が次の標的を定める。

おりゃ！！

7。

よし！！

最後だ！

並んだ7の二文字。これで念願のスリー7だ！！

ポチっ。

サクランボ。

一瞬目を疑った。なぜか最後の右の列には7が二つ。そして丁度二つある7の間にあるサクランボの絵で止まってしまっていた。

【身代り】からの【影分身】！？

さ、錯乱された……。

敵はなかなかに手強い……！

って、何やってんだ俺は……。

気を取り直して、もう一回。

チャリン。

またもや回るスロット。

俺は慣れたもので二つの7をドンピシャリと当てとめる。

問題は最後のスロット列。

こんなにスロットの前で難しい顔して悩んでるやつもそうそうい

ないだろうな。

なんてったってここでミスって次もミスったら自腹切るしかないんだ！

そんなのは決して俺の金銭感覚から言わせれば言語道断！

気合いの一発入魂を見せてやる！！

流れる絵柄から見える二つの赤き印。高速で行き交うダミー達には騙されず、俺の一手をお見舞いしてやる！

「おっと、ごめんよ」

その時、どんっとぶつかるのは後ろを通ろうとした客人Ａ。

肩が押され、俺の腕が前へと傾き、指はボタンの端っこを、標準のずれたままに押してしまう。

「うぇ？」

ポチっ。

……サクランボ。

まるでスロットが勝ち誇ったように、無言のままにを嘲笑しているように見える。

きっと後ろを睨んでぶつかってきた客人Ａを探すも、この混雑な人混みの中に紛れ込み、検討もつかない。

手元を見れば、キワメさんが使っていた１０００枚は入るという大き目のボックスにコインが一枚。

俺の足元には巨大なボックスが後二つ置かれ、傍から見ればかなりバカげた光景だろう。

何こいつ意気込んで１０００枚用を三つも持ってんだ？　コイン後一枚だしよー。なんて聞こえてきそうだ。

やってやる！

最後のコインに全てを託して、スロットが回り始める。

最初の二つの７はもうお手のものだ

俺は確認するように背後を振り返り、誰も近くで歩いている者がいないかチェックする。

そして再度最後の難敵へと向かう。

お前の錯乱攻撃はくらわない。俺が、お前を倒す！！

瞳孔が開き、俺がどんだけ熱中しているのかがわかる。けど、やめられないんだ！！

俺の人差し指が掴むのは確かなボタンの感触。

ポチっ。

７。

特殊な、ファンファーレを思い出させるような音楽と共に俺のスロットの台が輝き鳴りだす。

「おお！」

じゃらじゃらじゃらじゃらじゃらじゃら、と止めどめなく出てくる、出てくるはコインの濁流。

よし、これなら行ける！

十分後：

俺の両腕に重くのしかかるのは三つのコインケース一杯に溜まった３０００枚ものコイン。

受付のカウンターにどんっとコインケースを置き、受付の人の多少の戸惑いが通じてくる。

「お願いします」

多少、息を整えた俺は受け付けカウンターの後ろで並べられた景品を指さす。

「キセキの種、木炭、神秘の雫をください」

これがキワメさんに言われた、買ってこいと言われたもの。

「はい、かしこまりました。それでは少しお待ちください」

受付人がケースを装置へと入れて、コインのカウントを開始する。

ガシャンガシャンガシャンという音と共に、最後にピーという終了を促す音が聞こえる。

「お、お客様、申し訳ございませんが１０枚足りません」

は？

「スリー７を１０連続で成されましても、スロット一回にコイン一枚ですので結果的に２９９０枚となっているのです」

丁寧な説明に、俺は稼いだコインを一つを返してもらい最寄りのスロットでもう一度スリー７を成し遂げる。

『こんなんじゃ、うちの商売あがったりなんじゃ……。て、店長？』

バイトの受付人が店長の方を振り向いているのが見える。なんか、そんなことを言ってそうな顔だ。

いや、本当にすみません。

「これで、さっきの景品お願いします」

「は、はいっ！」

三つの景品を受け取り、俺はポケットの中へと詰め込む。

「後のコインは要らないので、後、多分もう来ませんから安心してください」

その時の受付の女の人のドキっとする顔と、なんだか頬を赤らめてこっちを見てくる視線に俺の方がドキドキしてしまう。

女性はちらりと隣の店長が他のお客の対応に勤しんでいるのを見て、俺の両手を掴んできた。

「え？」

耳元で囁くその人の声に、俺は一瞬意味がわからなかったが、でも彼女の悲しそうな目と笑みに頭が混乱する。

『おばあちゃんをよろしくね。それと、ごめんなさい』

彼女が残したごめんなさいという言葉。それが何よりこの人物がキワメの孫であることよりもひっかかってならなかった。

俺は多少なりともぽけーっとしながら、ゲームセンターから出る。

「早く、キワメさんに報告しなきゃ」

そう思い、俺は急ぎ足で岐波の岬で一つたたずんでいる家屋へと向かった。

満月が2の島全体を照らしていた。

キワメ宅：

がちゃっと扉を開けば、キワメさんが一人テーブルの椅子に座っていた。

「言われたもの、取ってきました」

俺はポケットから景品の三つを取り出す。

「ふむ、早かったのう」

杖をカッと床について、立ちあがるキワメさん。

「キュウコンを出すのじゃ」

俺はベルトからキュウコンのボールを取り出してキュウコンを出す。

「木炭を持たせてやれ」

俺はキュウコンに木炭を放り投げてやる。

かぷっと口の中でとらえたキュウコンは木炭を飴のように口に含んで、舌を動かす。

炎ポケモンにとっては木炭ってうまいのか？

「それじゃ早速外に出るぞい」

俺はキワメさんに続いて、外へと出る。

岐波の岬、俺がバンジーをさせられた場所の崖頂上部分ぎりぎりまで歩いていく。

「後はお主次第じゃ。炎タイプ系最強の最終奥義【ブラストバーン】。それはキュウコンに唱えてやるのじゃ」

キワメさんが俺と一向も視線を合わさず、ただ前方に広がる地平線を眺めている。

どうやら、ここが大一番みたいだな。

な、キュウコン？

「こんっ！」

意志疎通はばっちりってことか。

よし……。

俺は満月を一度仰ぎ、拳をぎゅっと握る。

「キュウコン……【ブラストバーン】！！！」

バチバチバチ！　と、キュウコンの口中が今までにないぐらいの火花を上げる。

勢い良く、肺にたっぷりの酸素を吸い込むキュウコン。

胸が若干膨らみ、キュウコンの赤い目がきっと見開く。

その後、俺が見たものは夜空を焼き尽くさんばかりの業火と空気を裂いて焼く炎の轟音。

これが……【ブラストバーン】。

この時俺の胸の中で、何かが熱くなって、体全体を包み込むように溶けていった。

「うむ、合格じゃ」

そんなキワメさんの声も、この幻想に心打たれていた俺には届きもしなかった。

第四章：完

第四章：打倒ロケット団　ＩＩＩ：スロットなる特訓（後書き）

ＨＧ，ＳＳだとスロットスリー７は１００枚なんですね；；

それでどんどんとコイン数がたまっていくという……

やりこめってことじゃないですか。

やりこんじゃいましたけどｗ

そんな感じで次回は裏かルカに戻るかどちらかです。

「裏」はそんなに時系列気にしてないのでどこに入れるかが問題なだけなのでｗ

それではまた次話でお会いいたしましょう

それでは

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　Ⅰ：いざ出港　いざS区へ（前書き）

ルカ「やっと私の番！」

お待たせいたしました。

ルカ「むぅ、まあでも先輩達が活躍してたんだからあんまし文句言わない」

おお、ルカ、大人になったな！

ルカ「だって、S区だもん！」

うぐっ……。この幸せ者

ルカ「わーい」

それではS区とは何か、どうぞ本編にて解き明かしてくださいw

ルカ「わーい」

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　Ｉ：いざ出港　いざＳ区へ

サント・アンヌ号：

煌びやかな船内。

右を向いても左を向いてもリッチリッチリッチ。

「ほわぁー」

私は情けない声を出して、通りすがりの婦人に見られて口元を隠されて笑われてしまう。

でもそんな笑い方をする人すら見るのが初めての私はぽかーんと眺めてしまう。

「ほえぇ」

すると見つめていた先にあるガラスにうつった自分を見て、私は絶句する。

「っ！！」

とんだアホ面を浮かべていた私は、すぐさまに表情を引き締める。

うぅ、恥ずかしい……。

私は早速受付なのかカウンターなのかフロントロビーなのかわからないけど、そんな感じのところへと行って説明を聞きに行く。

「あのー」
「はい、どうかなさいましたかお客様？」
ほぇ～、丁寧……。
「あ、えっと、これで乗船したんですけど……」
私はソネザキさん家でもらった無料乗船券を綺麗なお姉さんに見せる。
「失礼いたします」
両手で乗船券を受け取ったその人はカタカタとパソコンのキーボードに指を走らせる。
「ソネザキ　マサキ様のご招待ですね？」
「あ、はい……」
「それでしたらお客様にはＳ区の客室、Ｓ－３号室をお使いください。当船は今回が初めてでございますか？」
「はい」
「ただいまお付きの者を同伴させますので、こちらが認証キーとなります。ポケギア、ポケナビ、ポケッチに登録していただきますとそれを扉前で翳していただくことにより開閉が可能です」
おおー、すごい。
ちなみにこの時代、ポケギア、ポケナビ、ポケッチなどは最初に本人暗証を済ませる為、例え盗まれる、置き忘れるなどしても他人に使われることはない。そして故意に中のデータを盗もうとすると

データの全てが消去、あるいは契約した会社のデータバンクへと移送されるようになっている。

「どうぞ、当船での快適な旅をお過ごしくださいませ」

カウンターテーブルから一歩下がってお姉さんはお辞儀をしてくる。

「あ、こ、こちらこそよろしくおねがいしますっ！」

私も慌ててお辞儀をするも、勢い余って目の前のカウンターに頭をごつんとぶつける。

「あぅぅぅ〜〜〜」

「お、お客様、大丈夫ですか！？」

「あ、は、はいぃ」

なんかついさっきも同じことをしたような……。

なぜか受付のお姉さんはさっきよりも優しい笑みを向けてくれている。

あ、あはは……。

「それでは、お付きの者が参りましたので」

「あ、はい、ありがとうございます」

「それでは参りましょう。お荷物お持ちいたしますよ」

「あ、だ、大丈夫です」

「どうぞご遠慮されず」

「あ、じゃ、じゃあお願いします」

「お預かりいたします」

肩にかついでいたボストンバッグを赤と金のベストに純白のズボン、綺麗な装飾のされた黒い長袖制服に身を包んだキャリーボーイさんに渡す。

結構部屋は奥の方にあるのか、なかなかの廊下を歩いていく。もちろん、廊下は赤い絨毯で埋め尽くされて、端の方には鮮やかな金糸で様々な模様が描かれている。

「あ、あの、私の部屋ってどこなんですか？　S区ってきいたんですけど……」

いまいち良くわからないので詳しいことをきいてみる。

「当船サント・アンヌ号はお客様のご購入されたチケットによって区間が分かれております。C、B、A、S区と分かれておりまして、それぞれにサービスや施設内容が異なります」

「あ、えっと具体的に言うと……」

私は恐る恐る自分より背の高いサービスボーイさんに尋ねてみる。

「お客さまのS区は当船で一番ランクの高い区間でして、世界中のどの豪華客船をもってしましても、当船に勝るものはないと自負しております」

え、ちょっと待って、そ、そんなにすごいチケットだったのアレ？！

「更に言いますとS区のお部屋は全てで5部屋しかございません。

詳しい施設案内やランク分けのされたパンフレットが部屋にございますので、どうぞご参考になさってください」
「……は、はい」
私は呆気に取られるしかなかった。
「そんなにソネザキさんってすごいんですか……？」
「ソネザキ　マサキ様はポケモン転送装置開発の第一人者であられます」
それぐらいは知ってるんだえけど、結構親密にお付き合いのある人だから……そんな感じしないんだよね……。
「そして今まで不可能と言われた船や飛行船の旅にてのポケモン交換を可能にもされました。本当に人類の宝脳（ほうのう）と呼んでも憚（はばか）りません」
た、確かに……。移動中でもポケモンの交換ができたり、転送できたりできるのは結構大きなことかも。
「ソネザキ様のご紹介のお客様でしたら、S区への案内が最低限のおもてなしでございます」
「あ、ありがとうございます」
エレベーターの前に辿り着いて、そのまま乗り込む。というか、船にエレベーターあるんだ……。
そして降りてからもうしばらく歩いた後に私はS区と表示された区間へと辿り着く。
「S区へはS区にお泊りになられる方しか通ることができませんの

で、お知り合いやご友人をお通しになられる際にはお客さまのポケギア、ポケナビ、ポケッチより仮通行パスを送信していただけますとご同行していただけることができます」

Ｓ－３と書かれた豪華な風構えをした扉を前に、私は言われた通りにポケギアに渡された認証コードを入力。するとアプリとしてサント・アンヌ号のイラストが現れて、名前にキーと書かれている。私はキーアイコンを開いて、扉の前にかざす。

するとウィーンという自動ドアのような音と共に扉が開く。

私はキャリーボーイさんが腰を少し折って、視線を落としているので先に部屋へと入る。

「わあああぁぁぁ」

「気にいっていただけましたか？」

案内された部屋。それは凄かった。凄すぎる。

部屋に入るや否や両腕を広げるようにして伸びる空間は日光の優しい光によって明るく、部屋の一面を覆うのは海を一望できるガラス張りの壁。

太陽が燦々（さんさん）と照りつけているのに、見上げても目が眩しくなくそれでいてガラスも太陽光遮断用みたいに暗くなくていたってクリア。

ベッドは大きなキングサイズ。浴室までもが私の家の部屋の３倍は広い。

ソファは六人もの人が余裕で囲める程の数と平べったい木彫りのガラスが台となっているテーブル。

テレビもソファ側に一台とベッド側の天井にも一台、そしてお風呂のところにも一台設置されている。

ベッド脇にはオシャレな小さなランプ、そして大きなウォークインクローゼット。

更に、ミニバーまでもがあって……私、未成年なんだけど……。

「お荷物はこちらへ置いておきますね」

「あ、はい。ありがとうございます」

荷物が荷物置き場ようの無駄に広すぎるスペースに置かれる。

「それでは失礼いたします」

「あ、ありがとうございました！」

またもされるお辞儀にまたしてもお辞儀で返す私。駄目なのかな、これって？

とりあえず私は言われたようにパンフレットの類を見てみることにした。

豪華絢爛極まりないこの一室……。まだまだ発見がありそう。

わくわく

とりあえず一番上に乗っているパンフレットを開いてみる。表紙

にはサント・アンヌ号の写真と船内案内書とタイトルに書かれていた。

『本日は当船をご利用いただき誠にありがとうございます。以下が船内の詳細な地図となっております。ご質問がありましたらダイヤル１１か、各ロビーにお越しください』

私はすーっと船の内部構造を示す何面にも分かれたマップを見ていく。

S区、A区、B区とC区と分かれた色別ごとの詳しい配置を見ていく。

本当にS区を示す赤色のマークは少なくて、それでいても結構なスペースを誇っていた。

たった五室にこんなにスペースを取るなんて……すごっ。

そして下階にA区、そして更にもう一つの下階にはB区とC区が半々となっていた。

私がいるのは船のバルコニーを一階だとすれば、五階にあたる最上階である。

他のアミューズメント、レストラン、ラウンジ、バー、カフェ、ショップ、スポーツ、リラクゼーション、カルチャーなどそれぞれの分野に分かれての施設案内も丁寧に写真と共に書き添えられている。

「へぇ〜、これは持ってた方がいいかも」

じゃなきゃ、迷子になっちゃう……。

そして次に開くパンフレットはっと……えーっと、マナーとルールと書かれたパンフレット。

何々、

『船内ではドレスコードをしっかりと守り、他のお客様のご迷惑になりませんようご協力お願いいたします』

ドレスコード？

ドレスコードについて詳しく書かれたページを開いて、そこには数々の用語と服装にちなんだイラストが書きこまれていた。

『日中、寄港地にての服装』
『カジュアル』
『インフォーマル』
『フォーマル』

と、大まかに四つの項目に書かれており、夕方の五時以降は施設によってドレスコードがきちんと決まっている。

……私、持ってないよ、そんなインフォーマルやフォーマルな服装。

鞄の中にあるのは動きやすいレッグウォーマーやボトム、小さなジャケットやＴ―シャツばかり。スカートもあるけど、決してドレスみたいなのは持ってない。

後で、フロントの人に聴こうかな。あ、そういえば１１番押せばいいんだっけ。

そしてマナーの下の部分には更にたくさんの項目事項が連なっている。

『船内にてポケモンを出せる場所は限られております。規定としましては身長１ｍ５０ｃｍ以下で体重６０ｋｇ未満のポケモンのボールから出しての連れ歩きは可能です。更に、搭乗口ですでに荷物チェックをさせていただきましたので規定外のポケモンはボールから出すことはできません』

そういえば、乗る前に機械通しの荷物検査をしたような。あの時、ボールにロックとかかけたのかな？

私は時間のことなど忘れて、パンフレットを読みふけっていた。

リッチな船旅が始まるのだ！

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　Ｉ：いざ出港　いざＳ区へ（後書き）

ルカ「そういえばポケモンに関するのあんましなかったね」

最近そんなのばっかな気がしてならない……；；

ルカ「Ｋａｒｙｕのポケモン小説程ポケモン出ないのも珍しいよね」

うっ……；；

一番の難点です。

ルカ「次もまた私～♪」

俺もルカになりきった気持ちで豪華客船の旅をエンジョイしてやる！

ルカ「椅子に座って机に向かっているＫａｒｙｕが？　無理無理」

うるさい！！

ルカ「えへへ、じゃーね～」

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　ＩＩ：Ｓ区のお客様は特別なんです（前書

というわけでして、まったくもって話が進まないというｗ

ルカ「Ｓ区～」

なお、サント・アンヌ号編はちょっと長くなっちゃうかもしれませんｗ

フラグが立ちまくりますのでｗ

ルカ「確かに、船の中でストーリー固定ってないよねー」

まあ常に新しいと思うことに挑戦していくつもりですのでｗ

ルカ「それじゃレッツゴー」

どこに？

ルカ「買い物だよ！」

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　ＩＩ：Ｓ区のお客様は特別なんです

サント・アンヌ号：

「でておいでガーディ、シャワーズ」

「がう～」

「ふぃ？」

私はボールからガーディとシャワーズを出す。

途端にガーディは大きな室内を駆けまわり、シャワーズは窓を目の前に大海を臨んでいる。

「もう、あんまり騒がないでよ」

「がうっ」

「ふぃぃー」

私は一応忠告してからパンフレットの続きを読んでいく。

『お客様専用の施設として、天体観測（夜のみ）、プラネタリウム、ムービーシアター、フィットネスクラブ、談話室、ボーリング場、プール（屋外・室内）、テニスコート（屋外・室内）、カジノ、ショッピングモール、レストラン街、卓球場、温泉・スパ（サウナ有り）、ゲームセンター、ドリンクバー、エステ……』

うわー、たくさんある。

『そしてお客様のポケモンと共に楽しめる施設、イベントとしてポケモンコンテスト（一日一回）、フリーバトルフィールド（数に制

限有り）、ポケパーク、プール（ポケモン用）、エステ（ポケモン用）、フリースペース……』

これも中々たくさんあるんだなー。

『なお、週に一度トレーナー問わずのオープンバトル大会が行われます。是非、臨場感あふれるバトルの感覚をお楽しみください』

へー、バトルかー……。でも私じゃすぐやられちゃうかも。

船内設備のパンフレットを閉じて、お食事と書かれた方を次に手に取る。

「えへへー、お食事〜」

やっぱりこれが楽しみなんだよねー。あんましお金持ってないけど……え！？

そこで私は気付く……。この船の中じゃ、安いお食事でもすぐお金なくなっちゃうんじゃ……？！

お兄ちゃんからもらったお金は結構なものだけど、この船降りる頃には一文無しどころか赤字じゃん！？

おそるおそる食事のパンフレットを開く。

そして最初の一文に、私は驚愕する。

「あわわわ」

何も食事の値段に驚愕したんじゃない。そこに書かれていた一文に口が閉じない。

『S区のお客様に関しましてはどのレストラン、お食事処では全てが無料でおたのしみいただけます。そして全ての有料施設は無料でお楽しみいただけます』

うそ……？　本当？　え、本当と書いてマジ？？

「ガーディ、シャワーズ！」

「ガウ！？」

「フィ？！」

「ご飯がタダだって！！　なんでも食べて良いのよ！！」

「「……？？」」

私は立ちあがってガッツポーズをする。

あ、そうだ……。

「ダイヤル１１番〜♪」

ご飯がタダならもしかしたら……

気がつかないうちに私の中でこのタダという言葉が理性を外してしまっていたのだろう。

「はい、こちらフロントロビーでございます。ハヤミ様、いかがされましたか？」

ハヤミ様だってっ！

「あ、えっとドレスコードの説明を見たんですけど、私ドレスとか持ってきて無くて……」
「僭越ではございますが、お客様のお部屋のウォークインクローゼットの中にドレスや他服装を準備させていただきました。もしお気に召しませんでしたら、ショッピングモール内の服でしたらどれでも選んでいただけますので」
「そ、そうなんですか？」
「はい、S区のお客様は船内で売られております全品無料で提供させていただいております」
「……（ぽかーん）」
「お客様？」
「あ、はい、あ、ありがとうございます！」
「それでは、失礼いたします」

がちゃっと私は受話器を下ろす。

すーっと私は視線をクローゼットの方へと移す。

ソファから立ち上がってクローゼットの取っ手に手をかけて、開く。

「わぁ……！」

中をのぞけば十数着の服。

イブニングドレスやカクテルドレス。この季節で流行りのブラウスとスカートの組み合わせや、カーディガン、ドレッシーなズボンにシンオウコンテストの衣装用ドレス、清楚でいて動きやすい純白のジャージ、薄生地のコートまでも入っていた。

クローゼット下の引き出しには下着や二ーソックス、アンダーシャツに靴下までもある。

そしてなんと私の荷物配分を考えてのことなのか、私の持ってる服が丁度収納できるスペースがちゃんと設けられている。

でもある意味ちょっと怖いかも。……でも、大丈夫か。これもサービスサービス♪

とりあえず、船内散歩してみたいな。

「ガーディ、シャワーズ、行こ〜」
「がうっ！」
「ふぃ〜」

私はさっきマナーとルールの時に同伴させることのできるポケモンは二匹だって書いてあったし、大丈夫だよね。この服装だったら夕方五時までなら大丈夫だし。

私はウエストのポーチを旅行用じゃなくて小さい方へと取り変える。

もちろんそっちの方へ二匹のボールとポケギア、船内パンフレットとお財布にポーチが入っている。

ポーチの中身は何かって？　それは女の子の秘密なんだからっ。

「行こうっ」

私は二匹を引き連れて部屋の外へと出る。

「おでかけでございますか？」
「うあっ！？」
「がう！」
「ふぃい！！」

私が部屋の扉を出てすぐ傍で待機していたのか、さっきのキャリーボーイさんがいて驚く私。そしてガーディとシャワーズがその人に対して威嚇する。

「これは申し訳ございません」
「あ、えと、なんで？　何か用ですか？」
「はい。先ほどフロントの方へとお電話をいただきましたので」
「あ、それなら大丈夫です。なんかいろいろと用意してもらったみたいで、ありがとうございます」
「作用でございますか。それでは一つお客様に確認しておかなければならない事項が一つございまして」
「え？」

そう言いながらキャリーボーイさんは懐から電子パッドらしきものを取り出す。

「お客様は明日に行われますオープンバトル大会にご参加されますか？」
「あ、いえ。良いです。ただ見てみたいな～なんて思ってますけど」
「それでしたら客席をご用意しておきますので」
「え？　いいんですか？」
「はい。観客席が設けられておりますので」
「あ、はい。じゃあ、お願いします。何時からなんですか？」

そっか。明日がそのさっきパンフレットで読んだ大会のことなんだ。

「お客様のご都合の良い時間でしたらいつでもよろしいですよ」

「えっと、だったら何時から始まるんですか？」

「朝の八時から行われます」

「そんなに早くから！？」

「はい。毎週参加されるお客様が多いので。決勝戦のみをご覧になりますか？」

うーん……。ということは結構遅くまでやるってことだよね……。

「ベスト８の試合だと何時くらいからなんですか？」

「それでしたら夕方の六時頃になりますが、若干のずれはございます」

「だったら、その時ぐらいに呼んでもらってもいいですか？　場所とかも良くわからないので……」

「かしこまりました。それでは行ってらっしゃいませ」

あれ、なんだか私免疫ついてきてる？

なぜだかはわからないけど、キャリーボーイさんがお辞儀をしてくれたのに私はそのままガーディ達と共に歩きだしている。

なんか、嫌だな……。

「がう？」

「あ、ううん。なんでもないよ。それじゃ行こっか」

ポケギアを見ればもう四時近く。早くしなきゃドレスコードが規定されてる五時になっちゃうよ。

「ふぃ～」

「ん、どうしたの？　あ、そうだねー、どこにしようかなー？」

とりあえずS区を抜けてショッピングモールに行こうかな。

な、なんでもタダら、た、タダらしい、らしいし。

後ろめたさを十二分に感じながらも、私の頭の中ではそんな葛藤が渦まく。

ショッピングモール：

さすがはこの国随一の豪華客船。

店の羅列が半端ない。

右を見れば外国の有名なコスメのお店。左を見れば豪華な外国産のバッグのお店。

上を見上げれば中二階に設けられたお店の数々。

左上には高級チョコのお店。右上にはこの国には一店舗しかないといわれている洋服店。

「す、すごい……」

雑誌とかでは見たことあるのに、本当に今私はこういう場所にいるんだ。

サントアンヌ号の2フロア全てがショッピングモールへとあてられている為、その広さは想像を絶していた。絶している。

「どこから行こうかなー？」

部屋に置いてあったポケギア用のアプリを入れたため、船内の細かなマップをインストールした。でも、

「やっぱり、地図の方が見やすいよねー」

ウエストポーチから地図を取り出して、広げてみる。

なんか、周りからくすくすって笑い声が聞こえてくるけど、き、気にしない気にしない……。

そういえば、ドレスコード時間じゃなくても皆すごい服着てるなー。結構年配の人が多いけど、私より小さい子もふりふりだけど動きやすくてかわいらしいドレスを着てるし。男の子なんてセーターとシャツを合わせてのズボンといった可愛い成り立ちをしている。

目を巡らせて行きたい店舗を探す。

「あ、漢方のお店がある！」

私がそう言うと、ガーディは嫌な顔をする。シャワーズは「なんで？」といいたそうな表情を浮かべる。

「あはは、ちゃんとボールに戻してあげるから」

「がうぅぅ～」

「ふぃ？」

鼻の良いガーディにとって、漢方のお店はきついんだよね……。でも、私は行ってみたいし。

「それじゃレッツゴー」

「がう……」

「ふぃー」

ガーディの落ち込む姿にシャワーズが一生懸命元気づけようとしている姿がほほえましくて、つい笑みをこぼしてしまう。

「漢方漢方～♪」

でも、やっぱり……

普段見れないような漢方や秘薬が見てみたい！

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　ＩＩ：Ｓ区のお客様は特別なんです（後書

ルカがタダという言葉に汚染されはじめている；；；

ルカ「だ、だって、だってぇ！」

まあね。俺もきっとそうなるんだろうなぁ。でも、本当にそうなったとしたら他の人に申し訳なくなるよね。

ルカ「うん……。でも、でも！」

はいはいw

それじゃちゃんと楽しんできなさいな。

ルカ「わーい！」

次回はルカの初タダショッピングをお楽しみくださいw

多少次回でストーリーも進む予定です。はい；；；

ルカ「なんか、響き悪い」

え、そう？

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　ＩＩＩ：秘伝の漢方（前書き）

遅くなりまして、申しわけございません！！

ルカ「遅い！！」

ひぃ！！

ルカ「今度からはちゃんとしてよね」

はい。

ルカ「ポケ神の先輩達も一周年迎えていろんな人に祝ってもらえて、うらやましいな」

そうだね。でもルカ達もきっといつか祝ってもらえるよ。

ルカ「それまで続いてるよね？」

う、うん！

ルカ「何そのためらいは！！」

本編をどうぞ！

ルカ「あ、待てＫａｒｙｕ！」

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　ＩＩＩ：秘伝の漢方

サント・アンヌ号　ショッピングモール：

漢方豊、という漢方に熱心な人なら名門中の名門店が今、目の前にある。

「ほわぁ～」

自然と気分が高揚とした感じになるのは抑えがたい。すごい。

「んー。良薬口に苦しと名高いのは匂いも強烈だねー」

鼻孔をくすぐるのは漢方特有の匂い。でも、臭いじゃない。あくまでも匂い。

ガーディはさすがに限界みたいだけど……。

「戻って、ガーディ。シャワーズはどうする？」

「フィ～～～！！」

「あ、ごめん。戻って」

やっぱりポケモンは嫌いなのかな？

私は二匹のボールをウエストバッグへと戻して、店の中へと入る。

店の中は所狭しと薬棚が並べられている。隣国の中国という国から伝わった整理方法で、漢方や生薬はそれぞれに分類がされていて、棚に書かれている薬名と同じ場所に入れられなければならない。

龍脈という気の流れにも重みを置いている中国では、どの漢方がどの漢方の近くにあるかでその効力を増したりするという伝承があるって聞いたことがある。

店内も赤い薬棚が並べられて、その奥のカウンターに人影が見える。

「いらっしゃい」

私の来客に対応してくるのはおばあちゃんだった。

「ほぅ、漢方に興味があるかえ？」

「あ、はい！」

私は目がいっていた棚から視線を戻す。

「メディター志望かのう？」

「はい、そうです」

おばあさんは私に優しく語りかけてくる。

「あ、ごめんなさい」

とん、と私の背中にぶつかってくるのは私と同年代ぐらいの女の子。

黒くて長い髪が綺麗でさらさらしている。

「おや、また来たのかい？」

「はい。お願いします」
「いつものだね？」
「はい」
おばあさんとその子は面識があるのか、そんな感じの会話をする。
女の子はおばあさんが用意をしている間に私の方へと振り向いてくる。
「あなたも漢方？」
「え？　あ、うん」
その子のもっとも印象的な部分といったら、やはり着こなしている巫女の服だろう。
ハナダ神社の時、カナとも一緒にみた巫女さんの服を彼女は着用している。しかも、なんか高級感溢れるような生地が目に優しくも眩しい。
「わー、同い年ぐらいの子で同じ趣味があるなんて！　よろしくね！」
巫女姿の子が私の手を両手で握ってくる。
私は突然のことにあわあわとしてしまう。
「えーとっ……」
「あ、ルカです。ハヤミ　ルカ」
「ハヤミ……？　どこかできいたような……」

その子は何やら思いだそうとして頭を少し抱える。

「えっとー」

私は握られた両手を見ながら、ちょっと困ったように上目づかいでその子を見上げる。

「ああ、ごめんなさい。私はスグラノ　ハル。ハルって呼んでねルカちゃん」

輝いていて、眩しいくらいの笑顔でハルちゃんが微笑みかけてくる。

「う、うん」

でもその子のペースに乗りきれない私はちょっとおどおどしてしまう。

わ、私が他人のペースに巻き込まれるんて！！

そこでちょっとしたショックを受ける……。

「ハルちゃんは、どうしてそんな格好してるの？」

私はおばあさんがカウンターの裏の在庫室から戻ってくる間、話を繋げる。

ちょっと失礼だったかな？

「あ、これ？　私はね、アルセウス教なんだ。それで今日はその祝

日なの」

アルセウス教。聞いたことがある。

ううん、勉強したことがある。

「アルセウス教って……まだあったんだ」

「あ、ちょっと傷ついたよルカちゃん」

「あ、ご、ごめん！」

アルセウス教は昔に生まれた宗教。それで聖戦の後には様々な地方や場所から潰えたときいている。

私だって無宗教だし……。

「確かにアルセウス教って、ほとんど消えちゃってるけどちゃんとまだ信仰されてるんだよ」

自分の存在をアピールするようにくるりと狭い店内で回転してみせる。白い小袖と袴がふわりと遠心力で小さく浮く。

「へぇー……。そうだったんだ。ごめんね、知らなくて」

「ううん、今こうやって知ってもらえたから嬉しいよ。ルカちゃんも、興味ない？」

ぐいっと私を自らの袖元まで手繰り寄せて、小声で私に囁きかけるハルちゃん。

「ハルちゃん、勧誘？」

「んふふ、どうですかい？」

ノリの良い子なんだな。嫌いじゃない。

私はなぜか微笑んでしまう。

「ん、どうしたの？」

「ううん、ハルちゃんって面白いなって」

「……」

なぜか頬を赤らめるハルちゃんはそのままだんまりとなってしまう。

「はい、お待ちどうさん。これだね？」

奥から出てくるおばあさんが抱える小さな木箱にハルちゃんは反応してカウンターへと向かう。

「うん、ありがとうございます！」

「いいやいいや。またきんさい」

「はい！」

ハルちゃんは大事そうに木箱を両手で握っておばあさんにお礼を言う。

「それじゃあね、ルカちゃん！　また、会おうね！」

「あ、うん！　バイバイハルちゃん」

大きく手を振るハルちゃんはすごい勢いで店から出ていく。

「おやおや、もう友達になったんかえ？　若いもんはいいのお」

乾いていて、でも柔らかい声でおばあさんは笑う。

「あの、ハルちゃんが買った漢方ってなんなんですか？」

やっぱり興味が湧いた。

アルセウス教は、自然の治癒力に特化した医学に富んでいたことは知っている。というか、それぐらいしかしらないんだけど……。

その信者のハルちゃんが大事そうに買ったものは、やっぱり気になる。

漢方とは複数の生薬を組み合わせた方剤のことをいう。まあ、自然のものを用いてつくられた天然の手作り薬みたいなもののこと。

その種類は多岐に渡って、用法も全部全部が異なる。

昔の人は今みたいな医療技術が無かったからアルセウス教みたいに人間とポケモンが自然の中で生まれるのであれば、必要なもの全てが自然に宿り、循環するという理念のもとに漢方を用いた漢方医学が盛んになった。

「あの子が持っていったのは百年は生きるといわれるパラセクトのキノコからつくった漢方じゃよ」

「そ、そんなのがあるの！？」

パラセクトのキノコの胞子は猛毒であることで有名だけど、その胞子を漢方にもできることを授業でならったことがある。そして百年生きるということは、そのパラセクトもだけどキノコ自体の持つ

胞子が万能なことを示している。
強力な毒程効用がある。それは毒を以て毒を制すという考えにも関連している。
それは是が非でもお目にかかりたい。
「ああ。うちでしか仕入れない、このサント・アンヌ号でないと仕入れることのできない貴重な漢方薬じゃよ」
「こ、効果は！？」
百年生きるパラセクト……。それでいてあの少量しか手に入らない。どんな効用があるのかすんごい、すっごい気になる！
「パラスに生えておるキノコが冬虫夏草だというのは知っておるな？」
「うん」
「冬虫夏草の効用は、主になんじゃ？」
冬虫夏草。虫ポケモンに寄生する菌の一種。
「確か、健肺、強壮効果、そして抗がん効果だったような……」
「そうじゃの。しかし他にもパラセクトになるとな、万能薬として使われておる」
万能薬。それは医学界においては奇跡と呼んでも過言ではない薬。
「ほんとに……？」
「うむ、そしてそれをポケモンに用いることで様々な効用をもたらすのじゃ」

「ほぇぇ」

私は夢想してしまう。

そんなすごい薬があったなんて。

「それって、もうないんですか？」

「いや、あるぞ？」

「ほ、ほんとに！！」

「なんじゃ、欲しいのか？」

おばあさんの下から私を誘うような視線に、私は興奮によって若干汗ばんだ顔を縦に振る。

「うん！」

「よし、待っておれ」

ガーディ達には悪いけど、そんなレアアイテムが手に入るなんて夢にも思ってなかったし！

ハルちゃんの時に比べて断然にはやくおばあさんは戻ってくる。

「これじゃ」

出される小さな木箱の中には白い油紙に綺麗に包まれた茶色い粉塵があった。

「こ、これが」

「うむ、パラセクトの秘伝薬じゃ」

手が震えているのがわかる。

こんな、メディターでもない私が万能薬をもっている。

「も、もらえますか？」

声が震えるのもわかる。

「証明機を出してくれるかの？」

証明機とはポケギア・ポケッチ・ポケナビのことで今ではそれが個人のＩＤとして成り立っている。

「はい」

「ほぅ、あんたもＳ区かえ？」

「え？」

おばあさんが私のポケギアをＩＤ照合機とへ通す。

「さっきの子もＳ区なんじゃよ」

「え？」

ああ、だからあの子そのまま行っちゃったんだ。

「最近の若いもんは良い趣味をもっとるな。ふぉふぉふぉ」

手渡された木箱と共に、私はおばあさんにお礼を告げる。

「ありがとうございました」

「また、きんさい」

胸の高鳴りが治まらない。

か、買っちゃった……。ううん、手に入れちゃった……。

はわぁ……感動。

店から出て私は仰ぐ。

えへへ。

私はポーチに大事に入れて、マップを見直す。

「えっと、次はどこへ行こうかな――――？」

そう思った矢先に、館内アナウンスが流れる。

『サント・アンヌ号乗船の皆様、後１５分程でドレスコードのお時間となります。規定されました服装で残りの一日を満喫してくださりますようお願い申し上げます。繰り返します。後１５分程で――――』

あ、そっか。もうこんな時間なんだ……。

今日はもう部屋に帰ろっかな。

私はさっさとＳ区へと戻る為に歩き出す。

豪華絢爛な船内は乗っている人も紳士婦人の方ばかりで、恐縮しちゃう。

なんか私がS区にいてもいいのかなっていうぐらいだし……。

でも、折角だし楽しまなきゃ損だよね。

うんうん。

私は自分の客室へと戻って、ナイトガウンをドレスの上に羽織る。

「わー、凄いきれい」

ちょっとハルちゃんの真似をして一回転とかしてみる。

ふわっと体にまとまりつくけど優しい感触をもたらすドレスの生地……。そして暖かいにもかかわらず、そんなに肩に重みを感じないガウン。

私って、セレブ？

そんな妄想が駆け巡り、私は夜のサント・アンヌ号へと赴く。

さ、ごはん、ごはん～♪

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　ＩＩＩ：秘伝の漢方（後書き）

なるべく更新を早くしたいと思います。

ルカ「秘伝薬～♪」

満喫しているのでルカのご機嫌はきっともう少し長く続くでしょうｗ

ルカ「るんるん～♪」

それでは次回ｗ

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　「裏」：鋼が追いし最強の男（前書き）

このお話はアニメでお馴染みなキャラ達を導入して構成されました。
というかゲームとポケスペ諸々を混合しているのでややこしくなってしまったかもしれませんが楽しんでくだされば光栄です。
それでは早速どうぞ！

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　「裏」：鋼が追いし最強の男

世界はロケット団によって掌握された。

その驚愕の事実に絶望する者は少なく、リーグ協会のチャンピオン達も承諾したこともあり国民の動揺は大きくなかった。

それはつまり国民の生活にもなんら変わりが及ばなかったことを示唆していた。

ルカが乗船しているサント・アンヌ号も運営はロケット団が担っているが、経営方針に変わりはなく、ただ税金が今までの協会へではなくロケット団へと流れていくのであった。

ロケット団は確かに人々の日常に恐怖を植え付けた。しかしそれが自作自演で事態の収拾を行ったにせよ、国民は騙された。

一体ロケット団、否、サカキが何をしようとしているのかは一市民の知るところではなく、感付いていた反乱分子も今や沈静化されてきている。

ルカが自分の親友であるカナを助ける為にホウエンへと向かう最中、ケンとミツルは独自に準備を進めていた。

そして、ホウエンのこの男も――――。

シロガネ山：

太陽が雲に覆われ、薄い霧がこの山岳地帯を覆う。

その頂で、対峙する二人の人間。

「君は誰だい？」

底知れぬ実力を漂わせる一人の青年。

赤い帽子に所々に千切れた青と白のジャケット。

彼の足元で木の実を齧っているピカチュウも、笑顔を浮かべながらも圧倒的な強さを誇示しているような風貌をしている。

年で言えば、ハナダジムリーダーのカスミと同年齢。

逞しく成長した体つきが、彼が並ならぬ者であることを主張している。

「ツワブキ　ダイゴだ。ホウエンの元チャンピオンと言えば良いか

な、現状ではな」

荒く、ボサボサとなった銀髪が黒いクロークジャケットから覗く。

「そっか。もう何年も下山してないから、良く知らないんだけどね」

黒いナックルグローブでピカチュウの頭を撫でる青年。

「君に協力をお願いしたくてな」

ダイゴが一歩、一歩と青年の方へと歩を進める。

「僕にですか？」

あまり抑揚のなく、興味がなさそうにそう青年は尋ね返す。

「ああ。ロケット団を覚えているだろ？」

ダイゴは右手の乙を広げるようにして青年に呟く。

「っ」

青年はぴくっと反応する。

「あいつらが他のチャンピオン達と一緒になって世界を支配している」

ピカチュウの頭を撫でていたのを一旦止めて、青年はわずかに俯き加減にダイゴに尋ねる。

「シゲルが？」

シゲルの名を口にする青年の言葉は重かった。

「ああ。オーキド　ユキナリがロケット団のボス、サカキと手を結んだのは君でも知っているだろう？　マサラの悲劇……」

「っ！？」

きっと、柔和な性格の青年がダイゴを睨む。

彼のピカチュウがぴくっと右耳を動かす。

「世界は安定している。でもな、彼らがやろうとしていることは無視できない。阻止してみようとは思わないか？」

あまり寝ていないのだろうか？　ダイゴの視線がぎらりと鋼銀色に光るような眼光を青年へと向ける。

「あなたが何を目論んでいるのかわからないですけど、そうですね……久しぶりにシゲルに会ってみたい気がします。ね、ピカチュウ？」

「ぴかっ！」

ふぅ、と一つ安堵のため息をつくダイゴ。

「そうか、ありがとう。礼を言う」

精一杯の謝意を込めて、ダイゴが頭を下げる。

「しかし君はなんでこんな山奥に何年もいるんだ？」

そう、ダイゴは何年も前からこの青年のことを探していた。
サカキの企みに感付いた時からダイゴは保険として当時はまだ少年だった彼のことを追っていたのだ。
当時、最強とまで言われたトレーナーを。
「修行ですよ」
青年は若干陰りを含めた苦笑をダイゴへと向ける。
「君程の熟練者なら修行なんてしても変わりはないと思うが？」
そう口にするダイゴ。だが、彼は青年の心中を察していた。最強であるなら、更なる高みを目指そうとする心意気を。
だが、ダイゴの見解は若干的を得ていなかった。
「僕はもう他人とバトルをしても楽しくなくなったんです」
唐突に、青年はそう告げる。
「いつからかな？　シゲルとも戦って、いろんな四天王の人やチャンピオンと戦って、勝利した。ただ我武者羅（がむしゃら）に強くなってやるって思ってました」
ピカチュウが青年の足元を伝って肩へと乗る。
「でも、たくさんバトルをしていく内に皆が僕から遠ざかっていく

ような……そんな気がしたんです」

ダイゴは青年に自分と似たところがあると感じたが、まだ口を紡ぎ青年の言葉を待つ。

「最強っていわれて、でも僕は他の人達と満足のいく、最後には手を取り合って笑いあえるような……そんなバトルがしたかったのに」

ピカチュウが青年の頬を自分のと擦り合わせる。

「だから逃げたのか？」

ダイゴは静かに青年を見据えて言及する。

「バトルでお互いが楽しみを共有できるとは限らない。誰もが僕と戦って世界の終焉を目にしたような、そんな顔をする。それで、僕はまた独りぼっちになるんだ」

言い訳か、どうなのか、しかしダイゴは青年へと大きく一歩近づき大声で喋りだす。

優しげな笑みでピカチュウの顎を撫でていた青年はダイゴの挙動に一瞬身を固くする。

「君は臆病者だな。そんな力を持っていて、結局は世間から怖くなってこんな場所へと逃げたのか」

ダイゴはぎしりと奥歯を噛みしめる。

「僕はただ、待つことにしたんです。最強を目指したいトレーナー

の挑戦を待つことに」
「それを逃げだと言っている！」
喝を入れるような怒声がダイゴの口から漏れる。
青年は目を見開いて、そのまま堅くなる。
「最強っていうのはな、他から認められ、そして他を守ることではじめて成立する。君は他から認められはしても、結局は自分の身のことしか守ることを考えていなかっただけだ！」
まるで苦汁をのみ込むように、ダイゴは正面から青年を睨む。
「……っ」
青年はぎゅっと拳を固く握る。
「なら、なら僕には戦う意味がないじゃないですか」
そう、もし彼が最強であっても他を守ろうという意志がなければ青年が戦う理由などないのだ。
「やはり、一緒に来て正解だったみたいだな。なあ、カスミくん？」
ダイゴは振り向くと同時に、そこに立つ五人の女性の一人に語りかける。
「え？」
青年は聞き覚えのある名前にはっとなって俯いていた顔を上げる。

「もう、サトシったら……。やっぱり私がいないと駄目みたいね」

長く下された橙色の髪は、十年前に比べて荒さも無くなりいつまででも撫でていたくなる質感を漂わせていた。そしてカスミのプロポーションも以前とは比べ物にならないほど、大人のそれであった。

「カス、ミ？」

まるで夢を見ているかのような、そんな幻想に青年、否、サトシは囚われそうになる。

「ぴっかー！」

サトシのピカチュウが肩から飛び降りてカスミの腕の中へと飛び込んでいく。

「ピカチュウ、久しぶり！」

「ぴっきゃ～」

甘えるように、ピカチュウはカスミの胸の中で甲高い声で鳴く。

「な、なんで……？」

サトシは震える手でカスミへと差し延ばそうとして躊躇う。

「その理由については俺が話そう」

発された声の方を向けば、ダイゴがサトシの問いかけに答えていた。

「簡潔に言えば、今から俺達六人と君、そして後から合流する数人とで世界をロケット団から取り返す」

そう言いきるダイゴ。

サトシはダイゴのことを見つめ、そしてカスミの方へと振り向く。

二人の視線が交差し、カスミは力強くサトシへとうなずく。その瞳に、彼女の髪色にも劣らない燃える意志の塊をサトシは垣間見た。

「……ここ寒いです」

そしてそんな張りつめた空気を一言で瓦解させる人物が一人。

「ナツメ、あんた緊張感ってのがないわけ？　空気を読みなさい」

先程のナツメの発言を咎めるのは元四天王のカンナ。

「カンナも退屈だからって煙草は駄目よ？」

そしてカンナの喫煙の是非を問うのは元タマムシジムリーダーのエリカ。

「ナツメさんの言うとおり、寒いですよここ……」

そしてナツメの横で震えるのは元セキチクジムリーダー代理のアンズ。

彼女達は以前の時のような黒尽くめのスーツではなく、各々が好

んだ私服を着用している。

「あ……皆さんも……」

サトシは懐かしい面子に胸打たれそうになるも、ぐっと堪える。

「今では彼女達も俺もこの国では追われる身だ。手伝ってくれるかい？」

ダイゴはサトシへと一本の腕を差し伸べる。

サトシはダイゴの右手を目視し、数秒の後にぎゅっと握る。

「はい。こんな僕でよかったら」

ダイゴはふっと笑って、視線を逸らす。

「ありがとう」

そう言って手を放し、先陣を切ってボールからボーマンダを取り出す。

「先に下山する。落ち合うのは下のポケモンセンターだ、いいな？」

そう言い残し、ダイゴは早々と山を下りていく。

ここシロガネ山のポケモンセンターはその過酷な立地条件の為にほとんどが世間とは切り離されており、扱いも他とは違う。

その為に、例え協会の管理する公共施設であってもこのポケモン

センターならば重罪人でも堂々としていられ、守秘義務も高いのだ。
だからこそダイゴもサトシがどこへ潜んでいるのか時間がかかったのだ。
サトシは自分のピカチュウの元へと歩みよる。
それに気付いたカスミは謝りたそうな、そして嬉しさ一杯を込めたような笑みを浮かべる。
「おかえりなさい、サトシ」
「……ただいま。ごめん、カスミ」
「ううん、ごめんは私の方だから」
サトシとカスミのそんなやり取りにカンナとエリカは大人な視線で笑みを深め、エリカとアンズは身を震わせながら「寒い」と行動で表現していた。
「ぴっか！」
お互いの再会を真に喜ぶピカチュウは、元気の良い声でそう鳴く。
サトシとカスミもお互いに笑みを交わし合う。
彼らの再会を祝福するように、雲が晴れていただきを優しく照らし包んだ。

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　「裏」：鋼が追いし最強の男（後書き）

サトシがケン以上に活躍しちゃうかもしれませんが、二次創作な為
いろいろと遊んでみようと思ってますw

ルカ「バカ兄なんて無視していいよ」

だそうなのでw

それでは次回はルカの鯨飲馬食……。ホエルオー飲み、ギャロップ
食いっていうのかな？w

ルカ「むっ……。そ、そんなに食べないもん！」

お楽しみにーw

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　Ⅳ：たくさん美味しいものが食べれる場

まず、皆様に謝罪することがあります。

ルカ「へぇー」

今回のお話、尺的にルカの食事シーンはありません。

ルカ「そうなんです（よかったぁ……）」

ですが次話にあります。

ルカ「えー」

それと、もうひとつ……

ルカ「なに？」

ポケモンが出てこない；；

ルカ「まあ、今にはじまったことじゃないし」

……；；；

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　Ⅳ：たくさん美味しいものが食べれる場

サント・アンヌ号：

私はドレスに着替えた後、室内にあった外出用のドレスとマッチするポーチと一緒に部屋を出る。

そしたらそこに前に部屋を出た時に対応してくれた人が出迎えてくれた。

「ハヤミ様、これからお食事ですか？」

「あ、はい！」

礼儀正しい物腰で男の人が待遇してくれる。

「あの、えと、どうして？」

私はこの人がなんで出迎えてくれたのかに疑問が浮かぶ。

「失礼いたしました。ドレスコードのお時間でしたので……。それとS区のお客様は私達（わたくし）が付き添いとしてお供いたしますので」

「え、え？　い、いや、そんな、いいですよ！」

私は両手を突き出して大きく交差させながら振る。

「いえ、これも私達の務めですので」

深々と腰を曲げるその人に、私は本当に申し訳なくなる。

「あの、絶対ですか……？」
「はい」
にっこりと柔和な職業スマイルを向けてくるその人の責務を断るわけにもいかず、私はちょっと肩を下す。
「それでは参りましょう、ハヤミ様」
「あ、はい。あ、えっと――――」
静かに私の後ろについてくるその人に、私は――――
「コクドウと申します」
「あ、コクドウさん。よろしくお願いします」
緊張はするけど、良い人そうだし。それに、S区にいる人ってのは大体こういう生活に慣れてるからこういうのに違和感とかないんだろうな。
そんなことを思いながら、私はハルちゃんのことを回想する。
ハルちゃんもそうなのかな？
「ハヤミ様、今夜はどこでお食事されますか？」
コクドウさんにそう言われてはっとする。そうだった。ごはんだよ、ごはん。
「あと、えっと、たくさん美味しいものが食べれるところってありますか？」

私より背の高いコクドウさんに、そしてこの船内を熟知してあろうであろうコクドウさんに私はそう尋ねる。

だって、決めれなかったんだもん。

「そうですね。ビュッフェスタイルというのはいかがでしょうか？」

ビュッフェ……。

おいしいし、たくさん食べれる……。あ、やば、よだれがっ……。

「あの、ハヤミ様？」

「そこにします！」

「……かしこまりました」

ば、ばれてないよね？　よ、よだれ……。

誤魔化すようにして私はコクドウさんについていく。ついていくといってもやっぱり付添人としてのマナーなのか、半歩前という絶妙な歩幅を利かせている。

S区の区間から出て、エレベーターでそのままお食事処と称されるエリアで降りる。

すると、ショッピングモール並の広さを有しての、右向け左向けにずらーと並ぶレストランや喫茶店がそれぞれに独特の雰囲気を醸し出してお客へとアピールしている。

「ほわぁ、すごい……」

石を投げればお店に当たる。それぐらいの凄さだ。

「ハヤミ様、こちらです」

「あ、はい」

コクドウさんにそう言われて我に返る。それと同時に、たくさんの視線を感じることとなる。

「まさか、あの子供がっ……？」

「まあ……」

「なんでだ？」

「しかし、世の中わからんな」

「いいじゃない、かわいらしいお子様よ？」

「一体どこの御子息なんだ？」

そんな陰口が否応無しに耳へと流れ込んでくる。

「うぅっ……」

私は居づらくなって、ぎゅっとドレスの裾を握る。

「大丈夫ですハヤミ様。ハヤミ様はS区のお客様です。私めが何不自由されませんようお勤めいたします」

「あ、ありがとうございます」

私は不安と安心感を両方共に胸の中に仕舞い込んで、背筋を正してコクドウさんについていく。

数分程歩いて、辿り着いたのはどこかの外国の高級そうなレストランの入り口前。

高級そうってわかるのは、シックな感じがしていて装飾が質素な色にもかかわらずなされている細微な模様などが浮かび上がっているから。

対応してくるウェイトレスの人もコクドウさん同様に、すっごく丁寧な物言いで対応してくれる。

「S区のハヤミ様ですね。かしこまりました。それではこちらの方へどうぞ」

「あ、はい」

私は小脇にメニューを抱え、右腕を店内の中へと伸ばすウェイトレスに案内されてレストランの中へと入る。

「いってらっしゃいませ」

後ろを振り向くとコクドウさんがお辞儀をして私を見送ってくれる。

私はただ無言でコクドウさんを見つめて、振り返る。

こういう時に、どう言えばよかったんだろう？　御苦労であった。とか？

うぅ、難しい……。

「こちらのお席となります」

案内通されたのは海を展望できる窓際の席。サント・アンヌ号自

らが発する豪華絢爛なイルミネーションのライトが海を照らしあげている。

私は席を引いてくれたウェイトレスさんにちょこんと頭を下げてそこに座る。

「こちらがメニューとなっております」

左手の方からメニューが差し出されて、目の前に置かれる。

「当店はビュッフェスタイルですので、お好きなだけお召し上がりいただけます。もしそれがお気に召しませんでしたら、こちらのメニューよりお好きなものをご注文いただけます」

丁寧な説明を私は必死に聞きそびれないようにしてうなずき返す。

「先にお飲み物をお運びいたしますが。何になされますか？」

私は開かれる細長くて小さいメニューを受け取る。そこにはずらーと並んだお酒の数々……。発泡酒、カクテル、日本酒、ワイン、ウィスキーなどが膨大なリストをつくり、最後のページにもフレッシュジュース、ソフトドリンク、日本茶、紅茶、コーヒー、天然水と別れていた。

「あ、じゃあ、この特選パッションジュースで」

「かしこまりました」

ウェイトレスさんが頭を垂れて、立ち去っていく。

「ふぅ……」

私は初めて味わう微妙な緊張感に肩を下して、息をつく。

緊張しちゃうと人間の筋肉は強張るって言うけど……ほんとだ。

腕を掴んでみて、その状態を確認してしまう。

ジュースが運ばれるまで待つことにして、外のイルミネーションを堪能しようとしていたら窓越しの店内の反射の向こうに見知っている姿の子が現れる。

その子も私に気付いたのか、大ぶりに手を振ってこっちに駆け寄ってくる。

私は反射的に首を振りむいて、近寄ってくるその人物……ハルちゃんを目視する。

「ルカちゃんじゃん！」

「あ、ハルちゃん」

ハルちゃんの後ろの方からはしたないですよ、ハル！　と叱りながら歩いてくる年配の女性が一人。そしてまあまあとその女性を宥める年配の男の人がついてくる。

「あ、お父様、お母様、この方は先程お話いたしました漢方屋で出会ったハヤミ　ルカさんです」

いきなり変わったハルちゃんの口調に私が置いてかれてしまう。

「あら、そうでしたの？」

「ほぉ、君が！」

ハルちゃんの御両親がそれぞれに合点がいったようにうなずいて、私の方を改めて向く。

「はじめまして、私、スグラノ　ハルの母親のスグラノ　アキホと申します」

「同じくハルの父親のスグラノ　トウキだ。よろしくね、ルカさん」

二人のかしこまった挨拶に私は反射的に席から立ち上がって、

「は、はい！　こ、こ、こちらこそよろしくお願いします！　きゃっ！」

勢い良く立ち上がったせいか、私は椅子の脚にじぶんの足を引っ掛けてよろめく。

「あ、ルカちゃん！」

咄嗟に近くにいたハルちゃんが私を支えてくれて、なんとか転ばずに難を逃れる。

「あ、あ、ありがとう……」

「ううん。ルカちゃんって結構おっちょこちょいなんだね」

無邪気な笑顔を向けてくれるハルちゃん。でも、うん、そうですよ、おっちょこちょいですよ～だ……。内心でそういじける私はやっぱまだ子供なんだろうな……。

「ところで、ハヤミさんはお一人？　ご両親の方は？」

アキホさんにそう尋ねられて、私は返答に躊躇してしまう。

私のその表情で察せられたのか、アキホさんが、

「ごめんなさいね」

と即座に言ってくれる。

「あ、いえ……」

そう、私の家族。お母さんはまだ行方不明だし、バカ兄は、お兄ちゃんは私を置いて行ってしまった。

アルセウス教の一環なのかはわからないけどハルちゃんは巫女服を着用し、アキホさんとトウキさんは和服に身を通している。

「ルカちゃん、一緒にお食事しない？　いいですか、お父様、お母様？」

ハルちゃんが私の手を握って、軽く振りながらそう親に尋ねる。

「ハヤミさんがよろしければ、ご一緒いたしましょう」

「そうだね。ハルにもお友達ができたみたいだし。それにこんな可愛らしいお嬢さんをお誘いしないのは勿体無いからね」

トウキさんの讃辞に私は若干頬を照らし、ハルちゃんは笑いながらトウキさんに言い返す。

「もう、お父様ったら」

そして私のパッションフルーツを運んでいたウェイトレスさんが事情を察してくれて、私達四人を別の大きい方のテーブルへと案内してくれる。

一人だけドレスっていうのが、なぜかこのテーブルだと浮いてしまうのになんだか居心地の無さを感じて仕方がないけど、折角のお誘いだしなぁ……。

私の隣に座るハルちゃんが私の方を向いて、話しかけてくる。

「ねぇねぇ、ルカちゃんはあの漢方屋さんで何を買ったの？」

そういえばハルちゃんは先に店から出ていったなーと思い返して、自分の購入したものを思い返しては、若干俯いてしまう。

「え、どうしたの？」

ハルちゃんが心配してくれるような声で語りかけてくる。

「あ、え、えっとね……。わ、私もハルちゃんとおんなじのを買っちゃって……」

その私の一言に、何か空気に一線の稲妻が駆け巡ったようなそんな違和感に陥れられる。

「え、まさかあのパラセクトの？」

トウキさんが目を少しだけ丸くしながら私に問いかけてくる。

「あ、は、はい」

トウキさんおアキホさんがお互いに目線を交差させ、アキホさんが尋ねてくる。

「もしかして、お店の前の執事さんはあなたの？」

執事、ということはコクドウさんのことだろうか？　それなら、

「はい。そうです」

アキホさんとトウキさんがお互いに驚きを隠せないなか、ハルちゃんだけは笑顔で私の両手を掴んで目を輝かせる。

「それじゃ、ルカちゃんもS区なの？！」

「う、うん……」

そう答えるや否や、ハルちゃんが私に抱きついてくる。

「え、え？」

私が困惑する中、ハルちゃんは私の耳元で呟く。

「すっごい偶然だね！」

そのハルちゃんの言葉に、私はその意図を察して嬉しくなった。

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　Ⅳ：たくさん美味しいものが食べれる場

次話、必ずルカの食べ放題っぷりをご堪能ください。

ルカ「お腹すいたしね」

そうだねw

ルカ「いいたべっぷりをするよ！」

開き直ったねw

ルカ「だって、すんごいおいしそうなんだもん！」

俺も行きたいな、ビュッフェ……

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　Ｖ：お腹一杯の幸せ（前書き）

長らくご無沙汰しておりました。

ルカが拗ねてしまいましたので、今回の前書きは俺が……。

メディターは医学に沿って書いているのと俺が目指すのはリアリティなのでその二つはご了承ください。

最近パソコンのスペックが落ちたのか、執筆するのがかなり遅くてイライラしてます；；

キーが重い；；

ですが、どうぞｗ

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　Ｖ：お腹一杯の幸せ

サント・アンヌ号：

私はハルちゃんとハルちゃんのご両親と一緒のテーブルにいる。

とっても優しそうなご両親で、ハルちゃんは凄いお嬢様じゃないけど上品な振る舞いをしている。

「ルカちゃん、ごはん取りにいこ」

「あ、うん」

ハルちゃんが私の手を取って、私は立ち上がる。

「それではお父様、お母様、行って参ります」

「はい、行ってらっしゃい」

「ゆっくり吟味すると良い」

「はい」

ハルちゃん一家のやり取りを右耳で聞きながら私はすでに前方に並べられた銀ケースに入れられた数々の料理に魅了されていた。

「ルカちゃん、よだれっ」

「っ！！」

咄嗟に口元を覆って、じゅるっという音が微かに口の中で響く。

「あはは、うそだって」

「も、もぅ！」

微笑みを浮かべながらからかうハルちゃんに私は恥ずかしくなってちょっと大声を出して誤魔化してしまう。

『ば、ばれてないよね……？』

そんなささやかな疑問が浮かぶも、またも視界に入りこんでくるレパートリーの数々に圧倒される。

もちろん、私達が食べる食料にポケモンは含まれてる。

ううん、ポケモンだけどポケモンではないもの。

「あ、この蟹の蒸し焼きおいしそうだよ」

ハルちゃんがヘイガニの身が解されて小さな貝の上で蒸し焼きにされた一品をお皿に寄せている。

そう、ポケモンでポケモンでないもの。

俗に言われる牛（ビーフ）、豚（ポーク）、羊（ラム）、鶏（チキン）、魚の類の魚肉類はポケモンを材料にしているという概念を和らげる名称として浸透している。

既存の選別されたポケモンのクローンの生産……それが私達人間が一般に食として食べているものである。

昔はそうではなかった。

野生のポケモンを人間が自分達のポケモンを使って狩りをして、皆で感謝して食すのが自然だった。というよりも、昔この世界には

動物という生命体が存在していた。しかしポケモンへと進化を遂げていく上で動物達はポケモンとの生存競争に競り勝つことはできず衰退、絶滅したのであった。

そして人は現代において遺伝子の解明を成し遂げ、ポケモン達が昔どの動物から進化してきたのかを解明。その遺伝子情報を元に食用のクローンを生み出している。

あ、あんまりご飯前にこんなの思い出すんじゃなかったな……。

若干自分を責めながら、私もハルちゃんと同じものをよそっていく。

「あ、みてみてこのふわふわタマゴの厚揚げだって」
「おいしいの？」
「ルカちゃん食べたこと無いの？」
「う、うん……」

私はハルちゃんがトングで掴んだ、そのふわふわタマゴの厚揚げを持つ手が震えているのに気付く。

ハルちゃんは頭を俯かせて、わなわなと肩を痙攣させている。

「ハルちゃん？」
「めっちゃくっちゃおいしいんだよ！」

危うく声を発してしまうところだった。

び、びっくりさせないでよ……。

「ほらほら、ルカちゃんも食べなって」

ハルちゃんが私のお皿にその料理を乗せてくれる。

「あ、うん」

ハルちゃんが私の方をじーっと見ながら、微かにだけど眉を寄せている。

「ルカちゃんってさ……」

私もハルちゃんの方をむいて、

「え？」

と聞き返す。

「S区には見えないよね」

乾いた笑みが私の中で漏れる。

「あ、あはは……。招待だから」

「え、誰の？」

言っていいのかな？　わからないけど、いいよね。

「ソネザキさんって、知ってる？」

「もしかして、マサキさん？」

あ、ハルちゃん知ってるんだ。やっぱりマサキさんってすごいん

だなぁー。

「うん」

「凄い、凄い！」

ハルちゃんのいつにないはしゃぎっぷりに私は思わずたじろぐ。

「それじゃ、もっともっと聞きたいことあるから早くお料理取って戻ろうっ」

ハルちゃんのテンションが上がる。

私はハルちゃんに遅れを取れないように、手当たり次第に料理を乗せていく。

「ちょ、ちょっと、待って！」

お皿の淵から溢れていないことを確認した私は元のテーブルへと戻る。

ハルちゃんのお父さんとお母さんはビュッフェじゃなくて、個別に注文を済ましてもう食べ始めてた。お箸で……。

「いただきます」

「い、いただきます」

とりあえずご飯に専念するのかな。ま、いいや、食べます！

フォークとナイフで淡水魚のソテーを口へと運ぶ。

「……おいしぃ」

ぼそっと口から声が漏れる。

臭みの残るはずなのに、まったく違った風味が口の中で広がる。それは身に引き締まりがあろうとも舌の上で切り身を転がせばほどけて、滑らかな食感が溢れる。

かかっていた黄色いソースがちょっとした酸味と蛋白な風味をトッピングしていて、一層この一品を際立たせている。

「んふふ、気に入った？」

箸を片手で上下に開閉させてみながら、ハルちゃんが私の方を覗き込む。

「う、うん……おいしぃ」

頬が溶けて落ちちゃうという本当の意味を知った感じがする。

幸せを口の中で感じる。

あ、セロトニンがたくさん分泌される。

舌の上で感じ取った味が脳内でホルモンに変換されて至福を呼びこむセロトニンがたくさん出る。

はぅー、幸せー。

「これもおいしいよ」

ハルちゃんが箸で指すのは揚げものの一種。

「これは？」

「これはね、海鮮練物の揚げたやつで、すっごく弾力があっておいしいんだよ」

球状に丸められた練物が揚げられていて、周りにはちりばめられた糸くずのような衣があって食感が更に楽しめられるようになっていた。

サクッとした揚げものの感触の次に私の歯に触れたのは柔らかくも弾みのある練物の中味。

「ああぅー、おいしい～～～」

何、何なの、このおいしさ？！

「ルカちゃんはさ、メディター目指してるの？」

ハルちゃんが唐突に尋ねてくる。

「え？　な、なんでわかるの？」

ハルちゃんはふわふわタマゴを頬張ってから、うーんと箸を握る手をぐるぐると空中で回す。

漢方のおばあさんにはわかったみたいだけど、私がメディターを目指していることをハルちゃんは知らないはず。

「漢方に興味あったり、お店入る前にちらって見えたガーディを見てそうなのかな～なんて」

アルセウス教のお巫女さんは皆博識なのかな？　って思わせるぐらいの洞察力。

私がガーディを手持ちとして入れている理由は、そりゃ好きだからもあるけど、私が惹かれたのはそのガーディが持っているという能力。

それは、嗅覚で相手の気持ちまでも嗅ぎ分けてしまうという力。

精神病やテラピーへの活用もできるし、なにより臨床の際にはとっても役立ってくれる。

そんなガーディの能力に私は惹かれた。

「すごいね、ハルちゃん」

感嘆としながら、私はハルちゃんを見つめる。

「ハルちゃんは、何かを目指しているの？」

そして逆に今度は私の中に疑問が浮かぶ。

「私はね、トレーナーかな。全国を旅しながら、アルセウス教を広めたいんだ」

遠くを見つめるような、でも力強く近い将来を目指して進んでい

きそうな芯のこもったその瞳は確かん輝いていた。

「ハルは後を継ぐ前に、旅に出たいと言ってきかなくてね。困ってはいるけれど、ハルの志はこれからのアルセウス教の存亡に大きく影響すると思うんだよ」

ハルちゃんのお父さんが自分の娘に微笑みながら私に言ってくる。

「ルカちゃんはバトルとかしないの？」

「うーん、するけど弱いかな」

ハルちゃんがワクワクとした感じで聞いてくる。

「えー、でもバトルはできるんだよね？　だったら、明日のトーナメント出ようよ」

ハルちゃんが言うのはきっと明日のバトルトーナメントのことなんだろう。

「私は見てよっかなって思って」

「えー、そっかー。じゃあ、私の雄姿を目に焼きつけといてね」

「うんっ」

ハルちゃんがトレーナーだということにもびっくりしたけど、その動機も立派だと思う。

「すごいね、ハルちゃんは」

素直にそんな言葉が漏れる。

「んふふ～ならルカちゃんもどう？　アルセウス教？」

私の意図を読み取ったのか、ハルちゃんが私の傍によってきて耳打ちをする。

アルセウス教……。

自然の力を持ってして病気や怪我を治すという自然療法を用いた医学を生み出した宗教。

そこには多少の興味もある。

漢方が好きなのもそうだし、鍼灸の治療法もアルセウス教から生み出された。ポケモンの【毒針】を薄めてから熱っして使用することによって難病をも治したりする鍼灸は少数ながらにも大きな成果をもたらしている。

そして極めつけはやっぱり食は薬という理論をもとに構成された、今で言うところの家庭医学の基礎を生み出したこと。

「あ、でもルカちゃんなら医学のこととかの方に興味がいっちゃう？」

頭の中を見透かされているような、そんな気がして恥ずかしくもなるけど笑ってごまかす。

「あはは、うん。自然療法は魅力的だし、鍼灸の勉強もしてみたいなって思ってたから」

アルセウス教は当時のスウセルア教が生み出した解剖や遺伝子操

作、現代医学と呼ばれ、革命的な大躍進の元となった医学を受け入れなかった。

だからハルちゃんのようなアルセウス教の人達はメディターのことが嫌いなのかなって思ってたこともあったけど、今では一括されてメディターと称されている為そうでもないみたい。

「お若いのに立派ですわ」

ハルちゃんのお母さんに褒められて、私はうなずきながら頬を染める。

照れるな……。

「それじゃ、ルカちゃん、ソネザキ　マサキさんのこと一杯教えてっ」

今思い返してみたら、マサキさんは拉致されたって聴いた。

でも、その拉致したのがカスミさん達だったという話をミツルさんから聴いて逆にほっとしていたのかもしれない。

私は絶品の料理に舌鼓を打ちながら、マサキさんの話をした。

その話をして周りにどう思われたかはわからないけれど、目一杯おいしい思いと楽しい時間を過ごした私はお腹を満たして部屋へと戻った。

その時に半ばコクドウさんにおぶってもらったことは内緒なんだから……。

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　Ｖ：お腹一杯の幸せ（後書き）

次話、頑張ります。

とりあえずそろそろ「裏」も書こうかなって思ってます。

それでは

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　「裏」：始まりし生れしは白（前書き）

うーん、「裏」はいろいろと詰め込めるからいいですねw

最近時間が無いので、前書きもおろそかになってきました；；

短いですが、どうぞ

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　「裏」：始まりし生れしは白

シルフカンパニー本社：

ヤマブキシティ、シルフカンパニー社の社員達が屯っている一室で三人の人間が待機していた。

言わずもなが、ガイ、モモ、ジンの三人である。

「なぁ……」

よれよれの煙草を口元にくわえ、ガイはソファの上でダラダラと天井を見上げる。

「なぁーにー？」

当のモモはファッション雑誌に目を通しながら、チョコのスナック菓子を頬張っている。

「暇だなー」

「そうだねー」

ぽきっと口でチョコスナックの棒を折ったモモは、気になるファッションデザインの記事に目がいく。

「お前はそうでもないみてぇだな」

「そうー？」

クチバでルカと別れてから、三人は待機を命ぜられた。

最初は歓喜した三人だったが、本社からの外出禁止という命令を受けてこの部屋で監禁状態となっている。

「それにしても、変ですね……。何もしていないはずなのに……」

ジンが自身のポケギアを工具でいじりながらぼやく。

「お前も退屈はしてないよな」

「あ、そう見えますか？」

かちゃかちゃと道具を使ってはジンは自身のポケギアを改造していく。ポケギアをパソコンの端末に接続して中身のアップグレードまでも行っている。

「お前、本当にこの会社の正社員になれよ」

ガイの本音の言葉にジンは作業に没頭しながら、

「それはちゃんと考えてます」

「ちゃっかりしてんな……」

煙草の煙を吹かしながら、ガイは天井を眺める。

「……一体、上は何を考えてんだよ」

眉を寄せながら、ガイは紅蓮の髪を掻きむしる。

「そんなこと下っ端のお前達が考えることじゃなないにょろー」

いきなり部屋の扉が開いたかと思えば、そこにいたのは奇天烈な帽子を被った一人の少女。

「レイハさん……」

ジンが机から立ち上がって敬礼する。

「あ？」

ガイはソファに寝そべりながら扉のある方を顔を擡(もた)げて振り向く。

「もうガイくんー、失礼だよ～」

と、ガイを咎めながらモモもぶらーと立ち上がる。

「君達グループはいろいろと曲者揃いにょー」

若干頭を抱えながらレイハはてくてくと部屋の中へと入っていく。

「なあ、レイハさんよ……俺達に何か仕事をくれ。いや……ください」

レイハの視線にガイが気圧されてしまう。

「安心するにょろ。君達は下っ端でも特に精鋭にょー。いろいろ話し合って次の任務を言い渡すにょろろ～」

見合わない容姿と覇気に誰もが必ずひれ伏してしまう……。そう、ロケット団四幹部の一人……レイハ・ニョロモンド。ふざけた名前に聞こえるかもしれない、だが彼女の実力は幹部達の中でも頭角を

現している。

まあ任務時以外の彼女はそのかわいらしい容貌から、皆に愛玩動物みたいに扱われているのだが……。

そんな彼女の経歴は誰も知らない。誰も、知らないはずである。

なぜなら彼女は――――

「君達三人は今からミュウを捕まえに行ってもらうよ」

レイハはそう言うと、モモに黒いローブの中から幾つかの書類を放り投げる。

「おわっと」

ばさばさと宙でばらける紙を受け取りながらモモは腕を広げる。

「今から出発するにょろ～。もし捕まえれたら、お前達には新しい席が用意されてるにょー。せいぜい頑張ることにょ」

そう言い残すと、レイハは扉前で待たせていた自分の部下を引き連れて退出してしまう。

ガイ、モモ、ジンの三人は敬礼のポーズのまま、モモが抱える紙の束に目を向ける。

「ミュウって、あのミュウですか？」

ジンは二人に尋ねるように声を曇らせる。

「上の役職なんて興味ねえ……。下っ端の方が気が楽だっての」

ガイはまたもソファにどかっと座りなおして煙草を吹かす。

「そうよね〜。でも、捕まえれたら凄いよ報酬」

モモはそう言いながら一枚の紙を差し出す。

ジンはマジマジと、モモが突き出す紙を見つめる。

「凄い……。研究班の班長（ヘッド）になれるって……」

青年近き年齢といえど、ジンには夢があった。将来、シルフカンパニーのような一大企業で研究者……願わくば開発者として世界がより良い生活を送れるような発明品を世に送り出したいという夢が。

それがミュウの捕獲と引き換えに手に入る。

「それに、おお〜、好きな地方を治めるチャンピオンになれるってさ〜」

そのモモの言葉に、ガイは眉を動かす。

「何？」

モモの握る紙をひったくり、提示された任務成功時の報酬の欄を見る。

「望みの地方の統括……」

復唱するようにガイが呟く。

「へっ、まじかよ」

目を閉じて、口の中で煙草がぎりっと歯で潰される。

「じゃあ私は、これにしよっかな～」

と、るんるん気分にモモは呟いて……どんと構える。

「それじゃ行くわよ二人とも。とっととミュウを捕まえて昇進よ」

各々に立ち上がり、やる気を示す。

「ああ、そうだな」

「そうですね。俄然燃えてきました」

三人は荷物をまとめて部屋を出ていく。

彼らが向かうは書類に記されたとある島。

無人島、始まりの島……。

シルフカンパニー社　幹部室：

レイハが自分の個室へと戻ってきていた。

「なんでレイハがこんなことしなきゃならんにょー？」

自分がモモ達に任務の通達をさせに行かされたことが気に食わないのか、ベッドに倒れ込む。

「結局はあの三人も捨て駒にょ。実力のある若手……。でもあの三人は危ない……。ふん、せいぜいもういらないミュウに立ち向かって死んでくるがいいにょ」

ルカとケンの監視という任務を任されていたモモ達も、また監視対象とされていた。そして、ルカとの接触で上層部はモモ達の排除を決定した。

ミュウツーを創りだす為に必要だったミュウも現段階ではもはや用済みなのだ。

「……早く、時が来ればいいにょ」

エンジュシティ：

「ほら」

「ありがと……」

放られた缶ジュースを受け取りながら少女が礼を言う。

二人の少年少女……彼らはトキワシティにロケット団が襲撃してきた時にケンが隙を作って逃がした二人の同級生である。

「しかし……えらいことになったな」

「でも、混乱や暴動はない……」

二人揃ってベンチに座りながらジュースのプルトップを外す。

「そうだな。実際に、あんなこと経験しなかったら俺達だって他の人みたいに普通の生活を送れたかもしれないな」

「そうだね……」

エンジュシティの公園で遊びはしゃぐ子供達を眺めながら少年はぐっと中身のジュースを一気飲みする。

「今更トキワシティに帰るってのもな。我武者羅に逃げすぎたか？」
はにかむ少年に毒舌な少女の声が返ってくる。
「我武者羅でエンジュまでは逃げない……」
しかし一緒に逃亡した彼女も、また我武者羅だったのだろう。
自分達の同級生が次々と倒されていったのだ。必死で逃げなければならなかったのも、事実なのだから。
「ケンケンには悪いけど、俺達は俺達で何が起こってるか見定めるとするか」
「そう……。事情把握、大事……」
共に立ち上がり、少年と少女はエンジュシティで一番高い建物を見上げる。
「あいつが早々と死ぬこともないだろうしな」
「金に強欲な奴は早死にする」
「おいおい、ま、でもあいつの執着心は違うところにあるしな」
「そうだね」
ケンの安否を気遣うのもほどほどに二人は歩きだす。
この二人もまた知らぬ間に世間から取り残され、取り残された故に世界の異変に気付いた者達。
彼らが向かうその場所とは……？

第五章：完

第五章：豪華客船サント・アンヌ号　「裏」：始まりし生れしは白（後書き）

最後に出てきた二人はちゃんとこれから出てきますからw

いろいろ伏線張って忘れるなんてできないですからねw

第六章：はじまりの島　Ｉ：見捨てられし三人（前書き）

最近執筆時間がないです；；；；

というか明日文化祭なんですけどねｗ

もう準備やらなんやらで学校に六時七時まで残ってだらだらとやっております。先週は宣伝用のポスター貼ったり、ボード作ったりしてましたｗ

では短いですが、イントロ部分をどうぞ。

第六章：はじまりの島　Ⅰ：見捨てられし三人

０番水道：

地図上には存在しない水道、０番水道。

それは日本という国から遙か離れたとある島へと通じる水道。

他国からもその存在は非公認ではあるが黙認されてはいたが、その水道への不可侵条約は締結されていた。

その本国から遠く離れた孤島へと進むは一隻の船艇。

船底が穏やかな海面を切るようにして進み、跳ねた水しぶきが陽光をまとってきらきらと輝く。

絶好の晴天、上空で鳴くキャモメやムクバード達の群れが耳に心地よい。

「ん～、良い天気～」

モモが冬用に着用していたチェリンボ色のマフラーを外し、頭の上に大きなグラサンをかけ、薄地のブラウスにショートパンツ、腰にはスカーフを巻いて大きく背伸びをしていた。

足にはクロックスを履き、軽快な服装のモモ。甲板で体一杯に陽射しを浴びては潮風によって運ばれる潮の匂いを嗅ぐ。

「海流の動きをもっと良く察知できる機械を……」

と、ジンは甲板の柵から身を乗り出しては海流測定機の試作品を沈めていた。

「おい、ジン！　交代しろ！」

と、ガイは船橋からジンを呼ぶ。

「あ、もう少しかかりますから」

「おいっ！」

一応、船の免許は三人ともが獲得しており今は時間交代で自動運転の見守りをしている。だが、じっとしていることが性に合わないガイは早くもジンを呼び掛けていた。

そしてそんなガイの性格のあしらい方をジンもモモを介して知ったのだろう。

そんな二人の会話を聞いて微笑むモモ。

「んー、仕事でバカンス～」

船はただまっすぐと向かう。

はじまりの島へと――――。

新しく言い渡された任務、それはミュウの捕獲。

しかしそれは組織ロケット団が船に乗る三人を排除する為に講じた罠だった。いや、罠ではない……そういった始末の方法だったの

だ。

すでにミュウツーの創り方をミュウの遺伝子を用いて成功へと近づいていたオーキドとロケット団上層部は、ミュウの存在を完全に無視していた。

「そういえば、ミュウってどんなポケモンなの？」

モモがジンに振り返ってはそうたずねる。

「え？　渡された書類の中に書いてありませんでしたっけ？」

がさごそと今回の任務用に配給された道具一式の入ったバッグを探る。

「おい、てめえジン！　測定器はどうした？！」

と、ガイが舵を握りながら怒鳴るもジンは草々とモモにいわれた書類を取り出す。

束となっているいくつものページをめくりながら、ジンは今回のターゲットに関する欄を見る。

今回の任務も前回と同様に任務内容の記された膨大な量の書類を渡されていた。ロケット団という一組織であり、その体裁を保っているのは徹底された秩序であり人員の管理能力にあった。

サカキを筆頭に下に行けば行くほどに枝分かれし、揺るがない上がいる為に不動の組織体制を取っていた。

リーダーが存在しない組織というものも実際には存在し、それは瓦解しない組織というレッテルを持っている。だが、リーダーたるもの、その存在感を誇示することにサカキは真意を見出した。

そしてボスという上がいるからこそ、下がついてくる。

自由を選び、束縛を捨て、秩序を自分達で変えていくリーダー無き組織にはサカキは意味を見出さなかったのだ。

そして長年の計画の賜物で、最小限の犠牲にして最大限の益を得たのだだった。

「ったく、任務なら普通船長いんだろ」

愚痴をこぼしながら、ガイは新たなタバコに火をつける。

「まあまあ、それなら私がこわーいお話するよ～」

とモモはサングラスをかけて、ガイの首回りにスカーフを巻く。

「だあ！　暑苦しいっての！」

「もう、つれないんだから～」

とじゃれ合う二人を見ながらジンは微笑を浮かべて蒼穹を見上げる。

『ルカちゃんも、この海のどこかにいるんだね……』

先日出会い、別れたルカのことを想いながらジンは己のポケギアを見つめる。

そこには升目の描かれたレーダー探知図が展開しており、そこで点滅するのはルカの現在地を示す場所。

三人は自分達の運命がどう定められているのかも知るよしもなく、まっすぐに無人島はじまりの島へと向かって行くのだった。

そして出航してから半日後、彼らは辿りつく。

「モモさん、ガイさん、見えましたよ！」

舵を任されていたジンが前方に存在する島を見て、声を上げる。

「やっとついたか……」

「うーん、疲れた～」

ジンは船を停められそうな場所を探しながら、指示を出す。

「降りる準備はしておいてくださいよ」

だるそうにガイが答えながらも、ここから彼らのミッションがはじまる。

依頼主から断たれた組織の三人は、未知にて全知の存在ミュウと対峙する。

第六章：はじまりの島　Ｉ：見捨てられし三人（後書き）

さて、今回の章はこの三人組中心となります。

ロケット団が彼らを仲間にし、なぜ切り離したのか。

それをミュウが教えてくれるかも、しれませんｗ

第六章：はじまりの島　ＩＩ：ミュウ、発見（前書き）

短いですが、さくさくと行きましょう。

企画はまだ進行中です。三月の終わりまで、みなさんの川柳お待ちしておりまーす！

第六章：はじまりの島　ＩＩ：ミュウ、発見

はじまりの島：

三人が島の浜に船を乗り上げさせて、上陸する。

「ったく……。やっとかよ」

ガイは素足で船から飛び降りる。膝下まで海水に浸かりながら、ガイはサングラスをかける。

上着を脱いでタンクトップ姿のガイ。服の上からではわからなかった彼の筋骨隆々とした肉体は薄い汗を覆い、逞しさをアピールしている。

本人がそれを自覚していない分に、ガイはぐだぐだと愚痴りながら砂浜へと上がる。

「はい、ガイく～んキャッチ！」

そして甲高い声と共にモモも船から跳ね降りる。

「おぁ！？」

ガイは自分の頭上から降ってくるモモを全身に受け止める。両腕でがっしりとモモをお姫様だっこするガイ。

「ありがとぉ～」

「てめえ、いきなりすぎんだよ！」

腕に抱えるモモに激昂しながらも、モモはとーんとガイの腕から抜けて砂浜に降りる。

「ちょっと、待ってくださいよ！」

任務用の機具や必需品を詰めたズックを担ぎながらジンも船から降りる。

「おわっ！？」

そしてジンは着水した表紙に海中の苔石で滑って横転する。

「おい、気をつけろジン！」

「あちゃー、まあでも防水だし」

と、ジンのことよりも荷物のことを気にかう二人。

「うっ、べ」

口の中に入り込んだ海水を吐き出しながら、ジンは体勢を立て直して二人の元へと駆け寄る。

「はぁ、手伝ってくれても……」

後ろに機材を詰め込んだザックが二つ。両肩には食品などの最低限の生活必需品一週間分が入ったリュックに両手には個人個人の荷物を持ったジンは、もはや大量の鞄に埋もれた状態になっており黒いゴローニャのような格好をしている。

「交代しなかった罰だ」
「私、非力な乙女だから」
ため息をつきながら、ジンは諦めの色を見せる。
「い、いきましょう」
「ああ、そうだな」
「ミュウ、まってろ～い」
三人は肩を並べながら、密林を目指して歩き出す。
はじまりの島……三方が絶壁に囲まれた孤島。
上陸するにはジン達のように残り一方の砂浜から入るしかない。
そしてそこから先は鬱蒼と生い茂る樹木の密林。
ミュウという存在は人の目に触れることなどなかった為にその詳細は以前まではわからなかった。しかしある一人の人物の下にミュウという存在を確認した記録が残っている。
フジという今は亡き故人。
彼は若い頃、海外でミュウを見つけた。それがたまたまだったのか、そうでなかったのか、ミュウは彼の前から逃げることをしなかった。
フジはミュウの生体を研究し、それを文献として書き遺した。
ミュウも何かに貢献したかったのかはわからない、だがフジはミ

ュウを連れて本国へと帰ってきた。彼の発表した文献はすぐさまに注目を浴び、生物学者の権威達から学位をも授与された。

しかしそこから悲劇は始まった。

あるごく一部の人間がミュウを独占しようとしたのだ。フジはかたくなにその要求を拒否するも、強行手段により返らぬ人となる。そして強行した組織は、その時ミュウを捕まえることはできなかった。そう、ミュウはこうなることを予知して逃げていたのだ。

だがフジが発表した文献はミュウの生態性を詳しく綴ったものであり、生物学的にはめぐるしいものがあったかもしれないが化学的な観点からの調査は行われてはいなかった。その為フジのミュウとのコンタクトは単に図鑑の一ページを拡大したにしか過ぎなかったのだ。

ミュウの逃亡から数十年、ミュウの存在はまたも世間へと知れ渡る。そう、成人したサカキによるミュウを用いての研究が大々的に進められたのだ。それまではシルフカンパニー社の社長と地位を築き上げ、前社長の下行われていたポリゴンの研究を躍進させた彼は一人の権威とコンタクトを取った。

それがオーキド　ユキナリ、ポケモン博士として世間に名を轟かせるその人であった。

それからは誰もが知っているマサラの悲劇の幕開けとなったのである。

そうしてミュウはいつの間にかこの島に住み着くようになった、と報告書には記載されていた。

悲劇を生みしはじまりの島、その密林へと三人は歩み入るのであった。

一時間後：

「リザード、【居合切り】！」

「りざっ！」

リザードの鋭い爪が豪快な腕の振りによって勢いを増しては進行方向で邪魔する蔓や枝を薙いでいく。

「ったく、本当にこんなとこにいんのかよ」

若干弱気になりつつ、ガイはため息をつく。

「はいはい愚痴愚痴しないの」

モモはしっかりとガイの後ろに付きながら拓かれたルートを通る。

「フシギソウ、どう？」

「ふっしぃー」

ジンは背中に担いだ機材を働かせながらフシギソウにコンタクトを取る。

フシギソウも目元にサングラスのようないかつい黒いゴーグルを装着しており、自慢の蔓を自身の背中に乗る蕾の中へと入れている。

ジンが担ぐのはミュウのサンプルから入手したＤＮＡデータを元に開発されたレーダーであり、ミュウが好む匂いをフシギソウの蕾の中の花粉を用いて作り出すという装置である。

その為、フシギソウにゴーグルを装着しフシギソウの脳に直接ミュウが好むような匂いのデータを送信、フシギソウが体内で作り出す花粉の調合を操作するのである。

そしてジンはフシギソウの蔓の先に付いた花粉を採取して装置へと入れる。機械が今度は勝手に動き出しては調合された花粉にさらなる刺激をもたらす液体を混ぜては空気中に分泌する。

「んー、それにしてもジメジメしてるわね」

モモがタンクトップだけの姿となり、彼女の豊満な乳房が揺れる。

「ったく、虫ポケモンがいねえだけマシだな」

そう、ガイの言う通りこの島にはミュウ以外のポケモンが生息してはいないのだ。それはミュウ自身が整えた環境なのか、もともとポケモンが生息していなかったのか、真相は闇の中ではあるが報告書によるとこの島で野生ポケモンの存在は確認されてはいない。

「ガイさん、そのままっすぐ行ってください。高台になっているはずです」

ジンは腰回りに付けたバッグからＧＰＳを取り出して島内の地図を出しながら、現在位置を確認する。

「ああ」

「やっぱジンくんは頼りになるねー」

ガイがリザードと共に道を切り開き、モモはカメールに【水遊び】を命じて涼みを供給していた。

三人が互いに陣形を崩すことなく、リザードの最後の一振りで開けた場所へと出た。

そこは作為的につくられた場所なのか、三人の躍り出た場所ははっきりと密林との境界線が敷かれていた。そして三人の目の前に横に広がるのは絶壁。島の外からはわからなかったが、はじまりの島の頂はとぐろ状になっており密林が段々畑のようにして岸壁の上を覆っている。そのため、ＧＰＳを用いても詳しい地形のデータは取れないでいた。

「なんなんだよ、ここは……」
「うわー、たかいねー」
「さすがは、というべきなんでしょうか？」
三人はそびえる岸壁を見上げながら、茫然とする。
「みゅうっ……？」
そして、そこに降りてきたのは三人が見たことのないポケモン。
尻尾と足が長く、薄い桃色のポケモン。頭に耳と思しき突起物を持ち、両瞳はエメラルドグリーンに輝いている。
「おいおい、もうかよっ」
「かわいい～」
「早速ですね」
三人は出していたポケモン達に小さく合図を出して臨戦態勢へと移させる。
「みゅっ」
そして空中に漂うミュウは何をするわけでもなくくるくると回っては、くんくんとジンの背後の機械から出る匂いを嗅いでいる。
ぎゅっとガイが拳を握り、リザードに指示を出そうとする。
「リザード、【火炎――――」
「みゅ～」

しかしガイが指示を言い終えることはなく、ミュウの鳴き声と共に三人と三匹の意識はどこか遠くへとさらわれていった。

ミュウの目下ではオーロラ色の念に囚われて動かなくなったガイ達とリザード達。

「みゅう♪」

かわいらしく、ミュウはまたも鳴くのであった。

第六章：はじまりの島　ＩＩ：ミュウ、発見（後書き）

さて、次回からの三話はガイ、ジン、モモ個人個人のエピソード構成となっておりますｗ

まあ、尺稼ぎといわれればそれまでなのですがｗ

この三人がこの物語のキーであることにはかわりありませんのでｗ

第六章：はじまりの島　ＩＩＩ：その体はキズもので……（前書き）

ディープな話が大好き。

それはとっても浅い自分だから好きなのかもしれません。

今回はメディターの中でも重たいモモの過去。それが今明かされます。

最近どんどんポケモンというものからかけ離れていきそうで怖いです；；；

第六章：はじまりの島　ＩＩＩ：その体はキズもので……

シンオウ地方　ミオダウンタウン：

ここはシンオウの港町としても有名なミオシティ。街の中心を運河が走っている港町である。

しかしそのダウンタウンは闇で生きる人間達の無法地帯となる。

密売、密輸入、密入国、密会、密輸……。世界の表舞台では決して日の目を拝めることのない事が、ここでは日常として起こっている。

そしてその盛んにおこなわれる悪事に便乗するように、他の商売もその懐を潤す。

麻薬、売春、賄賂、会合などを設ける店、そして請け負う背後組織など、この世にはそれで生計を成り立たせている人間もいる。

きれいごとばかりではない、それが世界の掟。

そして世界の掟ではっきりとしていること、それは人の位。

人が皆平等というのはただの戯言だと人は知らない。知ろうともしない。この世には明らかな差別というものが存在し、それが正しく絶対なのだ。

蔑まれ、虐げられ、侮られ、卑しまれる……そんな存在はこの人間社会には必要な存在である。そしてそれはポケモン達にも言える

ことである。否、ポケモンでいえば遙かに単純な差別である。

弱肉強食の自然界では弱い者が強き者に食われるだけだ。

そして15年前のこのミオシティで、モモは両親に売られた。

もともとは良き家柄を持ち、他とは違った豪邸に住んでいたのだが父親が詐欺に遭い、全てを持って行かれた。

そして父親はモモを売って逃亡資金を確保し、モモの弟と母親と共にどこかへと行ってしまった。

まだ幼少のモモは自分の身に何が起こるかもわからずに、人身売買を商売としている商人に引き取られてしまった。

人身売買の商人に捕まった者の運命はほとんどが決まっていた。それは奴隷、見世物、実験材料、臓器移植、養子、あるいは性的搾取である。

そしてそれらが黙認されるのはこの闇社会だからこそ回る巨額の資金が生み出す経済扶助効果と圧倒的二次勢力である。それは生かさなければ、協会による徹底的経済政策を必要とし、その力を協会は持っていないことにあった。

黙認することで協会にも金が周り、政策資金として当てられているのだ。とんだ皮肉だが、それが現状である。

そしてそんな世界の闇の一端に放り込まれたモモの買い取り手は売春を主軸にしている男のところであった。

まだ十にも行かない少女は店の知らない男の相手を毎晩させられ、身も心も一週間せずと崩壊した。

ズタズタにされた彼女は商品として扱われ、日中も労働を強いられていた。

人が人で無くなる街、それがミオシティ。それは単に人として扱われなくなった者だけでなく、人を人として扱わない者にもあてられる為に名付けられている。

「おかぁさん……」

モモは毎晩、仕事が終わり、また新たなる男の相手をさせられた後に必ずと行く場所があった。

それは自分に与えられた部屋の窓から屋上へと上がって、母親が最後にくれたヘアピンと月を眺めることであった。

そのヘアピンは月光にすかすことで多種多様な光の奔流を見せるという、珍しいものだった。希少価値の高いものである、だが日中では普通のものにしか見えない為に商人から取り上げられることもなかった。

そしてそれが唯一のモモの心の拠り所でもあった。

日々の苦汁に耐えながらも、しかしモモは仕事にも順応し、それを利用するようになった。

まだ子供だろうという認識から来る油断。それをモモは幼いながらにも理解し、男達の相手をしながら自分の放り込まれた社会の情

報を得た。

中でも興味深かった話はポケモンの売買であった。

人よりも遙かに高値で売れるポケモン。それはポケモンのみが持つとされる特殊な体内構造が生み出す自然の産物。

ヤドンの尻尾の密売が昔ニュースにあがったのも、ヤドンの尻尾にある脅威の再生能力をつかさどっている幹細胞に金持ちの興味が行き、食すようになったからである。ヤドンの尻尾を食べれば長寿になるという情報が流出し、その請け負い会社も出来たのだ。

そして他にもパラセクトの胞子やハクリュウの卵、パールル本体など商品となるものは数多く存在している。モモは全ての話を覚え、メモにとっては、それを大切に保存した。

そんな生活が三年は経とうとした時に転機が訪れた。

ある日、店主に買い出しを頼まれた時にモモは下水道へと通じるマンホールが取り外されていたのを目撃した。ここ三年、一度も開くことのなかった穴にモモは興味を示して中へと入り込んでいった。

もとより好奇心旺盛であり、それが故に今の強制的に強いられている仕事の順応も早かったのである。

「よっと」

巧みな動きでマンホールの穴へと飛び込んだモモがそこで見たもの、それは一匹のゼニガメであった。

「あ、ゼニガメ……」

恐らく商人のもとから逃げ出してきたのだろう。これを返せば謝礼金もらえるかも、とモモは考えてゼニガメを呼ぶ。

「よしよし、おいでー」

しかしゼニガメは人の気に敏感なのであろう、決してモモの傍へと寄ろうとはしなかった。

「ふーん、じゃあ私が飼ってあげる」

そしてモモが口調を変えた途端、ゼニガメはすいよされるようにモモの傍へと寄ってきた。

「良い子だね」

それは畏怖によるものだったのか、それともモモの性質なのか、しかしゼニガメはすぐさまモモに懐いた。そしてモモはゼニガメを商人に返すこともなかった。

「それじゃ、皆を殺しに行こっか」

「ぜにっ」

ゼニガメを腕に抱えるモモの声はひどく、重く冷たかった。

12になろうとしていたモモはそろそろ初潮を迎えようとしていた。そして彼女は他の娼婦達との間でも面倒見られ様々な事を熟知していた。

逃げるなら、今しかない。

それをゼニガメとの出逢いで直感として思い至ったのだ。

世話になったが恩になった覚えはない。

それに金を払えば体を弄ばせさせるような人間などに感謝などする気もない。

モモは店に戻るや否や、店主をゼニガメの【冷凍ビーム】で頭部を凍らせた。それは頭部の凍傷による神経麻痺と窒息死をさせる技術……。モモが数多い客から学んだ殺人方の一つであった。

「行こうゼニガメ、私達は自由なんだから」

モモはもしかしたら自分とゼニガメの境遇を重ねていたのかもしれない。だから、あの時考えを改めたのかもしれないし、それをゼニガメは感じとったのかもしれない。

モモは自室へと上がり、隠していたメモ帳、店の売上金と客からもらっていたチップの金を持って窓の外から出る。

この光景はダウンタウンの人間にとってすれば毎日の光景だった為、モモが窓から出るという奇抜な行為に誰も気にかけることはなかった。むしろ、親しみを持っていた。

「よお、モモ」

「また遊びにいくぜぇ〜」

「モモちゃん気をつけなさいね」

きっかけは最悪だったのかもしれない。だがモモは彼らにいろいろと教わったし、助けられた。でも、それとこれとでは話が違うし、違わなければならないのだ。

「うん、ありがと。ばいばい、みんな」

そしてその精一杯の言葉を最後にモモはミオの街から姿を眩ませた。

殺人やポケモンの殺しなど日常茶飯事のこの世界で、人は人を信用をしなかった。だからこそ、モモの疾走もモモの店主の殺人もさほど問題とされることはなかった。

ゼニガメと共に逃げ出したモモはその後、いろいろと街を転々とした。昔いた故郷にも帰ってみたりもしたが、そこには何も残ってはいなかった。

どの街にでもあった裏の顔。つまりは闇社会で上手い具合に立ちまわっては違う街へと行く。

その繰り返しの生活、それはスリルもあったし楽しかった。

騙し、騙され、食い食われの生活にモモは馴染んでいた。

だからなのかはわからない。

だが彼女はサカキにスカウトされた。それは誰も知らないし、モモもサカキも誰かに話したことはない。

そして特別に二人の間に何かある、というわけでもないようであ

る。

だからモモは気付かなかったのかもしれない。自分が組織から撥ねられるとは。

しかしこれが彼女の経歴であり、彼女の人生だった。

それが今、ミュウによってその過去がガイとジンへと漏れていったのだ。

ミュウが発した光、それはモモにガイとジンの記憶の結晶を喚起させる。

自然とモモの瞳からナミダがこぼれおちていた。

第六章：はじまりの島　ＩＩＩ：その体はキズもので……（後書き）

次回はガイ、ジンと続きます。

第六章：はじまりの島　Ⅳ：その日誓ったもの（前書き）

ガイの過去編。

ここまでくれば多分皆さまもおわかりになるかと、というような感じのストーリー伏線。

では～

第六章：はじまりの島　ＩＶ：その日誓ったもの

ヤマブキシティ：

今から２３年前、少年時代のガイはヤマブキシティで生まれ育った。

父親がヤマブキシティのヤマブキジムの隣にある空手道場の師範代であることは、街の中でも有名なことであった。そして次期師範を継ぐのは息子のガイであるとも噂されていた。

小さい頃から父の背中を追い、そして自身も鍛錬を積み上げてきたガイもそんな尊敬する父親の後を継ぐことになんの懸念も持っていなかった。

空手道場の隣にあるヤマブキジムとの折り合いは悪くも、身体を鍛える空手道場と自身の未知を見出すヤマブキジムの理念は利用者にとっては上手い具合に分かれていた為経営破綻は免れていた。

「母さん、お茶！」
「はいはい、どうぞ」

ガイの一日は朝に学校へ行き、帰宅。小学校の頃は部活なども無い為にそのまま道場へと直行して他の門下生と共に訓練に勤しんでいた。

「じゃ、行ってくるっ！」
「はい、行ってらっしゃい」

母に見送られ、ガイはやんちゃ坊主という言葉が見事にフィットする少年だった。玄関の扉を開け放って街道へと出るガイ。

「あ、イガイガ」
「その名前で呼ぶなマネッコ！」
「その名前で呼ぶなイガイガ！」
「真似すんなっつってんだろ！」
「真似すんなっつってんだろ！」

隣に住むモノマネ娘がガイが出てくる途端にガイをからかう。いがみ合う二人のこの風景は今ではもうお馴染み。

「ああ、お前といると調子くるうんだよ！」
「ああ、お前といると調子くるうんだよ！」

と、いつもガイが自ら頭に血をのぼらせて逃げるようにして道場へと走って行く。

「くそ、またあいつのペースだった……」

お隣同士の幼馴染とは言え、毎日ピッピの人形を持った少女に口で負けるという屈辱がガイの中では募っていた。

そしてその鬱憤を晴らすのが道場での稽古でもあったのだ。型を習い、基礎稽古をし、仲間達と共に汗水を流す。

まさに青春の１ページをガイは飾っていたのだ。しかし……、

そんな毎日の充実した日常が、突如として暗転した。それはガイが１８の時のこと。

「道場破り……？」

ガイが父から聞いたのはそんな言葉だった。

「すまん……」

項垂れ、家族に謝る父親。いつも後ろから眺めていつかは追い抜こうとしていた父の背中が、ひどく小さく弱弱しく見えた。これは俺の親父じゃない……。そうガイに想わせる程に。

「大丈夫ですよ、あなた……」

「すまん。……すまん」

ガイの父親は突如として現れた武道家にやられた。それは今までに無い程の強さだったらしく、スクールに通っていたガイは立ち会うことができなかったのだ。

そして父親は自分達の看板が失われてしまったことと、職をなくしたこと、そして門下生達を破門にしなければならないという自分へのふがいなさを恨んでいた。

「親父、俺が仇討（かたき）ってくる」

己のジャージの裾をたくし上げ、ガイは玄関先で項垂れていた父をまたいで家を出る。

「おい、ガイ！」

「ガイ、待ちなさいっ！」

しかしガイは待てるはずもなかった。自分の尊敬した父をあんな風にした男を、ガイは許せなかった。

「あ、イガイガどっこいっくの～？」

そして１８になってもその独特の口調を維持する自分の幼馴染にガイは内心舌打ちする。

「道場破りを道場破りしにいく」

その言葉で理解したのだろう、一瞬モノマネ娘のイミテは真顔になってからからかうような小悪魔の微笑を浮かべる。

「格好良く言ったつもりだろうけど、ださいよイガイガ」

「っせえ」

振り払うようにして早歩きで進むガイに、イミテはしっかりとついていく。

「ついてくんじゃねえよ！」

「ついてくんじゃよ！」

語尾口調の強弱まで完璧にマスターし、声色も最近では真似るのが上手くなったイミテのモノマネは群を抜いており、ガイの返しもまるでガイが二人いるように聞こえてしまう。

「勝手にしろ」

「勝手にする」

そうして二人は今朝まで自分達の所有物であった道場へと立ちい

る。

広々とした板張りの床を有する空手道場に大男が一人真ん中で鎮座していた。

「ん？」

片目を上げて入り口の二人を睨む巨漢はのっそりと立ち上がり、紅髪のガイへと向かって歩き出す。

「てめえか、俺の親父から道場盗んだってのは」

いがむようにして大男を見上げるガイ。身長差は２０センチもあるだろう。結構な背の高さを持つガイですら子供のように見えてしまう程の巨漢を目の前に、しかしガイの闘志はゆるぎなかった。

「ふん、あやつの息子か……。いいだろう、私に勝てば返してやってもいいぞ？」

「望むところだ！」

ガイはベルトのボールへと手を伸ばす。

そう、ガイの父親が師範をつとめていた空手というのはポケモンと共に武道を極めるというポケモン極真流。しかし、空手といっても新しい流派を取り入れた為、キックボクシングといった方がしっくりくるかもしれない。

この地方ではあまり普及してはいない新しいスポーツである。

しかし両者共にグローブをしないという空手の流儀にのっとり、

そして相手をノックアウトするまで終わらない。ポケモンと人間のタッグバトルの為、ポケモンが倒れてもトレーナーが倒れない限り試合は続行する。つまり、トレーナーをポケモンより先に倒してしまえば試合は終わる。

「ならば、早速はじめるとしようか。お嬢さん、立会をお願いしよう」

イミテは面食らったようになりながらも、こくりと頷く。相手の威圧感に気圧されていたのだ。

男は無精髭をぼうぼうに生やすも、その道着から見える逞しい筋骨隆々とした肉体。それはかなりの熟練者であることを証明していた。

「こい、小童。私の名はゲンサイ、パートナーはカポエラーだ」

ゲンサイの足元で逆立ちになりながらくるくると回りながらカポエラーがポーズをとる。

「俺はガイ。パートナーはヒトカゲだ」

勿論、己の肉体を鍛えるという理念において基づくられた競技。ポケモンの技の使用は勿論禁止。しかし勿論生まれ持った体の特異性は認められる。つまりヒトカゲの尻尾の炎を利用した競技技は認められたりする。

「ふむ、なかなか面白いパートナーだ」

そして大抵は格闘タイプのポケモンを選ぶポケモン極真流競技…

…。しかしガイは炎タイプを選んだ。その真意は、ミントとガイしか知らない。

ヒトカゲは己の尾の炎より激しく燃え上がる闘志をその瞳に秘めていた。それを見抜いたゲンサイが面白いといったのである。

勝負のゴングが鳴らされる。

ファイティングポーズをとるガイとヒトカゲ、そして迎え討つはゲンサイとカポエラー。

「ガイっ……！」
「黙ってみてろ、イミテ」
「……うん」

ガイが見据えたのはたった一人の男。自分の持てる全てをぶつけて、勝つ。

イミテは普段呼んでいたガイの別称を忘れ、彼の名を叫んでいた。

ガイが真っ先に駆けはじめ、ゲンサイに飛び膝蹴りを繰り出す。後ろについていたヒトカゲが尻尾を激しく左右に振って、ゲンサイの注目をひくようにする。

「ふむ」

しかしゲンサイは顔を傾けてはガイの攻撃を避けては左の鉄拳をガイの右頬に叩きつける。そして彼のカポエラーはヒトカゲの足元に回し蹴りを繰り出していた。

「……っ！？」

自分の左方向に宙に浮かびあがったまま吹き飛ばされたガイはそのまま道場の壁に激突する。

「カゲェっ！！」

そしてヒトカゲも足元をすくわれ、そのままカポエラーに顔を回し蹴りされて宙に浮く。

圧倒的なまでの力量差。そこに奇跡が起こるという余地すら見せない程までの優劣がはっきりとしていた。

ゲンサイはカポエラーを下がらせ、イミテに告げる。

「この男を連れて帰りたまえ。いつでも挑戦は受けると言ってな」

「……」

イミテはしかしゲンサイの言葉を耳にしながら反応することができず、壁にもたれたガイを心配する。

「待てよっ……」

背中の激痛と鉄拳を喰らった時に起こった脳震盪に頭をぐらつかせながらも、ガイは立ち上がる。

「ほぉ……あれで立ち上がるか。お主の父親よりは根性があるの」

ゲンサイは現に同じやり方でガイの父親を一発ＫＯした。しかし、ガイをここまで立ち上がらせるのは何なのか。

「しかし、自分の体を見てみろ。すでにズタズタだ。そんなので私に勝つとで――――」
「っせえ！！」

ガイの激昂がゲンサイの言葉をさえぎる。

「ガイっ」

イミテは両手を胸の前で合わせて、ガイの名を呼ぶ。

「ふざけんじゃねえよ、俺の親父は俺の目の前で謝るような奴じゃねえんだよ。あんな親父は俺の親父じゃねえ！！」

ガイをここまで立ち上がらせていたもの、それはどこかへとぶつけることのできない苛立ちだったのだ。

ふらふらになりながらも、ガイはゲンサイを見据えて走りだす。その固く握られた右の拳は爪が皮膚に食い込む程までに……。

しかしそんなガイの渾身の一撃もゲンサイに軽く左手で受け止められてしまう。

「くぅ……」

そしてゲンサイに他に何かされることもなく、その場に膝から崩れ落ちる。

「連れて帰ってやれ」
「……はい」

イミテは無言で、ガイのヒトカゲをボールへと戻す。そしてガイの腕を肩に回して立ち上がる。

一般の女子ならば、ガイのような長身で筋骨が逞しい男子は運べないだろう。しかしイミテはモノマネ娘、誰かの真似をする特技、それは他人の骨格や体格に似せたりする技術を身につけているということである。

それは自分の体のどこをどう使えば重たいものを支えられるかという技術をも持つことができるのだ。

「お前もなかなかの腕だな」

「……ありがとうございます」

イミテの特技を見抜いたのか、ゲンサイはそう告げる。イミテは黙ってそう返した後、引きずるようにしてガイを道場から連れ出した。

『……も？』

そして道場から出る際にイミテの中でゲンサイの言葉が読みかえる。

「あの男の拳、まさかここまでとはな。あやつが帰ってきた時が私の最後か、なあカポエラー」

「かぽ」

ガイの拳を受けた右手は大きく腫れあがっていた。未だに熱を発しているのがわかる……。

道場外：

「ガイ、起きて……」

道場のすぐそばにある公園のベンチでイミテはガイの頭を自信の膝の上に置いて、額に手をあてている。

「……っ」

ガイは薄目を開いて、イミテの顔を見上げる。

「あ、ガイ」

ガイはイミテの顔を見上げながら、気を失う前までのことを思い出しては舌打ちする。むろん、自分に対してだ。

「イミテ……。俺は、ホウエンに行く」

「え？」

振り返ることもせずに、ガイは立ち上がってはそう告げる。

「強くなって帰ってきたら、あの野郎をブッ飛ばす」

「ちょっと、な、なに言って———」

ベルトの、ヒトカゲの入ったボールをガイは取り出してその中に語りかけるようにして話す。

「ヒトカゲ、強くなるぞ」

「ちょっと、ガイっ！　待ってよ！」

イミテはガイに寄って裾を握る。

「悪いなイミテ、でも俺はもう家に帰るつもりはねえ。自分の力で生きていく」

「なんでそんな急にそんなこと言うのよ！」

当然の反応であり、ガイの言動こそがおかしいのだろう。

「じゃあな」

そう言って、ガイはヤマブキから姿を消し、ヒトカゲと共にホウエンへと行った。

そしてその後、ガイはホウエンで力を付けてある人物にスカウトされる。

それが誰なのかは言うまでもないだろう。そう、サカキ。

ガイもまた、モモと同じようにサカキ本人から選ばれたロケット団のメンバーだったのだ。

そのいきさつはしかしモモとジンの頭の中に、モモの時同様に入ってはこない。

自身の記憶を見返し、ガイは心の中で舌打ちをする。が、しかし、なぜか知らない間にガイの頬を流れるの一粒の涙。

残るはジン。

ミュウは面白可笑しそうに宙で回転しながら、不可思議なオーロラのような光を放ち続けている。

第六章：はじまりの島　ＩＶ：その日誓ったもの（後書き）

次はジンですね。

このメディターは初代アニメ、まあ無印時代がベースなんですけどまあそうじゃない時もありますｗ

イミテはむろん、アニメ公式で出てたモノマネ娘です。もう出てこないのかな？

まあ、その子の容姿は自分的にあれなんで勝手に妄想転換してますのでｗ

第六章：はじまりの島　Ｖ：三人の過去（前書き）

ジンの過去、そしてその後ちょっとの短めです。

次の話で第六章はおしまいです。

まあいろいろと繋げていく予定です。書ける時間があるなら・・・

第六章：はじまりの島　Ⅴ：三人の過去

デボンコーポレーション：

それはホウエンのカナズミシティにあるとある会社。

工業製品、日用品、薬、トレーナー用品など様々な製品を作り出しており、新開発したモンスターボールやポケナビといった商品でも特許を獲得したホウエンではカントー地方のシルフカンパニー並みの知名度を有している。

そして今回のロケット団による全地方制圧。いや、制圧ではなく政権を己の手中に収めた彼らの勢力もホウエン地方は最後まで抵抗した。

それはホウエン地方のチャンピオンがツワブキ　ダイゴがサカキの行動に誰よりも早く目をつけ、自分の所のリーグの統括をちゃんとなしていたからでもある。

そんなダイゴはデボンコーポレーション社長の息子である。しかし彼もサカキが自身の父親を手中に収め、今回の騒動気付かなかったのだ。

ダイゴは今や行方不明となっており、そんな彼には弟が一人存在する。

そう、それがツワブキ　ジン改めカイドウ　ジン。

そしてジンが犯したという、自責の念にかられている出来事、そ

れは……。

「君に頼みがある」

たった一年前の出来事。

はじめての父親からの頼み。すでに幼少のころから兄のダイゴがバトルの才能を開花させたように、ジンも工学の面において才能を開花させていた。

そしてそんな時にデボンコーポレーションに訪れたのが、当時すでにシルフカンパニーの社長であったサカキだった。

「君はあのダイゴくんの弟くんなんだろ？　君にしかお願いできないんだ」

「え、でも……」

「もし言う通りにしてくれたら、君に私達が使っているポケギアのシステムデータを提供することも考えている」

「ほ、本当ですか？！」

当時のジンにとっては自分の父の会社で開発されている製品に自分なりのアレンジを加えていくことが主な趣味だったが、ライバル社でもあるシルフカンパニーが開発したとされるポケギアのシステムデータを入手することができればデボンコーポレーションは更に実績を上げて飛躍できることができる。

そう思っていた。

「君の行動が未来の科学の発展を促すんだよ」

「……はいっ！」

そしてジンは父親の会社で培われ、特許を取得したポケナビの製造データをポケギアのシステムデータと交換してしまった。サカキがほしかった情報、それはポケナビがポケギアやポケッチと違ったシリアルコードの配列データだった。

俗に暗証コードとすれば話が早い。サカキはジンを利用してポケナビに干渉できる手段をポケギアのシステムデータと交換して手に入れたのだ。

ポケギアのシステムデータは確かに極秘ファイルではあるが、国全体を乗っ取ろうと企んでいたサカキにとっては切り捨てても良い犠牲であった。そしてジンのような子供を釣るにもちょうどいい餌だったのだ。

だがサカキはジンの腕を買い、ジンが真実を知り実家に帰れなくなった状況に陥らせた後、シルフカンパニーへと勧誘したのだ。

「帰る場所がないのか？　なら、私のところへ来なさい。歓迎する」

「……」

その時のジンに果たして明確な意思があったのか？

自分の行いのせいで父が興した事業を他に吸収され、挙句の果てにとてつもなく大きな陰謀に加担してしまった。

『僕はもう、家には帰れない……』

そして犯人がジンだということも父や兄にばれた。

兄、ダイゴはもし自分を見つけたら殴りつけるだろう。

父に顔を合わせたら、何を言われるかわからない。

自分のパートナーであるフシギダネも不安そうな表情を浮かべている。

『もう、僕の居場所は……』

そう思っていた時に、サカキはまたジンのもとへ現れた。先のような言葉を口にし、ジンは誘われるがままにサカキの手を取った。全ての元凶であるサカキの手を。

「君達が未来を変えるんだ」

サカキのその言葉にジンはされるがままについていった。

そしてシルフカンパニーに入社、技術師の見習いとして入りロケット団の存在をサカキから知り、今の編成隊に入れられた。

自分より年上のガイとモモを見た時、ジンは不安でしょうがなかった。

しかし気さくでマイペースなモモと乱暴だが面倒見の良いガイのチームへ入れたことを今はとても誇りに思っていた。この三人ならどんな任務でもこなせてしまうのではないか……そう信じて。

そして今、三人はこのはじまりの島へとやってきた。

ミュウによって自由を奪われ、互いの過去を見せられて。

自身の過去(きおく)が他の二人に暴露され、ミュウはその間もずっと楽しそうにくるくると宙を舞っては止まる。

途端ガイ、ジン、モモが自由になり地面に手をつく。

「くっ……！！　い、今のは……」

ガイは冷や汗を流しながら、きっとミュウの方を睨む。

「悪趣味よね……いくらなんでも……！」

そこでジンは初めてモモの怒った顔を見た。

「僕も、良い気分じゃないです」

そしてジンもフシギソウの蕾に手を当てて立ち上がる。

「【火炎放射】！」
「【水の波動】！」
「【リーフストーム】！」

ガイ、モモ、ジンがそれぞれの攻撃をミュウへと繰り出す。

燃え盛る炎に冷え切った水の奔流と草花の激しい舞風がミュウへと飛来する。しかし、意図も簡単に防がれてしまう。

ミュウは三人と三ぴきを見下ろしながら口に手をあててくすくすと笑いをこみあげる。

その姿は傍から見れば可愛いのだろう、しかし今の三人にはそんなものを観賞する余裕などなかった。

自分達の隠してきた過去を暴かれ、互いに掛ける声も無い今やらねばならないのはミュウの捕獲。それだけだった。

しかし彼らの攻撃はミュウに届くことはなく、ただ虚しく……。

どれだけの想いがこもった攻撃なのか、それはしかし風車に挑むドン・キホーテのように、ただただ虚しく……。

「くそっ、あたれ！！」

「ちっ」

「なんで、なんでっ！？」

ガイが自身の無力さに気付き、モモが顔をしかめて舌打ちをし、ジンが訳のわからないと言ったように困惑する。

そしてミュウは彼らを見捨てるようにして空へと舞い上がる。

「待てっ！！」

ガイが叫ぶも、しかしミュウはどんどんと高く、高く……。

「追うわよ」

そして今までになく冷めた、低い声を鳴らすのはモモ。

「モモ、さん？」

ジンがモモに問いかけるが、モモはジンに見向きもせずに歩き出す。その両眼に黒い何かを秘めて。

「行くぞジン」

「……はい」

ガイ、モモ、ジン、彼らがこの島にいる理由をミュウは知っているのだろうか……？

第六章：はじまりの島　Ｖ：三人の過去（後書き）

さて・・・なんだか「裏」も挟もうかなどうかなって考えてますがとりあえず俺に時間を！

執筆時間をくだせぇ！！

それでは、皆さまごきげんよう。

第六章：はじまりの島　ＶＩ：捨てられた者達（前書き）

お、お久しぶりです皆さま……。

折角時間が開いたのですが、あいていても書ける量がこれだけという参事に……。

よたよた歩幅の進行ですが、よろしくお願いいたします。

そしてミュウ大好きな自分は、今回は別バージョンでせめていこうとおもいます。

第六章：はじまりの島　ＶＩ：捨てられた者達

ガイ、ジン、そしてモモがミュウを追い訪れたのはこの島の頂上。

三人の前に宙を舞いながら現れるのはミュウ。

始まりの島の頂上には立派な一本の樹木が生えている。その新緑は空へと伸びるようにして枝分かれし、その幹にいたっては蔓が螺旋を描くようにして巻かれ、まるで今からでも動きだし空へと飛んでしまいそうな覇気まで感じさせられる。

そして三人はその木から数メートル離れた崖っぷち付近で浮遊するミュウと対面していた。

ミュウの先の向こうに臨むのはどこまでへと広がる海原。それはこの島から逃げ場所が無いのではないかと今更ながらに思わされるような錯覚を呼び起こさせる。

そして彼らは言葉を発さずともミュウという存在を目視するだけで、固唾をのみ込むことしかできなくなる。

宙を自在に舞い、あどけない微笑みを浮かべるミュウはその空気を楽しむかのようにしておどけ続ける。

「ちっ」

ガイが待ち切れなくなったのか、舌打ちをして一歩大地を踏み進める。

すると、

「ぐっ！！」

不可視の圧力。

ミュウが発した気に、ガイはいともたやすく気圧されてしまう。

ガイは地面に膝をつき、汗を額へと流してミュウを見上げる。その強気な姿勢にさすがのミュウもびっくりしたのか、一瞬目を見開いてすぐまた飛び回り始める。

三人の顔をもう一度確かめるように一瞥しては、尻尾を可愛らしくしならせては回す。

そしてミュウは静かにその両足を地面へとつき、そして淡白い光を発する。みるみる内に大きくなっていく体、そして三人の前にたたずむのは一人の長身で物静かそうな女性であった。

ミュウと同色な髪、幼さを秘めた垂れ目な瞳、透けてしまうかのような琥珀色の肌、可愛らしくも凛とした顔立ちと額についた三叉槍のような紋……それらはミュウがもし人間であったならという項目に全て当てはまるような既視感を与えさせる、そう最後の特徴を除いては。

「なんで人間って人間の言葉じゃなきゃ会話できないのかしら。めんどい」

発せられるはまごうことなき人の声。

今だあっけにとられた三人はミュウの人間姿を凝視して口を開かない。

「どうせ、アノ人の命令で来たんだろうけど協力することなんて無いし。それに、あなた達は捨てられたんだから」

ミュウは小悪魔的な視線と笑みを浮かべて、自分の前でたたずむ三人をなめるようにして眺める。

そしてミュウの言葉にすぐさま反応したのがモモであった。

「何言ってるの？　あの方がそんなことするわけないじゃない！」

動揺しているのだろうか？　それもあるかもしれないが、モモは明らかに一連の出来事に頭の整理がついていないのだろう。

同じ任務を共にするグループであっても、誰もお互いを信頼してはいないしその方が気楽であった。しかし、そんな関係が瓦解し、知られたくもない自分の過去が、秘密が、嘘がガイとジンにばらされたのだ。

例え一部にすぎなくとも、それはモモに混乱と焦燥を覚えさせるのに十分であった。

「あの方ね……ふふ。アノ人の指図ではないかもしれないけど、アノ人の創り上げた組織の人間はあなた達三人は邪魔者なんでしょうね。そんなものをこの私のところへと向かわせて始末しようと目論んでたみたいだけど」

ミュウから告げられる言葉にモモだけでなくガイもジンもついて

いけなかった。

『自分達が捨てられた？　ミュウに始末される為に送られた？』

そんな疑問が彼らの頭の中で精一杯に処理されようとしては繰り返される。

「そ、それは一体どういう……」

ジンが背中に担いでいる機材の重みさえ忘れつつも、ミュウにそう尋ねる。

「ふふ、さっきあなた達の記憶の欠片を漏洩させたんだけど続きが見たい？　そしたら本当に分かるかもしれないわね、なぜあなた達が捨てられたのか」

「「「！！」」」

そのミュウの一言にその場にいた三人の表情に雷が通ったかのような歪みが生じ、いままでになく鋭い視線でミュウを睨む。

そう、彼らの過去はほんの一握り。そしてまだ濁されたまま、彼らの内の中にしまわれている。

真相を知る人間などいるはずもない。そう、サカキを除いては。しかし、今目前にいる存在には全てがお見通しなのである。

人間の姿となり、ミュウは小さな足取りで巨樹の幹へと歩み寄り、手を添える。

「まあ、私も捨てられた身だからこそわかるわ。わかってあげられ

る。ここで死ぬまで住むのもいいし、アノ人に復讐するのでもいい」

ミュウはどこか物哀しげそうにそう告げ、幹にあてられた手をゆっくりとなぞらせる。

「どうするの？」

ミュウは顔を三人へと向けて、そう尋ね返す。

錯乱する脳を抱え、ガイ、モモ、ジンはミュウの妖艶な笑みを直視しながら何も語ることができずにいた。

「どうするの？」

再度尋ねられた質問。いや、質問ではなく命令なのか？　ミュウの発する言葉そのものに強力な気がこもっているかのように、三人は更に物怖じミュウを見つめるしかなくなる。

「ふふ、いいのよ……時間はたっぷりあるわ」

その時、三人は互いに目を合わせこくりと頷き合った。

第六章：はじまりの島　ＶＩ：捨てられた者達（後書き）

ちょい腹黒ツンツンキャラ、そしてあるのは黒い過去！！

ごめんなさい、それが自分の書いてて好きなキャラなので；；

いつまた更新ができるのかわかりませんが、よろしくどうもです。

ではでは～

第六章：はじまりの島　ＶＩＩ：渡されしもの

始まりの島：

「決まったかしら？」

人間の姿となったミュウが三人に挑発的な笑みを浮かべては尋ねる。

ガイが地面から立ち上がり、見据えるようにしてミュウを睨み返しながら答える。

「俺達はお前についていく」

思いも知らない返答にミュウは眉をしかめて、ほくそ笑む。

「あら、びっくりだわ。でもそうね……そうじゃなきゃ面白くないわ。私も丁度手駒がほしかったころだし」

ガイ、ジン、モモが決断した答え。

それはなんでも知っているミュウを追従することで、自分達の知らない答えを見つけられるかもしれないと三人は踏んだのだ。

「手駒でもなんでもいいです。僕達はここに誘われた真意を知りたいだけです」

「そうね……。そしてその真意がどうであるにしろ、私は潰すわ」

ミュウのとはまた違った黒いオーラを漂わせながら、モモはミュ

ウを直視する。

「あら、あなたって結構執念深いのね。好きよ、そういうの」

ふふ、と指を口元まで持ち上げてミュウはうれしそうに笑う。

「まずは教えてもらおうか、お前と俺達の組織のリーダーとの関係をな……」

ガイはポケットに手を突っ込み、警戒しながらもミュウに尋ねる。

ミュウはガイを見つめながら、大樹の幹の模様を指でなぞらせながら口を開く。

「私はミュウ。アノ人に命を救われ、命を守られている者」

アノ人……それが、示す人物の名はサカキ。

そう、いまや全国の地方をその手中へと収めたロケット団のボスである。その現国のリーダーが全ての原点であるミュウを救い、守っているという。

しかしそんなミュウがその組織にはむかおうとしている。

なぜ？

「もう飽きたのよ。恩はあるけど、私は庭園に囚われた悲劇のヒロインじゃないのよ。そろそろアノ人にも会いたいし、その為には面白そうだからアノ人のもっているものを壊したいの」

と、その理由は至極単純だった。

『黒っ……』
『苦手な女だ……』
『私よりやばいかも』

ジン、ガイ、モモは各々に先ほどミュウの放った言葉にそれぞれの思惑を浮かべる。

「だからあなた達にも手伝ってもらうわよ。ふふふ、ああ楽しみだわ」

この人物、いやミュウについていって大丈夫なのだろうか？　そんな不安が三人の中で渦巻くも、だがそれしか道はない。

「それではそうね……。とりあえずは修行かしら。あなた達は強いかもしれないけど、私からしてみれば無力な赤子も同然だしね」

ミュウのその言葉にガイは眉をぴくっと反応させ、その態度をミュウは予想していたかのごとく薄ら笑みを浮かべる。

「なんなら勝負してあげてもいいわよ？　あなたの腕一本もげてもいいならね」

その挑発にガイは堪忍袋の緒を切らしそうになるも、両腕をジンとモモに止められて我に返る。

「修行、受けるわ」
「受けさせてください」
「ちっ……」

ミュウの言っていることを信用しているわけではない、自分達のいる組織を壊滅させたい訳でもない、ただ彼ら三人は力が必要なのだ。真実を見据え、受け入れるだけの許容を得たい。

その一番の近道が目の前の者に従うこと。

彼らはそれなりの実力と過去を持つからこそ、本能的にそう体を理解させたのだ。

「どこまで来れるかが楽しみね。何年ぶりかしら、良い暇つぶしになりそうだわ」

妖艶な笑みはその表情から消えることはなく、ミュウは早速三人の方へと歩み寄る。

「それじゃ、まずはあなた達で殺し合いをしてもらうわ。それで生きていれば、力を分けてあげる」

ミュウが三人にそれぞれ渡すのは小さな木の実。そう、ミュウと三人がいる頂に生える巨樹に実っている木の実である。

「こ、殺し合い？　じょ、冗談ですよね？」

発せられた言葉を冗談だと思いたいジンがミュウに問いただすも、ミュウは無言でジンに振り返り微笑む。

「……なら、仕方ないわね」

そして納得したのか、モモはジンとガイから距離を取りボールを

その手に握る。

「ちっ……。まあ、そういうことなら仕方がねえな」

ガイもミュウに最後の睨みを利かせてからボールを取り出してジンとミュウから離れる。

「そ、そんな二人共！？」

ジンは、しかし納得がいかないといった表情で二人を振り返るも、

「早くしなさいジン」

「ジン、とっととしろや」

その言葉には微塵の情など混じってはおらず、ただの簡潔とした文字の羅列。

「ふふ、私はこの樹の上でじっくりと傍観させてもらうわ」

ミュウはそう言い残してふわっと地面を蹴り、そのまま宙で上昇して大樹の幹へと腰かける。

「あなた達には私の過去を知られた……。どっちみち生かしておくわけにはいかないわ」

自身のマフラー代わりのスカーフを上げて口元を隠しながらモモは告げる。

「最初から俺は馴れ合いなんて嫌いだからな、丁度良いぜ」

ガイは新たな煙草を取り出してはそれに火を灯す。

「っ……。僕も、負けるわけにはいきません」

ジンはまだ納得がいかない様子で、だが二人の本気をその身に感じ取りボールを構える。

「行くわよ」「来い」「行きます」

三人が同時にボールを地面へと放り、現れるのはカメール、リザード、そしてフシギソウ。

これは殺し合い、ポケモンバトルではない。普段なら気を遣うようなことなど取り払った無礼講のバトル……。

「カメール、【冷凍ビーム】！」
「リザード、【火炎放射】！」
「フシギソウ、【エナジーボール】！」

制御を必要としない三人のポケモン達が放つ技の威力はすさまじく、三竦みとなっているポジションで技がぶつかりあい衝撃波をつくりだす。

急激に温度を上げた【冷凍ビーム】が個体から気体へと変化し、それにより上昇したエンタルピーが【エナジーボール】により更に急上昇……衝撃を生み出した。

三人と三匹は顔を腕で隠して己を守り、すかさず次の命令を繰り出す。

「カメール、フシギソウに【ロケット頭突き】！」
「リザード、カメールに【ブレイククロー】！」
「フシギソウ、二匹に【痺れ粉】！」

自身の殻に籠ろうとするカメールの甲羅を狙いリザードの強靭な爪が振り上げられる。そしてフシギソウは大砲のように背中の蕾の標準を前方の二匹へと向けて痺れの効果をもたらす粉を噴出させる。

そしてカメールは間一髪のところでリザードの猛攻をかわし、フシギソウへと迫る。攻撃を外し、空を切ったリザードはそのまま前方に倒れ込むようにして前転して勢いを殺しながら体勢を立て直す。

「フシギソウ、よけて！」
「リザード、燃やしつくせ！」

物凄い瞬発力を持って突進してくるカメールをフシギソウは【蔓の鞭】を使って地面を打って飛び上がる。そしてリザードは迫る【痺れ粉】を【火炎放射】で焼きはらおうとして、今度は爆発が起きる。

そう、粉じん爆発である。空気中に浮遊した【痺れ粉】の粒子が燃焼し、それが他の粒子へと伝播……十分な酸素という条件が一致して轟音と共にまたも衝撃波が三人と三匹を襲う。

「カメール、そのまま【高速スピン】！」

しかしその爆発によって塞がれる視界を利用してのモモの指示が飛ぶ。

フシギソウを外したカメールは甲羅にその四肢と頭を隠したまま、

【高速スピン】を繰り出しながらその標的を狙う。そう、ジン本人を。

「くっ！！」

しかしジンは寸でのところで己の身の危険を察知し、カメールの攻撃をかわす。

ポケモンならまだしも、人間がポケモンの技を喰らった場合、その致命傷は想像を絶する。そしてジンはモモの過去を覗いていたからこそなんとか体を反応させることができた。

もしもあれがあたっていたとなるとぞっとなる程に、カメールはジンの胸元を狙っていた。

胸部を強打した場合、その衝撃が大きすぎた場合心臓の鼓動パターンを一時的に変則させることがある。そしてそれはそのまま心不全へとつながり、人は命を落とす。

「フシギソウ、【マジカルリーフ】！」

ぞっと背筋が凍りそうになるも、ジンはよけた体勢のまま上空にいるフシギソウにそう命令を出す。

休んでいる場合は無い。次へ次へと攻撃を連携させていかなければ確実に殺される……そうジンは直感的に感じ取っていた。

そう、これは殺し合い。

生き残った者が勝者なのだ。

「ふふ、人間って底がなくて面白いわ」

そして目下で起こる殺し合いを恍惚とした視線で見下ろしながら、ミュウはそう呟きほくそ笑む。

ミュウはジン達に渡した木の実に唇を触れさせて、その可愛らしく歯並びした口を開いて実をかじり呟く。

「これから楽しくなりそう」

第六章：はじまりの島　ＶＩＩ：渡されしもの（後書き）

学校がもうすぐ終わるので、最終学年の自分は時間に余裕が持てるようになりました。

なので帰国する六月中旬までは、ちょっとだけでも更新できるかもしれません。

相変わらずの不定期ですが；；

続きが気になるかと思われますが、次回からは新たなる章に入ります。あ、もしかしたら裏が一個入るかも……まあお楽しみにｗ

第六章：はじまりの島　「裏」：夕陽色に染まりし臨むもの（前書き）

お約束通りの「裏」です。

最初はケンにしようかなって思ったんですが、ケンはケンでいろいろと考えてあるのでサカキです。

今回のテーマはサカキという人物が大きいので、ちょくちょくこれからも出てくるかもしれませんw

第六章：はじまりの島　「裏」：夕陽色に染まりし臨むもの

ロケット団による完璧というまでの電撃作戦。

人々は新たなる政権に移り変わったことに何の違和感を持していなかった。

常に皆の憧れの存在として実力ある者としてあがめられていたポケモンリーグのチャンピオンがサカキに従うというのなら、それはサカキが凄いということだ。そういった思想連鎖が繰り広げられながら、迅速なテロ対策予防、潤滑されていく経済扶助効果を見てみれば世界はこのサカキという男を認めざるを得ないのだろう。

自作自演したテロ活動に会社の裏金を用いての賄賂……それは暴露されれば一大事となるかもしれないがそんなことを知る人間などごく僅か。そして今更そのような記事やニュースを持ち上げたとしても、世間は彼を認めてしまっている。ただのガセだとしか思わないだろう。

彼の用意周到さが招いたこの事態。そして彼は一体何を成し遂げようとしているのか？

なぜなら……この国を乗っ取ることはまだ彼の計画の第一段階でしかないのだ。

現在進行しているミュウツーの開発、反乱因子の排除、組織の再編成、そして新たなる支配……。

人々の間で伝播しているロケット団というイメージはシルフカン

パニー社の率いている慈善団体という認識が強まっており、その活動内容はまさしく目を見張るものばかりだ。

サカキが成し遂げようとしていることとはなんなのか。

表社会では国に身をささげる献身家として噂され、裏社会では全てを掌握したヘッドとまで呼ばれる彼が成し遂げようとしていること……。

「社長、例の三人は始まりの島へとたどり着きました」

ここはシルフカンパニー社の社長室。サカキの秘書がクリップボードを参照しながら報告書を読み上げる。

「そうか」

「しかしなぜあの三人を？　それほどまでに実力も危険要素も無いように思えますが？」

そう、三人とはジン、ガイ、モモのことであり彼らを島送りにしミュウに排除させよといったのはまごうことなくサカキ本人であった。

「彼らは私に恨みがあるからな。早いうちに越したことはない」

サカキは沈む夕焼けを社長室から眺める……その顔に目いっぱいの夕陽を浴びながら。

「それでは明日のスケジュールですが……」

後方で必要事項を淡々と述べる秘書の声を聞きながらサカキは夕

陽を臨む。

『この世界を後何回殺せば、人は気付くのか？』

サカキは憂いの表情をつくり、内心で呟く。

彼の成し遂げたいこと、それは……。

第六章：完

第六章：はじまりの島　「裏」：夕陽色に染まりし臨むもの（後書き）

前回活動報告で前書き・後書きについての意見をいただきありがとうございました。

やっぱり今まで通りのパターンで自分のやってきたことを続けようと思いますw

次回の新章はケンを中心に、他の「裏」でも登場していたサトシやダイゴ達と共にお送りする予定です。

第七章：最強の男　「裏」：白き濃霧に隠れる真実（前書き）

バンバン行こう、うん、バンバン。

ケン「やっと、俺の出番か」

まあ、この回にはでないけどね。

ケン「そうだな……」

第七章のはじめをいきなり「裏」から始めるのはいかがなもんかと思いますが、でもこれはいれておきたかったのでご了承ください。

では、お楽しみあれ

第七章：最強の男　「裏」：白き濃霧に隠れる真実

シロガネ山　麓付近：

ダイゴ率いるカントー美女軍（カンナ、カスミ、ナツメ、エリカ、アンズの五人）は世界最強とまで言われた少年、いまや青年となったサトシと共に頂上から下山してきている。

長年会うことの叶わなかったカスミとサトシは下山中、様々な話をする。

「あらあら、カスミちゃんたらあんなにうれしそう」

エリカは口元を裾で覆いながら、母親のような表情で嬉々としながらサトシと添い歩くカスミを見つめる。

「ったく、いちゃいちゃしやがって……」

この逃亡期間中、酒もろくに呑めなくてイライラとしているカンナがそうぼやく。どうやらストレスが溜まると彼女の口調はますます悪くなるようである。

「……嫉妬」

そしてぼそりとナツメがそう呟き、それを地獄耳を持つ氷結美人ことカンナは目じりを吊り上げて

「あぁ？！」

とナツメを睨む。

「カ、カンナさん落ち着いてください！」

そしてナツメに躍り出ようとするカンナをその華奢な体躯で必死に阻止するのがアンズ。

この女性の中でカスミの次に背の低いアンズは皆の妹分的存在であり、しかし反抗するようにアンズがしっかりしようとしてみせる。だがそれが逆に彼女の一生懸命さを大々的に醸し出しており、更にその妹分というイメージが濃くなってしまう。

「サトシは、寒くない？」

サトシの横で白い息を吐き出しながらカスミは尋ねる。

「うん、でもなれたかな。それにいつものうのうとしてたから、あまり覚えてないし」

一人で山にこもり、自分のポケモン達と修行をしてきたサトシはどこか毒気が抜け落ちてしまったのかのように昔では考えられなかった冷静さを培っていた。

「サトシは変わったね」

そんなサトシの成長をカスミは寂しそうに語りながらも、どこか嬉しげでいた。

「カスミも、変わったよ」

そう言い返すサトシは、どこかへと目線を泳がせて濁らせるように言う。

「え、どこどこ？」

カスミはサトシのその言葉にその身を寄らせて尋ねる。

「え？　そ、それは、えーっと……大人っぽくなったっていうか……」

昔から純情なところは変わっていないらしい。カスミは彼の言葉に自身も頬を赤らめて、

「サトシのスケベ」
「え？　えぇ？！」

まさかのカスミの返答にサトシは顔を紅潮させつつ慌てふためく。

「ぴっきゃー」

そしてそんな二人を楽しげに見つめるピカチュウは、二人ともまだまだ子供だね、と言いたそうな表情を浮かべて見せる。

若干の沈黙が二人の間に流れて、サトシは頬を指で掻きながらカスミを横目でとらえて口を開く。

「大変、だった？」

そのたった数文字の言葉に、カスミは即座にその真意を理解して首を横に振る。

「ううん……私が選んだ道だし、後悔してないから。ただ……」
「ただ？」

カスミはサトシと目線を合わせることなく前方を悲しげに見据えて続ける。

「お姉ちゃん達に悪いことしちゃったかな……。それと、カナが……」
「カナちゃんが、どうかしたの？」

サトシはカスミの妹であるカナのことは知っていた。旅に出た時はまだ幼稚園児で、カスミをハナダシティに送り届けた時にも会っている。その時はハナダシティに滞在していた時期が長かったため、カナの良き遊び相手となっていた。

その時、カナの友達だという子もいたけどさすがに名前は忘れてしまった。

「……カナが、カナがねロケット団に襲われたの」
「っ！！」

カスミが半泣きになりそうになりながらも、カナがハナダデパート襲撃事件での顛末をサトシに話す。

「……そんなことが」
「でも、生きてはいるの……。だから、だからね？　私は泣いちゃいけないのに……」

自分のせいで自分の街の人達が危険にさらされて、妹が意識不明

の重体となってしまった。それは一ジムリーダーであるよりも前に、一人の姉として妹を救えなかったばかりか危険にさらしてしまったという事実が彼女を苦しませているのだ。

「カスミ……っ」

サトシは優しくカスミのことを抱擁する。

その逞しく、懐かしい腕に抱かれてカスミは堪えていた涙を声と共に吐き出す。常に強気で、プライドの高い彼女がサトシの腕の中で子供のように泣きじゃくる姿を決してそこにいる誰もが嘲ることはなかった。

他の元ジムリーダー達と元四天王のカンナは、そんなカスミを見て改めて自分達の過去を振り返り決意を固くする。

「うふふ、やっぱりここに来て正解でしたね」

エリカはそう口に漏らし、カンナが煙草を口から出して

「そうだな」

と微笑む。

「はい！」

アンズも心からそう感じるのだろう、元気良くそう返答する。

「……一蓮托生」

ナツメは一言そう呟いて表情一つ変えないが、その言葉には若干の柔らかみが存在している。

「そうですね。なら私達も精一杯頑張りましょう」

「ああ。これも運命だろうからな」

女であるのに男以上に男らしい態度でカンナは遠くを臨む。

「それじゃ、早く下りちゃいましょうか。ダイゴさんがきっとイライラしながら待ってると思いますし」

アンズははきはきとした口調でそう皆を促し、それにしたがって五人は頷く。

「さあさカスミちゃん、そんなに泣いていたら折角の美人さんが台無しよ？」

カスミの肩に手をおいてエリカがささやく。

「エリカさん……」

カスミは面を上げて、弱弱しくも笑って見せる。

「サトシくんもありがとね、協力してくれて」

「あ、いえ……。僕にでもできることがあるんだったら、しないとカスミにまた叱られそうですし」

サトシははにかむようにしてエリカにそう告げ、その言葉にカスミが反応して「もぉー」と言い返す。

「それじゃとっととここから下りるぞ。サトシ、本当にこれが近道なんだろうな？」

カンナが一際大きな煙を吹かし、その白煙を顔にもろに喰らったナツメがせき込む。

「はい、もうすぐです」

シロガネ山。

それは登下山するだけでも難関と呼ばれている鋒山。出てくる野生ポケモンもこの山によって鍛えられ、屈強な曲者ばかり……。しかし今サトシ達は襲われることなく、順調にサトシが選別したルートを通り無事地上へと下山している。

そう、野生ポケモン達はサトシが自分達の縄張りで最強だということを本能で理解しているから襲ってこないのである。

「あ、そうだカスミ……」

思い返したようにサトシがカスミに話しかける。

「なに？」

「タケシは？　タケシはどうしてるの？」

サトシのその発言に、カスミは表情を曇らせる。

「タケシは……」

カスミが口を重たく、開こうとしては閉じて、また開く。

「タケシは死んだの」

タケシ、それは昔サトシとカスミと共に旅へと出たニビシティジムリーダー。

サトシとカスミより年上だった彼は何かと二人の面倒を良く見てくれた。彼無くして三人の旅は成り立たなかっただろう。

そんな彼が、女癖は悪くとも不屈の男と言われていた男が死んだ。

「え……？　う、嘘だろ？」

サトシがカスミを見つめ、他の面々へと視線を飛ばすも皆が揃いも揃って暗い表情を浮かべる。

「ううん、本当。タケシは、ホウエンで事故にあって死んじゃったの」

突きつけられる真実。

一体、サトシが修行している間に何が起こったのか？

そして彼は知ることとなる……。

今一体全体何が起きているのかを――――。

第七章：最強の男　「裏」：白き濃霧に隠れる真実（後書き）

さて、次回からケン視点ということで久々の一人称を使って行きます。

ケン「そういえば第六章は全部第三者視点だったな」

うん……慣れてないもんで；；；

ケン「そうか」

読者の方々もころころと文体が変わってわかりづらいかもしれませんが、お付き合い願います。

では！

第七章：最強の男　Ⅰ：知能戦　メタグロス対ニューラ（前書き）

さて、久しぶりにちゃんとしたバトルを書いた気がしますw

サブタイで誰と誰がたたかうのかはわかってしまう気もしますが；；；

それではどうぞ

第七章：最強の男　Ⅰ：知能戦　メタグロス対ニューラ

シロガネ山　ふもと　ポケモンセンター：

俺は今ミツルさんと共にカントーとジョウト地方の境目に控えるシロガネ山麓のポケモンセンターへと来ている。

「そんなに緊張しなくても大丈夫だよ。ダイゴさんはちょっと堅気気質だけどね」

ミツルさんはポケモンセンター内の待合室でソファに座っている。まあ、俺もその隣に座っているんだけど、ホウエン地方チャンピオンのダイゴと今から会うというのだ。

そう、全国でもトップスリーにもならぶ程の腕前を持ち国を統べるマインドヘッド。

エリートの中のエリートでもその地位は獲得できはしないと言われるチャンピオンという職業にして絶対的存在。それはトレーナーを目指す者達が夢見る将来。それは俺でも例外じゃない。できるもんならなってみたい……。

「でもですよ？　実際チャンピオンの一人に会えるなんて……」

知らず知らずと自分が緊張して、体が震えているように感じる。

まあ、何を隠そう俺は未来にありうるであろうチャンピオンとの対戦用の戦闘データを着々と集めていた。つまりはチャンピオンのプロフィールと手持ちポケモンは熟知済みだ。

「そうだね、僕も最初はケンくんみたいに緊張してたかもしれない」
俺の隣のミツルさんはどういった縁か、ダイゴさんの助手をしているらしい。俺が修行している間もずっとダイゴさんに頼まれた件について調査していたみたいだ。
「それにしても、一体何を調べてたんですか？」
「ん？　それはダイゴさん達が来てからにって———」
ミツルさんの癖っ毛をもしゃっと掴む大きな手。
俺は自然と視線を上げ、そして見上げたところにいたのは写真やテレビの中でしか見たことのない存在。
「ホウエン、チャンピオンダイゴ……」
思わず口からその言葉が漏れる。
「君がミツルの言っていた戦力か……。いかにも俺はダイゴ、今は極悪人として指名手配中だけどな」
生で見るとやはり違う、気迫が他のトレーナーと違うのが肌を通してびりびりと伝わってくる。俺は、興奮しているのか？
「昔の俺より素質があるかもしれないな。なるほど、俺とバトルがしたいか」
思考を読まれたわけじゃない。俺の武者震いをダイゴさんが感じとってくれたのだ。

俺は恐る恐る、しかししっかりとダイゴさんを直視する。
「良い目だ。よし、他の連中が来る前にワンオンワンだ」
「っ……はい！」
俺は反射的に返事してしまう。
強い者に対する闘志、それは俺の前から続く悪い癖。だけど、後悔したことなんてない。強い者と戦える興奮はバトル以上に心が満たされるからだ。
「ちょっと、二人とも？！」
ミツルさんがすたすたとポケモンセンターの外へと歩きだしていく俺達を呼びながら追いかけてくる。
「行くぞ、ケン」
「はいっ！」

ポケモンセンター　バトル用フィールド：

こんなところのポケモンセンターにフィールドなんて無いと思ってたが、違った。

山のふもとという状態を利用したバトルフィールドは、公式バトルでならば作りだすのに数百万はするであろう天然のフィールドが準備されていた。

「ここのフィールドは結構俺達の間では有名な所だ。良い経験は早いうちにしておくもんだ」

ダイゴさんが俺とは反対側のフィールドへと険しい山道をすたすたと登って行く。

フィールドは傾斜の上に存在しており、凸凹の斜面、ぼうぼうと伸びた雑草、大小様々な岩、そしてここで目玉なのが山岳地帯であるが故に人とポケモンが共に感じる低酸素状態。

低酸素状態によって引き起こされる症状は頭痛、吐き気、めまい、運動失調やむくみ。主な理由としてあげられるのが地上との気圧の違い。気圧は人間の体の中の空気や液体を作用する存在。地上で生活するからこそ正常に働く人間の体が気圧の違う場所……高山や海底へと赴くと人はその気圧に対処しなければならない。

「こういうところで修行する理由、わかったか？」

俺は体力には自信がある。でも、たしかにここで感じるのは普段とは違った息苦しさ。

そういやルカが言ってたな……山に登ると肺が縮小するからなんたらかんたらって。

「わかりました。でも、俺は俺のやり方で強くなります」

「ほぉ、いいね。ならはじめようじゃないか」

俺はボールを取り出す。ここは、こういう場所に慣れてるニューラで行くか。

「頼むぜ、ニューラ」

俺はころころとボールを傾斜に転がさせる。

「なるほど相手に合わせず、フィールドに合わせたか。いいぞ、行くぞメタグロス」

メタグロス……ダイゴさんの手持ちでトップとも称される程のポケモン。いいぜ、いいぜ、強ければ強い程バトルは燃える！

「メタグロスは進化させるのが難しいポケモンでね、知ってるかい？」

ダイゴさんが俺を試すような問いかけをかけてくる。こんなのは自慢話じゃない、そう受け取ってしまってはこちらが委縮するだけ

だ。

「二匹のメタングを同時に育て、同じタイミングで進化させないといけませんからね。二匹のメタングが合体し、進化したポケモンそれがメタグロス」

俺はポケモンの知識ならだれにも負けない。これで食って行こうとしてるんだ……金になるものに必要な知識は全然苦じゃないからな。

「なるほど、知識も申し分ないな。なら俺のメタグロスの知能が勝つか、君のニューラのずる賢さが勝つかはっきりさせようじゃないか」

ニューラの特徴もしっかりと把握してるって、当たり前か。

「そうですね。ニューラ、岩陰に隠れて相手に近寄れ！」

俺のニューラはボールから出て、そのまま岩の陰へと隠れる。

「なるほど、さっきボールを転がしたのはそういうことか。メタグロス、【アームハンマー】で岩を潰していけ」

「グロォォォ」

鋼がまるで生きて空気を吐き出した時のような返事と共に、メタグロスがその巨大な四肢内の右腕を振り上げて下ろす。

「くっ！」

その衝撃はフィールド全体を揺るがし、その腕が粉砕した岩の破

片が物凄い勢いで飛び散らされる。

さすがのニューラも驚いたのか、岩陰からこっそりと敵の様子をうかがっている。

「ニューラ、【メタルクロー】！」

こちらから居場所を教えるような行為にダイゴさんは眉を動かすのが見えた。

メタグロスも気がついたのか、ニューラの潜む岩陰の方へと振り向いてこちらに移動してくる。途中に転がる岩を粉砕していきながら。

そして俺のニューラは岩の背後で丁度地面と触れ合っている手前を【メタルクロー】で穴をあけていく。

「メタグロス、【高速移動】！」

わかってるさ、【アームハンマー】から下がった素早さを補う為の【高速移動】のコンボ。だから！

「ニューラ、こっちも【高速移動】！」

スピードを上げるといっても巨体のメタグロス、俺のニューラに追い付くことなんて――――！？

「ニュラアアアア！！」

メタグロスの【アームハンマー】がニューラの腹部を的確に狙い、

吹っ飛ばされる。

「メタグロスの弱点である素早さを最大限までにしてやるのはトレーナーとしては基本だろ？」

そんな、バカな……。ちっ、

「ニューラ、諦めるんじゃないぞ！」

「ニュラ！」

相手は元チャンピオン。一筋縄じゃいかないな……。

「ニューラ、【高速移動】！」

更に素早さを上げさせる。

「こちらも【高速移動】」

「グロォ」

そしてメタグロスはその四肢で地面を蹴って物凄い勢いで跳躍してくる。

「ニューラ、固定！　ギリギリでかましてやれ、【気合いパンチ】！」

俺のニューラが【メタルクロー】で開けた小さなくぼみ。それはニューラがそこに足を固定させて、踏ん張れるように準備させたもの。

ニューラは即座に拳に力を溜めこむ。

「メタグロス、【コメットパンチ】で決めてやれ」

加速のついたメタグロス本体の運動量に加えられての【コメットパンチ】は強力かもしれない。でも、ニューラが高いのは素早さだけじゃないってことを教えてやる！

そしてそこで俺とダイゴさんのポケモンへと対して出す指示が合致した。

「「一点集中！」」

ニューラが精神集中させ閉じていた瞼を開き、メタグロスを狙う。

メタグロスもニューラへと最終標準を定め、その拳を振りおろす。

メタグロスの剛腕がニューラへと迫るも、ニューラは跳躍して相手のタイミングをずらされる。ニューラみたいに体の小さなポケモンは攻撃されやすい、でも外しやすいっていう特典がついてくる。

ニューラはそのまま一点に思いっきりの【気合いパンチ】を打ち込む。

そう、それはメタグロスが振り下ろした右腕の裏側を。

「グロオオオオ！！」

バランスを崩されたメタグロスはそのまま地面へと落下し、砂埃を上げては停止する。

「やるなケン。なるほど、たしかに育てたら化けるかもしれないな」
自分のメタグロスを倒されたというのにダイゴさんは到って平然とフィールドを眺めている。
この、余裕……さすがはチャンピオンっていう所なのか……？
いや、違う！
「ニューラ、気をつけろ！」
「にゅら？」
ニューラが俺の方へと振り向くが、時すでに遅し……。
メタグロスが放った【バレットパンチ】がニューラの背後を的確にとらえていた。しまった、メタグロスのスピードを完璧に忘れていた。
物凄い勢いで吹き飛ばされたニューラはいくつもの岩にぶつかってはボロボロになって静止する。
「俺と君の違いは、経験じゃなくポケモンを育てられる時間の違いだ」
ダイゴさんが俺に向かって放った言葉に、俺は微笑を浮かべる。
「時間？　違うね、俺は自分のポケモン達をちゃんと育ててるさ。今だってこうやって立ち上がれる根性を育て上げるぐらいの時間がな！」
熱くなって自我を忘れようとしているが悪い気はしない。

「……なるほどな。しかしそれは根性と言えるかな？」

何……？

メタグロスがまたもニューラの前に一瞬にして迫りくる。

「ニューラ、【お仕置き】！」

「ニュラ！！」

俺の指示にダイゴさんの眉が歪むのが見える。

「ちっ、メタグロスさがれ！」

「グロ？！」

ニューラの渾身の一撃がメタグロスの顔面を直撃する。

第七章：最強の男　Ｉ：知能戦　メタグロス対ニューラ（後書き）

ルカ「久しぶりに私の名前が出た」

あ、ほんとだｗ

ルカ「早く、私に視点戻してよ」

まあまあ、そうあわてないあわてない。

ルカ「むー」

さて、この章は他のよりちょっと短めになってしまうかもしれませんがご了承ください。

では！

第七章：最強の男　ＩＩ：集結する反逆者（前書き）

いろいろと躍動いたします第七章。

もうちょっと引っ張ろうともしたんですけど、そうするとそれを出すまでに時間が空いちゃう危険性が高いのでそうそうにこのネタをまとめようと思います。

といっても引っ張るんですけどねｗ

では、どうぞ！

第七章：最強の男　ＩＩ：集結する反逆者

シロガネ山　ふもと：

サトシ率いる一行はやっとの思いで下山してきた。

一息つこうとしていた一行は、しかし凄まじい衝撃音をきいてその方へと歩みを早める。

「あら、なんでしょうね？」

エリカは毅然とした態度で首をかしげ、ナツメは目を閉じて告げる。

「バトル……」

カンナはアンズの髪を弄びながら、

「へぇー、どうせダイゴじゃないのか？」

「や、やめてくださいカンナさん！　私の髪で遊ばないでください！」

もしゃもしゃと髪をいじくっていたカンナは手を止めて、音がしてくる方を向く。

「あそこはあのバトルフィールドか……」

どうやらカンナはその練習用バトルフィールドを知っていたらしい。

「カンナさん、あそこでバトルしたことあるんですか？」
アンズは憧れの眼差しでカンナを見上げる。
「まあな……。でもここでのバトルはきついぞ？」
「うっ……。な、なめないでください私は忍びですよ？　くノ一ですよ？」
「ええい、わかったわかった」
小さな体躯ながらもアンズは懸命に自己アピールを試みる。
余談ではあるがくノ一の由来はくとノと一を合わせたら女という漢字になるからである。
それはさておき、サトシとカスミは一目散にそのフィールドへと駆けだしていた。どうやらバトルの生の音をきいていてもたってもいられなくなったのだろう。
「サトシ、本当にバトル好きなんだね」
「え？　だって、こんなに面白そうなバトル見逃すわけにはいかないだろ？」
「ふふ、そうだね」
これまで幾つものバトルを成し遂げてきたのだろうか？　チャンピオン達がこなしたバトル数を遙かに上回る程のバトルを経験してきたこの男には、どんな音かだけでそのバトルの良さがわかってしまうのだ。

練習用バトルフィールド：

凄まじい衝撃音と共に、メタグロスがうめき声と共に倒れる。

「【お仕置き】か……。さすがにそこまでは考えてなかったな」

【お仕置き】、それは相手のポケモンが自身の能力を上げれば上げる程に威力の増す技。

メタグロスの【高速移動】の連発、それは例え【アームハンマー】でスピードが落ちていたにしても効果は左右されない。

「でも、まだまだだ」

わかってはいる。俺の実力じゃダイゴさんには敵いっこないだろう。

巨大な四肢を岩の上に乗せて、威圧するようにしてニューラを見

下ろすメタグロス。その体躯の光沢は、まるで研磨された鋼の如くに輝いており、どれほど鍛え上げられてきたのかがうかがえる。

「メタグロス、【アームハンマー】」

だから大勝負に出るしかない！

「いくぞニューラ！」

「ニュラ！」

メタグロスの額のバッテンの真ん中はメタング同士が結合した点。つまりどんなに固くたって、あそこを一点集中に狙えば勝負はつくはず……いや、少なくても致命傷は与えられる。

「受け身を取ってからが本番だ！　いなせよ！」

メタグロスの【アームハンマー】の速度はまるでレーシングカーがどこからともなく衝突してくるような勢い……。それを見切って避けるのは先の一発でわかった。それはニューラも一緒だろう。

なら、いなしてダメージを少なくするしかない。

「はたして、上手くいくかな？」

「な？」

俺が迫るメタグロスから見たもの、それはメタグロスが右腕を振り回した瞬間に左腕までもが動いたこと……。

つまり、

「ニューラ、【氷の礫】で防げ！！」

俺の指示を瞬時に聞き入れ、ニューラはその両拳に氷の塊を膨張させる。

そこからは、コンマの世界となった。

砕け散る氷の粒、そして轟音。

悲鳴を上げるニューラ、そして無言のメタグロス。

【アームハンマー】は格闘タイプの技。つまり、ニューラにとっては致命的な弱点。

諦めるってことを知らない俺達でも、相手が悪すぎたのかもしれないな……。

「ありがとうニューラ。休んでいてくれ」

俺は身動き一つしないニューラを見て、戦闘が終了したのだと悟った。その観察眼をダイゴさんが察知したのか否か、ダイゴさんも同時にメタグロスをボールへと戻す。

そして、フィールドの外にはいつの間にかギャラリーが集っていた。

よくよく見れば、その面子は……。

今テレビで指名手配中の四天王カンナとカントー女ジムリーダー達。そして見知らぬ青年……カスミさんと同い年ぐらいだろうか？

「なんだお前達、やっときたのか」

ダイゴさんはすてすてとフィールドの荒い地形を飛びおりて、合流する。俺も同様に岩と岩の上を跳び渡りながら平地へと戻る。

「二人とも強いですね」

ダイゴさんへと視線を一度向けて、俺をまじまじと見つめるさっきの男。だれなんだ、一体？

「カスミさん、お久しぶりです」

でも、とりあえず顔見知りの我が街のジムリーダーに挨拶をしておく。

「久しぶりケンくん。調子は良いみたいね」

「ええ、まあ……。それよりも、その人は……？」

俺はカスミさんの横にいる青年に目配りする。

「あ、彼はね――――」

「自分で説明するよカスミ。僕はマサラタウンのサトシ、昔カスミと一緒に旅をしてたんだ。よろしく」

さしのばされる手。俺はその人の手を握り返す。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

その手を握るだけで俺は理解する。この人はただ者じゃないと…

…。

「なんだサトシくん、早速目をつけるなんて。やっぱり彼は筋金入なんだろうな」

「そうですね」

ダイゴさんはこの男、サトシさんを知っているのだろう。そして俺にはわからないような会話を進める。

「それよりもケンくん、さっきの判断はとてもよかった」

ダイゴさんが言っているのは俺がニューラに【氷の礫】を命じたことだろう。

先制攻撃のできる【氷の礫】、それは発動が早いという点でも先制できる由来を持っている。つまり俺はニューラにそう命じることで氷を【アームハンマー】の衝撃から守る緩衝材として使用したのだ。まさか、ダブル【アームハンマー】で来るとは思わなかったけどな……。

「いえ、まったくもって敵いませんでしたよ」

俺ははにかみながらもそう答える。

「いや、君の筋なら化けるかもしれない」

化ける？　それはダイゴさんも同じようなことを言っていたような気がする。どういう意味なのか？

「とりあえず今ここにいるメンバーが本作戦の実行部隊だ」

ダイゴさんがそう高々に宣言し、俺はぐっと気持ちの締まる思いを感じる。

「それじゃ俺の方から自己紹介させてもらう。今回の作戦において俺が個人的に協力を要請したのは君達だ。まず、カントーの四天王とジムリーダー諸君、俺の舎弟のミツル、ここにいるサトシくん、そしてミツルが探し出したケンくんだ」

俺はミツルさんから聞いていたことを思い返す。

ジムリーダーと四天王達のことについては俺も聞いてびっくりした……。前にルカと母さんと三人で朝ごはんを食べていた時、ニュースで流れていたマサキさんの拉致事件と銀行強盗の真相……。

その当時、まだカスミさん達はサカキから目を付けられていて監視が厳しかったらしい。だからその組織から離反する時に使った作戦の話をきいた。マサキさんの無事は確認されているらしい。

そして、はじめて見るサトシという人物……。でも、なぜだろう？　聞いたことがある。

「サトシくんはこの世界で一番強いポケモントレーナーだ。もちろん、この世界の誰よりもね」

ダイゴさんのその言葉に、驚いたのは俺だけだったみたいだ。

他の面々はサトシさんを知っているのだろう。皆、なつかしむようにしても何故か苦笑いを浮かべている。恐らく、昔の苦い思い出を回帰しているのだろう。

「世界で一番強い……？」

俺の口からは自然とその言葉が漏れていた。

世界で一番強い？　それがどういうことか、なにを示しているのか俺にはわからなかった。ただ漠然と、目の前にいる人物が世界最強というのか？

だから俺は手を握った時、得体のしれない危機感を覚えたのか？

はにかみながら屈託ない笑顔を振りまくこの青年が、最強。そしてこの作戦においては中心人物なのだろう。だとしたら俺は……？

俺の実力じゃ、ここにいる中で一番低いだろう。なのに関わらず、俺がここに集っている訳はなんなのか？

そういえば聞いたことがある……最年少にてリーグを制覇したトレーナーが過去にいたことを。しかし彼はすぐさま姿をくらました……もはや都市伝説だと思っていたのに……。

「詳しい説明はポケモンセンターの中でだな。ここは奴らの監視外にあるから、まあのんびりできるっていったら今しかないだろう。下準備は終わらせたから、後は君達が確実に実行できるかどうかにかかっている」

とりあえず今はこの人達についていくしかないな……。ルカも言ってたけど、リョウのことも気になるからな。

あいつはロケット団だって自分から言い出した。それにあいつがサカキの子供だってことは、友人であったからもちろん知っていた。

でも、まさかあいつがあんなことするなんてな。

いささか頼れる人間に出会えたからだろうか？　俺の心にはわずかだが余裕というものが芽生え始めていた。だからこそこうやっていろいろと物事を考える為の時間が生まれているんだろう。

余裕は決して油断ではない。その余裕の使い道次第では油断を切り落とすことだってできる。

「ケンくん、ちょっといいかな？」

皆がポケモンセンターへと向かって行く最中、俺は誰かに呼び止められる。

「……なんですか、サトシさん？」

カスミさんが立ち止まるサトシさんを見て自身も足を止めるが、サトシさんは「大丈夫、すぐ行くから」と言ってカスミさんに皆と行くように促す。

「ケンくん、もしかして君の名字はハヤミって言わないかい？」

サトシさんが鋭い目で俺のことを見つめる。

なんで、わかったんだ？

俺はつい顔に出してしまったんだろう。その表情だけでサトシさんは確信したみたいで、いつもの穏やかな笑みを俺に向ける。

「やっぱり、そうか」

「あの、サトシさんどういう……？」

俺は訳がわからなくなりつつも、必死にサトシさんから答えを導き出そうとする。

「うん、それはね――――」

この後、俺は驚愕の真実を知るはめになる……。

第七章：最強の男　ＩＩ：集結する反逆者（後書き）

まあ、以前からちょくちょく出してきていたルカとケンの名字。

その真相について次回、伏線回収！

ＢＬＵＥもよろしく！！（宣伝）

第七章：最強の男　ＩＩＩ：告げられしマサラの真相（前書き）

ややこしかったらごめんなさい

ケン「でもよ」

うん

ケン「なんでこんなんに限って俺達が巻き込まれるんだよ」

そりゃ、ねぇ

ケン「ん？」

一応主人公の兄だし

ケン「……ルカめ」

矛先違くない？？；；

あ、ではどうぞ

第七章：最強の男　ＩＩＩ：告げられしマサラの真相

「僕は以前、ハヤミという人物に出会ったことがあるんだ」

サトシさんが唐突に口にした言葉に、俺は息をのむしかない。

「僕より遙かに年上でね……。でもバトルを挑んで、その時は負けちゃった。十二年ぐらい前かな？　僕が丁度旅に出始めたころだ」

十二年前？　つまりそれはサトシさんが十二の時だということだろう。カスミさんも同い年のはずであるし、彼女が二十四歳なのは知っている。

「その時のバトルで僕はハヤミっていう人に言われたんだ。『強くなってくれ』ってね」

サトシさんが思い返すようにして言葉を紡ぐ。しかし俺にはこの会話がどこに通じていくのかまったく見当がつかなかった。

「それでさっきのバトルを見て、あの時とおんなじ感覚にさいなまれたんだ」

世界最強という名は伊達ではないのだろう。つまり俺の戦闘スタイルが親父と似ている……そういうことを言いたいのだろうか？　というか、親父は十二のサトシさんとバトルしてもうすでにその才能を見抜いたのか？　それとも、すでに旅出始めのサトシさんが強かったのか。

「つまり、俺と親父のバトルスタイルが似ていると？」

俺は問いただすようにしてサトシさんに投げかける。順々に説明をきいていかないと、わからなくなりそうだ。

「……そうだね。でも一つ確認しておきたくてね」

サトシはきっと、目つきを鋭くする。

「ケンくん、君はもしかしてスパイなのかい？」

その向けられた言葉に、俺は言葉を無くした。

「え？」

そんな俺の動揺っぷりを見てサトシさんは安心したのか、笑みを戻す。

「あ、ごめんごめん。関係ないだろうとは思ってたけど、どうやらあのハヤミって人の子供みたいだから……ついね」

「あの、サトシさん。一体どういうことなんですか？」

俺は訳がわからなくなりつつも、食い下がる。

「え？　知らないの？」

「俺の親父は俺が四つの時に妹を残して蒸発しました。その後は一度もあってません」

「……そうだったんだ。え、蒸発？」

サトシさんは両目を見開いて、絶句する。

「は、はい」
「ごめん、僕の方もちょっと整理させてもらってもいいかな？」
サトシさんは顎に手を当てて、十二年前のことを必死に思いだそうとする。
単刀直入に言えば、俺はルカとは血縁関係にあるものの本当の兄妹じゃない。
つまり俺の親父が違う女との間に出来た子供、それがルカだ。
本人はそんなこと知りもしないだろう。なんせ俺が最後に親父に会った十四年前、ルカは生まれたばっかりで俺は四歳だったのだから。つまりサトシさんの話が本当ならば、サトシさんは俺の親父に失踪二年後にマサラで出会ったということである。
「ケンくん、マサラの悲劇っていうのは知ってるかな？」
マサラの悲劇、それはオーキドという元偉大な博士がポケモンの生体実験において疑似生命体を作りだそうとしていた研究。その凄まじき程の非人道さにつけられた名前。
「はい、あの研究のことですよね？」
「うん……でもね、あの事件はそれだけじゃなかったんだ」
「え？」
それだけじゃ、ない？
しかしそんなはずはない。だって、俺自身もその記事や文献は読んだことがある。教科書にですら今は載っている程の事件なのだ。

「オーキド博士が見つかって、その村人がポケポリを呼ぼうとした時マサラタウンは謎の組織による襲来を受けた」
「……え？」
「恐らくはオーキド博士の研究成果を盗むためだったんだろうけど……それは失敗に終わったんだ」

初耳だった。まさかそんなことが起きていたとは……。

「その時に死人も出たんだ。この話は本当は他言無用なんだけどね、君には話しておいた方がいいと思って」

寂しげにサトシさんは笑う。この人は、どうしてこんなにも哀しげな笑みが浮かべれるのか俺にはわからない。いや、わかりたくないのかもしれない。

「つまり、これが二十年前のマサラの悲劇の真実。そしてその六年後に君のお父さんは疾走した。そしてその二年後に僕は君のお父さんハヤミさんと出会っている」
「一体、どこで親父と……？」
「オーキド博士研究所だ」
「！？」

なんで親父がそんなところに？

「……」

サトシさんは言い出しにくそうにするも、きっと俺を直視して口を開く。

「ハヤミさんはオーキド研究所のデータを盗もうとしていた」

「なに？」
「真意は僕にもわからない。でも、そこで僕はハヤミさんとバトルして負けた。そしてその時、その人は哀しげな表情で『強くなってくれ』とだけ残して去って行ったんだ」
「……」

なんで親父がそんなことを？

しかしサトシさんが言っていることが真なら、筋書きは通った。

十四年間も会っていないのだから、ショックではあってもそれほどまでに衝撃は受けてはいない。だから冷静に整理できる。

親父がロケット団のリーダーと接点があるかはわからないが、親父もまたサカキの動向を気にしていたのだろうか？　しかしだとしたらサトシさんと勝負する理由はない。

それにマサラの悲劇の真相……。ロケット団はそんなにも昔から存在していた、ということになる。しかしそのロケット団は目的を遂行できなかった。それはオーキドの研究データなどが破損されないまま協会によって保存された為だ。それにオーキドの身柄も拘束できたことからも踏まえてそういう検討しかできない。

そしてサカキはそのマサラの悲劇より以前にオーキドと出会っている……か。

さすがの俺でもこんがらがってくるもんだな。でも、今考えて躊躇すべきはここではない。このイカレタ世界を取り戻す。

「ケンくん」

「いえ、ありがとうございますサトシさん。でも、いいんです今は。今俺達がやるべきことは、全てをブッ飛ばして世界を取り戻すことですから」
「……そうだね」
「それよりも……」
「うん？」

俺はサトシさんの方へとずかずかと寄って行き、その顔を直視する。

「ど、どうしたんだい？」
「サトシさんって世界最強なんですよね？」
「え？　いや、それは皆が言うことであって僕は今はそうでもないかなって……」
「なんでそんな喋り方なんですか？」

俺がもっとも気にかかっていたこと、それはサトシさんの喋り方だった。世界最強の男がこんな女々しい言葉遣いな訳ない！（↑偏見注意※

「え？　そ、それは……えっと、ずっと人に会ってなかったから毒気が抜けたというか、野心が抜けたというか」
「なら直してください！」
「えぇ？！」
「俺が目指す世界最強のトレーナーはどんな奴でも言葉だけで吹き飛ばしちまうような、そんな人間なんです！」
「怖い！　怖いよ、それ！？」

俺はがっちりとサトシさんの腕を掴んでそう迫る。

「あ、サトシもケンくんも何やってるの？　ミーティングはじまるわよ！」

そして俺達のことを（特にサトシさんだと思うが）カスミさんが呼び掛けに来てくれる。

「あ、カスミ今行くよ！　ほら、ケンくんも行こ」

「……はい」

しかしあまりしつこくしていてもあれだし、ダイゴさんのお呼びとならばいつまでも待たせるわけにはいかない。

「とにかく、その喋り方どうにかしてください！」

「え？　あ、う、うん……」

「じゃなくて！」

「あ、ああ」

「はい！」

俺はそんな弱腰のサトシさんを引っ張るようにして、ポケモンセンターへとカスミさんと戻って行った。何気にカスミさんがうらやましそうにしていたのは俺の気のせいだろうか？

ミーティングをやるまで、俺はリョウのことを思い出していた。

サカキ　リョウ……サカキの第二の息子。

あいつは本当にああいうことがやりたかったのだろうか？　その真意を俺はまだあいつに問いただしてはいない。

でも長年あいつとつるんできてわかっていることはたくさんある。

あいつは常にふざけているような野郎だが、自分のやりたくないことは絶対にやらないのだ。つまり、それはあいつの行動自体が答えということになる。

今度会ったらブッ飛ばしてやる。

俺はそう胸に誓う……。

別にあいつが悪いとか、俺が正しいとかじゃなく、ただブッ飛ばす。気に入らないからブッ飛ばす。今までもあいつのことはブッ飛ばしてきた。それが俺とあいつの出会いでもあったし、友でもある証でもある。

自然と拳に力が入り、

「いたたたっ」

「あ、ごめんなさいっ」

「ちょっとケンくん、あんまりサトシをいじめないでよ」

つい、力が入りすぎたみたいだ。

それにしてもカスミさんは本当にサトシさんのことが好きなんだな。あぁ、あのハナダ美女姉妹でも随一のカスミさんがサトシさんに取られるとは……。

でも悪い感じはしないし、俺もサトシさんのことは気に入った。だから、俺の理想の人になってもらおうと思う。

この日を境に、俺は新たな決意をした。

その決意がいつかは大きな壁に直面することとも知らずに……。

第七章：最強の男　ＩＩＩ：告げられしマサラの真相（後書き）

はてさて、次回で第七章はおしまいです。

ダイゴが計画した世界奪回作戦とは？！

それとサトシの口調はわざとアニメ版と変えていました。まあ人間長年会わないとああなるのかなーなんて想像したりｗ　なので、そこらへんで遊びつつ直していくつもりですｗ

第七章：最強の男　ＩＶ：奪還作戦（前書き）

さて、みなさんの予想を裏切る形となれば良いと思っていますw

ケン「なんだよそれ……。てか、呆れられるかもな」

うぐっ……ふ、ふん、何を言うか

ケン「というか、物語がここからどんどんと進んでいくような気がしてならない」

過労死しない程度にがんばって

ケン「……」

それでは第七章の最終話、どうぞ！

第七章：最強の男　ＩＶ：奪還作戦

シロガネ山　ポケモンセンター：

俺含め、四人の元ジムリーダー、元四天王、ミツルさん、元ホウエンチャンピオンと世界最強の男が集う。

総勢九人。

それが世界を奪還する為に集められた精鋭。

「さあ、それじゃ今から君達にはこれを配る」

ダイゴさんがそう言って取り出すのは小型のインカムのようなもの。

「デボンコーポレーション作、ブルートゥース内臓の小型インカム。いくら奴らでも通信衛星のシステムまでものっとったわけではないらしい。俺専用のプロバイダーはまだ残っていた」

つまり、これで連絡を取り合えるということだ。しかし、危険じゃないのか？

「でも、危なくないのこれ？」

カンナさんが俺の思考を代弁する。それはここにいる誰もが思ったことだろう。

「発信コードと受信コードが一定の時間置きに更新される。いや、

書きかえられる。その間にそのコードを解析し、ハックするのが不可能な時間内にだ」

なるほど、安全性は保証されているのか。さすがは、デボンコーポレーションの跡取りとまで言われていることはある。

「さて大まかなことを今は説明しておく。そしてこれも持って置いてほしい」

ポケギア……？　いや、違う……ポケナビ？　でも、形状が違う。

「これは俺がつくった、ポケナビだ。ポケナビはデボンの登録商品だったが今はすでにシステムから何まで全部ロケット団の手中に落ちている」

「ダイゴさんって多彩なんですね」

「褒めるな」

俺の称賛もその一言で片づけられる。

「名称は無いから、そのままポケナビとして使ってくれ。ただ、皆には悪いが勝手に番号を振らせてもらった」

「番号……？　あ、本当だ私のは５番」

アンズさんがポケナビの裏側を見て、そこにVという文字を発見する。

というか、アンズさんって何歳なんだ？　外見から見ると俺とはそう変わらないみたいだな……。というかこの中の誰より背が低い。

ダイゴさんが全てのポケナビを渡し終え、俺のもらったポケナビ

はＶＩＩ……７番。

「番号の意味は悪いが伏させてもらう。一種の保険だと思ってくれ……」

「はい」

ミツルさんは本当にダイゴさんの自称舎弟なのだろう。全てを受け入れるらしい。

「ですがダイゴさん、私（わたくし）あまり機械については詳しくありませんの」

悩ましい表情を浮かべるのはエリカさん。なぜ、こういう場所でも着物なのかは謎ではあるが似合っている。でも、あんなに派手なもの着て任務を遂行できるのか？

「そこらへんは慣れてくれというしかない。でも、安心してくれ……操作は簡単だ」

ダイゴさんは自身のＩと書かれたポケナビを操作して、皆を見渡す。

ポケナビはＩからＩＸまで九個が存在する。

「まず、俺達には拠点が必要だ。だから、俺達はホウエンを始めに取り戻す」

ざわめきが小さくも俺達の中で渦巻く。

「ホウエンはまだ堕ちて日が一番浅い。ならば少しでも反対勢力のある内に奪還したい」

その案に俺は合点がいった。でも、ダイゴさんの根回しがあったのにも関わらず堕ちてしまったホウエンならば一番手ごわいのではないのだろうか？

「敵は手強い……だが、だからこそそこにある余裕をつく。そういうことだ、ケン」

「は、はいっ！」

この人は読唇術でも使えるのか？　はたまた俺が顔に出していたのか……さすがの観察眼だ。そうだよ、こういう口調をサトシさんがすりゃ……。

「……手始めにどこ？」

寡黙なナツメさんがぼそりとそう呟き、ダイゴさんは更に進める。

「ああ。先ずはホウエンへの足がかりとしてトクサネシティに行く。俺の別荘もそこにあるからな」

トクサネシティ……えーっと、どこだったか。

確か、

「確か、トクサネシティって宇宙センターがあるところよね？」

カスミさんが俺の変わりに先に言ってくれる。そうだ、宇宙センターのある島だった。

「ああ、そうだ。それにあそこは離れた場所にあるからな、情報通

達も他よりは遅い」

だからダイゴさんはそこに別荘を建てていて、自分専用の通達経路のプログラムを衛星に書き換えやすいようにしたのだろうか？そんな想像が俺の中で働く。

そしてサトシさんがダイゴさんに向かって意見する。

「でもダイゴさん、島を取り返すにしたって統括者は変わってないと聞きました。　世界の敵は僕達……下手をすれば一般人までもを敵に回すことになるんじゃないですか？」

そう、ロケット団とポケモンリーグ協会が協約を結んだことにより今の俺達は単なる反逆者扱いの上、主要人物達に至っては指名手配中なのである。

「ああ、わかっているさ。その覚悟を君達にしてもらいたい」

それはつまり、一般人を巻き込んででも任務を遂行しなければならない……ということなのだろう。

だが、それは……

「でも、それはあなたの望むことではないはずです」

凛とした視線でサトシさんがダイゴを見つめる。

なんか、俺のセリフを先取りするのはやめてもらえないだろうか……。

張りつめた雰囲気が九人の間に流れる。

「ああ、望んではいない。しかし人は気付かなければならない……真実を」

「でも今の人達は今の日常を、情勢を真実だと信じているんでしょ？　なら、強制奪還は彼らの信じているものを背くことになるんじゃないですか？」

ダイゴさんとサトシさんの意見が往行する。

それはどちらともに是があり、非もあった。

「平和的にホウエン地方を奪還すればいいんですよ」

多少の武力を持ってしてでもホウエンを奪還しようとするダイゴさんと武力を行使しての奪還は成功しても意味がないと思うサトシさんに向けられたのはそんな言葉だった。

「ミツル？」

「何もトクサネシティで事は起こさなくても良いんです。僕達の狙いはホウエンリーグの奪還なんですから」

ミツルさんが柔和に発したその言葉は誰もの緊張感を解しただけでなく、誰もが忘れかけていた本作戦の意図を思い出させてくれた。

「悪かったなサトシくん……」

「いえ、僕も悪かったです」

ダイゴさんとサトシさんは早決にそう言いあって、ダイゴさんがそのまま続ける。

「ミツルの言った通りだ。そして協会に乗り込む為にはジムリーダー達のジムバッジが必要になる」

元来より、ポケモンリーグというのは協会が設ける一年に一度の催しのことである。そこでその地方における一番のトレーナーをトーナメント式で選出するというものだ。そしてその資格を得たものがポケモンリーグ協会という本拠地で四天王とチャンピオンに挑む資格を得ることができる。

しかしチャンピオンに挑み、勝利したものはそのチャンピオンの座を引き継ぐという慣わしが存在しており中々にその座につけるものはいない。ホウエンの現チャンピオンも、ダイゴさんに勝利したのではなくダイゴさんが失踪した為に四天王達によって代理役を務めさせられていると聞く。しかし今となってはその人物が実質の現ホウエンチャンピオンなのであろう。

そしてダイゴさんの言うジムバッジが必要というのは、ポケモンリーグに挑戦し勝利して本部に乗り込むしかないということらしい。それはつまり、ジム戦にて勝利しなければならないということなのだ。

ん？　待てよ、もしかしてそれって……

「そう、察しが良いなケン。君がホウエンでのチャンピオンを負かしてくるんだ」

「なっ！？」

ロケット団がいくら世界を乗っ取ったとしても、法律を変えてはいない。つまり、既存のルールは未だに存続しているということに

なる。

「え、でもさっきは強行してでもって……」

「ああ、俺がジムリーダー達から無理矢理にでもバッジを取るっていうことならな」

そ、そういうことだったのか……。

恐らくサトシさんも俺と同じように思っていたのだろう。困惑とした表情を俺に向けてくる。向けないでください！　俺だってちょっとこの人のこと理解できなくなってきてるんですからっ！

「ダイゴ、あんたって本当説明能力皆無よね」

どうやらカンナさん達はダイゴさんのことを良く理解しているのだろう。あ、だからミツルさんはああ言ったのか……。

というかジムリーダー達はこのことは予め一通り知っていたということになる。なら俺とサトシさんの勘違いかよ！？

「そうですよ、今の会話からだったらまるでトクサネシティで暴れるって感じですよ」

カスミさんが眉をひそめてダイゴさんに言う。

「そうか？　それは悪かったな」

が、ダイゴさんは悪びれるつもりはないようだ。

「もしかして俺が真に選ばれた理由って……」

「ああ、正攻法でこの国を奪還するんだ。新たなチャンピオンをつくりだす……その為に集めたチームだ」

だからだったのか？

だからなのか。

そうなのか。

その案、気に行った。

俺は一歩下がって、深く頭を下げて声を張る。

「指導、よろしくお願いします！」

多分俺は笑っていたのだろう。俺の顔を皆が見て、微笑み返してくれるのが見える。

強くしてくれる。そういうことなのだろう。

「だから先ず俺達に必要なのはケンの修行を行える場所、拠点だ。スケジュールのローテーションは各自のポケナビに送る。そしてケンの修行を手伝わない者は順々に他の任務を与えていく」

ダイゴさんがてきぱきとそう説明をしてくれる。

「覚悟しておきなさい。私の特訓は厳しいわよ？」

同じメガネをつける者として望むところですカンナさん。

「忍に必要な何たるかをお教えいたします！」

アンズさん……それはちょっと違うんじゃ……？

「……よろしく」

ナツメさんとはまずちゃんとコミュニケーションを図ることからはじめよう……。

「がんばりましょうね、ケンさん」

素直に「はい」とエリカさんには答えてしまう。

「久しぶりに腕前見せてもらうわよ」

カスミさんとは昔スクールの課外授業でバトルしたきりだから、俺も久しぶりですよ。

「ケンくん、一緒に頑張ろう」

俺もサトシさんの口調改善に全力を注ぎます。

「僕はダイゴさんの補佐につくことになるからあまり会えなくなっちゃうけど、がんばって」

ミツルさん……はい、ありがとうございます。

「巻き込んで悪いなケン。でも顔の割れていない君に頼むしかない」

「いえ、巻き込んでもらって良かったです。俺はやっぱりダイゴさんみたいに、強くなりたいですから」

若干敵とドンパチしながらの展開もわくわくしていたけど、こっちの方が断然に燃える。

「ホウエンリーグは他の地方に比べて早い。春に行われるリーグまでに、頼むぞ皆」

俄然面白くなってきた。

やってやる！

第七章：最強の男　ＩＶ：奪還作戦（後書き）

次回はやっとこさ、ルカに視点を戻します。

ルカ「や、やった……やっと、やっとだよ……！！」

うれしいのはわかるけど、まあ落ち着きなさい。あれがある。

ルカ「何？　ま、まさか、裏！？」

イエス

ルカ「うぅ……出番……」

それでは！

第七章：最強の男　「裏」：異色の二人（前書き）

活動報告でも述べましたが、卒業祝い旅行に行くために三日間は不在となります。

まあ、たかだか三日なんですがネットから三日も離れるというのは稀なのでｗｗ

ケン「俺もつれてけ～」

ルカ「私は、いいやー」

なので区切り良く七章はこの二人でしめさせていただきます。

第七章：最強の男　「裏」：異色の二人

アサギシティ：

ジョウト一の出船場としても知られる、ここ大港街のアサギシティに二人の少年少女がいた。

「えらいことね……」

「そうだな。となると、やっぱりロケット団の自作自演だったわけか」

状況を冷静に受け入れるこの二人のトレーナーは、ケンによってリョウ達による奇襲から逃れた者たち。

「テロを行い、そのテロの対処までも自分達でしてしまう……」

「そしてその事実を隠ぺいする程までの情報操作能力。こりゃ大物な訳だ」

二人は今アサギシティの波打ち食堂という場所で昼を食べながら、テレビモニターを見つめていた。もちろん、二人の会話を耳に挟む者はいない。

「でも、トップが変わっただけで他は何も変わってない」

「そうだな……。著しい変化って言ってもホウエン事変ぐらいか。ならそこは避けよう」

「ええ」

栗茶のセミロングで顔の右側を完全に前髪で隠すメガネ少女の名はアユミ。顔が隠れているせいか、見え隠れするその端正な顔つき

はどこか外国人の印象をも与える。

耳にピアスを三つずつの完璧なまでの金髪短髪の少年の名はキリン。ケンとリョウとは度々つるんでいて、おちゃらけてはいるものの良きムードメーカーとしてもクラスでは人気が高かった。

彼らはあの襲撃事件の後そのままジョウト地方まで逃げ切り、バトルなどで賞金を稼いでなんとか生活していた。

この国ではトレーナー同士のバトルを行った際に、敗者は自身の持つ所持金の１パーセントを支払わねばならないというルールを敷いている。たかだか１パーセントというかもしれない……しかし、多くのトレーナーにとってその１パーセントの財産をかけてでもバトルして勝つという意気込みが試されるのだ。

そして金銭がかかるこそバトルは頻繁にも行われるし、バトルの申し出を拒否する権限もトレーナーには与えられている。

そしてその金銭の取引は全て自主登録されたポケギア・ポケナビ・ポケッチによって行われる。つまり、お金をデータマネーとして扱い、それを日常でもフル活用しているのだ。

「キリン、あなた後お金どれくらい……？」

アユミはおとなしく、静かそうに見えて実は物言いが淡々としているだけでかなり話すタイプである。ただ、その存在感が薄い為かそう認識されやすい。

「俺か？　昨日稼いだので３０００円ぐらいだな」

「なら船代は出るわね」

「お、進路が決まったか？」
「ええ……」
アユミがここの食堂の名物である海鮮グラタンを平らげて、キリンを見据える。
「シンオウチャンピオンを倒しましょう」
「……大きく、出たな」
「もちろんよ」
キリンはアユミが冗談などを決して言わないことがわかっていた為、なおさら衝撃的に彼女の言葉を受け止める。
「つまりは俺達の誰かがシンオウチャンピオンの座を奪えば言い訳か」
「ええ」
「なら、俺は違う地方に行った方が良くないか？」
「いいえ、確実に狙い落とすのよ……。それに、シンオウリーグは他の地方とは若干違うから準備も手間取るわ。同じ取るならシンオウの方が良いってこと」
アユミはベルをならして、更にメニューを指さして追加注文をする。
彼女の目の前には先ほど頼んでおいた海鮮グラタンの空き容器が五つ。
「しかし今のシンオウは寒くないか？　今の服だけじゃ心もとないぜ？」
「船でバトルして稼ぐのよ。それしかないでしょ」

「はぁ……そうだよなー」

お金で困っていれば親からその二人の口座にお金をおとしてもらうことができるかもしれない。ただ、二人は孤児でありハナダ孤児院という場所で世話になっていた身である。今年スクールを卒業し、孤児院からも出ていくつもりだったのだがそれはもう叶うことはないだろう。

「しかしアユミ……お前良く食うな」

感心しているキリンが水を飲みながら、そうアユミに告げる。

運ばれてきた新たなる三つのグラタンをスプーンで平らげるアユミはそのスプーンを口に含んだまま手を止めてキリンの方を向く。

「……うっさい」

「へいへい」

そして彼女はまたスプーンの動きを再開させる。

「それにしても……平和だな」

そう零すキリンをきっとアユミが睨む。

「へいへい、黙りますよ」

「緊張感無いのよあんた……」

「気張っててもつかれるだけだろ？」

「慎重って言ってくれる？」

「へいへい……」

キリンがグラスの水を飲み干して、アユミは残りのグラタンを平らげる。

ロケット団による実力のある若者を一掃する計画から逃れた二人の少年少女。

彼らもまた、彼らのやり方で国を取り戻そうとしていた。

彼らが向かう先は最北シンオウ地方。そこはチャンピオンシロナが統括する、アルセウス教発端の地……。

第七章：完

第七章：最強の男　「裏」：異色の二人（後書き）

アユミ「……よろしく」

キリン「よろしくなー」

さて、第八章はルカに視点が戻ります。サント・アンヌ号編……しばらく書いてないですな；；

まだ時期は冬と、はじまってから時間経過はあまりないので、ま、ゆっくりいきますw

それでは～

第八章：ホウエンまで　Ｉ：改める決意（前書き）

イエローストーンから帰ってまいりましたＫａｒｙｕです。

いや、もう本当にすごかったですｗ

その体験を素に今後の執筆もがんばりたいところなのですが、受験のためいろいろと本格的に忙しくなりそうです。

日本に帰ったら空いた時間に書き溜めして唯一ネットが使える日曜日あたりにちょくちょく更新していくかもしれません；；

そんな暇あったら勉強しろって話なんですが、書いてないと逆に落ち着かないので；；

では、どうぞ！

第八章：ホウエンまで　Ｉ：改める決意

サント・アンヌ号：

今日は確か、オープンバトル大会の日……。

「というか……ねむい……」

私が昨日のハルちゃんとお食事をした後、コクドウさんに連れられて帰ってきた。

至福の満腹感を味わいながら、私はうつらうつらとなりながらもシャワーを浴びてガーディとシャワーズ、そしてミツルさんのラルトスに部屋に運ばれていたフーズを食べさせた。

もう本当に覚えてないのは、そんなにも夢心地だったのかな。

でも、この布団ふっかふか～。

私は寝そべり返りながらふかふかの羽毛布団を抱くようにする。体が半分布団から出るも、腕と足を巻きつけている毛布の感触に私は枕に頬を擦り付ける。

「ああ、いい～」

部屋一杯に溢れる朝日が揺れるレースのカーテン越しから妙に優しく感じる。

「がぅ」

「ふぃ？」
「ら～ぅ」

私の起き際の声に三匹が目を覚ましたのだろう、それぞれに朝らしい弱弱しい声を上げる。

「お風呂、はいろっかな～」

がばーっと起き上がって、背伸びをその場でする。

昨日はシャワーだけだったけど、ここのお風呂場はすごい。シャワー用個室とジャグジー付の浴槽が別々にある。お風呂場だけで私の部屋の二倍あるって、どんだけなのよ……。

薄地のシルクパジャマは高級感を漂わせるような、質素ながらにも手触りは今までに着たことない感触。

私はお風呂場に入って、浴槽の横に付いているスイッチを押す。自分の家でもそうだけど、やっぱりでも自動的にお湯を溜めてくれるっていいなぁ～。

ドババババーとお湯が流れ出て溜まっていくのを見ながら、パジャマのズボン下をつつく感触がやってくる。

「ん？　ラルトスどうしたの？」

ミツルさんから拒否することなく渡されたラルトス……。でも、いざ改めて触れ合うととってもかわいい。相手の感情を敏感にキャッチするといわれるラルトス……それは偶然なのだろうか？　でも、ううん、そんなことない。

ラルトスは私を見上げて優しく微笑む。それは私の気持ちと同調してくれてるのかな？　早く打ち解けるかもしれない。

「ありがとう、ラルトスー」

私はラルトスを抱っこして、ベッドの上へとダイブインする。

「らるぅ～」

「えへへー、高いたかーい」

ラルトスの両脇を抱えて高く高く掲げる。嬉々とした鳴き声を上げるラルトスを見て、ガーディがばっと私に飛びかかる。

「あ、ガーディもしたいの？」

「がう！」

「ふぃー」

シャワーズも同じなのだろう、ガーディの温かな体毛とシャワーズのひんやりとした肌触りが私に触れる。

私は二匹もラルトスのように高い高いとしてあげたところ、丁度良いタイミングでお風呂場から「お風呂入りました」という合成声がきこえてくる。

「あ、お風呂入った。皆まっててねー」

私は三匹にそう言い残してお風呂場へと直行する。

溜まった蒸気が湯気となって風呂場を埋め尽くそうとしている。

私はパジャマと下着を脱いで、それを広い洗面台の上に置く。

ちょぴっちょぴっと足先をお風呂のお湯につけて温度を確かめる。

「あ、丁度良い」

私はざばんと洋式風な浴槽にその身を浸からせる。家のお風呂より遙かに大きい浴槽……全身を伸ばしてもまだおつりがくるぐらいのスペースがある。こん中で寝ちゃったら、確実におぼれちゃうな……。

壁際に設置してあるボタンを見つめて、興味本位でジャグジーと書かれているボタンに触れてみる。

するとぼこぼこ、ずどーっ！　といった感じで強烈な泡が私の背中を襲う。

「うわ、きゃっ！」

多大稀ない攻撃に私の背中は押されて、ふくらはぎ辺りからも動揺の衝撃を覚える。

「い、いたいいたい！」

ぴっ！　ぴっ！　とボタンで強弱を整えて私は一息つく。きっと、私の前に使ってた人は肉厚だったんだろうなーなんて失礼な妄想を膨らませる。

「あー、でも極楽極楽ー」

オープンバトル大会はすでに白熱の展開を繰り広げているのだろう。自分の自慢のポケモンを披露できるステージ……それは子供であっても大人であっても忘れ拭い去ることなんてできない程の緊張感と充実感、そしてなにより昂揚感を味わえる最高の舞台なのだから。

「ハルちゃんの昨日の物言いからしても、やっぱり強いんだろうな。だって、ポケモンバトル慣れしてそうだったし」

ポケモントレーナーがバトルをする……それ自体の行為がトレーナーの体つきにもやはり影響を与える。

ただ指示をするにしても、トレーニングを指示のみで済ますにしても、フィールドに立ち、他者とバトルをするという行為が一般人とは違ってくる。

それは視線と声……。

バトルの際に相手のポケモンを観察し、自分のポケモンをもとらえないといけないトレーナーの目の動きは一般人とは違う。そう、それはただ会話しているだけでもわかることで他の人とは異なる方向を見ていることが多いし動きも若干異なってくる。それと熟練したトレーナーなら自分のポケモン、あるいは相手のポケモンの影に入って対戦相手に自分の動きを見えなくさせるといった動作も見受けられる。

視野の使い方が発達しているトレーナーはバトルにおいても相手のポケモンと相手トレーナーだけでなく、バトルフィールドを瞬時に見渡して自分のポケモンの位置と自分の位置を確認したりという全体を俯瞰視点で認識したりする。

あ、俯瞰視点っていうのは上からみた視点ってことで良くパズルゲームでも用いられている視点のこと。つまり、この視点を認識できるような視野を持つような選手程、バトルの時に他者よりは有利な戦闘運びができるとされている。

私も若干、そういう視野を使えるからバトルはそこそこについていけるんだけどね。

と、そんなことを考えている内に体の箇所に痺れが現れてくる。

「ジャグジーの当て過ぎで体が……」

ぴっ、とボタンを押してジャグジーを終了させる。

「えっと、後は何があるのかなー？」

新しいおもちゃを手にした子供の気分になって……って、私はまだ子供だからはしゃいでもいいもん！

とにかく、お湯が様々な色に変わったりするライト調整や浴槽の前壁についているテレビモニターを点けたりしながら私はバスタイムを楽しむ。

今日のバトル大会を楽しみにしながら、さっき考えていた視線と声のことを思い出す。

ハルちゃんもバカ兄もそうだけど、強いトレーナーははっきりとした言葉をしゃべる。それは別にアナウンサーとかアニメの声優さんとか、声を職業にしている人達のと似ているけどトレーナーは声

をつくったりはしないことが一つの違いなのかもしれない。

ポケモンに指示を出す時、大きければ相手にも技名や次の作戦がわかってしまう。しかし逆に小さすぎるとポケモンも戦闘中に聞き取りにくいこともある。絶妙のボイス音量で自分のポケモンに指示を与え、相手に自分の意図を勘繰られないようにする必要性があるのがポケモンバトル。

でも強いトレーナー同士のバトルを見ると、指示が例え聞こえたとしても予期せぬ攻撃や連携を繰り出してくるから奥が深いらしいけどね。私はあんまりバトルを見て燃え上がるようなタイプじゃないから……。

視線と声……。つまり両方の特徴が大きければ大きいほどに、相手のトレーナーとしての資質と力量が判断できるといっても過言ではないのかもしれない。

昔に先生にそんな話をした時に、お前の観察力は凄いなって褒められたんだけど私の気のせいだよね？　だって、皆もわかってることだと思うしさ。

「うーん、そろそろあがろっかな」

小一時間ぐらい経っただろうか？　私はざばーっと浴槽から身を持ち上げて近くの棚に積んであるタオルを手に取る。

「やっぱり、タオルが大きいっていいな～」

全身を覆い尽くさんばかりのふかふかタオル……。家だと乾かないっていう理由でいつも小さなタオルしか使ってないから、物足り

なかったんだよねー。

そして全身を適当に拭いて、私はバスローブに手をかける。

「なんか、本当に私ってリッチ？」

テレビの中でしか見たことのない外国人がバスローブに身を包んでワイングラスを持つ様が思い浮かぶ。洗面台の鏡の前でバスローブに全身を包んで自分自身を見つめる。

イメージだと、ローブの下からでもナイスボディになるはずなんだけどなー……。

自分の乏しい……ううん、まだ発達してる胸を見下ろしながら私は期待することにする。そういえばデパートで会った時の女の人、綺麗なプロポーションだったなぁー。

幾分思い出したくはないことであっても、あの人にはちゃんとしたお礼ができずにいた。

「一体、誰だったんだろう」

「がうっ！」

「あ、ごめんガーディ今行くね」

さすがに一時間は待たせすぎちゃったかな？　私はガーディの鳴き声に我に返って三匹の元へと戻る。

「よし、じゃあちょっと早いけど着替えて試合見にいこっか」

「がう！」

「ふぃー」

「ら～る」

私は小さなタオルで髪の水飛沫を拭き取りながら窓から景色を見下ろす。

S区から見るサント・アンヌ号のデッキを挟んだ海原は本当に綺麗。ターコイスブルーの水面が斜陽によって輝き、人の小さく聞こえる喧騒とポケモン達の姿に自然と微笑みがこぼれる。

でもそれと同時に、私はここにいていいんだろうかという罪悪感にもかられる。

大きな窓のグラスに手を触れて、自分の顔が映る。

カナはまだ目を覚まさないだろう。私がチイラの実を持って帰るまでは……。

だから、待っててねカナ。

新たに私は心に誓う。ホウエンに着くまでの一週間に、私は自分でやれるべきことをやると。

でも、カナごめんね。私にちょっとだけ私の時間を頂戴。

第八章：ホウエンまで　Ⅰ：改める決意（後書き）

本格的にちょっとメディターの前半といってもいいのかな？の構成上では盛り上がりつつある展開まで近づいてきています。

ルカ「メディターはポケ神よりも長くなるの？」

うん、その予定。考えている範囲内で、自分の文章力だとちみちみ進んでいくと思う；；

ルカ「そっか」

まあ、書ける時にたくさん書きたいと思ってるからw

ルカ「わかった」

それでは！

第八章：ホウエンまで　II：オープンバトル大会トーナメント（前書き）

明日、遂に帰国いたします！

ルカ「いえーい！」

なので、この回を最後に更新が今までより更に不定期になります。

読者皆様のご理解いただければ真に幸いです。

ルカ「皆、これからもメディターをよろしくね！」

第八章：ホウエンまで　II：オープンバトル大会トーナメント

サント・アンヌ号：

サント・アンヌ号が広い、広すぎるのは皆が知っている事実。

そして豪華客船と言っても、ここまで公式リーグ並みのバトルフィールドがあるのはこのサント・アンヌ号ぐらいなんだろうな。

「いかがされましたか、ハヤミ様？」

黒いスーツに柔らかな物腰で執事以外の言葉が出てこない程に完璧なコクドウさんが私の半歩手前に構えて聞いてくる。

「いや、だってここまで凄いとは思ってなくて」

「当船は世界最高峰の名を誇示してます故、そろえれるもの全てが世界最高峰なのです。そして世界最高峰の方々に満喫していただき、我々が快適船旅をご提供させていただいております」

その分だけ料金が高いというのは、それはそれで納得がいく。いくんだけど、凄い。凄いんだけど、凄い。

「ハヤミ様、こちらへ」

途中から訪れただけあって、会場は満席で異様な盛り上がりを見せていた。

公式よりも凄いのではないかと疑ってならないバトルフィールドが三つ横並びに存在して、周りを囲うようにして設置された観客席。

モニターが大中小様々に適当な位置に設置され、それぞれの戦闘の模様を観賞することができる。

私はコクドウさんについていきながら、なされているバトルの模様を生で感じる。

歓声と歓声。怒号と怒号。拍手と拍手。喧騒と喧騒。落胆と落胆。歓喜と歓喜。

全てがそこにはあった。

バトルの内容が幾ら悪くとも、対戦者のレベルに差が開き過ぎていたとしても、観客は受け入れてくれる。それは、どれほど素晴らしいものか……それはトレーナーでない私でも肌身で感じ取れることだった。

私のポケットに入っている三つのモンスターボールも会場の熱気と振動に身を震わせているのだろう。そう、興奮して自分もバトルに出たいと願っているのだ。

「ハヤミ様」「あ、はい！」

離れないようにしないと、迷子になっちゃうや。

長身で黒スーツという出で立ちのおかげで私は難なくコクドウさんについていって、バトルフィールドの丁度境界線であるライン上に位置する個室へと案内される。

「え？　ここって？」

私が関係者以外立ち入り禁止のサインと特別専用席という両方の看板とセキュリティをくぐりぬけて到着した場所……それはＶＩＰルームと書かれた扉だった。

「どうぞお入りください」

ドアを引いて、私は唖然とする。

なんとバトルフィールドを審判より上の目線から見下ろせるようにしてガラス窓が設置してあり、部屋の四隅端に巨大なスピーカー、天井近くにはそれぞれのバトルを眺められるテレビモニターと、居心地のよさそうなソファが存在していた。

そして何やらリモコンみたいなものに、後ろの壁際に至っては飲み物とつまめる小料理の数々。ポケモン用にも段差の低いテーブルに様々な食べ物が並べられている。しかも、それぞれに私の手持ちポケモンに合わせてある。

「こ、これって……？」

「はい、オープンバトル大会をご観賞いただく為にＳ区のお客様専用に設けられました個室でございます」

「こ、こんな贅沢していいんでしょうか？」

「……お客様がＳ区のチケットをお持ちいただいた時から、お客様にはＳ区のサービスをするのが我々の仕事です」

「……は、はぁ……」

それは答えになっているのだろうかとすら考える余裕すら私には与えられなかった。いや、そんな思考に思い当たる余地さえなかったといっていいのかもしれない。

モニターからはバトルの模様がリアルタイムで流れ、それを直に今目下で眺めることができる。専用の双眼鏡も用意され、それは遠くのバトルを見れるようにして絶妙な位置設定が施されている。

そしてコクドウさんから受け取ったリモコンは特定のバトルを見たい場合、今後の対戦予告表を見たい場合、全部の試合をスピーカーごとにわけたり、すべてをシャットアウトしたりなどのボタン機能がついているという。

「それでは私(わたくし)は部屋の外で待機しておりますので、ご入り用なものがありましたら難なくお申し付けください」

腰を折った完璧なまでのお辞儀に、私はただ固まったままコクドウさんを見送る。

「絶対バチあたる、絶対バチあたる、絶対バチあたる、絶対バチあたる……っ！！」

私は渡されたリモコンを両手で震えさせながら、そうは言いつつも心の中のどこかでは幸福感を噛み締めていたのかもしれない。

しかしそんな私の錯乱状態を一喝するような大きな歓声が分厚いミラーガラス越しに聞こえてくる。ううん、スピーカーからの音かもしれない。

「あ、ハルちゃん……」

そう、そこには昨日とはまた違った巫女衣装に身を包んだハルちゃんの姿があったのだ。しかもそのバトルフィールドは私がいる個室から一番近くのフィールド。良く見れば、客席の間には等間隔に

私のようなミラーガラスで隔たれている個室をみかけることができる。

私はとりあえずうわおぼえではありつつも、ハルちゃんにリモコンのポインターを合わせて「情報」というボタンを押す。すると透明度のある文字が現れてハルちゃんの情報が文字通り浮かび上がる。

三台あるテレビモニターの真ん中にバトルフィールドの様子、右側にはハルちゃんの顔写真に名前やクラス、手持ちポケモンなどの詳細を記した説明文、そして一番左のモニターでは大会のトーナメント表が表示される。

今の現段階で大会はベスト１６まで出そろっているらしい。それぞれに皆強そうな感じはどことなく感じる。

「あ、そうだ。皆出ておいで」

私は思い出したかのようにボールを取り出して、三匹を出してあげる。皆して個室にいることにびっくりはしていたけど、自分達の好物を目の前にしてその疑問を咄嗟に忘れてしまう。

「あ、こらガーディ、もっとゆっくり食べなきゃだめだよ？　あ、ほらラルトスもこぼしちゃだめでしょ？　シャワーズは、うわーカナって本当にしつけるのが上手なんだな……」

一挙手一投足に気品と優雅さを感じさせるカナのシャワーズはさすがと言ったところなんだろう。というか、ううん絶対そう。まだガーディと同い年くらいで甘えん坊なところはあるけど、ちゃんとしつけられている。それに比べて私のガーディは……

むさぼるようにしてそのお腹を満たしていくガーディに、私は心の中で嘆息するしかない。それにミツルさんから預かっているラルトスはまだ見た目からしても二匹よりは子供でまだまだボーっとした感じが漂っている。

三匹が自由気ままにやっている様を見届けて、私はモニターを振り返る。

ハルちゃんの対戦相手はガオウという人。なんだか巨漢でボッサボッサに長く伸びた髪はまるでレントラーのたてがみのようないかつさを誇る。うわ、絶対格闘タイプ使ってきそうな人だなーと思いつつその人の情報欄を開くと案の定手持ちは格闘タイプのポケモンばかりだった。

あんだけ鍛え上げるにはポケモンとの修行によるもの。筋肉の出来上がり方が特殊で、自然に筋肉の最大限の使用法を熟知しているポケモンと共に修行することでその能力を人も身につけているから。

「お初にお目にかかります。アルセウス教布教をおこなっております、スグラノ　ハルと申します」

「宗教団体の勧誘か？　そんなもんに付き合ってる暇はない、さっさとはじめるぞ！」

ハルちゃんのお淑やかな物言いを一喝するかのようにして薙ぎ払うガオウ。私、あの人嫌いかも。

「それでは両選手共に準備はよろしいですね？　青・ガオウ選手対赤・ハル選手、バトルスタート！」

審判の合図と共に、互いがボールを取り出す。

「行きましょうね、ミカルゲ」
「行け、サワムラー」
二人の情報を左右のモニターに出してみて私は本当に疑問に思っていたことが解消される。それはミカルゲというポケモンの正体。
初めてみるポケモン。シンオウ地方のポケモンなのかな？
私はリモコンのカーソルを更に操作してミカルゲの名前を選択する。すると、ミカルゲの詳細が浮かび上がる。
効果抜群の技が無い？
「凄い……。こんなポケモンも世の中にはいたんだ……。どんな仕組みなんだろう」
私の好奇心はまずもってミカルゲというポケモンに吸い寄せられる。
ガオウという選手のサワムラーも経験値は高いんだろうけど、あのミカルゲというポケモンの方が強そうだ。ううん、絶対に強い。
そして勝負は簡単についてしまう。ゴースト・悪タイプを持つミカルゲにサワムラーに打つ手はなかった。
【見破る】からのコンボがミカルゲにとっては致命的なんだろうけど、ハルちゃんはそこを完璧に熟知していた。相手が技を発動させるその瞬間を待っていたかのようにして決めた【サイコキネシス】に対抗できうる手段はさすがの熟練者であっても容易に回避するこ

とはできないんだから。

バトルが瞬時に終了し、客席からは嵐か津波のような怒涛の歓声がわき上がりハルちゃんは上品にお辞儀を客席に向かって三度する。

一瞬にしてついた勝負、それは相当の格闘家ならば自分自身を責めるだろう。苦手であろうエスパータイプ対策を積み、それにも関わらず悪タイプを有するポケモンに負けるという敗北感は一度味わってみなければ決してわからないのだから。

ガオウはハルちゃんの方を一瞥して、何も語らずに退場する。

そしてハルちゃんへとズームアップされたモニターになった瞬間、ハルちゃんが目を閉じて口を動かす。

「全ては神による采配。私は今神に感謝いたします……この時を忘れずに、そしてこの時を忘れましょう」

ハルちゃんが何を意味してそれを言ったのかはわからない。でも、その言葉の羅列に私が興味をひかれたのは不思議で、不思議でならなかった。

第八章：ホウエンまで　II：オープンバトル大会トーナメント（後書き）

さて中途半端な感じではありますが、続きはもうできております。

初の書き溜めをしておりますw

受験勉強という関門を突破しつつ、メディターの更新も頑張ろうと思います！

それでは！

第八章：ホウエンまで　ＩＩＩ：わたくしはアルセウス教……（前書き）

初の携帯投稿です！　まだ慣れませんが日本の携帯ってスゴイですね

第八章：ホウエンまで　ＩＩＩ：わたくしはアルセウス教……

オープンバトル大会　特設ＶＩＰルーム：

順調に勝ち続けるハルちゃんの姿に私は一瞬惚れてしまいそうになる。

それは今までに見た同年代の中でも一番の実力を持っているのではないかと思わせるほどまでに他を圧倒しているからだ。

「すごいっ……」

私なんか一瞬でひねりつぶされちゃうんだろうなぁ……。

ハルちゃんはこれまでにミカルゲというポケモンしか使っていない。でも、はじめて見るあの子も私は徐々にわかりはじめてきた。恵まれた目を生まれ持ってきて良かったことはたくさんあるし、感謝している。

ミカルゲ……まがまがしい気を放っているにも関わらず、それは邪気の念ではないような気がする。でも、注目すべき点はそこじゃなくて体を支えている胴体……。

きっとあそこが弱点……。

だってどんな技をかけられた時、ミカルゲは足がない為に移動は困難。しかもその技を顔面で受け止めている……そのことから類稀ない性質を持つミカルゲの特徴はその顔面なんだろう。解剖してみたいなーなんて思っちゃダメだよね……。

「ガーディもシャワーズもラルトスも、どうあの子？　お友達になれそう？」
「……ぐぅ」
「……ふぃっ」
「らる～♪」

ガーディとシャワーズをミカルゲをモニター越しで見ながら苦手意識丸出しの表情をつくる。でもラルトスに関してはあどけない満面の笑みを浮かべる。

「やっぱし、ちょっと苦手なのかもね」

ハルちゃんには悪いけど、私もミカルゲというポケモンに興味はあるけど好きにはなれそうにない。

そしてとうとう決勝の時を迎えようとしていた。

試合が行われるのは三つあるフィールドの真ん中。つまり私にとっては一つ空きのフィールドを挟んでの観戦となる。

でも、このモニターだけでも凄い臨場感……。

ガーディ達も私の足元に設けられているソファに腰をおろしてフィールドの向こうへと視線をくぎ付けにさせる。

モニターに映し出されるのは対戦者の女の子。私と同年代かちょっと年上かな……？　でも真っ白と黒のラインがクロスに交差しているシンプルながらに威圧感を与えるデザインの服装に身を包んでいるのは衣装なのかな？

左右の情報モニターが切り替わり、両者の顔がズームで映し出される。その間、真ん中のモニターは両者をフィールドの端で捉えるようなカメラワークが施される。

「アルセウス教など、この世に必要はない。この国を築き上げたのは神などというバカげた理念を否定した我々スウセルア」

「信仰心があるからこそ人は神から与えられた恩恵により栄えたのです。神を背徳するスウセルア……その存在をも神は認めてくださっているのです」

ボーイッシュで凛々しい口調の少女は私とハルちゃんより若干背が高い。首筋あたりまでの短い藍色の髪の毛は丁寧に切りそろえられている。

「それではこれよりオープンバトル大会決勝戦を行います！」

ジャッジが両腕を高く上げると共に観客席からはフィールドを揺るがす程の歓声がわき上がる。

これほどまでにも人を収容できるサント・アンヌ号凄さもさることながら、どんな人たちにもバトルは愛されているということが地肌に感じ取れる。

「青・スミレ選手対赤・ハル選手バトル開始！」

ジャッジの宣言と共にハルちゃんとスミレという選手がボールを空中へと放る。

「行ってこいアブソル」

「しゃあぁ」

うわぁ、あのアブソル……凄い。

何が凄いかって？　それは一目見ればわかる程までに綺麗なこと。白銀の毛と呼吸するだけでなびいてしまう程のさらさらとした毛艶はそのポケモンの存在意義をこれほどまでにかと誇示している。

「行きましょう、ユキメノコ」

そしてハルちゃんが次に出してきたのはユキメノコ。情報欄によるとユキメノコはシンオウのポケモンで氷とゴーストタイプを持つらしい。ハルちゃんはゴーストタイプが好きなのかな？

神様信仰→霊→お化け？　ってことなのかな……？

でもハルちゃんのポケモンもアブソル同様に美しさで言えば申し分ない。というか、二匹のレベルが相当なものであると物語っている。

「アブソル、【剣の舞】」

「ユキメノコ、【威張る】」

なんでわざわざ相手の攻撃力を？　と思っていたけど、ユキメノコの技がアブソルにヒットするのは両者のレベルが同等かユキメノコの方が高いということ。

「ちっ、伊達にアルセウス教の代表って銘打ってるだけあるわね。アブソル、集中！」

「ユキメノコ【自己暗示】」

スミレ選手がアブソルに指示を飛ばし、その間ハルちゃんは着々と下準備をしていく。

アブソルは混乱した脳内を強制的にリセットする為にフィールドの地面に強くその頭を打ち付ける。

「あら、結構手荒な真似をなさるんですね」

やっぱりハルちゃんは高貴の出なんだろう。物腰やら物言いが私と喋る時とは違って上品に極みをかけている。

「生物ってのはね痛みを拡散させることで異状を治すことがあるのよ」

確かに人間でもポケモンでも生命維持本能が働いた時、痛みの拡散を手段の一つとして用いる。例えばお尻を強打した時、それほど致命傷でなかった時人は叫ぶ、あるいは激しい運動をすることがある。それは痛みを大声を出すことによって痛みを感じる分野の注意をそらすためとも言われている。他にも虫刺されやかぶれがあったとき直接掻かないでその周りをつねったり、爪痕をたてたりするのは更なる痛みを与えることで紛らわすことができるから。

「さて、仕切り直しよ！　【不意打ち】！」

「ユキメノコ、【影分身】」

それでもゴーストタイプを持つユキメノコは悪タイプの攻撃に弱い。そのカバーもきちんと対策として取り入れているハルちゃんはやっぱり凄いと思う。

数々のバトルを見てきて思ったけど、トレーナーが先ず警戒するのは手持ちの弱点の対処法。そしてバトルの法則上、相手は先ずもって弱点をついてくる……その反撃技として応用されるのが今のユキメノコのような【影分身】。

でもユキメノコは平均的にアブソルよりかは素早さが高い。早々には正体もばれないと思うけど……。

開始早々、すでに数多もの駆け引きが両者の中で逡巡しているのだろう。二人とも顔色は変えないけど、変えないからこそ何かを考えていることがわかる。

「アブソル、いつも通りに本体を嗅ぎ分けなさい」
「ソル！」
「ユキメノコ、【粉雪】」

ユキメノコはアブソルみたいにトレーナーに返事をしない。それは、ミカルゲの時も思った……。何か意味でもあるのかな？

大抵のポケモンはトレーナーの指示があれば肯定の意を示す時がほとんど。現に私のポケモン達も返事をしてくれる……それはただの意思疎通を確認するだけじゃなく、自分が手持ちのポケモンに信頼されているという確認でもあるから。それは確かに中には寡黙なポケモンや喋れないポケモンもいるけど何かしらの仕草でもってトレーナーに合図を送る。

それは単に頭を振ったり、尻尾を揺らしたり、独自のコミュニケーションの疎通を行ったりする。

でも……。

「アブソル、集中力よ！　本物を見つけなさい！」

熟練者のポケモンは例え相手のポケモンが【影分身】を用いたとしても、長年のバトルの経験則上、本物を見分ける能力を得るという。でも、それは相手にもよるというのがバトルの底知れなさを表現している。

でもさすがは決勝戦の相手だね。私は目が良いからわかっちゃうけど、アブソルは的確に本物のユキメノコの位置を捉えていた。【粉雪】によって視界を無くし、寒さによって相手の集中力を散漫させる作戦は失敗かな……？

「アブソル、【切り裂く】よ！」

四肢をばねのようにして十二分につけた瞬発力でアブソルはその右腕をユキメノコ目掛けて振り下ろすも、ユキメノコはかすかに瞳で微笑み、ふわっとその胴体をアブソルにささげるようにして胴を突き出す。

え？

そう思っても仕方がなかった……なんであんなことを？　って、あ！

無謀とまでに思えたユキメノコの行動は、しかし作戦の一環だった。

アブソルの強靭な爪はユキメノコの胴体を捉えたかのように見えた、でもユキメノコはひらりとアブソルを通り過ぎて背後を取る。

無の感触を味わったアブソルは驚きの表情をあらわにしつつも、首を反転させてその頭部についた鎌形の角でユキメノコに一太刀浴びせようとするもそれもまたかわされてしまう。

ユキメノコに胴体は無い……？

ということは、あの着物みたいに綺麗な柄は胴体ではなく頭部の一部ということになる。

面白い。

たくさんの研究がおこなわれている中、未だに謎が多いのがポケモン。なぜゴーストタイプは宙を浮くのか？　その体の仕組みは？　彼らの寿命は？　疑問を上げればきりがない。まさにあのユキメノコというポケモンも、一体なぜあのような姿かたちに至るようになったのか……全ともいえる解は未だにない。

「ハルちゃん、がんばれっ」

口から洩れるのは乗船してからはじめてできた友の名前。

確かにもっとハルちゃんの持っているポケモンを知りたいとも思う。でも、ううんそれだけじゃない。

私の中でハルちゃんとバトルをしてみたいという気持ちが高くなってきているのだ。私に何ができるのだろう、とかではなくて、バトルの中でのハルちゃんのポケモン達を直に見て感じたいんだ。

そのポケモン特有のバトルスタイル、そして彼らの本質を見抜きたい。

なんでか私にもわからないけど、私の目の力は何故かバトルの中でしかその本領を発揮しない。目の力というか観察力だとしか思ってないんだけどね。

そんなことを想っている中、アブソルの背後を取ったユキメノコがその両手を大きく振り上げる――――。

第八章：ホウエンまで　Ⅳ：決着　アルセウス教対スウセルア教（前書き）

書き溜めのすばらしさを実感しております。

皆様お待たせいたしました、サント・アンヌ号編では第一の山場。

バトルを書くことが若干苦手な自分もこのまま精進していけば上達するのではないかという儚い希望を抱いております。

では、どうぞ！

第八章：ホウエンまで　Ⅳ：決着　アルセウス教対スウセルア教

バトルフィールド：

ユキメノコの両腕がアブソルの首回りをがっちりとつかむ。振り落とそうとするも四足歩行するポケモンの欠点……背中はいつも無防備だということ。

だからポケモンのような生命体は常に進化を遂げてきた。それは単に種族内での我々が言う進化ではなく、生命体としての本質を進化させ多種多様な種別を生み出したことだ。

サイホーンのように背に棘を纏いその素早さを犠牲に硬い鎧を身に付けたもの、パールルのように体の全体を強固な殻で覆いその代償とし移動の術を切り離したもの、逆にいえばポケモン達は何かを犠牲にすると共に進化してきた。

何かに特化するということは、何かを切り捨てることを意味する。

だからこそポケモン達はそれぞれに個性豊かな特徴を持ち、その都度に進化を遂げ今の姿となった。

「ユキメノコ、【粉雪】でおしまいにしましょう」

スミレ選手が声を高々にしてアブソルに振りほどくように指示するも、ユキメノコは宙に浮いたような身の軽さで絶妙なバランス感覚を披露している。

「アブソル、【かまいたち】！」

「ソル！！」

黒いみかづき型の角で背中のユキメノコを狙うアブソル……でも、自分の背中目掛けて攻撃するのは至難の業。そもそもアブソル自体にそのような経験はないのだろう。

ユキメノコの体からは白い蒸気が立ち込めるように、マイナス零度を行く冷気がアブソルの体を包み込む。

アブソルの動きが止まり、苦悶の表情を浮かべてそのまま地面に静かに倒れる。

アブソルの銀毛に霜がふりかかったように、その体毛は凍りついていた。それはまるで一つのファーニチャーのよう……綺麗でいて繊細。

「アブソル！　立って！　立ちなさい！」

しかしそんな主の声にポケモンは答えられない。

「アブソル戦闘不能！　よって今オープンバトル大会の優勝者はシンオウ地方のスグラノ　ハル殿に決定！！」

「「うおおおおぉぉぉ！！」」

ジャッジのコールが宣言され、観客はその身を観客席から溢れださんとする勢いの歓声を上げる。船のみでなく、この海の表面に波紋すら生み出してしまいそうな轟音がこのバトルフィールドを覆う。

「人よ、神を愛しなさい。人よ、人を愛しなさい。人よ、ポケモンを愛しなさい。神は全ての生きとし生けるものを愛しているのです

から」

ハルちゃんの呟きはしかと映像越しに聞き届けられる。

ボールにユキメノコを戻し、上品な物腰で一例する巫女衣装のハルちゃんの姿は本当の神の遣いのようで私はその姿に惚れ惚れとしてしまう。

アブソルがころっと倒れてしまった理由……それは体の異常とも呼べる程に低下した体温にあった。

ゼロ距離での【粉雪】を喰らい、体温は急激に下がる。体の主としてあげられる心臓の周りの温度低下はそれすなわち心停止へとつながる。

暑いところで血管が拡張し、寒いところで血管が縮小するのにはそういった理由が存在している。暑いからこそ血管を広げ、心臓の鼓動はまるで走った後かのように早くなる。その逆に寒いところでは血管を萎め、心臓の鼓動はどんどんと遅くなってくる。

心臓の鼓動が遅くなるということは体の動きが制限されるということ。だから冬山で眠ってしまって凍死するなどと言われるのは雪山などの寒さに耐えきれず体が徐々に動かなくなり睡魔に負けるのではなく寒さによって動かなくなった脳が停止に近づく現象が眠りという現象に似ているからである。

って、そんなまでじゃないと思うけどアップにされていたアブソルの顔は痙攣していたことからこういったことが推測できる。

ハルちゃんは四方へと振り向きながら更なるお辞儀をした後、こ

の大会の責任者がトロフィーを携えて入場してくる。
ＷＩＮＮＥＲと金色のテロップが画面上に流れてハルちゃんの授賞式がはじまる。
ガーディやシャワーズは先のバトルを見て、やっぱり私と同じ気持ちなのかもしれない。
ハルちゃんと戦ってみたいという気持ちが高ぶってきているのだ。
「凄かったね皆、それに私もなんだかバトルしてみたくなっちゃったよ」
「ガウ！」
「フィ！」
「ら～るぅ？」
ラルトスはまだ小さいからいまいち理解はできてないみたいだけど……。
今日起きたのは正午近くなのに、もう時間は夕刻を指そうとしていた。そろそろドレスコードの時間なのかもしれない。
「今日はご飯どうしよっか皆？」
「……がうー」
「ふぃー……」
「らるー！」
「え、ラルトスまだ食べたいの？　食いしん坊さんだなぁ、もう」
ここで出されていた料理の数々に私もガーディ、シャワーズは満腹状態に近づいていた。でもやっぱり小さいといっても私たちの中

の誰よりも成長期のラルトスは彼女分用にだされたご飯だけでは足りなかったようだ。

こんこん

今日のラルトスのご飯をどうしようか迷っていた時、外のドアからノックの音が聞こえる。

「はい？」
「ハヤミ様、コクドウです」
「コクドウさん？　どうぞ」
「失礼致します」

頭を垂れたままの姿勢で開かれた扉の向こう側でコクドウさんが要件を伝える。

「今大会の優勝者であられますスグラノ様からハヤミ様にディナーのお誘いを承っておりますがいかがされましょう？」
「あ、えっと……直接会えますか？」
「はい、手配してまいります」

私が今すぐに会いたいという意図を感じ取ってくれたのだろう、コクドウさんはそのまま扉を閉じてしまう。

お食事は断らないといけないけど、おめでとうって言いたいしね。それにバトルのお願いもきいてもらえるかな？

そんな甘い想いを抱きながら、私はもう一度モニターを見つめる。

左端のモニターではハルちゃんの次に準優勝のトロフィーを受け

取るスミレ選手の姿があった。確か自身をスウセルア教の者だと言っていたことを思い出す。

トロフィーを受け取る彼女は微笑を浮かべているものの、その表情は硬い。まるで苦汁をなめるように……。

このような催しやイベントではトレーナー間でのマネーのやりとりは存在しない。だからこそ、ここまでの出場者を得ることができるのかもしれない。

私は笑顔を振りまき、大会の優勝者となったハルちゃんをモニター越しに眺めながらその体をソファに深く沈めこませる。

「ふぅ〜」

先のバトルで昂揚感を得た私はそれをどこかにぶつけて鬱憤を晴らしたかった。

今なら、何かやれるような気がする。そんな気がする。

それはまるで楽器を習い続け、ある低迷期にオケの演奏を聞いて今すぐに家に帰り練習したいと感じる衝動と良く似ている。って、私は楽器できないんだけどね。

「ルッカちゃーん！」

扉がばっと開いて、そこからハルちゃんが現れる。

「え？　え、ハルちゃん？！」

うそ、さっきまで壇上に上がって表彰されてたと思ってたのに！こんな恥ずかしい格好でっ！！

ソファにまるで全身を投げてくつろぐ親父スタイルだった私は背筋を反射的にのばして顔を赤くする。

「んもうかわいいねルカちゃんって！」

「か、からかわないでよ～！」

まるでバトル時とは違う印象を受けるハルちゃんは入ってくるなりそうそうに私をからかう。

「ごめんごめん」

「でも、ハルちゃん優勝おめでとう！」

「……ありがとうルカちゃん！」

「きゃっ、ハルちゃん？！」

「へへー」

ハルちゃんはその両腕を広げて私に抱きついてくる。私は最初驚いたけど、その体をしっかりと受け止める。

「おめでとう」

「っ……ありがとう」

私がハルちゃんを抱き返したことが彼女には驚きだったみたい……。でも、優しくその腕に力を入れてくれる。

「がうがっ！」

「ふぃー」

「らるー」

「あ、この子たちがルカちゃんのポケモン？」
「え？　うん、そうだよ」

ガーディ、シャワーズとラルトスがハルちゃんを歓迎するようにして小さく鳴く。

「かっわいい～」
「がぅ～」

ハルちゃんはガーディを抱きあげて、その体毛の柔らかさを頬ずりで堪能する。

「ハルちゃん強かったね、びっくりしちゃった」
「えへへ、そう？　でも今日はラッキーだったよ、それに負けられなかったしね」
「え？」
「ううん、なんでもないっ」

なぜ負けられなかったのか？　それはまあ負けるのはいつでも良くはないけど、それ以上の何かをハルちゃんから感じ取った私はそれ以上追及することはなかった。

「私もいつかハルちゃんとバトルしたいな」
「え？」
「専門外だけど、でもハルちゃんを見てたら私も本気でバトルがしてみたくなっちゃった」
「それなら、また今度しようよ。まだまだ時間はあるしさ」
「うんっ！」

そしてハルちゃんは思い出したかのようにして、

「これから一緒にご飯行かない？」

ハルちゃんは一歩下がって首をかしげて尋ねてくる。

「あ、うん、ごめんね。私、ここでお腹一杯になっちゃって……」

「あー、そっか。そうだよね……それじゃ、明日朝ごはん一緒に食べない？」

「え？」

「私の部屋に来てよルカちゃん」

「ハルちゃんのお部屋？」

「うん！」

そういえばS区で部屋を借りているにも関わらず、他のS区を利用している人達（たとえばハルちゃん一家）とは遭遇すらしていない。

「コクドウさんには私から言っておくから。あ、それとこれが私の部屋のコードね」

ハルちゃんが取り出したのはシンオウで出回っているポケッチ。それと私のポケギアの赤外線通信を通して私はハルちゃんの部屋へと行けるようになる。

「それじゃルカちゃん、明日はテラスで一緒に朝ごはんね！」

「う、うん、わかった！」

ハルちゃんはばいばーいと手を振りながら、そのまま退室してしまう。

私は数秒間放心状態になった後、我に返りコクドウさんを呼ぶ。

「はい」
「今日はもう戻ります」
「かしこまりました」
「えっと、お片づけは？」
「担当の者がやりますのでご安心ください」
「あ、は、はい」

食べる為に使った食器やフォール類を残したまま、私はポケモン達をボールに戻す。

第八章：ホウエンまで　Ⅳ：決着　アルセウス教対スウセルア教（後書き）

ちなみにですね、第八章は裏をはさまないのであればやっと前半部分終了といった感じですかね。

まだ完全にはわかっていませんが、そうなる予定です。

第八章：ホウエンまで　Ｖ：朝ごはん（前書き）

とりあえず、一週間ごとの更新をがんばります。

さてさて、ほのぼのなものを書くのは自分でも気にいってます。

ほのぼの～

んにゅ～

第八章：ホウエンまで　Ｖ：朝ごはん

世界をリセットした事変【イニシャルインシデント】……。それは人間達の、ポケモン達のあるべき関係を変革させた。

詳しい記述は残っていないも、人の歴史もポケモンの歴史もそこからはじまったのだ。

全てが無に帰したとされる【イニシャルインシデント】……それは大自然の災害なのか神による悪戯心からなのか……真相は闇に包まれながらも皆口をそろえてその日が始まりの日だと語り続ける。

その時何が起こったのかは誰にも想像できることはできない。否、想像がありすぎるからこそ見えてこないのだ。

だが確実に言えることは一つ。

それは、今の人がポケモンの上に立つという連鎖が芽生え始めたのが【イニシャルインシデント】以降だということだ。

サント・アンヌ号　Ｓ区　ルカの部屋：

「うぅん」

私は伸びと共に朝の木漏れ日を感じつつ起き上がる。

「なんか、今日約束事があったようななかったような……」

あっ……、ハルちゃんとのご飯！

私は咄嗟に時間を確かめる。

午後８時。

「は、８時かー、ふぅ危なかったー。約束は８時半だったもんね」

のそのそと起き上がり、私は洗面所へと入る。

３０分だとシャワーは諦めなきゃな……。とりあえずちゃんと準備はしていかなきゃ。

顔を洗って、歯を磨き、髪をブローしてから顔全体のケアをする。

温かいお湯をまず顔にかけて、泡立てた洗顔フォームで万遍無く隅々を洗って洗い流す。そして最後に冷たい水をかける。温かいお湯で顔の穴を拡張させて洗顔剤を良くしみ込ませてから冷たいお水をかけることで顔全体が引き締まる。

その後に化粧水を塗って、薄い化粧を施す。お母さんから習った独自の化粧術で仕上げた顔は不自然なところが目立たないようになるから凄い。

洗面台から離れてクローゼットを開けて、ライムグリーンのワンピースを取り出す。リースが胸元の襟と裾の方に施された可愛らしい服を取り出してそれに身を通す。肩が露出しちゃってまだ冬だから厚めの純白のカーディガンを羽織る。

そしてクローゼットの下の引き出しに用意されていたシューズの中から白のサンダルを選ぶ。サンダルといってもビーチに行くようなやつじゃなくて、えっとお嬢様がお庭に出かける時に穿くようなやつ！　うん、そうそう、だって私だってはじめてなんだもん。

おそろいのポーチにガーディ達のボールを入れて、ポケギアと貴重品もしまって私は部屋を出る。

「おはようございますハヤミ様」
「あ、コクドウさん」
「それではスグラノ　ハル様のお部屋までご案内いたします」
「ありがとうございます。え、ハルちゃんの部屋？」

私はふと疑問を抱く。

そういえば昨日の時も私の部屋に来てねと言われた気がする。

「はい、スグラノ様はご夫婦で一部屋、御息女であられますハル様で部屋をお一つとっておられますので」
「ほぇー……」

若干の放心状態に陥る。そうなんだ、って凄いじゃん！

「アルセウス教って凄いんですね……」

それだけが理由とは思わないけど、なんとなくそう思ってしまう。

「アルセウス教はシンオウ地方ではかなり浸透しております。各言う私(わたくし)もシンオウの出身ですので」

「あ、そうなんですか？」

「はい」

「アルセウス教ってどんなことするんですか？」

なんて失礼なことを聞くんだろうと思うのかもしれないけど、興味があるし聞いてみたい。そ、そりゃ授業で習ったけど私が覚えているのは医療関連でどんなことに貢献してきたかぐらいで歴史や経済・政治的影響力や宗教活動については全くもって覚えてないんだもん。

「特にこれといった活動はありませんが、ただ神に感謝すること……。その心を忘れずに誓うのであればどなたでもアルセウス教信者となれます」

「……神様に感謝する？」

「はい」

昨日のハルちゃんのバトルで言っていたことを思い出す。

「この時を忘れずに、この時を忘れましょうっていうのはどういう意味なんですか？」

コクドウさんなら何の意味かわかるかもしれないと思って尋ねてみる。

「恐らくは時の神、ディアルガにまつわる言葉なのではないかと思

います」
「時の神ディアルガ……」
私達はハルちゃんの部屋に向かいつつも会話を続ける。
時の神ディアルガ……。たしか空間の神パルキアと対をなす存在の神様だったはず。でも一体どういう意味なんだろう。最初のはわかるけど、なんで忘れるのかがわからない。
「それではハヤミ様、どうぞこちらがスグラノ　ハル様のお部屋となります」
「あ、ありがとうございます」
そうして一礼と共に私はハルちゃんの部屋の扉のベルを鳴らす。ポケギアをかざして昨日渡されたコードを暗証させないとベルも鳴らせなくなっていてプライバシーの保証までも念が入っている。
「あ、ルカちゃん？」
「うん来たよハルちゃーん」
扉越しに手を振って私は自身をアピールする。
「いらっしゃーい」
「ハルちゃん、私服かわいいっ……」
「えへへ、そう？　やった」
私と同じ洋風のワンピースであるはずなのに、ハルちゃんのは淡い薄桃色の生地でところどころになされている刺繍がかわいらしさと共に高級感を醸し出している。

「ルカちゃんもかわいいよ」
「え、そうかな？」
「うん。ほらこっちこっち」

大抵のホテルでも宿屋でもそうだけど、客室の間取りはクラスによって違えどもクラス内では同等なはずなのにこのサント・アンヌ号は違うみたい。

私の部屋より若干小さいながらも、外にベランダが設けられている。

「ベランダがあるの？」
「そうそう、ベランダテラスって言うんだって。そこでポケモン達と一緒に朝ご飯にしよ？」「うん！」

ハルちゃんに手を引っ張られ、私は外へと出る。

そこにはもうすでにテーブルと地面にはポケモン達用のご飯までもがちゃんと用意されていた。

「こちらはシイカ。私専属の侍女なの」
「シイカと申します。ハヤミ様、よろしくお願いいたします」
「あ、こ、こちらこそ、よ、よろしくお願いします」

シイカさんの丁寧なあいさつに私も思わずお辞儀を返してしまう。

「そんなにかたくならなくていいよ、ルカちゃん。シイカ、お願い」
「はい、かしこまりました」

セミロングの癖毛が特徴な彼女の髪の色は綺麗な翡翠色。きっと

私達と同い年くらいだと思う。
自然と視線が彼女の胸元へと向かい、私はちょっとした劣等感に陥る。ま、まだ成長中だもん！
「ハヤミ様、こちらの席にどうぞ」
「あ、はい」
私は椅子に座って、シイカさんに手伝ってもらう。
「それじゃ改めて私のポケモンを紹介するね。出てきなさい」
ハルちゃんはシイカさんが両手に掲げるバスケットから四つのボールを取り出して開閉スイッチを押す。
出てくるポケモンは順にミカルゲ、ユキメノコ、見たことのない二匹。
「ルカちゃんはシンオウのポケモンは知ってる？」
「ううん、昨日ミカルゲとユキメノコははじめて見たよ」
もう二匹のポケモンは長い茶色いふわっふわっそうな耳をもっていて可愛らしい。もう一匹は――――――――――。
「このポケモンはミミロップ、そしてこの子はフローゼルです」
凄い。どのポケモンも洗練されている。
「ルカちゃんもほら、出して出して」
「あ、うん。みんなでておいで」

ガーディ、シャワーズ、そしてラルトスが朝の陽ざしを浴びながら背伸びをする。

「がう？」「ふぃ？」「らる～」

ラルトス以外は寝ぼけた疑問を浮かべるも、ハルちゃんの姿と昨日のバトルを見ていた為にすぐに状況をある程度理解する。

「それじゃ、皆仲良く食べるんだよ？」

「ガーディ達も、ね？」

さすがはポケモン同士ということなのだろうか？　あるいはハルちゃんのしつけが良いのか、ハルちゃんのポケモン達はガーディ達の先輩格のような広い器でガーディ達を受け入れてくれる。

そんなほほえましい光景を眺めつつ、ハルちゃんと私はブ、ブレックファーストを取る。

「あ、おいしいこのパン」

「そうでしょ？　えっとね、ブリーの実を入れたパンなんだ」

「へー」

あむともう一口そのパンを頬張る。

「あむ」おいしい……。

カナならもっとこの会話に突っ込んでいくんだろうな……でも、私はあまり詳しくないし……。

「あのね、ハルちゃん」
「ん？」
「少しアルセウス教について聞いても良いかな？」
「え……？」

だから、もっとも今ハルちゃんに関して聞きたいことを尋ねる。

「私、昨日の試合を見てハルちゃんとバトルしてみたいって思ったの。ハルちゃんの強さの裏にアルセウス教は絶対に関係していると思うし、えっと、あの、でもそれだけじゃなくてハルちゃんの素質だと思うし、だからあのね――――っ！！」

ハルちゃんがチューリップが向けてくるような優しげな笑みを私に向けて、人差指で私の唇に優しくあてる。

「いいんだよルカちゃん？　私とバトルしたいんでしょ？」

遠まわしの言い回しが仇となったのかな？　でも、ハルちゃんは私のもくろみを理解して私の意図をくみ取ってくれた。

私は唇を塞がれたまま、こくっこくっと首を縦に振る。

「それじゃシイカ、午後にフィールドを一つ手配しておいて」
「かしこまりました、ハル」
「え、いいの？」

私は座っていた椅子を若干後ろに倒しそうになるも、慌てて静止させる。

「そんなに慌てなくたっていいのに」

「ふふっ」

ハルちゃんとシイカさんにくすくすと笑われて、私は顔を紅くさせる。でも、私もつられて「えへへ」と笑い返す。

「それじゃ、ルカちゃん」
「うん」
「朝ご飯が終わったら歴史のお勉強をしましょうね」
「え……？」
「だってアルセウス教についてもっと知りたいんでしょ？」
「うっ……」

アルセウス教については実際には興味があるけど、社会科の歴史の授業は特に苦手な私……。でも自分から言っちゃったことだし、後戻りはできないんだろうなっ……。

私は逃げ場を求めるようにしてガーディ達を見つめるも、あの子達はあの子達で団欒を楽しんでいる。

「それじゃシイカはじめるわよ」
「はいハル」

ガッツポーズを掲げるような勢いのあるポーズでハルちゃんは立ち上がる。シイカさんもちょっとトーンを変えて張り切った様子を見せる。

に、逃げられない……。

大海を切り進んでいく純白なる豪華客船サント・アンヌ号……。天空の陽射しをその背一杯に浴びながら、その陽光が雄々しくハル

ちゃんを照らしていた。

第八章：ホウエンまで　V：朝ごはん（後書き）

さて次回は宗教について語りますw

難しいテーマで、結構賛否両論があるかもしれませんがやりたい課題の一つなので張り切りますw

それでは！

第八章：ホウエンまで　ＶＩ：アルセウス教とは……（前書き）

一週間ぶりです皆さま

今回のテーマ、ちょっと熟考してみましたがルカ視点の一人称なので浅くさりげなく深くみたいなｗ

読んでいただければ、そう感じるところもあるかもしれません。

宗教……そして新たなる進展。どうぞお楽しみください

第八章：ホウエンまで　ＶＩ：アルセウス教とは……

ハルちゃん専用のプライベートルームというか個室で、シイカさんがカーテンを全て閉めて部屋はあっという間に暗くなる。

ヴィーンという駆動音と共に天井から下りてくるのは白地のスクリーン。スクリーンの位置はベッドからそのまま真っ直ぐ見られる所にあって私はちょこんとベッドの端におとなしく座る。

スクリーンに最初に映し出されるのは教科書でも見たことのあるシンオウ地方の地図。ダイヤモンド型というかひし形みたいな感じのシンオウ地方はその大陸を海に囲まれた土地。

自然というものを直に触れたいのであればシンオウに行くべし、というスローガンが立つ程に他の地方とは違う次元の土地……それがシンオウ。

冬は極寒であることさえ考慮しなければ、一年中過ごしやすい天候に恵まれているシンオウ地方。それはアルセウス教が根強く芽生えたところでもある。

「それじゃルカちゃん、アルセウス教についての説明に入るね」
「は、はい！　よろしくお願いしますっ！」

なんでか知らないけど雰囲気付けに伊達メガネをかけるハルちゃんは、本当にノリの良い子なんだなーって思ってしまう。

「アルセウス教はその名の通り、神アルセウスを崇める宗教。それは神がつくったとされるこの地球上に存在するあらゆるものに感謝

することを意味するの」

偶像崇拝という形の宗教心を唱えながら、祈祷の際には神は自然と同一だと同化しているものだと置き換えるアルセウス教は他国の宗教とはちょっと違ってくる。

本来、自然を崇める宗教は自然の中の森羅万象の全てに違う神が宿るとする。でも、アルセウス教は神を絶対の存在としながら、神は自然と同一の存在としている。ちょっとややこしいんだよね……。

「だからこそ私たちは自然を大切にして、自然と共存するの。その絶対的存在が私たちと一緒で神の子であるポケモンなのは理解できる？」

つまりは神が人間もポケモンも生み出した故に、アルセウス教の人達はポケモンと共存することを自然との共存と同等であると思っていることなんだろう。

でも、あれ？

「ルカちゃんの疑問ももっとも。私達がモンスターボールを使うということは共存という概念からは外れるということになる」

「……っ」

私は黙ってこくりと頷く。

「話がずれることになっちゃうかもしれないけど、ルカちゃんは自分のポケモンをどうやってゲット……ううん、仲間にした？」

ハルちゃんの質問に私はしばしガーディとの出会いを思い返す。

たしか、お母さんから誕生日プレゼントでもらってであったんだっけ。

「私達はポケモン達に和解してもらって、彼らから私達についてきてもらうようにしてるの。私のポケモンも自らの意志で私と一緒にいてくれるのよ。まあ、その逆な場合もあったりするけどね」

何も共存という定義は人によって解釈が変わるみたい。

「それにアルセウス教を知らない人は私達が偶像崇拝だって思っているけど神アルセウスは存在します」

「え？」

またもや切り替わったスクリーンの中に映し出されるのは教科書などや辞書とかに載っているアルセウスの姿。石碑などにも残されている為に、存在しているんだろうという推測はされていても科学的根拠はまだどこでも立証されてはいない。

「私も実際に神と対面したわけではありませんが、神は私達をいつも見守ってくださる唯一無二のお方ですから」

森羅万象全てが神……神こそが森羅万象……きっと、こういうことなのかな？　ハルちゃんの切り替わった大人びた口調はなぜかその言葉にある一種の神秘性を帯びさせる。

「ルカちゃんは宗教ってなんだと思う？」

スクリーンが白地なものに切り替わった途端にハルちゃんが問いかける。

宗教……。絶対的絶対者に関する信仰や神事を行うこと。でも近所の人に違う宗教に入っている人がいて、宗教は皆を幸せにしてくれるものって言っていた。

信じることで報われる。信仰心をもつことで人生に意味を与える。確かそんなことを言っていたような気がする。私にはわからなかったけど、信じる対象がいるということは人に安心感と安ど感を与える……それは一種のセラピーとしても注目されている。

でも、

「宗教は……」

「……ごめんね、難しい質問して」

私の思い悩んだ表情にハルちゃんは優しげな笑みを浮かべてくれた。それはやっぱり私が宗教を知らないからかもしれない。

だから少しでもわかりたい。それに、あの人のことも、

「ハルちゃん、あの昨日戦ったスミレっていう人だけど……」

「ええ、スウセルア教ね」

ハルちゃんがシイカさんに合図を送り、シイカさんが次へのスライドへと変える。

そのスライドには日本の地図がうつしだされて、スウセルアとアルセウス教の分布らしきものが色分けされている。青がアルセウス教で赤がスウセルア教みたい。

明らかにマップから西のホウエン地方とハイア地方は赤くて、シンオウ地方一帯は青い。ジョウトとカントーはまちまちかどちらでもない灰色をしている。

「スウセルア教、それは私達アルセウス教から離反した者達の集団です。神を信じず、科学という名の神と同等なる力を手に入れようとしたのです。「神」を凌駕する力……本当に愚かなことです。ですが神は全てを理解した上で彼らをも生み出したのです」

なんだか前にも同じようなことを聞いたこともあるけど……うーん、悪く言うつもりはないけど宗教が抱える理念って一方通行な感じがするな。

それは私の家が無宗教だっただけなのかもしれないけど、ね。

「じゃあ、ハルちゃんはスウセルア教のことどう思っているの？」

素朴な疑問に、ハルちゃんは私を見つめて慈母さんのような朗らかな笑みを向ける。

「神がお創りになったものを否定することを私はしません。ですが、彼らが神を私の前で冒涜するのであればそれを見逃すことなどできません」

ことと場合によっては……ってことなんだろうと思う。それが正しいかなんて、結局は誰にもわからないのかもしれない……。

神という存在……か。考えてみたことも無かったな。

「ルカちゃんは神を信じる？」

唐突に投げかけられた質問に私は言葉詰まる。ううん、唐突じゃなくてわかりきっていたことなのかもしれない。

ハルちゃんの問いかけにはさっきまでの硬質さが無くなっていて、友達に喋りかけてくれるような柔らかな感じに戻っていた。

「私は……」

言葉が詰まる……。開きかけた口が震える唇によって弱弱しく閉ざされる。

「わからない」

濁すように零した私の言葉を、でもハルちゃんは優しく受け止めてくれた。

さっきの宗教もだけど、私はメディターを目指す一人の人間としては神の存在を、理論を否定しているのかもしれない。確かに人間には神秘的だけど、人は神ではないし神……その存在はとても曖昧な感じがしてならないのにとても強い影響力を持っている。

「意地悪な質問でごめんね。でも、これだけは忘れないで。神を信じる私達がいて、信じない人達もいるってことを」

「う、うんっ！　忘れないよっ！」

でも、それだけは本心から真意に伝えられた。例え神がいたとして、いなくてもハルちゃんという女の子に出会えたこと、彼女に会えたことは神様に感謝しても足りないくらいなんだから。

「あ、あのそれでね」
「大丈夫、わかってるよルカちゃん」

ハルちゃんはなんでもお見通しなのかな？　も、もしかしてアルセウス教の人って皆読心術使えるのかな？

「ルカちゃんは本当にかわいいね。思ってることが全部顔にでるんだもん」
「ええっ！？」

はたっと自分の顔を両手で覆って私はそんな声を上げる。

う、うそぉっ……。恥ずかしい……。

「それじゃ早速バトルしにいこっか」
「う、うん」

スクリーンが上がって行く音と共に、シイカさんが支度を始める。

「ルカちゃん、それじゃいこっか」
「うん」

私は差しのべられた手を握り返して、ベッドの上から立ち上がる。ハルちゃんは伊達メガネをポーンと放り投げて、それを絶妙の位置でシイカさんが受け取る。

目指す場所はS区から昨日行ったオープンバトル大会のバトルフィールドまでは結構ある。というか船の中でこういった感覚を持つこと自体おかしいんだろうけど……。

でも昨日コクドウさんと一緒に行った時は十分とちょっとだった。

「シイカ、ぬかりはないわね？」

「勿論ですハル」

「よし、行きましょ～」

先導するハルちゃんの後を手を握りながら付いていく私。そして後ろをすすーっと付いてくるシイカさん。ちょっとだけど、変な感覚。

敷き詰められた深紅のカーペット。歩いた拍子に濃淡が変わっていくカーペット……それはついつい子供心をかきたてられて遊びたくなってしまう。

人気のない通路、完璧に隔離された廊下には一つの埃も見当たらず真っ白な蛍光が空間全体を眩く照らしている。カーペットに施された金の刺繍もきらきらと視界の邪魔にならない程度にその存在を主張している。

そのS区の大きな個室な為に作られた長い通路を抜けたら、すぐさま下降するエレベーターに乗る。

「でも結構不便よね、S区って……」

エレベーターの駆動音を全身に受けながら、ハルちゃんがそう零す。

「なんで？」

「だって」

私の疑問にハルちゃんはちょっと渋って口を開く。

「施設とか外に出るだけだって一番遠いところじゃない？」

言われてからもだけど、それは私も思っていた。

S区はロケーションとしては最高峰なんだろうけど、配置がメジャー施設からは少しだけ他の区間の利用客よりは離れている。

でも施設はたくさんあるし、S区の方が近いところもあるし何よりS区の特権がチート過ぎるんじゃ……。なんて、そんなこと私が言ってもなぁ……。

「ハル、それはS区を利用する乗客のセキュリティ面を考慮した為です」

「そうはいってもねえ……」

私は黙って二人の会話を耳で聞く。

そんなことより、といっちゃ悪いけど私は密かにわくわくしていた。

ハルちゃんとのバトル。

メディター目指していてポケモン達が傷つくバトルをしたいなんて思うなんていけないことなのかもなあ……。でも、お兄ちゃんの妹なんだろうなって思わされる時があるから家系の血なのかもしれない。

「ねぇ、聞いてるルカちゃん？」

「ひゃ？　え、あ、な何？」
「もぉ～」
エレベーターが止まる音。
そしてそこから先は巨大なショッピングモール（私が漢方を見つけた場所の区域）を抜けるとバトルフィールドが存在する。
いつも賑やかなショッピングモール……でも今日はなんでか違った。
「あれ？」
ハルちゃんもなんなんだろうというような表情を浮かべる。
長い行列と共に聞こえてくるのは宣伝文句を伝える若い男女の人達。
「「今日はポケモン献血デー！　あなたのポケモンの血を他のポケモン達の命を救う為に！　ただいまご協力いただきました皆様に全品１０パーセント引き券を差し上げておりまーす！」」
ポケモンの献血……？

第八章：ホウエンまで　ＶＩ：アルセウス教とは……（後書き）

何気に普段よりちょっと長くなってしまいましたが、

そろそろポケモンの映画を見に行きたいと思ってます。なんだかみなさんの報告を見れば、なかなかに期待できるとか。

楽しみですｗ

次回はそろそろ現実も混ぜていきますよ～

第八章：ホウエンまで　ＶＩＩ：打倒スグラノハル（前書き）

遅くなってしまいまして申し訳ございません。

多分これからは毎週日曜更新になりそうです。

なんだか、土曜日まで一杯になってきちゃって・・・；；

さて今回は前回の続きではありますが、この長い第八章一応にいろいろとつめてますのでお楽しみにｗ

第八章：ホウエンまで　ＶＩＩ：打倒スグラノハル

「はい、ちゃんと並んでください。順番にお待ちください」
「対象は、孵化一年以上経ったポケモンとさせていただいております。なお病気や怪我をしているポケモン達は対象外となります、ご注意ください」

上から短い白衣を羽織っている人達の胸元には赤いＲの文字が浮かび上がっている。それは今や協会の新たなマークとして公開されているみたい。

ここ数日、船の上でテレビを見ていてそういった情報は知っていた。

でも真実を知る人は少ないんだろうな……。

「船上での呼び出しが禁止されているポケモンに関しましてはボールから採取することも可能ですので、どうぞお気軽にご参加ください」

ある人はプレートを持ち、ある人はフライヤーを配りながら献血の列はどんどんと連なって行く。

「なんだろうね、ルカちゃん」
「うん……」

１０パーセントの割引券……。あんなんじゃ献血の真意を汚している。

自分の利益の為に献血を行わせるなんて……。

「あんなの、やだっ」

私が人という醜さに目をそらして、ハルちゃんはそれを察してくれたのか私の肩に手をまわしてくれる。

「自分の中に流れる血は自分のものであり、それは神から与えられた命の水源です。それをあんなやり方で行うなんて、許されません」

穏やかでありながら事態を批判するハルちゃんの声は、さっきのアルセウス教の説明の時みたいにとても丁寧で神聖みのあるものだった。

私の気分は多少晴れて、ハルちゃんにお礼を言う。

「ううん、いいの。献血は他者を助けることをモットーにしているんだもん、私は否定しないけどああいったやり方はダメだと思う」

人の偽善の裏に隠された醜さに嫌悪感を覚えつつ、私は自分が目指している夢の現実をまた一つここで思い知らされた。

……カナの時もそうだったけど、人を助けるということにそんなに事情や理由がいるものなの？　理解できないよ。

長い行列を通り抜けながら、私達三人はフィールドへと向かう。

私は向かう歩幅を速めながら脳内をバトルの対策へと切り替える。どの子で行こうか迷わされる。

「ハルちゃんはバトルどれくらいできるの？」
「え、私？」
まだ、話してなかったかな？
「えーっと、学校で週二回とお兄ちゃんに付き合わされてちょくちょくかな？」
「お兄ちゃん？」
私の言葉にハルちゃんが反応する。
「うん、お兄ちゃん。まあ嫌味で意地悪でがめついバカ兄だけどね」
「あはは、そうなんだ」
そうは言うも、私の唇は重く震える。
「お兄さんは、一緒じゃなかったの？」
当然に抱く疑問をハルちゃんはただ私に聞いてきただけなのに、私は口を閉ざしてしまう。唇を震わせていた振動は肩へと伝わり、私は歩みさえも止めてしまう。
「ルカちゃん？」
「ハル……」
シイカさんが私の泣く顔を見たのかもしれない、ハルちゃんは口元を手で隠して眉をしかめる。
「ルカちゃん、ごめん……」
「……ううん」

泣いてしまう私の方が悪いのに、ハルちゃんは悪くなんかないのに、なんでバカ兄のせいで泣かなきゃいけないの？　そうだよ、あのバカ兄……。

そうは強がってみても、心の内の私はまだ泣いていた。

「バカ兄は、バカ兄だから。いいの、ごめんねハルちゃん」

「大丈夫？」

やっぱり、ハルちゃんにはなんでもわかっちゃうのかな？　うん、きっとそうだよ。だって、こんなに優しくされたら、私……。

「だ、大丈夫だよ。それよりもバトルしよハルちゃん」

動揺は隠せない。今にもハルちゃんに泣き縋りたい。でも、決めたんだもん。

もう泣きたくない。

そう決心した私はここで泣き崩れてちゃいけない。

私の瞳の内の色が変わって行くのを見取ったハルちゃんはいつもの笑みを浮かべて、元気良くうなずいてくれる。

「うん、それじゃ早速行こっか！」

「うん！」

私とハルちゃんは手をつないで、少しだけ気分の軽くなった足取りでフィールドへと向かった。私達の後ろをついてくるシイカさん

の表情がほころんでいたのを、私は傍目からうかがうことができた。

オープンバトルフィールド：

夜遅くまで解放されているバトルフィールドは、一応は予約制。でも、昼のある一定の時間は誰でも使ってもいいようになっているみたいで予約なんかは関係なくその場でバトルを楽しむことができるみたい。

でも今はバトルフィールドの全てが開いていて、その広大さにちょっと驚く。

前来た時は人が一杯いたからその熱狂さにびっくりしてたけど、でも人も疎らなフィールドに改めて対面して公式以上の設備の整ったバトルフィールドに気圧される。

大会の時は何もないフィールドだったけど、ちゃんと他のフィールド用に切り替わる設備があるみたい。それはＶＩＰルームで見たフィールドの詳細を読んでいてわかった。

「それじゃルカちゃん、バトルフィールドは普通がいい？　それとも変えてみる？」

縦８０メートル、幅４５メートルもあるバトルフィールドが三つ連なっているこの空間で私達三人は本当にポツーンとしている。

「え、決めていいの？」

「うん、もちろん」

昨日のカタログを見ていて気になったバトルフィールドは確かにあった。それならハルちゃんに対抗できるかなって思ったフィールドが一つ。

「じゃあ、底無し沼で」

「「え？」」

バトルフィールド、底無し沼。

それは本当にその名の示す通りのバトルフィールド。

私の選択にハルちゃんもシイカさんも面食らったような感じだったけど、私は本気。

「ルカちゃんってやっぱり面白いよ」

満面の笑みでハルちゃんがシイカさんからボールを一つ受け取って私へと向ける。

私もポーチの中からボールを取り出してハルちゃんへと指し示す。

お互いの距離、わずか5メートル。でもそれ以上近づくことなく、私達はそっぽを向いてバトルフィールドの端へと歩き去る。

シイカさんがレフェリーボックスへと入って、何やらキーを操作する音が聞こえるとともに私の隣のバトルフィールドが振動を始める。

床から伝わる振動と連動して白線内のバトルフィールドが沈んでいって、そして私が選択したバトルフィールドがその姿を現す。

「使用ポケモンは一体のみ。相手のポケモンが戦闘不能とみなされた場合、試合終了です」

シイカさんの声がスピーカーによって拡張されて私の耳に入ってくる。

私はバトルフィールドの末端にあるトレーナー用のボックスに入る。ボックスといっても白線で書かれたものだけど、そこに入るだけで一気に緊張が走ってくる。

視線の上を見るとちらほらと人の姿が見える。

さすがに会場までは締め切りにできないみたい。

私は遠くに映るハルちゃんを見つめながら、小さく手を振る。そして彼女も腕を伸ばして腕を振り返してくれる。

左手に握っていたボールをおでこに当てて、中の主に話しかける。

「ハルちゃんとのバトル、がんばろうね」

どれくらいまでやれるかわからない。でも、がんばるしかない。

「それでは両者、ボールを構えてください。時間は無制限です。なお、試合はいついかなる場合でも降参することができます」

試合のルールを聞きながら、私はボールを構える。

「それでは試合、開始！」

シイカさんの宣言と共に、私はボールを高く放る。淡い閃光と共に現れたガーディはフィールドに着地すると共にその異質さに気付くも、事情を察してくれる。

ハルちゃんの出してきたポケモンは昨日試合に出ていたポケモン、ユキメノコ……。

バトルフィールド、底無し沼。それはフィールド自体が弾力性のあるゼリーみたいになっていてただ立っているだけなら少しずつ沈んでいってしまうようなそんなフィールド。飛ぶことも浮くこともできないポケモンにとっては機動力、瞬発力、機敏力が制限されて普段よりもスタミナの消費が激しい。

そんなフィールドを私が選んだ理由……それは朝ごはんの時はじめて見てわかったのもあったけど機動力の高そうなミミロップとフローゼルはなんとしてでも避けたかった。そしてミカルゲは基本動けないポケモン……ならハルちゃんが選びそうなのはユキメノコ。

ならタイプ相性で優位性を取らなきゃいけないから。

「ルカちゃん……。試合前から試合ははじまってたんだね」
「行くよ、ハルちゃん！」

トレーナー用ボックス付近に埋め込まれているスピーカーが私達の声を拾って、それがお互いに聞こえるようになっている。それは公式戦では相手の指示が聞こえるというルールにのっとっているからだと思う。

「ガーディ、大変かもしれないけど頑張ってね！」
「ガウ！」

四肢をしきりに動かしてガーディは必死にフィールドの上に立つよう努力している。

ガーディにエールを送り、私はふと観客席を見やる。するとそこには見たことのある人物が立っていて、一瞬だけど目が合う。その人は目が合ったと思わなかっただろうけど、私の視力ではそう感じた。

「ユキメノコ、慎重に行きましょう。そしたら負けることはないです。私達が刻むこの瞬間を永久に刻みましょう」
「（こくり）」

ユキメノコの綺麗な着物模様の胴体がふわっふわっとフィールドをギリギリ触るか触らないかの位置で浮いている。

そんなハルちゃんの声で私は試合に集中する。

「ガーディ、先行取るよ！　【火炎車】！」

自分の口中で火球を作りだして、それを全身の毛に分散させて突っ込む技【火炎車】。炎タイプのポケモンの中には自分の毛が発火性な者もいて、でも燃え散ることがないからこそできる技もある。それがこれ。

「ユキメノコ、【粉雪】です」

ハルちゃんはバトルに入った途端に昨日みたいな口調に戻っている。

多分、アルセウス教の中だとバトルも神事の一つになるのかな……。

ユキメノコの放った【粉雪】がガーディを襲う。タイプ的には大丈夫だろうけど、ユキメノコに届くまで距離は残り十数メートル……。最初っから足場の悪いフィールドでガーディの速さは下がっているから、勢いが落ちなければいいんだけど。

そう私に思わせる程にハルちゃんのユキメノコの【粉雪】の威力は凄まじい。私の方まで飛んでくる冷気が頬を駆け抜けていく。昨日見たとおりの威力だったけど、実に見てみるとその度合いがわかる。

負ける……。最初からわかっていたことだけど、更にそれが実感として私を襲う。

でも、ただじゃ負けない。

バトルをするんだから、思いっきり楽しむんだから！

「ガーディ、いっけぇ！」

猛雪の逆行の中、ガーディは己の炎で作った鎧の火力を上げて雄たけびと共にハルちゃんのユキメノコ目掛けて駆けていく。

第八章：ホウエンまで　ＶＩＩ：打倒スグラノハル（後書き）

はてさて、一週間という期間をもらっているので若干いつもより少しだけ長めですがプロットを組める時間があるというのはいいですね。

昔はとくに前作ではあてずっぽうな感じだったので；；

これからもメディターをよろしくです！

第八章：ホウエンまで　「裏」：表の色と裏の色（前書き）

はてさてバトルがはじまると思った方々、すみませんバトルは次週となります。

まあ「裏」を書いてなかったので、それと久しぶりに第三者視点も書きたかったので；；ｗ

ちょっと短めですが、彼女の存在もまた大事ですのでよろしくお願いいたします。

活動報告でも明記しましたが、更新は土日かのどちらかになります。お手数をおかけいたします。

第八章：ホウエンまで　「裏」：表の色と裏の色

オープンバトル大会　決勝戦直後：

ガンっ！

挑戦者専用の登場口廊下の壁を強く握りしめられた拳が叩く。

光入る向こう側の表彰式ではまだ優勝者を称える余韻は止んでおらず、むしろ今から更に盛り上がるのではないかと思わせる程だ。

耳に遠い人々の歓声をその背中に感じながら、少女はもう片方の手で自身の顔を覆う。

「負けた、だと？　この私が……？」

そう、ハルに敗れたスウセルア教の少女スミレ。

ハルやルカと同年代であるのだが、その身長の高さにより二、三年上に見えてしまうのが彼女の些細なコンプレックスであるのだがそれはいいとしよう。

絶対の自信を持って今まで修行を重ねてきた彼女にとって、ハルのユキメノコとの戦闘は衝撃的だった。意図も簡単にやられてしまったのだから。

接戦と見えたのかもしれない、【影分身】を見極めることはできた……だが、ポケモンの本性を見極めるには至らなかったのだ。

見たことのないポケモンだったという言い訳は彼女には通用しない。

それ以上にプライドが高く、それゆえにバトルでの敗北は自分自身が許せなかった。そしてアブソルに申し訳が立たないのだ。

そしてなによりも彼女を彷彿させているのは、相手がアルセウス教の代表格であったという事実。そして自分自身もまた代表格としてその場にいたということだった。

「アルセウス教がスウセルア教より優れているだと……？　バカにするんじゃないよ……」

ぎしっときしむ拳。尖った爪が肉に食い込んで、白く変色した皮膚からは血がにじむ。

スミレのベルトのボールがかたかたと震え、中にいるアブソルが主人を心配する。

「大丈夫よアブソル。次は絶対に負けない……」

全ての葛藤をハルへと集中させる彼女の瞳はギラギラとした鋭い眼光を宿しており、その信念の強さはどうすれば出るのか。

「神など、この世に存在しない。全ては人にはじまり、全ては人におわる」

彼女が口にするスウセルア教のモットー。

「真実に目を向けずに、空想に縋りつく愚民共を私は矯正する……」

洗脳されたかのように彼女の唇は動き、ぼやく。

彼女は再び歩き出し、足音が人無き廊下をかつっかつっと響く。

スウセルア教……神を信じず科学を生み出したとされるこの国の発展を築いた者達。

その初代スウセルアを築いた者の血を受け継ぐスミレ……。彼らはなぜ今の時代であってもお互いを敵視するのか？

彼らが築き上げてきた叡と智は融合し、共存し今の世界があるというのに……。

スミレの部屋：

少女であるにもかかわらず、服装は軽快に移動できるような物である。

だが、どんなにボロボロに見えようが全てが丸7ケタは優に超える代物ばかり。

それがスウセルア教の次期頭取となる彼女の品格の現れなのだかろうか。

しかし、いったん彼女の部屋に入ればその光景は異色のものへと様変わりする。

「ただいま……」

むろん、返ってくる返事はない。しかし、彼女は満足であった。

そう、なぜなら……彼女の部屋は到るところがぬいぐるみで埋め尽くされているのだから。

大小様々なポケモン（しかも全て一般的にかわいいと呼ばれる）のぬいぐるみが所狭しと並べられ、置かれている。

そしてスミレはベッドに倒れるようにして等身大サイズはあるのではないかと思わせるハピナスのぬいぐるみを抱く。

至福の笑みを浮かべる彼女に、バトルの時のような覇気と強気は消え去りすっかりと乙女心をフル稼働させている。

「ハピナス……」

頬を桃色に染めて、頬の緩んでいた彼女であったがいくら自室で至福を噛み締めようと次第と先の対戦を思い出してしまう。

「うぅ……私、負けちゃったよ……。うぅ……あぁ、あぁぁぁ」

漏れる嗚咽と共に溢れる涙がハピナスの柔らかな生地に吸い取られていく。

次期頭取としての重圧はまだ年端のいかない少女にとっては、いかに彼女が勇猛に振舞おうと軽減されることはない。いや、かえって重みとなるのだろう。

「えぁぁ、あ、ぁ、う、あぁぁ」

言葉では表現できない声で彼女は泣き、そんな少女を彼女のぬいぐるみは屈託のない笑顔でただ見守る。

「スミレ様！　さ、探しまし――――！」

スミレの部屋になだれ込むようにして入ってきたのは一人の男。そう、スミレの従者である。

少しドジなところのある彼だが、常にスミレのサポートを徹しその力量は誰もが認める程だ。

むろん、彼はスミレの性格は知っており趣味も熟知している。いわば、このぬいぐるみを集めたのも彼である。

「スミレ様、大丈夫です。次こそはあのアルセウス教のじゃじゃ馬に勝てます。僕が勝たせて差し上げます」

雄弁に語る青年はスミレの肩をさすってやる。

「サル……」
「あ、いえ、ですから僕の名前は――――」
「サルーーー！！」

サル……と呼ばれる青年の胸の中に飛び込み、スミレはまたも泣く。

サルはスミレの頭を優しく擦ってやり、至極簡単なため息をつく。それは彼女の素直さに安堵してのことだろう。

彼女はスウセルア教の次期頭取であると共にまだ少女なのだ……。自分が守ってやらなければならない。そう思っているサルだからこそ、彼は彼女の為ならば命も惜しくはないと思っている。

そうしてスミレが落ち着き、寝付くまで……サルは彼女の傍にいた。

「あ、いやだから僕の名前はサルじゃなくて――――」

サルは彼女の傍にいた。

翌日：

S区の一角、扉が開き従者と共に現れるのはスミレ。

昨日の夜に彼女が涙したことなど見る面影もない。

そう、そしてスミレもまたS区の者である。

今ではロケット団の経営下に入ってしまってはいるが、サント・アンヌ号従来の方針は変わらなかった為大幅な人員移動は成されなかった。

それゆえ、スウセルア教であるスミレの部屋はアルセウス教であるハルの部屋からは遠く離れており、廊下でばったり出くわすといったことがないように配慮されている。

昨日の敗北を糧に早速フィールドでバトルの練習をしようと思った彼女はサルをひきつれて昨日の大会があった場所へと向かう。

「サル、よろしくね」

「何を今更、僕はいつでもスミレ様に尽くしますよ」
「よしっ、行くぞ」
「はい」
新たなる決意と共にスミレは打倒ハルを胸の内に掲げる。
しかし彼女はバトルフィールドへと行き、立ち入り禁止の札と共に、フィールドにいる人物を目にする。
そう、ハルともう一人見たことのない少女。
彼女達が底無し沼のフィールドでバトルをしている。しかもハルが使っているのはユキメノコ。
「スミレ様……」
「いい。良い機会だ……このままでいい」
「はい」
普段ならばＶＩＰルームへと行くのだろう、しかしスミレは一時でもバトルの瞬間を見逃したくはなかった。
例え録画できるとしても、その時、その瞬間にトレーナーが繰り出す指示と成す判断は生で見なければ見ることも感じることもできないからだ。
スミレが観客席の端でフィールドを睨んでいると、ふと視線がハルの対戦相手へと向く。そして彼女はその少女と目が合う。
一瞬だったのだろう。なにせ少女はすぐに視線をハルの方へと向けたのだから。

しかしスミレは妙な居心地の悪さを感じた。

あの少女は誰なのか。一体自分が宿敵と判断したハルの何なのか。

ただ感じ取った居心地の悪さはバトルが本格的に動き出したことで途絶えた。

「お手並み拝見と行こうか……」

自分でも不思議に思ったのだろう。

そう、なぜならスミレの意識はハルではなく、なぜかルカの方へと向いていたのだから……。

第八章：ホウエンまで　「裏」：表の色と裏の色（後書き）

スミレ「よろしく……ね」

うん、かわいく言えたね

スミレ「うるさい」

さてさてスミレの見守る中、バトルはどういった展開になるのか？！

乞うご期待？

スミレ「はっきりしろ」

はいっ……

第八章：ホウエンまで　ＶＩＩＩ：決着れっつご～（前書き）

えっと、更新です！

ちょっと風邪気味でペースが落ちちゃいましたがルカ対ハルのバトルをどうぞ。

第八章：ホウエンまで　ＶＩＩＩ：決着れっつご～

バトルフィールド：

燃え盛る火の玉がハルちゃんのユキメノコ目掛けて突進していく。でもユキメノコの【粉雪】がガーディの突進を拒み、炎の熱を奪って行く。

私はわかっていた……。ユキメノコにこの攻撃は当たることはないということを。今のガーディのスピードは通常の三分の一以下……避けるのは容易いことだから。

「メノォォっ！」

だけど私の鼓膜を揺るがしたのは苦痛に悶えるユキメノコの叫び声……。

え……？

バトルの初っ端から、私のガーディの攻撃がユキメノコをダイレクトに捉えていた。

あたった？

「が、ガーディ、そのまま【噛みつく】！」

「ガウッ！！」

吹っ飛ばされるユキメノコ目掛けて空中をジャンプしたガーディがユキメノコの袖部分を豪快に牙で咥えて、全身をひねりながら床

へと叩きつける。

底無し沼だから床への衝撃は減ることになるけど、ダメージは蓄積されるはず。

最初の攻撃があたったことによる昂揚感が私の警戒心を薄らげていた。そう、最初からわかっていた……相手はハルちゃんなのに……。

私が見たハルちゃんの顔は冷静で、動揺の一つも見せずにしっかりとガーディのことだけを見つめていた。そして彼女の唇が動く瞬間、私の頬をさっきよりも冷たくて心臓が底冷えするような怖気が撫でる。

「ガーディ、避けて！！」

「がう？　……っ！　きゃんっ！！」

攻撃を受けたはずなのに、すかさず体勢を立て直していたユキメノコの【氷の礫】がガーディのわき腹にしっかりとめり込んでいた。

クリーンヒットした打撃はガーディの臓器に衝撃を与え、数秒間の機能停止を告げさせる。その余波は体全体を襲い、脳内にアラートをもたらす。

逆流する胃液と口から垂れる唾液、ぶれる視界……。ポケモン達はバトルの中でこういった苦しみと痛みを覚悟しながら私達についてきてくれる。

「ガーディ、気をつけて！」

ユキメノコ……。アブソル戦でもわかっていたけど、素早さが高い。さっきの【氷の礫】だっけ？　モーションが見えなかったし、ガーディがもしもっと耐久力があって踏ん張っていたならラッシュにあっていた。

「ルカちゃん、ルカちゃんの実力はこんなものじゃないでしょ？！」

ハルちゃんの声に、私の肩が震える。

ユキメノコに気を取られていて、ハルちゃんのことを見ていなかった。

あれ、どうして？　いつもなら、いつもだったらこんなに動揺することはないのに……。

「ガウッ！」

ガーディの吠えが私に向かって放たれる。

その大声に、私ははっと我に返る。

あれ？　なんで、私は……？　もしかして、攻撃されていたのは私の方……？

「気付いたルカちゃん？　ユキメノコのタイプはゴーストと氷」

最初の【粉雪】で全体の温度を下げて、普段より思考力が繊細になる時にもし一種の幻想を見せられるようなことがあるのなら人はそれが現実なのか虚実なのかわからなくなる。しかしそれを可能にさせるのは熟練された者のみに許された奥義に近いもの……。

ガーディの卓越されている集中力と精神力に私は助けられたんだ。

ぱちんっ！

私は両手で頬を叩いて、目を覚ます。

「ルカちゃん？」

ハルちゃんが見してくれた幻想は軽いものだったのが功をそうしたのかもしれない。ううん、やっぱり手加減されている。だって、もし本気のハルちゃんに幻想をみせられるようなことがあるなら……勝負はもうとっくについてるもん。

「ガーディ、ありがとう！　いくわよ、【嗅ぎ分ける】から【火炎放射】！」

ガーディの口から怒涛の炎が飛び出して、一直線の軌道を描いてユキメノコを狙う。

「ユキメノコ、防いで」

え？　防ぐ……？

【氷の礫】の時、ユキメノコの袖一部が氷塊と化していた。でも今ユキメノコの袖は袖全体が氷の刃と化していて、それを大きく振り上げる。

一閃と振り下ろされたユキメノコの腕……。そして二分されるガーディの【火炎放射】……。それだけで更に私とハルちゃんの間の

実力の差が決定づけられる。

だからこそ、ハルちゃんの期待に添う！

「ガーディ、【陽炎】！」

私の一言に、ガーディははっとしながらもちゃんとユキメノコを視界にとらえて狙う。

前にバカ兄の朝の対決の時に見ていたバトル。私のクラスの男子のリザードが使っていたオリジナル技……。バカ兄は見切っていたけど、注意をひくことぐらいはできるはずっ！

ユキメノコが冷気で冷やしてくれているからこそ可能な技、【陽炎】。ガーディからまたも【火炎放射】が放たれるもそれは歪曲して、捻りながら二分してユキメノコへと襲いかかる。

「ルカちゃん……。もっと、もっとだよ！」

【陽炎】はあくまでもそう見えるだけ……。やっぱりあれほどの実力を持っているんだったら、こんな技は読みきれるんだろうな。

ユキメノコはさっきと同様に腕を一閃するだけどガーディの攻撃を切り裂く。

「ガーディ、【突進】！」

でも私はすかさず指示を出す。

「ユキメノコ、【影分身】」

ガーディの攻撃を分断させたユキメノコが瞬時に十八匹に分身する。

わかる。どれが本体かは……。

目だけは何故か良い私にとって【影分身】は必ず見切れる。例え、それがどんなにレベルの高いポケモンので、凄腕のトレーナーだったとしても。

でもガーディはさすがにわからないみたいで、ユキメノコの分身のどれに【突進】をしかけていいのかわからなくて辺りをキョロキョロと見まわしている。

きっとチャンスは一回。

後はタイミングの勝負。

「ユキメノコ、【氷の礫】。ルカちゃん、勝負のけりつけよっか」

氷の刃……。さっきと同じ技をユキメノコが繰り出して、その腕を振り上げてガーディを襲う。

一気に取り囲まれたガーディを四方八方から襲うユキメノコの攻撃。足が止まるガーディ。

「ガーディ、右８０度！　【炎の牙】！」

立ち止まれば埋もれいくフィールドで、ガーディは上手い具合に方向転換して振り上げられた袖におもいっきり喰らいつく。

氷をぱりんと割るような音と共に見えるのは仰け反るユキメノコと袖を離さないと喰らいつくガーディの攻撃。

「ユキメノコ、【驚かす】！」

「ガーディ、【咆える】！」

近距離にいるお互いのポケモン。すかさず指示を出さなければどちらかがやられる、そんな状況。

ユキメノコがガーディをひるませようとするのを私はガーディの咆哮によって相手を逆にひるませる。でも、やっぱり実力差がありすぎるみたい。

一瞬だけひるんだユキメノコでも、そのままの勢いでガーディの頬をはたいてガーディは吹っ飛ばされる。

「きゃんっ！」

その一声と共に、ガーディは立ちあがることはなかった。

「ガーディ、戦闘不能！　よって、勝者はハル！」

そう告げられた戦闘終了の合図と、ステージが変わる音。

動かないガーディはそのまま底無し沼のステージへと沈んでいくのを防ぐために、シイカさんがスイッチを押してガーディを戻すように指示を飛ばしてくる。

「戻ってガーディ。ありがとう」

ガーディをボールに戻して、私はハルちゃんを見つめる。

ハルちゃんもまたユキメノコをボールに戻して、私の方を見つめる。

「やっぱり、ルカちゃんは凄いよ」

「え？」

負けちゃったから、そんな言葉を予想していなかった私はきょとんとしてしまう。

「まさか、【影分身】が見切られちゃうなんて。私もまだまだだな」

「そ、そんな……」

称賛の声に、私は頬を赤らめてしまう。ほ、ほめられちゃった。

そして観客席の方からも拍手の音が聞こえてくる。あれ、いつの間にこんなに人増えてたの……？　バトルを始めた時よりも遙かに人が増えていて、私はびっくりしてしまう。

ハルちゃんは観客席の方に両手を振って歓声にこたえている。私も恥ずかしいけどちょっとだけ右手を上げて振ってみる。

あ、そういえば……。

私はハルちゃんとのバトル前に視線が一瞬交錯した相手……スミレ選手のいた場所へと目を動かす。

あれ？

観客席へと入ってくる扉付近にいたはずの彼女はもうそこに存在していなかった。

「うーん、それじゃルカちゃん温泉行かない？」

「お、温泉？　え、あるの？」

ハルちゃんが自分の後ろ髪を右手でなびかせて、ふぅ～って襟元をぱたぱたとさせる。

「うん。あ、そっかルカちゃんサント・アンヌ号ははじめてだもんね」

「……うん」

私はパンフレットの中にも温泉というのがあったのかどうか思い出そうとしてみせるけど、思い出せない。

「えっとね、温泉はサント・アンヌ号の常連客にしか教えられないんだ。でも、私と一緒なら入れるから一緒に行こっ？」

温泉。そういえば、オツキミ山にも秘所として温泉があるってきいたことがある。入ってみたいな。

まだ一度も温泉に入ったことのない私にとって、その単語の響きは魅力的だった。

「行くっ！」

「よぉーし、れっつごー。シイカ、準備お願い」

ハルちゃんがてくてくとフィールドをつっきって私の方へと駆け

寄ってくる。

「ルカちゃん、カードの交換しない？」

「あ、うんっ！」

私に近づいてくると共に自身のポケッチを取り出してくる。

カードっていうのは、自分の身分証明書みたいなもの。前にポケギアがその存在だっていったけど、機器が読み取るのはこのポケギアに入っているカードのデータ。

そして交流を深める為に友人や知人同士ではこのカードのデータを交換することで連絡先などを知ることができる。もちろん交換するカードには全部の情報が載るわけではないけどね。

「あれ、ハルちゃんのポケッチ……」

「あ、うん。オーダーメイドしたんだ」

ハルちゃんの握るポケッチは私がカタログで見かけたようなものではなくて、なにかの鉱石が二つ填め込まれた高級感漂わせるようなものだった。その二つの鉱石を紅い鎖が巻きついているようなそんな絵図。変わったデザインだな、とそれが私が抱いた最初の感想だった。

「はい、じゃあこうか～ん♪」

お互いに赤外線交換を済まして、それぞれの子機にプロフィールカードが追加される。

「それじゃ、温泉にいこっか？」

「うん」
「あ、もしかして温泉ってはじめて？」
「え？　あ、えっとぉ……うん」
恥じらう私にハルちゃんは満面の笑みで抱きついてくる。
「えへへ、それじゃ手取り足取り教えてあげる♪」
ハルちゃんに抱きつかれながら、私ははじめて入る温泉へのワクワクが止まらなくなっていた。
「はぁ……」
なぜかシイカさんのため息が背後からきこえてきたような気がしたけど、私はあまり気にすることなく皆一緒にバトルフィールドから退場した。

第八章：ホウエンまで　ＶＩＩＩ：決着れっつご～（後書き）

えっと次回は温泉回。

いや、もうこうなったらルカに目いっぱい贅沢させないと自分の気持ちが治まらないんで；；ｗ

自分も温泉入りたい……。最近肩コリがひどくて……。

それでは次回！

第八章：ホウエンまで　ＩＸ：初温泉日和（前書き）

はい、温泉です！

入りたい！

と思いつつ、書いてみたもののまたきてしまった。

ルカ「なにが？」

ポケモンが出てこない回がまた増えた……；；

ルカ「ありゃりゃ」

でも、お楽しみくださいｗ

ルカ「おんせ～ん♪」

第八章：ホウエンまで　ＩＸ：初温泉日和

私とハルちゃん、シイカさんの一行はバトルフィールドを抜け出してハルちゃんの言うマル秘温泉スポットへと向かう。

「ねぇ、ハルちゃん……」

「ん～？」

ご機嫌ルンルンなハルちゃんが私の手を引っ張りながら振り向く。

本当にさっきバトルした時と同人物なのかなって思わされるけど、実際そうだし……。あ、じゃなくて。

「温泉ってたくさんの人が一緒のお風呂に入るんだよね？　えっと、は、恥ずかしくないの？」

ハルちゃんが若干目を丸くして、立ち止まる。

「恥ずかしい？」

そんなにストレートに尋ね返されたので、私の方が思考停止してしまう。

「え、だって知らない人と一緒にお、お風呂に入るんだよ？　は、裸なんだよ？！」

最後の方で声をあげてしまって、その単語に反応した他のお客さんに振り向かれてしまう。

「あ、あうぅぅ……」

私はお風呂に入る前に顔を真っ赤にしてしまい、穴を掘って埋まりたい……。

「ルカちゃん、やっぱりかわいぃ〜」

「……」

ハルちゃんのやっぱりの意味が全くもって理解できなくて、私はもうなにもかもが嫌になってきた。私のばか、ばか、ばかっ。

再び歩き出すお客さんの波を逆らうようにしてまた私達は歩きだす。といっても波というほどに人は通ってないんだけど。

「ルカさん、大丈夫です。ここの温泉はさほど知られていませんし、それに知っていたとしてもそんなに人数はいませんから」

シイカさんが耳打ちするようにして説明してくれるけど、そうならそうと言っといてください！

「ハ、ハルちゃん……」

私はハルちゃんの耳元に手をあててこっそりと呟く。

「お願い、早くいこっ」

その言葉の真意を汲み取ってくれたのか、ハルちゃんは小声で了承してくれた。

私ははじめて入る温泉というものに更なる葛藤を抱えて挑むこと

になる。

私達が巨大な船内を歩きまわって到達した場所は、マッサージルームと称された区間だった。

「マッサージ？」

私の質問に答えるのは迅速即答のシイカさん。

「はい。マッサージルームと称されたこの場所は、本当にマッサージルームですがカードを通すことで温泉へも通してもらうことができます」

へぇ～、と感嘆する私をぐいぐいと引っ張ってハルちゃんは中へと入る。

「あ、これはスグラノ様っ」

すぐさまにハルちゃんを認識した係員の人が、丁寧な物腰で近づ

いてきた。

やっぱりハルちゃん家ってすごいんだな～。

一般人の私がハルちゃんみたいな人と一緒にいていいのかな……？　そんな疑問が渦巻いていく。

「温泉、よろしいですか？」

ハルちゃんが私の手を解いて、丁寧にそう挨拶を返す。

「はい、もちろんでございます。それではこちらへ」

と、係員に促されて私達は女と書かれたのれんのある扉前まで案内される。マッサージ器具が整列している壁の向こう側に回り込まなければ見つからないその場所は、たしかに一般客に知られる余地はない。

「それじゃ、いこっか」

がらがらっと開く扉はテレビとかでみた木戸とグラスが揺るがしあう音と木と木が擦れる軟い音が耳元に届く。

中は多数の木製ロッカーがずらりと並んでいる。こんなにお客さんが入れるほど大きいのかな？

ていうか、本当にこんな場所で着替えるの……？

用意されたバスタオルを人数分シイカさんが持ってきてくれて、その間にハルちゃんは上着を脱ぎ始める。

「え、や、やっぱりここで？」

私が戸惑いの声をあげているのを待っていたかのようにハルちゃんが私の腰に両手を回す。

「んふふー、ルカちゃん恥ずかしいの～？」

「だ、だってぇ……」

私は顔を真っ赤にさせて、上着の裾に手を伸ばして掴む。

「いいよ、リラックスして。私が脱がして、あ・げ・る♪」

「……へ？」

そう耳元でささやかれて、私の握力は知らず知らずに弱まっていた。

「はぁ……」

そして後ろでささやかれるシイカさんのため息。

「ハル、あまりそういった粗相は控えた方が……」

前にもあったシイカさんのため息もこれのことだったのかな？

あ、ていうかハルちゃん、じ、自分で脱げるからっ！

「ハ、ハルちゃんっ！」

「いいからいいから～♪」

言われるがままに、私はハルちゃんの着せ替え人形みたいに身ぐ

るみ引っこ抜かれる。

「は、はるちゃ～ん……」

私はシイカさんからもらったバスタオルで前を隠してハルちゃんを睨みあげる。といっても羞恥心のせいで目が赤くて涙が流れているから、睨んでいるような感じはしないかもしれない。

「温泉入るんだから、裸になんないと」

「そりゃそうだけどぉ……」

ハルちゃんもバスタオルを体に巻いて、そのまま私を引っ張り立たせて連れて行く。

ずるずると引っ張らされて、その後をシイカさんがついてくるんだけど……。ほわぁ、おっきい……。

開いたガラス戸の向こうからは湯気がもわもわとたちこもっていて、その後にすっきりとした大浴場が見えてくる。

大きい……。

大きい。

「おっきい！」

私は知らずにそんな大声を出してしまう。そしてその時、温泉の水面がぴくんと波だったのが見えた。

あれ？

「ルカちゃん、騒ぎ過ぎだよっ」

ハルちゃんがそう言って、私はしゅんとしてしまいそうになる。で、でも！

「だって、こんなに大きいんだよ？　こんなに大きなお風呂場、私はじめてだよ！」

「……ルカちゃん」

広い空間でこもった私の声が反響されて、私は更に昂揚するんだけどハルちゃんにおとがめをもらっちゃった。

「ごめんなさぃ」

「わかればよろしい。それじゃ体あらおっか」

「うんっ」

お湯に浸かる前に体を洗った私達は他にもいろいろとお喋りをした。途中でハルちゃんが私の背中を流したいと言って、三人で流しあいっこもしたりして温泉ってこんなにも楽しいんだって実感した。

そうして温泉に浸かろうとしたら、巨大な岩の後ろにいた人影と出くわす。

「「あ」」

その人物とは、私がさっき見かけたスミレ選手その人だった。

「あなたはスウセルアの……」

「アルセウスっ！」

ばしゃっと立ちあがったスミレ選手はハルちゃんへと食いかかるように睨みつける。

ハルちゃんはというと、逆に冷めた顔をしている。

「あ、お前はっ」

そしてなぜだかわからないけど、スミレ選手の視線の矛先は私へと向けられる。

「え……？」

はじめてこんなに近距離で目を交える……。スミレ選手って結構背が高いんだ……。そんな印象を私は最初に抱いた。

「お前は、今朝アルセウスとバトルしていた……」

やっぱりあの時この人は私のことを見ていたんだ。

「は、はい。ハヤミ　ルカといいます」

私は急ぎながら挨拶をしてお辞儀する。

「あらスウセルア、私達のバトルを見ていたなんて敵情視察ですか？」

「違うっ！　私がバトルの練習をしようと思っていたらアルセウス、お前が貸切にしたんだろ！」

挑戦的なハルちゃんの瞳は嗤っていて、その挑発にのっちゃうス

ミレ選手はちょっと子供っぽいな。

私はそう脳内で考えて、ちょっとだけ微笑んでしまう。

剣幕を飛ばしている二人を傍観していたシイカさんが私にどうかされましたか？　と尋ねてきたんだけど、私は首を振って返す。

スミレ選手って私は呼んでいるけど、こうやって見ると私達と同い年ぐらいなんだよね。

「あら、そうでしたっけ？」
「ふざけるつもりか？」
「それよりどうしておひとりで？」
「それは……。わ、私の勝手だろう！」

そんなハルちゃんとスミレ選手の会話を聞きながら、私は両手をばっと広げて会話を静止させる。その時に巻いていたタオルが落ちちゃってあわてて拾ったのは内緒なんだから！

「あ、あの、ス、スミレ……えっと、あの……」

さすがにここで選手っていうのもはばかれるし、えっと。

「スミレでいい。年齢は同じぐらいなんだ」

そう私を助けてくれるスミレちゃんは凛々しくて、頼もしく見えた。

「じゃあ、スミレちゃん」
「ス、スミレちゃんっ……？」

さすがに自分がそう呼ばれるのは予想していたなかったみたいだけど、うん、いいよねスミレちゃん。

「スミレちゃん、私とお友達になってくれない？」

その私の一言で、場が静まり返る。まるで温水の水面までその揺らぎを止めてしまったかと錯覚するほどまでの静けさに。

「え？！」

「なっ？！」

一斉に口を合わせるハルちゃんとスミレちゃん。

あれ、私変なこと言った……？　だって、そりゃアルセウス教とスウセルア教は対立しあっている仲かもしれないけど、こうやって知り合えたってことはむしろ喜ぶべきことだし。それに和解もできるんじゃないかな。

そんな私の勝手な発想は、でも本当にこの時安易すぎたんだと私は後々思い知らされることになる。

「と、友達？　この私と？」

スミレちゃんが自分を指さして、私はこくりと頷く。

私の横でハルちゃんがあわあわと両手を宙で泳がせて、何か言いたげそうだけど私はあえて見ないふりをする。ごめんね、ハルちゃん。

「……わ、私は……私はお前となら友達になってやってもいいが、このぱーちくりんとは友達にはならんぞ！」

最後の言い方がちょっとあれだったけど、私はわーいって喜ぶ。

「ちょっと、スウセルア！　私のどこがばーちくりんですか！　このとーへんぼく！」

「なにを！」

あはは、と私は乾いた笑みを上げる。

「私をあなたのように強調性や主張性に乏しい人間とは思われたくないですから」

「ふんっ……でかければでかいで信者を惑わす性悪女に言われたくはないわ」

しばらくハルちゃんと犬猿の中な喧騒を繰り広げたスミレちゃんは顔を真っ赤にして浴槽を飛びだしていった。その時にちらっと私の方に顔を向けたから、私はにっこりと手を振った。

スミレちゃんは何か言いたげそうに口をまごまごさせたけど、でもそのまま扉を開けて出て行っちゃう。

その後でハルちゃんが私に詰め寄ってきて、

「ルカちゃん、なんであんなのと友達になろうって考えたの！　もお、いらつくぅ！！」

こんなに取り乱すハルちゃんも珍しいな、なんて想いつつも私はハルちゃんに面向かう。

「だって、友達は多い方が楽しいじゃん」

そんな私の一言にハルちゃんはきょとんと止まって、両腕を放りあげてそのまま水面へと垂直に振り落とす。

「やっぱりルカちゃんには敵わないや」

「え？」

敵わないって、それは私のセリフなのに。

「ううん。それじゃあがったら温泉の醍醐味パート2を教えてあげる」

「え？　なになに？」

肩まで浸かり、手足を自由に伸ばせる温泉は本当に素敵でそれでいて皆と入れて楽しいものにまだお楽しみがあるという。

「モーモーのコーヒー牛乳。これを飲まなきゃ、温泉に来たとは言えないからね」

そう高らかに宣言するハルちゃんのその言葉に私は目をきらきらと輝かせられずにはいられなかった。

第八章：ホウエンまで　ＩＸ：初温泉日和（後書き）

さて、来週は超展開予想。

あたるかあたらないかはまだわかりませんが、ＩＸまできちゃったのでね。そろそろホウエンにつくころかもしれません。

では！

第八章：ホウエンまで　X：来るは女神か悪魔か（前書き）

えっと、はい、更新します！

今日が自分の誕生日だからかわかりませんが、増量しておりますw

それに今回は結構いろいろ？というか少なくともおきますのでお楽しみにw

では、どうぞ！

第八章：ホウエンまで　X：来るは女神か悪魔か

「今日は楽しい一日だった～」

自室のベッドの上で、私は両手両足を伸ばしに伸ばしてくつろぐ。

あの後、温泉から上がってすぐにモーモーコーヒー牛乳を腰に手を当てて一気飲みするという秘儀を教わった。

そしてマッサージのコースをポケモン達皆と受けて私は今帰ってきた。

バトルして、温泉に行って、マッサージを受けて、ちょっとだけウィンドウショッピングをした。こんな贅沢、贅沢過ぎるよ。

私のお腹の上で頭をのっけて寝ているのはラルトス。さらさらの髪の感触を左手に感じながら、私の足元ではガーディとシャワーズが横たわっている。

ふかふかなベッドの上で私は天井を仰ぐ。

ライトの点いていない部屋の天井。光の灯っていないシャンデリアの装飾が暗闇の中ででも鈍く煌めいている。大きな窓から見える外の景色も、月に照らされている海の水面がゆらゆらと輝いているのがわかる。

今窓を開ければ、優しく凪ぐような潮風が入ってくるんだろうな。

サント・アンヌ号に乗ってまだ数日……。ホウエンに到着するの

は後、あれ後どれくらいだっけ？　えっと、あ、そか……後二日だ。

カントーからホウエンまで、かかる日数は五日。さすがは豪華客船だけあって、いろいろと航路が練られている。

「後少しで、手に入るんだ……チイラの実」

決意のこもった目で私はまっすぐに天井を見据える。

そうだ、スミレちゃんに聞いてみようかな。チイラの実のこと……。

でも今日は疲れちゃったから、明日にでも……。

そう私が瞼をゆっくりと閉ざそうとした時、異変は起きた。

ゴォン！！

激しく重厚そうな音が船全体を揺らし、振動が続く。耳をつんざく摩擦音が、私の心臓を飛びあがらせる。

な、なに？！

そう思った矢先に、突然コクドウさんが部屋に入ってくる。

「コ、コクドウさん！」

「ハヤミ様、ただちに脱出する用意をお願いいたします」

唐突に言われた指令に私はきょとんとしてしまう。

「え？」
「間もなく、船が沈みます。先ほどの衝撃で船底に穴が開き、後数時間で当船は海底の藻屑となるでしょう」
え？　え？　だ、だってこの船は世界でも有数の豪華客船で、すごく安全だってきいてたのに。
「お急ぎ願います。私は脱出用のボートの準備をしてまいりますので。三十分後にまた参ります」
あせっているんだろうか？　でも、そういった素振りを一切見せないコクドウさんは本当に執事とかサーバントの鑑なんだとその時私は感じた。
三十分という時間制限。そして少しずつではあるけど傾いていく船の感触が私にいやな汗をかかせる。
「ガーディ、シャワーズ、ラルトス、戻って！」
「がう！」
「ふぃ」
「ら～ぅ？」
私は三匹をボールへと戻す。やっぱりガーディやシャワーズにはこの異変が察知できたんだろう。でも天然っぽいラルトスは呆けた声上げてたけど。
ボールをウエストポーチの中でホールドして、部屋の辺りを見渡す。
本当に身一つで来た感じだから、私の荷物はさほど多くはない。

ここ数日の衣服を鞄に詰めて、パラセクトの胞子を衣服の一つにくるんで大切にしまう。そして昨日ハルちゃんとウィンドウショッピングした際にいろいろと集めた新しい小道具と木の実、漢方とダウンロードした医療関連の書物のデータがケースに入っているかどうかを確認する。

クローゼットを再度眺めて、そこで私は初めて着た高級ドレスをみつめる。

ううん、だめだよ。でも、これ、これだけ……。

自身の欲を制御できなかった。私はそのドレスをも鞄に詰め込んでしまっていた。

私は鞄を閉じて、徐々に傾いていく船体の中を窓付近まで歩いていく。

その窓の向こうに見た光景は、現実が現実して突きつけられる。喧騒を飛ばす人達、我先へと脱出用ボートへと乗り込もうとする人達、自分のことしか見えていない人達。

人が叫び、人が走り、人が倒れ、人が泣き、人が暴れ、人が嘆き、人が落ち、人が……、人が……。

私は一歩、また一歩とそのおぞましい光景から後ずさっていた。

本当に？　本当に沈むんだ、この船……。

数時間前まではとても煌びやかで、華やかで、明るかった船のイメージが今の一瞬で全て吹き飛び、そして変貌する。

こんこん、というノックの音と共に扉が開いてコクドウさんがやってくる。

「準備はできましたか？」

「……はい」

私は振り向きつつも、コクドウさんの顔を見ることなくそう呟く。

「それでは参りましょう、こちらです」

私の荷物を担いだコクドウさんは先に部屋を出て、先導してくれる。

私はウエストポーチをしっかりと固定させて、もう一度窓の方へとふりかえって駆けだす。

廊下を照らすライトが点滅し、ギシ、ギィという嫌な重い音が振動として足裏から伝わってくる。

S区はこういった非常事態の為にもちゃんとしたルートが確保されているみたいで、私はコクドウさんがまだ私が入って行ったことのない道を進んでいって必死に追いかける。

ガコン！

車が車道の段差で跳びはねたような小さな衝撃が私達を襲う。

「ハヤミ様！」

「っ！　……ありがとうございますっ」

バランスを崩した私をコクドウさんが腕一本で支えてくれた。

「急ぎましょう」

「はい」

エレベーターは勿論使えない。だから私達は非常用階段を使って脱出用のボートがある船底の方まで進んでいく。たくさんの配管が奇妙に重なり、交差している空間は私にどこか密閉された感覚で包んでいく。

その間、私は他の乗船客と出会うことはなかった。こんなパニック状態なのに、なんでだろう……？

「こちらです」

螺旋式の簡易階段を下った私達の目の前には赤い扉。それをコクドウさんが開けて、私がその先へと行くと、そこには大きなボートが一隻存在していた。しっかりと固定されたボートは陸上競技の百メートル走を思わせるレーンの上にあって、その先には巨大なシャッターみたいなものがある。

サント・アンヌ号が遙かに巨大なクジラだとしたら、このボートはそのクジラの眼球ぐらいだという感じかもしれない。それでも、私から見てみたらセレブ御用達の特別ボートみたいな感じに見える。

そして案の定、私の読みはあたったのかもしれない。ボートの甲板から私の方に声をかけてきたのはハルちゃんだった。ハルちゃんのご両親もいたし、それにスミレちゃんの姿も見えた。

「ハルちゃんっ！　スミレちゃんっ！」

私はコクドウさんの先導でボートに乗り込みながら二人の安否と再会に心躍らせる。

「ルカちゃん、良かった。早いところここから脱出しないと」

ハルちゃんが私の両手を握って上下に振って、私と同じ感情をあらわにしてくれる。

「これで全員ですね。出発お願いします」

コクドウさんがボートへとつながっていたキャットウォークを機器操作で離して、船長さんに合図を送る。あ、ちなみに後から知ったんだけど船長さんはサント・アンヌ号の船長さんとは違う人だった。まあ、当たり前なんだけど……。

ゴウゥゥン、という稼働音と共にボートの船底に海水が溜まって行って前方のシャッターが開かれる。沈んでいるということだけあって、シャッターが斜めに傾いているも出られないこともなさそう。

船の上には船長さん、ハルちゃん一家にシイカさん、スミレちゃんと男の執事さん、そして私とコクドウさん。あれ、これだけ？

「あ、あのコクドウさん」

「はい」

ボートの中は荷物が結構積まれていて、でもその荷物がなければ後十数人は乗れるスペースが存在する。

「他のお客さんは……？」
「他のお客様は別途用意されておりますボートにて脱出なさっておりますので、御心配無く」
コクドウさんがそうは言うものの、私は全身していくボートの甲板から身を乗り出す。
「ルカちゃん、危ないよ！」
「ル、ルカっ！？」
ハルちゃんとスミレちゃんが私の奇行に声を上げる。でも、こんなのダメだよ、おかしいよ！
サント・アンヌ号から離れていくボートから見た景色はおぞましいものだった。
闇夜にそびえる巨大な船体。
まるで崖を見上げるようなその存在感は、港で見上げていたものとは威圧感が違う。
鈍角に傾いていくサント・アンヌ号。そして雨のように降り注いでくる人々の喧騒。それだけで、私は言葉を失い唖然としてしまう。
サント・アンヌ号の甲板からは巨大アナウンスで一人で海へと飛び込まないことを注意している。
避難用のボートは私達の乗ってるのじゃなくて簡易的なものだけど頑丈さは保証されているみたい。そしてボートの底には水ポケモ

ンが近寄らないおよそ１００ヘルツの周波数が出されていると聞いたことがある。

それは大型水ポケモンや水ポケモンの群れに襲われないようにするため、だから単独で海に出ると……。

そして複数の人間が脱出用ボートが待ち切れず飛び降りる。

私達の傍で水飛沫と共に落ちてきた人達……。その中の数人は着水の衝撃が多すぎてそのまま即死、運良く海面に出てきた人が私の方に向かって助けを叫ぶ。

私はコクドウさんの方を向くけど、コクドウさんは何も言わず、何もしない。

そして私は助けを呼ぶその人が巨大な赤い化物に丸呑みにされる姿を目の前にする。

「あっ」

私は両手で口元を覆い、目を見開く。

ハルちゃんが私の肩に両手を置いて、体を密着させてくれる。私はその体に寄り添うようにして、更に悲惨な光景を目にする。

ある人は水ポケモンを出して脱出を目論むも、大量の獰猛そうなポケモンの群れに襲われてポケモン諸共に海の中へと引きずりこまれていく。

「なんでこんなところにギャラドスが……？」

スミレちゃんの声に私はさっきの赤い怪物がギャラドスだとそこで気付く。

「それに、なんであんなにたくさんのキバニアとサメハダーが」

そしてハルちゃんの発言に、私ははじめてみるポケモンの名を確認する。鋭い牙と獰猛な性格、連携のとれた集団襲撃……これが野生なの？

冬の寒い夜。体感温度だけですでに人の体力は消耗されていく。

脱出用ボートにいくら水ポケモンを遠のかせる周波数が発せられていても範囲は限られる。

沈んでいく巨船に逃げ惑う人々。最大の恐怖に襲われた人々は、わが身を第一に考えて本能的に行動する。

鳥ポケモンを出して、脱出を目論む人もいるけれど海中から放たれる【破壊光線】の餌食となって空から消えていく。

「なに、なんなのこれ？！」

私も次第にパニックに陥り、訳がわからなくなってくる。

ハルちゃんが抱き締めるようにして私をなだめてくれて、スミレちゃんが私の左肩に手を置き添えてくれる。

しかしまたその数秒後に、私はスミレちゃんの声に新たなる衝撃を目に捉える。

「な、なんだあれはっ……！」

スミレちゃんがサント・アンヌ号の向こう側に見たもの。それは、

「……うそ」

サント・アンヌ号並みの巨大船体。漆黒のボディに、赤いRの文字がでかでかとプリントされている。戦艦と言っても過言ではないほどの重装甲なそれは、この現実世界とはどこか浮世離れしているようにも見える。

そう、ロケット団のまるで海上要塞のようなその風貌は私に救いの女神ではなく滅びを呼ぶ邪神の姿そのものの到来に思えた。

「ご安心ください皆さま！　我々ロケット団が皆さまの救出に参りました！」

その船のアナウンスから聞こえてきたのは、私にはただの幻聴にしか聞こえなかった……。

第八章：ホウエンまで　X：来るは女神か悪魔か（後書き）

さて、やっぱり超展開ですかね……？w

参考資料としましてはあの有名な豪華客船をイメージしていただければと；；；w

それではまた来週！

第八章：ホウエンまで　「裏」：黒幕（前書き）

さて、サカキのことをもっとたくさん書きたいのですが次回のお楽しみということでｗ

八章は他のキャラ達とのバランス上、あそこでカットさせていただきますｗ

今回の裏はちょっと先週頑張りすぎた分、短いですがご了承ください。

それでは、どうぞ！

第八章：ホウエンまで　「裏」：黒幕

これはサント・アンヌ号が沈むことになっている一週間前のことである。

「サカキ様、サント・アンヌ号の件についてですが」

サカキの専属秘書である女性が電子クリップボードでスケジュールを確認している。

「船長の揺らしはすんだのか？」

「はい。ですがブラックシルフの船長の席には座らないと」

彼らが何について話しているのか、もうおわかりだろう。ルカ達の乗っていたサント・アンヌ号……その船は最初からあの場所で沈没することが決められていたのだ。

そして彼らの新船艦、ブラックシルフの初渡航もスケジュールされていた。

豪華客船の沈没、そしてその客達の救出を新造船によって行う。それは広く知れ渡っているロケット団というイメージの改善と伝播を図ってのこと。

そこまでの資金と権力を今やこのサカキという人物は持っているのだ。例え誰かが真相を知ったとしても、それを瞬時に握りつぶせるということだ。

サント・アンヌ号の現船長をこの計画に加担させるために家族の

身柄を拘束し、他の船員達の生活をも天秤にかけさせる……それがサカキのやり方。

「それと博士の実験は？」

「はい、大丈夫です。コイキングに例の電波を与えたところ、百匹中五体が凶暴化、他は死にました。赤いギャラドスのマインドコントロールはすでに終了……後は来週まで何も食させません」

サカキは一度頷き、実験の成功に笑みを浮かべる。

「それとホウエン支部にキバニアとサメハダーの調達を依頼しておきました。これで来週の下準備は全て整ったかと」

「そうだな……。それでツワブキ　ダイゴ達の行方はつかめたか？」

元チャンピオンのダイゴとカスミ達を悪役に仕立て上げ、昔サカキが先導して行っていた本当のテロリスト集団であるロケット団は全てがダイゴによって仕組まれたという既成事実をサカキはつくりあげた。彼らを葬る為に。

「いえ。彼らがカントーにいるという情報はつかめましたが、詳しい居所はつかめてはおりません」

「まあ、いい。それよりも、今日はカントーのチャンピオンと会わなければならなかったな」

カントーチャンピオン、オーキド　シゲル。そう、オーキド博士の孫にしてサトシ永遠のライバル。

「はい。午後三時にてリーグで、との予定です」

「わかった」

机の資料を見下ろしながらサカキは頷く。

「また一段階を終えるのか……。いつになったら現れる……」

サカキが自室でそう呟くのを、聞いているのか聞かぬふりなのか、そのまま黙って一礼し退室する。

遠くを見つめるサカキの瞳には何が見えているのか。

全国統一を果たさなければならなかった彼の目的とは……？

全ては彼が幼少時代に出会った一人の人物に深くかかわる……。

サカキがまだ十才と若かった時、それはサカキがハイア地方にいた頃の話。

ハイア地方、それは自然があふれているというこの国で唯一の砂漠地帯として有名である。

危険極まり無く、自然の厳しいその地方で逞しく放牧民族として暮らしている者達がいる。その地方に住む者達の名はハイアと呼ばれ、もう幾千年とハイア地方に住みついている。

そんな一族も近代化が進み、砂漠の中で最先端技術をつかっての生活を勝ち取ることとなる。陽射しの強いハイア地方で彼らが身に付けた術、それは太陽光によるエネルギー変換技術。

それと熱温風による上昇気流を用いての航空技術。それによって彼らは、砂漠地帯という過酷な土地でありながら全国で一番はじめに高層ビルの建設に成功した。

そんな地にて生まれたサカキは幼少のころから遺憾なくその才能を開花させる。建築業を営んでいた両親に恵まれ、彼は自分の趣味へとお金を使いまくることができた。

モンスターボールの改良が趣味であった彼はその時の友人と共に様々なボールの試作品を作ることに成功した。そしてそれを売りにだそうとした時に、彼とその親友はであった。

謎の女と言えば良いのだろうか？　当時では誰もしないような黒いローブ姿で全身を覆い、外へと伸びる手足に異常なまで程のアクセサリーを着用してジャラジャラと音を鳴らす人物を目の前に魔女かとも疑いたくなる。

彼女は黙ってサカキの手からボールの一つを選び、その対価として一つのボールを手渡した。それはなんの変哲もないただのモンス

ターボール。しかしその中に入っていたポケモンが問題であった。

女はサカキの耳元でこう呟いた。

「選びなさい。世界の頂点かこの国の未来か」

その時、サカキの親友も聞きとったのだろう。しかし彼らに彼女の言う言葉の真意など理解できるはずもなかった。

だがサカキはボールを受け取り、吸い込まれるようにして彼女の言葉を聞く。

「そのどちらかをお前にくれよう」

そしてその一言を最後に謎の女は霧散するようにその場から消えた。

しかし彼らは驚くことはなかった。ただただ受け取ったボールを見つめ、サカキは甲高い嗤い声をあげ、親友はただただボールを見つめる。

この時サカキ十才。

その数十年後に誰が予想できよう……彼が世界の頂点を勝ち取ることになる時が来ようとは……。

昔の記憶にふけっていたのだろう。サカキは自分の年を感じながらも、ある一本の電話をかける。

「ああ、私だ。ふっ……そう言うな」

旧友との電話か、ただの古い知り合いなのか。しかしサカキの口調は地の彼のものであり、どこか頬が緩んでいる。

「いやなに、少し保険をと思ってな。単純なことさ……。熱い杭は早いうちに打てということだ」

電話の向こう側から流れてくるのはサカキと同様に年季の入った落ち着いた声。

「お前がいたからこそのホウエン制圧だ。礼を言おう」

向こう側から聞こえてくる豪快な笑い声。それ自体でその相手の凄みと実力がうかがい知れる。

「今や我々の時代さ……。ならばやることをやらなければならない」

急に神妙になるサカキ。

「私達は行かなければならないのだよ、どこまでもな」

数秒の沈黙の後、また相手側からの豪快な笑い声が漏れてくる。

「あぁ。……あぁ、頼む。ではな」

通話を終えたサカキは、そのまま自身の椅子へとどっぷり座り込む。

シルフカンパニー本社の最上階社長室からサカキはヤマブキシティの全貌を見つめる。

夕陽が街を照らし、高層ビルの群れの窓ガラスが光を反射する。

この国のトップであり、統括者のサカキ……。彼がその碧眼をもって再度見つめるものとは、一体……？

第八章：完

第八章：ホウエンまで　「裏」：黒幕（後書き）

ルカ「私の章、終わるの……？」

うん。まあ、でも二ヶ月くらいやったんだからいいじゃない。

ルカ「次はいつ？」

えっとぉ……数ヵ月後？；；；

ルカ「待てない！」

ごめんなさい！

あ、次回の章の焦点は来週のお楽しみということで！

ルカ「はぐらかすなぁー！」

第九章：北方シンオウ　Ⅰ：ミオの大図書館（前書き）

はい、皆さまどうもです！

ひとつの補足として申し上げますが、ルカとケンの主観で進行しない話は全て三人称でお届けいたします。

それはルカとケンがどうこの世界を見て、成長し旅をしていくかのリアリティを追求する為です。そして他のパートでは客観的にどう世界が進行しているのかを描くという、はい、作者の事情がてんこもりです；；

それでは第九章をどうぞ！

第九章：北方シンオウ　Ⅰ：ミオの大図書館

「神と人」より：

【人は神を信じた。

そして神は人の前に姿を現した。

しかし神はまた姿を消す。

そして神は二度と人の前に姿を現すことはなかった。】

文献「神と人」序章より抜粋――――。

「寒い……」

「涼しいだろ？」

「寒い……」

「そうかい」

シンオウ地方、ミオシティ。ここは昔モモが捨てられた街。

しかしミオダウンタウンの存在を無視するのであれば、ここはシンオウ地方で最大の港町。常に活気と陽気に溢れている、そんな街

なのである。

季節は冬真っ盛り。それはシンオウが一番の寒さに見舞われる時期。

そんな港町で下船するのは二人の少年少女。そう、アユミとキリンである。

彼らは、ロケット団が行った作戦の被害を免れた若き実力者達。ケンが注意をひいてくれたおかげでなんとか逃げ出せることができたのだ……あの正月に起きた事件から……。

「早く、早くポケセン……」

「へいへい、お、あっちみたいだぞ」

歩みはシンオウに行く為に新しく調達したグリーンの長いコートを身に着けてはいたが、そんなものだけではシンオウの寒さはカントーやジョウトのとは比ではない。

しかしキリンはカントーで過ごしていたのと全く同じ服装で平然としている。それは彼が日頃から鍛錬しているせいでもあるのか、それとも感覚神経が鈍いだけなのか。とにかく、このままではアユミが早々に凍え死ぬことは確実だろう。

キリンが指さした方向にあるのはシンオウのポケモンセンター。余談だが、地方によって、あるいは街・町によってポケモンセンターの外観は異なる。それは、その土地特有の建設方法もあったりするが単に特徴を出す為に外観を特殊にするという理由もあったりする。

「はぁ、ふぅ～」

アユミは自身の両手に息を吐いて温める。彼女の吐息が白い靄となってシンオウの上空へと舞っていく。

「そんなに寒いか？」

「君は脳筋だからわかんないんだよ」

多少毒気のある良い方なのだろうが、しかしそんなのは全く意に介さないのがキリンなのである。

「まあ、寒くはないな」

「……」

相手をするのも億劫になったのだろう、アユミはそのままそそくさとポケモンセンターへと向かって行く。

「あ、おい待てって」

キリンはここ数日でアユミが調達した服や備品の入ったカバンを肩に担いでアユミの後ろを追いかける。むろん、キリンはスクールでも訓練というか自主トレーニングを率先してやっていた身である為に身辺のことにあまり気を使わない。

それゆえにアユミから不潔と思われてもしかたないのだろうが……。

「ふぅっ……。温かい」

ポケモンセンターの中に入ると、すぐさまに暖色系のライトに包

まれる。それはシンオウ地方の人々が好む色としても有名であり、シンオウリーグの教会旗にも用いられている。

「へぇ……。シンオウのポケセンも中々」

ポケセンとは若者達の間で主に使われている略語であり、ポケモンセンターを縮めポケセンである。他にも様々な略語があるが、それは追々追記していくとしよう。

キリンはシンオウのポケセン内の雰囲気がカントーのとはまた異質なものであることを実感していた。

「キリン……」
「ん？」
「ココア買ってきて」
「へいへい」

すぐさまアユミの鞄を足元において、自販機の方へと歩いていく。ポケギアを自販機のセンサーに当てつけて、アユミが欲しがっている温かいココアの缶を購入する。

アユミはその間にソファの上に座りながら、天井を見上げる。

「ほらよ」
「ありがと」

ココアを受け取ったアユミは早速にポケナビでシンオー地方の地図をポケセンのワイヤレスネットワークからダウンロードする。

ミオシティにはジムが存在している。つまり、彼らが目指すシン

オウリーグ制覇と打倒チャンピオンへの権利取得はこの街で第一段階として成し遂げられるということである。

マフラーと長い前髪であまり見えないアユミの表情は、しかしある資料に目を通しながら笑みを浮かべていた。

「ねえ、キリン」

「ん？」

一方のキリンはソファに腰をかけて、さっきココアと一緒に買ったポタージュで身体を温めていた。

「ここ、面白い」

ポケギア上に浮かび上がった地図を指さすアユミ……。その場所はミオシティの遙か北方……小さな孤島だった。

「ん？　ここがどうかしたか？」

アユミは速読で資料を目で駆け抜けて、首をこくりと頷かせる。

「ミオシティはシンオウでも一番の港町。昔から多くの交流があった街……。ここの図書館、一回行ってみる価値があるよ」

アユミが指さしていた孤島とは満月島。それと彼女自身がスクールで専攻していたのが神話学と呼ばれる、いわば考古学である。

そんな彼女がミオシティの誇る大図書館の存在を見過ごすわけはない。

「一度行ってみたかったんだけどね」
「いいぜ。俺は一向に構わない」

キリンは根っからの奔放主義でもあるが、放任主義ではない。面倒見が良いことを彼自身が自覚しておらず、しかしなぜか他人を放ってはおけないという心理が働いてしまうらしい。

「それよか、ここのジムリーダーって誰だ？」
「……トウガン。鋼使いみたいだね」

鋼タイプのポケモン。それはカントー地方には存在していないとされてきたタイプ。すなわち、他地方から来るトレーナーとのバトル以外ではあまりお目にかかることのないタイプとなる。

「鋼ね……。授業では結構念入りにやったよな」
「そうだね。私達がいたアサギシティのジムリーダーも鋼使いだった」
「へえ」

ずぞぉっとポタージュの最後のコーン一粒まで飲みほしたキリンがアユミの空の缶をも取ってゴミ箱へと捨てに行く。

アユミはスクールで唯一アルセウス教とスウセルア教に興味を持っていた生徒で、教師も彼女の影響によって更に奥深くまでその両教徒について知ることになったという程であった。

故に彼女がシンオウに行こうと思い至ったのが、彼女にとってアルセウス教発端の地が興味深かったからである。

神話学を専攻している彼女ならば当然といえば当然なのかもしれ

ないが。

「それじゃ、早速その大図書館に行くとするか」

「そうだね」

ポケモン達の健康状態は万全であり、トウガン対策は図書館にいる間でも練ることができるであろうと踏んだ二人のプラン。

一歩外に出ると頬がちりちりと凍らされていくのが実感できる極寒の中、アユミは更に自身を服の中に埋もれさせて、迫る寒風からキリンを盾にして図書館へと向かった。

大きな運河をまたぐ橋を渡って二人が到達したのはミオ図書館と書かれた大きな建物。大きなといっても横にではなく縦にと言った方がいいだろう。しかしそれでも普通の市立図書館の倍以上の大きさであることには変わりない。

「ひゅ〜。でかいな」

「……」

むろん寒さによってアユミが無言であるということではない。ワクワクが治まらないゆえの無言であった。

「それじゃアユミ、行くか？」

とキリンが言い終わる時にはアユミはすでに館内へと突入していた。

「……ふっ。あんなアユミなんて初めて見るな」

もちろんスクールの時から面識がある者同士である。しかし、誰がこんな状況に陥ることになると予想できただろうか。

それに彼らが互いを下の名で呼ぶのには訳がある。それは彼らのいたクラス……つまりケンやリョウがいたホームルームでは皆が皆仲良くなる為にと全員を名字ではなく名前で呼ぶことにしたからである。

それによって彼らのクラスはスクールの中でも一番和気藹々としている有名であった。あの事件が起こるまでは……。

そんなことを思い出しながらキリンはアユミのあのはしゃぎぶりに笑みを浮かべたのであろう。彼はアユミの後を追うようにして彼女の鞄を担ぎながら図書館の扉へと向かう。

「……わぁ、すごい。予想以上」

たったの数歩館内に足を踏み入れた時点でアユミは感嘆の声を上げていた。

多数の棚が所狭しと並び、その全てが一階の天井ぎりぎりまで高い。そしてその棚全てに配列された本はどこか年季を感じさせる背表紙ばかり……。

「へぇ……。俺には一生縁のないところだな」

キリンは天井高くまで伸びている棚の列を見ながら溜息混じりに漏らす。

「歴史を感じる……。住みたい」

「……おいおい、勘弁してくれ」

爛々と目を輝かせるアユミの語調は変わらないが、声質は微妙ながらに高くなっている。興奮しているのだろう。

同い年の女の子で言うならば平均的な彼女の身長ではもちろん、上の方にある棚の本には手が届かない。それは男のキリンでも同じことが言える。おおよそ一階だけで5、6メートルはあろう天井のぎりぎりまであるのだ……どうやって取れようか。

「しっかし、こんなにあったらどこになにがあるかわかんなくなるな」

「その心配はない」

アユミは図書館の隅に設置されているパネルボードの上で指を走らせて自分が求める書籍の所在を検索する。そしてお目当ての本がでてきたところで確認を押すと、どこからともなく現れたマスキッパがアユミ御所望の本をもってきた。

「あ、ありがとう……」

「マスキっ！」

「へぇ～、考えたもんだ」

つまり、マスキッパが己の鞭を使って本を探し出してもってきてくれるシステムらしい。

だが、まあとりあえず本を入手したアユミはそれを物色する。

その背表紙に書かれていたのは「神と人」という題名。

「なんかむずそうな本だな」
「……十分でおわる」

その一言と共にキリンはアユミの特技を目にすることになる。

数百ページはあろう分厚い本をアユミはパラパラと凄い勢いでめくっていく。それは一般人であれば本がどんなものか一通りチェックするような時にとる行為だが、アユミにとってはその行為こそが読書であり彼女の速読はスクールでも断トツであった。

そして彼女は一度読んだ文面を全て記憶することができる。つまり、ここの本も一度目を通すことができれば二度とここに訪れることはないのだ。

そんな彼女が読んでいる「神と人」の文献から一部を覗き込んでみよう。

「神と人」より：

【昔、宇宙の混沌から生まれた一つのタマゴがあった。

そのタマゴから生まれたもの、それが神だった。

神は己の分身を二つつくりだした。

そして新たに三つのタマゴを生んだ。

それが世界のはじまりである。】

文献「神と人」より抜粋

第九章：北方シンオウ　Ⅰ：ミオの大図書館（後書き）

はてさてはじまりました第九章！

ルカ「いぇ～い」

ケン回だと思った皆さま、すみません。違いますw

ルカ「なんか楽しそうだね？」

いえいえ、ただこの二人は書きたかったからね。やっと書ける！と思って。

ルカ「あ、そ」

なんかそっけないね？

ルカ「だって、私二人のことあまり知らないもん」

あぁ、確かに。まあ、でもいつかきっと知る日がくるよw

ルカ「え？」

さあ、それでは皆様、また来週！

第九章：北方シンオウ　ＩＩ：すべてを知る場所（前書き）

はてさて、第九章のＩＩですが今回はお勉強タイムと参りましょう！

ルカ「え～……ヤダ。却下」

ちょ、いや、そんなあっさり？　え？

ルカ「それじゃれっつご～」

ええ……？

第九章：北方シンオウ　ＩＩ：すべてを知る場所

「ここ、ここはすごいよ、キリンっ」

やけに昂揚とした声をあげているのは有無を言わさずアユミ。

彼女がこの一時間、図書館一階で読み終えた本は二十に差し掛かろうとしていた。さしずめ館員もそんな少女に興味を注がれたのだろう、一歩一歩と熟読している彼女に近づいていく。

「ふぁ～あ。そんなに面白いかねえ」

キリンはアユミが読み終えていない本の一つを手につまんで表紙を見る。それはアユミがマスキッパを数匹駆り出させて積み上げさせた本の山……何十冊とあるが、彼女の手にかかればそんなに時間がかかることはないだろう。

「始祖と進化……おっ」

キリンが題名を読み上げた途端にその本はアユミによって取りさらわれて、彼女の速読術がはじまる。

「始祖と進化」より：

【はるかかなた、ポケモンが存在するよりももっと前のこと。

この世には動物という生命体が暮らしていたという。

しかし動物達は過酷になっていく自然界において、急激なる進化

を遂げる必要性があったのだ。その急激な変化を人は知らない。なぜならそれはイニシャルインシデントよりももっともっと前のことであるからだ。

わたし達がこの変化が起きたことを知ったのはポケモンの遺伝子を解析することに成功できたからである。

そして奇しくもわたし達人間が人間としてこの世に存在しはじめたのはポケモンが存在するのと同時期なのである。

研究はまだ続く。】

文献「始祖と進化」より抜粋

そしてアユミは次の本を手に取る。

「人とポケモン」より：

【アルセウス教において人とポケモンの誕生は謎多い。

アルセウス教の伝承によればはじめ神が生まれた。そしてその神が生み出した分身二つと三つのタマゴによって世界が構築されたという。

しかしながら神は最初にポケモンをつくることはなかった。

神はポケモンの基礎となる動物を生み出したといわれている。それが神による気まぐれなのか試練なのかはわからないが、満を持して動物達はポケモンへと進化を遂げた。

それはスウセルア教によって発展した科学技術をもってしてでも、進化の理由はわからずにいた。

そして今もわからない。

我々は動物がポケモンへと進化を遂げた時期と人間が生まれた時期をシンクロニシティと呼ぶ。

この語源の由来は誰もが知っていることであろう。しかし、おかしいのはなぜ動物が一斉にポケモンに進化した時期と人間が誕生した時期が重なり、そしてなぜ同じタイミングでそうなったのかわからないのだ。

そしてアルセウス教によれば、これこそが神の望んだ世界だという。

シンクロニシティの謎……。それは神を証明するよりも難しいことなのかもしれない……。】

文献「人とポケモン」より抜粋

「しっかしお前、本当に読むの早いよな」

「気が散る」

「へいへい」

一瞬にして蹴散らされるキリンの戯言をよそにアユミは次の本へと手を伸ばす。

「それにしても……とんだ場所だぜ、ここは」

気圧されているのだろうか？　キリンは口笛を一つ吹きながら図書館をまた一望する。

「俺は二階上がってくるけど、いいか？」

キリンがアユミにそう呼び掛けるも、彼女からは無言の一点張り。それを、了解の合図だと認識したキリンは上へと続く螺旋階段を上っていく。

その階段一段一段に図書館の歴史が刻まれていくような、そんな錯覚を覚えさせるのは階段の一つ一つが違った材質と模様でつくられているからであろう。

螺旋階段の上から鳥瞰する一階の図書館もまたキリンにとっては目を見張るものがあった。それは本に興味がなくとも、本棚の配列が生み出す幾何学的空間がそう感じさせるのであろう。

「歴史を感じざるをえないねぇ」

などと感慨ぶかけにぼやきつつもキリンは二階に上がって、更なる凄みを感じる。

なぜならば、二階で陳列する本棚には一階のよりも分厚く、そして文字の濃縮されまくった辞書ともいうべき重量感を放ちながら本が並べられているからだ。

「アユミをここに連れてきたくはないな……」

などと内心思いつつも、キリンは更に上へと上がって行く。

そしてなぜなのかは知らないが、ここミオ図書館は三階が最も一般人に使われているフロアらしい。なぜそのような場所が最上階なのかは、ミオシティ七不思議の一つにも入るそうだ。

「なんか一気にお手軽なバージョンになったな」

本棚から一冊キリンが取り出してみても、その表紙には「国の歴史」などといった参考資料などが多く見られる。つまりスクールでいう上級生（主に十年生以上）が使うようなレベルのものが多い。

それすなわち脳筋なキリンでもそこそこ読めるものである。

「おや、あなたはさっき一階にいた……」

ぐるぐるメガネ……としか言いようのないものを着用しているハゲっつるのおっさんがキリンに詰め寄ってくる。

「ん、お、おぉ……」

メガネをくいくいと人差指で調整しながら近づいてくるその人物にキリンはたじたじとなる。

「いやはや、若い子達がこの図書館で自主的に勉強しにくるのは感心感心」

「は、はぁ」

この人物も館内関係者なのだろうか。脇に抱えるクリップボードはここの書物在庫のチェックでもしているのであろう……。なにご

ともデジタルだけでは済まされないということなのだろう。
「私は館長のスメラギと申します。今日はこの図書館になんの御用で？」
低姿勢なのだろうが、ぐいぐいと迫ってくるスメラギにキリンはさらにたじたじと後退していく。
「いや、俺はただの付き添いだから」
「ほぉ、さようですか。しかしお目にするところ、トレーナーを目指していらっしゃる？」
図書館の館長ともなると高い洞察力が必要とされるのか？　あっさりとキリンの風貌から彼がトレーナー志望の学生だと見抜く。
「なんで、それを……」
キリンは野生の勘か、一瞬にして目の前の男に対して警戒心を強くする。
「ほほほ、そんなに身構えますな。そうですな、あなたは見た所まだトウガンとは戦ってはいないようですな」
「トウガンって……、ここのジムリーダーか？」
スメラギはこほんと一つ咳き込み、頷く。
「その通り、鋼タイプ使いのトウガン。あやつは中々に手強い男ですぞ？」
キリンは不敵な笑みを浮かべると、親指で鼻をはじくような仕草

を取る。
「へっ、上等だな。バトルは手強い方が俺には丁度良い」
そんな勇猛果敢なキリンを見定めるようにスメラギも不敵な笑みを浮かべる。
「ほほほ、威勢良きかな良きかな。しかし、今のジムでバッジを取ることは困難極まりますぞ？」
そのスメラギの言葉にキリンは眉をしかめる。
「どういうことだ？」
「おや、ご存知ない？　新総督となった今、ジムリーダー達は挑戦者のレベルに合わせてのバトルとバッジ授与をしなくなったのですよ」
スメラギが言っているのはサカキがこの国のトップとなってからの話。つまり、以前までのバトルジムは挑戦者のレベルによってジムリーダーがバトルをし、トレーナーとしての素質を見定めるものであった。しかし今は違う……
「つまり、ジムリーダー達は全員が本気でバトルするってことか……？」
「ご明察」
キリンはその時何を感じたのだろうか。恐らく自身の中の血液が昂揚感によって沸騰するような錯覚に陥ったのだろう。そう、キリンは悦んでいた。

「そうか……。そうか」

スメラギはそんなキリンの本質を見抜いているのだろう、彼に近づいて一つの本を差し出してそのまま歩き去って行く。

「あなた達が世界を変えてくれることを願っていますぞ？」

キリンは咄嗟に受け取った本を見つめ、スメラギの一言に背後を振り向くがそこにスメラギの姿はどこにもなかった。

キリンが手に持った本は「真実・反真実」と書かれた本。ぱらぱらとページをめくるも、キリンにとっては奇怪な文字の羅列としか表現できなかった。いや、わかりやすくいえば難しすぎて理解できないのだ。

「真実・反真実」より：

【みなさんは真実とはなんだと思いますか？

真実とは嘘ではない本当のこと。勿論その通りです。しかし、何をもって本当だと思うのでしょうか？

周りが、それが本当だと言っているから？　辞書にそう書いてあるから？　当然のことであるから？　しかしそれはどれをとっても一般論に過ぎません。

もし仮にピカチュウの皮膚の色が灰色だと言ったら、みなさんがそれを嘘だ、真実ではないと言うでしょう。しかし、もし色盲の人がいたり、ピカチュウは灰色の皮膚を持っていると言い続けられてきた人がいましょう……。その人にとっての真実とはピカチュウが

灰色の皮膚を持っているということなのです。

嘘ではないけれど本当でもない真実。いえ、言いかえれば嘘でも本当でもある真実……それが反真実です。

それは真実と常に存在するものであり、誰にも反論することが不可能な絶対真理なのです。

わかりますか？　つまり今記述されていることも真実であり、反真実なのです。

あなたがこれから世界を新たな角度から体験することになるでしょう。それを忘れてはいけない。

なぜならあなた自身も真実でありながらも反真実なのですから。】

文献「真実と反真実」より抜粋

キリンはその本を担いで一階へと下りていく。

「俺には難しすぎるな」

そう漏らしながらアユミの姿を螺旋階段の上から見かける。

彼女はまだ一階にいて、更なる本の山が積み重なっている。最初はまばらにしかなかった視線が今やアユミに集中している。それもそのはず……凡人にとってアユミが読了してしまった本はせめて読み続けても一カ月はかかる程の量に達しているのだから。

「アユミ、ほらよ」
「なに？　邪魔しないでって言っ――――」
キリンが差し出した本をアユミは振り払おうとしたが、その題名を見て息をのみ込む。
「キリン、これどうしたんだい？！」
珍しく声を荒げる彼女にキリンは驚きつつも、ここの館長だという話をして、そしてなぜかを聞く。
「どうしアユミ？」
「……パパ」
彼女の漏らした言葉を即座にキリンは理解できなかった。
「……え？」

第九章：北方シンオウ　ＩＩ：すべてを知る場所（後書き）

はてさて第九章のＩＩも終わり、アユミとキリンの二人なのですが……やっぱり良いですねｗ

ルカ「なにが？」

いや～アユミはかわいいし。

ルカ「……変態」

えぇ？！

ルカ「……とりあえず、次回を期待せよ！」

誰……？

ルカ「私達の立場を交換してみようかなって」

……やめようか。

ルカ「うん……」

第九章：北方シンオウ　ＩＩＩ：ミオジムでの対決（前書き）

はてさて第九章も？まで来ましたね。

ルカ「なんか最近そんな言い方多いよね」

そうかい？

まあ、今回はお待たせしましたメディター初のジム戦です。

ルカ「これ、もうすぐ一周年なのに……」

……；；

どうぞ！

第九章：北方シンオウ　ＩＩＩ：ミオジムでの対決

「アユミ？　大丈夫か？」

キリンはアユミが途端に自分の渡した本を凝視したまま硬直したのを不思議に思い声をかける。

「……ううん、なんでもない。それより、これはもらってもいいですか？」

アユミは近場にいた館員に尋ねると、館員は戸惑いながらその本を観察する。

「失礼します」

本を受け取り、館員は背表紙の中や本をくまなく調べる。

「この本はスメラギ館長から受理されたものでしょうか？」

館員がキリンに尋ね、キリンは「ああ」と答える。

「でしたら問題ございません。またのご利用をお待ちしております」

そう言いながら館員は腰を丁寧に折る。

「キリン、行くよ」

「え？　おい、もういいのかよ？」

アユミはそそくさとその本を手に図書館から出ていく。

キリンはアユミが積み上げた大量の本を一瞥しながらもアユミに急いでついていく。まあ放置していたとしても館員が後片付けをしてくれるのだろうが。

「おい、アユミ待てって」

キリンはアユミに追い付いて彼女の袖を掴む。

するとアユミは顔をうつ伏せのままに立ち止まる。

「この本……きっと私のパパが書いたものだと思う」

「……なに？」

アユミが握った本には著者カンバル　ホウセイと書かれていた。そういえばアユミの名字はカンバルであったと思いだしながら。

「今はまだ詳しいことは言えないけど……キリン」

「ん？」

キリンを見上げながらアユミは続ける。

辺りは粉雪がぱらぱらと風に吹かれることなく降っている。アユミがうずくまっている赤いマフラーには粉雪がそのふわふわの毛糸に乗っかって行く。

「今日、ジム戦をするんだろう？」

「……ああ。さっき会ったスメラギっていう爺さんも言ってたが、いままでとはジム戦のあれが違うみたいだ」

アユミはメガネの奥で何か逡巡して、こくりと頷く。
「そう……。それは行ってみないとわからないか……」
「どちらにしろ、ジムリーダーは本気らしい」
二人の衣服に降り積もって行く雪を気にも留めず、先ほどとは違って二人は風の治まった街内をゆっくりと歩きながらこの街のジムへと向かう。
ここミオシティのミオジムリーダートウガン。鋼使いの屈強なトレーナーらしく、しかも趣味は炭鉱発掘という一風変わったジムリーダーらしい。どうやら同じ地方の違う街のジムリーダーがトウガンの息子だとかという情報もある。
「鋼使いか……。ちときついな」
「キリンのポケモンだとね」
アユミとキリンは同じクラスだけあってお互いの手持ちを把握している。現に二人でバトルを何回にもわたって行ったことがある。というよりケンとリョウがいた彼らのクラスは頻繁にクラス内バトルトーナメントと銘打った自習を良く行っていた。
というわけもあり、トキワシティがリョウ率いる特別部隊によって襲われた時に被害をこうむったのは概ね彼らのクラスメイトがほとんどであった。
「アユミも挑戦するのか？」
「ううん、キリン君だけだ。私は次のジム戦にする……」
「それでいいのか？」

確かリーグに挑戦するには一人が八つのバッジを所持していた時のみだと、とキリンが言うがまさにその通りでありニュアンスの捉え方が問題であった。

つまり、一人が八つのバッジを持っていれば良いということだ。現に今までもトレーナー間のバトルでお金をレートにせず互いに持っているバッジをレートにしたバトルが行われたことがあった。それは非公式ではあるが黙認されており、リーグ挑戦者がどんな形であれバッジ八つが出場条件となるのである。

「へぇ……。つまりは頂点取るトレーナーだったら敗北は無いってことか」

「そういうこと。つまり最終的にリーグ挑戦は誰がするかは今のところ問題無い」

「確実に勝てばいいってことだな」

キリンは俄然やる気をあらわにして気を引き締める。

そう、彼らは丁度今ミオジムに到着したのだから。

ジム戦とは常に挑戦者がいるとは限らない。それはトレーナー数が多いともジム間の距離がかなりあるのとリーグ大会を見てみる通りジムバッジを八つ取得できるトレーナーは限られてくるというところだろう。

「そんじゃ行くか」

「ええ」

ジムの扉前で合成音と共に聞こえてきたのは、

「挑戦者（チャレンジャー）ですか？」

という無機質な声。

「はい」

とキリンが答えると機械はトレーナーカードの承認を求めキリンは一瞬手が止まる。

トレーナーカードの認証は最近取り入れられたシステムであり、トレーナーが一体どういった順路でジムをめぐったのかなどのデータを協会が管理する為でありそれにより更なるジムやリーグの仕組みを向上させていくとのもくろみが発端だった。

しかし今となってはそれも信憑性に欠け、彼ら二人は逃亡者である。これをしてしまえば捕まるのではないかという危機感がキリンを襲ったのだ。

「キリン、構わないわ」

「……わかった」

キリンはポケギアを機械の前にかざして認証を済ませる。

「承認終了しました。どうぞ、挑戦者（チャレンジャー）奥へお進みください」

重たそうな音と共に扉は開き、二人は揃って中へと入って行く。

彼らがジムを訪れるのはハナダジム以来であり、ハナダジムは巨大なプールのようなフィールドが存在していたがここミオジムは中が炭坑のような、そんな印象を醸し出していた。

巨大な黒光りする岩があちこちに固定され、狭い通路の上下左右には木材でできた板が打ちこめられており、ぼんやりとしたランプの光が点滅する。

「雰囲気あるな」
「悪趣味なだけ」

そう言い張るアユミだが、こういった閉鎖空間は嫌いなのだろう……無意識のうちにキリンの着るジャケットの裾を握っていた。

まあそんなことは気にもとめないキリンなのであるが……。

「良く来たな若きチャレンジャーよ！」

長い炭坑を抜けて出てきた場所は、まるで炭鉱をモチーフにしたような全貌でありそのフィールド中心で作業服に身を包んだ男がそう叫ぶ。

「あれがここのジムリーダートウガンか」
「そうみたいだね」

二人の前に威風堂々と立ち構えるトウガンをキリンは見据える。

「挑戦者同伴の方はこちらの観戦席にどうぞ」

審判を務めるであろう青年にそう先導されてアユミはキリンと別れる。

「我が名はトウガン。ここミオジムのジムリーダーだ」

「俺はキリン。ハナダシティ出身だ」

実際キリンもアユミも孤児であるため、自分達の出身地はわからない。だが、彼らはハナダシティで育った……それだけで十分なのだ。

「新しくなったジムのルールはきいておるか？」

トウガンのこの一言にキリンは首を横にふる。

「よかろう、ならば説明しよう。新しい総督の下、ジム戦の挑戦権利は全てチャレンジャーにゆだねられた。つまり、挑戦者の望むバトルを我々ジムリーダーは受けるということだ！」

新しいルール。それはつまりキリンの望むバトル形式でジムリーダーとバッジを競うということにつながる。

「なるほど……。ならＯｎｅｏｎＯｎｅだ」

ワンオンワン、つまりは一対一のバトル形式である。

それは互いが同時にポケモンを繰り出してバトルするといった典型的でありながらも、運と本当の実力を必要とさせるバトル方式。

「よかろう。その自信、果たして我の鋼を破るか？」

そしてワンオンワンは本来ならば相当の実力者同士が行うバトル形式であることは言わずもながである。

実力が拮抗しているからこそ行われるこのバトルは読み合いでも

あるが、互いの最強同士を対決させることも多いからだ。

「破ってやるさ。その為にここにいる」

キリンは懐からボールを取り出して真ん中のボタンを押す。それによりピンポン玉級のモンスターボールは膨れ上がる。

「ならばその挑戦受けて立とう！」

トウガンのその合図によって開戦の火蓋がきっておろされる。

「それではこれよりミオジムリーダートウガン対ハナダシティのキリンのジム戦を行います！　ルールはＯｎｅｏｎＯｎｅ、はじめ！」

キリンとトウガンがボールを宙へと放るタイミングは同じ。

眩い閃光と共に現れるポケモンはキリンがサイドン。トウガン、トリデプス。

「ほぉ……」

トウガンがにんまりとその無精髭だらけの顔で笑みをつくる。

これはジムリーダーの特権かもしれない。なにしろキリンにとって鋼タイプとの対戦……そしてシンオウ地方のポケモンとは本当に未知なる存在だからだ。

しかしキリンとて地面・岩タイプのサイドンにとって鋼タイプが不利だということもわかっていた。しかしそれ以上に鋼が地面に弱いということもわかっていた。

つまりこの勝負……トウガンが圧倒的強さを持っていない限り一発勝負は必須だった。

「攻撃力の高いサイドンと我の防御力高きトリデプス……。いいぞ、誰が頂点か決めようぞ」

トウガンは何を考えているのか正直キリンにはどうでもよかった。なぜなら彼のバトルスタイルは常に誰相手でも決まっているからだ。

「サイドン、【ストーンエッジ】」

「トリデプス、【鉄壁】」

サイドンは自分の短所を、逆にトリデプスは自身の長所を伸ばす補助技をかける。

しかし互いに出した指示は同じタイミング。それはいかに二人が似ていながらも、対極的なスタイルを持っているかを表していた。

「サイドン、近づけ」

キリンは次に技を指示することなく、トリデプスに近寄ることを命じる。その指示がなんなのかわからないトウガンは眉をしかめるが、先手を取りに行く。

「トリデプス、【ラスターカノン】」

「がぁごおぉ！」

のっそりとした体型でありながらもその巨大な顔からいかに防御力が高いかもキリンには予測できた。そして見るからに特殊攻撃の

技にキリンは舌打ちを一つする。

そう、なぜならサイドンは特殊防御が低い。いくら物理防御が高くとも、こればかりはどうしようもないのだ。

「サイドン、【ロックブラスト】！」

相手の出方を窺うつもりだったが、対応が早すぎた。つまりそれがジムリーダーとしての力量を顕著に表していることをキリンは自覚する。

サイドンがフィールドの岩盤をその剛腕で引き剥がして投げ飛ばし、トリデプスの白銀球の攻撃と衝突する。

相殺されるかと思いきや、サイドンの咄嗟に繰り出した攻撃は【ラスターカノン】の勢いを多少軽減させるだけに至り攻撃をもろにくらう。

「ドンっ！？」

サイドンは苦悶な表情で【ラスターカノン】を受け、体勢を大きく崩す。

そしてそれを見逃すジムリーダーではない。

「トリデプス、【アイアンヘッド】！」

咆哮と共に砂塵を巻き上げて前進していくトリデプス。

キリンとサイドンが見て取ったのは自分達目掛けて突進してくる

トリデプスの、その驚異的なスピードであった。

第九章：北方シンオウ　ＩＩＩ：ミオジムでの対決（後書き）

はてなルカさん

ルカ「なんでっしゃろ」

最近うれしいことがあったんだよ。

ルカ「ほぉほぉ」

なんと大学受かっちゃったよ。

ルカ「おぉ……」

いやぁ、よかったよかった

第九章：北方シンオウ　ＩＶ：ミオジムでの決着（前書き）

さてジム戦も今回で決着。

ルカ「おおっ」

サイドン対トリデプス、さあさあどうなることやら。

ルカ「なんか投げやりだね」

いやいや、そんなことないって。ではどうぞ

第九章：北方シンオウ　ＩＶ：ミオジムでの決着

「サイドン、受け止めろぉ！」

キリンの咆哮に近い指示にサイドンは両腕を交差させて身構える。

「サイドォン！」
「ガァオォ！」

体が重量級同士の直接衝突。トリデプスが技を使用している分、トリデプスに分があるかもしれない。しかしながらサイドンはトリデプスの巨大な顔をみっちりと掴まえて踏ん張っていた。

「トリデプス、倒せ！」

叫び声と共にトリデプスはサイドンの懐へとその頭部をめり込ませていく。ズザ、ズサササとサイドンの両足がフィールドの土を押しのけていく。

四肢を使っての踏ん張り方は二足歩行となったサイドンにとっては難敵なのかもしれない……。だが彼も一度はサイホーンであった身、二足歩行へと進化を遂げた利便性を見出したからこそ今の自分があるのである。

「【踏みつけ】ろ！！」

キリンが出した指示により、サイドンは踏ん張っていた右前脚を上げる。当然そのせいでサイドンの体は大きく後ろへと傾くも、押し切られる前にサイドンの足はトリデプスの左前脚をふんづけるこ

とに成功する。

「根競べではどうやら勝負がつきそうにもないな。ならばトリデプス【メタルバースト】！」

トウガンの発した技名にキリンは反応することができない。

【メタルバースト】？

それがキリン、もといサイドンにとっても初耳なのであった。

最後に受けた攻撃技を強めに跳ね返すという鋼タイプバージョンのカウンター・ミラーコートといったこの技は相手の体力を確実に削って行くのに最適な技といえよう。

サイドンの放った【踏みつけ】のダメージがトリデプスによって上乗せさせられたダメージがサイドンに直撃する。

「ドォオン！」

「ちっ、サイドン！！」

トリデプスは身軽なステップで後退し、キリンは歯噛みする。

『やっぱりアユミに頼んで事前調査ってのはやっておくもんだな……。でもよ、はじめてだから面白い、わからないから面白いんだ！』

サイドンが辛くも立ちあがり、構える。

「サイドン、【ストーンエッジ】！」

「ふん、【鉄壁】！」

サイドンがフィールドの岩盤をその剛腕ですくい上げるかのようにして剥ぐ。そしてその鋭利に尖った部分を前にしてトリデプスへと投げつける。

対するトリデプスも体の防御力を上げる技を駆使するが、サイドンの【ストーンエッジ】がトリデプスの右肩を掠める。しかしタイプダメージ的にすれば微々たるもの……。

「トリデプス【突進】！」

またもや命令される近接攻撃。つまり、トウガンは【メタルバースト】を狙っているのだろうか？

「サイドン、かますぞ！」
「サァイドン！」

キリンとサイドンの意気投合を見てとったトウガンは片眉をひそめて、トリデプスに追加指示を出す。

「トリデプス、【原始の力】だ」

猪突猛進といった風に迫りくるトリデプスの咆哮と共にフィールドの岩がトリデプスの周りを囲み、そしてサイドンへ目掛けて飛んでいく。

構図的には【原始の力】がサイドンにとって目くらましとなるような形だが、キリンとサイドンはそんなもの気にもとめなかった。

「サイドン、【角ドリル】！」

ギュイイイイイン！　という工事器具の織りなす独特な音がサイドンの頭部から発せられる。

飛来してくる自分の顔程の大きさの岩をサイドンはその角で砕け散らし、姿勢を低くしぎりぎりまで両手を地面につけないようにする。

それはトリデプスの猛進を正面から受けて立つかのように。

そもそもに【角ドリル】といった一撃必殺は命中率がすこぶる悪い上に相手が自分より格段だった場合必ずといっていいほどに外れる。

その理由は一撃必殺というだけあり隙が多いのだ。その為自分より実力が上の者には安易に避けられてしまう。それと相手が素早さが早かった場合も勿論相手が油断していない時以外は簡単に外れてしまう。

そんな技をあえて選んだキリンは、サイドンの敵が目前まで【突進】してくるからだろう。いかにトリデプスがサイドンよりレベルが高くとも、素早さがあっても向こうからこちらに一直線でくるのならば待ち構えていれば良い。

「そんな簡単に当てられると思うか？」

しかしトウガンとてバカではない。それにキリンに比べれば百戦錬磨のつわものである……彼の意図などばればれだろう。

それにトウガンの脳裏にひっかっかっていたのは目の前の少年が

まるでシンオウのポケモン達に詳しくないということだ。ましてやトリデプスの特性は頑丈。一撃必殺の技をくらっても持ちこたえられるのだ。

「当てる？　そんな気さらさらねえさ」

「っ？」

トリデプスはすでにサイドンの【角ドリル】を見切っており、それを避けてなおサイドンに攻撃を決められる自信はあった。だが、自分がサイドンに接触する直前でサイドンの体が自分の右側へと傾くのを見てとった。

サイドンは己の回転する角を器用にトリデプスの頭部側面へと当てて、その勢いと共にトリデプスの【突進】をかわしたのだ。いや、いなした……。

体勢を低くしただけでは機敏な右方向への傾倒はできないだろう、だがサイドンには両手があった。地面すれすれで構えていた両手でフィールドに触れて大幅な体勢の変更を可能にしたのだ。

そして角の回転する方向と逆の方向へと体勢を傾け、トリデプスの頑丈な顔面に沿わせることによって可憐な閃きを可能とさせた。それは重量級のタンクがまるで表面に油を塗ったであろうと推定しなければ正面衝突をしたはずなのにするりと抜ける感じにまったく同じであった。

「サイドン、【アームハンマー】！！」

予想だにしなかったであろう。それはジムリーダーを務めてきたトウガンにとっても同じだった。鋼タイプが不利になるタイプでバ

トルを挑んでくる者などそうそうにない、そして【角ドリル】といった一撃必殺技をジムリーダー戦にて用いる挑戦者などいるものではないからだ。

しかし今彼は現実として直面している。防御こそ最大の攻撃……。それは鍛え抜かれ、どんな技でも防ぐ鋼鉄の鎧をもってすれば触れるだけで相手が吹き飛ぶという理念を掲げていたこの男にはじめてでも言える焦燥感を覚えさせた。

トリデプス自身も一瞬だろうが戸惑っているだろう。まさかあんな風に自分の技がくぐりぬけられるとは。それもそのはず……なぜなら最初の一撃【アイアンヘッド】の時、サイドンは真正面から自分の攻撃を受け止めたのだから。

だが今やサイドンはトリデプスの無防備な背中を前に、両腕を天高く掲げそれを一気に振り下ろしている。

格闘技において高威力保持する【アームハンマー】。しかも両腕を用いての使用。

勝負は決する。

そうキリンとサイドンは思いこみ、わずかながらその可能性をトウガンも感じていた。だが、トリデプスは違う。

「いけぇーーー！！」

キリンの咆哮がトリデプスの耳に届き、自分の頭上で呻りを上げるサイドンと【アームハンマー】の動作もしかと聞こえる。

トウガンというトレーナーにであってからの長い年月。トリデプスは何度も負け、何度も勝ってきた。そしてこういった危機的状況に陥った場合、何を為さねばならぬのかわかっていたのだ。これは自分の失態によるものでありトウガンの失敗ではない、それで勝負が決するのは自害に値するとでも言わんばかりに。

トリデプスは咄嗟に自分の体を引き締めて目を瞑る。それと同時に凄まじい衝撃がトリデプスの背後を直撃。豪快な音と共にトリデプスの体はフィールドへと叩きつけられ、めり込む。

巻き上がるは砂塵、そして砂埃。フィールドを伝わってくる【アームハンマー】の衝撃音がびりびりとキリンとトウガンの足元をしびらせる。

勝利を確信したとはキリンも思ってはいない。だが、この技が決まったことで多少なりとの油断が生まれたことは否定できない。

そう、まだ勝負は決してはいなかった。

のそりと立ちあがるのはトリデプス。その足腰はしっかりとしたものではなかったが明らかに自分の四肢で体を持ち上げていた。

「っ！　やばい、逃げろサイドン！」

キリンのその咄嗟の判断が功を奏した。奏したとしか言いようがないのだ。

「トリデプス、【メタルバースト】！！」

トウガンの雄叫びともいえる指示に、まるでフィールドが軽く震

動したような錯覚をキリンは覚えた。

そしてそれは試合を見ていたアユミも同じだろう。男の戦い……まさにそれは女のアユミからみてそうであった。

サイドンはキリンの指示によりトリデプスと距離を取るために地中へと逃げた。それしかなかったのだ。なぜなら【アームハンマー】の為に素早さは落ちている……。そして先ほどの【原始の力】の為にトリデプスの能力はわずかながらにも上がっているのだ。

トリデプスの鈍くも巨大な咆哮と共に【メタルバースト】がフィールドへと叩きつけられる。サイドンの攻撃を喰らう直前に自分の判断で【堪える】を使ったトリデプスと、それを信じ待っていたトウガンの絆……。これこそまさに彼らがジムリーダーという役職に就いている云われでもあろう。

フィールドを激動させる衝撃は地中にいるサイドンに直撃する。さきほどの【アームハンマー】を凌駕するインパクトである。堪え切れずサイドンが地中から飛び出し、そしてトリデプスと対面する。

「サイドン、いけるか？」
「トリデプス、いくぞ」

トウガンは危惧していた。無知とは言えないが、ジム戦へとノープランで来ていることは明らか。そんな少年に後れを取るわけがない……。だが少年のバトルスタイルは完全なるまでにこのバトルに適応してきている。いや、もう適応している。ここでねじ伏せなければならない。

「トリデプス、【アイアンヘッド】！」

「サイドン、【メガホーン】！」

互いに掠めでもすれば試合が決するといった状況。お互いの全力を振り絞り、サイドンとトリデプスが対峙する。

だがこの状況下において有利なのは変わらずとしてトウガン側であった。お互いの能力を持ってすれば何の指示もなくともトリデプスはサイドンの攻撃を見切ることができる。トウガンはそう信じていた。

そしてキリンは最後にサイドンとアイコンタクトを済ませ、軽くうなずいた。

両者一斉に駆けだし、最後の一撃を相手に喰らわせんとする。互いが歩を進める度にフィールドに小さな振動がわき上がる。

そして二匹が交差するその瞬間、サイドンの【メガホーン】がトリデプスの身のこなしによって避けられる。その角を突き出したモーションによって大きく前へと倒れるサイドンの横っ腹にトリデプスの【アイアンヘッド】が決まる……。

誰もが決まったと思った。

しかし、トリデプスはサイドンの腹部を捉えることなく地面へと叩きつけられる。

審判のコールと共にキリンの勝利が宣言される。

トウガンは目を見開きながらも、自分達を打ち下した少年の方を見る。

倒れたトリデプスを見下ろすようにしてサイドンは自分が放った自慢の尻尾を大きくうねらせてフィールドへと叩きつける。

ミオシティのミオジムを、キリンは制したのだった。

第九章：北方シンオウ　ＩＶ：ミオジムでの決着（後書き）

なんだか書きあげれたので書いちゃいましたｗ

やっぱりバトルは長くなりますね、どうしてもｗ　でも楽しいから良いです。というかもっと書きたい！！

ルカ「はいはい。それより設定資料集は？」

鋭意製作中です；；　運が良かったら今夜にでもあげますので。

ルカ「これが実家ぱわー？」

恐らくｗ

第九章：北方シンオウ　「裏」：降るは白銀の雪（前書き）

さてさて猛スピードで筆が進む。というか元のペースに戻れるというのがうれしい自分な今日この頃。

ルカ「・・・受験生？」

・・・ごほごほ。さてそれでは第九章も終わり・・・かな？

ちょっとこの後もう一話挟むかどうか検討中なので。

ルカ「いろいろ展開しま～す」

いぇい

第九章：北方シンオウ　「裏」：降るは白銀の雪

まさか、まさかな……。自分がおもや負けるとは……。

そう思いながらトウガンは自分に勝利した少年の方を見る。

息子であるヒョウタとのバトルで負けた時も思っていたように、自分達の世代では通用しないのかもしれない。それこそが若さの強さなのかもしれないな。

そう感じつつトウガンはキリンの方へと歩み寄って行く。

目を回して倒れているトリデプスの巨躯をぽんぽんと叩いて善戦の苦労をいたわってやりながらトウガンはキリンへと言葉を向ける。

「おめでとう少年。君は我々に勝利した」

キリンは観客席にいたアユミへと腕を大きく振っていたのだがトウガンの呼びかけによりすぐさま姿勢を正す。

「……はは、ありがとうございます」

キリンは勝利の余韻に浸りながらもトウガンを間近で見ることにより圧倒されてしまう。身長差こそそんなに無いとはいえ、ジムリーダーたる人物である……伊達ではないことが良く分かった。

「これがミオジム制覇の証、マインバッジだ」

キリンに手渡されるのはつるはしと鉱石のようなものが特徴的な

バッジであった。

「マインバッジは強力(ごうりき)の証。ポケモンのみならず君自身もだ」

トウガンがキリンの肩にそのたくましい手を載せる。

「新しいルールではリーグ制覇は難しいかもしれないが、がんばってくれ」

そう言い渡すトウガンの言葉にキリンは力強くうなずいて、笑みを浮かべる。

「もとよりそのつもりですから」

キリンは側にいるサイドンの左腕をさすってやりながらねぎらう。

「それじゃ、ジムリーダーありがとうございました」

キリンは深々とお辞儀する。

「うむ。またバトルしようではないか」

「次も勝ちますから」

キリンのその真正面な瞳をトウガンは豪快に笑ってふりかえる。

『楽しみにしておるよ』

トウガンはそう思いながらのびているトリデプスの傍で腰を下ろす。

キリンとトウガンが会話をしている間に観客席から下りてきたアユミはすでにキリンから渡された父親の本を読み終えていた。

彼女はキリンの試合中読書に明け暮れていたのだ。しかしながらにバトルの全容は把握していた。

「お疲れキリン」

「おうよ」

サイドンをボールにしまってキリンはアユミの一言に対して自分の腕を叩いて見せる。

「それじゃ、はい」

そして手を伸ばすアユミにキリンはわかってはいても渋々とマインバッジを渡す。

「キリンじゃ信用できないからね」

「へいへい」

二人はそんな会話をしながらミオジムを後にする。次に向かう目的地を話し合いながら。

そんな彼らを見送ったトウガンはトリデプスに優しく話しかける。

「修行をせねばならんかもな」
「ドォプス」

目が覚めたのか、トリデプスはトウガンに首肯する。さすがはトウガンのポケモンというだけあり、回復は早い。

そんな黄昏にも近い雰囲気を醸すトウガン達に水を差すようにして声がかかる。

「ジムリーダー」

トウガンがふりかえるとそこには審判が立っていた。

「おう、お仕事御苦労。どうした」
「いえ、久々に見ましたよ。あんなに強いトレーナーを」

審判は両手に持った赤と緑の旗を合わせて片手に持ちかえる。

「そうだな。しかしこれで君はお役御免だろう？　リーグが発布した新しいルールによって私は解任だからな」

サカキ総督の下、新しく発布されたジムにおける新ルール。それはジムリーダー達はジムバッジの授与が年に一回と定められ、もしバッジを授与する事態になった場合は即解任といったものであった。

ジムリーダー達はチャレンジャーの挑戦を拒否することはできない為、これにより職を維持する為にはジムリーダー達は本気でジム戦を行う必要がある。そんなお触れ書きがなされていた。

「ええ、ではリーグ派遣審判の私が手続きをいたします」

「おう、よろしく頼む」

審判は旗をフィールド上に一旦おいてボールを取り出した。

それはトウガンが怪訝を感じるよりも早く行われ、一匹のカイリキーが現れる。

「っなにを」

「カイリキー【クロスチョップ】」

審判の一言でカイリキーは依然として床に伏しているトリデプスに【クロスチョップ】の連打を始める。

「ドォォォプス！！」

「おい、やめろ！　なにをする！」

トウガンが審判に制止するよう呼び掛けるも審判は邪悪そうな笑みを浮かべて何もしようとしない。

「ミオジムリーダートウガン。あなたはジム戦において敗北を記しました。よって今より解任作業に入ります」

審判が新たに取りだしたボールからマスキッパとルカリオが現れる。

「どういうことだ！」

混乱が怒りへ、戸惑いが焦りへと変換されトウガンは追いつめられる。

「解任ですよ元ジムリーダー。つまりあなたは今ここで用済みとなった訳です。それはつまりいらない処分される者ということですよ」

一歩一歩近づいてくる審判に向けてトウガンが違うボールを取り出そうとするも、それはマスキッパの【蔓の鞭】によって手が弾かれる。

「ぐっ！？」

両手を広げながら審判は、いや男は不敵な笑みを浮かべる。

「退屈してました。この時が来るまでは」

それは今までのトウガンのジム戦の審判を務め続けていた男の本音なのだろう。

「早くあなたを殺したくて殺したくて……。まあ今はあの少年に感謝していますよ」

狂喜と言えるであろう笑い声を上げる男をトウガンは異物を見るような目で見る。

「あなた個人に恨みはありませんよ、むしろ良くしてもらいました。ですがね、私達の計画に携わり支障をきたしたあなたはもう用済みなのです。最後に何か言い残すことはありますか？」

男はまるで時を見計らっていたかのように、ちらっとトリデプスの方へと視線を向けてトウガンもそれを追う。

そこにはぐてんと横たわったトリデプスの姿とその巨体を四つの

腕で持ち上げているカイリキーの姿であった。

男が視線で合図を送ると、カイリキーは空中へとジャンプしてトリデプスの頭から地面へと【地球投げ】で叩きつける。

「トリデプス！！」

「良き遺言です。マスキッパ【パワーウィップ】、ルカリオ【ボーンラッシュ】」

トウガンがトリデプスのほうへと駆け寄ろうとした時、彼の視界に映ったのは世界の反転。それが男のポケモン達の攻撃によるものだと理解する前に、彼の意識は遠くの彼方へと飛び、消えた。

フィールドに横たわる、数分前までこのジムの支配者だったものを男は雄たけびを上げながら嗤う。

「やはり良いものですね、人が死ぬという光景は……くくく。くはははは！」

悦びを隠しきれないのだろう、男は前屈しながらも奇声を発する。

「……はぁはぁはぁ。お前達はジムの見張りをしておけ」

幾分落ち着き男はポケモン達にそう指示を出した後、ある携帯端末を取り出す。それは配給されたものなのだろう、全体的に黒いボディに赤いRの字が浮かんでいる。

「こちらミオシティミオジムより、こちらミオシティミオジムより」

男がそう端末に呼び掛けて、数秒後に向こうから返事が返ってく

る。

「ミオシティミオジムより受理。報告どうぞ」
「ミオジムリーダートウガン、ロスト。よってジムは閉鎖、確認後実行求む」

事務的なやりとり、そして向こう側ではしばらくの静寂。

「確認しました。それではこれより五分後にミオジムを完全封鎖いたします。任務お疲れさまでした」
「了解」

男は端末をポケットに戻してジムの外まで歩いていく。

ジムというのは一種の特殊施設であり、災害時には街の人間を収容するスペースと蓄えを保持している。つまり内部から完全に外界をシャットアウトすることも可能なのだ。

いまや全てにおけるシステムがサカキによって牛耳られている。つまり彼らがなにを行おうとしているのかはわからないが、このジムを完全封鎖することは容易いのだ。

自分の見張りに出したポケモン達を回収し、男はジム前でたむろっていたチャレンジャーの少年少女にこう告げる。

「ただいまをもちまして、ミオジムは来年のリーグ開催年まで完全封鎖されることになりました！」

元の審判顔になって男は続ける。その間にも他者からは不満の声が上がるも、そんなのはお構いなしだった。

「なお、ミオジムリーダーのトウガンは本日をもってリーグ協会へと勤務。彼はすでに協会の方へと一足先に事務手続きを行う為向かいました。皆さまにはご迷惑をおかけいたしますが、まだ残っているシンオウの七つのジムいずれかに挑戦してください」

まるでこうなったらこう言うのだと訓練されてきたように、男は淡々と必要最低限のことだけを述べてお辞儀する。

周りからは不満の声は上がるだろうが、協会の公式発表ともいえるのだ。従う以外どうすることもできない。

野次馬が去り、五分後のジムのシャッターが下りるのを確認した男は寒い冬空の下で白く息を吐く。

そしてゆっくりと歩き出す。

その姿はまるで何事もなかったかのような、普通な人の歩みそのものであった。

場所変わって、

ピルルルルル
「もしもし？」
自身のポケギアを取り出して耳にあてる少年。
「シロナだけど」
その向こう側から聞こえてくるのは正真正銘シンオウの現チャンピオンであるシロナの声であった。
「おー、シロナさん。どげした？」
「はぁ……。まったくあなたはどこをほっつき歩いているの？！」
明らかに剣幕をたてているのだが、少年はだるそうに答える。
「そげなもんきまっとーが。テストだが、テスト」
少年はポケギアを片手に今自分のいる状況にもう一度目を配らせる。
そこには十数人の人間とそれ相応のポケモン達が地面にひれ伏していた。いや、倒されていた。
「もしかしてまた犯行組織の一味でも実験材料に使ったんじゃないでしょうね……リョウ？」
「さすがシロナさん、ご名答」
そう、ここにいるのはリョウ。そして彼の背後にいるのはあの時のミュウツーである。

「上からは機が熟すまで待てと言われているでしょう？」
「俺なんかに倒されるような奴ら、機が熟したところで何の価値もなーごせ」

ミュウツーをボールにしまい、リョウはサンドパンを取り出す。

「まあいいわ。それより、ミオジムが落ちたわ」
「ほぉ……。それは楽しみになってくーな。サンドパン【毒針】」

サンドパンが放った【毒針】が先ほどミュウツーが倒した人とポケモンの背中に深々と突き刺さる。

「とにかく伝えることは伝えたからね。あなた、本当に連絡取らないんだから」
「気をつけまーす」

リョウのふざけた返事にシロナは「もう」と言って連絡を終える。

通信が終わり、リョウは自分のいる洞窟らしき場所から出る。

ここカントーでも雪は降っており、シンオウではないにしろ風が冷たい。

あのハナダでの惨劇で実行部隊として隊長を務めたリョウは、今何を思っているのか。それは誰にもわかることはないだろう。

いずれ彼がケンと再会するその日まで、彼はただ――――。

第九章：完

第九章：北方シンオウ　「裏」：降るは白銀の雪（後書き）

ルカ「リョウさん久しぶりに見たよ」

うん、久しぶりに書いた。

あ、それとメディターの設定資料集載せましたのでどうぞご活用ください。

ルカ「タイトル長いでしょアレ」

まあまあw

第十章：動き始める者達　Ⅰ：死闘の終わり（前書き）

はてさて、この更新ペースがあったらすでにメディターは三倍ぐらいの話数になっているという計算になる……；；

ルカ「自重しろってことじゃない？」

そうなのかな……？

ルカ「なんにしろ受験生なんだから自重しなさい」

はい……といいつつブラック・ホワイトをプレイ中です。

ルカ「ちょっ」

では第十章どうぞ！

第十章：動き始める者達　Ｉ：死闘の終わり

ここは始まりの島。

そして今まさに三人の人間の命が終わろうとしていた。

「フシギソウ、【葉っぱカッター】！」
「リザード、【切り裂く】！」
「カメール、【水鉄砲】！」

実に何日と何時間が経過したのだろうか。

フシギソウの花と草は著しく損傷し、鞭にいたっては右の一本は切り落とされていた。

リザードの右腕は紫色に腫れあがり、尻尾の炎は明らかに衰えている。

カメールに至っては甲羅にひびが入っており、その部分は少しだけ欠けている。

公式のポケモンバトルでは決して見ることのできない死闘であることには違いないだろう。それはトレーナー達の状態を見てからもわかる。

ジンは脇腹を抱え、頭部からは血が流れている。流血しているせいで右目が良く見えていないのだろう、少し見開いている右目は血なのか疲れなのか充血している。

ガイは地面に伏しており、恐らくは脚を骨折しているのだろう……体勢がおかしい。さらに肩を痛めたのか、右手で左肩を押さえている。

モモの右頬には赤い一本の線が刻まれ、右腕をかばうようにして構えている。

ミュウが指定したフィールドはもはや草の一本も生えてはおらず、荒れに荒れた地面が露出している。ミュウが座っている大木も度重なる攻撃の巻き添えをくらって幹の部分が変色している。

「ふぅ～ん、ここまでやって誰も死なないってことはもうこの先も死ぬことはないか……つまんないの」

ぽーんと枝から飛び降りたミュウは先ほど三人が指示した攻撃の最中にも構わずこび込んでいく。

「「「！？」」」

三匹の攻撃を片手で制したミュウは人間の姿のまま目を瞑り、何かを唱える。

「癒してあげるわ」

群青色の淡い光と共に広がる可視光線が辺りを包み込む。

咄嗟に身構える三人。それもそのはず、今まで激闘を繰り広げていたのだ。自分に迫る技の全てにおいて防衛本能を起こすのは当たり前と言えば当たり前である。

ただ相手の息を狙う技を放ち、自分もかわし続ける。それがいかなる精神力を消耗させるかは殺し合いをした者同士にしかわからない。実際に近接戦闘時、ガイはジンの顔面へと一発拳を入れている。

ミュウの発する光によってポケモン達とその本人であるトレーナー達は癒されていく。傷だらけの体から痛みが消え、流血が止まる。損傷個所がバトル前の状態に戻るわけではない、身体の代謝を異常加速させることによって血小板の増量や脳内ホルモンの分泌による鎮痛作用を行っているのだ。

「い、痛くねえ……？」

ガイが骨折による痛みを感じなくなり、ミュウの方を見つめる。

「なんで？」

モモは精神を集中させていたのか、自身の体から違和感が消えたことに呆けてしまう。

「……くっ」

ジンはほっとしたのか、前倒しに地面に伏すように眠りにつく。

ミュウは遠い海原を、遠く彼方にある日本を望んでいる。そしてそのまた遠くにある地方を……。

「さてと、終わりね。つまらなかったわ正直……結構、ここで寝ているボウヤが真っ先に死ぬもんだと思ってたけど」

まるで石っころを見るようなそんな目でミュウは眠っているジン

を見下ろしながら、ガイとモモの方へと視線を投げる。
「でもあなた達、私の目をごまかせると思って？」
その邪険めいた瞳にガイとモモは身構える。
「こいつは殺すわけにはいかねえ。それは俺達三人が全員そうだ」
「ええ、私達はまだ死ぬわけにはいかないのよ」
ガイとモモは殺し合いをしろと言われた時に咄嗟に従った。それはジンと共に任務に赴き、生まれた結託せし絆があるからだ。それは別に三人部隊だからというわけではない……団員という理由だけではなく、真に彼らは集められるべくして集められたわけがあるのだろう。
「面白くないわ、そんなの。でも手駒が減るのはよろしくないからね……」
ミュウはガイとモモに先ほどの木で実っている木の実を投げ渡す。
「ここ始まりの島でしか取れない特別な木の実よ。これを食べて一晩寝れば、人間なら一日で良くなるわ。ここのボウヤにも食べさせなさい」
ミュウは手で隠しながらも大きな欠伸をする。
「明日、いろいろ話すわ。じゃあね、おやすみなさい」
霞んでいくようにして霧散するミュウの体。それがミュウの成す演出だということにも気がつかない程にガイとモモは互いに顔を合

わせて、その場で倒れ込む。

ジン同様に地に伏しつつもガイとモモにはまだ意識があった。

「俺達の勝ち、でいいんだよな……？」

「もちのろんろん。でも、疲れた」

ミュウの殺し合いの命令の真意をモモとガイはすでに読み切っていた。それほどまでに彼らは若いながらに数々の修羅場をくぐってきたことを物語っている。

殺し合えとミュウのような存在に言われたなら実行しなければ確実に自分達は殺される。そんな状況の中、彼らは生き残った。それは彼らの勝利ということになり、それゆえにミュウにとっては退屈だったのだろう。

ガイは脚を気遣いながらもなんとか大木の幹にその背を預けて体勢をたてる。

「大丈夫？」

「よく言うぜ。お前のカメールの甲羅が当たったんだよ」

そう、カメールの【高速スピン】がガイの脚に直撃し、骨が折れたのだ。

「だってあの時は本気モードだったし～」

とぼけるモモを舌打ちと共に一瞥したガイはミュウからもらった木の実をかじる。

「……くちゃくちゃ、うめぇ」

みずみずしく弾力性のある果肉を噛めば噛むほどに果汁が口一杯に広がる。甘くもほんの少しほろ苦いその果汁が体の全身にしみわたる。

「本当だ、おいしい……」

だらだらと溢れてくる果汁によって手がべとべとになることなど気に留めることなどなく、二人は久しぶりに口にする食糧をむさぼっていた。

「カメールも食べる？」
「カメ！」
「ほらよリザード、食いな」
「リザァ！」

実の半分を食したところでモモとガイはポケモン達に木の実を分けてやり、モモはジンの方へと歩み寄る。

ガイは木の幹を背後に夜空に広がる満点の星空を見ながら、煙草を取り出し火をつける。

「……うめえ」

脳を駆け巡るニコチンを堪能しながら、ガイは目を瞑って白煙を吐き出す。

「ジンくん、フシギソウ、食べて」

モモは持っていたサバイバルナイフで木の実を二つに裂く。そしてそれをジンのことを気遣っていたフシギソウへと差出し、モモはジンを揺さぶり起こす。

「ジンくん、起きて」
「……んっ」

ジンは瞼を強く閉じるようにして眉をひそめながら、意識を取り戻して目を開く。

「モモ、さん……」
「はい、あ～ん♪」
「うぐぅぷっ？！」

目覚めた直後のジンの口にモモは木の実をめり込ませる。

木の実を絞り、そこからあふれ出てくる果汁がジンの喉を潤してこぼれていく。

「っげほ！　ごぁ、ごふ、がっ！」

むせたのだろう、反射的にジンは身を起してモモさんの手首を握る。

「じ、自分で食べますから」
「あ、そう？」

モモから木の実を受け取り、ジンは辺りを見渡す。

「あ、あの……ミュウは？」

ジンがそう思うのも無理はない。ミュウが発していた言葉など意識のなかった彼には届いていなかったのだから。

「ミュウは私達に木の実を渡して、明日いろいろ話してくれるって言って行っちゃったよ」

モモは吹き抜ける風によって乱れる髪の毛を手で押さえながら、そうジンに告げる。

「そうですか……。でも、誰も死ななくて良かったです」

ジンのその一言にモモは黙って笑い頷き、ガイは一層深く煙を肺に溜めこんでから吹き出す。

「なあジン」

「はい」

ガイの突然の呼びかけに、しかしジンは即答する。

「この先俺は、いや俺達はきっと今までにないことをする。そんな気がする」

「……」

いきなり語りだすガイの普段ならばこんな神妙に言葉を発さないガイを、しかし二人は遮ることなく耳を傾ける。

「ジンもモモも覚悟だけはしとけよ。きっと俺達は互いを助け合う余裕すら持てなくなる……それでも進め。後ろを振り向くな」

ガイがジンとモモに視線を向ける。

「……はいっ！」

ジンは一瞬思いつめたような顔をするも、力強く答える。

「もおガイくんったら慣れないこと言うから～。でも、うんわかってる」

茶々を入れるモモだが、それでもガイの言ったことに自分にも思うところがあるのだろう首肯する。

「ミュウは、あいつは何かを企んでいて俺達を利用する。別に利用されることに何も感じることはない、ただもしミュウ自体が俺達の確かめたいことを妨害するならミュウをも俺達は敵にしなきゃならねえってことだ」

ガイは煙草を地面へと落として靴の踵で火を消す。

「そうね。でも、まあそんなことですらミュウはお見通しだろうけどね～」

モモの真理をつく言葉にジンは俯くも、だが毅然と顔を上げる。

「でも、でも僕はミュウに付いていきます。僕にはやらなきゃならないことがあるからっ！」

そう、この三人にはそれぞれ野望がある。だからこそサカキの言葉に乗った。それは利用され利用する為。それをミュウでも誰でもかまわない、実行するのみなのだ。

モモもガイもジンも、それぞれの野望は異なる。だが、だからこそ、その強い想いが彼らを引き合わせた。彼らは違う野心を抱いているからこそ、結託した絆を持つことができたのだ。

「そうだね。なら、今日は明日に備えて寝よっか」
「ああ、そうだな」
「はいっ」

自分達のポケモンと共に、満点の星の下彼ら三人は眠りにつく。

温暖な気候であることもあるが、彼らの着るスーツは南極であっても寒さをさほど感じないといった特殊な生地がつかわれておりこのような孤島であるならば悠々と過ごせる。

彼らは殺し合いをした。それは本気で殺し合いながら、本気で互いを生かせるという過酷なものであった。

それを乗り越えた彼らは更なる深い絆が生まれたことだろう。それは三人にのみならず、彼らのポケモンとでもある。

それがミュウの狙いだったのか、はたまた結果としてそうなったのか。

彼ら三人を上空から観察していたミュウは人間の姿のまま、ひそりと呟く。

「待っててくださいねサカキ。今からあなたの全てを壊しにいきますから」

そう言ってミュウは楽しそうに宙で舞って、くるりと踊った。

第十章：動き始める者達　Ｉ：死闘の終わり（後書き）

えーっと、実家には来週までいるのでじゃんじゃん更新していきたいと思います。

ルカ「ああ、ジンさんが出てる」

えっと、それではまた次話でお会いいたしましょう。

ルカ「ジンさ～んっ！」

こら、うるさい！

第十章：動き始める者達　ＩＩ：語られるミュウの過去（前書き）

さて、今回も新要素……というのかな？

まあ人とポケモンの起源を題材にしていたところにブラック・ホワイトでの設定があってもう運命めいたものを感じる今日この頃なＫａｒｙｕです。

ルカ「どうぞ～」

ガン無視？！

ルカ「……」

第十章：動き始める者達　ＩＩ：語られるミュウの過去

淡いピンクの長い髪を風になびかせて、ミュウは朝日が昇る地平線を大木の枝の上で見る。

「今日も一日が始まっちゃったか」

容姿には不似合いなその口調は、しかし一目見ればミュウであると判断できる。

ぴょんっと木から飛び降りるミュウは人間の女らしく来ている長いスカートを両手で押さえる。そして人間では不可能であろうに、見事十メートル以上からの落下に見事な着地を見せるのだ。

「あら、起きてたの」

ミュウは自分のことを大木の幹に凭れ座り込み見上げている三人に声をかける。

「ああ。どうもいまいちお前に寝顔を曝ける気分にはならねえからな」

ガイは煙草を吹かしながら、そうミュウに告げる。骨折してミュウの治療を受けたとはいえ、骨はまだ完全にはくっついていないのだろう……ガイは折れていた方の脚を一本前に突き出すようにして座っている。

「ふふ。あら、誰に向かってそんな口を利いているのかしら？」

「ぐっ！　て、てめえ！」

ミュウは意地の悪そうな笑い声と共にガイのその折れている脚を踏む。

「あらあら、男のくせに痛いのね？」

「こいつっ！」

ミュウはガイの堪忍袋の緒がどれほどの長さなのかすでに見抜いているようであり、完全に弄んでいた。

「あ、あのミュウさんっ……」

そんな二人を見ていてジンはミュウのことをなんと呼べばいいかわからず、さん付けで呼び掛ける。

「なにかしら？」

ミュウはじりじりとガイの脚を踏みながらジンへと視線を向けることなく応える。

「そろそろ話してもらおうじゃない」

しかし答えたのはジンではなくモモ。三人はミュウから全てを聞く為に朝まで待ったのだ。

「何から知りたいの？　私の彼との出会い？　なぜ私がここにいるのか？　私があなた達を必要としている本当の理由？　それとも……」

ミュウは三人を嬲るような視線でなぞり、口を開く。

「なんであなた達が生かされてるか？」
「「っ！！」」
そう三人がこの一晩、交代交代に休憩を取ったのはミュウを警戒してのこと。
殺し合いを命ぜられ、その真意をわかってはいても、いやわかっていたからこそガイとモモはミュウの動向が気になっていたのだ。
ミュウならばいつ何時であっても容易に自分達三人を殺せる。それをほんの気まぐれで行う、そんな性格をモモはとくに見抜いていたからこそである。
「大丈夫よ、殺しはしないわ。手駒がほしいって言ったでしょ？それに、同じ志を持つ者同士よ？」
しかしながらミュウの言葉を簡単には鵜呑みにはできない。
「じゃあ順に話そうかしら。まずは私とアノ人との出会いを」
ガイの脚から自分の足をどけてミュウは三人に昨日と同じ木の実を与える。
「ざっと数十年前かしら、寝ていたところを訳のわからない連中に捕まったわ。今考えれば、人の科学力というのを見くびっていた罰があたったのかしらね。それで私は研究の対象として様々なデータを取られたわ」
それはここ数世紀の人類の発展スピードを見てとれば理に適って

いた。ポケモン転送技術やモンスターボールという収容道具の安価水準、人を特定位置まで転送するワープ装置、ポケギアからライブキャスターに至る携帯機器の万能性など例をあげればきりがない。

そんな技術を人はポケモンを介して手に入れたのだ。見事なまでに、そう見事過ぎるといっても過言ではないほどまでに。

「その時改めて知ったわ、いかに私達ポケモンが人のいいように使われてきたかをね。ポケモンは人と違って意志の疎通を行わない。なぜだかわかる？　それはね、未だに自然こそが人より勝っていると本能で理解しているからよ」

モモ、ガイ、ジンの三人は黙ってじっとミュウの言葉に耳を傾ける。

「でも人間はそうは思ってないわ。自分達の可能性をどこまでも追及する、それはね人間のつくりだした社会というものに自然は絶対あってはならない存在だからよ」

そう、人の社会に自然は存在してはいけない。それは何百年と掲げ続けられる心得である。今ではポケモンを人間が道具で制御できるからこその共存がなされているが、ポケモンという自然の脅威を人が克服できたからこそ共存しているだけなのだ。

「人の社会には自然現象への歓迎は成されないわ。それはそうよね、地震や台風なんて人はいつでも歓迎はしないのだから」

ミュウは物悲しげそうに、でも続ける。

「まあデータを取られるだけ取られた私はもはや伝説の存在ではな

くなったわけ。だからいらなくなった……。でもね事件は起きたのよ」

事件、それはミュウの研究を行っていた施設が何者かによって破壊されたというものであった。

「今でも良く覚えてるわ、あの時私を連れだしたのは……あなた達の言葉でいうならポケ人ね」

「「「っ！？」」」

ポケ人……それは人とポケモンの間に生まれた者に使われる用語である。そんなことはありえない……そう思うものいるかもしれない。だがしかしポケモンという動物からの特殊な進化を遂げてきたもの達の中には人間と融合することでより良い種族になろうとしたポケモンがいたのだ。

今でこそそういったポケ人自体が法で禁止されており、ポケモン界でもポケ人の存在は確認されてはいない。だがどこかの科学者で人工的にポケ人をつくりだしたというニュースが百十数年前に起こり、パニックを引き起こした。

「まあ私は弱っていたから彼女の言うなりになるしかなかったんだけど、何を思ってかしらね私をアノ人に渡したのよ」

アノ人、つまりはサカキである。

「私が前いた研究所はデータと共に壊滅されたから彼らは事実上誰だったかは覚えてないけど、私はアノ人に私の全てをささげたわ。人の悪と善の極端を知ったからかしらね……アノ人に自分を研究データとして提供したわ」

サカキが成人し、ミュウのデータによって彼は様々な力を手に入れた。それによりハイアで巨万の富を得た彼はミュウと共に頂点を取ろうと言ったらしい。

「アノ人の傍でなら不可能はないと思ってたから、だからついていったわ。でもアノ人が組織を設立して、様々な人を下につけるようになって私の存在は邪魔になる一方だった……。そしてそれはアノ人を苦しめていることも承知していた、だからここに身を潜めることにしたのよ」

段々と口調が柔らかくなるミュウに、モモは突っ込みを入れる。

「ならなんで復讐なんて……」

「ふふっ、そうね。また昔の二人に戻りたいからかもしれないわね」

ミュウはただ純粋なのだろうか？　人に良いように利用され、それを助けられ、自分を託された少年時代のサカキに介護され彼に身も心をも許すようになったミュウ。ミュウにとってサカキとの記録は、忘れたくても忘れられないかけがえのないものなのだろう。

「ミュウさんっ……」

それはこの中で一番若いジンでもくみ取ることができた。

ミュウがあんな毒舌めいた口調なのは不器用なミュウがサカキにしか心を許していないいからという単純めいた理由がある裏付けなのだろう。

「けっ、くだらねえ……。でもよ、俺はお前についていく」

そしてそれはガイにも言えることだった。故郷ヤマブキにいた自分の幼馴染……。自分もいつかあの街に帰って、彼女に自分の気持ちをぶつけたいと密かに想っているのだ。

「どんな理由があったって、私はあの方に直接会いたいの。会わなきゃいけないんだから！」

妙に語尾が強くなるモモは、彼女に彼女なりの事情があるのだろう。サカキに会わなければならない事情が。

「それにこの任務が成功すれば、代償は大きいですしね」

ジンは少しでも場を和ませようと言葉を選んだつもりだが、逆に場を白けさせてしまう。

「物好きな人間もいるものね、こんな私にもまだついてくるだなんて」

「俺達も似たようなもんだからだよ」

「そうね、それに手駒がほしいんでしょう？」

「僕はあなたに付いていきます」

ミュウは、サカキ以来なのだろう、ここまで人に良くしてもらってのを。自分の中で芽生える温かい感情を、しかしミュウは理解することができない。

「ありがとう」

そう言って笑う人の姿をしたミュウを、三人は微笑み返す。

「それにしてもあなたが見たポケ人って、本当にわからないの？」

モモはミュウが先ほどまで語っていた内容を掘り下げていく。

「そうね、ポケ人の存在は人でもポケモンでもなく、社会でも自然でもないわ。だからこそ、神といわれる存在でもわからない」

ガイとジンは多少おいてけぼりになりながらも、自分のわからないところを補充していくように問いかける。

「ポケ人ってのはポケモンと人間の間にできた生物のことだろ？そりゃ確かにグロイけどよ、そんなに危惧しなきゃなんねえのかよ？」

確かにガイの言うことにも一理ある、しかしポケ人というものはポケモンと人の理解を遙かに凌駕する生物であるのだ。

「ポケ人というのはどんな形状をしているのかわからないのよ。唯一わかっているのは、彼らにはあるシンボルが刻まれているということ。私の額にあるシンボルがそれよ」

ミュウのおでこ部分には三叉槍の黒い印が刻まれていた。

「つまり、あなたの姿って……」

「そう、あの時私を研究所から救ったポケ人のものよ。彼女の場合、時間を操ることができたみたいね……アノ人に出会い、私を手渡す時は老婆の姿をとっていたわ」

モモの見解をミュウは肯定する。

「彼女の場合って……」

そしてジンはミュウが漏らした不可解な言葉にくいつく。

「そう、ポケ人がどんな形状を取るかわからない上に、どのポケモンと人の間に生まれたかはわからない」

「……おいおい待てよ、それってどのポケモンと人の間にでもポケ人ができるってことかよ！？」

ガイの驚きっぷりも納得がいくものがある。

「だから前世紀に起きた事件が衝撃的だったのよ」

そしてモモの言うことが核心をついたのだ。はじめてポケ人が自然界に存在していたのは特殊稀なるポケモンの進化過程おけるイレギュラーとして文献に残っているが、今の時代でポケ人を人工的につくれるという技術は完璧なタブーなのである。

このポケ人という存在を裏付けするのは、ポケモンのタマゴグループにある人型グループの存在も理由としてあげられる。

「もう私の話はここまでいいでしょう。なら次はあなた達が何をしなければならないのか、教えるわね」

少しだけ、少しだけではあるが彼らの心の距離は縮まった。同じ志を持つ三人と一匹、それぞれの目標は違えど、向かう場所は一緒なのである。

第十章：動き始める者達　ＩＩ：語られるミュウの過去（後書き）

さあこのペースでどんどん参りましょう！

ルカ「猛進するね」

そりゃもう、ルカの出番を早くまわさないと後が怖いから；；

ルカ「……ね」

はい；；

第十章：動き始める者達　ＩＩＩ：彼らが進む道（前書き）

さてこの三人にはいろいろと期待している作者です、はい。

ルカ「それって作者としていいの？」

まあ、うん。大丈夫でしょ。

ルカ「意味不明だけど；；」

どうぞ！

第十章：動き始める者達　ＩＩＩ：彼らが進む道

始まりの島に集いられし三人と一匹。

彼らの目的はサカキの生み出したロケット団を壊滅させること。いや、少なくともミュウはそう目論んでいる。そして他の三人はサカキ本人に会うことを第一目的としている。

「さて、現状を説明してもらおうかしら」

ミュウは三人が乗ってきたと言っていた船の甲板で腰をおろしていた。

とりあえず本土に戻る前にミュウは寄る場所があるらしく、そこに三人を連れていくとのことである。だがミュウは孤島に暮らし始めてからの年月が長く、今日本がどうなっているのかを把握していない。

「とりあえず俺達のボスは今や日本を統括している存在だ。シルフカンパニー社の社長として表の社会で生きながら、裏社会ではロケット団のボスをこなしていた人だからな……器はあるんだろうよ」

ガイがあまり面白くなさそうにミュウに説明していく。もともと人の下で働くということ自体ガイにとっては不本意なのかもしれない。

「あの方は今の地方チャンピオン達による地方の治安維持の体制を崩すことなく、人々の生活に急激な変化をもたらさなかったわ。だから、世界は今までの軸を保っていられている」

モモはいつになく真剣な口調でそう語る。

「ミュウさんは何が知りたいんですか？」

あらかたのざっくりとした、だが簡潔な説明を終えてしまった二人の後にジンがそうミュウに尋ねる。

「チャンピオンになれる制度に変更は？」

ミュウのその質問をガイは良くわからないといった表情を浮かべるも、丁寧に答える。

「あまり大きな変更点はない。ただジムが年に出すジムバッジが一つと限定された。そしてそこのジムリーダーがそのジムで職を続けるにはそのジムバッジの死守が義務づけられた」

ミュウは少し考えてからまた質問を連ねていく。

「つまり年にポケモンリーグに挑戦できるのは最大で一人ということよね？」

「ああ、そうなるな」

ミュウの洞察にモモは彼女なりに勘繰りを働かせる。

「アノ人らしいわね。それにあなた達はアノ人がつくりあげたシナリオも知っているのでしょう？」

ミュウはそれだけで全てを見透かしたようなそんな表情を浮かべ、それを三人は呆気にとられるだけであった。

「私達が知っているのはあの方がホウエンのチャンピオンダイゴに私達が企てたテロ事件の全てをなすりつけたという前座の準備を行ったことだけよ」

モモは自分がサカキの下で成してきた全てのことを告げる。

そしてそれをミュウはただ黙って聞く。

「他には？　例えば、誰かのマークなんかを命令されなかった？」

ミュウはモモから伝説のポケモンの捕獲任務やハナダデパートの破壊任務、オーキド研究所の処分などの話を聞きそう訊ねる。

「誰かのマーク……？」

モモがそう聞き返すのに対してジンははっと顔の表情をあらわにする。

「あら、ジンは知っているみたいね？　誰かしら？」

ジンはミュウから直視され、その視線から逃れることができず唇を震わせながらも二人の人間の名前を口にする。

「顔は覚えているのよね？　だったらその二人を見つけた時は教えてね、私が始末するわ」

ミュウの瞳には明らかなる悦びの色が煌めきつつあった。物騒なことを言いながらも、口元が歪んでいくのを三人はただ黙って見ていることしかできなかった。

「まあそれよりもロケット団という組織は面倒なものになったわね。アノ人の野望そのものを具現化している組織……それが表社会のシルフカンパニーと深くからみあっている、それを破壊するのは困難極まりないわね」

そう、表と裏のトップが担う表裏一体の組織。その組織体勢は厳密には別れてはいても内側では密接な経理体勢を取っている。つまり片方が壊れればもう片方が崩れるという方程式が成り立たないのである。

同時にロケット団とシルフカンパニーが壊滅しない限りサカキの築き上げた籠城は崩すことはできない。

ならば道は一つ、サカキの首を直接狙いにいくこと。しかし彼らはそれを望んではいない。

「難しいわね、まさかこの私がここまで頭を悩ませられるなんて。ふふっ、こんなことを越えられないようではその資格もないと言いたいのかしら」

サカキとの付き合いが長かったからとだけでは説明はつかないだろう、彼女がミュウであるから、ミュウであるゆえにここにいる三人には理解の及ばない範囲まで思考回路がなされていくのである。

「僕達は一体、どうすれば？」

ジンは若干の焦り感じつつ、縋るようにミュウに問う。

「私の捕獲と引き換えにあなた達には報酬がいくんでしょ？　思い

出してみなさい」

そう、この任務はガイ達三人のミュウによる始末されることを目論まれた上で言い渡された。でもなければあんな報酬が用意されるわけがない。

しかしロケット団という組織はあまりにも大きい。ミュウを捕獲し帰ったとならば上層部はそうそうに彼らの首を切ることはできない。

研究所の班長就任、望みの地方を統括するチャンピオンの座取得、あるいはロケット団内での階級特進。すべてがジン、ガイ、モモの望まんとする報酬が任務の発布書には書かれていた。

「私はアノ人のつくりだしたもの全てを壊したいけどあなた達はそうでもないのでしょ？　アノ人に会いたいから私についてくる。ならば私を引き換えにあなた達はあなた達の望む報酬を手に入れてアノ人にあいなさい」

だがそれはミュウを犠牲にするということだ。

「でも、それじゃお前がっ……」

「あら気遣ってくれるの？」

ガイのことをいじるような目でミュウが答えるも、微笑みを浮かべる。

「私は私でどうにかするわ。でもねその前にあなた達には私と一緒に向かって欲しい場所があるわ」

ミュウは座っていた甲板から立ち上がると遙か彼方の海原を指差す。

「あなた達がアノ人に会って何をするのかわからないけど、これだけは言えるわ」

自分のことを黙って見守る三人へとミュウは意地の悪そうな笑みを再度浮かべて告げる。

「アノ人にあなた達の声は届かない。なぜならアノ人はそういう人間を選んだのだから」

ミュウの言っている言葉の真意を三人は理解することができなかった。

「でもそれでいいのよ。あなた達三人の過去、そして抱く未来はアノ人の理想に近い」

まるでこれから起こるであろう全てを知っているかのように、ミュウはただそう淡々と告げるのみであった。

そして三人はミュウに本人が言った言葉の真意を探ることはできなかった。

なぜならばガイ、モモ、ジンは誰にも明かしていない自分達の未来を胸の中に潜めているからである。

自分達の未来を、確信をもって抱いているものは少ない。そんな人物をサカキは己の足と目で見つけ出した。それにはそれなりの理由があるのは明らかであろう。

だからこそ、だからゆえに三人はなぜ自分達なのかをわかりそうながらにわからないでいた。それを確かめたいのだ。

「ふふ、それにあなた達も感じているはずよ？　なぜアノ人に拾われて、そしてなぜこの三人なのかをってね。なぜ持っているポケモンがその三匹なのかもね」

「「「！！」」」

そう、ガイが持つリザード、モモの持つカメール、ジンの持つフシギソウ。彼らが彼らのポケモンとの出会いはてんでばらばらである。ただの偶然として思っていた三人である、だがミュウと出会いお互いの記憶の欠片を見てしまい、話を聞くにつれ自分達の間における共通点を見つけるとともに境界線を見出していた。

「だからアノ人は人間ながらに面白いわ。私に人間に対する興味を持たせてくれたしね」

三人はミュウの最近の過去は聞き及んだ。しかしミュウの遙か昔のことは何も知らない。ミュウがどこで生まれ、どのようにしてこの世界で過ごしてきたのかを。

「あなた達はアノ人に真意を聞くに行くわ。そしてそれは正しいことだとは思うわ、例え世界がそれを悪だと言おうともね。お喋りが過ぎたかしら？　でも一つ言えることはまだ時期ではないということ」

ミュウは一体どこまで見透かしているのだろうか。ただ頑なに今でも実行できそうなことを実行しようとはしない。

「アノ人に会う前に、あなた達には知ってほしいことがあるわ。それがアノ人の成し遂げようとしている野望に近づくことになる」
「ちょっと待て。俺達のボスが成そうとしていることはこの世を良くするためなのか？」

ガイはミュウにそう訊ねる。

「野暮な質問ね。あなた達は自分達が悪事に加担していると思っているの？　思っていたらそれはこの世の為じゃなく、アノ人の為、自分の為ということ。もしそう思っていないのだったらそれはこの世の為、アノ人の為、自分の為ということよ。わかる？」

つまり自分が悪と思うか善と思うかはさして問題無いということなのだろう。

「アノ人に会いたいのでしょう？　だったらこの世がどうのこうの言ってるんじゃないわよ。自分が世の中の為にあるんじゃないのよ、世の中が自分の為にあるんだからね」
「僕たちはどこに連れて行かれるのですか？」

ジンは一歩ミュウへと近づく。

ミュウはそんなジンを見ながら、ふふっと隠して嗤う。

「あなた達が身につける必要があるのは自分自身よ。それさえ手に入ればアノ人があなた達を選んだ価値があるということ」
「どういうこと？」

モモもさすがにミュウの独り善がりな言い分に腹がたってきたのだろう、若干口調にドスがまじってきた。

「アノ人があなた達を選んだ。その理由を私は理解した。ならばアノ人の理想に近づけさせようとしているだけよ。それをあなた達がどうとらえるかはあなた達次第ということよ」

またもミュウは人ではできない、人の上に立つ存在だからこそ成せる意地の悪い視線で三人を見る。

「へっ。難しいことは考えてねえさ、俺はお前についていくと言った。男に二言は無い。それに俺は自分で道を見つけるさ」
「ガイくんの言う通りよ。たとえあなたやあの方に利用されるだけの立場だったとしても、私は見つけて見せる」
「そうですね、この世界がどうこの先どう進んでいくのかを僕は自分の目で見てみたいから。そして自分がどうしたいかを決める為に、今はあなたについていきます」

ミュウは三人の決意を受け止めて、そして唇をゆがめる。

「だからこそ、人は面白い」

第十章：動き始める者達　ＩＩＩ：彼らが進む道（後書き）

ややこしいかもしれません、意味をなしていないのかもしれません、でもそれでいいのです。

ルカ「人ならざるものだからこそ、言えることがあるってこと？」

うーん、それもあるけど、サカキという存在自体をもわかればわかるほどにわからなくなる、そんな感じにしたいと思ってますｗ

ルカ「それって、つまりｒｙ」

はいはーい、ではまた次回！

第十章：動き始める者達　ＩＶ：考えなさい、私達のことを（前書き）

さて、ＢＷをプレイして新要素がバンバン湧いてしまったのでこういうストーリーラインを取りました。

ＢＷをプレイされていない方にもわかりやすいように書くつもりですが、知っていたら尚良いかもしれませんｗ

それとこれは自分個人の挑戦である為、もし皆さまが不可解に思う点がありましたら遠慮なく自分に追及されてくださって構いません！

では、いきます！

第十章：動き始める者達　ＩＶ：考えなさい、私達のことを

日本本土から離れている地方、それがイッシュ。

そんなイッシュ地方には日本で確認されていないポケモン達が多数存在しながらも、イッシュ地方の東側が日本に一番近いのもありそこでは数多くの本土にいるポケモンが確認されている。

イッシュが日本であるのか、と問われればそれは日本であって日本ではないという表現ができるかもしれない。なにしろイッシュに行くのにカントーからは飛行機を使わなければならない故、本土からは遠い。

勿論本土とは通貨も同じであるが多少異なるといえば本土に比べ人の交流が最も盛んであるといってもいいだろう。盛んゆえに特異な地方、それがイッシュである。

そんな地方では古くからある言い伝えが残っている。

それは古い昔双子の英雄がいたというもの。双子の英雄の傍には常に一匹の龍がいた。双子の英雄はお互いの意見を聞き入れず、対立した。それは配下や民を巻き込んでの喧嘩、戦争となった。その時に龍は自分を白い龍と黒い龍に分裂させ、片方ずつに加担した。

龍達は理想を求める英雄を助ける。つまり分裂した龍達もまた違った理想を持っていたのだ。龍は英雄に知識を与え、敵対者に稲光と炎で刃向かうその英雄とポケモンの親子のような姿に心酔した多くの民は一致団結して建国して昔のイッシュは発展した。

雌雄が決したことは無く、互いの英雄が和解して戦争は終わった。そして龍達はライトストーン、ダークストーンとなり次なる英雄が現れるまで眠りについたとされている。

そんな人とポケモンがつくりあげたイッシュ地方に一人の少年がフキヨセの洞窟から出てくる。

「嵐か……。こういう日はトモダチの声が良く聞こえるよ」

彼がなぜそんな場所から出てきたのかはわからない。だが、彼の肩に乗るポケモンは自分に降りかかる雨が嫌なのか、トレーナーの長い緑の髪の中へと隠れる。

「ゾロア、そんなに冷たいかい？」

まるでゾロアというポケモンと会話をしているかのように、そして少年は首を振る。

「僕？　僕は好きだよ、こう感覚が研ぎ澄まされていく気がするんだよ」

ゾロアはぴょこっと顔を飛びださせて怪訝な表情を浮かべる。

「おかしいって？　そうかな？　そうかもね。さ、それじゃ君が風邪引かないようにもうちょっとここで待ってようか」

肯定の意を示しているのだろう、ゾロアは小さくも高い鳴き声を上げてうれしそうに笑顔をつくる。

少年はゾロアを撫でてやりながら曇天な空を見上げて、その遠く

で轟く雷雲を見つめる。
彼の腰から下げている金色のルービックキューブがちゃらっと音を鈍く鳴らした。

ところ変わり、海の上。
そう、ジン達三人が乗っているボートの上である。そのボートはミュウの指示によりある場所へと向かっている最中だ。
「ネットや雑誌でしか見た事ねえが、あそこをなんでボスは狙わなかったんだ？」
ガイはボートの操縦をしながら遠くに見える暗雲にしかめっ面を浮かべている。
「そんなことアノ人に直接聞けばいいじゃない」

ミュウはボートの中の簡易ソファの上でくつろぎながら自分の手の爪を眺めている。やはりポケモンであっても人間の女と姿を変えてからは仕草も女らしくなるのだろうか。いや、姿はポケ人をもとにしているのだが……。

「聞けねえからお前に今聞いてるんだろうが」

ガイは苛立ちを言葉に込めながらミュウと会話する。どうやら二人の仲は改善されることはなさそうだ。

「統治が難しいからでしょうね。それにあの場所は特異なのよ……」

「特異……？」

ガイはミュウの発したその言葉に違和感を覚える。

「あそこはね、あそこのポケモンは最も動物に近いのよ。ここよりね」

何を言っているのか、それをガイは理解することができなかった。

「動物に近い……？」

「そう、動物。私達ポケモンのご先祖様。まあ、いうなればあなた達の先祖とも言えるかもね」

この世界において動物という単語はすでに専門用語となっている。古代の言葉となっているのだ。それもそうだろう、なぜならこの世界において生きている生物の分類はポケモンか人間なのだから。

「でもそれが統治しない理由に入るのかよ」

「ええ、なるわ。動物に近いポケモン達、それはつまりあそこの地形には根本的な生物の進化にかかわる特異点が存在するということよ」

ミュウは目を鋭くさせて、自分の論説を次々と続けていく。

「つまり、どういうことだ？」

「あなた、人間のくせに頭悪いのね」

「ほっとけ！」

ガイに呆れながらもミュウは続ける。

「つまりイッシュは不安定なのよ。いえ、特異だからこそ予期できないわ」

「それはそこに住む奴らも思っていることなのか？」

ミュウがここまで言うということは何かしらのことがあるのだろう。しかしガイにはミュウの言い分だけを信じるということはできなかった。

「知らないでしょうね。だってあそこに住んでいる人間にとっての彼らの世界はあそこなのだから。むしろあなた達の住んでいる地方の方が特異だと思っているでしょうね」

それは互いが抱く偏見の理論に似ているのだろう。

「それにしてもなんであそこのポケモン達が、そのなんだ、動物に近いってどうやってわかるんだよ。動物が先祖なら俺達のとこのポケモンも動物に近いんじゃないのか？」

「そうね。なかなか頭が切れるじゃない。でもね、そう言い切れる

理由が一つだけあるわ」

ガイはごくりと固唾をのみこんでミュウの話を待つ。

「あそこには神話というものが存在しないのよ……。あるのは伝説のみ。この違いがわかる？」

神話というものは伝説なのではないか？　そうガイの頭の中では整理されるも、口に出すことはできなかったのだ。それほどまでの確証が自分で持てないからだ。

「そうね、言葉で区別するのは難しいわ。でもね伝説とは人間が基なのよ、神話は大概がポケモンが基なのだけどね」

つまりは……

「そう、イッシュではすでに昔から人の優位性がポケモンより強いのよ。それはそこのポケモン達が動物からの進化を十分に成し遂げることができなかったから……そういう理論付けができるということよ」

「じゃあ、ポケモンじゃないのかよ？」

ガイの疑問が飛び交うのは当然であろう。イッシュのポケモンがポケモンなのか動物なのか、それが問題である。

「れっきとしたポケモンよ。むしろポケモンとしての力はイッシュの方が強いかもね……ただイッシュのポケモン達は動物であった頃の姿を取った。わかる？」

ガイはただ黙って、答えを導き出せないことを背中で語る。

「イッシュ地方では伝説通り、人間とポケモンが一丸となって栄えた。ポケモン達が動物の頃から容姿を変える警戒心が薄れていたということよ」

ミュウの論説、しかしそれはどこか矛盾だらけのようにも聞こえる。

なぜなら、それならば、なぜポケモンと人間が他の地方よりも共存が上手くいっていたのに伝説で人間の優位性が語られるのだろうか？

「ポケモンという自然の一部と共存できる。その共存できるという事実が人間に自分達にその才があると勝手に思い込むからよ。それなら無用な争いも生み出さないし、その伝説通りのことが起きたら、そりゃ私だって人間と仲良くやっていく自信くらい出るってものよ」

ますますガイには手に負えない話になってきたのだろう。ガイは頭を抱えながら、外にいるモモに向けて窓を少し叩いて救いを求める。

「あらガイくん、お勉強中？」

「まあ、そんなとこだ。難しすぎて頭に良く入ってねえが」

二人のやりとりを聞きながらミュウはモモへと声をかける。

ミュウはガイへと話したことをモモに話す。その話をモモは真剣に耳を傾けて、数々の質問を投げかける。

「でも、動物からポケモンと人間は同時期に誕生したってシンオウ

のミオにある図書館で読んだわよ？　なんでイッシュではまるで動物と人間が一緒にいたみたいな話になってるじゃない」
「……ふふふ、やっぱりメスの方がオスより頭を使うのかしらね。ええ、あなたの言う通り、それは俗にシンクロニシティと呼ばれているわね。でもね、イッシュでは動物と人間が同時期に存在していたとしたら？　もしイッシュで動物からポケモンの進化を人間が見ていたとしたら？　そうしたら説明はつくわ」

モモはミュウの言葉を、まさか、といった感じに受け取っていた。
「本当のことはわからないわ。私でもわからない。だから私はあの地を特異であると感じている。まあ行ったらわかるわ」

ミュウがその言葉を言い終わると同時にボートの点検を終えたジンが帰ってくる。

「どうしたんですかみなさん、集まって？」

話の流れを知らないジンがそう聞くと、ミュウは呟く。
「イッシュにいてあなた達は自分自身を見つける。そしてきっとあの地方の謎を目にするわ、そうすればアノ人の理想に近づく」

イッシュ地方、そこは一体何を秘めているのか。何をその歴史に刻んでいるのか。

そしてなぜその地方のポケモンと人間の進化を知ることが、ガイ達にとってサカキの為になるのか。謎が謎を呼び、彼らはミュウといればいるほどにわからなくなる。

「動物から進化した私達ポケモンとあなた達人間。なら、動物とはなんなのかしらね。進化とは一体なんなのかしら？　そんなに重要なことなら受け継がれても良いはずなのに、そんな文献も言い伝えも聞いたことがないわ」

それはポケモン達全ての起源とされるミュウから発せられる衝撃の事実。

「ふふ、私達ポケモンですら自分達のことを良く知らない。それは勿論あなた達も同じ。だからかしらね、こんな疑問を抱いて答えが出ることなく何年も生きていられる」

ミュウはソファから立ち上がり、ぽつぽつと降ってくる雨にその体を曝け出す。

「もしかしたらその意味を追い求めるから私達は進化するのか、それともそんな疑問を抱かせ続ける為に、私達がずっとずっと生きていくために進化という手段を取ったのか。そうしたらなんで、私達はその時にポケモンへと、人間へと進化したのか……？　考えれば考える程飽きないし、尽きない……」

新たに人間のガイ達に突きつけられる答えの無い問。

「知りなさい、進化とはなんなのか。それがイッシュにはあるわ」

……暗雲が近づき、小雨だった天候は一気に豪雨へと変わる。

第十章：完

第十章：動き始める者達　ＩＶ：考えなさい、私達のことを（後書き）

ルカ「難しすぎる・・・」

うーん、まあもうちょっと綺麗に整理はできると思うけど今の段階ではこう言う感じに；；；

ルカ「・・・私も考えてみるよ、進化について」

自分も更に考察を深めていこうと思います。

ではでは！

第十一章：始まるは特訓　Ｉ：ダイゴの隠れ家（前書き）

さて、ケンが主役の第十一章始まりです！

ルカ「ぶーぶー」

お前はいつもそうだよな；；

ルカ「わったしのでっばーん！」

さてそれではお待ちかねの方もいらしたのではないでしょうか？

そんなケンの回、はじまりです！

ルカ「無視するなー！」

第十一章：始まるは特訓　Ｉ：ダイゴの隠れ家

日本の最も西にあるとされるホウエン地方、その中で一番本土に近いシティとしてあげられるのがトクサネシティだ。そのトクサネシティには今や指名手配を受けている七人の人間が潜んでいる。

元ホウエンチャンピオンダイゴさん、元カントー四天王カンナさん、元ハナダジムジムリーダーカスミさん、元タマムシジムジムリーダーエリカさん、元ヤマブキジムジムリーダーナツメさん、元セキチクジムジムリーダーアンズさん、そしてダイゴの助手をしていたミツルさん。

そしてその七人に同行するのは世界の頂点と呼ばれている青年サトシさんと今回企てられた作戦において何やら重役を負ってしまった俺。

俺達九人はトクサネシティへと空を、ポケモン達を使って移動、直接トクサネシティに乗り込まずにトクサネシティの島周辺にある環礁地帯にて隠れて夜に静かに上陸した。

かなりの大人数での行動ではあるが、さすがは地の利があるダイゴさんだ。手際良く俺達を自分の別荘へと八人を誘導する。

しかし、

「まあ、こうなってるわな」

若干頭を抱えるダイゴさん。それも無理はない、なぜならダイゴさんの別荘は、見張りはいないもののテロップや看板によって立ち

入り禁止とされていたからだ。

「これで入れるんですか？」

俺は静かにそう訊ね、ダイゴさんはご自慢の不敵な大人びた笑いを返してくる。

「なに、こういうこともあるかと思ってね」

一体ダイゴさんはどこまで用意周到なんだろうか……。それともただの臆病も――――。

「あんたそんなに用意周到だなんて、正直キモイわ」

「臆病者……」

俺の考えていたことをそのまま口にするのは常に機嫌の悪そうなカンナさんと無口ながらに手痛い一言を挟んでくるナツメさん。

彼女ら二人による攻撃にダイゴさんは顔をひきつらせながらも、別荘の庭裏にある地下へと続いているであろう地下道の隠し扉をあける。

というか、本当にこういうのって作れるんだな……。それが俺の率直な感想だった。

「わあ、すごいですっ！」

「よくつくられましたね」

感心の声を上げるのはアンズさんとエリカさん。まあ、うん、俺も感心せざるを得ない。

「……」
「サトシ……」

そしてカントーから飛び出してからサトシさんは口数が減っている。カスミさんから聞いたのだが、どうやら昔一緒に旅をしていたタケシさんの死が相当ショックみたいだ。作戦会議の時はそういった素振りを見せなかったど、やはり気落ちしているのだろう。

「ありがとう、カスミ。もうちょっと気持ちの整理がついたら、話してくれるかな」
「……ええ」

どうやらサトシさんはまだタケシさんの身の上に起こった詳細を知らないようである。それはあんな場所に何年もこもっていたら知るよしもないだろう……。しかし俺は覚えていた……五年前のあの事件は、ニュースになっていたことを覚えている。

俺達九人はダイゴさんが、皆が地下道へと入ったのを確認してから内側から扉を閉める。

一帯が暗くなり、ガコンという扉の閉まる音と同時に足元に蛍光ランプがダーッと浮かび上がる。それは階段の向かっている下の通路まで伸びており、足元は良く照らされている。

「金持ちなんだな、お前」
「僕もはじめてです、ここ」

カンナさんがまた何か皮肉めいたことを言っているが、それを遮るようにしてミツルさんが昂揚感のある声ではしゃぐ。

「金を持っていることは認めるぜ？　まあ、これは俺が副業で稼いだ資金でつくったからな文句は言わせないぞ？」

ホウエンのチャンピオンをしながら副業なんてできるのか……。やっぱりこの人は凄いな……。

副業ってなんだったんだろう、とその時思ったのは俺だけじゃないはずだ。うん。

「それにしても良くこんな大掛かりなものつくれたわね。業者に頼んだのだったら、ここ一番危ないんじゃない？」

カンナさんの意見はごもっともだった。もし全てのデータや資料がロケット団、サカキによって確認されることができるのであれば、このような大掛かりな秘密基地的なものをチャンピオンがつくったのだったらその証拠が残っているはずなのだ。

「ああ、そうだな。でも安心しろ、手伝ってもらった奴は俺の知り合いだし、なにしろつくったのは俺だしな」

その時、一体何人が口をそろえて驚きの声を発しただろうか。そんなに広くはない階段の通路にその声が反響する。

俺は辺りを見回して、その完璧と言わざるを得ない出来に感嘆する。

「それにこれをつくったのは別荘の中からだからな、多分知られてはいないし材料はその知り合いに各方面から取り寄せたからな……気付くこともないだろう」

その知り合いという人も凄いが、一人でつくったというのがまだ驚きでならない。まあ、でもポケギアなどの通信衛星にハックするぐらいの人だからこんなのも朝飯前なんだろうな……。にしても、すごっ。

「さあ、ここが今から俺達が根城にする場所だ」

ダイゴさんが筆頭で階段を下り終えて、行きついた扉の向こう側で電気をつける。暗かった視界は一気に眩い閃光に見舞われ、俺は咄嗟に目を細める。

そしてその向こうにあったのは広大な空間だった。

どう表現すればいいのか……。それはまるで何もない場所だった。埃もなければ家具もない……ただの真っ白な空間がそこには存在していた。いや、良く見ればいくつもの扉がまた端にあるがそれ以外は何も視界には存在しない。

「これはすごいですね……」

「わぁ～」

エリカさんが、まあっと言った感じに口元に手を添えてアンズさんは開いた口がふさがらないようである。

どれ程の規模を簡単に説明するとするならば、何もないポケモンジムといったほうがわかりやすいのかもしれない。丁度公式のバトルフィールドを一回り大きくした感じの間取りである。これほどのスペースを一人で地下に設けたダイゴさんは一体何者すぎるんだろうか……。

「す、凄いですね」
「う、うん」
さすがの光景にサトシさんとカスミさんが若干ひきながらも素直に驚く。
「各自の部屋も用意した。前言っておいたように、送っておけといった荷物はすでに収容済みだ。まあ、ケンとサトシくんには悪いがこちらで用意したものを使ってもらうことになるな」
後で聞いた話だが、ミツルさんと他の女性陣は予め生活に必要なものをダイゴさんの知り合いという人に託したのだと言う。まさか本人もここに送られるとは思っていなかったようだが。
そこで俺が気付いたのは、もし自身の荷物などが消えていたら彼女らにかかる疑いはより濃いものとなるだろうということだ。しかしダイゴさんはサカキの企てを知った上で、あえて彼の策略に乗ったということになる。
読み合い、騙し合いのこの勝負……俺は知らない内に更にダイゴさんの奥知れなさを実感した。
「僕は構いません、もとより荷物なんて呼べるものはないですから」
「俺も、必要最低限のものはミツルさんに言われて持ってきてますから……」
サトシさんと俺はそう答え、ダイゴさんは納得したように頷く。
「それにしてもこの空間、何に使うのよ？」

カンナさんの疑問にダイゴさんは両手を合わせて音を鳴らす。
「良く聞いてくれた。ここはケンの修行場であり、お前達が指導する場所だ」
トレーナーを目指す俺も、そしてプロのこの人達にもダイゴさんの一言でわかったのだろう。修行においてはうってつけの場所であることを。その真意は修行がはじまった頃にでもまた説明することになるだろう。
「……めんどい」
そんな恐らく数々の修行プランを立てていただろう人達がナツメさんのそんなぼそっと言った一言に空気が止まる。いや、そんな感じがした。
「……ぅん、まあ今日は各自自分達の部屋でゆっくり休んでくれ。ちなみに部屋はあの一番奥の扉からだ。廊下になってると思うが、円形上にぐるっと回っている」
あらかたの説明を受けた俺達は一同にミツルさんとダイゴさんを二人おいて奥の扉まで歩いていく。本当に何もない空間を歩くという違和感に俺は酔いそうになるが、すでに酔ってふらっふらっとしているナツメさんがいるのでぐっと堪える。
「それにしてもハヤミくんは凄いね。私だったらこんな状況に突然なったら、きっと自分で答えなんて出せてないと思うから」
俺にそうやって声をかけてくれたのはアンズさん。身動きのしや

すい服装に身を包んでおり、雑誌で特集をしていた時の彼女のジムリーダーとしての外見とは異なる。

「そうですね、自分でもびっくりです。でも、俺には、あ、いや自分にはやることができたんで」

俺はそう言いながらリョウのことを思い出す。

あいつを、そうぶん殴る為だったら何だってやってやる。

「あ、そうそう。私とハヤミくんって同い年だと思うから、タメで大丈夫だよ？　私、１８だし」

「いや、でもジムリーダーですし……」

自分とアンズさんがタメだったということを確信してはいても、実際きくとびっくりするものである。まあ、特集を読んでいてが結構うわおぼえだったからな……。

「そういうの、私あんまり好きじゃないんだよね」

きっとジムリーダーにもなると、ジムリーダーだからというのがいやなんだろう。そしてそれは理解できるし、タメなのだ……そういう境遇がいやになるのも十分にわかる。

でも実行できない俺は、だからルカにバカ兄バカ兄呼ばれてるんだろうな。

「わかったよアンズ。これからよろしくな」

「……うんっ！」

にこっと笑うアンズさん……アンズの笑顔はとても可愛らしく、自分は目の前の彼女がジムリーダーであることを忘れそうになる。

「それなら俺のことはケンでいいから」

「わかった、明日から頑張ろうねケンくん」

そんな和やかな会話をする俺達を見兼ねてか、ナツメさんがふらふらしていたのに急にぴんっと姿勢を正して小さい声で、

「ひゅー……ひゅー……」

と茶化してくる。

「もうナツメちゃんったら、でも良いわね若いって」

そんなナツメさんと共に俺達を見つめてくるエリカさんに、いやあなたも十分若いですよと言い返したかったがぐっと押しとどめる。

それに反応してアンズさんが顔を赤らめて、

「ナツメさん！　エリカさんまで！」

と声を大きくしたが、どうしたんだろうな。

そんな俺達を見ながらカスミさんとサトシさんは微笑み、カンナさんは欠伸をしながら奥の扉へと先に行ってしまう。

明日から、俺の修行が始まる……。

それが一体どういったものなのか……、それは明日にならなけれ

ばわからないだろう。どんなものであっても、俺は絶対にやってみせる。

そしてそんな俺達が向かおうとしていた先から出てくる面影が一人。

「ん？　おお、皆おそろいか」

ぼさぼさと自身の頭を掻いて現れたのは、拉致され行方不明とされていたマサキさんの姿だった。

第十一章：始まるは特訓　Ｉ：ダイゴの隠れ家（後書き）

さてさてまあジムリーダー達の絡みとキャラ設定は自分の妄想が入っておりますのでｗ

結構な大所帯となっていますので、次話からどんどんケンと誰か＋αみたいな感じになると思います。

第十一章の予定は、ルカ程ではないですが結構あります。

では！

ルカ「うそっ！？」

第十一章：始まるは特訓　ＩＩ：暫しの休憩（前書き）

さてさて修行というものはいついかなる時もキャラ達の補強を第一としているのですが、問題なのはどうやったら修行を面白く書けるかという……

ルカ「別に面白くなくていいからさ、終わったことにして私の章にいってよ」

……ってなわけで、はじまります。

ルカ「ぶーぶー」

第十一章：始まるは特訓　ＩＩ：暫しの休憩

「な、なんでマサキさんがここに……？」

恐らく俺だけが衝撃を喰らっているのだろう。どうやらサトシさんはあまりマサキさんとは面識がないみたいだし、他の女性陣は何くわない顔をしている。

「ん？　おお、ケンくんやないか。ひさしぶりやなー」

確かマサキさんはコガネシティ出身で、今でも訛りがある。

「だって、拉致られたって……。もしかしてっ！？」

以前ニュースでみたマサキさんを拉致した五人組って……。俺は思い至る五人の女性を後ろを振り返って目で追って行く。

「あら、まだ話してなかったかしら？」

そう白を切るのはカンナさん。

「……」

俺と視線を合わせようとしないのはナツメさん。

「あらあら～」

と、惚(とぼ)けてみせるのはエリカさん。

「え、言ってなかったんですか？！」

どうやらここら辺の事情を詳しくはアンズさ……アンズも知らないのだろう。

「まあまあいいじゃない、ケンくんもマサキさんが無事だってわかって」

いや、まあそうなんだが。というかそういう問題ですかカスミさんっ！

「えろう心配かけたみたいやなー、すまんなケンくん。わいかて最初連れ去られた時は心底どうなるかわからんかったけど、ダイゴはんの作戦には興味惹かれるもんが多くてな～」

コガネの人はこうも陽気なのが多いのだろうか？　いや、まあ、うん。

「これからの作戦のことは良く聞いてるで。わいの力がどこまでサカキに対抗できるかわからんけど、自分達と一緒に頑張るつもりや」

マサキさんは若いながらに数々の権威を持っているのは言わないまでもない。モンスターボールをポケモンの入った状態で転送するシステム……その創作者の一人なのだから。

昔行われた各地方の研究員を集めて行われた一大プロジェクトにマサキさんは呼ばれたことがある。カントー・ジョウト地方の転送システム管理をマサキさん、１の島を始める諸島のシステム管理をニシキさん、ホウエンを確かマユミさんとマユミさんの姉アズサさん、シンオウ地方をミズキさん、そしてイッシュのショウロさん。

俺自身その人達との面識はないけど、マサキさんがその人達のことを喋っているのは良く聞いていた。というかいつもルカと一緒にマサキさんのとこでアルバイトできてたのは俺達二人にとって好運だったという他ないよな。

「今日はゆっくり休んでや。わいは今からダイゴはんに報告があるさかい」

そう言ってマサキさんは俺達の間を縫って通り過ぎていく。向こうのダイゴさんとミツルさんもマサキさんに気付いたのか、手を挙げている。いや、あれは俺達に向けてなのかもな。

でもマサキさんの力は大きいだろう。なぜってシステムの管理者であるということはロケット団も決死になって探しているはずだ。それでもシステム管理は監視され続けられているとはいえ、管理者の不在というのは心休まらないだろう。

「それじゃケンくん、いこっか」

「……あ、ああ」

俺はアンズに連れられてマサキさんの出てきた扉をくぐる。扉の向こうはすぐさま壁が目の前にあり、左右が廊下となっている。カーブを描く廊下は、ダイゴさんの言っていた通り円を描いているように感じる。うまり円状において部屋がいくつか内側と外側に点在しているということなのだろう。

見事なまでに真っ白のその廊下を歩きながら俺は自分の名前が貼り出されている扉を見つける。

「ここがケンくんの部屋だよ、丁度私のお向かいさんだね」

うれしそうに笑うアンズの笑顔に俺は恥ずかしながらに見とれてしまう。彼女がここまでにはしゃいでいるのは、俺と同い年だということなのだろうか。それはそれで俺も気が休める同年代がいることをうれしくは思っているのだが……。

「ああ、よろしくなアンズ」

俺は片手をあげて部屋に入ると、そこには整理整頓された家具が並べられていた。一室の広さは実家の俺の部屋より一回り大きい。結構掃除が面倒になる感じだな……。

それでも簡易キッチンとバスルーム、洗濯機・乾燥機など生活上に必要なものは揃っていた。

すごっ……。

俺は担いでいた鞄をおろして、ベッドの上で横たわる。

見上げる真っ白な天井。俺は深く息を吐きながら目を瞑る。

俺の知らない内に、世界は変わった。まるで夢見事のようにトップの名が変わり、世情も変わった。

それは少人数の人間を犠牲にすることで成り立てられたまた一つの日常。

未だに全てのジムリーダーや四天王達がグルになったとは俺には思えない。上の方針が変わった……ただそれだけを言い伝えられた

らそれを全うするのが仕事というものであるからだ。
そして少なくとも指名手配された面々を見て衝撃や疑問を抱いたものが必ずいる。
例え世間から敵視されようとも、いついかなる時でも味方はいる。
そんな人達と俺が今一緒にいるという事実がどうしようもなく、俺には不安で不確かでしょうがなかった。
しかし悩んでいても仕方がない、か。
俺は起き上がってテレビの電源を入れる。すると、それはニュース番組であり堂々的に報道されていたニュースがあった。
【今日の午後十時頃に豪華客船サント・アンヌ号が環礁と接触、現在沈没しているという事故が起きています。】
なに？
【サント・アンヌ号の乗客・乗組員およそ１５００人の内５０数名の行方がわからない状況です。】
淡々とニュースを読み上げていくアナウンサー、そしてヘリコプターから取られた映像だろうか？　ゆっくりと沈没していくサント・アンヌ号の姿が捉えられる。
【同時刻にそこへと通りかかったロケット団の新船艦ブラックシルフが乗客・乗組員を保護しましたが事件の詳細は未だ新たなる情報が入っておりません。】

あの客船が沈没？

今が冬とはいえこの国近辺に氷山なんてもんはない。それに向かっていたのはホウエンへのルートだ……。そして本当に環礁なのか？

【今日はブラックシルフの初航海でもあり、人命救助と海上防衛強化のために建造されたこの船艦はその存在意義を示したといっても過言ではないでしょう。】

ブラックシルフ……その名の由来はわからないが、見た目からしてその船は威圧的であった。常に人にとって強大な力は尊敬か畏怖の対象でしかない。

世間にとっては信頼できる味方であっても、俺達から見れば圧倒的な力量差を示しつけるにはうってつけなのだ。

【救助された乗客および乗組員は近くのカイナシティへと向かう予定となっています。】

俺はそのニュースをただ、ぼうっと見ながら次に移り変わったスポーツニュースへと興味を転がす。

今流行っているポケリングの試合結果を一瞥して、俺が応援している団体が負けたのを見てテレビを切る。

ポケリング……ポケモンレスリングの略称だが、ポケモン同士のレスリングの試合のことである。勿論人と人の試合も面白いが、ポケモン独特の卓越した運動能力から繰り出されるレスリングファイトもまたこれで醍醐味が存在する。

まあいいさ。

俺はニューラ、キュウコン、そしてケーシィをボールから呼び出す。

三匹とも現れるや否や自分達がいる場所がまったく新しいことに気付ききょろきょろとあたりを見渡す。無論、ケーシィはいつも通り眠っているわけだが……。こいつ……。

「今日からここがお前達の家だ。どうする？　ボールに戻るか？」

俺は家にいる時もこいつらには部屋で自由にさせている。戻りたい時にボールに戻り、俺は自由な時間にこいつらをボールから出す。

どうやらケーシィには聞かなくても良かったみたいだけどな。

「にゅっ」
「こんっ！」

どうやらキュウコンは部屋に残りみたいだ。俺はニューラをボールに戻してキュウコンの頭を撫でてやる。

「こ～ん」
「明日からまた大変かもしれないけど、よろしくな？」
「こんっ」

明らかに俺の何十倍と生きているこのキュウコンは、しかし、俺になついてくれている。その信頼に俺は応えなければならない……絶対に。

俺はキュウコンを十分に撫でてやると鞄から着替えを取り出してラフな格好になる。

早い卒業祝いとしてもらっていた新調されたトレーナー用の服をクローゼットにかけて、俺はキュウコンが床の絨毯で丸くなっている横のベッドにのっかり寝付く。

部屋の電気を消し、まだシャワーを浴びていないことに気付き悶々とするも意識は確実に遠のいていくのを感じた。

翌日、俺は扉をノックするアンズによって起こされる。

「おはようケンくん」

「……ふぁ～あ、ああおはよう」

眠気眼をこすりながら、俺は欠伸と共にアンズに答える。

「それじゃ早速修行開始だねっ！」

「……は？」

一瞬彼女が何を言っているのかわからなかった。まだ朝の六時……。ダイゴさんから支給されたポケナビの時計にはそう表示されている。

「あれ、今日担当のカンナさんから聞いてないの？」

あのカンナさんは何一つ俺に言わなかったぞ……。

「俺は修行のスケジュールすらなんなのかわかんないんだが……」

「うそっ！？」

ああ、わかった。やっぱりジムリーダーや四天王ともなると変な人が多いんだな。うん、とくに面倒臭がりな人物は最低でも二人はいる。

「そ、それじゃ早く支度して！　私も今日は担当だから、ケンくんを呼びにくるようカンナさんに言われたの」

「……お前も？」

「うんっ！」

俺の胸下あたりで朝日に劣らない笑顔を浮かべるジムリーダーに俺は視線をそらしながら、すぐ支度する、といって扉を閉める。

ったく、やってらんねえぜ。

と胸中おもいながらも、俺の脳内ではアンズの笑顔が脳裏に焼き付いて離れることはなかった。

クローゼットから服を取り出し、洗面所で軽く顔を洗い歯磨きを済ませる。

絨毯の上で寝ていたキュウコンを眠っている最中ではあるがボールへと戻し、俺はものの五分で部屋から出る。

「早いね」

「そうか？　男ならこんなもんだろ」

「へぇ～」

急に距離感が縮まったことを戸惑いつつもうれしく感じつつ、俺達二人は昨日最初に入った大広間（これからはそう呼ぶ）へと向かっていった。

緩やかなカーブを描いた廊下を渡り、大広間へと出るとカンナさんが大広間の真ん中で仁王立ちしていた。

「私を待たせるとはいい度胸ね！」

明らかに機嫌は悪そうだ。というか、カンナさんの性格上一番早起きが苦手そうだと思っていたんだが、どうやら違ったようだ。

「早く終わらないと私の時間が無くなるでしょうが！」

つまりは、そういうことらしい……。

「すみません、カンナさん！　遅れました！」

アンズが駆け足でカンナさんの方へと近づいていき、俺はカンナさんに頭を下げて挨拶する。

「まあいいわ。それじゃはじめるわよ、ラプラス！」

カンナさんが放ったボールから現れたラプラスは出ると同時に【ハイドロポンプ】を空中へと大量に撒き散らし、その後にすかさず【冷凍ビーム】で水量を調節して水を凍らせる。

そしてそこにできたのは氷のバトルフィールド。三次元空間をフルに活用できるフィールドが突如として出来上がる。

「氷の生み出すスピードとタクティクス、堪能させてあげるわ」

俺がカンナさんの表情から汲み取ったのは、四天王が四天王と呼ばれる所以であろう屈強な力強さだった。

第十一章：始まるは特訓　ＩＩ：暫しの休憩（後書き）

自分は実家関西なんですが、住んだことがないので関西弁は喋れません。

ルカ「間違っていたらすみません」

はい；；

えっと、次話から修行本格スタートです。週一といっておいてなんですが、本当に週何回更新するかわからなくなってきました；；

ルカ「おい、受験生」

では、また次話！

第十一章：始まるは特訓　ＩＩＩ：己の欠点（前書き）

祝、ポケットモンスター　メディター一周年！

ルカ「いぇ～い！」

読者の皆様、ありがとうございます。メディターもこれで一周年、時系列的には一カ月やそこらなのですが；；；

ルカ「そういえば、そうだね；；」

ま、まあ、これからもメディターをよろしくお願いいたします！

ルカ「よろしくお願いいたします！」

さて自分の参考にならない見通し計画案ですがメディターは次のポケモンシリーズが出る手前に終わると思いますので。さすがに次期シリーズまでは見越しておりません。

ルカ「それじゃ、第七十五話目をどうぞ！」

第十一章：始まるは特訓　ＩＩＩ：己の欠点

氷の檻……と表現すれば正しいんだろうか？

底が滑らかな球状でありながらも表面には凹凸によってできる光の乱反射がそのバトルフィールドの魅惑を引き立てている。

檻、と表現したのはそのフィールドは中で吹っ飛ばされたらフィールド外にはいかずにそのまま氷の壁に激突するという意味を込めてである。

つまり開いているのは真上の空間のみ。そこにボールを放らなければ互いのポケモンがフィールド内に入ることはない。

「こんなフィールド、はじめてだ……」

それが俺の正直なコメントであった。

「この中で私とアンズ、とあんたがバトルするわ」

カンナさんがラプラスをボールに戻してそう告げる。

「この氷の中ではトレーナーの指示は良く聞きとれない……。まあ耳の良いポケモン以外はね……。その中でバトルすることによってあなたの手持ちとの一体感、連帯感を鍛える」

……なるほど、そういうことか。

「ケンくん、私も参戦するから頑張ってね」

アンズは胸に期待を込めるような視線で俺の方を見上げてくる。

か、かわいいからやめてくれれば助かる……。

「あ、ああ」

俺はいつもの癖で眼鏡を押し上げようとするが……そうだ、眼鏡はあの時崖下に落したんだっけか。

「アンズはあんたの動きを止めることに徹するから、そこに注意しな。後は私かアンズどちらかのポケモンを戦闘不能にしたら修行は終わり」

……条件はやっぱり一番厳しいのが残るってわけか。よしっ。

「よろしくお願いします！」

俺は目一杯声を張ってそう叫ぶ。

俺の為、ではないかもしれない……。この修行も準備もダイゴさん達が掲げる敵を倒すために必要なものであって、俺個人の為ではない……。でも、そうであっても俺は感謝せずにはいられない。

夢にまで見ていたジムリーダー、四天王、そしてチャンピオン。その面々が俺を鍛えてくれる。なら俺はそれにこたえる！

「威勢はいいわね。それじゃいくわよ、パルシェン！」

「いってきて、アリアドス！」

フィールドの反対側へと移動していく二人に対して、俺は氷檻の中に現れた二匹のポケモンを観察する。

さすがというべきなんだろうな……ど素人の俺から見ても二匹は強い。アリアドスは奇妙に自信の足と接触する氷の間に糸を張ることで滑り落ちることを未然に防ぎ、パルシェンは殻を閉じて思うがままに氷の上をスケートしている。

あれが彼らの準備運動といったところか。

アリアドスは氷檻のてっぺん付近でフィールドを観察し、パルシェンはすでにフィールドの感触を掴んでいる。

この面子にどうやって挑むか……。やっぱり、お前だよな。

「いってこい、ニューラ！」

「ニュラ！」

高く放ったボールから飛び出したニューラはそのままの勢いで跳躍して氷檻フィールドに突入していく。

「あら、ニューラ。いいわね」

「氷タイプ持ってたんだ……」

カンナさんとアンズさんの声がダイゴさんからもらったインカム越しにきこえてくる。それはまだバトルが開始する前だからだろう……スタートしたと同時にお互いの声は聞こえなくなるはずだ……。いや、もしかしたら俺のはダダ漏れかもしれないが……。

「それじゃ行くわよ。バトルスタート！」

カンナさんの合図と共にインカムの音声が途切れる。

俺はフィールドの中を凝視しながらニューラの様子を窺う。最初はあいつも二体のポケモンを見て戸惑ってはいたが、臨機態勢に入る。

こっちからの指示はそんなに聞こえない……。それはつまり聞こえなくはない、ただし細かい指示はやりづらいということだろう。

カンナさんとアンズの姿は氷檻越しに見ることはできる。そして彼女達が指示をなんら出していないということも。

「アリアドスを警戒！　滑れ！」

最初にカンナさんが自分達の役割を俺に言ってくれたのは、そうでもしないと俺がすぐさまにやられるということを見越してなんだろうな。ちっ。

アリアドスは案の定ニューラに目掛けて蜘蛛糸を吐き出してくる。ここは氷上のステージ、ニューラにとっちゃ少しは動きやすいはずだ。

ニューラは俺の声を聞き届けたんだろう、難なくアリアドスの上からの攻撃を避けてはいる。しかし、

「ニュラっ！」

突如ともなく回転しながら突進してきたパルシェンに吹っ飛ばされてしまう。

吹っ飛ばされながらも回転し、ニューラは壁にぶつかるまえに態勢を立て直す。そしてそのまま吹っ飛ばされた勢いを使って氷の壁を滑走する。

小さな体という利権を使ってのスピード戦法。俺はそこに賭けるしかない。

「ニューラ、まずはアリアドスを狙え！」

獰猛に口元が歪むニューラはその左手に【氷の礫】を発動し、そのままアリアドス目掛けて突っ込んでいく。

そんな状況において俺はアンズに目をやるが、彼女は何も指示はしない。

アリアドスが口から【蜘蛛の巣】が吐き出される。しかし俺はそんなの予想済みだ。

「ニューラ！」

この一言で伝わる確信を俺は得ている。だからこそ前の指示でニューラは左手だけに【氷の礫】を発動させた。そう、余った右手で【蜘蛛の巣】を切り払えるように。

ニューラは右手でアリアドスの攻撃を切り裂き、そのまま左手の氷塊をぶつけようとしていたがアリアドスがいきなりニューラからの視界からいなくなる。

そう、アリアドスが足に絡めていた糸を解いたのだ。降下するア

リアドスのいた氷の壁にニューラの攻撃が直撃し、すかさずアリアドスの口からではなく、尻から【蜘蛛の巣】が吐き出され諸にニューラを捕える。

「ニュラっ！？」

読まれてたのは俺の方なのか？！

下へと落ちること叶わず、ニューラをパルシェンの猛追が襲う。身動きができない状態での正面衝突は計り知れない程のパワーを誇る。それは頑丈なパルシェンの殻とその棘から見ても一目瞭然だ。

今度は壁に激突し苦悶するニューラを俺はただ見ていることしかできない。

打開策、あいつの打開策を考えなきゃやられるっ……。

糸を凍らせるか？　いや、そんな暇はない。

腕までもがぎっちりと縛られている……。あいつが使える特殊技……。そうかっ！

「ニューラ、【嫌な音】！」

俺の咄嗟の指示にいかに迅速に対応できるのかも鍛えられるのであれば、ニューラは確実に俺の意図を汲んでいる。

追撃しようとしていたパルシェンの突進は外れ、ニューラの体を掠める。その摩擦によってちぎれた【蜘蛛の糸】から脱出したニューラはそのまま壁を滑走してアリアドスへと向かう。

しかしアリアドスはパルシェンがニューラを攻撃している間にすでにトラップの下準備を終えていた。

引きつめられるようにして吐き出された【蜘蛛の巣】はこのステージの唯一のアドバンテージをかっさらってしまう。

「ジャンプっ！」

なら、こっちも自分のステージをつくってやるさ。

アリアドスの頭上を飛び越えたニューラはその鋭い爪でてっぺん近くの氷へとしがみつく。そして、

「【雪雪崩】！」

足の爪のみで体を氷と垂直に支えながら、ニューラは両手の爪でてっぺんの氷を小さく切り刻み雪を大量に削りだしていく。

パルシェンがすぐさまにニューラ目掛けて【棘キャノン】を連発するが、あたりそうになる起動の棘はニューラが外壁から大きく削り取った氷によって防御される。

そして【棘キャノン】自体も細かいが故にニューラの手助けとなる。

アリアドスはニューラが行きつきそうな場所に予め糸を飛ばそうとするが、よけようと思えば避けられる。

次第に溜まって行く雪はアリアドスとパルシェンへと襲いかかり、

フィールド底は昔の滑走できる氷ではなくしっかりとした雪のフィールドへとその姿を変えていく。

この三匹の攻防を外から見ている分には綺麗なスノーボールといってもよいかもしれない。

でもま、あらぬ抵抗なんだろうけどな。

フィールドのてっぺんがすべてニューラによって雪に還元された時、ニューラはもちろん体力の限界だ。それを百の承知でやったのには理由がある、だがこの二匹相手にはそれが読まれているのだろう。

アンズと同い年であるが、アンズはあのキョウの一人娘だ。場数がやはり違う。

ま、俺達は初日にしては良く頑張ったよな……ニューラ。

ニューラが【メタルクロー】からの【ダブルアタック】をもしパルシェンとアリアドスに挟まれた時使おうとしている。そしてそれが俺達の切り札。

フィールドを見る限り、俺はあのキワメさんから教えられたイーグルアイというわけのわからない能力を使えてはいた。円形にフィールドを独走しながら、徐々にアリアドスとパルシェンを中央の方へと追いやっていたのだが……。

接近してくるパルシェンはその殻を開いてニューラの右手をがっちりと封じる。そしてアリアドスは【糸を吐く】でもう片方の左手を掴む。

ふぅ……。

次は違う戦法で挑むしかないか……。

至近距離、まあゼロ距離から喰らう【棘キャノン】と【毒づき】にニューラもたまらなくノックアウトされる。

しかし、トレーナーの指示なしでここまで動けるなんて……。さすがとしか言いようがないな。

カンナさんとアンズがそれぞれのポケモンをボールへと戻して、こちらに歩み寄ってくる。無論、インカムの通信は再開されており向こうからこちらに歩み寄ってくる際にも会話が成立できる。

「弱いわね、あんた」

「ちょっと、カンナさんっ……！」

は、はは……。くそっ。

「精進しますよ」

俺もニューラをボールへと戻して向こうへと歩み寄って行く。

ありがとなニューラ、負け戦に付き合わせちまって。

「とりあえずあんたの戦い方はわかった」

「ええ、そうですね」

カンナさんの鋭く尖った眼鏡の奥に潜んでいるその眼光におれは

固唾をのみ込む。アンズは相変わらずのあどけなさっぷりだが……。

「あんたに足りないのはポケモンの身体能力ね……」

え？

「うん……。ケンくんには悪いけど、ニューラの方がケンくんに追い付けていない」

な、バカな……。

そんなバカな……。

俺はニューラの入ったボールを見やる。

ニューラが俺についていけなくなっている……？　そんなバカなことあるわけ……っ！！

「気付いたみたいね？　ダイゴでのバトル、そして今までのバトルだってあんたのニューラは良くはやっていても、想像以上に動かせたことがない」

……そうだ。

ダイゴさんの時然り、今に然り、俺は内心諦めていた。俺は行けると思っていても、バトルにおいて俺はニューラがバトルに勝てないと諦めていた……。だから逃げのバトルを……っ！！　くそっ！！

「ケンくんっ……」

「とりあえず、先ずはそこからね」

俺は返す言葉が全く見当たらなかった……。

第十一章：始まるは特訓　ＩＩＩ：己の欠点（後書き）

修行とはシリアスに！

そしてダイゴ戦でのバトル時の伏線に皆さまは気付かれたでしょうか？

それはルカ対カナとのバトルでもケンのそんな内心の逃げというのが描かれています。リョウの時もそうですけどｗ

ルカ「あたためたね～」

頑張りましたｗ

それでは皆様これからもよろしくお願いいたします！

第十一章：始まるは特訓　ＩＶ：自分達の限界（前書き）

さてさて、更新できるのならば随時更新……ま、それが普通なんでしょうが；；；

ルカ「なんかバカ兄ばっかずるい」

まあまあそう言わずに。

さて、次話は閑話休題回になるかもですｗ

ではどうぞ！

第十一章：始まるは特訓　ＩＶ：自分達の限界

俺の欠点が自分のポケモンにある……。それはまったくもって予想だにもしなかった……。

アンズは俺のことを心配げに見守ってくれているが、カンナさんは頭をかりかりと掻いて眼鏡の位置を調整する。

「とりあえず、あんたニューラの進化の仕方知ってるでしょ？」

ニューラがマニューラへと進化できる方法は鋭い爪という道具を持たせて夜にレベルを上げること……。確かそうであったはずだ。

俺達がレベルを用いるのは相手ポケモンと自分のポケモンとの差をつけやすいからである。しかし人間然りポケモン然り、レベルの上限などは存在しない。それは数値でレベルを決定してしまうことに対する倫理的問題と数値では実力の本質を完璧に明確化することはできないからだ。

つまり俺達がレベルを用いる場合、それはポケモン達を鍛えたりしたり自身と相手のポケモンの実力の差を自慢したりする時ぐらいだ。

「あんた、鋭い爪は持ってるの？」

「……いえ」

カンナさんが言いたいことを俺は瞬時に理解した。

ニューラをマニューラへと進化させろ……。

鋭い爪というアイテムを俺は見たことがない。そもそもポケモンに道具を持たせて戦うというのは中々に難しい。なぜなら人工的に作られたものであろうが自然のものであろうがポケモンがその道具をまず理解しなければならないからだ。

知能の高い彼らにとって道具に対する順応性は早い。しかし道具によっては使用するタイミング、そのタイミングを自分にゆだねられるのか、はたまたトレーナーの指示を待つべきなのか……等。更には道具そのものがポケモン達にとって負担となるかもしれないし、動きを制限される可能性も考慮しなければならない。

まして鋭い爪は天然物である。ハナダシティという先進街に住んでいた俺にとってオツキミ山でも行かない限りそういったものにお目にかかる機会はない。

「そう……。まあ野生のニューラ達が持っている可能性も低いからね」

カンナさんは俺の持つニューラの入ったボールを見ながら答える。

「それに野生のニューラが鋭い爪を持っているのは、その集団内のリーダーですからね。捕まえること自体難しいです」

アンズの言う通りである。こういった道具を持っている野生ポケモンはその自身のグループや縄張り内でのリーダーである場合が多い。実力があるからこそ進化する資格が与えられるといっても良いだろう。

だから見かけるのも少ないし、捕まえるのも難しい。

「仕方がないわね。これ、あげるわ」

カンナさんは自身の私服であるスーツらしき服の胸元の第二ボタンをはずす。スーツによって引きしめられていても、そのボタンが一つ取れることで豊満な胸が垣間見える。

うっ……直視できねえ。

そしてカンナさんがその胸元から取り出すのはネックレスへと加工された鋭い爪のアクセであった。

通常の鋭い爪はニューラの親知らずといわれてもいる。つまりニューラの体の一部であり、それが生えているニューラはマニューラへと進化しやすい。二つしかない爪が進化することで三つになるのには、それが一番の理由ではないかという説が学会で今最も強いという記事を読んだことがある。

「これ、使いなさい」

そういって渡されるのは鋭い爪のネックレス。

「これであなたのニューラがマニューラに進化したら、あなたの欠点は克服されるでしょうね。それからが本格的に改善できるわ」

それはカンナさんの善意だ。

手渡された時の指の感触、彼女から出る言葉の柔らかさ、そして俺のことを想ってくれての未来をも見越してのカンナさんの善意……。

でも、俺は……。

「すみません、カンナさん。やっぱり受け取れないです」

カンナさんは俺のことを眉間に皺を寄せて見つめるも、そう、といって軽い溜息をつく。

「まあ、そういうことならそれでいいわ。あんたの我を壊してまで修行させる気は私にもあんたにもないからね」

「え、カンナさん？」

俺とカンナさんの間では視線の交錯で会話は成立した。ま、アンズにはわかんなかったみたいだけどな。

「でもそれはあんたがかけておきなさい。いざという時もあるかもしれないしね」

俺はカンナさんへと返そうとして伸ばしていた腕を抑止させて、ありがとうございますと頭を下げる。

「あの、ケンくん？　どうして？　どうして、進化させないの？」

アンズ……彼女の手持ちを俺は知っている。あくまで協会の公式認定されているジムリーダーが使用するポケモン達、をだ。

だが彼女の手持ちから見てしても、愛着があり、だからこそ進化をさせているように感じる。

でも、俺は……

「ごめんなアンズ。でも、俺はこいつといたいんだ。なにもマニューラが嫌とか、そんなんじゃなくて、これは俺とあいつの意地みたいなもんなんだ」

アンズはますますわからなくなったんだろう、俺のことを困惑したような表情で見つめそしてカンナさんの方へと見向く。

「ニューラの最大の魅力をあんたは掴んでいる。掴んでいて、ちゃんと発揮させようとしている……その歯止めをかけているのがニューラ自身の身体能力の限界」

カンナさんはアンズの頭をポンっと一回手を置いてやり、修行を再開してくれる。

「……そうですね。ケンくんは他に二匹ポケモンを持っているって聞いたけど？」

「ああ、キュウコンとケーシィだ」

俺は二匹をボールからだそうとするが、それをカンナさんは視線だけで留めさせる。

「いえ、今はニューラのことを考えるべきよ。ニューラの特徴である高い攻撃力とスピード……それを考慮してのあんたのスタイルは限界。だから違う道を考える」

違う道？

確かに俺はニューラの最大の特徴であるその二つを生かす戦い方をとってきた。そして、まだまだいけると、高みを取れると思って

いた……まさかそれがニューラの身体能力を通りこしていただなんて知らなかったけどな……。

俺はこいつの何を見てたっていうんだ……くそっ……。

自己嫌悪に陥りそうになる俺に向けて放たれるカンナさんの言葉は、しかし現実的なものであった。

「ニューラの動きを見ている限り、ニューラ自身もまだまだ自分に鍛錬が足りないと思っているんでしょうね。でも違うわ……ニューラもまた自分が限界を迎えていることを自覚していない……だからあなたの望みをかなえられない自分はまだまだ高みを目指さなきゃいけないと思っている」

それは俺にとって更なる衝撃を覚えさせた。

「珍しいわ……少なくとも、私があんたのような立場にあったら良かったのかもしれない」

「え、それはどういう……？」

俺はカンナさんの言葉に一種の違和感を感じたがカンナさんは、いえ、と置いて話を続ける。

「あんた達はその若さで己の限界へと達している。キワメさんはそれがわかっていて、あなた自身の限界……というよりもあなたが持っている可能性に気付かさせてくれたんじゃない？」

俺自身の可能性？

っ！！

「思い至った？　まあ、あの人のことだから変なこともしたでしょうけどね」

カンナさんが思い出し笑いを浮かべ、それに思い至ったアンズも苦笑を浮かべる。

キワメさんのとこで気付かされた俺の可能性……イーグルアイ。

たがそれはなんら俺にとって新しいことではなく、あの修行の間で自分が完璧に自覚するようになっただけということになる。

「だからあんたが先ずしなければいけないこと……。それはあんたの実力を下げることよ」

「え？」

実力を下げる……？　でも、俺達の限界であって先のバトルは負けた。なのに、なんで？

「えへへ、ケンくんやっぱり困ってますよ？」

アンズはわかってるみたいだけど、む、なんかいらつくなアンズのくせに。

「私達があんたに教えることは、あんたが知らないバトルスタイル。そしてあんたはそれをただ見るだけ」

ただ、見るだけ？

「ふ、復習とかは……？」

「もちろん、だめだよ」

俺の疑問に笑みと共に答えたのはアンズだった。

ただ見るだけが、修行……？

「ふふ、まああんたにもわかる時がくるわ。先のバトルでもあんた達は私達が予想を超えるバトルをしてくれた。それで十分、いえ十分過ぎたのよ」

言っていることがわからなかった。

ただ他人のバトルを見るだけで強くなれるのか？

俺は今までにスクールでもなんでもポケモン達との修行をかかすことはなかった。スクールには放課後におよそ毎日残って同級生の奴らに付き合ってもらってバトルの練習に励んだ。

無論毎日付き合ってくれるような奴はいなかったが、日替わりであっても残っている奴らと常にバトルの練習をした。

だからこそ、俺はここにいると思った。もっと強くなれるから。更なる修行も、きついトレーニングも覚悟の上だったのに。なのに。

「だからそのニューラを私に預けて……まあ、今日はアンズと一緒に町にでも行って遊んできなさい」

「「……え？」」

俺とアンズの声がハモる。

遊びにいってこい？

「今日の修行はここまで。私の方から他の面々あんたのニューラの今後のことについて話し合って検証するから。アンズもここは初めてでしょ？　慣れてきなさい」

唐突に出された案に、俺とアンズは肩を並べて立ち尽くしていたが徐々にアンズの頬が紅く染まって行くのを俺は気付いた。

「ア、　アンズ大丈夫か？」

「う、うん！　私は大丈夫だけど、ケンくんは？！」

「俺？　俺は別になんとも……」

その俺の一言の後にアンズがちょっとがっかりしたそうになるのを俺は全く真意がつかめなかった。

「とりあえずアンズとケンは町に出て遊んできなさい。アンズ、変装はするのよ？」

「あ、はい」

身元がばれてはいけない俺達にとって、変装は重要であろう。アンズは髪をオールバックで一つに結んだ、ジムリーダーアンズとわかってしまう特徴をあらわとしている。

「あ、俺は？」

「あんたは大丈夫でしょ。それに眼鏡がないんだったらわからないわよ」

たしかに逃げていた時は眼鏡をしてたがキワメさんの修行で無くしてしまった。結果オーライというやつなのか？

そう思いながらも俺はカンナさんが差し出す手にボールを預ける。

「はいはい、それじゃ行った行った」

カンナさんがそろそろ邪険に俺達を追っ払い始めたので俺は腑に落ちないながらもアンズと一緒に入ってきた扉へと戻って行く。

「あ、あのねケンくん」

「ん？」

円状の渡り廊下を通って自室へと戻ろうとしていた時、アンズがおもむろに俺へと言葉をかける。

「え、えっとさ、これってデートになるのかな……？」

彼女の一言に、俺の脳はその言葉一つ一つをゆっくりと解析し、そして弾けるようにして熱くなる。

「あ、えっと、ごめん！　それじゃ私すぐ支度するから！」

そう言い残してアンズは自室へと駆け足で入って行く。俺は一人廊下に取り残されて、彼女の言った言葉をもう一度脳内再生で噛み締める。

……アンズと、デート？

デート……？　いやいや。いや、でも……。

とりあえず俺は自室で支度を終えるまで煩悩が抜けることはなか

った。

第十一章：始まるは特訓　ＩＶ：自分達の限界（後書き）

鋭い爪設定は自分の妄想ですのでご了承ください。

ま、レベルの用途然りですけど。

でもこういう設定は考えるのが楽しすぎてしょうがないですねｗ
たまに無理がくるような時があるかもしれませんが、でもでも次話は自分でもある意味楽しみな回になりそうですｗｗ

では！

第十一章：始まるは特訓　Ｖ：さあ、どうぞお嬢様（前書き）

さて、ケンとアンズはデートをするのか？　お楽しみにｗ

純粋にこの話を書いていてアンズが更に好きになってしまったことに関しては、何も言えません；；ｗ

では、どうぞ

第十一章：始まるは特訓　Ｖ：さあ、どうぞお嬢様

俺は自室で訳の分からん胸の高鳴りを感じていた。

デート……？　そりゃ、聞きなれてる単語ではある。したことだってあるさ……でも、それは形式的なものだった……。

アンズと、デート？

彼女がジムリーダーである以前にアンズという異性に俺は少なからず惹かれているのだろう。じゃなきゃ、こんなに変な気分になったりはしない。

いや、待て、これはデートじゃなくて町探索であって、デートじゃなくて……えぇい！

俺はバトルの練習やトレーニングの時に来ていたラフな服装を脱ぎ剥いで、シャワーを浴びる。バトルの時にかいた汗を湯で洗い落しながら、全身を拭いて鞄にある私服へと着替える。まあ、ハナダにいたころはこれでもお洒落にはきをかけていたからな……人を不快に思わせない程度の身だしなみはできているつもりだ。

鏡の前で髪を少し整えて、シャツの重ね着の上からジャンバーを羽織る。ズボンはジーンズで財布のチェーンやベルトが少し出て見えるようにしている。靴は、まあ……ブーツじゃなくてもいいだろ。それにアクセも……。

俺はポケットに入れて脱ぎ去ってしまったズボンからカンナさんからもらった鋭い爪でできたネックレスを取り出して首にかける。

デオドラントを忘れずに、俺はポケギアの時計を見る。

部屋に戻ってから２０分か……。アンズの方もそろそろか？

俺は部屋を出て廊下でアンズの扉の前で待つことにする。今の俺の手持ちはキュウコンとケーシィのみ……。カンナさんに預けているとはいえ、やっぱりニューラのことは気になる。

それにしても、日中に俺達が入ってきた場所から出たら目立つんじゃないのか？　そんな風に思っていたら、アンズの部屋の扉が開く。

「あ、ケンくん、ごめんね！」

俺の目の前にいる少女は俺の知っているアンズではなかった。髪をオールバックで結び、くのいちのような格好ではなかったからだ。

髪を前に下ろして左右に分け、可愛らしいワンピースに身を包んだ彼女にもはやジムリーダーとしての風格を醸し出してはいない。それに何だよそのヘアピンは……可愛すぎるだろっ！

肩にかかる程の髪が、彼女が慌てながら俺のもとへと駆け寄ってくる時にさらさらと揺れる。ちょっとだけファーが襟元についた白のジャケットが彼女の少女らしさを引き立たせている。

「ま、待った……？」

見ることのなかったアンズの女らしさ……。おいおい、待てよなんだよこのギャップ！！

俺を見上げて、俺を待たせたことに対しての罪悪感から両瞳をうるうるとさせている。

「い、いや……俺もさっき支度終わったとこだから」

「……ほんと！？　あ～、良かった～」

ほっと胸をなでおろす彼女を目下に置きながら、俺は妙に安心する……そんな感情に陥る。

「それにしても、早かったな」

「え……？　えへへ、そ、そうかなぁ……？」

前髪をいじりながら照れ笑いする彼女に、あ、くそ、やべぇ……。

なんで、俺がアンズに惹かれるのか……それはわからなかった。スクールにいる奴らも可愛い女子はいたはいた……でも、なんでこんなに……。

「それよりケンくんも、格好いいじゃん」

「そ、そうか？　それよりも、どうやってここから出るんだ？」

生憎、この居住区には窓がない。そりゃそうだろう……もし窓なんかがあったら海中に潜っている人間にばれてしまうのがオチだ。

てかそもそもに海の中にあるのか？　あったにしてもこんな多規模な施設……あるだけでばれるんじゃ……？

「あ、確かダイゴさんが地上に上がる時はトクサネシティのゲームセンター勝手口からって言ってましたよ？」

ゲームセンターの勝手口……？　そんなとこの方がますます怪しいんじゃ？　っていうか、なんでゲーセンの人にばれるんじゃ……？

「なんかダイゴさんのご友人がゲームセンターの店長さんらしいです」

「っえ？」

いや、なるほど、そういうことか……。

あまりきな臭いこを言うつもりはないが、カジノなどやパチンコ店の経営者に一般人はいない。一般人というより、経営において一般人では経営が成り立たないということだ。

「そこから出れば大丈夫みたいだよ？　あるいはお客さんの一人として混じって出ればいいみたい」

「へぇ～」

俺達は二人でトレーニングをした部屋へと再度訪れる。カンナさんが作り出していた氷のフィールドはすでに跡形も無く、またもとの真っ白いフィールドになっていた。

「え……？」

「ここのフィールドは特別な素材をつかってるんだって。なんだったけな、ほら最近ニュースにも上がってた……えと、えと……」

アンズが必死に思い出そうとしているところを俺は横目で見ながら、俺自身が思い至る。

「ああ、あれか……ＫＡＭＥＬＥＯＮだったか？」

「そうそう、それだ！」

ＫＡＭＥＬＥＯＮ……まあ、詳しいことはわからないがなんでもカクレオンの特殊な特性を利用してつくられた材料らしく、ポケモンが与えるタイプの技によって材料の質も変わるというものらしい。

つまりさっきのカンナさんが作った氷の檻は、フィールドの一部を氷の質へと変化させた……。そしてこの材料の魅力はノーマルの技なら元に戻るということだ。時間性のこともあったが、そこまで詳しくは覚えてはいない。

実用化がまだされてはなく、俺自身ニュースで見た時どんな用途があるのか不思議でならなかったがなるほどな。

そんなちょっと専門的な話で盛り上がりながらも、俺達はまたも違う扉を経て地上へと続く階段を上って行く。ちゃんと扉の表示にゲームセンター裏と書かれていた。

「アンズはどっか行きたいとことかあるのか？」

「え？　ん～、トクサネシティのシンボルマークのロケット打ち上げセンターとか……？」

人差指を顎に当てて首をかしげるアンズに俺は軽く吹きだす。

「あ、ちょっと！？」

「いや、だってアンズそんなとこ行きたいとか色気無さ過ぎ……」

かーっと耳まで頬を赤く染めるアンズはぽかぽかと俺に殴りかかってくるが俺はどうってことなく受け流す。

「もぉ、ケンくんなんて知らないっ！　そ、それにダイゴさんが行くならそこだって――――！」
「悪い悪い、さ、どうぞお嬢様」
俺は上階へと出るドアを開いてアンズをエスコートする。
アンズは黙ったままドアから出て、俺は後を追う。ガチャっと扉を閉めて、俺が目の前に見るのはダンボールの山積み。
「へぇ、道具室か……？」
「そうみたい。でもこれならこっそり出られるね」
暗い部屋にはダンボールや使われていないロッカーが乱雑しているが、不思議と埃などが見受けられない。
道具室から出て、従業員用の廊下を通って専用の扉を出る。扉扉ばっかだな……。
「ありがと」
ま、それでもエスコート精神は忘れないが。
アンズと一緒にゲームセンター内へと出ると、そこにはけたたましい音楽とゲーム音が鳴り響いていた。鼓膜を激しくつんざく特有なあの騒音が煌めくネオン系の蛍光が視聴覚へと訴えかけてくる。
ハナダでも散々友人に付き合ってゲーセンには行ったことがあるが、まあ来たいと思っても無い時にこういうとこは来るもんじゃないな。

アンズも我慢してるものの、俯き気味ではある。
「さ、早く出ようぜ」
「うんっ」
俺達はすたすたとアンズと一緒にゲーセンから出て、一息つく。
「ふぅ……。普段あんなとこ行かないからびっくりしちゃった」
「……そうなのか？」
ちょっともじもじとしながら、こくりとアンズは頷く。
「お父さんと一緒に修行してたし、お洒落はしたことあるけど外出することはなかったから……」
アンズにとって、ジムリーダーの娘、四天王の娘としての重圧は計り知れなかったんだろう。だから同世代の友達などおらず、同世代の者と外出して楽しむなんてことを経験してこなかったんだ。
だから自室でお洒落して、その小さな鳥かごのなかでさえずってごまかしていた。
「今日は思いっきり楽しもうぜ」
「え？」
俺は黙って微笑み、アンズの片手を無言で引っ張って行く。
「あ、ちょっと、ケンくん！？」
「へへっ。まずは宇宙センターだろ？」

俺はこの島町のシンボルともいえる宇宙センターへと二人で向かう。高くそびえる建物に、ロケット打ち上げ台……島の一部分となっている程の巨大施設は常に一般観光客へと公開されており、その観光業をも収入へと当てているのだそうだ。

なんだか大きな白い岩も見られ、なんでも後から聞いたところによると打ち上げ成功祈願の岩らしかった。

そんなことを知らず、俺達二人は宇宙センター内を見て回ることにした。こっちに来る時海添いを歩いてきたがその時見かけたフェリーを見れば、結構な観光客がツアーで訪れているのかがわかった。中にすげぇいるしな。

「こちらが最初にこのステーションで打ち上げられた衛星の写真です。実はもうすぐ新たな衛星の打ち上げが予定されておりますので、後々――――」

と、どっかのガイドの話を片耳で聞きながら俺はアンズが見とれている一般的衛星の模型へと視線を移す。

一般的な衛星といっても衛星はそれぞれに用途が違っている。そう何機もバンバン宇宙へは打ち上げられはしない……気象観測だったり、ポケギアをはじめとする通信機器の通信用だったり、それとなんだったかＧＰＳ……？　とかなんとか用のもあるとかないとか……。

でも俺達一般人にとってはその違いなんて知るよしもない。

「凄いねケンくん」
「なにが？」

そりゃ、まあ凄いんだろうが……。

「私達もいつか宇宙へと行きたいね」

そうはにかみながら微笑むアンズの言葉を聞きながら、またも胸の鼓動が一際高く唸る。

私、達……？　いや、ちょっと待て俺。きっと言葉のあやだ。てか、なんでそんなことに敏感になっちゃってんの俺？！

「そ、そうだな」

平静を保とうとしたが、結局は噛んでしまう俺。

アンズの様子を窺うにも、衛星の方へと顔を向けている為探ることはできない。しかしアンズがポケナビをいじっていたような感じはした。写真でも撮っているのだろうか。

「それよりもさ、なんかこれから打ち上げがあるみたいだから見に行かね？」

「ほんとっ！？　いくいく！」

本当俺と同い年なんだな。全然そこらの同年代の女子とアンズは変わらない。

なにもそれが悪いことじゃないし、驚いている俺の方が悪いんだろう……。アンズが俺と同い年でジムリーダーという役職についていたから……それがどんなにアンズにとって重荷だったのか、俺は考えたことがなかったから。

だから今日は目一杯楽しませてやるよ。なんか偉そうだけど、さ……。いつの時代も女をエスコートするのは男だろ？

だったらアンズがジムリーダーだったろうが、実力が俺より上だろうが関係ない。

「どうぞ、お姫様」

俺はそう言って左手をアンズへと差し出す。

「え？　……ぁ、うん。はいっ」

頬を朱に染めながらもアンズは俺を正面から直視し、俺が差し出した手の平にゆっくりと右手を重ねる。

彼女のぬくもりを逃がさないように優しく握って、俺はにかっと笑う。

「参りますか」

「うんっ！」

第十一章：始まるは特訓　Ｖ：さあ、どうぞお嬢様（後書き）

にやにやして書いたのは言うまでもないですねｗ

ルカ「変態」

え、ちょっと！

ルカ「アンズさんが可愛いのは認めるけど、Ｋａｒｙｕは変態」

ぐっ・・・。

ルカ「それで次もまたでれでれなんでしょ、どうせ・・・」

さあ？

それでは次話でｗ

第十一章：始まるは特訓　ＶＩ：彼女の強さ（前書き）

さて、デート気分がまだ残っている二人。

その続き。

うーん、そろそろ物語が進んでもいいと思うんですけどね；；何分時間がかかるかかる；；

ルカ「はいはい、それじゃスタート」

そういうことですｗ

第十一章：始まるは特訓　ＶＩ：彼女の強さ

俺達はもうすぐ衛星が打ち上げられるという話を聞いて、発射台を一望できる展望会へと来ていた。

そこの天井各所に設けられたモニターでは今打ち上げられようとしている衛星の説明がＣＧやら何やらをふんだんに使って行われている。

どうやら今回打ち上げられるのは情報統制塔として様々な衛星をバックアップする為のものなんだとか……。難しいことはわかんねえな……。

そうやってぼんやり眺めていた俺だが、変わってアンズは顔面蒼白といった表情で俺の服の袖をぎゅっと握っていた。

「アンズ……？」

「ケンくん、あ、あれ……」

アンズが指をさす先、そこにあるのは打ち上げられる前の衛星ロケット。そしてその補助ブースターに描かれている大きな赤々としたマーク……Ｒ。

「！！」

おいおい、マジかよ……。いや、マジなんだ……。実際こうでなければならないんだろう……。浮かれていて忘れかけていたんだ。

俺達の敵が今や日常にあるんだと。そしてその勢力は日々強大な

ものへと変化していっているということを。

……おいおい、ちょっと待てよ。今打ち上げられようとしているのが情報統制なんとか、なんだろ？　ってことは、あれが打ち上げられちまったら……。

予想もしたくもない結末を想い浮かべていると、突然ポケナビが震え出した。

「はい、もしもし？」

「ケンか？」

その声はダイゴさんのもので、俺は知らない内に安堵の息をついていた。

「今、宇宙センターにいて、そ、それで……」

「ああ、知ったか。気にするな……それよりも、ちゃんと見ておけよ」

ダイゴさんの言葉に焦りはなく、ただ淡々としていた。

「見るって、何を？」

「勿論、打ち上げをだ」

ポケナビ越しに俺はアンズと共にガラス向こうの景色を眺める。すでに衛星の打ち上げが発射十秒前となっていた。

迫る発射までのカウントダウン。

5、4、3、2、1、テイクオフ……。

溢れるばかりの燃料の噴射がロケットの底から起き上がり、その巨体はゆっくりと宇宙へと向かって上昇して……っ！？

「っ！！」

俺とアンズだけではない……。この展望台にいる全ての人間が息を飲んだ。

なぜなら俺達の網膜へと焼き付けられたのは、華麗なる飛翔を見せるロケットの晴れ姿ではなく、発射台を巻き込みながら下降して爆発する無残なものだったからだ。

打ち上げ失敗、その残酷な現状が見ている者たちへと叩きつけられる。しかし、俺達はこれを喜んでいいのだろうか？　例えロケット団のもので、そして俺達を苦しめるものだとしても、これを作るのに携わった何も知らされていない研究者や技術者たち……。

彼らの決死の傑作がこうやって地に吸い込まれ、赤々とした炎上を繰り広げていくこの光景を彼らは望んでいたのだろうか？

それが答えなのだろう。

俺達が元の世界を取り戻すということが……どういうことなのか。ロケット団が俺達の世界を掌握したことで犠牲にされた人達がいた……。そしてその逆……俺達がロケット団の手から世界を取り戻す時にも必ず犠牲は生まれる。

俺の手は微かに震え出し、アンズが気を掛けて両手で握ってくれる。

「ケンくんっ？」
「……悪いな、アンズ」
俺は弱弱しくも微笑み、アンズはそれでさらに心配になったのだろうか……俺以上に弱気な表情へと変わる。
恐らくこれはダイゴさんの仕業なのだろう。そして衛星ロケットだからこそ、した。だがこれは大胆すぎるし危険が伴いすぎる……。これを事故として納めて、ジョーカーを切れる程の下準備をダイゴさんが用意しているということが前提……。
「これを、俺達に見せたかったんですか？」
俺は握っているポケナビに向けて、やっとそう言葉を紡ぐ。
「ああ。お前達には悪いが事態が治まるまではそこにいてくれ」
なるほど……この場からすぐさま退散するような連中はあやしいからか。
「でも、こんな事態大丈夫なんですか？」
「心配するな……。ああ、それとニューラの件はどうにかなったから安心しろ」
「本当ですかっ」
ダイゴさんにとってみれば、この衛星の件は彼の作戦を遂行するにおいての一過程にしか過ぎないのだろう。だからこうやって話題をポンポンと変えられる。

まあこれを見せられちゃこの後アンズと楽しむことは無理そうだしな。

俺は逆に今度は小刻みに震えるアンズの手を強く握り閉める。

「ああ、アンズを頼むな」

この人は本当に何もかもお見通しなんだな……。だから、気にくわないとか思えないくらいに俺自身が尊敬しちまう。

展望台ではアナウンスが飛び交い、センターに勤める事務員の人達が事態の収拾に努めている。

俺はアンズを先導しながら近くのソファへと腰をかける。他の面々はしきりにポケナビなどを取り出して爆発事故の模様を撮ったり録画している。

ホウエンではポケナビが主流である。だからこそ、ダイゴさんが成してくれた配慮には感謝するしかない。

「アンズ、大丈夫か？」

アンズはきっと自分が嵌められたとでも考えているのだろうか？ただ、彼女からしてみればダイゴさん達は信頼のおける人物だらけで、その人達を一瞬でも自分が疑ったことに激しい自己嫌悪感を抱いているのだろう。

その様子はアンズがワナワナと体を震わせ、目を見開いてどこか遠くを見ていることからすぐに察知できた。

わかりやすい奴だよ、ほんとに……。

「そんなに自分を責め立てなくてもいいだろ。それに、俺だって少しは疑ったさ……もしかしていいように使われてるのかってな」

「えっ！？」

あまり大きな声ではなかったが、自分の思っていることを当てられてアンズは意表をつかれたのだろう。

「だから、あんま気にかけるようなことじゃないってことだよ」

ぽんっとアンズの頭の上に手を置いて撫でてやる。

「それに……こんな程度で自分が省かれたなんて思うんじゃないぞ？　俺もそうだったし、それに、俺達が内容をきいていたとしてアンズは違うかもしんねえけど、俺はこれについて何も手を貸すことなんてできはしなかった」

そう、むしろ俺の方が自分を責め立てたいよ。

「ち、違うよ、ケンくんだって――――っ！」

「ありがとな」

俺はアンズの頭を目一杯に撫でてやりながら、そうアンズに向けて言葉を放つ。

途端熟れたマトマの実みたいに頬を紅潮させたアンズは口を今度は違った感じにわなわなとふるわせる。

「ん、どうした？」

「な、なんでもない、なんでもないっ！」

ぶんぶんと両手を俺の目の前で交差させてアンズは首を振る。おいおい、そんなに激しく振ったら首もげるんじゃね？

とにかく、ダイゴさんがこの事故を引き起こした。その確認、立会人として俺達最年少組みを勝手に誘導してくれたってことだ。全く、抜け目のない人ったらないぜ。

待てよ……ってことは、ダイゴさんは初っ端から俺とニューラの弱点を知っていたってことか？　あの時のバトルで？

だから俺がニューラを出すようなバトルに持ち込むために修行の初日でカンナさんとアンズが相手だったってことか？　で、そのままの流れで俺とアンズをここへと向かわせた……事前にアンズに宇宙センターがトクサネの名所だっていうことを吹き込んでおいて……。

俺みたいな一般人が敵うわけないよなー、これじゃ。

「ふっ」

俺は心中でそうおもいながら自虐気味な苦笑を洩らす。

「どうかしたの、ケンくん？」

「いや、それより……すごい迫力だったな」

俺は他人に勘付かれないようにアンズと先の事故の一般的会話を交わす。

「そ、そうだね。でも、ああいうのはもう見たくないよ……」
「そうだな」

アンズは本当に優しいんだろう。もしあれに人が乗っていたようもんなら、泣き崩れていることだろう。そんなアンズの顔は俺も見たくはない。

展望台から見ると発射台はその姿を残しておらず未だ劫火に見舞われている。それを鎮火させるために、すでに数台の消防車が発射台を囲み消火活動を行っている。

それから一時間ちょいだろうか、俺達一般客は宇宙センターから出ることが可能になりぞろぞろと足並み揃えてセンターの外へと出る。

様々な人々の思惑を耳で流しながら、俺はアンズの傍を片時も離れることはなかった。

「アンズ、これからどうする？」

俺はきっとこのまま地下へと戻ると思っていたのだが、アンズから出たのは意外な言葉だった。

「ポケモンセンターでご飯にしよっか」

……はは、情けねえな俺は。アンズはちゃんと割り切っている……芯が強いんだ。そうだな、今日は目一杯楽しませてやるって言ったのは俺だ。そんな俺が「これからどうする？」だなんて。つくづく自分が嫌になるよ。

「そうだな、ならとびっきり美味いもん食わしてやる」
「え～っ」
俺はアンズを連れ添ってポケモンセンターへと向かう。
ポケモンセンターにはトレーナーがポケモンの治療が済むまでの待機所として喫茶店やレストランが設けられている。それはポケモンセンター自体に宿泊施設もついていることから当然の設備なのだろう。
そしてなぜかポケモンセンターの食堂ないしレストランはそんじょそこらの飲食店に負けを取らぬ美味さを誇っている。
てなわけで、そんな俺達みたいなもくろみでポケモンセンターへと訪れる者は結構に多い。まあ、値段もリーズナブルだからだろう。
ポケセンまで他愛のない話を二人でしながら、俺達は自動ドアをかいくぐって中へと入る。
するとそこには人だかりができており、皆がモニターに目をくぎ付けにしていた。俺とアンズはきっとあの衛星発射事故についてのニュースかと思っていたのだが、ふと目をモニターに向けると俺は驚愕した。
「なっ？！」
モニターに映っていたのはシンオウのジムリーダーの一人が殺害されたという信じがたいニュースであった。
シンオウのジムリーダーも認識はある。モニターに出ている写真

はシンオウ地方ミオシティジムリーダートウガンのもの……。

しかも殺害だなんて……。一体、誰が……っ？！

そう思考を巡らせていた俺が次に流れてきたアナウンサーの発言に喉が詰まる。

「なお、ミオジムリーダートウガンを殺害した犯人を警察およびポケポリは行方不明中で指名手配中のダイゴ率いる一味の仕業である線が濃いとして調査を――――」

そしてトウガンの次に出された顔写真がダイゴさん、そしてついでカンナさん、ナツメさん、カスミさん、エリカさん、ミツルさん、そしてアンズのものであった。

俺はアンズの方を見ると、彼女は自分が犯人に仕立てられたことより同業のジムリーダーが殺害されたという事実を受け入れられないといった風であった。

俺にはどうすればいいかわからず、アンズの手を握ってやることしかできなかった。

そしてポケナビがまたも震えだすのであった。

第十一章：始まるは特訓　ＶＩ：彼女の強さ（後書き）

次回は裏になります。

まあ予想がついたと思いますが・・・；；

大それたことをやったのは百も承知。その真相へとちょっと介入していくつもりです。

それでは～

第十一章：始まるは特訓　「裏」：限界を超えること（前書き）

ポケモンは何をおもうのか。

人はポケモンを何とおもうのか。

そんなテーマに葛藤しつつ、自分なりの答えがでてきました。

ま、そのお話が書けるのはもうちょっと先のことになりそうですw

それでは久々の「裏」をどうぞw

第十一章：始まるは特訓　「裏」：限界を超えること

ここはダイゴの別荘の地下。そう、つまりは秘密基地と言っても良いのか……まあ、あの場所である。

カンナはケンからニューラのボールを受け取り、ダイゴに言われていた通りにダイゴの指摘した部屋へと向かっていた。

『まったく、あいつはなんであんなに頭良いかね……。むかつく』

そんな私怨を込めながらカンナはその部屋へと入る。

ダイゴが指摘した部屋というのはケンやアンズ達の部屋がある居住区ではなく、ゲーセンへと続く扉のある方向でもなく、残されたもう一つの扉の向こう……言うならば会議室らしき場所である。

「きたわよー……って、もう全員集まってんじゃない」

カンナから見えるのはここにいるほかの面々。ダイゴから始まり、ミツル、マサキ、サトシ、カスミ、エリカ、そしてナツメ。

「よし、これで全員集まったな。カンナ、ちゃんとケンとアンズに出かけるように言ったか？」

ダイゴはカンナと視線を合わせて、カンナはダイゴにボールを投げ渡して「ええ」と返す。

「そうか」

と言いながらボールを受け取ったダイゴはそのボールをマサキへと手渡す。

「ほいな〜」

ニューラの入ったモンスターボールを受け取りながらマサキはそこに設けられている多規模なコンピューターを操作して、特殊な円形の台にボールを置く。

「それじゃ始めるか。まずはケンについてだ」

ダイゴは会議室に設けられているモニターにケンのプロフィールを上げる。それはミツルがケンから得た情報や彼自身がケンを調べたものをまとめたものであった。

「あいつのトレーナーとしての能力は俺達と一緒だ。素質がある」

素質……それはポケモンバトルにおいて他者を圧倒し、上に立ち他の面々を先導できる器をもつということである。その素質はジムリーダー、四天王、そしてチャンピオンの誰にでもいかなる形であれ存在する。

そしてここにいる者達はその素質を持っている。

「だがケンのポケモン……まあ、キュウコンを除いてだが、はケンについていけない」

ダイゴが話しているのはポケモン達の限界について。

「そうですね。もともとポケモン自体、トレーナーの指示以外では

あんなに多様なバトルはしませんからね」

エリカが頬に手を当てて、そう告げる。

そう、ポケモンとは本来自然界に住んでいる。彼らにとって所有している技というものは、必要な時以外には用いたりはしないのだ。自身の危機が迫った時、餌や食料を調達する時、移動手段、縄張り争い、しつけなどといった事態にしか技を使ったりはしない生命体なのだ。

それを人間がポケモンを捕まえる能力を得たことで、ポケモンバトルが生まれてポケモンはその潜在能力を更に引き出せるようになった。

「その通りだ。ケンの思うどおりのバトルをこのニューラがする為にはマニューラに進化させる……あるいは」

パチン、とダイゴが指を鳴らしてマサキはそれを合図にボールからニューラを出す。

閃光と共にその場へと召喚されたニューラは自分の周りを取り囲む面々にびっくりして、自分の主人の姿を探す。しかし、ケンはこの場にいない。

ダイゴはそんなニューラの様子を気にすることなく続ける。

「自分をマニューラだと思い込ませる」

ニューラが抱えている事情……それは自身の能力が限界であり、ケンの思うどおりの更に高度な戦法がなせないということである。

それを解決する為にはニューラが更なる能力を得る為に進化することが最善。

しかしケンにニューラを進化させる気はないし、それはニューラがそう思っているからこそケンもしないのだろう。

「にゅらっ？」

己という壁を超える為には犠牲がつきものなのは世の常だろう。更なる力、更なる知というのは何かを犠牲にしてこそ与えられる。

つまりダイゴはニューラに暗示をかけ、ニューラ自身を犠牲にして更なる身体能力を身に着けさせようというのだ。

「でもそれじゃ、ニューラは……」

そしてこの案の行きつく先をカスミは知っているのだろう、あまり乗り気はしないような声を出す。

「わかってるさ。俺もこんな手は使いたくはないが、ケンは俺達に必要な人材だ。だからニューラ自身に決めさせる……進化するのか、それとも限界を超えるのか」

ダイゴの言っていることを、ニューラは理解していた。自分の主人がおらず、そしてこの場にいるのは主人を上回る実力者たち。その中で彼らの会話はニューラにとって驚愕でありながらも、しかし決断が迫られている。

自分の能力が限界に至っているせいで主人が思うどおりのバトルができていない……でも進化しないことは主人であるケンと昔誓い

合った。だったら選択しは一つしか残されていない、主人……ケンの為に自分は更に上を行く。行かなきゃダメなんだと。

「ニュラっ！」

ニューラの決意がこもった言葉に、ナツメは反応する。

「……壁を超えるそうです」

普段から無口なナツメ。彼女は無表情であるが、それゆえに他人やポケモンの言葉や感情に敏感になった。だからこそニューラの決意をこの中で誰よりも確実に捉えた。

「そうか、ならナツメ頼むぞ」

「はい。スリーパー」

ダイゴの指示でナツメはスリーパーを出す。

ニューラはスリーパーへと振り向き、堂々と座り込む。こっちの準備はできている、とでも言ってるかのように。

「ニューラ、わかってるのか？　君がそこまですることは、結果的にケンくんを……君の主人を悲しませることになることを」

今度はサトシがニューラ本人へと聞く。

この年にして世界の頂点へと上り詰めたサトシにはわかるのだろう。この行為がニューラの寿命を縮め、それがトレーナーの知らぬところで行われるということが結果的にどういった結末を招くのかを。

それでも――――

「ニュララ！」

ニューラの決意は固かった。

「っ……そうか。君は良い主人を持ってるんだね」

サトシはニューラの決意を汲み、そして最後には微笑んでニューラの頭を撫でてやる。ニューラはサトシの手を受け入れ、そしてスリーパーを見上げる。

「スリーパー、お願い」

スリーパーはナツメに従い、ゆっくりとその手に持つコインを左右に振り始める。

振り子が大きく揺れ始めたかと思うと、急にニューラの両目がとろんとして瞼が半開きになる。

スリーパーがかけている暗示は、ニューラの潜在意識に自身がマニューラと同じ身体能力を持っているということ……しかし、その事態にニューラは気付かず自分はニューラであるという極めて高度なもの。

これを人間で例えるなら、凡庸な者に自分はとあるボクサー並みの反射神経を持っていることを自覚させながらも自身は凡庸であると思わせること。

それは自身の能力が昔と何ら変わりはないのだという、自分の変化を自分に気付かせないといった思考回路にプロテクトをかける必要がある。

それを見事にナツメのスリーパーは成し遂げたのだ。

「ありがとう、スリーパー」

ケンのニューラは深い眠りに陥っており、マサキはそっとボールへと戻す。

「まあ、しかしなんやな～……。わい達はこげなことまでせんとあかんねんな」

「そうですね……」

マサキがそうぼやき、ミツルも賛同する。

「仕方がないわよ。それが、私達が選んだ道なんだもの」

カンナはそう言い切り、ダイゴも声を大にして告げる。

「その通りだ。俺達が行くのは修羅の道……その先の栄光を得る為には、実を削らなきゃならない。その覚悟はお前達全員にあるだろ？」

それはこの中のリーダーとしての資質を遺憾なく表す文句としては十分だった。

無言で首を縦に振り頷く面々。

「そんじゃ今日の一大イベントを拝むとしよか～」

そう言いながらマサキがコンピューターのキーボードを操って、ケンが映っていたモニターを別の画面へと切り替える。

現れるのはケンとアンズが向かった宇宙センター……まさしくもうすぐ打ちあげられようとしている衛星ロケットである。

「こげなもんつくっとーなんて、抜け目がないの～ロケット団って連中は」

マサキは一科学者としてだけでなく、様々な博士号をも取得している。いわばダイゴが引き抜いたエンジニアである。

以前マサキはダイゴからある依頼を請け負ったことがあるらしいが、まさかそれがこんな大掛かりな作戦に関与しているとは思っていなかったらしい。

「そうですね、携わってた人には悪いですけど……あれを打ち上げさせるわけにはいきませんからね」

「ああ。第一フェイズのうち、あの船艦の造船を阻止することは失敗したがこいつはなんとかなった」

そう、ダイゴ達が果たさなければなかった任務は二つ。ロケット団の新しい船と衛星の製造を阻止すること。前者はもともとにターゲットが大きく、一人や二人の力ではどうこうできなかった……しかし、衛星はそれ自体が複雑かつ繊細。つまり船よりは壊しやすいというのがあったのだ。

「でも、良くあんなものに仕掛けられたわね」

カンナが感心したような、はたまた呆れたような声で言う。
「だからこそマサキに頼んでおいたんだ。ま、本人も知らなかったみたいだけどな」
「ほんまですわ。ダイゴはんからあんな依頼来てもうて、どうするんかわからんかったさかいな」
マサキは苦笑いを含めつつ、「お、そろそろやで」とモニターの方へと首を回す。
それと同時にダイゴは自分のポケッチを取り出して、ケンへと電波を飛ばす。
「ケンか？」
モニター一杯に広がるのは打ち上げの模様を伝える生中継のもの。
まるでタイミングを計るようにして、ダイゴは話を続ける。
「ああ、知ったか。気にするな……それよりも、ちゃんと見ておけよ」
ダイゴはケンが衛星がロケット団のものだと知ったことを察し、口調を強くして言う。
「勿論、打ち上げをだ」
そしてカウントダウンがはじまり、いざ打ち上げというときに発射台を巻き込んだ大規模な爆発が報道される。

「ひゅ〜、豪快豪快」
カンナは口笛と共にそうちゃらけ、
「あらまあ」
と、抑揚のない声でエリカは呟く。
「……」
無言でモニターを眺めるナツメとは対照的にカスミとミツルは大きく目を見開いて「うわっ」と声を上げる。
サトシはその模様を見ながらダイゴの方を直視し、そんなダイゴはサトシの視線を感じて不敵な笑みを浮かべる。
ダイゴはポケッチを離して、マイクの部分を手で覆ってサトシに言葉を向ける。
「悪いがサトシくん……これが俺達のやり方だ」
「いえ、今更どうこう言う気はありませんよ。それにここにはカスミがいますし、彼女が望む世界を取り戻すのが僕のやらなければならないことですから」
サトシの決意にダイゴは感心したように口を丸く開けて、
「ひゅー、そうか。それでいい」
ダイゴは納得いったような表情で、再度ポケッチを耳元へとやる。

「ああ。お前達には悪いが事態が治まるまではそこにいてくれ」

ケンとアンズから少しでも疑いのかけられることのないよう注意しておいて、ダイゴの視界にケンのボールが目に留まる。

「心配するな……。ああ、それとニューラの件はどうにかなったから安心しろ」

ダイゴを見る他の視線が若干罪悪感を帯びるのを感じつつも、ダイゴは続ける。

「ああ、アンズを頼むな」

そう言って、通信を切る。

「さ、そんじゃ後の時間はあいつらの自由にさせるとするか。マサキ、頼む」

「了解」

ダイゴは会議室の大テーブルに両手を置いて、俯かせていた顔を上げて全員の視線を集める。

「これより第二フェイズの内容を説明する」

第十一章：始まるは特訓　「裏」：限界を超えること（後書き）

ダイゴが頼んだ代物とは？

ニューラは一体どうなったのか？！

そしてダイゴ達が進める第二フェイズとは？！

まあ、そんな感じに引っ張って今日はお暇いたします。

ルカ「わーたーし～のほんぺ～んまっだでっすか～♪」

では、ごきげんよう

第十一章：始まるは特訓　ＶＩＩ：声（前書き）

さて、第十一章もこれでおしまい。

ルカ「お、ついに」

いやいや喜びすぎ；；；

まあ最後にいろいろと進展させて終わるのが吉なので、いつもの自分クオリティです。

どうぞ

第十一章：始まるは特訓　ＶＩＩ：声

ロケット団の衛星が爆発炎上した事件の後、俺はアンズと共にポケセンで食事を取ろうとした。

しかし無情にもポケセンではシンオウの鋼タイプジムリーダートウガンが殺害されたというニュースが流れていた。

震えるアンズに何も声をかけることができない俺は、ただじっと彼女の手を握っていたのだが……俺のポケッチが再度バイブレーションを響かせる。

俺は空いている方の手でポケッチを開いて、耳元へとあてる。

「はい、もしもし？」

「……その声は、ダイゴではないか」

やけに威圧感のあり、重圧ある声がポケッチ越しに俺の鼓膜を震わせる。

「誰だ、あんた？」

本能的に俺の脳はこの声の持ち主に対してアラートを鳴り響かせる。

「ふむ……、番号は間違ってはいない。お前ハヤミ　ケンか……」

っ……！！

なんなんだ、こいつは？　どうして俺の名前を……。

「おいっ、誰だてめえ」

俺は睨みつけるようにして電話越しの相手を見据える。

「ケン、くんっ？」

アンズも俺の態度の変化に気付いたのだろう、俺の方を見上げてくるが彼女の視線を確認する余裕はなかった。

「私が誰か？　そうだな、この国を統べる者とでも言っておこうか？」

完璧にこちらをおちょくっているような口調。俺は段々と語調を荒くして、反発する。

「真面目に答えろっ！」

「私は至って真面目さ。ハヤミ　ケン、君には私の息子がえらく世話になったな」

息子？

一体、こいつは誰……？　っ！？

「ま、まさか――――」

「察したか？　そうだとも、私はサカキ　リョウの父親だ」

俺は奥歯を噛み締めて、この憤怒とも焦燥ともいえぬ感情を押し殺そうとする。しかし、ポケギアを握る手からはギシギシという音

が鳴り、俺の顔の温度は徐々に上がっていくのがわかった。

サカキっ！

「お前達の企みなどお見通しであるという警告を入れようと思ったのだがな。いやはやさすがは大犯罪者で行方不明中のダイゴであるだけ、自分のいどこはそう易々と明かしはしないか」

べらべらと、俺が電話相手だとわかっていてねちっこく語ろうとする様子は……リョウとそっくりだぜ。

「なぜ、番号がわかった？」

俺は抑えきれない激情を胸に押さえつけながら、冷静に状況を整理させる為に脳をフル回転させる。

「なに……つい最近通信衛星の解析が終了してな。ダイゴのプロバイダーも解析して探りあてた番号が出たんだが、どうやら違ったようだ」

ダイゴさんは自分のプロバイダーがハックされないようなプログラムを構成したと言っていた。つまり、サカキが見つけ出した番号はダミーでありながらも俺のポケッチの番号であったということ。

もしかして、ダイゴさんはわざと？

「しかし私の要件は別に誰伝手であってもダイゴに届けば良い……」

そこから急にサカキの声は一段とその凄みを増す。

「よくも衛星をぶっ壊してくれたな。この落とし前はきっちり払ってもらうぞ？」

それは聞いているだけで脚ががくがくと震えあがりそうな程までに殺意と怨念がこめられており、俺自身ポケッチを握る手の甲に嫌な汗が浮かび上がっている。

「必ずお前達を見つけ出して、始末する。そうダイゴに伝えておけ」

まるで俺の存在はあってもなくても良いような切り捨て口。俺は向こう側からの連絡が切れたと同時に緊張の糸が切れる。

「っ」

「大丈夫、ケンくん……？」

俺は縋るようにしてアンズの手を求めるようにして握り、ポケッチをおろしてしまう。

「誰からだったの？」

アンズもさっきのあれから異様なことを感じ取ったのであろう。俺は人込みから離れたソファの場所を指差して、二人でそこへと移動する。

アンズをソファに座らせて、俺は反対側のへと腰かける。

「……サカキからだった」

「え？！」

「しっ……」

アンズが驚愕の声を上げるのを、俺は静かに人差指を口前にやる。

「うそ……なんで？」

アンズは信じられないといった風に俺を問い詰め、先の会話を聞いているからこそ嘘であって欲しいという願いが込められている。

「ダイゴさんの対ハッキング用のプログラムはちゃんと作用してる。ただ、ダミー用として出される番号は俺のポケッチの番号みたいだ」

失敗なのか、はたまた相手側を惑わせる為の囮なのか……真意はどうであれ、敵側はダイゴさんの用意したポケッチの番号の一つを手中に収めているということだ。しかも、この短期間のうちに。

しかし不思議なのは、サカキ……リョウの父親が俺のいる場所を特定できなかったことだ。脅迫まがいなことは言い残したが、すぐさまに俺達を狩るといった表現は出てこなかった。それに、いどこはそうやすやすとは明かしはしないか、というサカキの発言を信じるならば……。

通信とは発信と受信からなる。つまり俺のポケッチへと発信されたシグナルを俺は受信した。それはつまり、俺のポケッチの所在を敵側へと教えたようなものなのだ……。しかし探知はされなかった……それはつまりこのポケッチには逆探知を防ぐプログラムも組み込まれているということなのだろう。

「でも、なんでダイゴさんはそんなことを？」

「……わからない。でも、一つだけわかることはある」

なぜアンズの言う通り、ダイゴさんはこんなことをしたのだろう

か？　いや、なんでこんなことではないのだ。

「ダイゴさんは最初からこうなることがわかっていた上で、俺達に何も告げていないだけだ」

その言葉は発言するにはとても心苦しいものがある。しかし、今日一日に起こった一連の出来事からこの推測はあながち間違ってはいないだろう。

「そんな……」

「敵を欺くにはまず味方から……ってのは大げさかもしれないが、ダイゴさんは組織という媒体を良く知っている。知っているからこそ、かもしれない」

「え？」

更にわけのわからなくなったような表情をアンズは浮かべる。そんなアンズの顔につい見とれてしまったのは、言うまでもないだろう……かわいいんだよ。

「組織ってのは大きければ大きい程に、瓦解する時は一瞬だ。しかしそれを代償に、組織ってのは巨大な力を手に入れる。今のロケット団みたいにな」

俺はテレビの方へと親指を向けて、そのスクリーンでは今ではもはや馴染みとなっているＣＭが流れていた。

『さあ、君も就職するならロケット団へ！　この国の安全と未来を担う人材を、私達は受け入れます！』

組織名ロケット団は今や流行もののブランド名等しく、そのネー

ムバリューは計り知れない。

つまり、就職するならロケット団へ！　というのは国政を担う役職への就職という意味になっている。協会という国の政を司る政府というポジションは変わらずとも、それらをひとくくりにロケット団とまとめあげているのは、それほどまでにサカキの情報操作能力が長けてということなのだろう。

世と人々を動かすのはプロパガンダ……。それが嫌でもひしひしと肌で感じるような世界に、なってしまっているのだ。

「そ、それでサカキはなんて言ってたの？」

「……こっちの居場所はばれてはないみたいだけど、衛星をぶっ壊されたことに関してブチ切れてたみたいだったな」

あのサカキの様子からして、爆発してしまった衛星は彼の作戦を遂行する上で必要不可欠なものであったに違いない。それを阻止できたのは功名だが、敵さんはご立腹だ。

しかしながら自分でも、まさかサカキにあんな口調がきけるとは思ってもいなかった。リョウの父親だからか？　それとも、また別の――――

「ケンくんっ！」

「ん？　あ、ぇと、悪い、どうした？」

しまった、さっきからいろいろ考えてたせいでアンズの声が耳に入ってこなかった。

「もぅ……。あのね、思うんだけど早くこのことをダイゴさんに伝

えた方がいいと思うの」
「……ああ、そうだな。ここであれこれ考えるよりは、そっちの方がよさそうだ」
「うんっ」
真剣な眼差しのアンズを見つめながら、俺もびしっと立ち上がる。
アンズとのデ、デートは予想もしてなかった展開の前に消え失せてしまったが、それでも俺達の間には何かしらの絆が生まれたのは言うまでもない。
俺達は地下へと戻るゲーセンへと向かい、俺はアンズへと声をかける。
「なあ、アンズ」
「なあに？」
「この埋め合わせはいつかきっちりつけるから……」
俺は少しこっぱずかしくなりながら、小指で頬を掻いて呟く。
対するアンズも、その言葉の意味を感じ取ってくれたのか急ぎ足でありながらも表情を隠して「うんっ」と小さくうなずいてくれる。
俺はその返答をしかと確認した後、アンズの手を握る。
「ひゃっ」
小さく驚きの声を上げるアンズを無視して、俺は引っ張るようにしてアンズを先導する。

「ケ、ケンくん？」

戸惑うアンズのことを知らん顔しながら俺は彼女へとふりかえらない。

小さい彼女の手は、俺の心にできた隙間を温かく塞いでくれるような……そんな錯覚に見舞われながら自分の中での決心は更に強まっていく。

サカキがつくりあげた、この世界……。そしてダイゴさんが取り戻そうとしている、元の世界……。はたしてどちらが今を生きる人々にとって良いのか、俺にはわからない。

でも、俺はサカキの世界を否定するしアンズもきっとそうだろう。

俺は自分のスクールの同級生が倒されるのを目撃した。そしてその主犯が誰であり、その時指揮を執っていた人物を……俺は良く知っている。

自分の故郷を滅茶苦茶にして、妹をあんな目にあわせた連中をこのまま奴らの思うがままにさせておく気なんて毛頭無い。

例えダイゴさんに拾われることがなくても、俺は一人でロケット団に挑んでいたことだろう。

でも、今の俺には頼りになる人物がたくさんいて……俺の横にはアンズがいる。

例えこの絆が仮初のものになるにせよ、今ここにあるものは真実であり現実だ。なら、俺はそこに縋って望みを叶える。

「なあ、アンズ……」
「うん」
「俺は今の世界に感謝しなくちゃいけないかもな」
「……えっ？」

ぎゅっとアンズの手を優しく握って、俺は彼女へとふりかえる。

「こんな世界にならなかったら、俺はアンズに会うことも……こうやって自分という存在を再確認することはなかった……」
「で、でもっ！」
「あぁ、わかってる。でもこんな世界はあっちゃいけない」

なぜだろう？　なぜだか、この時俺はなぜか寂しく微笑んでいた。それは俺の弱さなのか、はたまた抱える未来への不安から来たものなのか……。

「大丈夫だよ、ケンくん」
「え？」

そんな俺の心情を察してくれたのだろうか？　アンズは俺を見上げながら、頬を染めながらもしっかりと俺に言葉を向けてくれた。それは、俺が今最も聞きたかった言葉だったのかもしれない。

「私達は必ず元の世界を取り戻すから。そしたら、その後のことはその時に考えればいいんだよ」

彼女の屈託のない笑顔とその裏に秘められた確固たる自信は、俺の臆病さが生み出していたものを綺麗さっぱりに吹き飛ばしてくれていた。

「ああ、そうだな」
「うんっ」
俺とアンズはお互いを再確認しあいながら、一目散にダイゴさんのところへと駆け足で向かった。

第十一章：完

第十一章：始まるは特訓　ＶＩＩ：声（後書き）

さて、第十二章はルカに戻ります。

ルカ「わーい」

ルカのはいろいろと楽しめるので、自分も書いてて楽しくなりますｗ

ルカ「えへへー」

ではでは～

第十二章：すれ違う人々　Ⅰ：受けもらいしもの（前書き）

さて、やっとルカに戻ってまいりました

ルカ「わーい！」

ちょっと自分もテンションあがってまして、普段よりちょびっとだけ長いです。

ルカ「あるのは別れと出会い。ホウエンは人と人、ポケモンとポケモン、人とポケモンを巡り合わせる場所」

おお、なんかいきなり饒舌に・・・；；

まあ、それでははじまります……第十二章！

第十二章：すれ違う人々　Ｉ：受けもらいしもの

サント・アンヌ号が沈んでから三日が経った。

乗船していた客の面々はロケット団の新船艦によって助けられ、でも私達の乗っていたフェリーは別ルートで寄港した。

人とポケモンの行き交う港、カイナシティ。

そこがサント・アンヌ号沈没現場からもっとも近い大港であり、私含めたハルちゃん達もその街にひとまず行くこととなった。

サント・アンヌ号沈没は思っていた以上に人々の関心を集めており、ロケット団の新船が寄港した時には波止場にはたくさんの野次馬がその様子を見守っていた。

私が乗っていたボートはロケット団の船艦ブラックシルフに誘導されながら、約一日かけてサント・アンヌ号が当初予定していた港へとこうして辿りついてきた。

サント・アンヌ号を経営していた会社からはその日分の宿舎代が乗客分用意されていて、私はＳ区の人専用に手配されていた最高級ホテルであるカイナプリンスホテルを丁重にお断りして、今は海の家で六畳間程の宿をとっている。

その時にハルちゃんとスミレちゃんから引きとめられたけど、でも私も譲らなかった。あんな大事故があって、たくさんの人が死んで、それで私だけそんな贅沢をするなんてことができなかったのだ。

小心者と言われるかもしれない。でも、でも……目の前であの時海へと逃げ惑い飲みこまれていってしまった人達が脳裏によみがえって私の体は震え始める。

なぜかあのギャラドス達はブラックシルフが現れた途端に消えていなくなってしまった。それは船艦が現れたから逃げたっていう噂を聞いたけど、もしギャラドスが人を補食していたと考えるならあんな場面で退くなんてありえない。

そんな発想をする自分が嫌で、そしてその光景が毎回瞼の裏で再生されていくことに私の精神はこの一日二日蝕まれていた。

知らない内にＰＴＳＤに陥っちゃったのかな……。そんな心配もこみあげてきて、私はあの日体感した孤独な三日間を思い出していた。

それでも、私は乗り越えなければならない。チイラの実をこの手にいれるまでは……。

『いつでも連絡してね、ルカちゃん？　私は明日にはキンセツの方に行っちゃうけど、でも落ち着いたら必ず連絡するから』

私の両手をぎゅっと包み込んでくれたハルちゃんの温もりを再認識するように、私は胸の中で手の指を祈るようにして交差させる。

『……何か困ったことがあれば、ここにかけてくれ。お、お前が心配とかそんなんじゃないぞ？　ただ、お前が困っている顔を見たくなくてだな』

ぶっきらぼうな言い草でも不器用に自分の番号が書いてあるメモ

を渡してくれたスミレちゃんの姿を思い出して、私は思い出し笑いを浮かべる。

『なによ、あんた……。あんたなんかに私のルカちゃんが連絡するわけないでしょ？　あ、それとも何？　自分は頼れる存在だと思い込んでるわけ？』

『ふん、あいにくホウエンは私の生まれ故郷だ。親と一緒じゃなきゃ行動もできない世間知らずのお子様に比べたら私の方が頼れるに決まってる』

そしてあの別れ際の時に再発したハルちゃんとスミレちゃんの言い合いを、私は苦笑いと共に思い出していた。

『言ったわね！』

『そうやってすぐに逆上するのがお子様なんだよ！』

『あ、あの～、ふ、二人とも……？』

いがみ合う二人をなんとかその時は治めたけど、最後にバイバイ言うまで二人共険悪だったなぁ。

でもきっとあれだよね、喧嘩するほど仲が良いんだよ。だって、本当に嫌いな相手とは言葉を交わしたりもしないんだから。

「ふふっ」

何も悪いことばかりじゃない。そりゃ嫌な体験はしたけど、その代償として私はかけがえのない友人を二人もつくれたんだから。

それに――――

『ハヤミ様、この度はこのような事態となってしまいどうお詫びしたらよいのか』
『い、いえ！　コクドウさんが謝ることじゃないですよ！　あ、あれは事故だったんですし……』

最後に私をこの宿まで連れてきてくれて荷物を持ってきてくれたコクドウさんとの会話を思い出す。

『いえ、当船をご利用いただき快適な船旅を提供する我々にとって事故であろうが非常事態であろうが、それはあってはならないものなのです。今回はこのようなことになってしまい――』
『あ、いいです！　いいですって！　そ、それに目的地にはたどり着くことはできましたから。私、すごく楽しかったです。それはコクドウさんのおかげだから、感謝していますっ』

私は腰の低いコクドウさんにそう声をかけて、コクドウさんはお辞儀をするのをやめてくれた。

『そう言っていただき、光栄です。しかし、本当にここでよろしいのですか？　まだ部屋は確保されておりますが……』
『あ、いいんです。ちょっとこのあたりを散策してみたいんで』

その時の私はそう言ってごまかしたけど、コクドウさんには見抜かれていたみたい。

『そうですか。ではこのカードをお持ちください、もし何かありましたらその部屋はこの一週間は使えますので』
『あ、でも――』
『私が最初で最後に言うわがまま、としてはいただけませんでしょうか？』

コクドウさんの行為は好意だ。それを拒否してしまうことは、私にはできない。

『……わかりました、ありがとうございます』

『はい。それではここで、もし機会がございましたらまたお会いいたしましょう』

コクドウさんは私の右手を取って、その甲に別れのキスをしてくれた。

『……はい、またどこかで』

私ははじめてのことにぽわ～っとなりながらも、そう最後にはちゃんと言ってコクドウさんとも別れた。

とうとう一人ぼっちになってはしまったけど、でも悔いはない。

真冬の海の家は、その期間中の収入を宿屋として稼いでいる。ただ海の家だけあって、寒い。まあ、安いといった理由で利用する客も多いのだが……今回の騒動で様々なマスコミや観光客がきているだけあって私のいるこの宿は人が一杯だ。

きっとこの部屋を私のわがままなのに用意してくれたのはコクドウさんだったんだろう。今ならそう思えてきてしょうがない。

こんな小さな私を、この短期間で知り合えた人が助けてくれた。それはとても心が休まって、それでいってぽかぽかと温かくさせてくれる。

その連鎖を、私は引き継いでいかなくちゃ。行きつく先は目覚めるカナだということを信じて。

「……」

あの事件、ハナダでの事件以来、私はカナの容態も街がどうなっているのかを知らない。ううん、調べなかった。あんなことがあっても、世界はいつもの生活を繰り返している。

でもいつもの生活ではなくなった人達もいる。大事な人を奪われた人達、自分の知るよしもない罪を科せられた人達、そしていなくなってしまった人達。

でもその人達は少人数。だから、世界には逆らえない。

でも、でも私は、私は世界を変えられないけど、でも自分の親友なら助けられるはず。

私は敷いてあった布団から、のそりと立ちあがってお母さんとお兄ちゃんと買い物に行った時に買ってもらったコートに身を包む。

このままじゃいけない。薄い木でできた床や壁に囲まれた一室の窓をガタガタと風が打ち震わせる。逆剥けた畳の上すらひんやりとなり、布団をかぶっていなければ隙間風が頬を撫でていく。隠れて、潜んでいちゃダメ。外に出ないと。

冬の海は冷たい。寒いんじゃなくて、冷たい。肌に凍てつく冬風が、しかしちりちりと皮膚を焦がしていくようで荒く、痛い。

灰色の曇天を見上げながら、私は海の家からすぐの波止場までへ

と足を伸ばしていた。

ちらほらと見たことのないポケモンが空で鳴いている。

私は来航・出航していく船を見守りながらある一隻の漁船に目がとまる。

なんの、なんの変哲もない普通の漁船。でも、なんでだろう、あそこには何かがある……そんな気がした。

「どうしたんじゃいお嬢ちゃん？　わしの船が気に入ったかね？」

びくっ！　となって私は勢い良く背後を振りかえると、そこにはがたいのしっかりとしたおじいさんが重たそうな箱を三つ抱えていた。

「ぁ……え？　あ、いえ、あの、ちがっ……！　あ、そ、そうじゃなくてっ！？」

あぁわわわわ！

び、びっくりしたよぉ！

「おお、こりゃすまんのう。どうやら驚かせてしまったようじゃぞ、ピー子ちゃん」

「ぴ～っ」

ピー子ちゃん？

良く見ると、おじいさんの肩の上にはちょこんと鳥ポケモンが乗

っていた。あ、さっき空に飛んでたのとおんなじだ……。

まじまじとピー子ちゃんを見つめる私を見て、おじいさんはにかっと笑う。

「君、ホウエンは初めてじゃろ？」

「え？！　あ、あの、ど、どうして？」

おじいさんは得意げな顔をしながら片腕で箱三つを支えながら、もう片方の手で顎をさする。

「雰囲気と答えておこうかのう。これでもわしは昔全国を旅したトレーナーじゃったからのう」

へぇ〜、すごいなー。

私は感心しながらおじいさんの話へと耳を傾けていた。

「申し遅れたのう、わしはあの漁船の持ち主で漁師をやっとるハギじゃ。それでこの子がキャモメのピーコちゃんじゃ」

ハギ、さん……と、ピーコちゃん。はっ！

「あ、わ、私ハナダシティのルカ。ハヤミ　ルカって言います！」

あぅ、また噛んだ……。初対面の人になるとてんぱっちゃうこの癖、本当に直したいよ……。

「ルカちゃんと言うか。ん、それにしてもハヤミ？　はて？」

ハギさんは私の名字に聞きおぼえがあるのかな？　でも、そんなに珍しい名字かな？　私以外でみたことないけど。

「まあよいかの、それにしてもカントーからとは。えらく遠くからきたの」

「え、えぇ、まあ。あはは」

ハギさんの肩で羽を休めているピーコちゃんは、きゅるると喉を鳴らす。

「もしかして、あのサント・アンヌ号にでも乗っておったんか？」

「え？！」

ど、どうしてわかるの？

「ふむぅ、そうかそうか。それは大変じゃったの」

ハギさんはピーコちゃんの嘴下を軽く撫でてあげて、うれしそうにピーコちゃんは首をかしげる。

「……ルカちゃんは、トレーナーを目指してホウエンに来たのかの？」

「あ、いえ、私は……」

ハギさん、は信頼できる……。そう私は思って、自分の目的を語ろうとする。

「私はメディターを目指していて、それとちょっと探し物があって」

「ほう、その年でメディターを目指すとは。やはり漢方や木の実についても勉強しておるのか？」

「あ、はい、一応は」

感心してもらって恐悦する私は、その後も世間話をハギさんと続けた。肌寒い風が吹くが、私はコートを羽織っていたしハギさんは寒さなんてへっちゃらといった感じだった。

ハギさんが元船乗りだった話とか、１０４番道路に家があること、漁船の名前はピーコちゃん号であること、カイナシティへは取引先との商談があったことなどいろいろ。

無論私もハギさんが懐かしめたカントーの話だったり、ハナダには一回しか行ったことがないって言ってたからハナダの魅力を教えたり、いろいろ。

「ふむ、わしはそろそろいかねばならん。もし船が入用な時は気兼ねなくわしのところに来るが良い。それとこれはお近づきの印じゃ」

「ぴ～」

と言ってピーコちゃんが私の手のひらに届けてくれたのは小さなケースに入った六つの角砂糖みたいなもの。色は淡い青で、でもどこか不思議な蒼を色巻いている。

「それはポロックといってのう、木の実から作ったホウエンのおかしじゃな」

あ、そういえばカナがおんなじの作ってた気がする。カントーだと、本場じゃないから良いのがつくれないよーとか嘆いてたな。

「なんの木の実なんですか？」

「ふふふ、驚くでないぞ？　あ、うむ、そういえばこの実のことは

キワメから口止めされておったのう。すまぬが、わしの口からは言えん。じゃが、持ってて損はないぞ？」
「？　こんなものいただいても……」
「気にするでない。それじゃあのう、またどこかで会おう」
「ぴ～！」

そう最後に挨拶を交わした私たちは別れた。

私はハギさんのピーコちゃん号がカイナの港から離れていくのを見守って、ハギさんのくれたポロックケースに入ったポロックを見つめる。

カナが起きた時に見せたら喜ぶかな？　あ、むしろ目の色変えて欲しがるかも。と微笑ましく思いながら、私はカイナの街の方へと歩を進めた。

第十二章：すれ違う人々　Ｉ：受けもらいしもの（後書き）

みなさん、わかりましたよね？

そりゃわかったと思いますｗ

ルカ「え、何が？」

ｗｗ

えっと、それと少し自分の気分転換にメディターの裏話的なのを載せたいのですが、いいでしょうか？

もし感想に一人でも読みたいとおっしゃる方がいましたら是非投稿したいのですが……これははっきりいって自分のわがままと自己満なので無ければ公開はいたしません。

ルカ「ねえねえ、何がわかったの？」

それでは！ｗ

ルカ「あ、ちょっとぉ！」

第十二章：すれ違う人々　ＩＩ：クスノキ館長さん（前書き）

さて、このルカの章……皆さまの想像以上に様々なキャラが登場します。

ルカ「章名通りってこと？」

そうです。まあ、負担を減らすためストーリーにかかわってくるのは公式キャラですけどね

ルカ「ふぅ～ん」

あ、それとメディター裏話的なのは設定資料集に載せておきましたのでｗ

ルカ「あんまり裏話って感じでもなかったね」

まあ、そういうもんでしょ。あ、長くなりましたが、

ルカ「本編スタート！」

第十二章：すれ違う人々　ＩＩ：クスノキ館長さん

カイナシティ。

うわぁ……ハナダよりはおっきいんだー。

それが、私がこの街に抱いた最初の感想。造船工場が街の東側に連なっていて、なるほどこれほど多規模な港があるんだなと納得できる。

商店街らしきところを通って行くと、大きなポスターが至るところに貼ってあって……どうやら週末の朝にはバーゲンセールをやってるみたい。

コートのポケットに両手をつっこんで闊歩する私は、とりあえずこのまま街を徘徊してみることにした。

さすがに大きな街だけあって人の行き交いは多いぶん、街道は広い。

そうやって過ごしていると、私は一つの大きな建物に目がいく。

「……ポケモンコンテスト」

それはカナと一緒によく見ていた大会の行われる会場に酷似していた。うぅん、ここで行われていたんだ。

カナがコーディネーターを目指していることは知っている。それはカナの将来の夢だから。それでカナはテレビで行われているコン

テストの試合を良く見ていて、私も何度か付き合わされたことがある。

カントーにも勿論コンテスト会場はあるけど、本家？　でもあるホウエン地方の施設には見劣りしてしまう。

皆、ここを目指すのかな？

それはトレーナーがチャンピオンリーグに出場する為にジムをめぐるように、コーディネーターがグランドフェスティバルに出場する為にコンテストをめぐるといった風なんだろうな。

大きく聳えるその威圧的な門構えは、しかし抜けると煌びやかで熱いステージへと皆を誘うゲートウェイと化すんだろう。

でも今は大会も行われてはおらず、物静けさがあたりを包み込んでいる。

とりあえず、一通り街を見渡した後……私は今日の目的地であった博物館へと来ていた。

海の科学博物館……それがこの博物館の名前みたい。海添いに建てられているこの博物館には、その名の通りに海の科学にまつわる展示品が数多く存在しているらしい。

なんでこんなとこに来たかって？　もちろん、チイラの実の情報収集のため。

カナの持っていた木の実大百科を読んだけど、チイラの実には大海の力が宿ると書いてあった。だから、きっとそれにまつわる所に

行けば情報が手に入るはず……。

安直な発想かもしれないけど、今の私にはそうするしか他ない。

私は入場料を払って、博物館へと入って行く。

館内は海中をモチーフにしているのか、ゆったりと流れる漣（さざなみ）を連想させる白と青の二色で彩られている。展示物を置いている台は全て純白で、カーペットは深海を思わせる黒い蒼。天窓から注ぐ陽光は館内をくまなく照らしている。

あ、空晴れたんだ……。

天窓を見上げながら、私は冬が時々みせてくれる暖かな陽射しをその体に受け止める。

いろいろと散策していると、ついつい夢中になっちゃうのが私の悪い癖だよね……。目的を忘れて、二階まで進出してしまう。

「あっ」

私が二階の展示物で見つけたのは、サント・アンヌ号の模型だった。

精巧に再現されているその船は、私がつい先日まで乗っていたもの……。あの日のことを思い出すと、私の心は冬の灰空よりも曇ってしまう。

「もはや、その船をこの目で拝めることはなくなったのですね……」

突如、背後から聞こえてくる物哀しげな声に私は振り向く。
「ああ、すみません。私、この博物館の館長させていただいておりますクスノキと申します」
丁寧な物言いと低い物腰に、私もついついつられて頭を下げてしまう。
「あの……？」
「ああ、いえ。先日サント・アンヌ号が沈没したというニュースを拝見されましたか？」
拝見したも何も、私はその船に乗っていた。
「はい……。あのっ」
「？」
私は言おうか言わまいか悩んで、それでも不器用に乗っていた事実を告げる。
なんでそんなことをためらったのか、私自身もわからない。
「そうなのですか。それは、本当に申し訳ない」
「……え？」
なんで謝るんだろう？
「実は、サント・アンヌ号の建造に多少関わっていたものでして」
「えっ」

クスノキ館長さんは後頭部を手で擦って、苦い表情を浮かべる。
「それと新しく建造されたブラックシルフも、監修を頼まれまして」
「す、すごいんですね」
それは素で驚いて、敬えることだった。あの船の存在意義を私が認めることはなくても、あんな大きくて立派な船を造れることは、本当に素晴らしいことだと思ったから。
「いえいえ。この博物館、気に入っていただけましたか？」
「あ、はい！　もちろん！　あ、そうだ、えっと……」
「？」
うぅ、この初対面の人に顔見知りする癖は直した方がいいよね。
特に異性で年上の人は苦手だよ……。
「あのクスノキ館長さんは、チイラの実について何か知ってますか？」
意を決してそう言葉を紡いだ私に対して、クスノキ船長は微笑んで快く答えてくれた。
そう、それは私がこのホウエンへ来て損は無かった……報われたような感じにさせてくれたのだ。

１１０番道路：

カイナシティを北へと出た私は、１１０番道路という道を持ってきていた荷物と共に歩いていた。

クスノキ館長さんとお話して得た情報を頼りにするなら、私が目指さなければならないのは大百科にも記されていた幻島。そしてクスノキ館長さんが言ったのはハギ老人という凄腕の船乗りに会うことだと言ってくれた。

クスノキ館長さんは、ハギさんは難癖のある人だって言ってたけど、そのちょっと前に会って面識があったことを説明したら快く紹介状を書いてくれた。

あの海の家から出て、私は早速ハギさんのいる場所へと向かうことにした。

リニアや船を使って行った方が早いんだろうけど、どうせならホウエンを旅してみたかった私は徒歩にてキンセツシティまでは行ってみようと計画を立てた。

もしかしたらハルちゃんに会えるかもしれないし。

ポケモンセンターに寄ってホウエンの新しいマップをポケギアへと入れてもらった私は、ホウエン地方の大きさを改めて確認して今の計画を立てた。カイナからハギさんの住んでいる近くにあるトウカシティまで徒歩でいくのにどれだけ時間がかかるかわかったもんじゃないし……。

確かカイナからキンセツまではサイクリングロードだっけ？　たしかカントーにもあったタマムシ・セキチクを結ぶサイクリングロードと一緒だよね。

あいにく自転車を持っていない私が徒歩で行くことにしたのもこれが原因なんだよね。

道の上を横断していくサイクリングロードの日陰を歩きながら、私はこの地方にしかいない珍しいポケモンをいろいろと観察していた。

あ、なんかピカチュウに似たポケモンがいる。

木の上を二匹のポケモンが駆けあがって木の実の取り合いをしていた。片っぽが赤くてもう一方が青いほっぺと耳をもっている。かわいいなぁ。

あ、そうだ。

「おいでガーディ」
「がうっ」
「一緒に、キンセツまであるこっか」
「がうがう！」

しばらくガーディの散歩もしてあげれてなかったな、と思いだした私はガーディをボールから出す。

順調に道なりを進んでいく私達。サイクリングロードでも自転車で一時間のツーリングと聞いてるから……えっと徒歩だと、五・六時間かな？

今日中には着くよね、うん。

ん？

前方を見ると、なにやら奇妙奇天烈な建物が視界に映った。

からくり屋敷？

「なんだろうね、ガーディ？」

「がう？」

『誰でも歓迎！　からくり大王の挑戦を受けてみよ！』

なんか変な煽り文句が書かれた看板があるし、胡散臭そう。

きっと皆もそう思ってスルーするんだろうな。私みたいに奇妙に視界にとらえても、その後そのまま目的地へと向かう人が過半数じゃないんだろうか。

でも、私はまさかこの時この屋敷に大いにかかわることを知らなかった。

「いこっか」

ガーディにそう言って、私はキンセツシティへと旅路を再開しようと思ったその時……、

ドサッ！

からくり屋敷の周りは草木が茂っていて、屋敷を後ろから覆っている感じになっている。それも避けたくなる要因の一つなんだけど、私の目が奪われたのはそんなことじゃなくてその木陰から地面へとうつ伏せに倒れ込んだ女の人だった。

え、え？

その人は「ぐっ」と痛みをこらえるようにして呻いて立ち上がろうとするけど、見るからにその人の怪我はひどかった。

私は咄嗟にその人に駆け寄って

「大丈夫ですかっ！？」

「う、き、君は……？」

頭にも外傷を負っているのかもしれない、女の人の視認処理能力が衰えているのがわかった。

起き上がらせようとした私の腕をその人はがっちりと掴んで、縋るようにして私に告げる。

「危険なだ、こぉはっ」

……危険なんだ、ここは？

昔授業で学んだことがあるけど、頭や脳に外的ダメージを受けた人はその直前までの思考を全としてしか考えられない……その為救急医療や救出時の際に一番気をつけなければならないのは患者が必死に訴えてくる言葉の意味を理解すること。

私は咄嗟に彼女を連れてからくり屋敷へと入って行く。

無論、その場が安全なのかどうかはわからないけどこの人の治療を早くしないと……。

ガーディにも手伝ってもらって私はその人を屋敷内へと引きずって、扉へと入りかかった際に騒々しい数人の人声がこちらに近づいてくるのを察知した。

まさか、追われてる？　この人が？

もしそうだとして、この人が悪い人だとしても……この傷を見過ごすわけにはいかない。でも、このままだとっ！

近づいてくる足音に聞き耳を立てながら、私はどうすればいいか考えていた。すると、突然私とガーディ、女の人がいた床が外れる音が足元から響いた。

「え？」

一瞬だけ、ふわっと浮いたような感触と共に襲いかかってくる重力の法則に私は……

「きゃあああああああ！！」

どこまで行くのかわからない。というかそんなことを考えている余裕すら無く、私の脳内は恐怖のパニックへと陥り抗いながら体ごと落ちていく。

その時にガーディの声は聞こえなかったし、女の人のことなんて意識していなかった。

ボスン！　と柔らかな感触のあるクッションによって衝撃を相殺された私はいつの間にか知らない和室へと来ていた。

え？　え？

という疑問が脳内を連呼する中、私はその部屋にいる一人の男性を視認する。

「やあ」

その人は一言そう告げて、にかっと笑うのであった。

第十二章：すれ違う人々　II：クスノキ館長さん（後書き）

ルカ「あー、怖かった」

まあ怖いよね；；

ルカ「いきなりだもん、びっくりしたよ。それに知らないおじさんいるし」

なはは；；

ルカ「まあ、女の人のことも気になるし」

そうだね。あえてあの女性の容姿や特徴は伏させてもらいましたw

ルカ「じゃ、また次話で～」

では～

第十二章：すれ違う人々　ＩＩＩ：出会いと別れと（前書き）

うーん、最近皆さんの書くポケモン小説が面白すぎる；；；

ルカ「そうだねぇ」

自信が無くなりそうですが、自分も負けないよう頑張って行きたいと思います。

ルカ「そうだねぇ」

ルカ、なんかあった？

ルカ「いんや～」

？　まあ、ではどうぞ！

第十二章：すれ違う人々　ＩＩＩ：出会いと別れと

カラクリ屋敷　地下？：

「やあ、いらっしゃい」

私の目の前にいる人は、お腹に腹巻をしているどこにでもいそうなおじさん。頭は薄い髪の毛が耳周りをぐるっと一周必死に覆っている、そんな感じの人。

え、誰？

私は自分の身に起きたことを忘れてしまうくらいに、目の前の訳のわからないおじさんに目を奪われる。

「おやおや？　珍しいお客さんだね？」

飄々とした口調で、目を細めたおじさんは私を見つめながら次に私がこの穴に落とされる前にでくわした女の人へと視線を動かす。

「あっ、そ、そうだった！」

私は横たわって身動きしないその女性を膝上に抱えて脈を見る。

心拍は平常……。どうやら眠っているみたい……気絶かな？

彼女は私より少し年上みたいで、真っ赤に燃える髪が無造作に後ろでひとくくりにされている。綺麗な顔立ちはどこかボーイッシュで、でも今は泥や傷のせいで汚れてしまっている。

服装はタンクトップの上に厚手の緑のコートとジーパン。動きやすい格好……というか、逃げていたんだからっていうのが理由に含まれるのかな？

頭の外傷が気になるけど、今は安静にさせておくほうがいいだろう。思ったよりひどい怪我はしていないみたいだし。

「若いのに、君はすごいねぇ」

おっとりとしていて、でもそれでいてどこかしっかりと物事の本質を見抜いているような……そんな口調でしゃべる人を私ははじめて見たかもしれない。

「あの、あなたは……？」

私はガーディを抱きかかえながら、その人へと警戒の眼差しを向ける。

だってもし私の推理が正しければこの人は私達を上から落っことした人のはず、なんの意図があって？

「わたしはカラクリ大王、この屋敷の主だよ」

気の抜けるような口調、でもそれがふざけているものではないことは私にも理解できる。

「どうして、こんなことをしたんですか……」

和室という密室空間で相手を刺激させることは良策じゃないよね。

どうしよう。

「いやぁ、なーに。アスナちゃんがピンチだったみたいだからねぇ……ついでに君もついてきてしまったというわけだよ」

ちょこんと座布団の上でそのおじさん……ううん、カラクリ大王はズズズと湯のみを啜る。

アスナ、ちゃん？

「君の隣で眠っている娘だよ。ちょとした知り合いでねぇ」

もしかしてこの人があんな場所から出てきたのは、カラクリ大王に会いに来たから？　もし追われていて逃げ込むあてがここだったってこと？　だ、だったら、私……

「いやぁ、別に余計なことでも悪いことをしたわけでもないよ。君は良くアスナちゃんをこの屋敷へと連れ込んでくれたよ」

っ……！！

この人、私の思考を？

「カラクリというのはね、人の裏をかくような驚きを与えることなんだ。物事に裏表があるようにね、わたしは皆が見ている表よりも裏が好きなだけさぁ」

ぴくんっと、アスナちゃんとカラクリ大王に言われた女性の眉が一瞬反応する。

「まあ、勿論わたしの言う裏を君らが表と解釈するのか裏と解釈するのかは別として……だけどね」

ズズズ、とお茶が最後の一滴まで飲み干される音が和室に響く。

「君たちをここへと落としたのは、アスナちゃんを助けるためだった。といっても、ここが狙われることになるだろうけどねぇ」

落ち着き払った腰の重さでカラクリ大王は「よっこらしょ」と言いながら立ち上がる。

「……ん」

「あ、だ、大丈夫ですか？」

もぞっと、私が星座している太ももで動く感触があり私はアスナさんに声をかける。

アスナさんは閉じた瞼を細く瞬きさせながら天井を見上げて、私へと視線を移して呟く。

「ここは……？　カラクリさんの家？」

「……目覚めたかいアスナちゃん？」

カラクリさん、とはカラクリ大王のことなのかな。そうだとしたら、カラクリ大王の言ったことは全て真実なんだろう。

そこで私の緊張感は若干は和らぐも、自分が自分でも把握できていない状況に置かれているという不安感と違和感は解消できない。

それから十数分、私はアスナさんの介護をしながら互いの自己紹

介と現状報告をした。といっても先ずはアスナさんとカラクリ大王のやりとりを私がボーっと見ながら、次にアスナさんが私に感謝の意を表してくれたのだけれども。

「助けてくれて、ありがとうルカちゃん。あたしはアスナ、フエンシティでジムリーダーをやってる」

「あ、い、いえ、そんな大層なことしてないですよ。アハハ……？　って、えぇぇ！？　じ、ジムリーダー！？」

そんな大声を出した後に私は我に返って口元を両手で防ぐも、カラクリ大王とアスナさんはそんな私を見て苦く微笑んでいる。ううう、恥ずかしい。

で、でも、なんでジムリーダーがあんなとこでボロボロで？　え？　っていうか、他のジムリーダーって皆、ロケット団でサカキの配下で、えっと、えっと、だから敵なんだよね？

私の常識……それがいろいろと崩壊していくのを私は感じ取っていた。なぜなら、アスナさんから悪意などは一切感じ取れなかったから。現に、私のガーディがすでにアスナさんに懐いている……。

「ルカちゃんは今この国のトップが誰に変わったのかは知ってるね？」

カラクリ大王が神妙な口調で私に語りかけてくる。

「は、はい。このホウエンが最後に落とされたって聞きました……」

その私の一言にアスナさんとカラクリ大王が私を見る目が変わる雰囲気を感じ取った。

「ほぉ」
「そのことは、誰も知らないはずなのに……」
その変化に私は先までとは違う不安感にさいなまれる。空気が、変わった……。
「あんた一体どこからそれを？」
アスナさんがジムリーダーである器を持っていることを私はその時はじめて思い知らされる。昔カスミさんがポケモンを粗末に扱うトレーナーを叱責していた時と同じ空気を私はぴりぴりと感じ取っていた。
「わ、わたしは……」
もはや、逃げられない……。ううん、逃がしてくれるわけはないだろう。ガーディも完全に威嚇態勢に入っている。
「わたしは……」
息が詰まる、でも弁明しないといけない。
「ミツルさんから……」
責任転嫁、うぅん、私はミツルさんに二人の矛先を向けてしまった。このことが真実だとしても、私は自分以外の誰かに責任を押し付けてしまったのだ。
「ミツル？　もしかして、ダイゴさんの……」

「ふぅむ、だとしたら君はあのダイゴくんと繋がっているのか」

え、ダイゴ？

そこで改めて私は元ホウエンチャンピオンの名を耳にし、彼が今や全国指名手配中なのも知っている。そしてその指名手配中の中にミツルさんやカスミさんが含まれていることをも思い出す。

「はい。私のお兄ちゃんが二人のお手伝いをしています……」

その言葉にアスナさんは合点のいったような顔をして、私の頭を撫でてくる。

「ごめんね、さっきはあんなきつい聞き方しちゃって」

「あ、い、いいえ」

アスナさんは懐からポケッチを取り出してくる。

「ミツルさんが言っていたかもしれないけど、ダイゴさんに協力している人間は今指名手配されている面々だけじゃない。私もその内の一人なんだ……まあ、ばれちゃって今は追われてるんだけどね」

はにかむようにして苦笑するアスナさん。

そうか、そういえばミツルさんは他にも協力者がいるってオーキド研究所の時に言ってたっけ。

つまりアスナさんは味方。でも、今は危険な窮地に陥っているんだ。

「まあアスナちゃんの身の安全はこのわたしが保障できるから安心なさい。フエン町長とは昔からの仲でね……その孫であるアスナちゃんを保護する任務を全うする義務がわたしにはある」
「カラクリさん」

うーんっと、状況は大概整理できた。

つまり……私は巻き込まれちゃったってことだよね？　でも、別に嫌だとは思っていない。けど……ちょっと居心地は悪いかも。

「あ、あの、わ、私はこの後どうすれば……？」

聞きにくかったけどそれが、私が一番に気に掛けなければいけないこと。アスナさんがここに匿われるのはいいとして、私はどうやって地上に戻ればいいんだろう？

「ああ、心配いらない。ここの地下はニューキンセツへと繋がる抜け穴が用意されていてねぇ……」

ニューキンセツ？

「君は、ホウエンは初めてだったね？」
「あ、はい」

カラクリ大王の話についていきながら、私はニューキンセツとはどんな場所なのか想像を巡らせる。

「そこから地上に上がればキンセツシティに辿りつく。君の目的地へとね」
「あ、ありがとうございますっ」

自己紹介の時に私は名前とキンセツシティに向かっているということだけを話していた。

私とカラクリ大王のやりとりが行われている中で、アスナさんはやたら真剣な面持ちで悩んでいた。

「あの、アスナさん？　どうかしたんですか？」

「……あぁ、いや、うん。そうだ」

？　と、私は彼女が何に思い至ったのか分からず首をかしげる。

「ルカちゃん、君にこのヒートバッジを託したいんだ」

「え？　えぇぇぇ！？」

いきなりすぎてびっくりする。だ、だってジムリーダーからバッジをもらうという行為は、一般人の私にとって、ジム戦とかとは無縁の私にとっては驚愕以外のなにものでもないから。

「君は知ってるかもしれないけど、今ダイゴさん達はホウエン奪還のためにこの地方に来ているんだ。ミツルさんや君のお兄さんも一緒にね」

え……？

「ダイゴさんは君のお兄さんにホウエンリーグを制覇させようとしている。その為には今やこの一個のヒートバッジが必要なんだ」

え、待ってよ。なんの話なの……？　なんでお兄ちゃんはホウエンにいるの？

うぅん、なんでかっていう疑問の答えを私は知っている。ただ、私は知りたくなかったのかもしれない。

私を置いていったお兄ちゃんが同じホウエンにいる。そしてアスナさんが私にヒートバッジを託すのはお兄ちゃんにそれを届けて欲しいから、だとすぐに結論へと辿りつく。

「私のポケッチの番号とバッジを君に預けたいんだ」

「……はぃ」

でも私はその時断りもせずに、その両方を受け取った。

自分でも整理のつかない心境と共に、私はカラクリ大王とアスナさんに導かれてニューキンセツへと向かう抜け道の所まで案内される。

「頑張りたまえルカちゃん。この世界のカラクリを理解すれば、君の望む明日が迎えられるかもしれない」

「ごめんね、初対面のルカちゃんにこんなことお願いするのはお門違いだけど……今のあたしはとても無力だから」

私はバッジを受け取る時に、今の地方リーグの新たなルールの説明を受けた。バッジを八つ持ったひとりがリーグに挑めるという新ルール。そしてジムリーダーが年に与えられるバッジは一つのみ……それが奪われた際にはジムリーダーとしての職務も剥奪。

「だから、私はもうフエンシティにも戻れない」……そう哀しげにこぼしていたアスナさんを見てしまっては、私はこの任務を断れずにはいられなかった。

私は二人に礼を言い、ガーディと共に細長く真っ直ぐ進む抜け道を歩いていく。

ぼんやりと抜け道を照らす光に導かれて、私はそのまま進んでいった。未だ心中で葛藤する想いに戸惑いながらも。

ドォン！！！

「っ！？」

突然の衝撃音と振動。視界が一瞬にしてぶれて、ガーディも奇声を発する。

え？　え！？　何が起こったの？！

私が突如後ろへとふりかえると、私はカラクリ屋敷から押し寄せてきた黒煙に視界を奪われるのであった。

第十二章：すれ違う人々　ＩＩＩ：出会いと別れと（後書き）

一応言っておきます。自分の小説はシリアスが主です。

ルカ「今更」

うっ、まあそういうことですのでよろしくお願いいたします。

ルカ「ではでは～」

では！

第十二章：すれ違う人々　ＩＶ：かけがえのない人（前書き）

さて、いきなりの展開からまたまた展開していく今宵のメディター。

ルカ「へー」

あ、それと最近改名しようと思ってます。

ルカ「ユーザー名？」

ううん、この小説のタイトル。

ルカ「えぇ？！」

第十二章：すれ違う人々　ＩＶ：かけがえのない人

「ごほっ、げほっ……！　な、何！？」

「ガゥウゥ」

突如として迫りきた黒煙が私の視界と空気を奪っていく。

爆風と共に飛来してきた煙は私がさっきまでいたカラクリ屋敷の方から。

考えたくもない。でも、もしかして……っ！

「うっ……」

私は抜け道で膝をついて、咳込みする。

息が、できない……。

態勢を低く保ってみるも、ここはワンウェイの細長い地下通路。出口が二つあるとはいえ、一方は明らかに先の衝撃で崩れているはず……。

え、でも、だったらもう煙は止んでいるはず。

どういうこと？

瞼を閉じたままで、私はそう思考を巡らせるも身動きが取れず。段々と肺の中へと吸い込みもたくもない煤が侵食してくる。

ガーディは私よりは平気みたいだけど、もう威勢よくは吠えなくなった。

一体、何が起こって……？

「げほっ！　ごほっ！　かはっ……！」

状況を理解、整理できる暇もなく、私は力なく地面へと突っ伏して意識が飛んだ。

「ルカちゃん！　ルカちゃんっ！」

懐かしい声を聞いて、私は瞼を開く。

そこには見知れぬ天井があった。蛍光灯の出す白色の光が、妙に眩しく見える。

「ここは――――？」

「ルカちゃんっ！」

そして途端に私の視界に覆いかぶさってきたのは、私の頭を抱え

るようにハグをしてきたハルちゃんだった。

「は、ハルちゃん？」

「ルカちゃん、よかった～！」

なんでハルちゃんがここに？

私はあの抜け道で倒れて、そのまま意識不明になって――――。

「おや、意識が戻りましたな」

ハルちゃんの泣き崩れてしまった顔を見ながら、私はそう声を出した人へと視線を向ける。

白衣を着こんだ初老の男性。お医者さんかな。

「いやー、それにしてもびっくりしましたよ。キンセツジムの真ん前で少女が一人倒れているという連絡を受けましたからなあ」

キンセツジムの前？

もしかして、私はキンセツシティにいるの？

私は自分に抱きついているハルちゃんの体を、布団の下に埋もれている両腕を使って受け止めるようにして掴む。

「ハルちゃん」

「なぁに、ルカちゃん？　どこか、痛む？」

私は静かに首を振って、ありがとうという意味合いを込めて優し

く微笑む。そして訊ねる。
「ここってキンセツシティなの？」
「え？　うん、そうだよ。病院から私達の方に連絡が来たの」
え？
「ルカちゃんのポケギアの連絡先から、私達の名前を見つけたんだって」
そっか。そうなんだ。
私はその時ポケギアの連絡登録先が少ないことに気がつく。そういえば、まだスミレちゃんとアスナさんの連絡先登録してなかったな……。
「君のご実家にも連絡をしたんだが、出てもらえなくてね。……君はカントーの出身みたいだね」
「あっ、はい」
「可愛い子には旅をさせろとは言うが、君は一体どうしてあんな場所で倒れていたのかな？」
良く見れば、ハルちゃんとお医者さん以外にもちらほらと人影が私の視界へと入ってきている。
その中にハルちゃんのご両親と、なんだか見知らぬ男性の二人組が睨むような視線を私へと向けている。
心配そうに私をベッド横の椅子から見守ってくれているハルちゃんの片手をそっと握って、私は口を開く。

「覚えていないんです……」
「……そうか」
お医者さんは、何も追求せずに頷いてハルちゃんの肩に手を置く。
「さあ、面会の時間は終わりだ。皆さんも、一時退室をお願いしますよ」
と、主治医の先生を先導に私以外の人達が個室から出ていく。
「ルカちゃん、またお見舞いに来るから！」
「うんっ、ごめんね心配かけちゃって」
私がそう返答すると、ハルちゃんはまたも泣きだしそうな表情で首を横にぶんっぶんって振ってくれる。
「ありがとう」
私はハルちゃんの意図がわかって、胸があったかくなって、そう呟いた。
ハルちゃんは余計にもっと泣きだしそうになったけど、主治医の先生に先導されて退室していった。
なんで皆が退室させられたのか、その理由を私は理解していた。
昏睡状態、ではないけど意識不明の状態の患者が目を覚ました時に必要とされるのは時間である。

適度な人との接触によって安心感を与えて、自身の確認をさせるだけの時間を置いてから、情報を与えたり聞きだしたりする。それが一通りの流れとなっているからだ。

でも、本当に私は覚えていなかった。

自分がなんで、どうやってあの状況から助かったのかを。

何もかもが真っ白なこの狭き空間で、私は自分の腕に刺さっている点滴の細いチューブを見下ろしながらサイドテーブルへと目をやる。

そこには私の煤だらけになった荷物とウエストポーチ。私の手首から無くなっていたポケギアとポケモン達の入ったベルトと共に、同じく汚れてしまった私の服が畳んで置かれていた。

あっ……。

私は布団の下をぴろっと広げて確認してみる。

頬が紅潮するのを感じながらも、私は自分の体が綺麗に拭かれ、着替えさせてもらったという羞恥心に苛まれる。

うぅ……。はずかしぃ。

でも、それにしてもどうして私は……。っ！　ガーディは！？

私は思い出したように勢い良くボールの装着されているベルトからガーディのボールを見つけ出して取り出す。

開閉ボタンを押すと、閃光と共にガーディが出てきて元気な姿を見せてくれる。でもその体毛は煤によって黒く汚れてしまっている。

「よ、よかったぁ。無事だったんだ、ガーディ」

「がうっ」

それでも尚、私の抱いている疑問は解消されない。

お医者さんの話によれば、私は行ったこともないキンセツシティのジムの前で倒れていたと聞かされた。

いくらジムが市街地にあっても用の無い人間が立ち寄らない場所であったとしても、現場を見ていた人間はいないということなのだろうか？

そんな思いを逡巡させていると、ガーディがサイドテーブルの上に向かって視線を投げているのが見える。

「どうしたの、ガーディ？」

「ががう！」

ガーディの視線の先を辿って行くと、そこにあるのはシャワーズとラルトスの入ったボール。

ガーディはもしかしてこの事態の経緯を知っているの？

っ！？

私ははっとして残りの二匹をボールから出す。

すると私は目を見張った。なんでって、シャワーズとラルトスの体がガーディ同様に煤にまみれていたから……。

あの抜け道で一緒にいたのはガーディのみ。だからこの二匹がガーディと同じ状態になっているはずはない……けど二匹は汚れている。それは、つまり―――

目頭が急速に熱くなっていくのを感じた私は、白い患者服の袖で顔を隠して静かに嗚咽を漏らした。

「シャワーズ、ラルトス……ありがとぉ」

ひっく、ぐずっ、と汚いかもしれないけど泣きじゃくりながらお礼を言う私に、シャワーズとラルトスは何喰わぬ顔で鳴いて答えてくれた。

まるで大したことでもないかのように。

「ガーディも、ごめんねっ……ごめん、ありがとぉ〝」

涙で滲んだ視界でガーディを含めた三匹はただ私を見上げて、一回短く鳴いて微笑んだ。

まるで私に心配するなと言っているように。

「ありがとぉ、ありがとお〝、皆……っ」

しばらく経って、私の部屋にさっきのお医者さんがやってきた。ガーディ達には悪いけど、もう少ししてからポケモンセンターの方へと預かってもらうことにした。

私はここまでの経緯などを聞かれたけど、明確な答えを出さずに応答した。

さっきポーチを開いてヒートバッジとアスナさんの番号が書かれた紙が動かされていないこと確認した私は、守秘に一徹することにした。

ただ私が煤だらけであんな場所にいたという現実をカバーできる言い訳を私は出せずにいたし、それを隠し通すことは無理だった。でも、実際には事態を把握できていなかったのは私もおんなじなのだ。

勿論病院側が私を救ってくれたことを顧みないわけにはいかない。でも、アスナさんとの約束やあの時何が起こったのかを確認しようとするわけにもいかない。

そんな私の窮地を救ってくれたのが、ハルちゃんだった。

そもそもハルちゃんの所へと連絡がいった時、ハルちゃんはすで

に私の身柄保証人になっていてくれたらしい。私の治療費を請け負ってくれたというのを、私は後日知らされることになりお金は払うと言っても全くもって受け取ってはくれなかった。

「そんな、悪いよ！」
「だぁめ。私達は友達でしょ？　困った時はお互い様だよ」
「で、でもっ！」
「だーめっ。私がルカちゃんを助けられるのってお金ぐらいだもん……だからさ、ねっ？」

そう言って私にきかせたハルちゃんの顔はどこか悲しげで、寂しげで、私は何も言い返せなくなってしまった。

主治医の先生は私に良くはしてくれたけど、当然良い想いはしていないんだろう。だって、結局あの私が見つかった時の様子と事情については何も解決仕舞いだったから。

それに私にとってもいろんなことがわからずじまいに終わった。

シャワーズとラルトスがボールから出てきて何をしてくれたのかはわからないけど、私を救いだしてくれた。その方法はわかることはわかったけど、でもどうやって？　っていう疑問は残る。

そして今こうやって病院を退院してハルちゃんの泊まっているホテルにいるけど、この胸のわだかまりは解消できてはいない。

私が病院でお世話になった三日間の間にハルちゃんは私の身の周りの世話を一手に引き受けてくれた。洗濯や看護、そしてお金の手配等……。

本当に申し訳なく思っている。でも、そんなことは考えちゃいけない。

「ほら、ルカちゃんまたそんな顔してるっ。言ったでしょ、困った時はお互い様だって？」

「あっ、うん。ごめんねハルちゃん」

「んもうっ」

勿論、きちんとハルちゃんのご両親にはお礼を言った。でも、結局おんなじことを言われちゃったんだよね。

私は今ハルちゃんと、ハルちゃんのメイドさんのシイカさんと一緒にお茶を飲んでいる。

これ以上ハルちゃんに頼るのは気が引けたんだけど、私は抱えていたわだかまりを相談することにした。

「あのね、ハルちゃん」

「なぁに？」

ことっ、とお茶の入っていたティーカップをテーブルに置いて私は聞く。

「あのね、私が倒れていたあの日なんだけど……爆発事故とかなかった？」

「っ……」

そう質問した時、確かにハルちゃんの中で動揺が走ったのを私は見逃さなかった。

そうだ。考えてみれば、あれほどのことが起きて私から何の疑いの目が向けられないわけがなかったんだ。

そっか。あの時初めて目が覚めた時にいた人達は、刑事さんだったのかもしれない……。

「もしかしてハルちゃん、私のことを守ろうとしてあの人達に――」

「いいの！」

そこで私は初めてハルちゃんの激情を目の当たりにした。

「気にしないでって言ったじゃんっ」

ハルちゃんから窺いしれたのは、焦りとごまかし。

「……ハル」

「シイカは黙っててて！」

こんなに声を荒げるハルちゃんを私は初めて見た。

そして彼女の様子から、私がどんなにハルちゃん達に迷惑をかけたか想像だにできなかった。

私は救われた。

自分のポケモン達に、自分の友達に。

でもその代償は、私が想像していたよりも遥かに大きなものだったのかもしれない。

ハルちゃんに、嫌な思いをさせてしまったのかもしれない。

そう考えれば考える程に、私は……。私は……。

ぎゅっ

「え？」

私はハルちゃんを背後からそっと抱いていた。

素っ頓狂な声をあげるハルちゃんに答えるようにして、私はさらにぎゅっと腕に力を込める。接触する体と体が力の入る度に更にふれあい、体温を直に感じる。

「ごめんね、もう何も聞かない。ありがとう、ありがとうハルちゃん」

ぎゅっ

私は涙していた。

自分の無力さゆえに、自分お無知さゆえに、かけがえのない友達にさせたくもない想いをさせてしまったことに対して。

そして友達も涙していた。

腕に落ちる彼女の涙は、でも冷たくなくて私は安堵した。

なぜなら、彼女もまた私と同じように友達を想って泣いてくれた

のだから。

第十二章：すれ違う人々　ⅠＶ：かけがえのない人（後書き）

この第十二章はタイトル通り、たくさんの人物とルカは出あいます。なので展開が若干スピーディーとなっておりますので、ご了承ください。

ルカ「ねえねえそれよりも改名って？」

ああ、うん。

「ポケットモンスター　メディター」ってなんかターが二つ連なってるから変な感じするんだよね口頭だと。

ルカ「誰も口頭でこのタイトル読む人いないよ；；」

ごほんごほん、なのでポケットモンスターを取って何か付け加えるかもしれません。

まあ気の迷いですけど。

では！

第十二章：すれ違う人々　Ｖ：私の想い（前書き）

さて……いうことがないのでそのまま本文へ。

ルカ「はやっ！」

第十二章：すれ違う人々　Ｖ：私の想い

そして私はハルちゃんと別れた。

後々ポケモンセンターにあった新聞で知ったことなんだけど、あの日私が意識を失った原因だったカラクリ屋敷の爆発は……なぜか火事として掲載されていた。

謎の原因不明な火災によるカラクリ屋敷の全焼。そんなテロップと共に新聞に掲載された記事を読みながら、死者が出なかったこと、主人が行方不明と記載されていたことにどことない不安と安堵を感じていた。

私はこうしてまたもロケット団……。うぅん、サカキという人物が持つ力というのを目の当たりにした。

ハルちゃんは私がまた旅立つといった時に私を離してはくれなかったけど、でも私にはやらないといけないことがあるし、それはハルちゃんも同じだった。

むしろ私のせいでハルちゃん達のスケジュールに支障をきたしてしまったのが、私の心残りだった。

でもそんなこと言ったらまたハルちゃんに叱られちゃったんだよね……。

『私のことはいいのっ！　私は、ルカちゃんが心配でっ、だからっ！』

私はこんなにも私を想ってくれる友達がいることに、アルセウス様に感謝しなければならないんだろうな。

アスナさんから託されたバッジ……。

それを見つめながら私は、でも当初のプランを断念するつもりはない。

世界を取り戻すことは大事。でも、私はカナを助けたいんだ。だから、ハギさんに会いに行く。

それは私の優先順位として揺るがない決意。

カナは私を救ってくれたんだ。自分がああなってしまうことを分っていて、それでも私を救ってくれた。

毎晩毎晩そのことを思い出すだけで涙が出る。

でも、悲しんでいるだけじゃ駄目。だって、カナは私が私らしくいるための日常を守ってくれたんだから。

だから笑う時には笑って、泣きたい時に泣いて……。そうしながら私はカナを救うんだ……。カナがいつ目覚めても私らしい私でいる為に、カナが知っている私のままでいる為に。

ポケモンセンターを出て、冬のひんやりとしながらも温かな陽射しに照らされながら私は歩きだす。

キンセツシティにはホウエン全土を結ぶリニアの路線が遂最近出来上がったらしい。だからそれに乗って目的地へと行こうとしたん

だけど、その駅の中では人だかりができていた。

どうしたんだろう？

ぴょこっと集団の中でジャンプして前の方で何が行われているか確認しようとする。そしてそこにいたのはちょっと小太りした、印象的なジャンパーに身を包んだ男の人だった。

「皆すまない！　だが、当分このリニアは運行を見合わせることになった！」

豪快な声はよく響き渡り、アナウンス用のスピーカーより声が良く通る。

「修復工事が終わるまでの三日、すまないが皆には市バスを使ってもらうことになる！」

ざわざわ。

人込みの間からざわめきが蘇って、各々に更なる情報が出るまで待つ人や、早々と市バスの停留所へと向かう人に別れていく。

だんだんと人がはけていく中、私はさっきのアナウンスをしていた男の人と目があってしまう。

「おっ」

え？

そしてその人は、まるで私を知っているかのようにして近づいて

くる。

え？　え？

「君は先日わしのジムの前で倒れておった子だな」

……。

とさかの様な白髪に豪快その一言につきる顔立ちのその人は優しそうな表情で私に話しかけてきた。

わしのジムの前で倒れておった……。

っ！！

「キ、キンセツジムのジムリーダーさん！？」

「いかにも！　わしはテッセン、このキンセツシティのジムリーダーを務める者じゃ！　がっはっはっは！」

さっきまでの主導者っぽい雰囲気とは裏腹に、とても愉快そうな人物に思えてしまう。これがジムリーダーの器ってやつなのかな……。

「あの、えっと、その節はご迷惑をおかけいたしました」

「なぁに！　元気でおったら結構結構！」

この人、ちょっと苦手かも……。

そう内心にとどめるだけにして、私はリニアについて少し質問しようとしたけど逆に話を進められてしまう。

「君は挑戦者だったんだろう？　なんなら今から挑戦を受けても良いぞ？」

え？

「あんなボロボロになってまでもジム戦がしたかったのだろう？その意気や良し！」

あの、えっと？

「それではジムへと行こうか！」

えーーー！？

連れられるがままに、私は今キンセツジムのバトルフィールドに立っていた。

私の話を聞いてくれぬまま、審判の人までもがいつでも始めても良いという態勢に入ってる。

うぅ、なんでこんな目に。

私は早くトウカシティに行かなきゃいけないのに！

でも、テッセンさんにはいろいろと迷惑かけたのは事実だし、ああ思い込んでてテッセンさん自身は満足してるから……しょうがないよね……。

「バトルルールは一対一のシングルバトルです。挑戦者、名乗りをあげた後にポケモンを出してください」

「あ、はい！」

私はどの子でいくか迷った末、シャワーズのボールを手に取る。

「ハナダシティのルカです！　行って、シャワーズ！」

私が繰り出したポケモンに対してテッセンさんはちょっとだけ面食らったようにして、それから豪快に笑いだした。

「面白いぞルカ殿！　がっはっは！！」

え、何が？

「わしはテッセン、このキンセツジムの電気使いのジムリーダーじゃ！　行けライボルト！」

フィールドに躍り出たのは、私にとっては初めて見るポケモン。

なんかカラクリ屋敷辺りで見たポケモンと雰囲気が似てるなって

その時思ったんだけど、後からそのポケモンの進化形がライボルトだったみたい。

え、っていうか、電気専門のジムなのここ？！

そういえば辺りを今一度見渡せばそれらしき感じがジム内から伝わってくる。

事の成り行きについていけなくて、そのままシャワーズ出しちゃったよ……。

「それでは、バトルスタート！」

審判さんの威勢良い掛け声と共にバトルの火蓋が切って落とされたんだけど、結果はあっけなく……私とシャワーズは見事に撃沈させられた。

べ、別にバトルの内容を説明するのが面倒なんかじゃなくて……えっと、その、あまりにも伝えるのも悲惨なものだったからで……。

ごめんね、シャワーズ……。

「ふぅむ……」

一方のテッセンさんも期待外れみたいだった物哀しげな感じでバトルの感想を出せずにいる。うぅ、ごめんなさい、ごめんなさい、弱くてごめんなさい。

でも一つ学べたことはあった。

カナのシャワーズはやっぱりスタミナがもうちょっとあった方がいいかなということ。

今実戦でまともに戦えるのはガーディくらいだから……。あ、そういえばラルトスってどれくらい強いんだろう……？

そんな様々な思考と共に、私の初のジム戦はこうして幕を閉じた。

こんなんがジム戦デビューでいいのかな？　なんて思いつつも、私は一応テッセンさんからトウカシティへと行く道を聞きだして別れを言う。

「また挑戦しに来なさい！　がっはっは！」

「あ、はい」

もう絶対来ない……。

とりあえずはポケモンセンターにもう一度寄って、私は１１７番道路へと向うことにした。

キンセツシティは昨日ハルちゃんとシイカさんと一緒に堂々巡りしたし、十分に楽しんだ。ゲームセンターに行ったり、サイクルショップで自転車をレンタルしてサイクリングロードを往復したり、最近流行っているデコメールのアプリを吟味したり。

短い間だったけどね。

本来ならアスナさんから託されたヒートバッジと共に、テッセンさんに勝ってバッジをもらってお兄ちゃんに渡した方がいいんだろうけど……。今の私にそれほどの実力はない。

それに、なんかそんなことしたらお兄ちゃんにどやされそうだし。まあ、ジム戦を受けられないことに悔しがるお兄ちゃんの姿も見てみたいってのはあるけど、今はそんなことをしている余裕は私にはない。

私はトウカシティへと辿りつく為の最初の中間点であるシダケタウンへとキンセツシティの西から出る１１７番道路を歩いていく。

その道中で、お兄ちゃんのことを再び思い浮かぶ。

いつも嫌味を言ったり、ちょっかいを出してくるお兄ちゃんとは離れ離れ。人伝に同じ地方にいることを知っても、きっとお兄ちゃんは知らないだろう。

お兄ちゃんとミツルさん……そしてダイゴさんが一体今どんな活動をしているのかはわからない。でも、皆が世界を取り戻そうとしているのは知っている。

でも私には未だにわかっていないことがあった。

一体誰が敵なのか味方なのか。ううん、果たしてそんな境界線が存在しているのか……ということ。

サカキは敵……それはわかる。

でも、サカキに従っている人達は皆敵なの？

テッセンさんだって……敵なのかもしれない。でも、そうは見えなかった。あの人はあの人で自分の街の人達のために職務を全うし

ていた……そんな感じがした。

そりゃサカキがやったことは許されないよ。だってあいつは私のカナをあんな目にあわせたんだから。

そしてお兄ちゃんもきっと、許せないことがあるから協力しているはず。

私は、私は許せない。だから協力する。

カナ以外にもきっとあのサカキによって大切なものを失ってしまった人達はいるから……。

でも、私はお兄ちゃん達を率いているダイゴという人物について何も知らない。

もし彼がお兄ちゃんを良いように利用しているだけだとしたら、私はそのダイゴという人も許すわけにはいかない。

でも……。

果てしない自問自答のループ。

それはただ私の中のもやもやを拡大させていくばかりで、何も答えなんて見出すこともできない。

ばちんっ！！

「いったぁ～～！」

私の両頬は見事な音と共に赤く腫れ上がる。外が寒いせいか、余計に頬の紅潮が目立つ。

私は自分で自分のほっぺを勢いよく叩いた。

ドントシンク、フィール……じゃないけど、考えちゃダメだ。

考えるのは全うすることを全うした後。

いろんな疑問は、そりゃ残るよ？　リョウさんのことや、カナのこと、カスミさんやお兄ちゃんのこと、サント・アンヌ号のこと、アスナさんとカラクリ大王のこと、サカキのこと、ハルちゃんのことやスミレちゃんのこと、ハギさんのこと……。

でもその疑問全てに答えを見つけられる程に私は頭が良くないし、そしてその手段すら思い浮かばない。

でも、でもさ、わからないけどわかっていることはあるんだ。

このままじゃいけないってこと。

直感かもしれないけど、私はカナを救いたいんだ。この世界を救うよりもまず。

だから進まなきゃいけない。

だって私にできることといったらそれくらいなんだもん。

そう私が思い悩んでいる間にも、シダケタウンへと到着する。そしてそこで私が出会ったのは予期にもしない人物であった。

うそっ……。

「カ、カナ……？」

振り返ったその少女は密かに微笑みを浮かべていた。

第十二章：すれ違う人々　Ｖ：私の想い（後書き）

さて、タイトルを変えるとか言ってましたが変わってると思います。

ルカ「メディター　～ポケモンと人をつなぐ命の物語～」

はい。

ルカ「長いし、変だよね」

じゃあ、やめるか。

ルカ「え？」

タイトルは、このままで

ルカ「……おさわがせいたしました」

第十二章：すれ違う人々　ＶＩ：終わりと始まりを告げる来訪者（前書き）

はてさて、気がつけば一週間たっていたという；；；

ルカ「……遅い」

すみません；；；

いやー、このお話で第十二章は終わるのですがやっぱりルカ視点から書くというのは難しいですｗ

ではどうぞ～

第十二章：すれ違う人々　ＶＩ：終わりと始まりを告げる来訪者

「カ、カナ……？」

信じられなかった。だって、私の目の前にいるのは見間違えるはずのない、私の大事な大事な友達なのだから。

でも私が呼び掛けたその少女は私の方をただ黙って、じっと見つめ返してくる。

そして少しの間をあけて、にこっと笑うと私の方へと近づいてきた。

私は喜びのあまりカナに抱きつこうとしたけど、わからない……足が動かない……。なんで？

「ふふ、みつけちゃった♪」

いつの間に彼女は私に一瞬で迫ってきたのだろうか？　気がつけば彼女の声が私の耳元でささやかれていた。

ざざっ！　という音と共に私は身の危険を感じて後ずさっていた。

「だ、誰、あなた？」

口元が震えていた。

「ふふ、やっぱり感じ取れるのね……私が人じゃないって」

人じゃない？

でも、なんで、カナの姿をしてるの？！

「それにしても、この姿でばれるってことは……時が迫っているのね」

っ！！

今度はすぐ後ろから声が聞こえた。

カナの姿をしたソレのカナと同じように長く伸ばした黒い髪が私の肩にかかる。

周りにも通行人や町の人がいるはずなのに、一切としてこちらを気に掛ける人はいない……。

ど、どういうこと？

「ちょっと、お話しましょうか」

ぐっと掴まれたのは私の右腕。抵抗しようとしたけど、私の視界はソレが放った一言によって反転した。

「【テレポート】」

途切れた視界が次に映し出したのは真っ黒な空間。

ううん、目が慣れていなかっただけで徐々に私の眼は岩の凹凸を認知させる影をとらえ始める。

ここは……？

「ここは、シダケタウン北部にあるカナズミトンネルよ」

カナズミトンネル……！？

私がシダケタウンに寄った目的である場所の一つだった。

このトンネルを通ることでショートカットになるってクスノキ館長さんもテッセンさんも言っていた。

「自己紹介がまだだったわね、私はあなた達の言葉を借りるとすればポケ人。私があなたを必要とするように、あなたが必要とする者よ」

何を言ってるの？

でも、ポケ人って……もしかして、あの？！

「あなた、とても面白い顔をするのね。さっきから」

カナの姿をしながらカナではないそのポケ人は、私の表情から心情を読み取りながら薄ら笑みを浮かべる。

「な、なんで、なんであなたがカナの姿をしてるの！」

私はまず最初に問いたださなければならないことを尋ねる。

「なに言ってるの？　あなたは八柱力の一人じゃない？」

八柱力？　なにそれ？

というか話をはぐらかされた？

私がぽかーんとしているのを感じ取ったのか、目の前のポケ人は私のことを不可思議な目から何か企みを思い浮かんだような顔になる。

「なるほどね。どうやら今この国のトップはいろいろと見計らってるのかしら」

ポケ人……それはポケモンでも人でもならざるもの。

その単語を私は授業で知っていた。前に起こった一連の事件については教科書に載っている。でも、ポケ人は皆死んだって思っていたのに。

「ねえ、あなた名前はなんていうの？」

答える義理は私にはなかった。でも、目の前のポケ人はカナの姿

をしていて私はそれを問いたださなきゃならない。

「ルカ。ハヤミ　ルカ。こ、答えて！　あなたはなんで――――」

「ルカ……。そう、良い真名ね」

この人、私の質問をっ！

私は握りこぶしをつくりながら、わなわなと肩が震え始めるのを感じる。

「ふふ、あなたの質問はこうすれば答えになるかしら？」

え？

ふわっ、と突然そのポケ人のまわりを綺麗な緑色の光が包み込んだ。そして眩い光が煌めき終わった時、そこに立っていたのは私だった。

「な、なんで、私が――――」

「私はポケ人。そして私は八柱力の仮柱」

何を言っているの？　八柱力って一体なんなの？！

「ふふ、でも時の流れは面白いわ」

私が知っている私の声が私に向かって放たれる。

自分の声を自身が聞こえることはない。それは自分が発する声が自分自身の体の中で反響しているからとされている……でも、皆大体自分がどんな声をしているかは知っている。

この違和感、気持ち悪い……。

「あなたはどうやらすでに八柱力の内の半分とは出会っているのね」

「なんなのよ、八柱力って！！」

私を見下ろす私の姿をしたポケ人。

やだ、なんなのよ、これ！

ふふ、と妖艶な笑みを浮かべるソイツはまたも淡い光で全身を覆う。そして次に出てきたのはスミレちゃんだった。

「この子は知っているのね」

そしてまたも姿を変える。

次に現れたのは緑色の長い髪をした中性的な顔立ちの同い年くらいの男の子。背が高いけど、白い肌がなによりも眼につく。

「この子は知らない……」

え、なに？　うっ。

またポケ人は姿を変えて現れる。

今度は、ハルちゃん？

「ふふ、この子は知っている」

そしてまたも――――！？

「あら、拒絶と憎悪の色。これも因果なのかしらね？」

そう、だって現れたのはカナをあんな目に合わせた張本人であるリョウさんの姿……。うぅん、さん付けなんてもういらない。

そうして後二回くらい姿を変貌させたポケ人は、私がハルちゃんの後に出てきた二人を知らないと確認した後に大人びた人間の姿になった。

淡い桃色の髪に、幼さが残るもなにもかもを見透かしているような瞳、そして額にある三叉槍の紋……。

「これが私の本来の姿」

「なんで、あなたがハルちゃんやスミレちゃんを知ってるの？！」

謎が謎過ぎて何もわからない。

一体ポケ人って何？　何なの？！

「最初にあなたが見た者から、あなたを含めた八人……それが八柱力よ」

はっちゅうりき……。

「八柱力はこの世界をポケモンから救ってくれる八人の私に近い人間のことよ」

世界を、ポケモンから救う……？

「まあ、それは時がくればわかるわ。それよりも……」

え？　あっ――――。

突如、ポケ人は私の額に己の手をあてる。

まるで冷気が私の脳から直接、ポケ人の手のひらに伝うようにして一瞬だけ奇妙な感覚に見舞われる。

「あなた、面白い人生を歩んでるのね」

っ！？

その一言で、私はざっと後ずさりする。

この人、私の記憶を？！

「八柱力になる人間はどこか特殊な能力を有して生まれる。その開花はその人それぞれだけど人間でいう２０歳になるまでには目覚める……」

特殊な能力？

「あなたの場合はポケモンの体の大まかな構造や状態が瞬時にしてわかるのではない？」

っ！！

「そう……。最初にあなたが見た姿はあなたの友人のものなのね…

…それは悪いことをしたわ」

まるで私の記憶を一ページ一ページ捲っていくように、ポケ人はゆっくりと私の情報を吟味しながら言葉をつないでいく。その顔には憐れみが濃く刻まれている。

そうなっている間、私には疑問が及ぶ。

なんだってそれじゃカナも八柱力で特殊な能力を持っているっていうの？

「あなたがカナと呼んでた少女は、つい最近夢で未来を見る能力に目覚めたようね」

っ！！

そうだ、カナが元旦に見た夢……。あれは、まさしくその通りだった。

だ、だったら、ハルちゃんもスミレちゃんもリョウさんにも、さっき見た知らない三人もそれぞれに能力を持っているっていうの？

でも、なんでそんなことをこの人は知ってるの？

「私はポケモンでも人でもない……でもね、ポケモンでもあり人でもあるわ。そんな私がこの世界の行く末を監視し続けて二千年、やっと八柱力の一人に会えた」

に、二千年……？

「おかしなものよね。こうしてやっと会えたというのに、私の心は冷めきっている」

寂しそうに言葉を零すポケ人の表情を私ははじめて見た。

「ミュウを助けた時に力を使いすぎたかしらね……。それとも時が迫ってきて、運命が私の力を必要最低限に特化させたのかしら？」

「あなたは一体、なんの為に？」

私は目の前のポケ人が何を考えているかはわからない。でも、彼女の全身から伝わってくる形容しがたい静寂さが私を戦慄させる。

「あなたも来る、イッシュへ？　あなたが向かわなければならない場所へ……」

「イッシュ？　私が向かわなければならない場所……？」

諭される私。

「あなたが望むものは何？」

「……私が望むもの？」

私が望むもの？

私が、望むものは……。

「カナ」

っ！

私が言いかけていた言葉を言われてしまう。

この人はなんでこんなにっ！

「テンドウ　カナだったかしら？　仮初の名前に包まれし八柱力……人間ってとことん面白いことをするわね」

わからない、わからない、わからない。

この人は一体なんなの？

「脱線したわね。あなたはチイラの実を探しているみたいだけど、あなたすでに持っているわよ？」

……え？　……えっ！？

「ハギという老人があなたに渡したポロック、それがチイラの実を使ったものよ」

うそっ！？

「ポッポが豆鉄砲食らったような顔をするのね」

わわわっ！

私は指摘された表情を手振り身振り腕を振って隠そうとする。

「ふふふ、かわいいわね。早くそれを持ってカントーへと帰りなさい」

咄嗟にポーチを探ってポロックケースを手に取る。

確かに言われてみれば、チイラの実の色とポロックの色は一緒だ……。

「私も欠員が出るのは嫌だからね。でも、あなたは本当に不遇な子……」

「えっ――――」

私は彼女にそっと、ぎゅっと抱かれていた。

触れるのも、喋るのも怖かったのに……。のに、彼女から感じるのは底知れない温かさと安堵感。

なぜだろうか？

はじめて会ったはずなのに、なぜか彼女から感じるのはお母さんと同じ温かさだった。

「カナを連れて、あなた達はイッシュへと向かいなさい。その頃にはきっと、この国はまた変わってしまっているだろうけど」

焦らないで……そう彼女、ポケ人は言い残した。

一瞬にして消え去った彼女の温もりは依然とまだ私に残ってはいたものの、視認することはできなかった。

「あっ……」

謎が謎を残していった。でも、答えは出た。

呆気ないって言うのかな？

でも巡り合わせなんだろう……。

この時の私はまだ、ポケ人が残した言葉の真意に気がつくことはなかった。それを思い知らされるのが五年も後のことであったことも、当時の私は意に介することもなかった。

「早く、早くハナダに戻らなきゃ……っ」

そう、私がしなければならないのはハナダへと帰ること。

これでカナが救われるのだから。

自分の身の危険を顧みず、私を助けてくれた友達を。

さっきであったポケ人は、なぜ私にあそこまでいろいろなことを教えてくれたのだろうか……。

そんな疑問をそっと胸に秘めて、私はこの洞窟から出る為に意識を戻す。

……暗い。

っていうか、ここってどこ？

「ここからどうやって出ろって言うのよ～！！」

十数分後、私の嘆きを聞いた洞窟の通行人によって私が救出されたというのはまた別のお話……。

第十二章：完

第十二章：すれ違う人々　ＶＩ：終わりと始まりを告げる来訪者（後書き）

さて、次はまたシンオウの方へと戻るわけですが……

ルカ「八柱力って……」

もうポケモンかよって話ですが、まあちゃんと考えていますのでｗ

それにまあ大体その八人の残りは皆さんはわかってると思うので……ｗ

ルカ「じゃーね～」

第十三章：極寒の中で　Ⅰ：歩まなければならない理由（前書き）

さて、やはり三人称視点というのは落ち着きます。

ルカ「わるうございました」

いやいや、ルカのはルカので楽しいんだけどねすらすらいくのはやっぱり三人称ですね。

さて再びシンオウ編です。ではどうぞ～

第十三章：極寒の中で　Ⅰ：歩まなければならない理由

日本最北地方、シンオウ。

そこに今、シンオウリーグを目指す一組のトレーナーが存在する。

新しく用意されたジム戦とリーグ出場資格のルールに則(のっと)ってサカキという新たなる支配者から世界を取り戻すべくして。

カンバル　アユミとミサカ　キリンの両名はミオジムを制し、次のジムがあるクロガネシティを目指していた。

しかし二人は今、その道中にあるコトブキシティにて休息を取る為にポケモンセンターへとやってきている。

「疲れた……」

「お前、ほんとにそれしか言わねえよな」

「悪い？」

「いえいえ、めっそうもございません～」

きっと睨み返してくるアユミをよそに、キリンはぐびっと自販機で購入したコーヒー缶を啜る。

先ほどこのポケモンセンターへと到着した二人は、ミオシティ同様にソファに腰かけてくつろいでいた。

「へへ、それにしてもどーよこれ？　かっこよくね？」

羽織っているジャンバーの内側をめくって見せるキリン。そこに

はハナダジムで獲得したブルーバッジとその横に付けられたマインドバッジが存在する。

ジムを出る時にアユミに没収されたはずなのだが、どうやらここまでの道中でいろいろと便宜が図られたらしい……。その代償がなんだったのかは……その、いずれ。

「男って生き物はつくづく理解できないね」

例え交渉の上でバッジをキリンに返したアユミであったが、そこまでしてバッジを身につけていたいのか……それを彼女は女として理解できずにいた。

まあ、キリンが子供っぽいだけなのかもしれないが……。

「次のジム戦はアユミがするんだろ？　大丈夫なのか？」

「私を甘く見ないでくれるかい？」

ポケギアの展開されたホログラムのキーボードを操作しながら、アユミは画面にクロガネシティの情報を引き出す。

「それに、私キリンよりは強いよ？」

「うっ……」

スクールでのトレーナー専攻の生徒達であったキリンとアユミは、ケンやリョウと同様に授業で模擬戦を幾つもしてきた。

勿論キリンとアユミはバトルをしたことがあり、その時の記録はアユミ全勝キリン全敗という結果に終わっている。

「キリンは脳筋だから動きが読みやすくて助かる」
「うっせー」

くいっと眼鏡を自慢げに上げるアユミに対して、キリンは嫌な思い出を噛み締めるようにして悪態をつきながら腕を組む。

タイプ相性的にはキリンが優勢を十分取れるのだが、戦法という面においてアユミはほぼ無敵であり彼女の能力ゆえか敵に対しての適応力がずば抜けているのだ。

「でもよ、相手はジムリーダーだぞ？　お前みたいに存在していた戦法だけで勝てる相手じゃないだろ」
「あんまり見くびらないで。それくらいわかってるよ、単細胞」

若干険悪な雰囲気を匂わせる会話のやりとりではあるが、二人はここまでずっとこんな感じだったのでフォローはしない。

「おい、あれっ」

と、ふとキリンが顎を軽く上げてアユミの視線を天井に設置されているテレビモニターへと向かせる。

ポケモンセンターのテレビは随時チャンネルが固定されており、大体は時事ニュースを放映している。そして今回も例外ではないが、ニュースの内容は人の目を惹くには十分であろう。

『今日未明、ミオシティのジムリーダーであるトウガンさんがジム内で亡くなっているのが発見されました。警察は犯人が今逃走中である元ホウエンチャンピオンである指名手配犯ツワブキ　ダイゴ一味であると踏み捜査に乗りこんでいます。繰り返しお伝えします、

今日未明、ミオシティジムリーダーのトウガン――――』

淡々とニュースを読み上げていくキャスターの左側には遂先日二人が戦った相手の写真が浮かびあがっている。

「おいおい、マジかよ……」

「……」

ミオシティからコトブキシティまでの距離はおよそ徒歩で歩くには大体二日から　三日。二人は資金調達と経験値上げの為に公共交通手段を断ち、やっとこさの想いでここへとたどり着いたのだ。

そんな中でのいきなりの衝撃的事実。

キリンは危うく缶を落としそうになり、アユミはじっとテレビを凝視し続けている。

「どうやらジムリーダーはバッジを失うと、消されるみたいだね」

「っ！？」

アユミが何か合点のいったような口調で答える。

「そう……。これはバッジを得た者たちへの見せしめと他のジムリーダー達への警告ってことだね」

「ど、どういうことだよ？」

つまりね、と両目を閉じながらアユミは説明をはじめる。それも周りの他人に聞かれないような小さな声で。

バッジを失えばジムリーダーが消されるという結論は正しい。そ

してそれが他のジムリーダー達にとっての警告であるとともに、アユミ達に限っていえば見せしめとなったのだろう。

つまりここより先、彼女達はジムリーダー達との事実上の死闘をしなければならないということになる。

「でも、わからないところが一つある」

「なんだよ、それ」

アユミはキリンにわかりやすいように先の説明をし終えた後、溜息混じりに答える。

「私達が負けた場合、どうなるかってこと」

そう。

ジムリーダーに勝てばバッジがもらえ、ジムリーダーは処分される。それはバッジが一個しかなく、その上で今年のリーグ戦を受ける資格者が一人になってしまうからである。

しかしジム戦に負けた場合のトレーナーはどうなるのか？

それを確かめなければならない、とアユミは考え始めたのだ。

「おいおい、もしかしてお前次の試合負ける気か？」

「それも手の一つだと言っているだけ。でも、ジム戦ができるかどうかそっちの方が今は心配だね」

「……？　どういうことだ？」

アユミはキリンのポケギアへと赤外線で何かのデータファイルを

転送する。

キリンはそのフォルダの着信音に気付いてそのデータを出す。

「ミオのジムリーダートウガンとクロガネのジムリーダーヒョウタは親子なの」

腕を組むアユミをよそにキリンはその事実に驚愕していた。

「親子？　じゃあ、それだったらジム戦は……」

「向こうの事情で無くなってるかもしれないってこと」

それは考えても見れば当然のことのように思え、しかし中々に判断に困るものであった。今でならジムの方に問い合わせできるのだろうが、こんなニュースが流れてしまっている今である……電話の取り次ぎも困難であろう。

それに自分の親が殺されたというニュースを見て、ジムリーダーの業務を普段通りにこなせるとは到底思えないのだ。

だが、ジムリーダーという器をもつ人間であることもまた事実であり、それを耐えしのぐ精神力を持ち合わせているのかもしれない。

「だとしたら、クロガネシティじゃなくて違う街へと先に行くのか？」

「……ううん。とりあえずクロガネシティへと行く」

予定に変更はない。

そう言ってアユミは立ち上がる。

「今日はここで泊っていくんじゃなかったのか？」
「いい。それよりも集めたお金ですぐにクロガネシティへと行こう」
「……へいへい」

キリンも立ち上がってアユミと自分の鞄を担ぐ。

シンオウ地方の主要都市間は常にバスが運行しており、一般人はそれに乗って移動するのが多い。ゆえに、路上で見かける人間は大概がトレーナーであると見極めることもできるのだ。

実際アユミとキリンがここへと向かう途中、滞在した町で停車していたバスを覚えている。バスが通る道はトレーナーが通る道とはまた違うのだ。

「しっかし、さすがはシンオウだよな。極寒対策はばっちりだ」
「そうだね。でも……寒い」
「そうか？」

冬の寒風に吹かれながら、二人は澄んだ空を見上げる。

ポケモンセンターを出て東口にあるバス停に行く時に、二人はテレビコトブキの大スクリーンを見上げる。

「カントーでいうとこのヤマブキシティか、ここは？」
「まあそうだろうね……。でも私は安心したよ」
「なにがだ？」
「キリンがジム戦をしたくないなんて言い出さないかってね」

そう、アユミはあのニュースが出てから気掛かりであったことが

一つあった。

それはジムバッジを取得するという代償がジムリーダーの命だということに対して請け負う重圧である。

「いんや、別に……。それはそれ、これはこれだろ」

「……キリン」

「向こうに向こうの事情があるように、俺達には俺達の事情があるんだ。それにアユミ、俺がそんな覚悟無しにお前についてきたとでも思ってんのか？」

キリンのその揺るがない決意を聞いたアユミは密かに笑みをこぼして、こくりと頷く。

「そっか」

「……お、おう」

アユミのそんな表情を見て、キリンは恥ずかしくなったのだろうか顔をそむける。

二人はテレビ　コトブキ前から出るバスに乗り、コトブキシティより東方に出た。

普段ならば坂道あり洞窟ありの若干険しい道のりであるのだが、今や公共道路の設置も新たに進んでいる。

コトブキ、クロガネ間はおよそバスで一時間半。

二人は並んで座りながら、キリンは肘を立てながら車窓の外をぼんやりと眺めている。

見下ろす先には自分より幼かったり同い年程度のトレーナーが自然の濃く残っている人によって踏みならされた道を、バトルをしたりしながら歩いている。

「ねぇ、キリン」

「んぁ？」

アユミはこの一時間何もしゃべらない為眠ってしまったのかと思っていたキリンは唐突な呼びかけに素で反応する。

「今まで孤児院で育ってきて、お互いの生い立ちに触れるのはタブーだった」

「……そうだな」

そう、二人は幼少からずっと同じハナダシティの孤児院で育ってきた。

「でもこれからは同じ運命を共にするんだ。お互いをもっと知る必要がある」

「……お前はいいのかよ？」

人には触れられたくない過去がある。

「私は、いいよ。そんなに大したことでもなかったし、あんま良く覚えてないからかもしれないけど」

「アユミがそれでいいんだったら、俺も文句はないさ」

だから互いに今までそのことに触れることはなかった。そう、今までは。

「前キリンがパパの本を見つけてくれただろ？」
「ああ」
本とはミオ大図書館でキリンが見つけた著書『真実と反真実』であり、その著者にアユミの姓と同じ人物の名が記されていたのだ。
「私はパパのことはしらないけど、私が孤児院の前で捨てられていた時に……同じ人の本が私と一緒に捨てられてたらしいんだ」
「……そうだったのか」
だからか、とキリンは合点がいくと同時に哀しそうに眉をひそめる。
「たったそれだけなんだけどもね……。でも、今まで誰にも喋ったことはないんだ」
アユミはそのままキリンの肩に自分の頭を乗せて、一言も喋らなくなる。
彼女が最後に告げた言葉には、キリンに対して信頼の忠誠を誓う……そんな意味合いが込められていた。
そしてそれをキリンは理解ではなく、悟ったのだろう。
「そうか。……ありがとな」
キリンは微笑んで彼女の頭を肩に乗せたまま、再度外の景色へと視点を戻した。

第十三章：極寒の中で　Ｉ：歩まなければならない理由（後書き）

実際いろいろとこう考えると、地方を一周するのにそんなに時はかかりそうにないですね。

まあ実際どれくらいのサイズか知りませんけど；；；

ルカ「それより次は？」

新キャラ出ます。

ルカ「おお」

ではでは～

第十三章：極寒の中で　ＩＩ：炭鉱の街で（前書き）

前作のポケモンでもクロガネシティを書いたな―なんて思いながら、事情がその時とはえらい違いだな……と思っていますｗ

ルカ「そうだね」

まあ、今回は新しい子が出てきます。なるべく覚えやすくしたつもりなのでｗ

ルカ「結構いろんな人出てくるもんね」

そうだね。それでは、どうぞ！

第十三章：極寒の中で　ＩＩ：炭鉱の街で

クロガネシティ：

山の中のトンネルを抜けて、アユミとキリンの乗ったバスは無事クロガネシティへと到着した。

「炭鉱の街か……」
「なんか嫌」
「おいおい、そう言うなって」

クロガネシティ、それは炭鉱によって栄えた街。黒っぽい土が街全体に広がっている、石炭に恵まれた山間部に存在している。石炭を運ぶベルトコンベアや作業員が街中に多く見えるのも特徴の一つと言えるのだろうか。

二人分の荷物を肩に軽々と担いでいるキリンは顎をしゃくってポケモンセンターの方角を示す。

「ううん、すぐ向かおう」
「まじ？」
「まじのまじだよ。ほら、行くよ」

アユミは先導するようにキリンの前を歩いて、ジムの方へと勇み足で進んでいく。

「へいへい」

かくいうキリンも別段何か文句があるわけでもなく、アユミの後

を追って行く。
案の定というべきか、ジムの前では人だかりができており……取材陣のような連中がジムの正門前にたむろっていた。
表に出された看板には今日のジム戦お断りの文字がでかでかとプリントされていた。
「ふぅ……まじかよ」
「ま、大体予想の範囲内だよ」
「こりゃ、諦めてポケセンで休んでいくか」
「そうだね」
二人はそう今後の予定を組んで、ジムから踵を返そうとしたらざわめきが生まれた為に立ち止まる。
ジムの正門からクロガネのジムリーダーであるヒョウタが現れたのだ。
しきりに彼を囲む取材班と報道陣。しかしヒョウタは他にいた従業員に守られながら、すたすたと人混みの中をかき分け進んでいく。
「ジムリーダー、今朝のニュース本当なのでしょうか！？」
「ミオジムのトウガンはお亡くなりになったことについて何か！」
「今後はクロガネ、それともミオでジムリーダーを務めるのですか！？」
何一つとして亡きトウガンを労う挨拶なしに、彼らは問答無用で質問を繰り出していく。そりゃ、黙ってそのまま歩いてしまうのは当然であろう。

しかしそんな報道陣の中でもキリンとアユミは自分と同い年くらいの少女に目を惹かれていた。マイクを極限まで突き出し、必死にヒョウタについていく。

彼女がその中でも異質であると感じたのは、年が周りに比べて幼いだけではなく彼女の訊ねていた質問も含まれていた。

「あなたはそれでもいいんですか！？　このままだと、更に犠牲者がっ！」

「っ……！」

そう、他の誰とも違った質問とそれに対してヒョウタが表情をゆがめたこと……その変化にアユミ達は気付いた。

しかし少女のアプローチ虚しく、ヒョウタ率いる集団は炭鉱へと向かう際に使っている作業用のトラックに乗って去ってしまう。

少女はマイクを肩にかけている鞄にしまうと共にボイスレコーダーのスイッチを切る。

「はぁ～あ」

と、肩を落としてジム前から去ろうとする少女。

「おい、アユミ」

そんな彼女を遠目から見ていたキリンはさっき見かけた光景をアユミに相談しようとして名前を呼ぶが……

「あれ？」

さっきまで自分の傍にいたアユミはおらず、良く見ればすでに少女の方へと歩み寄っていたのを目の当たりにする。

「……はやっ」

キリンも後を追うようにして歩行していくが、その際にすでにアユミは少女に声をかけていた。

「あの」

「はひ？」

普段のおとなしさから人見知りであると誤解されやすいアユミであるが、しかしとても行動的であるのは彼女の魅力の一つかもしれない。

「さっきジムリーダーに聴いてたよね、これでいいのかって」

「……え？　え、ええ、まあ」

アユミは眼鏡があってのせいか、それでも多少きつい視線を少女に向けていた。

それもそうだろう。今や全てのメディアが規制を受けている中、彼女は周知の知らないはずの事実を掴んでいるように思えたからである。

「君はどこまで知ってるんだい？」

「……まさか、あなたも？」

最初は話を合わせて誤魔化そうとしていた少女も、しかし、目の前にいる同年代の女の子であるアユミが自分と同じことを知っていることを悟った。

だからこそ、アユミにそう言い返しアユミもこくりと頷くのであった。

今はとにかく情報が欲しい。そしてそれが記者と思わしき人物であるのならばなおさらである。

「とにかく、今は落ち着ける場所でも探そうぜ」

二人の場所へと追いついたキリンは一部始終を把握して、そう提案するのであった。

ポケモンセンターではなく、クロガネシティのとある喫茶店にてアユミ、キリン、そしてさっき二人が出会った少女が一番の隅の席を陣取っていた。

「あ、あのぅ……。一つ良いですか？」

ぴょんぴょんと横から生えている少女の髪の毛は……その、いわ

ゆるアホ毛の類に入るのだろうか。というか、どう動いているのか不思議に思う所ではある。

肩にはかかるかからない程度の髪の毛は綺麗なムーディ色で、両横から飛び出している髪の毛はピンクのヘアゴムでくくられている。

そんな彼女はアユミとキリンを前にして、こう切り出した。

「ん、どうした？」

キリンは普通に返したが、アユミはどうみても少女に対して未だ好意的な姿勢を取ろうとはしていない。

「あたし、ここに来るためにお金使い果たしちゃって……てへへ」

「なんだ、そんなことかよ。俺達が誘ったんだから遠慮しなくていいぜ」

「ほ、ほんとですか！？」

ぴょこぴょこぴょこ、彼女の毛はそんな跳ね方をみせながら両目をきらきらと輝かせる。

「そんなことより、君はなんで知ってたの……？」

「ほえ？」

嬉々としながら喫茶店のメニューを眺めていた少女は、アユミからの気圧されるような問い詰めに素で返す。

少女はじーっとアユミを眺めた後、メニューをテーブルに置いて一つ咳払いをする。

「こほん。人に質問する時は、自分が先ず誰なのかを名乗るべきじゃないんですかー？」

やたら挑発的な態度をとりながら、少女は奇妙な笑みを浮かべるが――――

「一方的に質問をしてくる君達みたいな連中に言われたくないね」

「ぐさっ！」

胸に手を当てて痛そうな表情をする少女は……まあ、そのなんだ、アホなんだろう。効果音まで自分で言う辺りが特に……。

そんな二人のやりとりをキリンはウェイターにいろいろと注文しながら、横目で見ている。

「でもいいよ、答えてあげる。私はカンバル　アユミでこっちの筋肉バカがミサカ　キリン。私達はシンオウリーグを制覇して、この国を取り戻すためにジム戦巡りをしている」

アユミは来ていたウェイターが厨房へと入って距離があるのを確認してから、そう少女に説明する。

「ということはー、本当に何から何まで知ってるんですねー。あたしびっくりびっくりです」

段々と緊張の糸がほぐれてきたのか、少女の喋り方は徐々に素へと戻っていく。戻っていけばいくほどに、アユミの眉間がぴくぴくと苛立ちの色を垣間見せているのは……まあ、置いておこう。

「それで、君は誰なんだい？」
「あ。あたしはミキキ　キララ、自称凄腕レポーターです。キラッ☆」
右手の親指から中指までの三本を開いた状態で、人差指と中指の中間あたりに右目が入るようなポーズでそう自己紹介するキララ。
キリンは興味本位でキララの挙動に感心するも、アユミにとって彼女は理解不能な範疇なのだろう。頭を軽く抱えて、溜息をつく。
「どうして、あんたはあの情報を知ってるの？」
どんどんとキララが本来の喋り方になっていくのに対し、アユミもばしばしと容赦なく彼女を問い詰めていく。若干言葉がきつくなっているようにも思える。
「……あたしのお父さんお母さんはメディア関連の仕事をしていたんだけど、あのお正月の日に突然行方不明になったの」
キララはアユミの質問に答えるも、だんだんとさっきまでの明るくふるまっていた表情とは裏腹に声が消え入りそうな程にか細くなっていく。
そこでアユミも察知したのだろう……そして、ああいった聴き方をしてしまった自分に嫌気がさした。
「家に帰って残っていたのは二人が残してくれたボイスレコーダーとサカキについての情報だけでした」
ミキキは遂にはテーブルだけを見つめて、顔を上げようとはしな

かった。

「……そうか、悪かったな」

キリンはそういって言葉をかけることしかできず、黙りこくってしまったアユミの変わりにキララに告げる。

「いえ。あ、えっと、それであなた達はどうやって……？」

キララの質問は妥当であり、彼女の疑惑に答える義務が二人にはあった。

「私達はそのサカキが遂行したトレーナー狩りの被害を受けて、生き延びた。だから、知ったんだよ」

「そうだったんですか……」

そこでいったん会話はウェイターが運んできた料理や飲み物の為に中断され、三人は黙ったまま料理の数々を見つめる。

「君の過去については同情させてもらうけど、正月に起こったまでの情報だったら君がジムリーダーに聴いた質問は出てこないはず」

「……お父さんお母さんが使っていたデータバンクが残ってて、それと昔からレポーターに憧れてていろいろとノウハウは知ってるんだ。だから、自分で調べたんです。信じたくはなかったけど、あたしが掴む情報に嘘偽りがあったことはないから」

「そう……」

キララの両親はメディア関連の仕事をしていて、サカキによって直接的ではないかもしれないが消された。

そしてキララはその事実を知っていた上で、両親が成し遂げれなかった仕事を自分の意志で、自分がそうしたいからしている。

だがその行為はあまりにも危険であるのは言うまでもない。

「危険なのはわかってるけど、あたしもレポーターのはしくれだから……やってみたいんです、どこまでも。それになんだか意外とうまくいくんですよ」

そう宣言するキララの眼は、まさにその名が指すようにきらきらと輝いていた。

「よしっ、なら思いっきり喰って……続きはそれからにしようぜ！」

「そうだね」

「っはい！　いただきます！」

そこから三人は他愛無い世間話で会話を弾ませた。例え辛い過去や嫌な思い出が多くとも、同年代の少年少女が集えば話のネタは湧いてくる。

それにスクールではムードメイカーなキリンがいるのだ……ここぞと彼の才が花を咲かせた。

まあ、キララがアユミの食事の量に圧倒されながらも依然に増して両目の輝きをパワーアップさせたのはまた別の話である。

第十三章：極寒の中で　ＩＩ：炭鉱の街で（後書き）

さてと、まあむりくりな設定はもはや定番なので……ｗ

ルカ「……」

この物語は少年少女達が中心ですので、まあご勘弁をｗ

ルカ「いいのかな、それで……」

まあまあｗ

ではでは～

第十三章：極寒の中で　ＩＩＩ：新たなる仲間（前書き）

来週辺りから実家へと帰省するので、恐らく執筆ペースは上がるかと；；；

えっと、えっと、あ、そういえば今年の漢字は「暑」になりましたね。

まあ、暑かったですけど自分的には「熱」の方が良かったかな。

スポーツとか今年は熱かったですしｗ

第十三章：極寒の中で　ＩＩＩ：新たなる仲間

ミキキ　キララ。

自称凄腕レポーター……だが、彼女の名を知る者はいない。

なぜならば、と問われればそれは彼女が何一つとしての記事を公開してはいないからである。そう、彼女は全ての真実を知る術を持ちながら世間に知らすことはない……。

それが彼女と彼女のパートナーとの約束であるからである。

「おいしかったです。ごちそうさまです～」

満面の笑顔と共に手を合わせるキララは満足気な表情でグラスに残っていたホワイトウォーターをストローで飲み干す。

ズズズという音を最後にグラスの中の氷がからんと鳴り、アユミはそれを合図に会話を再開させる。

「一つ、いいかな？」

「はいっ」

キララが食した皿の十倍もある食器の山に埋もれているアユミは、キララに対してこう尋ねる。

「君の情報力を私達は欲しいし、もし君が知りたい真実というのが私達の旅を通して得られるのなら一緒に来ないかな？」

それは唐突と言いすぎても過言ではない誘い。

キララはきょとんとしながらアユミを見つめ、キリンもびっくりしたのか口をあんぐりさせながらアユミを凝視する。

「べ、別に迷惑ならいいんだよっ。私はそうすればお互いにプラスが生まれると思ったからで、それだけなんだからね！？」

途端に慌てだすアユミを見ながら、キララは先ほどの笑顔とはまた違った笑みを浮かべて、

「うんっ！　あたし、アユミンやキリリンと一緒に行きたい！」

「……アユミンっ？！」

「キリリンか、いいな」

普段はクールなアユミでもキララのペースに巻き込まれると素で感情を露わにせざるを得ないのだろう。キリンは普段通りのマイペースぶりではあるが……。

キララは自分がアユミンと呼ばれ戸惑っているアユミの両手を手にとって、

「ありがとうっ！　あたし、頑張るね！」

「……う、うん。それは勿論のことなんだけど、さ、さっきの呼び方は……」

「ありがとうアユミン！」

がばっ！　キララはテーブル越しにアユミの首回りへと腕をまわして抱きつき、アユミンことアユミは自分にされる初めてのことに更にテンぱってしまう。

そんな珍しいアユミを見ながらキリンは言葉を発さずに笑い、まるで親が子に向けるような表情へと変わる。

「こら、キリン！　良いから、こいつを私から離せっ！！」
「う～ん、あゆみ～ん！」
「くっくっく、あーはっはっは！」

必死にキララを自分からはがそうとするアユミに、ついに耐えきれなくなったのかキリンは盛大な笑い声を上げるのであった。

「いいかいキララ！　もう一度あんなことをしたら、私は君を解雇するからな！　覚えておくんだよ！？」
「はぁ～い☆」
「わかってるんだろうね！？」
「はぁ～い、アユミン☆」

すっかりキララの中でのアユミ像は確立されたようで、キリンは未だに腹を抱えながらに笑いを堪えている。

三人は店を出て、近くの公園へとやってきていた。

「まあいいよ。私達はお互いのことを知らないといけないからね、まずはポケモン同士を会わせよう」
「そうだな」
「はーいっ！」

元気良く手を上げるキララをよそに、アユミとキリンはお互いの手持ちをボールから出す。

アユミの手持ちはピジョット、ユンゲラー、そしてストライク。対してキリンはサイドンとキリンリキ。

「わぁ、カントーのポケモンだぁ」

キララは恐らくあまりカントー地方のポケモンを見たことないのだろう。まじまじと二人のポケモンを観察し、ポケモン達は警戒する。

「キララも早くだしなよ」
「あ、うん。ごめんごめん」

はにかみながら、キララは自分のボールを一つ取り出す。

「出てきて、ポリゴン2」

奇妙な電子音と共に飛び出したのはポリゴン2。ポリゴンとは違い、全体的が丸い進化形である。

「ポリゴン系か……なるほどね」

アユミはキララの手持ちを見るや否や納得するように呟く。

「でも、そのポリゴン2は他のポリゴンとは違うみたいだね」
「そうか？　俺には普通に見えるってか、ポリゴン2なんて初めてだな見るの」

ポケモンの世界にいるからと言ってポケモン全てを見るということは不可能に近い。というのも住んでいる地方、とあるポケモン達の希少性などを考慮すればわかることではあるのだが。

そしてアユミの洞察力は正しかった。

いくらポリゴン2が電子データの中へと自身をダイブさせることができるからと言って、人間も人間で対策用のプロテクトをかけている。

そんなプロテクトのトラップをかいくぐり、なおかつ侵入した痕跡を残すことのないポリゴンなどアユミはきいたことがないからだ。

「えへへ～、あたしのポリゴン2はとっくべつなんだぁ～」

キララは自分のポケモンが褒められていると感じたのだろう、ポリゴン2を胸に抱きかかえて笑みをこぼす。

「そう……。なら君がここへと来たのは、生の情報を人から直接聞き出すためなんだね」

アユミは彼女のその様子から、電子データとして保存されているものの全てを把握していると結論がいった。つまり、キララは何もかもを知っている……そして知りつくさないと気が済まないという性質であるということをも見抜いた。

だからあんな危険な真似をしてでも……。そうアユミは気分を曇らせながらも、キララの行動力に感心せざるを得ない。

「うん。情報は常に生まれて、必ず消えない。情報は新鮮な内に掴まないと、汚されて見えにくくなっちゃうものだから」

情報とはこの人の社会においてかけがえのないものである。

人は情報なくしては生きてはいけない。だからこそ言葉が生まれ、文字が生まれ、科学が彼らの最大の武器となった。

そして人は情報をもっていて人を支配する。いや、洗脳する。

言葉を駆使して、文字を駆使して、科学を駆使して情報とは人の手によって変えられ、隠され、そしてさらされてきた。

しかし新たなる情報とは、まるで生まれたての赤ん坊のようにとても純粋である。それが育つ過程において変わっていくように、情報も最初が一番新鮮であり、嘘偽りのない純粋なものなのである。

だからキララは情報を求める。求め続ける。

「だからあたしはヒョウタさんから聞かなきゃダメなんです、社会が提示する情報ではなく彼自身が彼から発する情報が欲しくて」

普段の彼女から……といってもアユミとキリンは知りあって間も無いが、天然っぽい彼女からは予想もできないであろう言動は、しかし彼女が本物のレポーター魂を持っていることがうかがい知れる。

「えーっと、な、なんの情報だって……？」

キリンはさっぱりといった様子で冷や汗を頬に走らせながら、アユミに助けを求めるようにして顔を向ける。

アユミはそんなキリンを横目で捉えながら、小さく溜息をついて説明する。

「はぁっ。つまり、キララはここのジムリーダーにジムバッジが奪われたことで自分達の命が危険にさらされることについての是非を問いたいんだよ」

「……へ、へぇ」

「わかってないだろ、きみ」

「……」

まあ、キリンにとっては分かりにくい話であるだろう。

「そうです。あんなことがあってはいけないんです」

あんなこと、それはつまりジムリーダー達に課せられているバッジについての条件なのだろう。

「それに、いくらメディアから逃げているジムリーダーさんも自分の父親を負かしたトレーナーが名乗りでたら引きこもってるはずもないしね」

そう、ヒョウタがどこへ行こうともジム戦を焦らない理由の一つがこれだった。アユミ達、というかキリンがだが、はトウガンに勝利してバッジを受け取った。

それすなわち、ある意味ではヒョウタが見ることのできなかった父親と最後に出会った可能性である人物がアユミ達であるということなのだ。

「え！？　アユミン達がミオジムのトウガンを倒したトレーナーさんだったんですか？！」

キララはおっかなびっくりといった感じで驚嘆の声を上げる。

「……知らなかったの？」

「は、はいです。倒したトレーナーが現れたというデータはありましたし、トウガンさんを抹殺した人物の任務記録も持ってます……でもどんなトレーナーが倒したのか、という情報をロケット団は管理してはいなくてぇ」

そして今度はアユミが訝しげな表情をつくる。

『ロケット団がジムバッジを取ったトレーナーのデータを集めてはいない……？　なんで、そんなことを？　だって、彼ら……ううん、サカキにとっては脅威となりうる存在だっていうのに……。それじゃあ、まるで――――』

「――――ユミン？　ねぇ、アユミン、聞いてる？」

「え？　あ、な、なんだい？」

アユミはキララに呼び掛けられて思考を中断させて我に返る。

「このままこいつらを出しておくのもなんだし、ヒョウタのジムリーダーさんとこ行かないかって話だよ」

キリンは後ろでポリゴン2という新しい仲間と意思の疎通を繰り

広げ仲良くなりはじめている三人のポケモン達を指差して、アユミに告げる。

「あ、ああ、そうだね。それじゃ行こうか」

アユミは頷くと共にポケモン達をボールへと戻して、ヒョウタが向かったであろう炭鉱へと向かう。それはつまりあの大掛かりな報道陣が向かった先である。

「ねえキララ」

「なぁに、アユミン？」

「私はてっきり君が私達のことを知っていて、私の誘いに乗ってくれたと思ってた。だって、その方が君にとってヒョウタに近づけるカードとなるから……」

アユミの告白にキララは段々と哀しげな表情をつくりながら、唇を尖らせていく。だが、アユミはそれに気がつくことなく、続ける。

「だからわからないんだ、そりゃご飯はおごったけど……たったそれだけのことで知らない二人組についてくるバカなんてこの世にいるわけ――――っ！」

キララはアユミの左手を握って、怒ったような表情でアユミを睨んでいた。

アユミは多少合理的に考えを働かせ、過ぎなのだろう。

「あたし、バカだもんっ！」

「へ？」

「これでいいでしょ！　アユミンのバカっ！」

そう、そんな理由等いらないのだ……仲間になるのには。

「お前も結構鈍感だよな、アユミ。くはは」

キリンは、もうなにもかもがわけのわからない状況へと陥っているアユミを見ながらそう笑う。

ぽかーんとした表情のアユミを置いて一人すたすたと目じりに涙を浮かべたキララが歩き去っていく。

「……。っ！？　キ、キララ、い、今、私をバカって言ったな！」

自分の気持ちの整理ができないまま、アユミの合理的な思考はただただキララの放った言葉のみを解析するだけであった。

ミキキ　キララ、彼女の存在がアユミとキリンにとってかけがえのないものとなるのは……。いや、もうなっているのだろう。

なぜならば三人はこうやってすでにお互いの気持ちを認識しようとしているのだから。

第十三章：極寒の中で　ＩＩＩ：新たなる仲間（後書き）

さて、次回はバトルです。

ルカ「やっとかー」

まあ、ねｗ

ではでは！

第十三章：極寒の中で　ＩＶ：ヒョウタとの対決（前書き）

さてさて、実家のこたつの中でぬくぬくと過ごしながら執筆中のＫａｒｙｕです！

ルカ「いいないいな～！」

さて、去年の十月からはじめてまだ冬を過ごしているルカ達の気持がわかるぐらい現実も寒くなってきましたね。

ルカ「そうなの？」

うん。こたつからでたくないもん。

ルカ「それは、駄目なんじゃ……」

まあまあｗ　それではお待たせいたしました、バトルです！

第十三章：極寒の中で　ＩＶ：ヒョウタとの対決

クロガネシティ　炭鉱：

「ダメだ、駄目だ！　ここから先は立ち入り禁止だっ！」

十数人の報道陣の群れとそれに対抗する十数人の作業員が、ヒョウタが奥へと言ってしまった炭鉱入り口前で騒いでいる。

「ジムリーダーから一言聞かせてください！」

「ヒョウタをだせー！」

などとモラルもなんもない輩がたむろっている中、アユミ達三人は悠々と炭鉱の入り口を目指す。

「おいおい、こら！　言っただろ、ここから先は誰であっても立ち入りは許可できない！」

黄色い作業用ヘルメットを装着した筋骨隆々な作業員が彼女達の前へと立ちはだかる。

「アユミン……やっぱりさりげなくだなんて無理だよぅ」

一際不安の色を帯びた声でキララがアユミの腕を掴む。

「ジムリーダーヒョウタに用があってきた。通してくれないかな？」

明らかに年上な人物に対して、アユミはまさに上から目線な物言いをする。

「なんだと、このガキが！　とっとと帰れって言ってるんだよ！」
まあさすがの作業員もきれたのか、青筋を立てながら怒号を飛ばす。
「これだから筋肉バカは……本当に脳みそが筋肉でできてるんじゃないだろうね？」
「んだと、貴様ぁ！？」
やれやれと言った仕草をするアユミを、キララは更に不安な表情で見守る。
作業員の男はまさにアユミに殴ってかからんといった雰囲気だ。
「おいおい、どうした！」
アユミ達の様子に危機感を覚えた別の作業員がやってくる。
「あ、テッさん。このガキンチョ共が……」
「君たち、ヒョウタさんは誰にもお会いにならない。今日のところは帰ってもらおうか」
テッさんと呼ばれた、いかにも頼りがいのある兄貴風貌の男がアユミ達を見下ろしながらそう告げる。
「へえ、あなたの方がそっちの脳筋よりも話が通じそうだ」
アユミは懲りていない、というかそのままの口調で話し始める。

テッさんの隣にいた男はアユミの言葉でぴくっと肩をはねさせてわなわなと震え始める。

「大人をからかうものじゃないぞ。君たちはトレーナーかい？　ジムの挑戦なら申し訳ないが、今のところ受け付けてはいない」

「そういうことじゃないよ。私達はヒョウタに伝言があってきたんだよ……ミオジムのトウガンよりね」

アユミはどこか陰湿な笑みを浮かべつつ、そう微笑する。

「っ！！」

そしてアユミの言葉に対してテッさんなる男は勘付いたのだろう、

「そうか、なら来てくれ」と言って彼らを中へと招き入れる。

「え、テッさん？」

最初に会った作業員の男は訳がわからないといった様子であったが、テッさんに仕事に戻れと言われしぶしぶ退散する。

「おいおいアユミ……お前こういうの慣れてね？　実は」

「そうだよアユミン。だってあたし心臓まだバクバク言ってるよ？」

キリンとキララがアユミに小声でそう話しかけ、一方のアユミは片方を目でにらみつつこう漏らす。

「私だってこんなの言うの初めてだよっ！」

アユミの表情は髪と眼鏡によって隠されてはいるが、横から彼女を見る二人はアユミの表情に緊張感が混じっているのを確認すると

お互いに安心から生まれた微笑を浮かべる。

「ヒョウタさん、少しよろしいですか？」

炭鉱というのは中を照らされてはいても、とても閉鎖的な空間である。

その炭鉱の一番奥、かなり開けた場所にヒョウタが項垂れて一つの機材に座っていた。

「今日僕は誰とも会わないと言っただろ、テツ」

「……いえ、それが」

ヒョウタが項垂れていた首を上げて、テツの後ろに控える三人を一瞥しながらそう溜息混じりに発する。

「この三人、トウガン殿からの伝言を伝えに来たと申しておりまして」

「……なに？」

そこで初めて三人は無表情……というよりは虚無をただ眺めているようなヒョウタの表情が変わるのを見る。

「と、父さんに会ったのかい、君たちは？」

ヒョウタの顔をそこで直視したアユミは、テツの背中から一歩前へと出て口を開く。

「正確にはあなたの父親とバトルして勝ったのが私達ということよ。つまり私達も知りたいところがあるんだよ、なぜ負けたジムリーダ

ーが殺されるようなことになるのかをね」
「そ、それは……」
アユミの問いかけにヒョウタは口ごもる。
「そう、あなたも知らないんだ。哀れだね、何も知らずにただ殺されるのを待っている日々を送るだなんて」
「お、おぃ、アユミっ」
「アユミン、それは言い過ぎだよっ……」
後ろの二人からの助言を無視して、アユミは更に問い詰める。
「そんなんだからあなたの父親もその恐怖に耐えられなくなって、あんなへっぴり腰なバトルしかできなかったんだ」
明らかなる挑発。
しかしそれがアユミの狙いである。
「父さんはそんなことで怖くなったりなんてしない！　それに僕だって知らなかった……！　もしバッジを、バトルに負けたら殺されるっていうのがあの新しく出来たルールに書いてあった代償だなんて！」
そうか、ジムリーダー達も知らなかったのか。だったらなおさらその文献に興味がある……等とアユミは思っているのだろう。
取り乱しはじめるヒョウタを、まるで蛙を睨む蛇のような表情でアユミは蔑む。

「……くくく」
「……？」
突如として奇怪な笑みを上げるアユミをヒョウタは不可思議そうに見つめる。
「もし私達がそのルールを知った上であなたの父親と戦ったと言ったら、どうする？　私達はあんな程度のジムリーダーを軽くひねりつぶせることを知ってて、そして倒してしまったらどうなるかを知ってて、トウガンに挑んだと言ったら？　ねえ、どうするんだい？　クロガネシティジムリーダーヒョウタ？」
アユミ……この娘を悪と言わずとして何と言おう？
しかしキリンもキララも彼女が無理をして、尚嘘をついていることを知っていて口出しはできない。
そう、彼らはもう後戻りはできないのだ。
例え彼らに良心があったとしても、割り切らなければならない。
「君が、君が父さんを殺した？　負けたら殺されるとわかっていながら、父さんを負かした？　そ、そんな連中に父さんが負けるはずないじゃないか？！　そんなの父さんが報われない！　報われない！」
眼を見開き、わなわなと腕を震わせ熱弁するヒョウタ……彼はすでに自分の身に降りかかった不安と恐怖で自我を保てずにいた。だからこそ、自分の居所である炭鉱へと逃げてきたのだろう。

「ならあなたもバッジを賭けて私とバトルをしよう」
そしてここからはアユミのお手の物。
「なに？　なんで？」
「だって父親が報われないんでしょ？　だったら同じ条件で私に勝てばいい、そうすれば報われるんじゃない？」
アユミは首を左右に振って髪を弾かせ、眼鏡を取る。
「……わかった。テツ、君が審判をしてくれ」
「いいんですか、ヒョウタさん？」
「ああ、いい。これがバッジだ……」
「……わかりました」
ヒョウタはテツにコールバッジを手渡して、二つのボールを取り出す。
「悪いけど僕はダブルバトルが好きでね、それでもいいかな？」
「……まあ、いいよ。私もそれが好きだから」
対するアユミも十分にヒョウタと距離を取って対峙する。
この炭鉱は重機材も通る為、かなり大きな空間が存在している。なのでバトルをするには丁度と言っても良い程にスペースがあるのだ。
「それではジムではありませんが、ここで臨時ジム戦を行います。挑戦者、名乗りを上げてからポケモンを出してください」
「カンバル　アユミ。ハナダシティ出身だよ。いってストライク、

ピジョット」

むし・ひこうタイプのストライクとノーマル・ひこうタイプのピジョット……それがアユミの出したポケモン。

「本当に君は僕の父さんを倒したのか？　そんなポケモンで？」

そうヒョウタが拍子抜けするのも当然であろう。なぜならばヒョウタは岩タイプの使い手で父親のトウガンは鋼タイプの使い手……アユミの手持ちからして明らかに不利な相性なのだ。

「だから言っているだろう？　あんな奴、手こずるような相手じゃないって……これぐらいが丁度良いハンデなんだよ」

「……っく！　いってこい、ゴローニャ、ラムパルド！」

キリンとキララはアユミの後ろでバトルの模様を静観している。だが二人とも不安でしょうがなかった……なぜなら、アユミを信頼していると同時に彼女のことを自分以上に彼らは心配してしまうからだ。

「ゴローニャ、【ロックカット】！　ラムパルドは全方位に【原始の力】！」

素早さの低いゴローニャとラムパルド、彼らが有利に勝負を運ぶためには先ずもってスピード負けしてしまう。それをいかに邪魔されずに能力値を上げるか……これがヒョウタの戦法なのだろう。

アユミの方へと飛び散ってくる大小様々な岩の破片をピジョットとストライクは見切りながら避けるが、それだと相手に時間を与え過ぎてしまう。

「ピジョット、【フェザーダンス】。ストライクは【影分身】」

ポケモン達には最低でも一つ二つの能力値を変動させる技を覚える。それは自身の弱点を克服、あるいは長所を更に伸ばすものが多い。

そしてこの場合アユミが対処として取った指示は、攻撃力を誇る相手の長所を下げる補助技とストライクの素早さを補う為の【影分身】。

「くっ、やるね！　だけどラムパルドの能力値は全部上がったよ！」
「上げるなら上げればいいよ。私は一向に構わない」

余裕の表情を見せるアユミ。

眼鏡がないせいか、彼女の眼は完全に前髪に隠れているようにも見える。

「言うね！　でもこっちも攻撃を下げられても相性的には威力十分だ！　ゴローニャ【転がる】！　ラムパルドは後ろから【諸刃の頭突き】！」

ゴローニャの巨体の後ろにすっぽりと入ってしまうラムパルド。二匹はそのまま砂塵を撒き散らしながら、物凄いスピードで突進してくる。

「ピジョットは上へ逃げてストライクに指示！　ストライクは【ダブルアタック】！」

ストライクに岩タイプの技はおよそ四倍のダメージが入る。そのストライクが地面を滑走しながら相手へと挑んでいく。アユミの考えていることは一体？

「だ、大丈夫なんですかアユミンは？！」

「まあ俺もあれでサイドンやられたからなぁ……。大丈夫なんじゃね？」

そう、アユミはキリンに負けたことがない。そしてキリンの手持ちにはゴローニャと同じ岩・地面タイプ。

一体どんな仕掛けが待っているのか？　そう期待せざるを得ないキララは、しかし、次の瞬間ゴローニャの【転がる】とラムパルドの【諸刃の頭突き】をもろに食らって吹っ飛ぶストライクを目の当たりにする。

「え……？」

それはテツやヒョウタも感じたことなのだろう。

ピジョットは宙に舞ったまま何もせず、無常にもストライクの攻撃は歯が立たず、相手の攻撃によって仰け反りながら炭鉱の中の壁へと直撃する。

「まあ、こうなるし、これぐらいじゃなきゃ拍子抜けだよね」

そう零しながら、口の端を上げたのはアユミであった。

第十三章：極寒の中で　ＩＶ：ヒョウタとの対決（後書き）

自分もストライクＢＷで育てましたｗ

なかなかに役立ってくれるんですが、耐久力ないので相手一体でも仕留めてくれればいいんですけどねｗ

ルカ「じゃあこのストライクもその型なの？」

まあ大体はｗ

ルカ「それってネタばれなんじゃ……；；」

はっ！？

第十三章：極寒の中で　Ｖ：ヒョウタとの決着（前書き）

自分はバトル描写苦手なのかもしれない。

ルカ「なにを今更」

いや。その動きをこうリアルに表現するやり方が難しくて……。

ルカ「そういうもんなの？」

他の方々のを読んでると自然とイメージできちゃうんだけど、やっぱり自分のは自信がないね。

ルカ「まあ、そこは読者の皆に頑張ってもらおうよ。それじゃ、はっじまるよー」

第十三章：極寒の中で　Ｖ：ヒョウタとの決着

クロガネシティ　炭鉱内：

吹っ飛ばされたストライクは未だ巻き上がった砂埃の中から帰ってはこない。

アユミは余裕の表情を浮かべてはいるが、はじめて彼女のバトルを見ているキララはハラハラしていた。

「あのぅ、本当にアユミンのストライクは……」

それを見兼ねたのであろうキリンは、キララの頭の上に手をぽんっと置いてやる。

「なあキララ」
「は、はい」
「ジムリーダーってのは大概自分の使うタイプが決まってるよな」
「そうですね、はい」

つまりヒョウタみたいに岩タイプ専門だったり、トウガンみたいに鋼専門のジムリーダーがいるということだ。

「そしてそいつらの大体が自分達のポケモンの弱点対策をしている」
「……言われてみれば。あたしはジム戦しませんけど、そういう話は耳に入れてます」
「なら、トレーナーの戦略としてジムリーダーの戦法を使うってのはアリだと思うか？」
「え？　それってつまり、あえてそのジムリーダーが使うポケモン

の弱点となるポケモンを使うってことですか？」

キリンはにこっと笑い、頷く。

「ああ、そういうことだ」

「で、でもそれって難しくないですか？　そうだったら本当にボックス利用権を得ないと……」

「そうだよな。だからアユミは自分の手持ちの弱点を克服する努力を毎日してる……あのストライクなんかまさにそうさ」

キララが言ったボックス利用権、それは限られた人間にしか与えられていないボックスシステムという権利である。

ボックスというのは、ポケモンを保管しておく場のことでありそれは全てネットワークを介してとある施設で管理されている。

ボックスには上限があるが、大抵何匹でも自分のポケモンを預けられるシステムのことである。

しかしながら誰もが使えるというわけではない。なぜなら、そんなシステムを一般に使用させるようにするとポケモン達の生態が崩れるからである。それはすなわちポケモンの乱獲を危惧してのことだ。

なのでボックスシステムは協会が認定した極わずかな人間達にしか与えられておらず、その権利を持つということはポケモンマスター同等の価値があるとさえいわれている。

現にポケモンマスター……すなわちポケモンリーグ制覇、次期チャンピオンということになるのだが……になればボックスシステム

の利用権利を得ることができるとされている。

「じゃあアユミンにとってこのバトルはやりやすいってこと？」

「そう、なるのか。そうかもな。あいつの頭が何考えてるかわかんねえけど、でもバトルにおいちゃ回転速度が並みとは違うからなー」

「ほぇー」

そうキリンとアユミが話しこんでいる間にもストライクが弱弱しくもその翅を羽ばたかせて戻ってくる。

「……四倍のダメージで、まだもつか。さっきのフェザーダンスのおかげかな？」

ヒョウタは感心したように口を鳴らす。

「そうだね。でもこれは狙ってやったことだから大丈夫だよ」

「なに？　まさか、そのストライク……そういうことか」

「ふふふ」

ストライクの特性、虫の報せ。それは自身の体力が減っていくと発動する虫タイプの技を底上げするものである。御三家の持っている特性と似ている。

だが、虫タイプの技の威力があがっても岩タイプのゴローニャやラムパルドには意味がないはず……。

「ここから反撃開始だよ。ストライク、【シザークロス】！　ピジョット、【追い風】！」

上空にいたピジョットがすかさず翼をはためかせ風を巻き起こす。

【追い風】、それは味方側のポケモンの素早さが一定時間早くなるものであり、この時点でゴローニャの【ロックカット】ではその差は埋まらなくなってしまった。

ストライクはボロボロになりながらも、鋭い眼光と機敏な動きで一気にゴローニャの懐へと潜り込む。

ヒョウタからしたらストライクの体はゴローニャにすっぽりと隠れて目視できないはずである。ストライクの両腕の鎌がゴローニャの体を切り刻み、そしてすかさずストライクは離れる。

攻撃を受けたゴローニャはしかし鳴き声一つ上げずに、ただ黙ってストライクを見据えている。

「そんなもの僕のゴローニャには効かないよ！　ラムパルド、ゴローニャ、【岩雪崩】！」

ヒョウタの指示は読めていた。読めていたからこそアユミは歯噛みした。

先ほどのストライクの【シザークロス】……それがゴローニャに効かないことはわかっていた。しかし欲しいものは得られた。

なぜならゴローニャが切りつけられた外層部分には削りキズが残ったからだ。

だがそれを確認するや否やの相手からの攻撃。威力は高くないとはいってもこっちには相性的には悪い……それをストライクが耐える保証はまったくない。

「一気に行くよ！　ストライクは【瓦割り】！　ピジョットは【鋼の翼】！」

しかしいくら縦横無尽に岩が二匹に迫ろうとも、今のアユミのポケモン達に当たる可能性は低い。だからこそヒョウタは二体同時に同じ技を指示したのだろうが、そんなものが通じないと相手にわからせないといけない。

ストライクは地面ぎりぎりを疾走して飛来してきた岩を技で粉砕し、ピジョットは空中の理を生かして例え岩があたっても体をひねりながら衝撃を逃がしていく。

さすがのヒョウタもアユミのポケモン達が、いかにレベルが高いのか知ったのか、次の指示を出す為に口を開く。

「ラムパルドはピジョットの攻撃に【電撃波】！　ゴローニャはストライクに【ロックブラスト】！」

先の攻撃で生じた岩の群れは徐々にその数を減少させ、かわりにストライクにはゴローニャから下からすくい上げるように投げ出された岩盤が迫りくる。

ストライクはゴローニャへと突進しながらゴローニャの腕の動き、そして岩盤のはぐれ具合から軌道を見極めて体に擦りつけながらも、それでも突進していく。

対するピジョットはラムパルドから発せられた百発百中の電撃をその鋼と化した翼で受け止め、体を目一杯に広げて電気を逃がす。しかし、それでもダメージは喰らってしまうが根性でそのままの勢いでラムパルドの顔面に右翼を思いっきり叩きつける。

ストライクも攻撃の連鎖をくぐりぬけてゴローニャの右頬に鎌を突き出して攻撃を命中させる。

タイプ不一致ではあるものの効果は抜群ではある。

「くっ、まさか押し通られるとはね！　でも、まだまだ！」

「ジムリーダーっぽくなったじゃないか！　でも次で終わらせるよ」

アユミは右腕をばっと引いて、するとストライクとピジョットが彼女のすぐ傍まで後退してくる。

「ピジョット、【羽休め】！　ストライクは【真空波】！」

「なに？」

ある程度飛べなくなる代わりに体力を多く回復する【羽休め】。そのターン、ピジョットは動けなくなるがその時間を稼ぐためにストライクが援護する。

かまいたちのような感じでゴローニャとラムパルドに効果抜群である格闘タイプの特殊技が飛来していき命中する。

だが【真空波】の威力は低く、誰もあまり使わない。

「なっ！？　【真空波】なのに、どうして！？」

しかしヒョウタは自分の二匹のポケモン達が苦悶の悲鳴を上げながら倒れるのを見て驚愕する。

「誰が、いつ、この子が虫の報せなんて言ったんだよ？」

アユミは不敵な笑みを浮かべて、再度ストライクに指示を出す。

「まさかテクニシャン？　だったら、最初のあれは……っ！　そういうことか！」

「やっぱりジムリーダーにでもなると頭の回転は速いみたいだね。でも、そうはさせない！」

再びストライクの【真空波】がヒョウタのポケモン達を襲う。

特性テクニシャン。それは威力の低い技を高威力で出すことができる。

つまり【電光石火】などの攻撃の威力が【電撃波】や【スピードスター】並みに跳ね上がるのだ。

それをヒョウタの認識と食い違わせる為にアユミはバトルの幕開けにストライクに【堪える】を発動させながら、体力をわざと削って特性虫の報せを発動させようとしてるとヒョウタに思い込ませたのだ。

ポケモンバトルはポケモン達に指示を出すトレーナー同士の戦いでもある。なので相手の意表を突くということは戦法において、なによりも相手の優位に立つということに等しい。

「それじゃ仕上げだよ。ストライク、ピジョットに【瓦割り】！」

ストライクの右腕が白く光り、そのまま回復仕立てのピジョットにぶちこまれる。

ピジョットはわかっていたのか、平然とした様子でストライクの攻撃を受けて大きく羽ばたく。

ヒョウタは目の前の少女が何をしているのか想像できなかった。いや、ある意味戦法ぐらいは知っているのだろうが……まだ自身がお目にかかったことがないと言った方がいいだろう。

バッジを失ってはダメという新しい条例の下、ヒョウタは負けたことがない。つまり負ける恐れがないほどまでに挑戦者のレベルは低かったのだ。

だが自分の父親が殺され、その理由がジムバッジにあるとすぐに分かった彼はここへと逃げてきた。しかしまるで死神のように、その父親と戦ったという少女が目前に現れたのだ。

途端、ヒョウタの足は震え始めた。

ゴローニャとラムパルドがようやく立ち上がるも、本人達はストライクがピジョットに向かって技を放ったところをただ目撃しただけだ。いやそれだけでショックとしては十分だろう。軽い混乱状態には少なからずとも陥る。

しかしそれ以上にヒョウタはこの場から逃げ出したくなっていた。

「ピジョット、【オウム返し】。ストライクはもう一回【真空波】」

アユミの呟きが、ヒョウタには死への宣告に聞こえた。

彼の手持ちはヒョウタからの指示が何もなく、ただ防御の構えをとることしかできずにピジョットの猛攻を喰らって声無くして倒れ

る。

テツの宣言がそこで入り、アユミは彼からバッジを受け取ると共にポケモン達に労いの言葉をかけてボールへと戻す。

「……タさん！　ヒョウタさん！」

テツの呼び掛ける声にもヒョウタは反応を示さず、ただ立ちつくしたまま瞳の色を無くしたように突如乾いた笑い声を発する。

「負けたよ……。これで僕も父さんみたいに――――？！　いやだ……いやだいやだいやだいあだぁぁぁ！！」

「ヒョ、ヒョウタさん？　お、落ち着いて！　落ち着いてください！」

ヒョウタはおもむろに作業服のポケットから一つのリモコンを取り出す。

「ヒョウタさん、それは？！」

テツは表情を一層に変えてヒョウタに縋って説得を試みるも、ヒョウタの表情にもはや正気の沙汰は残っていなかった。

「おいおいやばくねぇか？」

「ジムリーダーだというから少しは器があると思っていたのに……。でも、確かにやばいね」

「あうぅ、あの人こわいです」

キリン、アユミ、キララがそうヒョウタの様子から危険を感じ取ったのもつかの間、ヒョウタはリモコンのスイッチを押した。

そして突如、その場にいた全員の鼓膜を揺るがしたのは強烈な爆発音。次に視界を奪ったのは土砂が爆裂し、飛び出した黒煙だった。

第十三章：極寒の中で　Ｖ：ヒョウタとの決着（後書き）

自分、爆発大好きです。

ルカ「物騒な」

こんな引っ張り方をやりすぎってくらいやってるような気もしますが、ジム戦終了です。

ルカ「呆気なかったね、最後」

まあ人の心情次第でバトルは大きく変わるっていう片鱗を書いてみたかったので。

それでは皆様また次回ｗ

ルカ「じゃねー」

第十三章：極寒の中で　ＶＩ：キラキラ星（前書き）

さて十三章ラストとなります。

ルカ「おお」

それでは早速参ります。

第十三章：極寒の中で　ＶＩ：キラキラ星

「とにもかくにも、君は頭が悪いんだよ」
「知ってるっての、そんなことぐらい」
「言われてやっと気付いた君がかい？　信じられないね」
「だっー、ああ、そうだよ！　俺はお前に言われて自分がバカだって気付かされましたよ」
「そう、それでいいんだよ。だからちゃんとついてくるんだよ」
「へいへい。……言われなくたって、俺はお前を守るさ」
「何か言ったかい？」
「いや、何も」

そう言って彼女はすたすたと俺の前を歩き始める。

不思議なものだ。

同じクラスメートで、全然関心を持っていなかった女に今はこんなにも愛おしく思える。

それはこの数週間でいろいろなことが起きたからだろうか？

俺はそんなことを考えながら、彼女……アユミの後ろをついていく。

女を守るってのが男の仕事だろ？

「おいっ！　アユミ、大丈夫か？！」

突如として瓦解した炭鉱の中で、ただキリンの声がこだまする。

キリンは咄嗟の判断でサイドンをボールから出して自分達を防ぐように命令していたのだ。

だが視界は砂と埃によって奪われ、口をあけると砂利が歯と舌にこびりつく。

「わ、私は大丈夫……。そ、それよりキララは？」

キリンの胸元からアユミの声が聞こえ、キリンは安堵の息をつくと同時にもう一人の存在の消失に気がつく。

「キララ？」

アユミが見えない中でも腕や足を使ってキリン以外の体を探るも、一向として何かに触れることはない。

サイドンは背中越しに崩れかかってきた土砂を支えるのに精一杯で、口を歪めながら堪えている。

つまり本当にサイドンが壁となってできている空間だけが土砂か

ら免れたのだ。

「キララ？　キララっ！」

「お、落ち着けアユミ！　お前らしくないぞ？！」

そしてキリンはこんなアユミの取り乱しぶりを初めて見た。なぜならば、そう……キララがどれほどまでにアユミにとって大切な存在かがわかったからだ。

たった、たったの数時間だ。まだ知り合ってから時間が経っていないのに、キララはすんなりとアユミの中へと入っていった。それはキリンにはできなかったことだし、それにキララはアユミと同じ性別だ。

アユミにとってキララは同年代、同性別のはじめての友達なのではないか？　と、キリンは長い付き合いであるアユミを思い出しながらそう結論付けていた。

「……ミン」

すると真暗闇の中で微かに声が聞こえた。

「キララ？　キララっ！」

アユミは精一杯声を出して、声の聞こえたほうへと向く。

崩れる危険性がありながらも、アユミは必至に岩を叩いてその向こうにいるキララへと音を発する。

「お、落ち着いてアユミン。あたしは大丈夫だよ……ポリゴン2が

守ってくれたから」

炭鉱が爆発した瞬間、キララもまたポケモンを出してその身を守っていた。アユミはポケモン達を戻した直後だったために出せなかったのだろう。

そもそもヒョウタが押した爆破スイッチはこの炭鉱に仕込まれたダイナマイトを発火させるものである。

昔は残酷ではあるもののポケモン達の技や【自爆】、【大爆発】を駆使していたがそれだと時間と手間がかかった。それはポケモン達がいかに効率良く掘り起こしたとしても人間のように繊細な作業ができないこと、それと人間側にとって炭鉱はビジネスであるのだ。

いくらポケモン達をコストがなく使えるといってもそれはそれで問題がある。それは人間の作った機材などが売れなくなるということである。つまり国がかかげたビジネスには無駄遣いが必要であり、その一端がこのダイナマイトなわけである。

しかしなぜ炭鉱全体にダイナマイトが取り付けられていたのか？それはヒョウタがこの炭鉱へと引きこもり、自分の安全策として今日用意したものだった。

父親同様に殺されるのであったら、自分から死を選ぶ……自分の居場所であるこの炭鉱で、ということなのだ。

「大丈夫？　大丈夫なのキララ？」

アユミが頬に涙を垂らしながら、縋るようにして声のする方の岩を撫でる。

「うん、大丈夫」

一方のキララはポリゴン2が必死に【サイコキネシス】でつくりだした球状のフィールドによって守られていた。いや、フィールドというよりキララの周辺にある岩を【サイコキネシス】で押し上げているのだ。それには多大なる集中力と体力が必要となる。

「あのね、アユミン。お願いがあるの」

ぎゅーっとポリゴン2を胸に抱いたまま、キララが言葉を紡ぐ。

「な、なに？」

「アユミンのユンゲラーをこっちに呼んでくれないかな？　渡したいものがあるの」

微かながらにもちゃんと伝わってくるキララの言葉。しかしそれはアユミとキリンがもっとも聞きたくない言葉であった。

「キララ、何言って！？」

「お願いアユミン。このままじゃ皆潰れちゃう……」

キララはわかっていた。

さっきお互いのポケモンを見せ合った時、キララが情報という媒体と共に育ったのであればアユミ達のポケモンを見て彼女達の分析が可能だったのだ。

だからキララは今アユミ達がキリンのサイドンによって守られているという推測がすぐにでき、あとどれくらい耐えられるのかもわ

かっていた。

そして自分のポリゴン2だとアユミ達よりも早く力尽きることを。

「駄目だよ、そんなの駄目！　皆、みんな一緒に助かるんだから！」

そしてこのことをキララ同様に理解していたアユミが、悲痛な声で叫ぶ。わかっているから、キララが何をしようとしているかわかっているか、鳴く。それは嗚咽を通り越した、絶望に近い鳴き声。

「おい、アユミ」

キリンはアユミの肩に手を置き、アユミはびくっと反応して鳴き止む。

「わかってる、わかってるよ！」

アユミはユンゲラーのボールを取り出して、そう叫ぶ。

ユンゲラーはボールから出て来るなりその姿を【テレポート】させる。ユンゲラーも今の状況が一大事だということを感じ取っているのだ。だからこそトレーナーの指示無くして動く。

「あはは、アユミン泣き過ぎだよ～。あたしは大丈夫だから」

強がりを言ってみせるキララは、しかしその両目には大粒の涙を溜めていた。

奇跡とも言えた時間は、あっという間にその形を変えようとしていた。

アユミのことをなんとしてでも守りたいキリン。キララのことを諦めたくないアユミ。アユミとキリンに助かってほしいと願うキララ。

キララは現れたユンゲラーの頭を撫でて、その首に自分のショルダーバックをかぶせる。

「お願いねユンゲラー。あたしもちゃんと脱出するから、早くアユミンのところへ戻ってあげて」

こくりっ、とユンゲラーは頷いてまた【テレポート】する。

「聞いてアユミン。あたしはポリゴン2と一緒に先に出てるから」

それは真っ赤なウソであった。

「だから、じゃあね」

「キララ！」

キララはそう告げて、それから一言も喋らなくなる。

アユミはただただ彼女の名を呼ぶも、返答はない。

「アユミ、もう限界だっ！」

キリンはサイドンの息が絶え絶えになってきているのを耳で確認すると、そうアユミをせかす。

「うぐっ、くすっ……。わかったよ、ユンゲラー頼めるかな？」

ユンゲラーはまたもこくりと頷き、その両手をアユミとキリンに添える。

アユミのユンゲラーはケンのケーシィとは違い、一度に二人の人間あるいはポケモンを【テレポート】させることができる。そう、確実に。

だがその分相当な精神力を削られるらしく、一日に一回しか使用できない。

そのことをアユミは知っていたし、キララはあの時そう解析したのだろう。だからこそ、あんな言い方をした。

キリンがサイドンをボールへとしまうタイミングを見計らい、ユンゲラーは二人を炭鉱の外へと一緒に【テレポート】する。

途端アユミとキリンの周りを外の空気が包み込み、息が楽になる。

辺りはすっかりと夕刻を越えており、爆発のあった炭鉱は見事に崩れていた。

大量の土砂に押しつぶされた人間やポケモンが他にどれくらいいたのかはわからない。しかしその被害が甚大であったであろうことは、こうやって外からみると明らかであった。

多くの人だかりに行き交う重機の騒音。そしてなによりも吹き荒れる豪雪。

雪がまるで今起こった事実を白日のもとから隠さんとするかのよ

うに、黒く染まった炭鉱の街は白化粧されていく。

「キララ、キララは？！」

アユミはすぐさまに立ちあがり、人の大群をかき分けてどんどんと進んでいく。

彼女はわかってはいた。ポリゴン２ではあの状況からキララを助けることができないことを。でも、運命に抗わなければ納得もいかなかった。

「キララっ！　キララー！！」

ただしきりに彼女の名を叫ぶ。しかしこの雪の中では彼女の声は遠くへ届かない。

そして無常にも、次の瞬間。

「みなさん、離れて！　崩れますっ！！」

炭鉱で働いていただろう作業員の男がそう叫び、凄まじい地響きと共に炭鉱であったはずの山が一気に潰れた。

「――――――っ！？」

絶句。

そしてアユミは膝から地面へとへたれこんだ。

「アユミっ！」

後ろからキリンとユンゲラーが追いつき、アユミの見た光景を共に目の当たりにする。

「キララーーー！！」

一人の少女の悲痛な叫び声が、炭鉱よりも黒く煌びやかな空に突き刺さる。

それに答えるようにして一つの流れ星が夜空を舞うが、

ここにミキキ　キララはもういない――――。

その日、このことは大々的なニュースとして取り上げられた。

クロガネシティジムリーダーヒョウタの死も発表され、他にも犠牲となった従業員達の名前も羅列された。その中には名称不明や行方不明者もおり、炭鉱へは立ち入り禁止のレッテルも貼られた。

相次いで亡くなったシンオウのジムリーダー達。

それが親子心中なのかと囁かれる中、あきらかに数多くの人間が新しいサカキの制度に対して疑惑を抱き始めた。

それもそうだろう。

なぜならばジムリーダー達が死んだことは幾らでも規制できることであり、つまりそうなっていないということはサカキがわざと情報を流しているということに繋がるからである。

しかしこんなことが起こってもなお、人々の日常は揺るがなく進んでいくのであった。

第十三章：極寒の中で　ＶＩ：キラキラ星（後書き）

さていろいろと疑問が残るかもしれませんが、わざとですので今のところはスルーしてもらってもかまいませんｗ

というかどこをスルーすればいいのかなんてわからないですよね；；ｗ

ルカ「ほんとだよ」

さて次回は裏にはいって、そこから十四章へと入ります。

ルカ「それじゃ、またねー」

第十三章：極寒の中で　「裏」：白き女性と黒き男性（前書き）

さてクリスマスも終わり、こたつの中でのんびりまったりと過ごしております。

ルカ「こんな人になっちゃ駄目だよ、みんな」

えーっとそれでは十三章最後となります。

ルカ「裏だから短めだけどね」

それではどうぞ！

第十三章：極寒の中で　「裏」：白き女性と黒き男性

クロガネ炭鉱内：

「ありがと、ポリゴン2」

「……」

ぎゅっとポリゴン2を抱え込んで、キララは涙を流す。

「ごめんね……」

キララは泣いていた。

自分のせいで、皆を悲しめてしまった。そのことが何より自分の死より悲しいことだ。

「あーあ、あたし何やってんだろうね」

本当に……と、彼女は想っていた。

自分の両親があの日殺されてしまった。それがこの国に必要であったことなど知るよしもない。だけれども、彼女には一つの確信があった。

『あたしがお父さんお母さんの仕事を引き継がなきゃ……駄目ってことなんだよね』

そう。両親の成していたことが原因で二人が殺されたのならば、それを継ぐことに意味がある。この世界を元の世界に戻す為の、小

さなきっかけとなることを信じて。

「ごめんね、アユミン……。あたしの夢、アユミンに託してもいいかな？」

キララが話しかける岩の向こうにアユミはもういないであろう。

キララがアユミのユンゲラーに授けた鞄の中には、彼女が仕事で用いていたデバイスが入っていた。それをポリゴン2と一緒に使い、数多の情報を得ていた彼女……。

「あたしがいままでに集めてきた情報（データ）を、使って……世界を取り戻して」

彼女もまた今の世界を憂う者。

彼女に足りなかったのは情報を生かせる力にあった。

収集のみに特化した少女、ミキキ　キララ。彼女に欠落していたのは発信の力。それを彼女はアユミといることで可能にできると信じていた。

「うまくいきすぎてたのかな……？　ねぇ、ポリゴン2？」

「……」

苦悶の表情を浮かべながら、ポリゴン2は主を守ろうと念動力のフィールドを展開し続ける。

「もういいよ、ありがとう」

そして彼女は最後に、自分のパートナーにそう告げた。

ポリゴン2も彼女のぬくもりから悟ったのだろう、ふっと体から緊張を解く。

その後、キララとポリゴン2は大量の岩に押しつぶされた。

クロガネ炭鉱　外：

クロガネ炭鉱が完全に崩れ、アユミがキララの名を叫んだ頃――――

「まったく、腹立たしいですね」

ここにまた一人、あの中から脱出した者がいた。

その顔は土埃にまみれ、汚れてはいたがアユミとヒョウタの試合でジャッジを任されていたテツのものであった。

しかし明らかに前述なような喋り方や態度ではなかった。

「すっかり汚れてしまいました」

びりびり！　とテツは自身の顔を剥ぎ取る。

「親も親なら子もまた子ですね」

そう、その偽りの仮面の下にあったのはヒョウタの父親であるトウガンをその手にかけた人物であった。

「まったく、ジムリーダーをこの手で殺めることができるからこの任に就いたというのに……勝手に死なれては困りますね」

彼をここまで運んできたエルレイドは心なしか疲弊しているようにも見える。まあそれもそうだろう、距離で言うとアユミのユンゲラーが運んだ距離の三倍はあるのだ。

【テレポート】……それは人数制限があるほかにも距離にも制限がある。その制限をどこまで伸ばすのか、それはポケモン達の鍛錬によって決まるのである。

「消火不良ですが、まあ収穫はありましたし良しとしますか」

そう言うと男は携帯端末を取り出す。

その外装はすでに存在している機種のどれとも異なっており、しかし刻まれているRの文字は見おぼえがある。

「こちらクロガネ炭鉱より本部へ」

「……はい、こちらロケット団本部」

携帯の向こう側でオペレーターが出る。

「クロガネジムリーダーヒョウタロスト。これで二人目です」

「了解。ロスト確認……。やはりクロガネ炭鉱で？」

「はい。勝手に死なれてしまいました」

「了解しました」

人々が集い、喧騒によってにぎわう炭鉱を見下ろしながら男は通信を続ける。

「それと監視対象であった情報屋の死亡を確認」

「情報屋……。はい、確認しました御苦労さまです。次の任務は追って連絡いたします」

「了解」

ピッと機種を服の中へとしまい、男は口の端を上げて乾いた笑みを浮かべる。

「次こそは、私のこの手で仕留めたいものですね」

そう言って、男はエルレイドと共にまた姿を消すのであった。

ロケット団　本部：

カントー地方ヤマブキシティ。

大都会の中でも一際存在感を放出しているシルフカンパニー社。
それが今のロケット団の本部と言われている。

そのビルの社長室には勿論サカキの姿があり、その隣にいる秘書は淡々と連絡事項を読み上げる。

「クロガネジムが堕ちたようです」
「そうか」
「それと情報屋もロストだと」
「……そうか。それで二つのジムを堕とした連中は？」
「ミサカ　キリンとカンバル　アユミ……ハナダシティでリョウ様が取り逃した三人の内の二人です」

サカキはそこで椅子から身を起して立ち上がる。

「ふむ、磨けばそれなりには使えるか」

「はい。しかし自由にさせすぎなのでは？」
「なにその為の保険は常に残してあるさ」
「さ、さようですか」

そのままサカキは社長室に置いてある来客用のソファへと移動する。

「とのことだが、どうするんだお前は？」
「そうですね、このままでよろしいのではないでしょうか？」
「お前が言い出したことだ。後戻りはできんぞ？」
「構いません。それに人は一人ではないと成長できませんから」

サカキは面向かいに座る女性の言葉に苦笑を浮かべて、頷く。

「そうか。ならばこのまま相手の出方を窺おう」

サカキはただそう言って秘書に向けて手を振り、秘書はお辞儀をすると共に部屋を出ていく。

「時間はたっぷりとある。さあ、こい」

世界はまた、動き出す———。

第十三章：完

第十三章：極寒の中で　「裏」：白き女性と黒き男性（後書き）

さて次話の十四章はあのトリオですね。

ルカ「たしかイッシュ地方だっけ？」

はい、そこで一つの真相と彼らは直面します。

ルカ「今回もサカキは謎だらけだったね」

まあタイトルの意味はきっとこの後、まだ先になるとは思いますが明かされますのでw

では！

第十四章：人とポケモン　Ｉ：人とポケモン（前書き）

さて、やっと自分が書きたくて書きたくてしょうがなかったパートに入りましたｗ

ルカ「ややこしそう；；；」

まあ、でもどうぞお楽しみくださいｗ

第十四章：人とポケモン　Ｉ：人とポケモン

イッシュ地方　ヒウンシティ：

「おいおい良いのか勝手に置いて行っちまって？」

ここヒウンシティの港に一つ停泊する船が一隻。

「あなた、天下のロケット団でしょ？　悪事を働いてなんぼじゃないの？」

先へ先へと一人進んでいってしまうミュウをガイは追いかける。

「ま、まあ、そりゃそうかもしんねえが……」

「ガイくんは良心が痛んでしょうがないのですぅ～」

そう零すガイを後ろから抱きついたモモが茶化す。

「てめっ！　黙れモモ！」

「黙れってことは、やっぱりそういうことってこと～？」

「はなれやがれ！」

そんな二人を後ろから見つめていたジンは苦笑を浮かべながら、

「仲良いよなあ、二人って」と思うのであった。

「あ、こらジン！　てめえ今くだらねえこと思いやがったな！？」

「え？　い、いえいえ、なに言ってるんですかガイさん」

ぎろっと睨まれてジンは片手をぶんぶんと振りながら否定する。

「あ、なぁに～？　ガイくんってもしかして意識しちゃってるのー？　かっわいい～」
「うるせぇつってんだろが！」
バッとガイはモモから身を引き離し、
「きゃうんっ」
とモモは舌を少しだけ出しながらそんな甘く甲高い声を出す。
そんな彼らのやりとりをミュウは一人横目で冷やかに見つめており、
「三バカトリオって本当にいたのね」
と零すのであった。

ここはイッシュ地方、ヒウンシティ。

高層ビルがいくつも建ち並ぶ大都会であるこの街は、イッシュ内では一番の人口を誇っている。行き交う人々の群れ、群れ、群れ。

なぜミュウが最初にこの街を選択したのはわからない。だが、三人はミュウについて行くしかないのだ。

「なあ、おい。一体どこへ行くんだ？」

ここに来るまでに四人の関係はいくらか解れたのだろう。特にミュウに対しては、警戒はしているものの敵対心は払拭されている。

「黙ってついてきなさい。会わせたい人間がいるわ」

ミュウがそう告げ、身をひるがえしてすたすたと人の波をかいくぐっていく。

「あ、ちょっ、待て！」

「あーんガイく～ん、モモ迷子になっちゃう～」

「てめぇはひっつくな！」

「ま、待ってくださいよ二人とも～っ」

がっしりとガイの腕を離さずロックしたモモ。どうやらモモは新しい土地ということで舞い上がっているのだろう。キラキラとその両目を通り過ぎていく店のショーウィンドウに釘付けにさせている。

一方のジンは一人大掛かりな荷物を背負いながら、移動しにくそうになりながらも比較的長身なガイの赤い髪の毛を頼りに人混みの中をかき分けていく。

そうこうしながら三人はミュウが停止した目前にあるビルを見上げる。

「ここよ」

そう端的に言葉のみを発してミュウは自動ドアの中をくぐっていく。

ミュウに案内された建物……それは高層ビルという特徴を除いては一見普通なビルである。なぜミュウがこのような場所を知り、エレベーターの使い方まで知っているのか疑問に思いながらも三人はミュウと共に上へ上へと階を上がっていく。

「あら？　あらら？　珍しいお客さんだこと」

様々な大型機具が所狭しと並べられたこの空間に一人コーヒーカップを掲げる女性がいた。

「お久しぶりねドクターアララギ？　博士の方がいいかしら？」
「いいわよ別にどちらでも。それよりも……あなたが人を連れてくるなんて意外ね」
「ふふっ」

アララギ博士。

その人物の名を三人は知っていた。オーキド　ユキナリと並ぶ程のポケモン博士号を取得した天才鬼才の女性博士。

「おいおい、あれって有名人だよな？」

「な、なんでこんなところに？」
「ぼ、僕に聴かれたってわからないですよっ」

三人は意外な人物を前に面食らい、あたふたと状況の整理を図るもそうすればそうするほどに訳がわからなくなっていく。

「それで？　あなたの連れてきたお客人に何を話せばいいのかしら？」
「進化についてよ。もうさすがに答えは出たのでしょう？」
「……まあね。なにかとマコモもいるしどうにかなったわ」

そして次にアララギ博士から出た名前も思い当たるのか、ガイ達の中でどよめきが走る。

「おいおいマコモって言やあ」
「えっと、たしか～」
「あのアララギ博士の同期でゲームシンクやCギアの発明者ですよ」

マコモ……アララギ博士の大学時代からの親友であり、ジンが言ったようにゲームシンクとCギアの発明者でもある。彼女が研究しているのはポケモンの不思議な力について。

「あれ、あたしのこと呼んだ～？」

ぴょこっとボサボサとなった髪をしたマコモがとある機具の後ろから飛び出す。

「ああマコモ、丁度よかったわ。どうやら私達の研究テーマをご披露する時がきたみたいよ」
「おおっ！　やったやったやったねっ」

白衣をただ上から着こなしているだけなのに、二人の抜群なプロポーションはくっきりとしたラインを描いている。

「お、おい、ミュウ」

「なによ？」

「お前って前にイッシュに来たことあるのか？」

ガイがそう質問し、残りの二人も興味津津に首を縦に振る。

「ええ、ちょっとあってね。この二人は私の友人よ」

ミュウの視線が途端柔らかいものへと変わり、ガイ含めた三人ははじめて見るミュウの表情にただただ見とれてしまう。

「ハーイ！　それじゃそろそろプレゼンテーションをはじめるから、そこの椅子使ってね」

アララギ博士がプロジェクターを起動させたりパソコンにマコモが入力している間、ガイ達はアララギ博士の示した椅子なるものを探していた。

「椅子？」

「ああ、きっとこれのことよ」

と、いきなりミュウが積み重ねられた書類の山を蹴り飛ばす。

「え、ちょっ！？」

ジンが素っ頓狂な声をあげるも、書類の山は床へと散らばる。す

ると紙があった場所には椅子のもたれる部分が垣間見える。

「入った時も思ったけど、博士になるような人達って整理整頓って言葉知らないのかな……？」

乾いた笑みと共にモモは苦笑しつつ、いそいそと四人分の座れるスペースを確保していく。

「えっと、それじゃ行きますよー？」

えいっ！　と声を発すると共にマコモがキーボードのＥｎｔｅｒキーを押す。

するとプロジェクターには「ポケモンの進化について」と書かれた題名が表れる。

ガイ、モモ、ジンはちょこんと行儀良く座っているがミュウだけは一人立ったまま、プロジェクターを静観する。

「ええと、それじゃ私達が始める前にミュウから説明を聞こうかしら？」

「わかっているわ。それじゃガイ、あなた達に聞くわ。シンクロニシティの時、この世界で何が起きたかわかるかしら？」

シンクロニシティ……それはポケモンと人間が動物より進化した瞬間のことである。その瞬間という時間枠が一瞬のものであるかどうかは定かではないが、明らかにその瞬間があったと説で言われている。

「ポケモンと人は同じ時にその存在がその存在となった。その起因

はわからないけど、両者がなにをもってポケモンと人間になったのかははっきりとしているわ」

ミュウが語り、ガイが疑問符を浮かべる。

「なんだよ、それは？」

彼女はガイを片目で一瞥した後、顔を横に向けて続ける。

「それは科学の力よ」

「は？　何言ってんだお前、科学ってのは人が生み出したもん――」

しかしガイの言い分はミュウにすぐに遮られる。

「それは間違いよ」

「何？」

アララギとマコモはわかっているのだろう、静かに頷きながら両目をつぶっている。

「ポケモンも科学の力を、人間が科学の力を得た時に得た。ジン、あなたなら多少なりとわかるんじゃない？」

いきなり名指しされ、ジンは「へ？」と言ったような顔をするが思い至る点が将来技術者を目指す者としてあったのだろう一つの単語を口にする。

「もしかしなくても、モンスターボールですか？」

「良い線ね。そう、ポケモン達は人間という異なった生命体との共

存において科学の力を人に順応させることを見出したのよ」

一呼吸おいて、

「つまりポケモンは受動的に人間の能動的な科学を受け入れる道を選んだのよ。それが今の世の中ってわけ」

するとミュウの言葉に反応したのか、モモが椅子から立ち上がる。

「じゃあポケモン達は私達みたいに科学の力を使わなかったってこと？　でもそれだけじゃポケモン達に科学の力があったなんていう立証にはならないわっ」

確かに、もしポケモン達が科学の力を持っているのに人間達の科学に従ったというのであれば……それはただの後付け論である。

「それは違うわ。ポケモン達は自分達の科学の力を隠すことにより、あたかも人が自分達の科学の力によってポケモン達を支配できるという認識を人間に与えたのよ」

ミュウはそこでガイ達に顔を向けて、両手を広げる。

「人はポケモンを自分達の思うがままに支配していると思っているでしょうね……。でも実は上手い具合に操られていたのは人ってことよ。ふふっ」

ミュウが口を歪めて嗤う。その姿を三人は畏怖の眼差しで眺め、彼女の後ろにいた博士の二人は苦笑を浮かべながら肩をすくめる。

「それじゃあここからはあたしが受け継がせてもらいます。いいか

な、ミュウ？」
「……ふふ。そうね、そうしましょう」
まださっきの演説の余韻に浸っているのか、ミュウは一歩後退してマコモに場を譲る。
「あたしも最初ミュウの話を聞いた時、人間としてちょっといただけない点が幾つもあったの。でもね、研究を重ねれば重ねるほど彼女の言ったことの信憑性はあがっていくばかりだった」
マコモやはり最初聞いた時はいただけなかったのだろう。だが博士、研究者の性であろう……真実に勝るものはないと信じているのだ。
「それじゃ続けさせてもらうね。まず皆さんはなぜポケモンが技を使えると思いますか？」
先ほどの話とは一転、そこにガイは疑問を抱いたのだろう。
「おい、それさっきの話と関係あるのか？」
「もちろんよ？　ポケモンは未知なる生物であることに変わりないし、それは人間も同じ。でもねポケモン達が技を使用する理由は、人間に自分を操れますよ、ということをアピールしているからなの。だから人、つまりトレーナーが技名を発した時ポケモン達はそれに従うの」
マコモがプロジェクターに移りだした一般的なバトルの映像を指しながら続ける。
「それはポケモンと人の間での無駄な軋轢や争いが生まれないよう

にとしたポケモン達の知恵からなったもの。こう説明してしまうと、ポケモン達があたし達より知力を持っているように思えるけど……そうではなくて、これはポケモン達の本能から自然と出てくるものなの」

そうであろう。

いままで誰もがポケモンは力、人は知を司る異なる生物というのを信じて疑わなかっただろう。それが覆そうとされているのだ。

「あらら、ちょっと難しすぎたかしら？　ならちょっと休憩しましょうか、どうマコモが入れてくれるコーヒーは絶品よ？」

と、アララギ博士がにっこりと笑うと共にマコモの演説は途中中断された。

第十四章：人とポケモン　Ｉ：人とポケモン（後書き）

さて続きます。勿論ですがｗ

恐らく今日か明日中に次話を出すと思います。これだけはなぜかプロットできてたので。

まあ皆さん思う所もあるかもしれませんが、これが自分の提供するポケモンとはなにかの内の一つです。

ルカ「わ、私にもコーヒーを……」

ではでは～；；

第十四章：人とポケモン　ＩＩ：屈服しなさい人間（前書き）

さて続きですね。

まあこれからちょくちょくこういった話題は出てきますしエスカレートしていきますｗ

ルカ「ええ？！　頭痛い・・・」

それでは、どぞーｗ

第十四章：人とポケモン　ＩＩ：屈服しなさい人間

紙や器具がごった返したこの空間になぜアララギ、マコモ博士両名がいるのか説明しておこう。

「たしかお二人はこの地方で活動されていませんでしたよね？　なぜこんなところに？」

コーヒーを啜りながら、そう切り出したのはジンだった。

「ああ……。私とマコモ、ここの大学を出たのよ。それで一番八都市に近いここを拠点にしようってね」

「はい。それにネットワーク環境的にも設備的にもここだと早く手に入りますしー」

アララギとマコモは互いに顔を合わせて相槌をうちあう。

「八都市？」

モモは外にいた時に冷え切った指をマグカップの熱で温めながら顔を上げた。

「ええ。ヒウンシティの北にあるライモンシティをはじめ、ホドモエ、フキヨセ、セッカ、ソウリュウ、カゴメ、サザナミ、そしてブラックシティがこのイッシュで言われるところの八都市よ」

ずずっとまた一口アララギはコーヒーを啜る。

「はい、ハイリンクを周辺とした八つの六角形状に点在している街

のことを指します」

マコモがそう告げ、すっと立ち上がる。

「そろそろ続きよろしいですか？　あたし早く続けたいです！」

研究者としての性なのか、自分の研究成果を他人に見てもらいたいという衝動に掻き立てられたのだろう。

「そうしましょう。それに私苦手だわ、人間の飲むこのコーヒーってのは」

ミュウは一口飲んだもののその後しかめっ面になりながらマグカップをアララギにつき返していた。

「それでは続きを始めましょうか」

「ちょっと待ってくださいマコモさん」

マコモが目を爛々に光らせながら説明を開始しようとしたとき、割って入ったのはガイだった。

「さっきは衝撃的過ぎて頭が追いつかなかったが、あんたはポケモンが俺達人間と無駄な争いを生まないように知恵を働かせたって言ったよな？」

「はい」

「おいおい、笑わせんじゃねえよ。そんな屁理屈認めろって言うのか？　俺達人間がポケモンの良いように操られてるってよお？！」

「ひぃぃ？！」

ついカッとなってしまったのか、ガイは机を片手で思いっきり殴

っていた。

さっきまで一人このことをコーヒータイムの間、ずっと考えていたのだろう。考え至ったからこそ憤りがわいてきた。

マコモはそんなガイにおびえながらも、いそいそと続ける。

「い、言い方がまずかったでしょうか？　えっと、ですがこれは事実なのです。さすがに今のポケモン達はそれを意識しているかはわかりませんが彼らの潜在意識にはちゃんとその作用が未だ働いています」

それは研究を重ねてきてデータが出ているから言えることなのだろう。

「……ということは、転送システムにおいてもポケモン達が自ら【テレポート】と言っていいかはわからないけどそれに似た力を発しているからこそ成り立っている……？」

モモは指を顎に当てて首をかしげて見せる。

「はい、そうですね……大体そんなところです」

マコモはモモの指摘に親指を立ててみせる。茶目っけのある博士なことである……。

「ふふ、それを人が奇跡の発明だとか言って舞い上がっているのを見ていると存外、面白いものよ」

横やりを入れるようにミュウがそこでほくそ笑む。

「ミュウは黙ってて。それに私はまだ全てを信じたわけじゃないから」

モモは明らかなる対抗心を持ってミュウに反論する。そんな彼女にミュウは肩をすくめて溜息をつく。

「ふふ、解釈はご自由にどうぞ。私は私の真実を述べただけよ？　それに無理があると思わない？　ポケモンのことを完全に理解できてもいないあなた達に、ポケモンを捕まえたり転送できたりする道具や装置が存在しているという現状を？」

たしかに今存在する数々の副産物に対してジンは疑問を抱いていた。なぜならあの装置を使ってポケモン以外の物質は転送が不可能だからである。

「ただ自然の循環と平穏を願うポケモン達があなた達の我儘を聞き入れることでこの世のバランスが成り立っていると、誰も考えたことがないの？」

ミュウが三人の顔色をうかがい、そして腕を組んで背を曲げる。

「ふふ、ふふふふ、だから人は無能なのよ」

「っ！！　黙ってって言ってるでしょう！？」

モモは喰ってかかるような形相でミュウへと怒鳴り、

「あら、怖いのね」

と一歩後退する。するとアララギがミュウの肩に手を置き、ミュ

ウはつまらなさそうにぷいっとそっぽを向いて更に後退する。

「昔の人は何を願ったのかしらね？　何を望んだのかしら？　私はポケモン達の進化について長年研究してきて、そんな時にミュウと出会ったの。彼女が今してくれた話を私も聞かされた時思ったのがこれ」

アララギはプロジェクターへと向き直り、微笑む。

「昔のことはわからない。それが今生きているという何よりの証よ。だから私は人間の手によって生み出されてしまったポケモンを徹底的に研究しているわ」

そう、例えシンクロニシティの時にポケモンと人間が生まれたとされていても新たに誕生したとされるポケモンは確実に存在する。

ヤブクロンやベトベター、ミュウツーなどがその良い例である。

「おいおい待ってくれよ。もしかしてあのオーキドっていうジーさんが関わっていた、あの胸糞悪い研究にあんたも加担していたっていうのかよ？」

オーキドが行っていた研究。それはマサラの悲劇と語られる、ポケモンの命をもってして新たなるポケモンを創りだすという前人未到の大事件のことである。

その研究はサカキの援助によって実現のものとなり、今リョウがプロトタイプとしてミュウツーを従えている。

「オーキド博士の研究について私は聞かされてはいたわ。興味はも

ちろんあったけれど、でもその時私は違う研究を学会で発表していて忙しかったのよ」

よほどアララギもその研究に惹かれていたのだろう。恐るべし研究者魂。

「でもねベトベターやヤブクロンを研究してみると、やっぱりミュウの言ってことを後付けするようなことばかりになるのよ」

「そ、それはどういうことですか？」

ジンも、多少焦りを交らせながらアララギに尋ねる。

「ああいったポケモンは私達人間の負の部分であるところから生まれてきている。それはこの世界のバランスを保つために、ポケモンとして現れたのではないかって私は思うの」

つまりこれ以上の汚染を防ぐためにポケモンとして生まれること、そうすることで汚染の促進を抑えるということなのであろう。

「だとしたら私達が成し遂げていることは、自分達の為だけのものであって世界の為のものではない。私達が所詮豪語している世界とは、私達がつくりだしてしまった社会のことであり、ポケモン達が住んでいる世界ではないのよ」

アララギはしっかりとした信念と共にそう断言した。

「「「「っ……」」」」

そして三人は彼女の言葉に何も言い出せないのか、ぐっとどこへもぶちまけられない感情を胸の奥で堪える。

「ふふふ、どう屈服する気になったかしら人間？」

打って変ってミュウが乗り出し、ドＳッ気満タンな態度で三人を卑しく見下す。

「私達がどれほどまでにこの世界を大事に思っているか、わかったかしら？　あなた達人間と覚悟の度量が違うのよ」

今まで羅列されてきたことを踏まえて、三人はぎゅっと唇をかみしめる。

「あなた達は我が物顔で世界を壊していく……それならば自然の力を司っている私達がいつまでも静観していた理由が見いだせるのかしら？　見いだせないでしょうね？　しょせんは社会という自分達のルールにのっとった世界なんかじゃ、本物の世界を見定めることなんてできないのだから」

ミュウは「ふふ、ふふふふ」と妖艶な笑みを携えたままに続けていく。

「確かにポケモンに人間のような高度な演算能力はないわ。でもねポケモンは無知というわけではないのよ？」

ミュウがそう切り出したことでマコモはいそいそとプロジェクターの映像を切り替える。

「あなた達はポケモンの言う言葉を理解できて？　ポケモンは人の言葉を理解できるというのに？」

そう指摘された通り、その逆はない。

「マコモも言っていたけどポケモン達の使用する技もあなた達に適応したからこそ生まれたものなのよ？　ポケモン達はそうすることで自分達の潜在能力の可能性が広がると確信していたからこそ、強大な技を得ることができた」

そうでないポケモンも勿論いるのだが、それは至っての例外である。

「それにあなた達は感情が表せるからこそ人間は高度な生命体だと思っているのでしょうけど、感情表現においてポケモンも人間と同様に持ち合わせているということになんで気がつかないのかしら？　ああ、それとも気がつかない振りをしているだけかしら？」

饒舌になった彼女を止める者など、今ここにはいない。

アララギとマコモはミュウの意見に同意しているし、三人はミュウに反論する程のカードは持っていなかった。

だがアララギが一歩前に出てミュウにこう告げる。

「まあまあミュウ、そのくらいにしておきなさいよ。それに人間側にだって世界を見ているものがいるってこと忘れてないわよね？」

ゴゴゴゴっと迫るアララギの気にミュウは冷や汗を一つかいて、

「わかってるわよっ」

と言ってぷいっと身をひるがえす。

「さあさ、あなた達もそんな子供みたいな顔していないでちゃきっとしなさい」

アララギはガイやモモ、ジンの頬を両手でつねってやりながら彼らを正気に戻す。なぜならば彼らはアーボックに睨まれたニョロモのような顔をしていたからだ。

さぞかしミュウをこれほどまでに畏怖したことがないのであろう。

「な、なあアララギ博士」

ガイは握りこぶしをつくり、椅子に座りながらアララギを見上げる。

「俺達人間は……このままでいいのか？」

きっとそれが今ガイが聞ける一番最善な質問だったのだろう。だがアララギは彼の顔を覗き込んで、

「それはあなたが自分の考えでもって決めなさい」

と告げるのであった。

「それじゃあ皆さん、お食事にでもしましょうか！　それがいいです、うんうん！　このビルの食堂はそれはそれはおいしいんですからー」

マコモはその場のムードを盛り上げるためにそう言うが、さすがにミュウの演説は三人の常識を覆すほどまでにインパクトが大きか

ったのだろう。

軽い放心状態から抜け出せずにいた。

「ミュウ、やりすぎよ」

「……わ、わかったわよ！　な、なんとかすればいいんでしょ！」

やたらミュウはアララギとマコモに気を許しているのだろう。あのサカキ並みに。ここまで感情を素直に出すミュウというのも稀なのだ。

「ほらごはん食べに行くわよ！　来ないと私が全部食べるわよ？！」

真っ赤に頬を染めるミュウ。よほど三人のことを気に掛けているのだろう、自分への反省も込めているかはわからないが普段見られないミュウがここにいる。それを見た三人はそれぞれに複雑な感じに微笑むも、心を入れ替えた御様子。

例えポケモンが人間より強大なものであっても理解しあえることはできるのであろう。そうでなければミュウがここにいるはずがないのである。そして自らその世界の仕組みを教えることはないであろう。

ミュウもまた人間を求めているのだ。

第十四章：人とポケモン　ＩＩ：屈服しなさい人間（後書き）

えっと、猛烈なスピードで書いていたせいか多少なりと指が痛くなってしまいました；；ｗ

ルカ「ちょっ」

次話はちょっと時間が空くかもしれませんが、でも多分年が明ける前には更新すると思います。

ルカ「私のポケモンもミュウと同じように思ってるのかな？」

人間とポケモンは理解できるから大丈夫だよ。同じ生き物なんだからね。

ルカ「それもそうだよね！」

では！

第十四章：人とポケモン　ＩＩＩ：揃うは踊らされる駒（前書き）

さて２０１０年最後の投稿でございます。

ルカ「みんな、良い年をお過ごしくださーい」

こっちはやっと今日雪が降りまして、寒い限りですｗ

ルカ「後で雪だるまつくろっと」

元気だねぇ。では、どうぞ！

第十四章：人とポケモン　ＩＩＩ：揃うは踊らされる駒

「ほらほらミュウ、ほっぺについてるわよ」
「じ、自分で取るわよっ！」

アララギがミュウの頬にくっついてしまった米粒を指でつまんで、自分の口へと運ぶ。

今、一同は介してビルの食堂へと昼食を取りにやってきていた。

外の景色をみやると見えてくるのはビルの群れであり、窓には少々の雨粒がくっついている。雨が降っているとはいっても、傘をさすようなほどのものではない。

「ミュウってまだ箸慣れてないんだねー」

とマコモが調子よく笑いつつ、自分の箸を器用に右手だけで開いたり閉じたりして見せる。

「道具を使わないと必要な栄養分を補給できない人間と一緒にしないでくれるかしら。むしろあなた達にあわせている私に敬虔な態度をとってしかるべきよ」

ツンと顔を背けてみせるミュウではあるが、それでも空腹感には屈服せざるなく、箸を震わしながら料理をつまもうと努力する。

そんな仲の良い三人と対面して食事をとるガイ達。

三人も朝早くに島を出て以来何も食してはいなかったので、先ほ

どのプレゼンテーションによってショックは受けていても箸を動かす。

食欲が満たされることで緊張感も和らいできたのだろう、食事を済ませるころには「ふぅ〜」と溜息をついて一服をいれていた。

「どう、おいしかったでしょ？」

と、マコモは自信ありげな表情で対面する三人に尋ねる。

「ええ、とっても。ですがこのビルって一体なんのビルなんですか？　お二方のような研究者ばかりではないような気がするんですが」

と一番最年少のジンが聞き返す。

「えーっと、たしかフレンドリィショップのイッシュ支店が結構な階を買い占めてた気がするけど」

フレンドリィショップ。それはトレーナー達を対象とした、ポケモンとの生活において必要な必需品を取り扱う店である。

フレンドリィショップの経営は全てシルフカンパニー社に牛耳られており、商品のほとんどがシルフカンパニー製である。

イッシュは他の地方とは違い、ポケモンセンターの中にフレンドリィショップを取り入れている。人口密度が一番多いとされるイッシュであるからこそのスペースを効率良く活用する商業スタイルであり、ポケモンリーグの方式を採用されているともいわれている。

「へえ、そうなんですか」

と関心しながらジンは食堂をぐるりと見渡し、中々の数のスーツ姿の営業マンをみかける。

「それはいいとして、ミュウ。お前は俺達に言ったよな？　俺達のポケモンが選ばれた訳がどうこうって」

ガイは箸の先端をミュウへと向けながら、そう真剣な眼差しで問う。

ミュウは未だ箸というもので苦戦しながら芋の煮っ転がしを口へと運んでいる。

「……ええ、そういえば言ったわね」

箸をそのまま手からぽろりと落とし、ミュウは髪をとかしながらガイを直視する。

「あなた達の持っているポケモンは、まあ俗に言われている御三家よね？」

「ああ」

御三家、それはポケモントレーナーを目指す少年少女達が最初にもらうと言われている初心者向けのポケモンのことである。

各地方にいるポケモン博士の研究所が都心より離れている理由として、この御三家を生ませ育てるという義務も負っている為に大規模な研究所を設けていると言っても良い。

そして各街や町にあるトレーナーズスクールでは１０歳までに自

分のポケモンを持っていない子供たちに分け与えるポケモンとして御三家を用意しているのである。

「ガイはヒトカゲを。モモはゼニガメを。そしてジンはフシギダネを」

名を出された三人は神妙な面持ちでミュウの言葉を待つ。

「御三家は初心者向けのポケモンと言ったわよね？　それは彼らの進化レベルや能力値などのバランスの良さが初心者に合っているからとされているけれど、中々使い手のトレーナーは数少ないわ」

そう、この御三家を使って旅を続けるトレーナーは数少ないのだ。

「御三家は初心者向けであると共に玄人向けのポケモンでもあるわけ。だからその中間にいるようなトレーナーにとって御三家は使いにくいのよ」

アララギがそこで一つ深い溜息をついて頬に手を当てて悩ましそうな表情をつくる。

「そうなのよね。毎年結構なトレーナーを輩出するこのイッシュでもそんなに御三家を転送することはないし、ジムバッジを一つや二つ取った後に返しにくる子とかも多いのよ」

研究所のある町以外では、子供達は違う生態系にいるポケモンにいち早く触れることが多い。そしてその為に最初からポケモンを保持していたり、御三家よりも最初から能力の高いポケモンを持っていることが多いのだ。

「アノ人はあなた達の手持ちをも考慮してあなた達を選抜して、この私に託した。あなた達はポケモンの進化について多少なりとも知識を持ったでしょ？　ならば次はあなたがポケモン達に自分達を教えることよ」
「私達を、教える……？」

モモがカメールの入ったボールを見つめながら、そうミュウに尋ねる。

「そうよ。そうすればあなた達は誰にも負けることはない、アノ人の組織を壊滅させる程の力を得るわ」

ミュウがそこで「ふふ」と得意な笑みを浮かべる。

「ま、待ってくださいミュウさん。なぜ僕達がサカキ様の組織を壊滅させるんですか？」

きょとん、とミュウはジンのことを見つめる。それはあたかも「知らなかったの？」とでも言いたげな表情であることこの上ない。

「アノ人は自分の創り上げた組織を壊してくれる人物を選び育ててるのよ？　それがあなた達」
「だ、だから、なんで？！」

ミュウはにやっと唇を歪ませて、こう断言した。

「それがアノ人の野望だからよ。アノ人はポケモンと人が共に分かり合える世界を望んでいる。その為にはまず世界を変える必要があった……だからそうしたまで」

ここにて明かされるサカキの野望。

しかしだとしたらなぜサカキはこのような真似をとったのか？
なぜ自分から積極的にその野望を直接叶える手段を取らないのだろうか？　なぜ世界を征服したのに、それらしき行動を起こさないのか？

「で、でも、だったらなんであの方は――――」
「自分が消える。そうすることによってアノ人が望む世界になるからよ」

ミュウが幼少時のサカキの手に渡った時に彼らが立てた誓いがこれだった。

サカキはミュウという力を手に入れ、世界へと向ける視野が広まった。そしてはじめて世界というものをその目で視(しっ)た。

こんな世界ではいけないと。

自分とミュウみたいにお互いが理解できる世界をつくらなければならない。その為ならば、自分はどんなことでもすると。例えそれが鬼や修羅の道であったとしても。

その望みにミュウは賛同した。

だから進んで自分の身を捧げたのだ。

サカキ、自分の短いながらにも主となってくれた人間の為に。

「まあ私は世界がどう変わってもいいのだけれど、あなた達三人が

ミュウと一緒にサカキを倒してくれるのなら私達の研究は堂々と発表できるのよね。期待してるわよ？」
「はい、あたしもその為ならお手伝いしますので！　よろしくどうぞですっ」

ガイ達三人はぽかーんとミュウの話を聞きながら、心強い味方ができたことにも動揺を隠せないでいた。

「待ってくれよ、おい。もしかして俺達はサカキの用意したシナリオにまんまと踊らされているってことかよ……」

ミュウ達からしてみれば作戦通りなのだろう。だがその当事者でもある彼らにこのことは今告げられた。それは言わば、聞きたくなかったことに他ならない。

自分を窮地から拾ってくれた人物は好意ではなく、自分の野望達成のためにだった。

それを聞かされただけで自分達の何かが壊れるような音がしたのだ。

「そ、そんな……」

そして三人の中で一番の取り乱していたのはモモだった。彼女がどうサカキと接触したのかはまだ明かされてはいないが、裏切りとも言えるこの事実に少なくとも精神は啄ばまれていた。

「そうね、ショックかもね。でもあなた達には選ぶ権利はあるわ。まあ答えはみえきっているけれど」

そう、答えは聞かなくてもわかっている。

ガイ達はもう後にはひけない。あの日、ミュウが垣間見せた三人の記録の断片……あの日から彼らにとって進むべき道は明日なのだ。

例え自分がサカキの描いたシナリオの上で踊らされただけであっても、彼らは———

「いや、いい。例えサカキの思惑通りに世界が動こうとしていようが、俺はあいつに動かされることを自分の意志で、今ここで決めた。だから、もう動じねえ」

「……私は、あの方に話を直接したい」

「僕も自分で、今ここで決めます。もう他に道は残ってないですから」

それは自分に対しての諦め、逃げ、負け。

そう思われるかもしれない。だけれども結局自分を語るのは自分しかいないように、自分の決断がどう他人に思われることなど問題ではないのだ。

彼らは決めた。自分達の進む道を。全てを知った上で、選んだのだ。

「でもなんでそのことを今俺達に言ったんだ？」

「そうね……まあこれから時間もたっぷりあることだし。今言おうが後で言おうが変わらないわよ。それに初めに言っておいた方が気持ちの整理もつくでしょ？　もうついちゃったみたいだ、け、どっ！」

ミュウは苦戦していた芋の煮っ転がしに箸を直接刺し、それを得意げに口へと運ぶ。

「行儀悪いわよミュウ」

「うるさいわね。この芋が悪いのよ」

外見が美人であるがゆえ、いやこのミュウがここまで感情を曝け出せる人間がいるという事実にガイ達は安心しなければいけないのかもしれない。

「わかったぜミュウ。ありがとな」

いきなりのガイの感謝の言葉に、ミュウのみならずモモやジンもきょとんとした顔でガイを見つめる。

一方のガイはそんな彼らの視線に気付かずに、ゆっくりと顔を上げながら微笑を浮かべる。

「俺達のこと気遣ってくれたんだろう？　ありがとな」

と、言いきったとこでガイはミュウと顔が合う。

先ほどから顔が硬直したままのミュウを見た後、モモとジンもそんな顔をしていることに気が付きアララギとマコモがにやにやとしているのを確認したガイ。

「ち、ちがっ、いや、これはだなっ！」

顔を真っ赤にしながらガイはそう大声を上げ、面向かってそう言われてしまったミュウに関しては頬を朱色に染めて俯いてしまう。

きっと素直に面向かって感謝されたことがないのだろう。

しかし一方のガイはと言えば、

「もぉ～ガイくんー！　私にもそんなに素直になって～～～！！」

「だぁ！　だきついてくんなーーー！！」

先ほどまでの重たい雰囲気はすでに払拭され、彼らの進むべき道は確固たるものとなった。

駒の完成度は揃いつつある。

第十四章：人とポケモン　ＩＩＩ：揃うは踊らされる駒（後書き）

さて後一二話は続けようと思っています。

ガイ達は書いててからませやすくて好きですね。

御三家に関しては自分の勝手な解釈ですのであしからず；；；

では皆さま、良き年をお過ごしくださいませ！

第十四章：人とポケモン　Ⅳ：わかりあう力（前書き）

新年あけましたーいぇーい

ルカ「あけおめー」

さてどんどんと小説も回収作業へと向かって行く折り返し地点です。

なのでどんどん参りまーすw

第十四章：人とポケモン　Ⅳ：わかりあう力

ヒウンシティ　ビル屋上：

アララギとマコモがいたビルの屋上に今一同は集まっていた。

「さあ、じゃあ時間が経ったら下りてきなさい。話の続きを再開しようじゃない」

「わかったわ」

ミュウ、アララギ、マコモはモモ達を置いてそのまま研究室のある階へと下りていく。

別に屋上といっても屋外というわけではない。一番上をソーラーパネルでカバーしている大概のビルではステンドグラスに囲まれた小規模な庭園が存在している。

それは唯一ポケモンをボールから出すことを許される場所であると共に、軽い運動も行えるほどのスペースがある。

「出てこい、リザード」

ガイは他の二人から少し離れ、リザードをボールから出す。

前回過激な死闘を繰り広げた以来なのでリザードは疲労は取れたもののピリピリとした空気をまとって現れる。

「ははっ、もうあんな真似はさせねえから安心しな」

がしがしとガイはリザードの頭を撫でてやりながら、そう告げる。
リザードはガイを見上げ、そこで緊張の糸が緩んだのかそのまま地面へとぺたりと尻もちをつく。
「あのな、リザード」
少しでも視線をあわせようとガイも地面へと腰をおろし、リザードの両目を見据える。
「俺とお前が出会った時、覚えてるか？」
「……？　っ」
やはりポケモンは俺達の言うことはわかるんだな、とミュウの言っていたことを苦く思いだしながらガイはリザードが首を縦に振るのを確認して続ける。
「お前は今にも尻尾の炎が消えそうな雨の日に、道路の傍に捨てられてた」
今から15年ほど前、イミテと遊んでいた時のことである。ガイとイミテは道端で一匹突っ伏したヒトカゲを見つけた。
体中泥まみれで、か細く灯った尻尾の火が今にも消えそうだった。ガイは着ていた道場着でヒトカゲを包み、イミテは泣きながら二人でポケモンセンターまで直行したのである。
辛くも命をつなぎとめたヒトカゲ。だがヒトカゲの持ち主は一週間の間現れることなく、ガイの申し出により引き取ることにしたのである。

「あれから二年、お前の体は治らなかったよな」

そう、リザードはあの時かなり衰弱しておりその体力が完全に回復の兆しをみせるまで二年もの時がかかったのだ。

その時体が弱かったせいか、ヒトカゲがリザードに進化するまでかなりの年月と苦労があった。だがそのおかげか、今のリザードは屈強なまでの頑丈さを手に入れたのだ。

「今こうやって思い返してみると、俺はお前だったのかもしれないな。お前が俺の前に現れてくれた意味が、もしかしたらミュウの言ったようなことなのかもしれねえ」

もしミュウの言ったようにポケモンが世界の為に人間を受け入れたと言うのならば、もし人間を抑止させるために現れるというのならば……ポケモンを必要とする人間の前にもまたポケモンが現れるんじゃないだろうか。そうガイは思い始めていた。

「あの時の俺も弱かったから。お前と一緒に強くなれた」

当時イミテに負けていたガイは父親の道場内でも一番弱かった。だからだろう、ヒトカゲとの出会いと成長はガイをここまで強くしてくれた。

「お前達がなにものかを知っても、お前はお前だよな」

結局、そう結論付けたガイはリザードに力強い笑みを向けた。そしてリザードも不敵に笑みを浮かべて、お互いにハイタッチをかわすのであった。

「でてきてカメール」

カメールは昼寝中だったのだろう、甲羅に四肢と頭を籠らせたまま現れる。

「ほーら、起きて」

こちょこちょとモモは仰向きとなった甲羅の裏側を指を動かしてくすぐってみせる。

「かめっ！　かめがめがー！」

きゃっきゃっと笑い声をあげながらカメールは起きて頭と体を出した。

「ふふ～っ、まだまだ私にはお腹みせるんだねー」

過去に謎を多く持つモモ。彼女が幼少時代に下水で出会ったゼニガメと共に、モモは裏の世界の住人として過ごしてきた。

暗殺、窃盗、詐欺……。その美貌と軽い身のこなしで彼女の存在

は一躍有名となったことがある。

ゼニガメはすぐにカメールと進化はした。だがモモはカメールがカメックスになると身軽さが無くなることを考慮してカメールをこれ以上進化させていない。

だからこそモモのカメールは他と違い、スピードがバトルや戦闘においての要となっている。

「でも、なんであなたは私を選んでくれたの？」

ゼニガメは愛想笑いを浮かべたモモではなく、素の態度を取ったモモへと惹かれた。それは彼女の腹の奥底で渦巻いている闇になのか、それとも彼女が持っている妖艶じみた雰囲気なのか、それはわからないが……ゼニガメは自らモモを選んだ。

「自分を見つけろね。あなたが私を選んでくれた理由（わけ）を知れば、私は自分を知ることができるのかな？」

カメールのおでこをつんつんと指で突きながらモモは訊ねる。

ただがむしゃらに力を欲してきた。自分以外の人間なんて、カメール以外のポケモンなんて、ただただ邪魔だった。

毎日が戦争だった。

上っ面を愛想笑いで固めて朝と昼を過ごし、夜になれば自分の気が向くまま赴くままに血で自身の欲求を満たしてきた。ある時は金、ある時は宝石、ある時は嘆き、ある時は悲しみ、ある時は命……その全てを他人から求める為に生きてきた。

「でも、なんでだろうね……。あの方に会ってから世界が変わったし、ガイくん達といて私は知らない自分を手に入れつつある」

サカキにその腕を買われたあの時、自分の手で殺せないはじめての相手だった。サカキはモモに首を狙われながらも、余裕の表情で逆にモモの胸を狙って動きを止めた。

そしてガイとジンという三人編成の部隊に入れさせられ、最初は今まで通りの上っ面だけで接してきた。だが、なぜだろう？　最初の任務でその楔は解かれてしまった。

「本当の私が、今なのかな？　それを私は知るべきだったってこと？」

「かめ～」

今まで散々人とポケモンを殺してきたとは思えない二人の和やかな雰囲気。それはそんな過去をもっているからこそ滲みでてくるものなのか？　それとも本当にこういった人柄が素なのか？

だがモモもまたガイと同じように、自分を顧みることで自分を知った。

後は……

「フシギソウ」

ジンはモモとガイに背中を向けて、観葉植物が生えているあたりにフシギソウを出す。

「ふっし？」

ジンはしゃがんでフシギソウの顎下を撫でてやりながら、ふりかえりたくない過去をふりかえっていた。

「……」

彼らの出会いは少しだけ時間を遡る。

ジンがフシギソウと出会ったのはフシギソウの時だった。自分がサカキと出会い、そそのかされて会社の機密情報を彼に渡してしまった時。

会社の経営はすぐさま破綻し、それでもサカキの援助のおかげでつぶれることは免れた。それはシルフカンパニー社に吸収されるという形で、だが。

ジンが犯人であるということはわからなかったが、サカキからの勧誘でのジンの実家からの失踪で身内には明らかになってしまった。

そんな折、ジンはとある事故に巻き込まれた。

それは彼がホウエンからカントーへと行くためにフェリーを使う為カイナシティまで来ていた時のことである。なんとフェリーが野生のポケモン達に狙われたのだ。

最近野生ポケモンによる人への被害が起きていることを知っていたジンはこれもその類の一つだとすぐさまわかったが、成す術がなくただただポケモン達の襲来をフェリーの中で震えながら見つめていた。

海からはホエルコやサメハダーの体当たりを受け、空からはペリッパーやエアームドが襲いかかってきた。

この事件は数多くあった野生ポケモンによる被害の中でも特に大々的に取り上げられた。その原因の一つにとある有名人の死が関係していたことによる。

そう、ニビシティジムリーダータケシの死である。

彼は野生ポケモン達の襲撃からフェリーを守るために戦い、その時に彼が持っていたフシギダネをジンへと託し一緒に戦ったのである。

「あの時、僕ははじめてポケモンを持った。それがお前だったんだよな」

何においても自分の兄を越えることができなかったジン。ポケモン自体はダイゴの手持ちと戯れたこともあったため慣れてはいた。

だがジンはポケモンを持つことでトレーナーとして差別されることを嫌ったのだ。

そしてジンがもらいうけたポケモンはオーキド研究所に預けられていたサトシのフシギダネである。あのマサラの悲劇があった時、ボックス制度に認証されていたサトシのポケモンを受け取ったのがタケシだったのだ。

そのタケシがサトシのポケモンを持っていたのは一つの理由があった。だがそれはまたいずれ。

「僕は逃げてばっかりだった。でも、ガイさん達に会えて変わってきたのかな？」

比べられるのが嫌だった。劣るのが嫌だった。

だから自分の故郷を去った。でも、それで変わることなど一つもない。でもガイ達と出会って最初の任務、そしてルカとミュウと出会い、ジンは少しずつ成長してきた。

「ふっしー」

これで三人目の主人を得ることとなったフシギソウは、でもそんなジンを受け入れてついてきてくれた。

「タケシさんが言っていたけど、君の前の主は本当に良い人だったんだね」

ジンはちょっと地面を見つめながら、フシギソウの両目を見つめる。

「その人に少しでも近づけるかな？　僕は……」

「ふっしふし」
「……ありがとう」
そうしてジンは立ち上がる。
ジン、モモ、ガイはそこで同時に立ちあがりお互いに目が合う。
「おうっ」
「へへ、やっほ〜」
「あ、あはは、ども」
そしてそれぞれに言葉を交わすのであった。

「ミュウ、あんたも粋な計らいするわよね」
「いいじゃない、別に。人間って本当にわかりあえない生き物だもの」
それはミュウが一番誰よりも体感していることなのであろう。
「人間と人間同士わかりあえない。それは人間とポケモンならなおさらよ。だからこそわかりあおうとする努力が大切なのよ……」

ミュウはそう吐き捨てるように言って、そのままアララギとマコモを置いてどんどんと階段を下りていく。

そんなミュウを後ろから見ながらアララギとマコモは保護者のような微笑みをもってして彼女の後をついていくのであった。

第十四章：人とポケモン　Ⅳ：わかりあう力（後書き）

さて・・・次ももう一話あるかなぁ・・・？w

ルカ「はっきりしてよ新年早々」

気分で書いているのでお楽しみにしておいてくださいw

では！

第十四章：人とポケモン　V：始動（前書き）

第十四章、このお話で終わりです。

折り返しているので物語はどんどん加速してまいります。

ルカ「はりきってゴー」

第十四章：人とポケモン　V：始動

小雨も降りやまろうとしている夕刻時、ミュウは一人研究室の窓から外を眺める。

アララギとマコモは二人でなにか変わった話題で盛り上がっていたが、ミュウにとってはどうでもいいことであった。

今彼女が思っていることは二つ。

サカキの野望に対する自分の取るべき行動。

そして、このイッシュで起ころうとしている事態への対処。

『難しいものね……。アノ人の野望は叶えられそうだけど、アノ人はイッシュに来るのかしら？　来たら厄介よね……。ならいっそ私の手で……？』

やたらと物騒なことを考えているミュウ。だがミュウはいろいろと感づいていた……。

あの孤島で過ごしてきた幾年もの間に人間の社会が変わることはあっても、世界は変わることがなかった。

だが今、時は満ちようとしていた。

昔自身を助けてくれたポケ人はこう言っていた。

『八柱力……こ……イッシュ、の……時が……る。わた……そ……

為の、代理……』

八柱力。そしてイッシュ地方のハイリンクを囲む、ヘキサゴン型に陳列する八都市……。

「ねぇ、アララギ」

ミュウはそこでアララギへと声をかけ、

「ん？　どうしたの？」

「あなたハイリンクへと行ったことはあるの？」

ハイリンク、恐らくはそこで何かが起こるのだ。そうミュウは考えていた。

「ハイリンクならマコモのほうが知っているんじゃない？」

「あ、はい。ハイリンクとは異世界へと通じるゲートだとあたしは思ってます」

異世界？

「異世界？　それはどういったものなのかしら？」

ミュウが初めて耳にする言葉。

考えてもいなかった。異世界。この国に異世界へと通じるものがあっただなんて。

「はい。すでに私達は異次元、異空間、異時間といった現象をギラティナ、パルキア、ディアルガというシンオウのポケモンから検証

できています」

ギラティナ、反転世界に棲むとされる伝説のポケモン。

パルキア、空間を司る神と呼ばれるポケモン。

ディアルガ、時間を司る神と呼ばれるポケモン。

「ですがこのイッシュには異世界、言ってみればパラレルワールド……並行世界への入り口があるとあたしは思っています」

並行世界。それはある世界（時空）から分岐し、それに並行して存在する別の世界（時空）のこと。

「そのゲートが開く条件は？」

「えーっと、それがまだなんですよね……。でも条件に空間と時間が関わっているのは間違いなくて、時間の方はあいまいですけどもうすぐみたいです」

マコモがあたふたとその研究資料を読み上げながら報告する。

『合致する。辻褄はあっている……』

ミュウはマコモからの話で一つの確信を持ち始めていた。

「でもどうしたのよミュウ、突然？」

アララギが怪訝そうにミュウに尋ね、ミュウは笑みを浮かべてこう発した。

「もうじきその異世界へのゲートが開くわ。きっとそれこそがアノ人の最終目標……」
「「え……？」」
ミュウは再び窓の外へと視線を戻し、そのビルから見える山岳を望む。
「なら、ここにいた方がよさそうね」
そう呟いて、ミュウはまた笑う。
『アノ人がイッシュを襲わなかったのはこの為なのね。合点がいったわ……』
イッシュ地方。
それは異種すぎるほどの交流を成しえた、極めて珍しい土地。

「ほらよジン」
「あ、ありがとうございますっ」

ガイから投げ渡されたスポーツドリンクの缶をジンは受け取る。
「そういえばさー、私達これからどうするんだろうねー」
「……知るかよ、んなこと」
ガイは空がどんよりと曇った中、ぱしゅっとビールの缶を空けてぐびぐびと喉をうるおしていく。
「っかー、うめぇ！」
いろいろともやもやが解き放たれたのか、ガイは心底満足げな表情でビールを飲み干していく。
ポケモン達との対話を終えた三人は、いまだこの庭園でたむろっていた。
「まあでもカントーには戻れなさそうだしね……」
「そうですね……」
そう、彼らはロケット団からはいわば追放された身である。というよりも死んだことにされているのであろう。
ミュウの捕獲などできるはずもない、そう高を括り三人を任務につかせた。その後連絡もしていないのだ、いまさらカントーの本部に居場所があるわけもない。
「ならここでどうすんだよ？　ここにロケット団の支部はないぜ？」
「むしろ好都合よ。私達が生きているだなんて知られるわけにはいかないもん」

それもそうだな、と言った風にガイは理解して缶を握りつぶしてゴミ箱へと投げ捨てる。

「再出発って言っていいのか？　つっても、俺達三人に再も何もあったもんじゃねぇけどな」

「それもそうだねー」

「はいっ」

人には言えない過去がある。

特にこの三人となればなおさらであろう。

「ってことは、僕達無職ですね……」

「「――――っあ」」

人のさりげない一言に、はっとしたガイとモモ。そう、確かにいままではロケット団という組織でシルフカンパニー社員として雇用されてはいた。だが、今は……。

「まあ、あれだな。ジム巡りってのも一つの手だぜ？」

「ええ～……バトルって面倒よ」

ガイが提案するもモモにすぐさま却下される。

「バトルっていう制度、あれなくなんないかな……」

モモはそこで密かに『実際殺る方が早くて楽なのに』と呟くのだが、二人には聞かれなかったようだ。

「と、とりあえず戻りませんか？」

ここでだべっていてもどうしようもない。そう思ったジンはそう切り出して屋上にある扉を開いて階段をおりていく。

「おいモモ、いくぞ」

「え～、だっこ～」

しゃがみこんで草をいじっていたモモは、そう言いながら首をふって両腕をガイへと伸ばす。

「てめぇは幼稚園児か！」

「ももぉ～がいくんの、だっこがいいのぉ～」

わざと舌ったらずな喋り方でモモがねだり始め、ガイはそんなモモにすこしばかりきゅんとなりながらもそっぽを向いてしまう。

「いいから行くぞ！」

幸いその表情をモモに見られることはなかったが、ガイはそれを紛らわすためにジンを追って階段を下りていく。

「んーいけずー」

すくっと立ちあがったモモは指先についた土や草を払い、そのままガイの後をついていく。

三人はそろって階段下りてすぐのエレベーターへと乗り、そのまま研究室のある階で降りる。

「あらら？　帰ってきたわよ」

すぐさま聞こえてきたのはアララギの声。

一人悠々とコーヒーを啜っているアララギの背後辺りでドタバタしながら駆けまわっているのはマコモ。ミュウにいたってもちょっと忙しそうに何かを探しているようにもみえる。

「マコモ、そこじゃないでしょ！」

「あわわ！　えっと、えっと～！」

しかも仕切っているのはミュウである。

「い、一体どうしたんですか？」

ジンが思わずアララギに尋ねると、アララギは口で答える変わりにコーヒーカップを掲げてみせる。

「あなた達の今後の方針を決めてるのよ。いえ、もう決まっているからその準備といったほうがいいかもね」

「じゅ、準備だあ？　もしかして職でもくれるってのか？」

ジンは焦ってはいないのだろうがガイとモモはすっかり良い大人である。自分達の食い分は自分達が稼ぎたいという理念が働いているのだろう。

「うーん、そうね。そうなるかもしれないわ。でもあなた達ミュウについていくことにしたんでしょ？　ならあの娘についていかなきゃね」

にっこりと笑って見せるアララギ。その表情からモモは嫌な予感しか読み取ることができない。

「あ、三人揃ったのね。丁度良いわ、こっちにきなさい」

ミュウに手招きされてガイ達はしぶしぶと足踏み揃えて歩み寄っていく。

真っ白く綺麗にされたホワイトボードに、バンっ！　と手を叩いてミュウは声を大にして告げた。

「これから私達は八柱力を探しにいくわ！」

それを合図にいそいそとマコモが裏でボードに絵を描いていく。

「八柱力？　なんだそりゃ」

「今からする話をちゃんと聞きなさい。そうすればわかるわ」

いつになく張り切った様子のミュウ。

それもそうだろう。今までいきてきた長い年月、ここまで体が昂揚する気分を味わうのが久しぶりなのだ。

「とりあえず私の話が終わるまで質問は一切禁止よ。おーけー？」

ここまでフランクになるものなのか、そう感じなくもないが彼女の話が終わるまでは静かにしていよう。

「この世界はポケモンを中心に成り立っている。神もポケモンである、その時点で人間との差は明らかよ。なにせ崇拝しているんだも

の、当然よね」

多少ムッとくるような言い方ではあるが、それがミュウなのだ。仕方がない。

「でもね、神のアルセウスも気まぐれで人間に特別を与えることがあるわ。その人間は微細なずれはあっても同じ時代に生まれるの。それを私達は八柱力と呼ぶ」

同じ時代。それはつまり昔にも前例があるということだろう。

ミュウはマコモの話を思い出しながら言葉を紡ぐ。

『あ、はい、そうですね。前例があるからこそあたしはハイリンクが異世界へのゲートだと推測しています。でも２０００年以上も前のことですから立証は難しいんです』

そうはるか昔に起きた出来事を語るのは難しい。それが２０００年も前となるとなおさらだ。

だが実際にイッシュにはこんな伝説が残っている。

英雄の伝説が。

なぜ他の地方は神話が残っているのに、イッシュは伝説なのか。

それはその時期にイッシュの異世界へのゲートが開いたからだと、マコモは言うのだ。

「イッシュの英雄伝説。それを裏付けていたのが異世界へのゲート。

つまり英雄は私達の世界の住人ではなかった」

つまり英雄は異世界からきたということである。

「まあそれはおいといて、その時にも八柱力という人物は存在していた。それがあんなにも理解不能な伝説を生んだのでしょうね。龍という表現も、異世界の人間のものなのでしょう」

ミュウはマコモが描いた六角形型のイッシュの簡易地図を指差す。

「八柱力は揃うべき空間にいる必要がある。それがこのイッシュの八都市。そこにこの国に散らばっている八柱力を探し出して揃える……開かれる時間までに」

ただ呆然と話をきいている三人は、それでも必死にミュウの話についていく。

「あなた達三人には散らばっている八柱力を探し出してこのイッシュにつれてくること。それがあなた達の新しい任務よ」

「「「……え？」」」

ミュウは意気揚々と右腕をびしっと伸ばして三人に人差指を向ける。

「さあ、行ってきなさい！」

ガイ、モモ、ジンの新しい旅がはじまろうとしていた……。

第十四章：完

第十四章：人とポケモン　Ｖ：始動（後書き）

えっとですね、自分の妄想ですすみません；；；

ですがハイリンクとか面白い機能ですよねｗ　ＤＳならではの面白い遊び方ですｗ

まあ自分は話を飛躍させていますが、気にいっていただけると幸いです。

ルカ「じゃねー」

第十五章：ホウエン奪還計画　Ｉ：攻略！トクサネジム（前書き）

さて、これでどうやらメディター９９話目になるみたいです；；；

実感なんてないんですけどね、あはは；；ｗ

第十五章は大人たちがいろいろと暗躍いたしますので、お楽しみにｗ

では、どうぞ

第十五章：ホウエン奪還計画　Ⅰ：攻略！トクサネジム

まだ実感として何かを掴んだわけでもないし、何かを得たわけでもない。

でも確実なる時は過ぎていったのだけは実感している。

ホウエンに着いてから、もう一週間。連日連夜の特訓……それは俺とポケモン達にとっては喜ぶべきことなのだろう。だが俺は、不完全燃焼になりかけ寸前であった。

ただポケモン達のバトルをじっと見ているだけ。

なんの指示を出すことも無く、ポケモン達が自分達で自発的に戦う本能のバトルをただ観察すること。それが俺に与えられたここ一週間の特訓だった。

そんな訓練の中、俺は自分のポケモン達をはじめて客観的に診た気がした。それこそルカじゃないが、こいつらの動きの一つ一つが鮮明に脳へとインプットされる感触に襲われたんだ。

だがそれを検証することは叶わなかった。

バトル禁止。

バトルを極めることを求める者に与えられたこの苦行はしかしとんでもない効果を発揮することになる。

だけど今の俺にはそのことを感触として実感することはまだでき

ない。まだできない、ということで今からできるといった方がいいのかもしれない。

なんせ今日は初のジム戦なんだから。

あの爆発のあった日、俺とアンズはダイゴさんをいろいろと問い詰めた。

もちろん俺はサカキから電話があったことを話したが、どうやらやっぱりダイゴさんはお見通しだったようだ。

「悪いなケン、だがこれであいつらにも動きが出てくるだろう」

俺とアンズが入ったミーティングルームのような談話室には全員が集結しており、皆が皆神妙な面持ちをしていた。

つまり俺とアンズが出ていた間に、また何かの話がされたということだ。

「お前達はこれから一週間、ここから出るな」

「なっ？！」
「え？」
ダイゴはにっと笑い、ぽんっとアンズの頭と俺の肩に手を置く。
「一週間、日替わりで毎日訓練だ。その後、ケンはここのジムを攻略……バッジを手に入れたらすぐさま出発だ」
一週間、ジム戦、出発。
この三つの単語が何を意味成すのか、俺にはわからない。
だが確実にダイゴさんの野望へと近づく為のプランであることは疑いようもない。
「わかりました」
「……はい」
俺は表情を押し殺してそう頷き、アンズは最初は渋った表情をしながらも承諾したようだった。
「そうか。頼むぞ」
そう言い残してダイゴさんはマサキさんやミツルさんと何かの会議に移ったようであり、俺とアンズはエリカさんに先導されて自室へと戻っていった。

ホウエン地方　トクサネシティ：

ここ一週間、確かに島内では少なからず動きはあった……らしい。

俺は外へと出ることはできなかったがカンナさん達からの話から知ることができた。

アンズと一緒にいられる時間が増えたのはよかったが、状況が状況だ。そんなに気を緩めることはできないし、アンズもジムリーダーとして俺の指導に専念していた。

何も不服や不満があるわけじゃない。

でも思うんだ。

このままでいいのかって。いいんだろうが、それだけじゃ駄目な気がするんだ。

でもそれを確かめる手段も算段も今の俺は持ち合わせてはいない。だから今は自分の役目に集中するしかないんだ。

俺は必ず勝ってみせる。

「緊張してない、ケンくん？」
「ああ、大丈夫さ。それよりアンズはいいのか？」
「うん。準備は完璧だし……ケンくんのバトル見てたいから」
「……そっか」

今俺とアンズはトクサネジムの前へと来ている。

トクサネジム、それは数ある地方のジムの中で唯一ジムリーダーが二人組という異質なジムであることで有名だ。

故にバトル方式はダブルバトル。

二人一体となった相手を自身は一人で対応しなければならない。その壁を超えることでよりポケモン達との間に更なる信頼関係と強みを得ることができる。

「やあいらっしゃいチャレンジャー。ぼくはフウだよ、よろしくね」
「やあいらっしゃいチャレンジャー。わたしはランだよ、よろしくね」

ゲートをくぐるな否や、俺達の目前には手をつないだ双子がそう挨拶してきた。

年は俺よりはるかに下。いや、そう見える。

おそろいの服を着た彼らは細部こそは違う着飾りをしているが、顔は本当に瓜二つ。発する音声も見事にハモっており、ここまでのシンクロ率を見せつけられるのはいささか調子がくるってくる。

「ミハヤ　ケント、ここのマインドバッジをいただきにきたぜ」
一応言っておくがアンズも俺も変装している。まあ偽名もその一環だ。
ただジム戦を受ける時トレーナーは自身のトレーナーカードをジムに登録しなければならないという規則があり、それによって審判がトレーナーの情報を協会に登録・更新することによりトレーナー達の現状を確認している。
だから偽名を名乗ることは原則不可能なのだが、ダイゴさんの渡してくれた専用ポケッチにはミハヤ　ケントというトレーナーカードが新たに登録され、これを使っている限り俺の正体はばれないといわれた。
正直あやしいもんだが、今はこれを使うしか術はない。
だからあんな格好して写真なんか撮らされたんだろうが……。
「こんにちはミハヤ　ケント」
「早速こちらへ、バトルをはじめましょう」
さすがは双子、以心伝心もお手の物なのだろうか。二人の言語は途切れることなくそのまま一文として俺の耳へと入ってくる。
アンズは俺の後ろで両手を重ねて心配そうな表情を向けていた。
「大丈夫さ、行ってくる」
「う、うん。頑張ってね、ケントくん」
「……ああ」

ケントくん、か。

俺は含み笑いを浮かべながらアンズと別れ、バトルステージへと向かって行く。

「それではこれよりチャレンジャー対トクサネジムリーダーフウとランのジムバトルをはじめます！　ルールはダブルバトル。使用ポケモンは二体です、よろしいですね？」

「ああ、問題無い」

審判の確認に俺は頷いて見せた後二つのボールを右手に握る。

「楽しみだねラン」

「そうだねフウ」

フウとラン。

エスパータイプの使い手であり、ダブルバトルのエキスパート。

「頼んだぜニューラ、キュウコン」

「ニュラ」

「コン」

なら、エスパーに耐性のあるこの二匹にはもってこいってことだ。

「いってくるんだルナトーン」

「いってきてソルロック」

出てきたポケモンはルナトーンとソルロック。月と太陽を象った

形をしている二匹のポケモン。たしかタイプはそれぞれに岩・エスパー……。

相性はこっちに分がありそうではあるな。

「バトル、スタート！」

審判のコールと同時に、俺はチャレンジャーとして与えられる先手を打たせてもらう。

「ニューラ、【眠る】！　キュウコンは【瞑想】！」

一週間、ただ指をかじって観察だけしてきたわけじゃない。いろいろと試したかった戦法……このジム戦でいろいろと試させてもらうぜ。

「ラン、彼はどうかしてるのかな？」
「フウ、私も同じことを考えてたよ」

二人が何かを呟いてはいるが、俺には良く聞きとれない。まあ何を言っているかは大概予想はできるけどな。

「ルナトーン、【目覚めるパワー】」
「ソルロックは【岩雪崩】」

【目覚めるパワー】……それはポケモンによってタイプが個別にわかれ、威力も別れると言われている技。これを見極めることこそポケモンマスターになる為の近道と言われるほどまでに、見極めが難しい技である。

なぜならば【目覚めるパワー】は、それ一つで戦況をひっくり返すかもしれない程の威力と効果を持ち合わせている。つまり使われてはいけないのだ。

それを相手のポケモンを見ることだけで判断できなければ試合に支障をきたす。

しかし初っ端から使ってくれるのはありがたい。

「ニューラ、【寝言】」

一般的に寝るという行為は自然界の中では自殺行為に等しいとされてはいる。だが眠ることによって得られる代償は多い。

手っ取り早く言うならば眠る特権の一つが回復。それは体力の回復だけにとどまらず、思考力や集中力も含まれている。

しかしポケモンバトルに使われる【眠る】はポケモンを仮眠状態、つまりレム睡眠へと誘う。ＲＥＭ、Ｒａｐｉｄ　Ｅｙｅ　Ｍｏｖｅｍｅｎｔの略であるレムはポケモンでも人間でも夢をみやすいとされる状態のことだ。

それは眼球が夢の視点を追って反応しているからであり、その時は外部から脳へと伝わる情報が反映されやすい。

「キュウコンは【日本晴れ】！」

人間では不可能なことをポケモンは実行できる。

つまりレム睡眠時ポケモン達は本能で動けることが可能であると

いうことだ。その時の彼らの身体能力は微妙にだが向上する……後はいかに夢と現実を近づけさせるか。

だから俺はニューラに試合開始直後のイメージを鮮明に残させる練習をしてきた。空間と敵を認識させることで、睡眠時に敵を倒す夢を強制的に引き起こさせる。そうすることにより【寝言】で発動する技をより限定させる。

キュウコンがフィールド上に疑似太陽を形成する前にニューラの【寝言】から発動した【雪雪崩】がルナトーンとソルロックの攻撃を防ぐ。

どうやら【目覚めるパワー】のタイプは格闘みたいだな。

俺もまだそんなに見極めは得意な方じゃない。発動されてみなきゃわからない。

「こちらの手持ちを研究しているね、彼」

「そうだね、でも負けるわけにはいかないよ」

フウとランが何かを囁き合い、それを合図にルナトーンとソルロックが散開する。

「逃げても無駄だぜ」

だが、まさか俺の手持ちがこうまでここのジムのアンチ型になるとは思ってもいなかった。

なぜならばニューラは悪タイプ。相手のエスパー技は効かないし、炎タイプの技はキュウコンの貰い火でカヴァーできる。

だから心配しなければならないのは相手の岩タイプのみ。

けど【日本晴れ】が成功した今、それもあまり脅威ではない。

このまま決める。

「ニューラ、【寝言】！　キュウコンは【ソーラービーム】！」

それに相手の【催眠術】も今のニューラに決まらない。

ニューラは両目を瞑った状態でありながらも氷を両手に纏いながら疾走する。【氷の礫】だ。

そして接近していくニューラのフォローにキュウコンの援護射撃が相手の二匹の間へと割って入る。そうすることで相手のポケモンを引き離す。

フウとランは何も指示を出すことなく、動じることなくただただ戦況を見守っていた。

ぞわっ！

な、なんだ？

刹那、俺の背筋を嫌な感触が迸った。

この感覚は……。

「止まれ、ニューラ！」

しかし俺の咄嗟の叫び虚しく、ニューラはソルロックに襲いかかっていた。

「まずは一匹目」

「まずは一匹目」

そこでフウとランはお互いににっこりと笑いあい、そう呟いたのであった。

第十五章：ホウエン奪還計画　Ｉ：攻略！トクサネジム（後書き）

久しぶりにバトルを執筆したので何かと読みにくいかもしれません；；

フウとラン、自分は必ずポケセン送りにあいましたねー初見は；；；

でもかわいいから許します。

第十五章：ホウエン奪還計画　ＩＩ：決着！トクサネジム（前書き）

さて、記念すべき１００話目なのですが……特別なことはないです；；

ルカ「えー」

それよか遅れてしまい申し訳ありません。今週末検定試験があって；；

それではお楽しみください。

第十五章：ホウエン奪還計画　ＩＩ：決着！トクサネジム

「「【サイコウェーブ】」」

トクサネジムリーダーのフウとランが同時に発した命令……それは一人特攻していったニューラに対するものではなく、ピンポイントにキュウコンを狙ったものだった。

「戦いの鉄則はなんだいラン？」

「それは敵勢力の孤立化だよフウ」

ダブルバトルにおいて厄介なのはどちらかの手持ちが先にやられてしまうということ。

二対二から一対一ならまだしも、二対一へと戦況が転じるのは言わずもながにまずい。

「キュウコン、【妖しい風】！」

だが抵抗虚しく、不意をつかれた俺とキュウコンはあらがえるはずもなかった。ジムリーダーに先手を打たれたのだ……そうそうに覆せるようなほどの力量を俺は持ち合わせてはいない。

【サイコウェーブ】による念動波状攻撃を諸にくらったキュウコンはその場に崩れ落ちる。

「キュウコン！　くそっ！」

恐らくキュウコンは頭を直接狙われたのだろう。

ソルロックとルナトーンはキュウコンを挟んだ状態で攻撃を仕掛けてきた。そして技の発動のタイミングをわずかにずらしたのだ。

そうすることにより波状となった念動力が交互にキュウコンを直撃、頭部を小刻みに揺らした。

「大丈夫だよ、ポケモンは人より丈夫」

「当分は目を覚まさないだろうけどね」

双子のジムリーダーに宣告され、俺はギシっと歯ぎしりする。

そう、キュウコンは脳を揺さぶられて昏倒したのだ。

「キュウコン戦闘不能！」

審判が旗を揚げ、俺のキュウコンが瀕死状態であるとジャッジする。

俺の残るポケモンはニューラ一体。まあ一見眠り状態で無傷な二対を相手にするっていうんだから不利以外のなにものでもないよな。

「それじゃ決めよっかラン」

「そうしようかフウ」

お互いにお互いの手を会わせてそう呟きあうジムリーダー。そして彼らに呼応してソルロックとルナトーンがその場で高速回転しだす。

今ニューラは俺から一番遠い場所にいる。つまりは後ろに残って

いたキュウコンを相手が狙った為、ジムリーダー側にニューラが……俺の近くにソルロックとルナトーンがいるという状態だ。

ポケモンバトルにおいてポケモンに指示を出せないという状況……それもまたバトルにおいては致命的となる。そしてそれは追々にして戦法としても成り立つ。

「ソルロック【炎の渦】！」
「ルナトーン【スピードスター】！」

自分達の周りに技を展開させるソルロックとルナトーン。

自分達の存在を最大限にアピールするかのような技の魅せ方に、俺はいつぞやテレビでみたポケモンコンテストの内容を思い出していた。

燃え盛る太陽の如きソルロックと流星纏いし三日月の如きルナトーン。どれほどまでに美しいかは、一番間近で見ている俺にはわかる。惚れ惚れする。

だけど何もしないで見ているわけにはいかないんだよ。

「ニューラァ！　【寝言】！！」

俺は精一杯の声で叫ぶ。

眠っている間のあいつの弱点は耳が遠くなること。いくら夢と現実を両立しているとはいっても器官機能の低下は免れない。

つまり諸刃の力を得ているとはいえ、指示がなければ本当に眠っ

ているだけなのだ。

それにこれだと相手にどんな対処法をされるかばれないからな。

巨大な火の玉と化したソルロックは回転しながらニューラへと飛来、突撃してくる。

それはまるで地面と平行に発射された大砲の弾のように、空気を重くも力強く裂きながら進んでいく。

一方のルナトーンは纏った【スピードスター】を時間差を利用しながら次々と飛ばしていく。決して外れないとされるこの攻撃を徐々に確実にすべてあてにいこうというのだ。

その光景を後ろから直に眺める俺は、なるほど……敵側から見てみるっていうのも新鮮だな、と呑気に考えていた。

俺は指示を下した。

後はあいつを信じるだけさ。

ニューラは目を瞑ったまま動こうとせず、じっとただ構える。

「これで決まりだねフウ」
「これで決まりだねラン」

勝利を確信したのだろう、ジムリーダー達に余裕の笑みが生じる。しかしそれと同時に俺自身も彼ら同様に微笑んでいた。

ソルロックの特攻がまさにニューラにダイレクトヒットしそうに

なった時、ニューラがその両目を見開いて地面に転がったのだ。

いや転がったというのは表現がおかしいか。

地面と水平になるようにして身を捩じらしながら、ソルロックの方へ向って跳んだのだ。ソルロックと地面の間に生じたスペースに割り込むようにして。

「【メタルクロー】！」

そしてすかさずソルロックに攻撃を与えるヒット&アウェイならぬ、クロース&ヒットってな。

標的が自分の下をくぐりぬけ、どてっぱらに一発喰らうことでソルロックはバランスを崩した上に意表をつかれて困惑する。

その間にもニューラは飛び退いた方向のまま地面を滑走、【乱れ引っ掻き】でルナトーンの【スピードスター】を弾きながら接近していく。

この一週間で俺がとにかく驚いたこと、それはニューラの身体能力の向上にあった。

いままでとは違った力強い走りと体の滑らかさ。それは本来のニューラが持つプラスな部分を更に特化させたといっても過言ではないほどまでに、ニューラの成長は著しかった。

何があったのかは聞かされてはいないがカンナさんがどうやらニューラに指導してくれたらしい。さすがは氷のエキスパートといったところなのだろう。

「ルナトーン、かわして！」

予想だにしていなかった展開であったのにもかかわらず、そこはジムリーダーといったところか。迅速な対応もあって、ルナトーンは【スピードスター】を討ちつくすとそのままニューラから距離を取ろうとする。

だが、素早さで言うならばニューラのほうが一枚も二枚も上手だ。そう簡単には逃がさないぜ？

「ニューラ、【氷の礫】！」

地面を蹴る右足に力を入れての急加速、一気にルナトーンとの距離をつめたニューラが右手に纏った氷塊を豪快にクリーンヒットさせる。

威力は低くともあの加速に交えての効果抜群攻撃だ。効いてないとは言わせない。

「もう一発喰らわせてやれ！」

「にゅらっ！」

軽やかなバックステップをフェイントにいれつつニューラは再度ルナトーンへと踏み込んで【氷の礫】を決める。

ルナトーンは片目を顰めてふっ飛ばされるも体勢を立て直す。

「これじゃ二匹ともあの子のペースに巻き込まれてしまうね」

「うん、そうだね。それじゃあれいっちゃう？」

見ればソルロックも臨機に戦況に応変していた。

「ルナトーン、【催眠術】と【夢喰い】」

今ニューラはルナトーンとソルロックの間に存在している。

もし相手の【催眠術】をソルロックに当てることができれば……。そう思っていた矢先、ニューラも同じことを考えていたのだろう……体勢を低くして【催眠術】を見切ろうとする。

予感が的中したのか、読みが当たったのか、ニューラはルナトーンから放たれた催眠波を意図も容易く避ける。

いや、これは、避けたというのか……？

そう俺が思ったのに数秒と時間はかからなかった。なぜなら、ルナトーンの【催眠術】は最初からソルロックへと放たれたような軌道を描いたからだ。

おいおいまさか味方に技をかけて体力を回復するっていうのか？

眠ってしまったソルロックからは闇色の靄が生じて、それは引きこまれるようにしてルナトーンに吸収される。

「ちっ！　ニューラ、ソルロックに止めを刺せ！」

状況はあまり著しくない。もしソルロックを捨て駒にしようとしているのなら、戦力を削がなければならない。

まだ体力が残っているのなら、また同じ手を喰らいかねない。その前に叩く。

ニューラはルナトーンが回復し終える前に距離を取り、ソルロックへと駆けていく。くそっ……ニューラの体躯じゃフィールドの端と端を行き来するのは時間も体力も浪費するな。

しかしながら俺は変な違和感に囚われつつあった。なぜ今の段階で体力の多く残っているソルロックからルナトーンは体力を奪ったんだ？

なぜ？

ルナトーンにあってソルロックにないものがあるのか？

それはタイプや技の有利性から来ているのか？　そもそも俺はあまりホウエンのポケモンには慣れていない。ただ両方が岩タイプでエスパータイプであることは知っている。

けど……技までは……。

そこでふと、俺はジムリーダー達の表情を窺う。二人はほくそ笑んでいた。

罠？

「ソルロック【大爆発】」

二人の内のどちらが言ったのだろうか？　しかしその唇の動きを俺は読みとっていた。そしてその指示はニューラがソルロックにま

さに襲いかからんとしていた瞬間であった。

激しい閃光と爆発にニューラは一瞬にして取り込まれ、爆音が追って轟く。

「ニューラ！」

爆風と風塵によって吹き飛ばされたニューラが背中から地面へと激突する。

「ソルロック、戦闘不能！」

そこで審判のジャッジ。

ってことは、まだニューラは……！

俺は咄嗟にニューラの様子を確かめる。わずかにだがまだ戦える。戦えるよな？

「にゅ、らっ！」

弱弱しくも両足に力を込めて立ち上がるニューラ。俺達に取り残された術は、やっぱりあれしかないか……。

ルナトーンの体力は万全。こっちは瀕死間近。まさかダブルバトルで【大爆発】を使うなんて、さすがはジムリーダーといったところなのか。いや、にしてもとんだ派手さだったな……。

「ニューラ、【氷の礫】！」

「同じ手は何度も喰らいませんよ？」

こっちの特権である素早さは、しかし先読みされてしまえば格段にその魅力を落としてしまう。だからこそ、そこに漬け込むしかない。

ルナトーンは宙に浮きながら、ひょいひょいとニューラの攻撃をかいくぐる。向こうがエスパータイプでよかった……特殊攻撃技による決定的な反撃を受けることはない。

「ねえねえラン、中々に予想外な展開だったね」
「そうだね、これでラン達も勉強になったね」

俺を倒すこと前提かよ、などと思っている余裕を俺はその時持っていた。まあ、それだけのことなんだよ。俺にとってもな。

「ニューラ、【シャドークロー】！」
「ルナトーン、【ストーンエッジ】です！」
「ニューラ、【守る】！」
「ルナトーン、【岩落とし】！」

考えてもいなかった。トレーナーを二人相手にするということがこんなにも脳を苦しめるものだとは。

俺が攻めたらフウが防御の対策を、俺が守ればランが攻撃の手段を……役割を分担し、それに専念するからこそこの二人は強いのだ。

けど負けてられない、力押しでもなんでもここで負けるわけにはいかないんだ！

ニューラは落下してくる岩塊を辛くもよけながら少しずつルナト

ーンに攻撃を当てていく。

「さすがにしつこいね」

「侮りすぎていたね、例えあのニューラが種族一だとしても……あの身体能力はおかしいよ」

そりゃそうさ、俺のニューラは特別なんだからな。

そう、俺はその時気がつかなければならなかったのだ。ジムリーダーが指摘したニューラの異常さが、本当に異常であるということに……。

「決めろニューラ！　【冷凍パンチ】！」

ルナトーンの顔面を捉えたニューラ。ダメージはそれなりだったのだろう、ルナトーンは倒れジャッジのコールが試合終了を宣言した。

「負けちゃったねラン」

「負けちゃったねフウ」

その後、俺は無事マインドバッジを手に入れた。

自分の手の中で輝くバッジの光は、しかし鈍く輝く。そう、この試合は醜かった。俺の戦い方は、ただニューラの身体能力にかまけただけの、ただの力押しでしかなかったのだ。

そう思うと、そう思えば思うほど、俺はバッジを力いっぱいに握りしめていた。

「ケントくん……」

アンズの気にかけてくれる言葉は俺の耳にまで届かない。

俺は、どうしちまったんだ？

第十五章：ホウエン奪還計画　ＩＩ：決着！トクサネジム（後書き）

若干長めなのと全体的に読みにくく感じるのは、まあ第一人者の視点で考えていることを表現したらこうなるのかなーなんて考えてのことです。

ルカ「言い訳にしかきこえないよねー」

うぐっ；；；

ま、まあ、これでケンはジムバッジを獲得したので次話からはいよいよ大人達が活躍しますｗ

ルカ「お楽しみにー」

第十五章：ホウエン奪還計画　「裏」：ホウエンの赤と青（前書き）

「裏」です。

それだけです。

ルカ「では、どうぞー」

第十五章：ホウエン奪還計画　「裏」：ホウエンの赤と青

ケンがトクサネジムでフウとラン相手にバトルしていた間、ダイゴ達はすでに動いていた。

ケンとアンズを見送った後、ダイゴはカンナとエリカをひきつれて海を渡っていた。

トクサネシティ本島の西へとのびる１２４番水道。カンナのラプラスに三人で乗り込み、悠々と目的地へと進んでいく。

普通のラプラスであれば成人三人を乗せることは不可能であるが、カンナのラプラスは普通ではない。平均的なラプラスより一回り大きいが為可能なのであり、それゆえに四天王カンナの切り札として君臨している。

「ですがやはりまだ寒いですわね」

白いファージャンパーと耳あて、手袋といった出で立ちのエリカが両手をこすり合わせながらそう呟く。

「これがいいんじゃないの。私の実家の方なんてこれより寒いわよ？」

今日は機嫌が良いのだろうか。普段のびしっと決まったスーツ姿ではなく、ラフなバロックコートに身を包んだカンナは白い息を嬉々として吐く。

「そんなことより、あとどれくらいかかる？」

一番後ろの方に座っているダイゴは今にも吐き出してしまいそうな、顔色の悪い表情で尋ねる。

ダイゴに至っては服装こそあまり変わっていないが、髪をオールバックに固めてサングラスを着用していた。

「ダイゴ、あんた船酔いするんだったらするで先に言っときなさいよ」

呆れた感じの声でカンナが嘆息し、「大丈夫ですか？」とエリカはダイゴの背中を優しく擦る。

「ポ、ポケモンなら大丈夫だと思って……うぷっ！」

「ちょっと、ラプラスの上で吐かないでよね！　殺すわよ！」

口元に手を当てて逆流する嘔吐物を必死に抑えるダイゴに、カンナは容赦なく罵倒を投げつける。

それは、まあ自分のポケモンの上で誰も吐かれるのは嫌であろう。嫌の他になにがあるのか疑問でもあるが。

「まあまあカンナ。もしそうなった時はダイゴさんを蹴落とせばいいだけですし」

そしてダイゴの背中をさすっていたエリカはさりげなくそんなことを呟き、今にも吐き出そうとしていたダイゴが違った顔色の悪い表情になる。

「だから我慢できますよね、ダイゴさん？」

「……あ、あぁ、も、勿論だ」

気のせいだろうか、背中をさすってくれているエリカの手にやけに力が込められていると感じるのは……。そうダイゴは内心冷や汗をかきながら、自分の体で起こっている生理現象と戦い続ける。

国の中でも温暖なホウエン地方であっても、二月である。陽射しが燦々とまではいかないがぽかぽかと感じるような天候でも、海はまだ冷たい。というか凍える。

そんな中に落とされでもしたら、まあ寒さ以前におぼれ死んでしまうのだろうが……。

「あ、見えてきたわよ。あれがアジトね……」

カンナはラプラスの首元にまたがるようにして座っており、自身のポケッチで地図を参照にとある岩盤を指差す。

そう、この三人が目指していたのはホウエン地方で様々な活動を起こしているアクア団のアジトであった。

ホウエン地方が一番最後までロケット団の支配下になるのに時間がかかったのは彼らにも一因ある。

ダイゴの必死の時間稼ぎもそうだが、ホウエン地方にはアクア団とマグマ団という二つの組織が存在していた。ロケット団と似通っていると言ってしまうと語弊が生じるが、この二勢力がロケット団侵攻の時に一時結託し抵抗にうってでてきたのだ。

結局はサカキの綿密な計画の前にこの二大勢力は太刀打ちができ

ず、ダイゴにも時間稼ぎとして利用されて終わったのだ。

さすればなぜ今更ダイゴ達はアクア団のアジトへと向かうのか？

「ですが、上手く協力を得ることはできるのでしょうか？」

「まあそれは実際行ってみないとわかんないだろ」

そうダイゴはアクア団に協力を仰ごうとしていたのだ。自身がチャンピオンを務めていた時は目の上のたんこぶであった組織であったが、今は同じ追われる境遇にある。ロケット団には協力はしていないだろう、というのがダイゴの読みであるのだ。

「ほら、着くわよ」

一見なんの変哲もない岩盤の一種であるが、よくよく見ればそれが人工的につくられたものだというのがわかる。

そもそも周りが似たような岩盤で埋め尽くされている為に、本島に場所が特定できていなければ辿りつくこともできない。

それをダイゴが知っていたのは、彼がチャンピオン時代にアクア団と対立し念入りな調査をしたからこそなのだが。というか一時本人がアクア団に入団していた経緯があるのだが、それが真実なのかは誰も知らない。

「おお、ここだここだ。懐かしいな」

ダイゴはラプラスから下りて、すたすたと平らな岩盤の上を歩いていく。

「海こそが偉大なり、母なるは海、全てのはじまりは海よりなりし」
合言葉によるパスワードなのだろうか？　ダイゴが囁いた台詞に反応して岩盤の一部が海底へと下がっていきラプラスの前に中へと入る水路ができあがる。
「よっと」
近づいてきたラプラスに再度ダイゴは飛び乗り、そのままアジトの中へと進んでいく。
「あんた、チャンピオン時代いろいろと奔放してたみたいだけどあの噂本当だったの？」
「ん？　なんのことだ？」
にへら笑いを浮かべるダイゴに、カンナは諦めたのか追求することなくそのままラプラスの首元を撫でてやりながらアジト内部へと進行していく。
「だ、誰だ！　ここを我々アクア団のアジトだとしっての暴挙か！？」
アジト内部は船が碇泊できるような中規模なスペースが存在しており、壁は岩盤であっても内部はすべてが鉄鋼で設えられている。
碇泊場の管理と見張りを担っていたであろうアクア団の新人団員が声を張り上げてダイゴ達に忠告するが、ダイゴは毅然とした態度でラプラスの上で立ち上がりこう告げた。
「アクア団団長、アオギリにお目通り願いたい！　俺はダイゴ、ツ

ワブキ　ダイゴだ！」
「え、えぇ？！　あ、あの、指名手配中のチャンピオン？！」
さすがの団員も驚きを隠せないのだろう、意外な人物の登場の対処にどうすればよいのかわからずあたふたとしだす。
すると天井に取り付けてあるスピーカーから渋い男の声が響き渡る。
「私の部屋まで丁重にご案内しろ」
「は、はひぃ！　了解しましたアオギリ様！」
アクア団独自の敬礼をすると共に、その団員はダイゴ達の顔色をうかがうようにしながら彼らを案内する。
カンナとエリカはアクア団のアジトに行き協力を仰ぐことまではきいていたが、その手段が正面突破だということまでは知らなかった為今はおとなしくダイゴの後ろをついていく。
「ねえカンナ」
「ん？」
「秘密基地ってなんだかわくわくしますね」
「お前も緊張感ゼロかよ……。はぁ……」
「どうかされました？」
「いや、なんでもない」
自分自身がこの中では一番の常識人だという認識を持ち合わせているカンナは気苦労が多そうだ。
一方のエリカは目を輝かせ、いかにもというアクア団のアジトっ

ぷりの内装を満喫していた。

「こ、ここであります！」

いくつものワープ装置を得て、団員はダイゴ達をとある部屋のまで案内した。

「ご苦労さん」

「い、いえ！　それでは失礼するであります！」

まだ入って間もないのか、それともダイゴという人物を前に緊張しているのか、恐らくその双方であろうが新人団員はそのまま一礼してそそくさとワープ装置を使って退場する。

「入ってくれ」

先ほど聞いた声がスピーカーから洩れると共に三人の前にあった扉が横に開く。

扉の奥に設置された重厚なテーブルに両肘をついたダンディな男が鎮座していた。丁寧に剃られた無精髭が似合う恰幅のある男、それがアクア団団長アオギリ。

「久しぶりだな、アオギリ」

「貴様もいろいろと大変だな、ダイゴ」

不敵な笑みを浮かべあう二人。この二人の過去になにがあったかは定かではない、というよりも今ここでは語らないでおこう。

「ここまですんなり通したってことは、わかって通したってことで

いいのか？」
「ふん、まあな。私もこのままで終わるつもりはない」
カンナとエリカはそんな会話を織りなす二人を背後から見守り続ける。
「もうマツブサとも話はつけているのか？」
「やっぱりそこまでお見通しなわけか？」
「貴様ともあろう奴が、この私だけに協力を要請するとは思わんでな。お前はそういう奴だ、昔も今もな」
アオギリはそう断言すると共に両手を宙へと浮かせる。
「なら話は早いな。俺達の持っている情報を譲る」
「その代わり共同戦線でホウエンを取り戻す、と？」
「その通りだ」
昔アオギリとダイゴの間になにがあったのか。しかしお互いに敵視しながらも、どこか通ずるものがあるのだろう。
「すんなりと行きすぎて逆に怖いですね」
「そうね。まあカスミ達もうまく行っているといいけど」
そう、他のメンバーは今マグマ団のアジトへと赴いている。
ダイゴが行おうとしているホウエン奪還計画、それはアクア団とマグマ団と共同戦線を展開することにあるのだろうか……？

トクサネジム：

「ハヤミ　ケント、君は強いね」

「その強さがこれからも磨かれることを切に願っているよ」

マインドバッジを渡したフウとランは最後にそうケンに言葉を贈る。

「ああ、ありがとな」

そしてその後二言三言かわし、ケンとアンズはジムから出ていった。

フウとランはケンがなにか後ろめたい気持ちと共に何度か双子に何かを言いかけて止める。そう、彼は双子の運命を慮っていたのだ。しかし審判が睨みをきかせており、ケンはアンズに引っ張られながらジムを後にした。

二人を見送ったフウとランはそのまま試合を仕切った審判に労いの一言をかける。

「いえいえ、それでは手続きへと参りますか」

審判はフラッグを放り投げ、ボールを取り出す。

「手続き？　ああ、そうか僕達は負けちゃったんだよね」
「そうだったね、それで手続きはどうするのかな？」
フウとランがお互いに首をかしげる。
「手続きはあなた達の命を以て完了しますよ！　行け、トドゼルガ！」
今や全てのジムの審判がロケット団員となっている。つまり、フウとランもここで――――。
「見て見てラン、このトドゼルガ……やりがいがあるね」
「そうだねフウ。頑張ってねネンドール」
すかさずランがネンドールをボールから呼び出す。
「な……。他のポケモン達はまだ治療中だったはず！」
ジムリーダー達はジム戦で使うポケモン以外はジム内の保管庫、あるいは専用の治療室にて体力の回復を行っている。その為、このロケット団のいうところの手続きは難無く行われているのであるが……。
「下っ端は下っ端らしく、地面に這いつくばって雑草でも食べてればいいよ。ね、ラン？」
「自分が自分の上司を知らないなんて、あの組織もこれだから面白いよね。ね、フウ？」
両手を握りあい、にやっと妖艶な笑みを浮かべる双子ジムリーダ

ー。

「ど、どういう……」

自分の状況を逆に理解できなくなった審判（ロケット団員）は奇妙な双子を目の前に後ずさりはじめていた。

「「ネンドール、【破壊光線】」」

そして一閃の光線が審判とトドゼルガを飲みこみ、それはジムの壁をも貫通して虚空の彼方へと消えていく。

強烈な熱線はなにもかもを焼き尽くし、塵すら残さない。

「僕達がロケット団の幹部であることを彼は知らなかったみたいだね」

「構わないよ。それよりもサカキ様のロケットを壊した犯人を捜しにいかなくていいの？」

そう、フウとランはロケット団の団員であると共にレイハと並ぶ幹部であったのだ。

「そうだね、でも今は一緒に最後の時を過ごそうか」

「そうだね、もうここともお別れだものね」

そうしてフウとランはお互いに顔を近づけさせて、長い口づけを交わすのであった。

第十五章：ホウエン奪還計画　「裏」：ホウエンの赤と青（後書き）

実際はダイゴ達のお話で終わろうとしたんですが、微妙に空いたのでフウとランの話を。

と思ってたらちょっと長くなってしまいましたが；；

皆さまの心配通り、フウとランは……w

ルカ「それじゃあまたねー」

第十五章：ホウエン奪還計画　ＩＩＩ：自分の守れしもの（前書き）

最近また冷え込んでまいりました。

なんかあれですね、東京で雪があんなに降るのをはじめて見た感じです；；

そういえばメディターも季節でいえば……というかずっと冬ですね；；

まあそんな感じで始まりです。

第十五章：ホウエン奪還計画　ＩＩＩ：自分の守れしもの

「ケンくん、早く！」
「で、でも、アンズ！」

俺はジム戦終了後、アンズに手を引っ張られてジムを後にした。

『ジムリーダー達はジム戦に負けた後、組織に殺される』

そう平然と言っていたダイゴさんの言葉を思い出して、俺は歯ぎしりする。

いくらジムリーダー達の大半がロケット団に加担しているとはいえ、こんなふざけたルール承認しているわけがない。

殺されるんだ。実際にもう一人以上の犠牲者が出てるんだ。

それに……

「悪い、アンズ！」
「ケ、ケンくん？！」

俺はアンズの手を振りほどいていた。

後ろに見えるトクサネジムを視界にとらえ、体の向きをそちらへと直す。

それに、あのジムリーダーはまだあんなに小さいのに。

「だ、駄目だよケンくん！　これは、任務なんだよ！　ここでしくじったら！」
「だけど見捨てれるわけないだろ！？　知ってて何もしない……俺はそれが一番大っ嫌いなんだ！」
縋るアンズの声と手を振りほどきながら、俺は駆け足でジムへと戻ろうとしたその時。
ドォン！！
「「！？」」
俺とアンズの眺める方向。そう、トクサネジムの方から一線の閃光が眩い青空へと突き刺さったのだ。
それで最悪な事態をアンズも俺も察知したのだろう。立ち竦んだ俺の腕をアンズはおもいっきり引っ張って、耳元で声を上げる。
「ケンくん！」
「……くそっ！」
また、俺は誰も救えなかったのか……。
俺は、誰も救えない。救えないのかよ！？
「ケンくん！」
「ちくしょおおおぉぉぉ！」
そう雄叫びをあげながら、俺はアンズと共にその場を離れた。他人の視線がジムの方へと向けられている間に、俺とアンズはミツル

さんのラルトスの【テレポート】で指定された場所へと転移する。

その場所は、

「こ、ここって……」

「知ってるのか、アンズ？」

いくらミツルさんのラルトスだからといって【テレポート】の移動距離には制限が存在する。もしも過度な距離の移動を試みればトレーナーだけではなくポケモン自体にも害を成すことがある。

それは体の一部が欠損したり、違った場所へとトレーナーとポケモンが転移されたり、等だ。

だから俺は目の前に広がる景色をどこか釈然としない気持ちで見つめていた。ここは、同じホウエンなのか？

立ち込める霧……？

「送り火山」

「おくりび、やま？」

聞いたことがあるような、ないような……。他地方の地形までは熟知してはないからな。

「もしかしてダイゴさんは……」

青ざめたアンズの横顔を、その時俺は忘れることはないだろう。限りなく最悪な事態を鑑みていたアンズのこの顔を、俺は絶対に忘れることはない。

「おい、アンズ？」
「あ、ううん、なんでもないよ。それよりも、ここに来たってことは皆さんも来ているのかな？」
辺りを見渡してみても、他に人影は見当たらない。
ってか送り火山ってどういうとこなんだ？　なんだか嫌な寒気がする……。
「ここは送り火山……死者の怨念を送り届ける最後の場所」
いつの間にそこにいたんだろう？
「ナツメさん……」
「い、いつからそこに？」
後ろからぬっとあらわれたナツメさんに俺達二人は驚き慄き、反射的に後退してしまう。
「うふふ、ずっと」
常に、どこかしろから電波でも受信しているようなナツメさんはこういったところが好きなんだろうか……？
「それよりも、予定より早かったのね。てっきりケンくんのことだから、ジムリーダーを助け出すとか厨二的なことを言ってたんじゃないかと思っていたのだけれど」
うっ……。

「そ、それはですね……えっと……」

言葉を濁らせるアンズ。まあ、確かに説明しづらいわな……いろいろな意味で。

内心変な汗を掻きながら、俺はナツメさんに手振り身振り言葉を紡ぐ。

「ま、まあいいじゃないですか。それよりもなんでここに？」

「あら図星？」

「ぐっ……」

そうだ、確かに俺はそう思っていて……でも何もできなかったんだ。

「あら、何か訳ありなのね。あの双子が殺されたのはかわいそうだけど仕方がないわ……それを乗り越えなければいけないのだから」

それはわかっている。わかってはいるけど……。

「ナ、ナツメさん」

「私はちょっと準備があるから、あなた達はあっちの方へ行ってて頂戴」

俺はナツメさんが指差す方を振り向きながら、様々な疑問を浮かべては消した。

「行こうか、ケンくん」

「あ、あぁ」

送り火山は霧に覆われてはいるが、見た所海に囲まれている。草原が足元に広がっており環境的にはその用途以外、快適な場所なのだろう。

ただ俺達にまとわりつくこの嫌な雰囲気には慣れないな。

「ケンくん、あんまり気に病んじゃ駄目だよ？　これからが、私達の……」

「……あぁ、わかってる。わかってる」

アンズに手を貸してもらいながら、俺はナツメさんに指定された場所にしゃがみこむ。

自分の中ではわかっているつもりだった。だけど、この先もずっと俺は……。

「なあ、アンズ……」

「なぁに？」

俺の背中に手を添えてくれるアンズ。彼女の手の温もりが俺の心にそっと触れるみたいで、癒されていく。

「俺の弱音、聞いてくれるか？」

「……うん」

俺はアンズの顔を直視して、そう訊ねる。一方のアンズはすぐに頬を赤らめて正面を向いてしまったが、それでも俺は続けた。

「もしこれからも俺がジム戦をしていくとしたら……。俺は人殺し

になるんだろうか……？」
「……え？」
「だってそうだろ？　知っていても何もせずにバッジだけを取っていく。それで本当にこの世界を取り戻しても、俺はそれを心底喜べるのかって――」

パシッ！

突如として、俺の右頬に強烈な刺激が襲う。
「なっ――――？」

右を振り向けば、そこには両目に涙を溜め、顔を真っ赤にして立ち上がったアンズの姿があった。

「ケンくんは、舐めすぎだよ」
「え？」
「ジムリーダーを舐めすぎ」

俺は何かアンズを怒らせるようなことを言ったのだろうか？

「なんでさも当然のようにバッジが手に入るようなことを言ってるの！？　そんなにケンくんは強いの？！」
「ア、　アンズ、何怒って……？」
「黙ってて！」

ここまで激昂したアンズを俺は見たことがあるだろうか？

「トクサネジムだって、あの二人が熟知している本来のニューラを想定してバトルしてた。ケンくんのニューラが異常だったからあん

な力押しができたんだよ？！」

アンズも、やっぱりわかっていたのか。

でも待ってくれ、俺のニューラが異常？

「ジムリーダーもバカじゃない！　ジムバッジを多く所有するトレーナーが出てきたら、ちゃんと対策を練るんだよ！　私達はなにも負ける為に存在してるんじゃないの！！」

負ける為に存在しているのではない……。

この時なぜか、その言葉が深く俺の胸中を抉った。

「アンズ、そこまでにしておきなさい」

アンズの肩に背後から手を置いたのは、ナツメさんだった。

「少年、良いことを教えてあげましょう。女を泣かす男程、下衆なものなどいないのですよ？」

ナツメさんはそっとアンズを介抱してから、俺から引き離すようにしてアンズをリードしていってしまう。

俺は座り込んだまま、途方に暮らされる。

だってそうじゃないか……。このまま目的を遂行するにはジムバッジが必要なんだろ？　だったら俺はジムリーダー達を間接的に殺しに回るってことじゃないか。

それをなんだってアンズが怒るんだ？

意味がわからない……。

「少年」

いきなり呼びかけられ、俺は即座に声のする方を振り向いてしまう。

「ナツメさん……」

「あなた程鈍い男を私は見たことがありません」

いつもとは違って饒舌なナツメさん……それはこの環境がそうさせているのだろうか？

「悪いですが先ほどの会話は聞かせてもらいました。あなたの言いたいこともわかりますけど、まずあなたには知ってもらわねばならないことがありますね」

すらっとした体躯を隠さんとばかりに覆う長い黒髪……。そんなナツメさんの凛々しさに、俺は目を奪われていく。

「私達はジムリーダーです。ジムリーダーだった、というのが正しい言い方なのでしょうけど……私達ジムリーダーは今も全員が同志であり、家族でもあります」

「っ！？」

ナツメさんは俺の目が見開いたのを確認してなのか否か、話を続ける。

「私達は覚悟の上でこの任務に赴いている。それを部外者のあなたが、さも自分だけが苦しいような言い方をしてはアンズが可愛そうだ思いませんか。現に、彼女の父親は敵側にいます」
「……」
俺は何も言い出せなかった。
俺は誰かを救うどころか、誰かを傷つけていたんだ……。
「ケンくん達はまだ若いですからね。それゆえにアンズにも非があります」
すでに俺はナツメさんを直視することはできなくなっていた。ただただ頭を下げて、苦い思いをかみしめながら地面を見つめる。
「うふふ、ちょっと説教しすぎましたかね？　ここに眠るのは何もポケモンの魂だけではありません……愛するポケモンと心中したトレーナーの魂も彷徨っているのですよ？」
「え？」
俺は彼女のその言葉でナツメさんの顔を窺う。
すると、ふっ―――という音と共にナツメさんの中から何かが抜けていくような錯覚を見る。
「……何、見てる？」
「あ、い、いえ！　な、なんでもないです」
途端、ナツメさんがいつもの口調に戻ってしまっていた。

「アンズのとこ、行ってきます！」

俺は咄嗟に立ちあがって、そのままアンズが向かったであろう方へと駆けだす。

「若い、羨望」

そうナツメさんが言ったのを聞こえた気がするが、俺は迷わずアンズの背中を追っていた。

「アンズっ！」

「……っ！？　ケ、ケンくん？」

びくっと背中を跳ねさせるアンズ。ちょっときょろきょろとしながら振り返るその仕草に、俺は少なからず安堵の気持ちを抱いていた。

「さっきは、その……悪かった」

「え？」

「お前の気持ちも知りもせずに、あんなことを言って……悪かった。今更言ったことは取り消せないけど、二度とアンズをあんな風に怒らせたりはしない」

「……」

それが、俺が今精一杯出せる謝罪の言葉だった。

「ア、　アンズ？」

黙りこくってしまったアンズに俺は声をかける。

「……ケンくんの、バカ」
「え？　うおっと？！」

アンズが何と言ったのか、ちゃんとは聞きとれなかった。が、しかし彼女はそのまま俺の胸に飛び込んできた。

「ア、　アンズ？」
「もう一回あんなこと言ったら、絶対に許さないから」
「……ああ、わかってる」
「それに……」
「ん？」
「私の方こそ、ぶってごめんなさい」

その彼女の言葉に、俺の鼓動は自然と高鳴る。

「いいさ、悪いのは俺だから。それに約束する、俺はいかなる時でもお前の傍にいる」

俺はしっかりとアンズの肩に手をまわして優しく受け止める。その時彼女の肩がぴくっと跳ね上がるのを感じた。

「えへへ、ありがと」
「どういたしまして、お姫様」

寒い冬、送り火山の頂上で互いの温もりを確かめ合った俺達。そんな二人の周りをいつの間にか到着していたダイゴさん達にずっと見守られていたことは、生涯俺とアンズの記憶から離れることはないだろう。

なんたって永遠とそのネタで詰(なじ)られることになったのだから……。

第十五章：ホウエン奪還計画　ＩＩＩ：自分の守れしもの（後書き）

ナツメは霊を呼ぶ素質がある。

ルカ「なにそれ」

……；；

ルカ「それよりもバカ兄ってヘタレだよねー」

まあまあ。それでは皆様また次回。

ルカ「じゃねー」

第十五章：ホウエン奪還計画　ＩＶ：作戦内容（前書き）

サブタイが安直すぎますね、でも思いつかないんです。

ルカ「まあいつもの訳がわからないサブタイよりはわかりやすいよ」

っ！？

ルカ「それではバカ兄のお話、はじまりでーす」

……

第十五章：ホウエン奪還計画　ＩＶ：作戦内容

送り火山：

ここにこういった面子が揃ったことは恐らくホウエンの歴史に残るものなんだろう。

元ホウエンチャンピオン、ツワブキ　ダイゴ。

マグマ団のリーダー、マツブサ。

アクア団のリーダー、アオギリ。

そしてカントーを彩るジムリーダーと四天王。

もう一人、ここにいれば……どんな軍隊でも敵わない布陣となるのかもしれない。

そう、この場にサトシさん、ミツルさんとマサキさんの姿がないのだ。

「任務ご苦労」

ダイゴはマツブサを連れてきたカンナ率いるカスミとナツメに礼を言うと、そのままアオギリとマツブサへと向き直る。

「さてわざわざ幹部以上の方々にここへと赴いてもらった理由を話すとしよう」

そうだ、その通りだ。なんでわざわざこんな場所へ？

送り火山には何かあるのか？

「俺達は一時団結し、古代のポケモンを使ってホウエンを奪還する」

「なん、だと……？」

「貴様何を言って……」

険しい顔つきをしているマツブサとアオギリの表情の彫りが更に深まるのを俺はその時感じた。

「ここ送り火山には以前両組織から取り返した藍色と紅色の珠がある」

後からアンズから聞いた話になるが、マツブサ率いるマグマ団とアオギリ率いるアクア団は以前に伝説の古代ポケモンを復活させたことがあるらしい。

俺はその時のことをホウエン事変という記事で読んだことがあるが……まさか、そんな大事になっていたとは知らなかった。やっぱり情報規制がされていたんだろう。

そりゃそうだ。もし古代ポケモンが現れて国を変えようとしていただなんてことが知れ渡ったら、それは恐怖しか生み出さないから。

「まさかあの時一番に私達を妨害してきた貴様がそんなことを言いだすとはな」

アオギリが不敵な笑みと共に両手を宙へと腕を折ってかざす。

「そういうことならいいだろう。お前が俺達を利用するように、俺もお前達を利用させてもらおう」

マツブサがそう猛禽のような目つきでダイゴとアオギリを見据える。

おいおい、こんな空気で共同戦線って言えるのか？

けど……ダイゴさんがここまでの人脈を、いやこういった人選をしなければならない程にロケット団は強力なのだろう。

だって考えても見てくれよ。以前は世間を騒がしていたテロリスト集団のリーダー二人がこうやって今目の前にいるんだぜ？

「ああ、俺達は何も絆を結んで協力するわけじゃない。あくまでのロケット団をこのホウエンから追い出す為だけにやるんだ」

「言われなくても」

「わかっている」

だからなのだろう。

不服そうながらにも、この三人はある意味団結している。それは下についている俺達にもなんとなくわかる。

「で、具体的には俺達に何をやって欲しいんだ？　まさかマグマ団の野望をやり遂げろって程お前は優しくはないだろう？」

これまたアンズに聞いた話なんだが、マグマ団は藍色の珠を使ってグラードンを目覚めさせたものの制御できずホウエンに異常気象をもたらしたらしい。そしてアクア団もカイオーガなる古代ポケモ

ンを復活させ、同じ状況を生み出したらしい。

この事件の時、ホウエンで異状気象があったのは知っていた。でも巨大な低気圧発生で気象が乱れたとまでしか聞き及んでいなかった。

「ああ。今度はちゃんとした珠を使ってしばらくの間暴れてもらいたい。それ以降は自由にしてくれていい」

ダイゴさんは何を言ってるんだ？

もしグラードンとカイオーガが天候を自在に操れるような化物だとしたら……暴れさせたら甚大な被害が生まれることとなるのは避けようがない。

「貴様、何を企んでいる？」

そりゃアオギリやマツブサの立場からしたら、ダイゴさんを疑うしかないだろう。

「言葉通りの意味さ。マグマ団には紅色の珠を、アクア団には藍色の珠を……。それで俺が指示した期間、二匹と共に両団に暴れてもらう。そうすれば後はお前達が好きなようにすればいいさ」

一体ダイゴさんは何を考えているんだろう？

しばらくの沈黙と身内でのやりとりの後、マツブサとアオギリはダイゴさんの提案を汲んだ。

「いいだろう。それじゃ早速、珠を渡してもらおうか」

「そうだな、これ以降私達が会う時は敵だ」

……やっぱり。

「そうだな。それじゃあ、ミツル」

「はい」

霧が立ち込めるもそんなに視界が悪いわけじゃない。でもミツルさんがいきなりテレポートでダイゴさんの傍に現れた時はさすがに驚かざるを得ない。

ミツルさんはそっと小さな子袋から紅色の珠と藍色の珠を取り出して、それぞれマツブサとアオギリへと手渡す。

「これは……確かに、紅色の珠だ……」

「ふむ、ただの戯言ではないようだ」

紅色と藍色……。確かに古代ポケモンを復活させるほどの魅力的な輝きをその二つの珠は持っていた。なんか中で渦巻いてるっぽいし。

「綺麗だね、ケンくん」

「ああ……」

そう息を零すアンズ。そりゃ女は綺麗物好きってのは聞いてはいるが、まさかアンズがそんなことを言うなんて。

やっぱり彼女は事態を知っていたのだろうか？

俺だけが、知らずに……。

「どうかした、ケンくん？」
「ん？　いや、なんでもない」
遠巻きに見つめながらも、俺はしっかりと三人の会話に聞き耳を立てていた。
「しかしわざわざ呼び出さずとも良かったのではないか？」
アオギリが藍色の珠を幹部の一人に預けながら、ダイゴを睨む。ああいった類の人間だと人を見るだけの行為になぜあれほどの剣幕がつきまとうのか……。
「なに、俺にとってもお前達にとってもここは記念すべき場所だろ？」
そう意味あり気な笑みを含めながらダイゴは肩を竦める。
一体、この三人の間に何があったのか。その詳細を聞くのは、これから少し先のことになりそうだ。
「お前達にも準備がいるだろう。それは承知の上だ」
ダイゴさんはそう最後に言い残して、マツブサとアオギリに二つのＵＳＢを投げ渡す。
「それが俺達の行動パターンと日程だ。それをロケット団側に売るもよし、お互いに結託して俺達を狙うもよし、好きに使ってくれ」
そんな言い方をするということは、ダイゴさんには確信があるん

だろう。この二人は約束を破らない、と。

「ふん、せいぜい良いように使ってやる若造が」

「私達もここに長居する理由はもはやない、いくぞ」

そしてホウエンを揺るがした二大勢力の頭達は各々の幹部を引き連れて、この送り火山頂上から姿を消した。

さすがに立つ鳥跡を濁さずって感じで、彼らがいた場所はすっかりと何も残っていない。もはや人がいたかどうかも怪しまれる程に、痕跡すら残さずに消えたのだ。

「さて俺達も行くとするか」

「あ、あのダイゴさん、行くってどこへですか？」

多分俺だけ知らないんだよな……と、内心若干の疎外感を抱きつつ訊ねてみる。

「ん？　ああ、そうだったなケンとアンズにはまだ言ってなかったか」

「僕達の行く次の目的地はフエンタウン」

フエンタウン。

ああ、フエンと言えばあの温泉で有名な所か。母さんが前に行ってみたいとかテレビの前で言ってたな。

あのバトルで貯めていたお金がその為の旅費だったなんて、今更言えねえな……。

それに母さんとは未だ音信不通。あの人なら大丈夫だとは思う……でもさすがにルカには連絡をいれてもらいたいもんだ。

「でもなんでフエンに？」

いくら次の目的地だからって、そんな人目のつくような場所に行っていいのだろうか。

「木の葉を隠すなら森の中、人を隠すなら観光地ってね」

どこからそんな言葉が湧いて出たのかはわからないが、まあ従うことにしよう。

「それにしてもケン、さっきのことは何も聞かないんだな」

「あ、いえ、別に。俺はダイゴさんを信じてますから」

そう、俺にはそれ以外の道はない。

「ふっ、そうか。ありがとな」

「え？　あ、はい」

まさかそこで感謝されるとは思ってもおらず、俺は素っ頓狂な声をあげてしまう。

「ちゃんとアンズを守ってやってくれ」

そしてそう耳元でささやかれた時、俺は耳が温かくなるのを感じだ。な、なに、言ってんだよこの人？！

カァァと温度の上がる頬に慌てながら、俺はアンズの方へとみや

る。

「？」

と可愛らしく首をかしげているアンズ。ああ、くそ！　言われなくてもわかてますよ！

俺はついさっきまでアンズと抱擁をかわしていたのを思い出し、それを払拭させるように頭を振る。

「ケンくんは意外と純情なんだからあまりからかわないでやってくださいよ、ダイゴさん」

「知ってる」

にひひ、と少年じみた表情で笑うダイゴさん。やっぱ、この人にはかなわねぇ……。

「それにしてもナツメ、あんた結構こういう場所好きでしょ」

「……嫌いじゃない」

カンナさんは待っている間に一服してたのか、右手に煙草を持ちながらナツメさんの首元に腕をまわしてかまっていた。

「サトシはちゃんとやってるかなっ……」

「あらあら、きっと大丈夫ですわ」

そしてカスミさんに至っては恋愛してて、それを好奇な目でエリカさんが対応している。

なんやかんやでこのチームってバランス取れてんのか？　そう、

最近になって色濃く理解してきた気がする。
もちろん、アンズのことも。日を重ねるごとに近づいていっている気がする。
「なあアンズ」
「どうしたの？」
ダイゴさん達が周りにいないことを確認して、俺は冗談のつもりでこう言った。
「フエンに着いたら、一緒に温泉でも入るか」
「え？　……っ！！」
ぼふっ！　という音と共にアンズの頭から何かが噴き出す。
「お、おい、アンズ？　だ、大丈夫か？！」
「い、い、いぃ、いっしょに……お、お、おん、おんせん……」
な、なに急に赤くなったと思ったら支離滅裂なことを言いだし始めるアンズ。
「こ、こん、こんよ……く……？」
「あ、アンズ？　冗談だから、な？　おい、おぉーい？」
彼女の肩を揺さぶってみるも、返ってくるのは何かを延々と呟き続けるアンズの呪文のみ。
「それじゃそろそろ行くか。ちょいとばかし急がないといけないかもしれない」

そう遠巻きにダイゴさんが言っているのを聞きながら、俺はアンズを急かすが彼女の正気が戻る余地は見いだせない。

えぇい、くそっ！

「おい、行くぞケン、アンズ！」

「は、はい！」

こうなりゃどうにでもなれっ！

俺はアンズを両手に掲げ、急いでダイゴさん達のもとへと駆け寄る。

「ラブラブだよなお前ら」

「いいから行ってください！」

そんな風にダイゴさんや面々に呆れられながら、俺達はミツルさんとナツメさんのポケモン達と共に頂上から【テレポート】して目的地へと向かった。

第十五章：完

第十五章：ホウエン奪還計画　ＩＶ：作戦内容（後書き）

もちろんアンズはお姫様だっこされてます。

ルカ「バカ兄にお姫様だっこって、うわ、きもっ」

こらこら、ここにカナがいなくて良かったね。

ルカ「確かに……。発狂するよあの子」

それはそれでみてみたいｋ（ｒｙ

第十六章：カントー帰還　Ⅰ：トキワの街（前書き）

さて戻ってまいりましたルカパート

ルカ「いぇーい！」

本来はホウエンからカントーまでの帰路を書く予定でしたが、尺的にカット。

ルカ「え？」

では、どうぞ！

第十六章：カントー帰還　Ｉ：トキワの街

あのポケ人との出会いから三日、私は戻ってきていた。

そう、カントーに……。

ホウエンでチイラの実でできたポロックを手に入れた私はそのままカントーへと戻るべくして戻ってきた。

アスナさんには悪かったけど、でも、今の私にとってお兄ちゃんに会うことよりも先ずはカナのとこへと戻ることが最優先事項だから。

ううん、戻らないといけない気がした。

ポケ人は言っていた。

何かしらの能力に目覚める八柱力、その内の二人が私とカナであること。そしてハルちゃんとスミレちゃん、リョウさんまでも……。

「お嬢ちゃん、悪いがここまでしか送ることはできないよ」

「あ、はい！　ありがとうございます！」

カントーに戻ってきたと言っても、ハナダまではまだ遠い。

ここはジョウト、カントー間にできた高速道路のカントー出口付近のサービスセンター。

私はジョウトまで船を使って渡航して、そこで知り合った運送会

社の人にお願いしてここまで連れてきてもらった。

なんでもフレンドリィショップの商品を運んでいるとかで、こっそりいくつかであった記念としてもらっちゃったんだけど……やっぱいけないよね？

ここまで連れてきてくれた若いお兄さんにお礼を言って、私はポケギアのタウンマップを開く。

えっと、ここから近い町は……やっぱりトキワシティか。

場所的な説明をすると、今いるサービスセンターからはシロガネ山が見える。なんでもあそこは立ち入り禁止ゾーンに指定されていて、協会の許可がなくては入ることができないみたい。

実際に許可無く立ち寄った際の安全性は保証されてなくて、例えそこで死んだとしても法定上協会には責任が問われない。

怖いな……。

見ている分には美麗な山脈を連ねているシロガネ山。あそこには一体どんな秘密が隠されているのだろう。

ぎゅるるるる。

お腹、空いたな。

そういえば朝が早かったからきちんとした朝食は取っていなかったことを思い出して、私はサービスセンターの食堂に入ることにした。

あ、そうだ。

また乗せてくれる人探さなきゃ。

トキワシティ：

この世界には心優しい人がたくさんいるなー。

と、ここまで高級車両で送り届けてくれた紳士のおじいさんにお礼をしながら私はそんなことを思っていた。

「本当にありがとうございました」

「可愛らしいレディが困っているとあらば、ジェントルマンとしては放ってはおけないのでの。ほっほっほ」

ダンディさの残った雰囲気に初老な感じを合わせたようなそのおじいさんは、そう笑って返してくれる。

「それではの、良き旅を」
「はいっ！」
去っていく車を見届けて、私は今トキワシティへとやってきていた。
何度かここへは立ち寄ったことがある。といっても結構前になっちゃうけど。
時刻は丁度お昼過ぎ。今からニビシティへと向かうのもいいけど、冬は日が暮れるのが早いから……きっとトキワの森を抜ける前に暗くなっちゃうな。
「ん～っ」
私は一つ背伸びをして、体を震わせる。
「なんかこう、もっと楽にびゅーっとハナダまで戻れないかなぁ……」
あ、そうだ！
私はおもむろにラルトスのボールを取り出して、呼び出す。
「らるぅ？」
「ねえラルトス！　【テレポート】で私をハナダまで連れて行ってくれない？」
そうだよ、だって前はお兄ちゃんと一緒にハナダからマサラまで行けたんだもん。ここからならもっと距離は近いし。

といっても、自分では内心気が付いていた。

「……」

そう、なにをって……目の前のラルトスは委縮しながらも首を横に振るから。

「やっぱ、駄目か～」

「らーるぅ」

二人して落胆の声を上げながら、私はありがとうとラルトスに告げてボールへと戻す。

【テレポート】という技に存在するいくつかの制限を私は熟知している。怖い技だから、失敗したくはないし……ラルトスに負担かけすぎるのも良くないもんね。

じゃあ、やっぱり明日地道に歩こうかな。

乗せてくれるような人物がいたとしても、ここからニビシティへは経路が若干面倒で大概の人はハナダシティからかここまで来て徒歩でニビへと向かう。その理由としては、ニビがトキワの森とオツキミ山に囲まれているという特殊な場所にあるということと……やっぱりそんなに車を持っている人が少ないからだろう。

私が今日乗せてもらった人も、仕事の都合でトラックに乗っていたし、おじいさんはお金持ちだからこそ車を持っていて快く乗せてくれた。

「贅沢ばっかりは言ってられないか」

私はそう自分に言いくるめてポケモンセンターへと足を運ぶ。

今日はちょっとゆっくり休もうかな。

そう、いままでの長旅を思い出しながら私はそう思っていた。極力お兄ちゃんのお金を使いたくなかったのと、早くカナの元に戻りたいという二つの意地によるせめぎ合いはじわじわと私の心を疲労させていた。

意地っ張りだと思われるよね、それにここまで帰ってくるのに三日もかかっちゃったし。

熱いシャワーを浴びながら、ポケモン達とおいしいごはんが食べたいな。

そう思っていた矢先、

「きゃっ！」

瞬間、私の体は１８０度もの回転を味わい、それが無理矢理腰をひねらされたものによるものだとわかるのに数秒を要した。

地面へと前のめりに倒れ込む痛さに意識がひっぱられながらも、私は自分の身に何が起こったのかを確認する為視線を集中させる。

「ひゃっほぉー！」

見ると、私の前方を二人乗りのバイクが走り去っていく。

そして後部座席に乗っている男が奇声を上げながらその手に振りかざしていたのは、私の腰につけていたポーチだった。

「！？」

地面にたたきつけられて痺れた右手をなんとか腰あたりまでもっていき、本来あるはずの所在の有無を確かめようとして顔が青ざめていく。

ないのだ。

とられた？

「ま、まって……」

あれには、あれにはハギさんからもらったカナのポロックが入っているのに。

なんとか立ち上がろうとしても、鈍痛が前進をくまなく走りまわり……どこの筋肉にどう脳が呼び掛ければいいのかがわからない。

でも、でも追いかけなきゃ……。

そう頭では訴えても、体は言うことを聞かない。

動いて、動いてよ！　ここまで帰ってきたのに、こんなの、ないよ！

遠ざかっていくバイクを視界にとらえながら、私がなんとか半歩

右足を前に出す。でも、右足が地面に触れても踏ん張ることができず、そのまま私は意識が遠のいていくのを感じながら倒れ込む。

「君、大丈夫？！」

再度地面へと叩きつけられる感触を覚悟していたのに、私の前面を捉えたのは人の感触だった。

「か、ばん……」

鞄……ポーチを取り戻さないと。

「ぁ、とぃ……」

言葉すら、出ない……。

そこで私の意識は、その受け止めてくれた人の腕の中で途切れた。

「ん……」

私が目を覚ますと、そこには見知らぬ天井があった。

「あ、起きたんだね」

「……ここは？」

私は良く気が付いたらベッドの上にいるな、なんてくだらないことをその時は想ってしまった。

「ポケモンセンターだよ。結構擦り傷とか多かったから、近くのポケモンセンターに預けてもらったんだ」

良くみると、手首のまわりや膝周りに包帯が巻かれているのがわかる。

「……ありがとう、ございました」

私は言葉を発すると、口の中に地面へと叩きつけられた時にまじった砂利の味がするのがわかった。そうだ、私はポーチを盗まれたんだ。

「君が眠っている間、勝手にだけど……これ」

私をここまで運んできてくれた人を、その時私ははじめて直視した。

おとなしそうな風貌、でも黒髪の中で見え隠れする彼の瞳には燃え滾る闘志が隠れ潜んでいるのがわかった。

毒気が抜かれてしまったような言葉回しには、どこか聞きおぼえ

もある。

「取り返してきちゃったけど、これでよかったかな？」

と、その人が手にかかえていたのは、若干汚れてしまってはいるものの……盗られた私のポーチだった。

「ど、どうして？！」

「うーん、どうしてっていうか……あんなの見たら、放っておけなくて」

その人は爽やかな微笑を浮かべて、そっと私にポーチを手渡してくれる。

「迷惑、だったかな？」

この人は良心が時に人の心を傷つけるのかを知っている。でも知りすぎているからこそ、相手が必ず感謝するような行為でもそう言わないと恐怖を感じてしまうのだ。

「いえ、本当にありがとうございます」

私はぎゅっとポーチを胸に抱えて、感謝の意を示す。

「あの、お名前きいてもいいですか？」

そっと目を上げて、私はその恩人と目を合わす。

「僕はサトシ、しがないポケモントレーナーさ」

サトシ……？　どこかで聞いたことがあるけど、それが明確に誰かとは思いだせなかった。

「サトシさん……。私はルカ、ハヤミ　ルカって言います」

「……え？」

え？

その時私はサトシさんの表情が固まったのを見た。

「あの、申し訳ないけど……君の知り合いでハヤミ　ケンという人はいるかな？」

「え、あ、はい。兄です」

サトシさんは右手で口を覆い隠して、何か考えを逡巡させて口を開く。

「えっと、彼らから鞄を取り返した時に……少しだけ中身を見てしまったんだ」

え？

「君はヒートバッジを持っているよね？」

もしかして、この人……っ！

私は反射的にポーチを握る腕に力がこもり、ベッドの上でサトシさんから遠のくようにして体を動かす。

「あ、いや、警戒しないで！」

と、私の反応を見てサトシさんの方が慌てだすのを見て私は様々な考察を巡らせる。

バッジを一番に確認しにきたってことは、ロケット団かその関係者じゃないの？　でも、お兄ちゃんのことを知っているってことは、もしかしてミツルさんの？

「えっと、今君のお兄さんのケンくんと一緒に行動をしているんだ。ダイゴさんの下でね」

そんな大事なことを語りだすのはいいのかなとは思ったけど、私自身が興味があったので合槌をうちながら私は聞きいる。

「僕は今別行動なんだけど、ダイゴさん達はフエンシティへと向かった。このヒートバッジを受け取る為にね」

え？

「それをなぜ君が持っているのかはわからないけど、でも、ということはやっぱりアスナさんは」

「ど、どういうことなんですか？！」

話が読めない。だって、だってアスナさんは私にこれを自分に危険が及ぶかもしれないからって渡してくれたのに。

それをお兄ちゃん達は知っていたってことなの？

もう何が何だかわからないよ！

「お、落ち着いてルカちゃん？」

落ち着いていられるわけないよ！　もしかしたら私がこのバッジを受け取ったせいで、アスナさんだけじゃなくてお兄ちゃんにも危険が及んでるかもしれないのに！

「まずはお互いの情報を交換しあおう。いい、かな？」

「っ！　……はぃ」

自分がいかに取り乱していたのかをサトシさんの言葉によって察知した私は、顔を真っ赤にしながらも首肯する。

一体、今何がどうなっているの？

第十六章：カントー帰還　Ｉ：トキワの街（後書き）

時間軸があやふやな気がしますが、大丈夫です。

アスナとの出会い＝ケンの特訓

ルカとポケ人の出会い＝ケンの特訓

ルカ、カントーへ帰還＝ケン、トクサネ攻略

といった感じですので、まあ次回サトシが詳しく説明してくれますｗ

ルカ「他力本願」

では！

第十六章：カントー帰還　ＩＩ：史上最強の男（前書き）

さて、それでは参りましょう。

ルカ「なにも話すことないんだね」

……どうぞ！

第十六章：カントー帰還　ＩＩ：史上最強の男

「じゃあ、まずは何から話そうか」

サトシさんは私のベッド横に椅子を拵えて、優しく訊ねてくれる。

「えっと……あの、私はどうしたらいいんでしょう？」

自分の行動が誰かの計画を狂わせているのかもしれない、という予感が頭から離れず私は最初にそれを尋ねた。

「ルカちゃんは、どうしたいのかな？」

え？

「え、えっと……」

「ルカちゃんがフエンバッジを持っていたということは、何かしらの理由があって持っているということだと僕は思ってる」

サトシさんは落ち着きはらった表情に穏やかな微笑みを携えて、続ける。

「でもルカちゃんはここにいる。それはルカちゃんがここに来なければいけない理由があったからじゃないかな？」

私は視線をサトシさんから自分のいるベッドのシーツへと落として、ぎゅっと両手にその布を握る。

「私は……私はカナに会いたくて……会わなきゃいけないと思

って」

言葉を噛み切るように、歯切れが悪くても、でも口を動かす。

「だから……」

でも思うように言葉が舌の上からでなくて。

「それでいいんじゃないかな？」

「……え？」

「ルカちゃんがそうしなければいけないと思って、行動に移したんなら……それでいいんだよ」

サトシさんは私が加減もわからずに力を込めていた手にそっと自分の手を被せて、そう呟いた。

「大事なのはさ、どうすればいいかじゃなくて……ルカちゃんがどうしたいか、だからさ」

私が、どうしたいか？

「だから、他人の都合を自分が抱えなくてもいいんだよ。だってさ、この世界は一人一人の都合が混ざりあって、重なって、交わってできているものだから」

そこでサトシさんは寂しく笑った。

「自分の都合を貫かなきゃ、自分じゃなくなっちゃうんだよ。ポケモン達を見ていると、そう教えられるんだよね」

自分の都合を貫く。

それは自分勝手なこととは違うの？　だって、それで他人に迷惑がかかっちゃったら、それはだってとても無視することはできないのに。

サトシさんは私が考えていたことを読み取ってくれたのか、はたまた私が声に出して言っちゃっていたのかはわからないけど答えてくれた。

「うん、だからその時は他人のことも自分の都合にしちゃえばいいんだよ。この世界は一人一人の都合で成り立つけど、一人だけじゃ世界は成り立たないからね」

難しいよ……サトシさん。

でも、私のことを励ましてくれているんだってことはわかった。わかったからこそ、私は静かに微笑んで感謝する。

「あの、だったら私の都合聞いてくれますか？」

「なんだい？」

「このフエンバッジをお兄ちゃんのところまで送ってくれませんか？」

私の都合を貫く。

「勿論。それは僕の都合でもあるからね」

「えへへ」

そこで私ははじめてサトシさんの前で気を許して笑えた気がする。

この人は不思議な人だな。

寂しそうで、でもとても温かい。

「あのサトシさん」

「ん？」

「なんでサトシさんはトキワシティに？」

その時、私はサトシさんの瞳の奥で悲哀の感情が揺れ動くのが見えた。

「昔の僕の知り合いとね、話をしにきたんだけど……」

サトシさんはおもむろに席から立ち上がって、続ける。

「なかなか会えなくてね」

「それって……」

このトキワシティにはトキワジムというジムが存在する。そう、カントーチャンピオンであるシゲルさんがチャンピオンになる前にジムリーダーを務めていたというカントー最強のジムが。

シゲルさんがチャンピオンになった後は誰かが任を引き継いだらしいんだけど、そこまで詳しくは知らない。

「ルカちゃんって、思ったことがすぐ口に出ちゃうタイプの子なのかな？」

サトシさんが若干苦笑染みた声でそう言ってきて、私は慌てて口

を両手で塞ぐ。
「もしかして、聞こえてました？」
「うん。あはは……」
かぁーっと私の両頬が熱くなるのが感じられて、今にでもシーツを頭の上からかぶりたい衝動に駆られる。
「……シゲルは僕の永遠のライバルであり、最愛の親友なんだ」
嘘っ？！
「たまにあいつ一人でシロガネ山の頂まで来たりするんだよ？　おかしいよね」
サトシさんってカントーチャンピオンの友達だったんだ……。
え？　っていうかちょっと待って。シロガネ山の頂って、もしかしてあの史上最強のトレーナーがいるっていう……。
「えぇーーー！？　サトシさんが、あの史上最強のトレ――――！？」
がばっ、と私の口はサトシさんの両手で押さえられる。
「しーっ！　しーっ！」
サトシさんが必死な思いでそう念じてきたので、私は自分のはしたなさに違った意味で顔を赤らめてしまう。
「ルカちゃんって思ったよりもお転婆さんなんだね」

うぅ、また言われた。

「ダイゴさんから誘いを受けなかったら、多分僕はずっとあそこにいたと思う。それに友達の危機にも気付かずにいたかもしれない」

史上最強のトレーナー。

それはこの国の人間なら知らない人はいないと言われるほどの都市伝説。まあ、都市ではないんだけどシロガネ山が立ち入り禁止エリアにされている理由の一つとしてもあげられている。

ううん、むしろ史上最強のトレーナーがいて危ないから立ち入り禁止にされているとまで言われていた。それはつまり史上最強ということは、史上最悪で凶悪かもしれない……っていう噂が広まっているから。

でもその本人がサトシさんで、私の抱いていたイメージとはまるで違ったから驚いちゃった。

「だから僕はダイゴさんには感謝してるから、あの人の奪還計画に力を貸してるんだ。まさかケンくんの妹さんに会えるとは思ってなかったけど」

お兄ちゃんは私が想像していた以上に、なにかをしようとしている。

私達の為に、皆の為に……。

「あの」

「ん？」
「お兄ちゃんは、やっぱりその……危ないことをしようとしてるんですか？」
でも、私はお兄ちゃんが危険を冒してまで何かをしてほしくはない。
だってバカ兄でも、お兄ちゃんは私のお兄ちゃんだから。
「そう、だね。でも僕達がやらなきゃいけないことなんだ」
「でも！」
「酷かもしれないけど、それはルカちゃんの都合をケンくんに貫かなきゃいけないことだ」
サトシさんが決意のこもった目で私を直視してくる。
「僕は昔からいろいろな人に迷惑をかけてきたから……。それでもポケモンマスターになるっていう都合だけは諦めずに貫きとおしてきた」
サトシさんはそこで頭にかぶっていた赤と白のツーカラーが特徴的な帽子を外してかざす。
「だから強くなれたし、そのせいで友達を傷つけたことはあったけど……後悔はしてない」
私はただ黙ってサトシさんの言葉に耳を傾ける。
「だからケンくんが決めたことを本人以外は変えられない」

でも！　それでも！

私はサトシさんが言わんとしていることが理解できた。だけど、それゆえに……だからこそ私は……。

「大丈夫。ダイゴさんの下には強力な助っ人がたくさんいるし、強い人もたくさんいる。皆、この国を取り戻したいんだよ」

強い人がいるのはわかってる。でも、理屈はわかっても納得はいかない。

「はい」

私はサトシさんから手渡された帽子を受け取って、それをまじまじと見つめる。

ところどころに見られる掠り痕や汚れ……それは全て、サトシさんが今までの旅で掻き集めた勲章の証なのだろう。

こんなの見せられたら、何も言えないじゃないですか。

サトシさんは帽子を見せて伝えたかったんだと思う。男とはそういう生き物なんだと。私には一生わからないことだと思うけど、バカ兄がここにいたらきっとなにかと言われてどうせ聞いてももらえないだろうから。

「わかり、ました」

「ありがとう」

「お礼なんていいですよ。むしろ私がしなきゃいけないのに」

「そんなことないよ」

お兄ちゃんはバカ兄だから、きっと私がなんて言ってもまた毒舌を吐いてくるだろうしね。わざわざ私の都合をぶつける必要もないのかもしれない。いや、絶対無い。

だったら私は早いとこカナのところへと行かなきゃ。

「あのサトシさん」
「ん？」
「本当にありがとうございました。お兄ちゃんのことも、鞄のことも」
「ううん」

私は小さなお辞儀をして、ポケギアの時計を確かめる。時刻は夕方……結構、寝ちゃってたんだ私。

「シゲルがここのジムリーダーを辞めてから、結構治安が悪くなったみたいだね」

そう言われてみれば、確かにそうだ。

「あのグループはここ最近暴れるようになったらしくて、シロガネ山の麓にアジトをつくってたみたいだね」
「それって、危ないんじゃ……」
「うん、まあだからちょっと潰しに行ってきた」
「え？」

そこで、にっとサトシさんは子供染みた笑みを浮かべる。まるで、どうだすごいでしょと誉めてもらいたげに。

「ロケット団もそうだけど、僕は悪事を嬉々として行う連中は許さない。人やポケモンは自分勝手な行動で傷つけたりしたらいけないからね」

これがサトシさんの言う自分の都合と自分勝手な行動の違いなのだろうか。

「あの、本当にありがとうございました」
「え？　いや、だからいいって――――」
「いえ、ありがとうございました」

私はなぜだかこの時、そう言ってこの会話を断ち切ろうと思った。

なぜ、かはわからない。でもなんだか変な違和感に苛まれたんだ。

サトシさんは良い人、だけど……危険な人でもある、と……。

「それじゃ、僕は行くね。シゲルには会えなかったけど、こうしてルカちゃんに会えてよかったよ」
「私こそ、なんのお礼もできずにすみません……」
「ううん。だってバッジはちゃんと受け取ったし……あ、えっとアスナさんと何があったか聞いてもいいかな？」

私は言葉が詰まりそうになったけど、アスナさんとカラクリ大王との一連の出来事を説明した。

「そう、か……。あの火事として報道された事件にアスナさんはからんでいたんだね」
「ダイゴさん達もこのことは知らなかったんですか？」
「うん。アスナちゃんと連絡が取れなくなったのと事件との関連性

は最初から考慮していたんだけど、彼女とカラクリ大王の繋がりがいまいちよくわからなかったから」

そう、だったんだ。

私は無邪気に笑っていたアスナさんの顔を思い出して、胸がしまった。

「それじゃ僕は行くね。ルカちゃんは、自分の目的を達成できるといいね」

「あ、は、はい！」

私は見送りにでようとベッドから出ようとしたけど、サトシさんに肩を押さえられてしまう。

「今日はゆっくりと休んで、明日に備えて」

サトシさんは帽子をぐっと抑え込むようにして被って、鍔が目を隠してしまう。

「それじゃあねルカちゃん。またどこかで」

そして背中を向けたサトシさんから、私は何ももう感じなくなっていた。

第十六章：カントー帰還　ＩＩ：史上最強の男（後書き）

はてさてサトシとルカの出会いというのは、ちょっと無理矢理かもしれませんでしたがいれておきたかったので書きました。

ルカ「サトシさんって優しいっていうか、なんか変わった人だよね」

その言葉は同系列として使っていいのかはわからんけど、まあそれでは次回お会いいたしましょう！

ルカ「じゃねー」

第十六章：カントー帰還　「裏」：はじまるは……（前書き）

今回被災された方々にはご冥福をお祈りしております。

自分の小説なんて微々たるものですが、待ってくださっている方々とそしてなにより自分のためにこれからもがんばっていきたいと思います。

それではメディター、お楽しみください。

第十六章：カントー帰還　「裏」：はじまるは……

ヤマブキシティ：

ヤマブキシティ内で一番高いビル、シルフカンパニー社。

その屋上の社長室でサカキは街を一望しながら、呟いた。

「そろそろ頃合いか？」

「恐らくは」

サカキの傍には一人の女性。彼女はそっとそう言うと、サカキの肩に両手を添えた。

「邪魔者を泳がせておくのもいいが、こちらにもやるべきことはある。なにもこの国が欲したが為にこのような計画を企てた気はない」

「わかっていますわ」

ロケット団がこの国を乗っ取ってから二月が経とうとしていた。

サカキがこの国を必要とした理由とはなんなのか？

「あなたが何もかもを犠牲にしてきてやり遂げたかったこととはなんなのでしょう？」

サカキは女性の手に自分の手を乗せて、力強くも優しく下ろしてやる。

「私が望むのはただ一つ。絶対的な力と優しささ」

「そう、でしたね」
絶対的な力と優しさ。
「時は熟し始めている。ならば我々は新たなる火種をもってして、加速させるだけだ」
「それがあなたの言う優しさなのでしょうか？」
サカキは意味ありげな含み笑みと共に首を横に振る。
「いいや、力だ」
両手を差し出し、サカキは深淵たる表情で告げる。
「私はいずれこの国から抹消されなければならない存在だ。ならば悪役は悪役らしく、舞台を盛り上げなければ面白くはないだろう？」
サカキは扉の前で待機していた秘書に向けて指を鳴らす。
「新たなる世界への扉は、現在を犠牲にしてはじめて開かれる」
秘書は一礼をすると共に部屋から退室する。
「このふた月……それが、私が与え得る猶予だった」
「それを以てしてあなたを超える者がいなければ、この国も終わりだと？」
女性は静かに微笑み、サカキもそれに応える。
「忘れてもらっては困るな。そうなってしまえば、それはそれで私

の野望も達成される」

ぐっと拳を握り、サカキは呻る。

「私が私の人生をもってして練った計画……完膚なきまでに壊しにかかってこい、未来を切り開く者達よ」

『これよりロケット団各幹部に告げる』

サカキが直々に育て上げた幹部達のインカムに、この放送が流される。

『我々のヘッド、サカキ様がこれよりミッションコード：Ｐｏｗｅｒ　ａｎｄ　Ｇｒａｃｅを発令した。各幹部は報告書に記載されている通り、ミッションを全うせよ。繰り返す、ミッションコード：Ｐｏｗｅｒ　ａｎｄ　Ｇｒａｃｅが発令された。各幹部は部下を引き連れ、ただちにミッションを遂行せよ』

発せられているのはサカキの秘書を務めている者の声であり、次にロケット団へとサカキが本来の目的で束ねていた者達へと命令が

行きわたる。

『ロケット団各団員へ通達。これより我々は本来の目的を遂行する。繰り返す、我々はこれより本来の目的を遂行する』

淡々と流れるアナウンスに、それを聞いていた団員達は各々の配置場所で静かに動きはじめる。

そう、彼らは新たに配属されてきた新米ではない。

彼らはサカキが歩んできた人生の中で集めた屈指のウォーリアーなのだ。その規模は決して多くはない、だがその戦力は一体どれほどのものなのだろうか。

世界はまた大きく揺れ動く。

シルフカンパニー社　幹部室：

先ほど流された通達をソファの上できいていたレイハがすくっと立ちあがり、握っていたするめいかを噛み切らせて笑みを浮かべる。

「やっと、やっとだにょ。遂にこの日がやってきたにょろー」
ニョロモをモチーフにしてつくられた丸く可愛らしい帽子をかぶった少女が、そう呟き幹部室からトテトテと立ち去って行った。

トクサネシティ：
そしてトクサネシティにてその報をきいたジムリーダーフウとランも、また……。

「ねえねえ聞いたかいラン？」
「ええ、聞こえたよフウ」
「待ったかいがあったってことかな？」
「きっとそうだよフウ、あんな負け方してストレス溜まっていたの」
「そうだね、わざと負けてあげるというのはストレスも溜まるし勝つよりも難しいことだから」
「いっぱいいっぱい暴れたい」
お互いに手を絡み合わせ、フウとランはそう嬉々とした声を上げる。
「もちろんだよラン。でも、その前にやることはやらなきゃね」
「わかってる。なら早く行きましょうか」

「うん、そうだね」
「ふふふ」
この二人がどこにいるかはわからない、だがロケット団幹部であるこの二人も静かにと動き始めていた。

シンオウ地方：
そしてまた一人、幹部であるこの男も――――。
「ふぅ、やっとミッションスタートですか。まあこんな変装ばかりの任務も飽き飽きしていたことですし丁度良いですね」
トウガンとヒョウタのジム戦に立ち会い、そして両名の死へと関与したこの男もまた心を弾ませていた。
「ジムを攻略させるのはいいのですが、そこに辿りつくまでに時間がかかり過ぎて困ります」
機は熟した……。つまりサカキのこの命令は、新しい世界へと向けられた新たな試練なのである。
「しかしまさかいきなり待ち伏せていたミオジムにビンゴが来ると

は思ってませんでしたが……」

男は携帯端末を取り出すとシンオウ地方のマップを映し出す。

そしてそのマップ上には赤く点滅する二つのマークがある。

「ミサカ　キリンとカンバル　アユミですか。もう少し情報を集めておく必要があるかもしれませんね」

男は端末を操作して耳元へと当てる。

「はい、こちら本部」

「ミサカ　キリン及びカンバル　アユミの詳細情報を送信してくれ」

「送信理由を」

「これより厳重監視対象へと移行する」

「了解しました。ですがミッションをお忘れになることなさいませんように……バラッド様」

「承知」

携帯端末をポケットへとしまい、男……否、バラッドはほくそ笑む。

まるで新しいおもちゃを手にした子供のように、無邪気にと。

「さてと……とりあえずは目下の仕事をこなすことにしましょうか」

バラッドがサカキの発令したミッション時に行わなければならないこと、それは……神の排除。

「アルセウス教の方がホウエンにいてくださって助かりますよ」

そう言い残して、バラッドは夜の闇へと消えて言った。

再びシルフカンパニー社　地下研究棟：

「オーキド博士、聞いたかや？」
「うむ、まあわしは以前から話を聞いていたからのう」

ここはシルフカンパニー社地下にある研究棟。オーキドがサカキより依頼された研究を行っている場所である。

「そげか。それで、ミュウツーの様子はどないなんだごせ？」
「うむ。前に話していた五つの木の実を覚えておるかの？」

今オーキドはリョウに託していたミュウツーを専用の培養液の中へと戻し、様々な解析データを集めていた。

ミュウツーは未だ完全体ではあらず、長時間のボール外活動、一定時間以上の戦闘等といった致命傷が残っているのだ。

「五つの木の実？　あぁー、あの幻と伝説の木の実だったかや？」

「ああ、そうじゃ。ナゾ、レンブ、イバン、ミクル、そしてジャポの実……この五つからなる幻の木の実たち。そしてチイラ、リュガ、カムラ、ヤタピ、そしてズアの実からなる伝説の木の実たち……これらを調合し与えたポケモンは真の覇王となると言われている」

リョウはわざとらしく感心したように口笛を吹く。

「でも博士ほとんど持ってるってゆーとったやん」

「そうなんじゃが……十ある木の実の内、八つは入手しておる」

オーキドは巨大な電子スクリーン上に十の内八つの木の実を明るく表示させる。

「てことーわー、チイラの実とレンブの実がないってーことかや？」

「その通りじゃ」

海の力を宿るといわれるチイラの実。そして一つ一つがコマのような形をしている奇妙な形のレンブの実。

「入手ルートが困難だが？」

「まあ、ちょっとわしの方でのトラブルでな……チイラの実はまったくもって手に入らんし、レンブの実はもう直手にはいるはずじゃ」

「ならチイラの実だけかいな」

「うむ。頼まれてくれるかの？」

「こっちは暇じゃけ、ええよ」

「助かる。おぬしの能力はこういう時役に立つからのお」

「へっ」

リョウはそうオーキドの頼みを聞きいると座っていた実験用ベッドから飛び降りて、そのまま昇降エレベーターへと向かう。

「情報はお前のポケギアへと転送しておくからのー」
「りょうかーい」
まるで祖父と孫のように、そんな親しそうな会話を交える二人。
リョウの姿が見えなくなるとオーキドはキーボードを操作して、画面上の木の実をグループ分けする。
五つ五つで伝説、幻のグループへと分ける。そして新たに二つの木の実をそのグループ上の頂点に位置付する。
伝説の実のトップにはサンの実を。そして幻の木の実グループのトップにスターの実を。
その二つの木の実が一体どういった効果を持っているのかは定かではないが、オーキドはこのことをリョウへと話すことはなかった。
「わしが利用される人間であるように、お前達も利用される側にいるということを忘れてもらっては困るの」
そう呟いたオーキドの顔は、マサラの悲劇で彼が見つかった時のように冷酷でいてそして狂喜染みた笑みを浮かべていた。

シロガネ山：

「ねえピカチュウ」

「ぴかっ？」

シロガネ山の麓……。ルカの鞄を盗んだとされる集団を壊滅させた場所にサトシは立っていた。

「あの子はなんで強くないのかな？」

「ぴかぴ、ぴかっ」

サトシは辺り一体をリザードンの業火で焼き払った為に地面が抉れ、剥き出しにされた土地は黒く焦げている。

なのでここに誰がいたのかはもはやわからないといった状態なのである。

「僕なら彼女程の潜在能力があったら、うらやましいほどなのに……」

とう言いながらサトシはピカチュウの顎をさすってやる。

「ぴきゃ～」

うれしそうにピカチュウが喉を鳴らして身震いする。

「彼女……ルカちゃんは、ケンくんよりよっぽど強くなれるのに。なのに彼女は力を求めようという意志がないみたいだった」

サトシはなにを考えているのだろうか？

「僕には理解できないな……」

ピカチュウの背中を撫でながらサトシはそう呟いた。

世界の頂点に座す者は、他の者とは違う。それはあたり前のことではあるが、一番理解されない部分でもある。

「シゲルには会えなかったけど、今は一刻も早くこのバッジを届けようか」

「ぴぃか」

サトシは再度ボールからリザードンを取り出して、背中へとまたがる。

「頼んだよ」

「リザァ！」

こうしてサトシはホウエンへと戻ったのであった。

第十六章：カントー帰還　「裏」：はじまるは……（後書き）

ルカ「ねぇねぇ」

ん？

ルカ「これからもよろしくね」

な、なんだよいきなり；；；　らしくないじゃないか。

ルカ「まあ、なにが起きるかわからないからさ」

あ、ああ。うん、大丈夫。これからもよろしくね

ルカ「うん！」

皆さまもこれからもどうぞよろしくです！

第十六章：カントー帰還　ＩＩＩ：コラッタ少年（前書き）

いやー、ただいま温泉へときております w

ルカ「いいよねー温泉。私もハルちゃんにはじめて連れてってもらった時は楽しかったなー」

是非サウナを試してみるといいよ。

ルカ「サウナ？」

サウナいいですよねサウナ！　では本編どうぞ！

ルカ「まったく関係ないような……；；」

第十六章：カントー帰還　ＩＩＩ：コラッタ少年

トキワの森：

『もし何かを成し遂げる為に何かを犠牲にしないといけないのがこの世の真理なら、あなたは得る物と失う物を天秤にかける？』

え？

不思議な問いかけによって、私はポケモンセンターのベッドの上で目覚めた。

ベッドに転がっているのは三つのモンスターボール。改めて手にとってまじまじと見つめてみると、私は嫌な気分に苛まれる。

サトシさんと出会ってから、私はポケモン達との接し方がわからなくなっていた。

不思議そうな表情で私を気にかけてくれるポケモン達。でも私は彼らの心配に答えてあげられない。

「あなたたちはなにも感じないの？」

だって、私には理解できなかったから。

こんなに小さなボールへと入れられて、閉じ込められて、使われる時にだけ外に出されて、それでいてなんで忠誠心を持っていられるの？

私なら、嫌だ。

サトシさんは史上最強のポケモントレーナー。だからあの人はポケモン達との共存において誰よりも理解して熟知しているものだと思っていた。

でも……あのサトシさんが私の鞄を奪った人達を潰したと言った時の、あの表情が私を苦しめる。

潰したのはサトシさん。でも潰せたのはあの人のポケモンの力によって……。それを自慢したげそうにしていた。

それは決して悪いことでもないし、人としてはあたり前。

なのに、なのに、なんで……？

「なんで、私は泣いてるの？」

ぽた、ぽた、と涙がガーディ達のボール上に落ちる。

わからなかった。

当然のことがわからなかった。

ただわかったのは、世界がこんなにも大きいっていうこと。

ロケット団というテロリストに国を奪われ、お母さんは行方不明。お兄ちゃんはこの国を奪い返す為に危険な綱を渡っていて、たくさんの人がそれに巻き込まれている。

なのに私には自分の親友を助けることで精一杯。

『自分の都合を貫けばいいんだよ』

そうサトシさんは言ってくれた。そしてその時、私は実感したんだ。

自分の都合を貫けばいいって。

でも、今改めてみると……悩んでしまう。この子たちをみていると、そう思ってしまう。

「ポケモンって、なんなの……？」

そこで私はトキワの森で私より小さな男の子がコラッタを使ってキャタピーを捕まえる場面を目の当たりにする。

キャタピーをコラッタの【体当たり】で弱らせて、ボールを当てて捕まえる。

男の子はコラッタと共に喜びを分かち合いながらボールを拾い、キャタピーを出した。

明らかにさっきまで敵対していたのに、キャタピーは素直に男の子に自身の体をゆだねていた。

なに、あれ……？

これがポケモンなの？

いままでは何も想うことはなかった。ううん、友達のそういった場面を何回もみてきたけど「あ、おめでとー」と言って一緒に笑顔になって喜んでいた。

でも今は違う。

恐ろしかった。

ボール……。こんなボールがさっきまで敵対していたポケモンを捕まえて収容したら、次出る時はトレーナーに絶対服従な姿勢を見せている。ううん、見せていなくてもそう見える。

過ぎ去っていく男の子をただ呆然として見つめながら、私は森に生い茂る一本の大木に体を傾ける。

私は今までポケモンを捕まえたことがない。

このガーディもお母さんが誕生日プレゼントにって言って、十歳の誕生日にもらった。それにシャワーズだってカナから預かって、ラルトスもミツルさんから託された。

だから私は野生のポケモンをボールで捕まえたことがなかった。

「あっ……」

腰のホルダーから勝手にガーディが飛び出して、私の足に思いっきり噛みついてきた。

「いたっ！」

甘噛みとはいえ、そうとうな力で私は我慢ならずにしゃがんでしまう。

するとガーディが怒ったように吠えて私の懐へとダイブしてくる。私はよろけてそのまま地面に尻もちをついてしまう。

「ちょ、ちょっとガーディ！？」

「ガウ！！」

ガーディは明らかに怒っていた……そして、泣いている？

「ど、どうしたのガーディ？」

「ガウガ！　ガウ！」

縋るように鳴き付いてくるガーディ。どうしたの？

私に何かを言いたそうに、訴えるように……。

「も、もしかして……傷つけちゃった？」

「がう！」

ガーディは鼻で人の感情を嗅ぎ分けることができる。

私がガーディ達のことを……ポケモンのことを恐いと思っちゃったから……。

私はガーディをぎゅっとその場で抱いて、涙する。

「ごめん！　ごめんね、ガーディ！」

「……くぅん」

私は何を考えていたのだろう。ガーディが恐いわけない……恐ろしいわけなんてないのに……。

この短い間にいろいろなことがありすぎた。

だから、ちょっとおかしくなっちゃったのかもしれない。

「ごめんね、ガーディ」

私はガーディの頭を優しく撫でてあげると、後ろから突然声をかけられた。

「君、トレーナー？　だったらバトルしようぜ！」

先ほどキャタピーを捕まえた少年だ。

「え？　私と？」

「ああ！　トレーナー同士、目が合ったらすぐバトル！　いくぜ！」

「わっ、ちょ、ちょっと？！」

「レディファイト、キャタピー！」

少年がボールからキャタピーを出して私とガーディの前に現れる。

売られたバトルは買わなきゃ損。それがスクールにあった教訓の一つでもある。今思えばおかしいんだけどね。

「それじゃガーディ、行ってくれる？」

「ガウッ！」

ガーディはたたっとキャタピーの前へと躍り出て、相手を威嚇する。

キャタピーは若干涙目になりながらガーディと対峙する。

「お、おいキャタピー？　だ、大丈夫か？！」

「きゃたぁぁ～」

「ガーディの特性は威嚇。相手の攻撃力を下げるって覚えておくといいよ！」

「な、なにを～！　卑怯だ！」

「そ、そんな卑怯だって言われても……」

まさかそんなことを言われるとは思っても無かった。

でも見るからに相手の子はつい最近旅をはじめたばかり。ここは先輩としていろいろと教えてあげなきゃね。

「ガーディ、先制で【体当たり】！」

「がう！」

「くそっ！　キャタピー、ガーディの来る道に向かって【糸を吐く】！」

え？

キャタピーの吐く糸がガーディの直線状に撒き散らかり、ガーディの足はそれに引っかかって転がってしまう。そしてあろうことか他の糸にもからまり、身動きが取れなくなってしまう。

ガーディは苦しそうにもがき、それが更に糸を体へと巻き込み拘束が強くなる。

あの子……素質あるのかも。

「へへ！　どうだ！」

ガッツポーズをして喜びを浮かべる男の子はキャタピーに止めの【体当たり】を命令する。

「なかなかすごいね。でもガーディが炎タイプだって忘れてもらっちゃ困るよ！　【火炎車】！」

ガーディの体から燃え上がるように炎が包み込んでキャタピーの糸を容易く焼き払ってしまう。

「げっ、きたねぇ！」

「汚いって、これがバトルだよ！」

なぜかこの時私は気分が高揚していたのを感じた。久しぶりのバトルだから？　それとも勝利を確信していたから？　そのどちらだとしても、私も結局はトレーナー気質だということなのだろうか。

そんな感情を胸の中に抱きつつ、私はガーディに大声で指示する。

「そのままキャタピーを吹っ飛ばして！」

さすがのキャタピーも赤く燃えたぎった相手を前には尻すぼみするしかできず、もろに攻撃を受けて戦闘不能に陥る。

「あぁ……キャタピー……」

男の子は悔しがると共にキャタピーを大事に抱きかかえてあげる。そうそう、負けたポケモンに一番大事なのはスキンシップ。

たまに負けたらそのままボールに戻しちゃう人がいるけど、それでもその時は労いの言葉をかけてあげないといけない。

それすらしない人は……私は嫌い。

「くそっ、なら頼むぜ相棒！」

キャタピーを抱きかかえながら右手を腰のポケットに入っていたボールを取り出してフィールドへと出す。

さっきのコラッタである。

「え……？」

そしてその時私は自分の目を疑った。

私はポケモンをみると大体の構造を理解し、そして弱点を……タイプ的なものではなく肉体的に急所となる部位を見つけることができる。

さっきのキャタピーはそれを見切るまでもなく、ガーディとの戦力的差は明らかだった。だけどこのコラッタはなにかがおかしかった。

「おらおらいくぞ！　コラッタ、【電光石火】！」

「ガーディ、【咆える】で牽制！」

何か嫌な予感がした。ううん、こんなことがいままで無かったから動揺しているんだ。

ガーディの牽制でなんとかコラッタの猛攻を阻止することはできた。

でもどうしよう。

いままでやってきた戦い方が通用しない相手。それも旅に出始めたばかりに思える男の子に負けるかもしれない。

さっきとは違った恐怖が私を襲った。

でも、でも、年上として……先輩として負けるわけにはいかない！

「ガーディ、あの技真似てみよっか」

「がう？」

「【陽炎】！」

以前お兄ちゃんが対戦していた子のリザードが使っていたオリジナルな技、【陽炎】。お兄ちゃんみたいに経験積んでいたら見破られるかもしれないけど、この子相手なら通用するはず。

あの時ガーディもちゃんと見ていた。だからきっとやり方はあの時わかったはず。

トキワの森は二月でも木々の上に多少の雪はまだ残っている。

「な、なんだ？」

ガーディが体内で溜めこんだ熱気がじわじわと体から噴出して、辺りの空間を歪みはじめる。

そう、砂漠などで起きるあの現象を引き起こしているのだ。それの凄いバージョンだって思ってもらえればいいかな。

コラッタもまだ見極めができていない今がチャンス。

ガーディは次に炎を口から放って、それは綺麗な弧を描いてコラッタに飛んでいく。

「コラッタ、避けろ！」

コラッタでも軌道は見極められる。自身の視界を頼りに軌道上から身を引いたその時、コラッタは衝撃を受けて吹き飛ばされる。

「え？！」

コラッタはそのまま動かなくなり戦闘不能。私達の勝ちだ。

きっとこんな感じなのだろう。

私がいままで戦ってきた先輩達も勝った後はこんな気持ちに駆られたのだろうか？　これからも強くなるであろう後輩を見ながら、安堵と期待を膨らませるこの不思議な感覚を……。

「くそっ……俺の負けだ。ほら」

「え？」

「ポケギアだよ、賞金渡さなきゃいけないだろ」

「あ、う、うん」

やっぱり小さな子からもらうのは気が引けるけど、ルールはルール。私達はお互いにポケギアを赤外線にて通信しあい、情報の交換と賞金の引き渡しを行う。

「次会った時は絶対に負けないからな、ルカ！」

「楽しみにしてるよ」

「じゃあ、覚えておけよな！」

相手の子はそう言い残してコラッタを抱えてトキワシティの方へと戻っていった。

私はそれを見送りながら、彼のコラッタのことを思い出していた。

ポケモンだから人並み以上の動体視力をもっている……でもあの時ガーディの攻撃を避けようとした取ったコラッタの回避は他のコラッタ達とは次元が違った。

体の身のこなし……あそこまで体と足をばねにして跳躍するポケモンを私は見てきたことがない。

一体あの子は……？

そんな疑問を抱きながらも、私はハナダへと戻る為にニビシティへと向かうのであった。

第十六章：カントー帰還　ＩＩＩ：コラッタ少年（後書き）

えっと新キャラについてですが、当分放っておいていいです。

ルカ「え、そうなの？」

うん

ルカ「……」

では！

第十六章：カントー帰還　ＩＶ：帰ってきた故郷、そして……（前書き）

さて、一体ハナダシティに戻ってくるまでいくらかかったことやら；；

ルカ「長かったね；；」

実質小説内の時間経過は二カ月ほどですが、リアルタイムだとこうなりますよねｗ

ルカ「言い逃れ、無理だから」

う・・・。ど、どうぞ！

第十六章：カントー帰還　ＩＶ：帰ってきた故郷、そして……

ニビシティへと出た私は、その日の内にバスを使ってハナダシティへと向かった。

ニビからハナダまではバスを使って二時間ほど。オツキミ山があるせいで山を迂回せねばならず、それが原因であまりニビハナダ間の交通は便利ではない。

まあそれでもオツキミ山の中を通るよりはましだからいいんだけどねー。

私はそうオツキミ山をバスの車窓から眺めてそう考えていた。昔はスクールの遠足で入ったことがあるけど、あんな不気味の悪いところ頼まれたって行きたくないよ。

オツキミ山はピッピが出ると言うことで一部の女子には人気があるけど、あまりにも出くわさないから最初は意気込んでいても途中で諦める子が多い。それでもたまに一人がピッピを捕まえて戻ってくると、また躍起になって戻っていくのも多かったりする。

一回カナが欲しいとか言っていた気もしないでもないけど、ちょうどその時にイーブイをカスミさん達からもらって忘れちゃってたなぁ。

そんな懐かしいことを思い出しつつも、ガタゴトと揺らされて私はハナダの街を視界にとらえるようになる。

あの謎の女の人が作り出した氷の花弁は今ではすっかり無くなっ

ていてハナダデパートは完全に取り壊されていた。

あれから二カ月かぁ……。外観はさほど変わりなくても、やはり自分がいた時とは若干違っていた。

「あ……」

道沿いに歩いていると、目に入ってきたのは私の家だった。決して大きいとは言えないけれど、たくさんの思い出が詰まった私達の家。

二カ月、それは意外にも長い時間なんだなってことを感じさせる。なんかもう一年以上いなかったような、そんな錯覚に見舞われる。

でも私は家へと帰ることはしなかった。だって帰る時は家族皆一緒じゃなきゃいやだもん。

ハナダデパートのある市街を抜けるとその先にある病院へと私は一直線に向かって行く。

「あの……。テンドウ　カナミさんの病室は……」

「テンドウ　カナミさんへの面会は許可されておりません」

「え？」

そ、そんな……。

そういえば前もそうだった。私はあの事件以来、カナに会っていない。その時は検査とかいろいろ大変だったからと諦めていたけど、まだ駄目だなんて……。

「そ、そんなにひどいんですか？」
「こちらから提供できます情報はございません。どうぞお帰りを」
これもロケット団のせいなの？
「あっ、ちょっとお客様！？」
受付で私は踵をひるがえして、そのまま病院の階段を駆け上がっていく。働いているナースさんやお医者さんを横切っていきながら、私は違和感を抱いていた。
そう、ハナダ病院へ私は結構遊びにきていた。だから知り合いの人も結構いたのに、今見るのは知らない人ばかり。嫌な予感だけがふつふつとわき上がってくるのを感じた。
「ガーディ！」
病院の中でポケモンを出すのはいけないこと。でも、今の私にそこまで配慮する余裕などなかった。
「カナの場所わかる？」
「……がうが！」
ガーディならきっと見つけてくれると信じて……。
するとガーディが立ち止まり、階段を駆け上がっていく。私は急停止してガーディの後をついていく。
この病院では二階三階を普通患者の病棟にしていて、四階より上を特別な患者さんを収容している。

消毒液の醸し出す独特な薄い匂いが、この病院を一層外界とは遮断された異空間であることを再確認させられる。

「がうっ」

そしてガーディがその鼻先を向けるのは一つの病室。その先にカナがいるんだね！

ガラッ！　と勢い良く開けた扉の奥、ベッドに横たわっているのは一人の少女。そう、カナの姿……。

「カナっ！」

私はベッドに横たわるカナの傍に駆け寄って、親友の寝顔にほっとしながらも悲しみを払拭できない。

まだ、カナは……。

カナのベッド横には心拍や血圧を示すモニターが点灯していて、ピッ、ピッという電子音が聞こえてくる。

静寂に包まれたこの病室で、なぜカナだけはここにいるのだろう。他にも、あの日に犠牲になった人はたくさんいるのに……。

もしかしてカナがポケ人の言っていたポケ人だから？

「おぉ～っとー、懐かしいなー」

！？

私はその声に即座に反応して病室の扉へと視線を向ける。

そう、そこにいたのはリョウさん。サカキの息子……ロケット団の……。

「リョウ、さん」

「そげに恐い目せんでごしない」

私はきっとリョウさんのことを睨みつけていたんだろう。彼はいつものひょうひょうとした雰囲気で話しかけてくる。

「またこうして会うことになーとはな〜、わーもびっくりだけぇ」

「……」

私はじりじりとカナの方へと下がっていき、カナの左手を握りしめる。

「まー、そこどいてもらってもええかぁ？　わはその女に用があーけん」

リョウさん……。

ポケ人が言っていた、もう一人の八柱力。

八柱力にはお互いを引き合わせる力がある……そう、ポケ人は言っていた。でもなんでいまごろになってリョウさんがカナを必要とするの？

なんで私がここに来てから？

「ああ、そうそう。それとそげがもっとぉチイラの実も渡してもらおかー」

！？

なんで、そのことを……。

「わはなー、変な特技がそれこそわいがもっとぉよーな特技と一緒だけん。それをもっとぉだけだが」

つまりリョウさんもすでに八柱力としての、なにかしらの力を持っているっていうことになる。

「わいが【見破る】を継承しとぉなら、わはどうやら【欲しがる】を継承しとぉみたいなんだが」

【欲しがる】？　えっと、確か相手ポケモンの道具かなんかを攻撃したら奪う技だったはず。

でもどういうこと？　私が【見破る】を継承してるって……？

「だけん、わいがその【未来予知】をもっとぉそいを目覚めさせぇのは都合が悪いんだがん」

！？

ポケ人は言っていた。

特殊な力を持つ、八人の八柱力。もしリョウさんが言っているこ

とが真実なら、その人達はそれぞれにポケモンの技を継承しているということになる。

でも、なんで？

そのことはまだわからないし、考えている暇もなさそうだ。

「まあこの技はわいが導かれるだけだけん。まさかこうも二つの都合が見事に重なるとはおもっとらーせんかったし、ケンケンの妹にこうやってまた会うとも予想だにしなかったわ」

飄々としたハイア方言で喋るリョウさん。

リョウさんの能力は、自分の求めるものに導かれるというものみたい。だったら、きっと……。

「もしかしてハナダのデパートに来たのも、何かに導かれたってことですか？」

「あ？　ああ、ああ、そうだけん。ケンケンのことを片した後に、次に倒さなと思って導かれたのがあそこだっただが。でも、まだ腑に落ちんことがあったんだけん」

腑に落ちなかった点？

「あの時、わがあそこに到着した時、あそこにわが求めるもんはいなくなっとーただが」

え？

「だけんど、また同じ感触をわは味わった。つまり、あそこにいた

……わが求めとった人物が消えて、違う標的に変わったっちゅーことだけん」

どういうこと……？

「わもよぉわからへん。でも、今なら言える。わい達二人は、ここで死んでもらうけん」

リョウさんの手が腰へと回っていくのを見て取った私は、すぐさまカナを握っている手に隠し持っていたボールのスイッチを入れる。

「ラルトス、お願い！」

私は目を瞑って、しっかりとカナの手首を握った。

そして次の瞬間、私達は【テレポート】した。

ハナダシティ：

あれ、ここは？

次の瞬間、私とカナがラルトスによって転移させられたのはどこか見覚えのある場所だった。

ある家の中に私達は来ていたのだ。

普通、【テレポート】では他人の家や建物へは侵入できない。それはこの国の建築基準法で定められていて、ある装置が発する特殊な電波によってポケモンの【テレポート】による人の侵入をさせないとかなんとか。

恐らくはポケモンの思念を妨害することで座標ポイントを決める演算を邪魔しているんだと思うんだけど。

でもその反面、【テレポート】による自分の家への転移はできることになっている。

というかそれぐらいしかできないんだけど、きっとラルトスはカナの念を強く感じたんだろうな。

そう、だってここはカナの部屋だから。

「ありがとう、ラルトス」

「ら〜ぅ」

カナは自分のベッドの上に病院の時と同じようにして眠っており、私はとりあえずカナをそこにいさせて下へとおりた。

「え……？　ル、ルカちゃん？！」

「ど、どうしてここに？」
「あらー、いらっしゃい」
カスミさんを除くカナのお姉さん三姉妹に驚かれ（若干一名を覗く）ながら、私は事情を簡単に、そして真意には決して触れずに説明する。
そしてあたふたと手振り身振り説明していたところに……
「ねーサクラ～、私の着替えどこにあるか知らない？」
え？
「あれ？」
突如としてリビングに現れたのは、ブラジャーとホットパンツだけをこの寒い冬の中に穿き、髪をタオルで拭いている人物……。
その人は私の存在に気付くと、目を見開いてこちらのほうにやってくる。
「ルカちゃん！　無事だったのね！」
「せ、先生……！？」
そう、この人は私がハナダ病院で一番親しかった先生。あのカナが運ばれた時に、私のことをカウンセリングしてくれていた人。
ぎゅ～っと先生は私を抱きしめてくれて、それがとっても温かくて私は抱き返していて泣きそうになった。

「あの後、なんにも連絡なかったから心配していたんだけど無事でよかった。家に行っても誰もいなかったから」
「……ごめん、なさい」
「ううん、いいのよ。それにあの警察ときたら何も教えやしないんだから！　しまいには病院から追い出されて狙われるわ、もう散々よ！」

普段は大人しそうで茶目っけのある先生だとは思っていたけど、ここまでさばさばしてたんだ。やっぱり仕事場と違うとこうなんだ、と思ってしまう。

「でもどうして先生がここに？」
「ああ、そうそう。私サクラとは同期だったのよ、それで匿ってもらってるの。ここジムリーダーの家でしょ？　隠れるならここかなーってね」

確かに、ここなら安全かも。ん？

なのかな？

「それよりもルカちゃん、一体どうして急に？」

ああ、そうだ！

私はカナのことと彼女と一緒に逃げてきたこと、そしてチイラの実を持っていることを告げる。

「チイラの実？　本当に？」
「は、はい！　ここに」

私はポーチの中からポロックケースを先生へと渡す。

「いままで見たことが無いけれど、きっとそうなんでしょうね。よしわかった、これでカナちゃんを元気にしましょっ！」

「はい！　お願いします！」

その時見た先生の顔はとても凛々しくて、そして頼もしかった。

第十六章：カントー帰還　ⅠＶ：帰ってきた故郷、そして……（後書き）

懐かしい人達を出していきながらも、物語はどんどんと加速していきます。

ちなみに【欲しがる】やら【見破る】などはこちらの都合上、この作品において勝手な解釈をさせていただいておりますのでご了承ください。

ハナダに戻ってきたので、いろいろと伏線回収していきますｗ　覚悟しておいてくださいねｗ

では！

第十六章：カントー帰還　Ｖ：カナとの再会（前書き）

サブタイ通りなのでご心配なく！

ルカ「やっと、やっとここまできたよ！」

いやーまさかここまでかかるとは……；；

ルカ「それじゃレッツゴー！」

第十六章：カントー帰還　Ｖ：カナとの再会

テンドウ家：

「ふっふっふ、昔やってた私の趣味がこうもこんなとこで役に立つなんてねぇー」

やる気満々といった感じで先生は袖をたくしあげて腕をぶんぶんと振りまわす。

「あ、あのサクラさん」

「なぁにぃ？」

……サクラさんっていっつもなんかこう間の抜けた返事するよな～。って、今はそんなことはどうでもいいんだった。

「先生とは一体どういう……？」

「えーっとぉねぇ、一緒の専門学校だったのよぉ」

専門学校。

「まあ、といっても専門は別だったけど。コーディネーターに憧れながら、親にしょうがなく言われて医者になったのが運の尽きってもんよ」

いや～、しょうがなくで医者にはなれないと思うんだけど……。

私は内心冷や汗をかきながら、それでも先生の診断に見入る。

「手術後に一回カナちゃんの容態を診たんだけど、その時にはもう背中に刺さった棘の痕は綺麗さっぱり消えてたわ」

先生はカナを横たわらせて、背骨の方をなぞる。

「でも刺さった場所が悪かったわね。神経系がもろにやられて今のままじゃ修復はできないんだけど……このチイラの実、効果は知ってる？」

私から受け取ったポロックケースからチイラの実で作られたポロックを、先生は取り出して掲げて見せる。

「えっと、でも確かどんな病気でも治せるって」

「そうね、でもそれは昔の伝承。まあ医学界でもあまり詳しくはわかってはいないんだけど、チイラの実には再生医学に革命を引き起こすほどの効力が秘められてるの」

再生医学？

確か死んだ細胞や組織を復活させるための医学だったはず。でもそれには長い年月と費用がかかるって言われてたはずだけど……。

「再生医学、まあ再生医療とも言われているけれどチイラの実自体に再生力を促す成分があることがわかったの。ま、原因もなにもかもが謎だらけだけど」

チイラの実にそんな効力があったんだ。

だからあの時も機能が停止しかけていた私の臓器や活力が一気に戻ったんだ。

普通だったら長期の入院に加えて点滴漬けの毎日だったはずなのに。

「てっとり早いのは注射で直接なんだけど、そんなのはないし……。溶かして飲ませるしかないか」

先生は台所へと下りて言ってぬるま湯で溶かしたチイラの実のポロックに、レモン、塩、そして砂糖を混ぜ入れる。

「それじゃルカちゃん、カナちゃんの頭支えてくれる？」

「あ、は、はい！」

本格的ではないけれど、これが医療に携わることなんだろう。そういった感覚が私に使命感を漂わせて、気が引き締まる。

とくっ、とくっ、とくっとカナの小さな唇に少しずつ液体が流し込まれていく。

人間の体、強いては生物には脳が働かずに反応するものがある。例えば無意識のうちに出てしまう反応……ものを食べる時に出る唾液や膝小僧の下を打たれて足が勝手に動くといった類がそれ。

コップに入れられていた最後の一滴までカナの口へと消えていき、先生は一息つくとカナの顎に添えていた手を離す。

「チイラの実がどれほどの効果があるかはわからないけれど、今日明日中には目を覚ますでしょうね。できればもらって研究したいところだけど」

先生はポロックケースを私に返して、そう言った。

「す、すみません」

「いいのよ。それに、自分で見つけてみたいっていうのが本音だから」

まだこれからこのポロックが必要となるかもしれない。だから、先生には悪いけど手放すわけにはいかない。

それにカナに一番に見せたいのもあるから。

「それじゃ、私は下に降りてるわ。もしなにかあったらよろしくね」

「は、はい！」

私はカナの部屋の中で、一人カナの看病をすることにした。

カナの手をぎゅっと両手で覆って、私は親友の目覚めを待つのであった。

「んっ……」

私はいつの間にか眠ってしまっていたようだ。

部屋の中は真っ暗で、自分の肩には一枚の毛布がかかっていた。きっとサクラさん達の誰かがかけてくれたのだろう。

私は瞼をこすりながら、自分が看病をしていた友達を確認しようとする。

するとベッドの上には誰もいないことがわかった。

「え？」

そんな馬鹿なことがあるはずがない。だって、ここにはカナがいるはずなのに。

はじめに湧きあがった不安が、ある一つの希望へと変換されようとするより先に、私を後ろからぎゅっと抱きしめてくる感触があった。

「おはよう、ルカちゃん」

それは、私がずっとずっと待っていて、今までの間失っていたものだった。

そう、ポケ人のじゃない、正真正銘なカナの声。

「カナっ……」

私は首に回された腕に自分の手を置いて、静かに涙した。

ぎゅっ、と次第に込められる力が強まっていく。

「カナぁ」

「うん、大丈夫。私はここにいるよ」

嗚咽に涙と鼻水がまざり、私はただただ泣いた。

その間もずっと、カナは私に体を密着させてくれた。

やっと、私達は再会したのだ。

そんな実感が私の心をそおっと勇気づけたんだ。

「ご、ごめんね、な、泣いちゃって」

「ううん、いいの」

改めてこうやって面と向き合ってみると、なんだか妙に照れくさくなってしまう。

う、うれしいからかな。あはは。

「ルカちゃん」
「は、はいぃ！」

なんでこんなに緊張してるんだろう、私……。

「本当にありがとう」
「う、ううん、そんな……私はただカナを助けたかったから……」

誤魔化し笑いを浮かべてはみるものの、カナには通用しないんだろうなー。

でも、なんだか今のカナは……なんて言うんだろう、前とはなにか違う雰囲気を醸し出している。

「なんかカナ、変わったよね」
「え？　そうかな？」
「なんか、しっかりしたっていうか……」
「それ、ルカちゃんには言われたくない」
「うっ、ご、ごもっともで」

確かに……。

「あの日からね、私でも良くわからないんだけど……ずっと夢を見てたの」

夢？

「その夢はとっても現実的で、いくつものことを見たの。それでさっき起きてからその事柄を全部調べてみたら……その全てが起こっていた」

え？　それってつまり……。

「うん、私が見ていた夢は全部正夢だった」

そこで私はカナがどれほどのショックを受けて、それを出さまいとしていることに気付く。

だから私はそっとカナの手をとって、今までの二カ月であったことを喋った。

「そう、だったんだ……。ケンさんも、やっぱり……」

「うん。でも、ね、これからどうすればいいかわからないんだ」

私の目的はカナを助けることだった。

でもそれが達成された今、どうしていいのかわからない。

私はこの時、自分がどういった状況に置かれているのかすらきちんと理解していなかったのだ。

「あのね、ルカちゃん」

「う、うん」

「もしもね私がお正月の時に見た夢が、私の能力が開花した瞬間だったとしたら……きっと私の力は前よりも増していると思うの」

「うん」
「だから私も一緒にルカちゃんと旅に出る」
「え？」
突然のことに私はきょとんとしてしまう。
「ちょっと待ってて」
カナはすくっと立ちあがって、すたすたと下へとおりていった。
あ……。
そしてその時、私はカナの着替えていた服がわずかにだけど乱れているのに気がついた。
いつもなら、どんな急に訪れても、どんなタイミングでカナに襲いかかろうとも、カナの身だしなみはきちんとしてた。それがコーディネーターとしての作法だからとかなんとか言って……。
目が覚めて、まだ気が動転しているのかな？　でも、それにしては今までの会話を通してそんな気がしない。
下の方からはカナのお姉さんたちとカナの声が聞こえてくる。最初は歓声が沸いていたけれど、だんだんと真剣な声色が届いてきた。きっとさっきの話をしているんだと思う。
「お待たせ、ルカちゃん」
そして戻ってきたカナの服装はちゃんとしていた。

「う、ううん」
「それじゃ、行こっ」
「え？　でも、どこに……？」
「真実を探しに」

え……？

真実？

その時のカナの表情は、どこか使命感を帯びていてそれでいて凛々しかった。

「ルカちゃんがポケ人から言われたこと、それと私達が八柱力だということ……。それはもう決まっていることだけど、私達はなんで？　どうして？　かを知らないといけないんだよ」
「カナ……」

優秀だけど、どこか抜けていて、恋には一図でとにかく頑張るような良い子だったカナ。だけれども、今ここにいるカナはカナだけど、えっと、なんていうのかもっとすごい。

私なんかよりも、ずっと、ずっと……。

「カナは、凄いね、やっぱり。私なんかにはとっても考え付かないよ……。あはは」

そしてなぜか涙がこぼれてきた。

ただカナを助けたいが為にここまできた。

だけど、本当に私が思っていた以上に世界は大きくて大変なんだって……。うぅ、ひぐっ……。

「ルカちゃん。大丈夫、私がいるから」

やっぱりカナには敵わないよ……。

私はカナの抱擁に顔をうずめて、静かに泣いた。

その時、部屋の外にお姉さんたちと先生が聞き耳をたてていたことはまた別のお話……。

恥ずかしいよぉ……。

「それじゃ、いってきます」

「頑張って来なさい。私達一家は皆、一度言ったら聞かないから」

アヤメさんが苦笑して、そう私達二人を見送ってくれる。

「またいつでも戻ってらっしゃいね」

柔和な笑みを浮かべてサクラさんは手を振ってくれる。

「いつまでも待ってるから」

ボタンさんは涙を堪えているようで、それでも笑顔を絶やさないでいてくれた。

「うん、行ってきます」

「行ってきます！」

私は若干緊張していたんだろう、それでも最後に視線は先生へと向けられていた。

「ルカちゃん、頑張ってね。まあまたなにかあったら頼りなさい……その時までにはあの病院取り返してやるんだから」

「はいっ！」

私は最後に先生に抱きついて別れを告げる。

こうして私とカナはハナダシティを離れた。私はまだカナからちゃんと目的地を聞き出せてはいなかったけど、でもカナと旅に出ることに自然と気分が昂揚していた。

カナは私達が八柱力である理由を探りに行くと言っていた。

「ルカちゃん」

「なぁに、カナ？」

「なんか嬉しそうだね。顔がにやけてるよ」

「え？　えへへ、そうかなぁ？　あ、そうだ！」

私は思い出したようにシャワーズの入ったボールをカナに手渡す。
「はい！」
「ありがとう、ルカちゃん。おかえり、ごめんねシャワーズ」
そして私はカナにチイラの実でつくったポロックを見せようとポーチの中を探すけど、見当たらなかった。
あれ？
「それじゃ行こっかルカちゃん！」
「え？　あ、うん！」
こうして私達の新たなる旅がスタートした。そう、やっと始まったんだ。

第十六章：カントー帰還　Ｖ：カナとの再会（後書き）

さて次は「裏」です。

まあ短くなるかもしれませんが、それでもまあいろいろと回収すると言ったのでｗ

ルカ「たのしみだなーどこいくんだろー」

ではでは～

第十六章：カントー帰還　「裏」：彼女の覚悟（前書き）

さて裏です。

ルカ「そうだねー」

今回はカナを主軸としておりますので、はじめてかもしれない。

ルカ「おお、たしかに」

それではどうぞー

第十六章：カントー帰還　「裏」：彼女の覚悟

ルカがカナの看病をしている最中に居眠りをしていた時、すでにカナは意識を取り戻していた。

「んっ……」

むくりと起き上がる彼女の自慢の髪はさらさらとしていながらも乱れており、未だ目が完全に覚めていないのかしょぼしょぼとしていた。

「ルカ、ちゃん？」

カナは自分のひざ元で眠りこけている親友の姿を見て、眉をひそめた。

眠っている間に、自分はいくつの夢を……いや、予知を見たのだろうか？

数えきれるものではない。そして、そのどれもが回数を重ねるごとに規模が大きくなっていった。

そしてルカが自身を助け出してくれた、あの病室の出来事ももうすでに見てしまっていたのだ。

だからわかる。

次に何が起きるのか。そしてそれをどうやって防げばいいのかを。

「ルカちゃん、ごめん」

カナはルカのポーチを探り、そこからポロックケースを取りだした。自分ですらはじめて見る希少な木の実を使ってつくられたポロック。

そのポロックをたった一つでもシャワーズに食べさせれば、トップコーディネーターの道など容易い。それほどの代物が、まだ二つも残っているのだ。

でも、自分にはやらなければならないことがある。今度は私がルカちゃんを守る番。そうカナは自身に言い聞かせた。

部屋をこっそりと抜けだし、カナは姉の部屋へと忍びこんでカスミのモンスターボールを手に取る。

カスミはダイゴやサトシと共に行動しているが、家族はそのことを知らない。むしろ指名手配犯とされており肩身は狭いのだ。

そんな彼女はジムリーダーとして数々の水ポケモンを育て、管理している。その内の一匹が入ったモンスターボールが、今カナが手に持っている内の一つである。

「借りるね、お姉ちゃん」

カナはそう今はいない姉に謝罪し、その部屋の窓を開ける。

ベランダへと通ずるその窓を抜けて、非常用梯子を下ろしたカナはそのまま自分が育てている木の実が植えられている花壇傍へと移動した。

いわゆる裏庭である。

カナはそこで右手にモンスターボール、左手にはポロックケースを携えてただひたすらと待った。体を纏うのは病院で着せられていた薄い黄緑色の検査服で、今の時期、外にいるだけでも底冷えするというのにカナは動じていなかった。

そして幾分待った時、裏庭に突如として二人の人間が現れる。否、片方は人間ではなくポケモンだ。

「ん？　目覚めとったんだが？」

「はい、おかげさまで」

カナが目の前で対峙しているのはサカキ　リョウ。そして彼が率いていたのはミュウツーであった。

こうやってカナは久しぶりにリョウと再会を果たす。

カナとはおもえない程に鋭い視線がリョウとミュウツーの動きに注意を払っている。

「恐いけ、落ち着きないや」

「落ち着いていられると思いますか？　ルカちゃんにあんなひどいことをして……私はあなたを許しません」

ルカがカナを想っていたように、カナもルカを想っている。

そしてカナはルカの危機をすべて夢で見ていた。ただ見ているだけで、わかっているのに何もできない自分の無力さが彼女の苛立ち

をここまで露わにさせているのだろう。
「逆ギレか？　そげなもん、無意味なことだが」
「そうですね。そうかもしれません」
カナは一歩リョウへと近づいていき、そして左手に持っていたケースを払うようにして投擲した。
「おっと」
要領良くリョウがそれをキャッチすると、カナはそのまま真っ直ぐを見据えて告げた。
「これであなたが望むものは手に入ったはずです」
「そげだな」
リョウは指でつまんだケースの中身を確認すると、静かに頷いた。
「これでわに手、引けってことだが？」
「ええ」
密かにリョウは笑みを浮かべるとカナに向けて今度は小さなパソコンのような機械を取り出して、二人のちょうど真ん中の地面へと投げ捨てる。
「これは？」
「ここの家のセキュリティを割る時に使ったもんだけぇ。いくらミュウツーの【テレポート】でも突破できんかったんだがん」
「もう必要ないと？」
「ロケット団が掌握していたセキュリティ会社からデータを転送さ

せ、ここの庭に入る時に使っただけだけん。心配はいらん」

ポケモンの【テレポート】で他人の家、あるいは敷地に入ることはできない。それはセキュリティ会社と契約している者に限られるが、大抵の家を購入する時にはそのサービスがついてくるためほとんどの世帯がそうなっている。

つまりリョウがここにミュウツーと共に来ることができたのは、セキュリティ会社からのコードを使いカナの家のセキュリティを無力化したからなのである。

「そんなこと、別に聞いてませんが？」

「言うがん」

リョウは好戦的な表情でそうカナに向けて言葉を放つ。

「今ここでわいを倒してもええだが？」

「やってみれるものならやってみてください」

カナはリョウの挑発を挑発で返し、両者の緊張は糸のように張りつめており、いつでも切れそうであった。

リョウの一歩半手前にミュウツーが右手をのばした状態で待機し、カナはカスミのスターミーをボールから出して臨戦態勢を取らせる。

しかしリョウはここで戦う気はなかった。なぜならば仮にもカナはカスミの妹であり、他の姉はここにいる。向こうもポケモンバトルのプロであるならば、自分自身はまだ経験の上で劣っていることはわかっていたからだ。

それにリョウには、本当にここにいる理由がもうなくなってしまっていた。彼の能力、【欲しがる】を元にした力が彼の本能になにも告げなくなったのだ。

つまりリョウは導かれてここ、テンドウ家の庭へと、カナの持っているポロックケースがあるから来たのである。その為にセキュリティコードを手に入れる必要があり、時間を浪費した。

もしカナがポロックを隠し持っていたとしたならば、リョウの本能はまだここにいろと継げるはずなのである。

「ま、ええけ。とりあえず今は身を引くわ」

両手をあげて、リョウはそう言い残すとミュウツーと共に背を向ける。

「一つ、答えてください」

「あ？」

そしてカナも彼が退くとわかっていたのだろう。なので間髪いれずにそう問いかけた。

「あなたは自分がなぜそのような力を持っているか、疑問に思ったことはないんですか？」

同じ八柱力が目の前にいる。

その人物は人間としては認められないけれども、それでも同じ能力を持った人間なのだ。そして人間であるならば、それぞれの思惑がある。思う所があるはずなのだ。

「思わんなぁ。わの力なら力で、ただそれだけだけん。別に持って生まれたもんなんやけん、特別なんやろ？　ははっ」

一拍置いて、リョウは顔を手で覆って嗤う。

「こうもあからさまに他人とは違うって神が言っとーだけん、感謝せんとな？」

そしてカナは今一番にリョウから禍々しい気を感じ取ったことがなかった。

「そう、ですか」

「ならな。【テレポート】」

そう言い残してリョウはミュウツーと共に立ち去った。

時間はさほど経っていないだろう。だがカナが体感した、リョウとの会話は彼女の寿命を幾分か縮めるほどに圧迫していて、それでいて圧倒されてしまった。

「……ふぅ。あれ？」

一息ついたと思ったら、カナの足はずるずると崩れ落ちるようにして腰が地面へと落ちてしまう。

「情けないな。これじゃルカちゃんに顔向けできないよ」

腰が抜けながらも、カナはリョウとのやりとりで得た情報を頭の中で改めて整理する。

「でも、得たものは大きいかな。やっぱり私は八柱力なんだ」

いくら【未来予知】の力を持っていたとしても、確証が得られなければ意味がなかったし不安であった。

リョウはカナを見てまず一言目に目覚めたかと聞いてきた。それはつまりリョウが、カナがどういった状態であったか知っていたということになる。

そして求めていた物がチイラの実であること。彼が連れていた正体不明のポケモン。何も手を出さずに帰っていったこと。

「こんな、こんな力なんて欲しくはなかったのに……」

そして彼女は今後、世界がどうなっていくかのヴィジョンがもう見えていた。それは彼女が望まないもの。そしてこんな力自体、カナは望んではいなかった。

スターミーがカナを心配して身を寄り添える。

「ありがとうスターミー」

カナはスターミーを抱きしめながら、ぽろりと静かに涙を流す。その一滴が頬を伝ってスターミーの核である鉱石の上へと落ちる。

それに呼応するようにスターミーはその宝石を明滅させて、カナの悲しみを共感する。

カナはスターミーをボールへと戻して立ち上がり、はしごを使っ

てまた元の部屋へと戻る。

自分の部屋でベッドにもたれて眠る親友に毛布をかけ、カナは着替え始める。

友人のものを勝手に取ってしまった罪悪感、それが今のカナにとってつもない軋轢をかけていた。だからだろう……着替える時に彼女の手が震え、そして普段から慣れている動作もできなくなってしまう。

カナが見る【未来予知】の力……それはなにしも全てを知るということではない。彼女が夢の中で見るのは断片的なシーンと音の流れ。

普段ならばその奔流に惑わされ、情報を掌握できない。なぜならば夢というものは一晩をかけて脳が整理している記憶の断片であるからである。

なので夢というものには自分の中で得たものしか映らないとされている。

しかしカナの場合、夢の中で未来を見ることができる。それがカナの力であり、彼女にはその溢れる情報を整理できるほどの記憶力と集中力があるのだ。

それはもしかしたらトップコーディネーターを目指す彼女が得意とするありとあらゆるポロックやポフィンの組み合わせを覚えていたり、どんな木の実でも一目でわかるといった特技からくるものなのかもしれない。

だからこそ彼女は賢いがゆえに現状を掴むことができた。

ルカとの約束を果たす為、自分の夢を叶える為に準備していた旅の荷物を再確認してカナは鞄のジッパーを閉じる。

するとルカがもぞもぞと動き始めて、あたりを見回し始める。

カナはそこで微笑んで、親友を後ろから抱き締める。

久しぶりに感じる友達の温もりに、匂いに、鼓動にカナは胸が一杯になっていくのを感じた。

「おはよう、ルカちゃん」

帰ってきたよ、ルカちゃん。そう心の中で呟きながら……。

第十六章：カントー帰還　「裏」：彼女の覚悟（後書き）

はてさてここいらでなぜカナが頭良かったかっていう伏線を回収なわけです。

ルカ「・・・途方もないよ」

うん・・・。まあ他にもいろいろあるしw

ルカ「お楽しみに～」

第十六章：カントー帰還　ＶＩ：八柱力（前書き）

ここより注意事項を述べさせていただきます。

ルカ「なに？」

ここからのメディターの世界観、強いてはポケモンを題材にしてはおりますが……まったくの自分の妄想です。

ルカ「今に始まったことじゃないと思うけど・・・」

まあやりたかったので・・・お付き合いいただければ光栄ですｗ

ルカ「ではではーどうぞ～」

第十六章：カントー帰還　ＶＩ：八柱力

ヤマブキシティ：

「ほわぁ……久しぶりに来たよ、ヤマブキシティ」

カナと一緒に旅をしている。それだけで私は終始浮かれっぱなしだった。

ハナダシティから南に位置する大都市ヤマブキシティ。そこにはこの国の全てが揃うとされている程、流通のクロスポイントである。

「そうだね」

カナも私と一緒で楽しそうではあるんだけど、でもなんだか表情に影があった。それは正月にカナがしていたものとは違うけど、だけどそれでも私にとってはしてほしくない顔だった。

まだ私はカナとちゃんとした話をしていない。しなきゃいけないと思う……でも、それをしてしまえば私が夢にみていたカナとの旅はそこで終わってしまうと思ったから。

このまま、世界とは関係なしに自分夢をかなえたいと思うのはわがままなのかな？

それはいけないことなのかな？

「ルカちゃん、どうしたの？」

「え？　あ、ううん！　なんでもない！」

私がカナに心配かけちゃいけないよね。

「それじゃカナ、ヤマブキデパートに行こうよ！」

「え？　うん、いいよ」

これじゃショッピングになっちゃうけど、いいよね。カナがヤマブキシティに行こうって言ったんだし、ここに来たからにはヤマブキデパートに行かなきゃ損だし！

こうしながら私とカナはヤマブキシティで目一杯遊んだ。ウィンドウショッピングにゲームセンター、一緒に昼ご飯を食べて夕方近くになるまで街を練り歩いた。

それでもやっぱりここで一番大きな建物であるシルフカンパニー社に目が行ってしまった。

あそこに諸悪の根源がいる。

私達の世界を乗っ取ってしまった人がいる。

でも今はこの時間を大切にしたい。カナと過ごせるこの時間が。

そうこうして、私とカナはポケモンセンターの無料宿泊施設で部屋を取って一息ついていた。

「楽しかったね」

「うん。ありがとう、ルカちゃん」

「え？　な、なにが？」

「今日は楽しかったよ」

「え？　う、うん、私も楽しかったよ！」

カナと面向かいに座りあいながら、私は置いてあった水をコップにいれて飲む。

「カナも飲む？」

「ううん、大丈夫。あのね、ルカちゃん」

「うん？　なーにー？」

ごくごくっと水を飲み干しながら、私はそう訊ね返す。

「今日は本当に楽しかった。前みたいに一緒に遊べて、うれしかった」

え、どうしたのカナ、突然？

「でもね、ルカちゃん。このままじゃ、駄目なの」

「駄目って……何が？」

自然と私の唇は震えていた。

カナがいう駄目……それを私は知っていたし理解していた。でも、嫌だった。ソレを聞くのが嫌だった。だって全て終わっちゃうんだもん。

カナは私をじっと見つめながら、優しい眼差しで告げてくれる。

「私達が八柱力である以上……そしてこの世界で何が起きたか知っている以上……私達は自分達のわがままで旅をしてちゃいけないの」

「……」

私は俯いて、そして涙が両目からにじみ出ていた。でもそれをカナに見せたくない。

わかっている。それが私達の責任だってことは。

そしてカナはそんな私のわがままに、今日一日何も言わずに付き合ってくれた。

それがどれほどうれしくかったか……わかってたんだ……。

「ルカ、ちゃん？」

「……ぁ、えたの」

「え？」

「わがってだの……。カナが今日ずっと黙っててくれたこと……わかってた……」

涙はもう留まることはなかった。

この涙の意味は私にもよくわからない。だけど、カナには見せたくないってことだけはわかってた。でも、止まることはない。

「ルカちゃん」

私はカナの呼びかけに泣きづらで顔を見上げると、

パーン！

一瞬にして視界がぶれて、私の右頬には針が刺さるような鋭い痛みが走る。刺激を受けることで血行のあがった頬がじんじんと熱を

帯びながら腫れていくのがわかった。

「え？」

そして、カナはがばっと私に抱きついてきた。

「ごめんねルカちゃん、でもね言わせて。私もずっとずっとルカちゃんとこうやって旅がしたい……。辛いことも楽しいことも全部全部一緒に経験したい……。でも、やらなきゃいけないの……やらないといけないことがあるから」

カナの告白に、私はなおさら自分が情けなくなってしまう。

「私もルカちゃんと一緒なの。だから、私もぶって」

「できないよ。できないよ、カナ。だって、だって……うぅ、うわぁぁん」

カナに抱きつかれたまま、私はカナを抱き返して泣いた。もうなんでもよかった。

ただわかるのはカナが私と一緒にいてくれているということ。

そして私達の旅は、ううん、旅を始める為にはやらねばならないことがあるということ。

「ルカちゃん……。うん、うん」

縋るようにカナの温もりを自分の体に寄せて、そしてカナも私の肩に頭を乗っけて涙していた。

こうして私達は泣き続けた。

だから、もう泣かないんだ。

「だ、だからって、いきなりこれは無理じゃない……？」

私は今カナと手を結んで決意を新たにして、ここにいる。

そう、シルフカンパニー社のロビーに……。

もう夜は遅く、そろそろ会社も閉まる頃だというのに。もう私は冷や汗だらだらもので、立っているのがやっとだった。

だって、あのサカキがいるんだよ？！　ここに！！

「大丈夫だよルカちゃん。だって会って挨拶するだけだもん」

「いやいやいやいや、それするだけでも相当だよ！」

カナちゃん、眠っている間になんかとんでもないものに感化されてない？　されてるよね！　ねえ！？

事実上国のトップなんだよ！？　その人と面会なんて、一般人にはありえないって！

「ルカちゃん、言いたいことはわかるけど落ち着いて。ね？　顔が変なことになってるよ？」

「っ！？」

私は両手で顔を覆って、赤面する。

またなんか顔に出てたの……？　うぅ……。

「あのお客様、そろそろ当社は……」

きっと私達二人に違和感を覚えた会社の受付嬢の人が寄ってきて、そう伝えて来るんだけどカナは一歩でて一枚のカードを取り出した。

「ジムリーダー代理としてきました。社長にお目通りできますか？」

え？

カナのいきなりの言葉に私も受付嬢の人も虚をつかれてぽかーんとしてる。

でも本業であり、そのカードが一体なんなのか知っているのだろう。受付嬢の人はそのカードを受け取り、確認して一礼してテーブルへと戻っていく。

そして電話をかけて、一分ぐらいした後に戻ってきた。

「それではこちらですのでご案内いたします」

一体何がどうなって……。

「ほら、行くよルカちゃん」

「行くって、ちょっとカナ、どうやってこうなったの？」

そこではじめて知ったんだけど、ジムリーダーとなった人達には特殊なカードが発行されているらしい。そしてそのカードはジムリーダーの家族にも支給されるみたいで、その一枚をカナが持っていたということになる。

ジムリーダーというと、えっと言わば街の長でもあるわけだから結構地位的には高いんだよね。だからこういった面会って容易なのかな？

でも全然セキュリティとか通らないし、一体どうなっているんだろう……。

様々な自問自答をしているとあっという間に、私達はエレベーターで最上階へと辿りついていた。

受付嬢の人はそこで案内を終えて、私達は社長室と書かれた部屋へと入っていく。

な、なんだか緊張してきた。っていうか、物事が淡々と進み過ぎだよ！

「カ、カナぁ、わ、私無理……」

「大丈夫だって。ほら落ち着いて落ち着いて」

「落ち着いていられないよ！」

はっ！？

また大声出しちゃったよ！

「はっはっは、元気のある娘だな」

そして扉の向こう、そのまた向こうに鎮座している重厚なテーブルの奥にサカキはいた。やたら快活な声で喋るサカキは、どこか普通な人にも見えて不思議だった。

「さて、こんなにかわいいお客さんを私はどう御持て成しすればいいと思う？」

そ、そんなこと私達に聞かないでよ！　って思ったけど、そんなこと言ったら殺される……。そう思わせるほどに、このサカキという人物からは威圧感を感じた。

高級そうなスーツに赤色のシャツ。小柄ではあるのかもしれないけど、痩せてなくて面と向き合ったら例え身長が高くてもプレッシャーに負けてしまうだろう。

これがサカキ。この世界を手に入れた男なのだ。

「そんなに長居するつもりはありませんのでご心配なく」

「君はジムリーダーカスミの妹君だったな？　わざわざご足労いただいたのはどういった了見なのかな？」

私はもう、ただカナとサカキの会話を傍聴することしかできなかった。

「あなたは八柱力を使って、何をしようとしているのですか？」

え？

八柱力を使って……？

「ほぉ、もうそこまでミてしまったということかな？」

「ええ。なので理由を聞きに来たんです」

「ふっ……なるほど。それではお答えしよう」

サカキは椅子の背もたれに手をかけて、なにかのカードを取り出す。

「私の倅（せがれ）も八柱力なのは知っての通り、八柱力とは世界の柱のことを指す」

世界の、柱？

「この世界には様々な現象を引き起こすポケモンがいる。そのポケモン達が持っている能力を継承した人間がたまに生まれてくる」

それが八柱力だとサカキは言いたいのかな？　でも、だったら、それは説明になってない。

「しかしながらその稀な人間は確認されても一人や多くて二人だ」

え、どういうこと？

「同じ時代に、そして同じ世代に八人の稀な人間が生まれる時、世

界は変革の時を迎える」

ま、ますますわからなくなってきた……。

「変革とは、なんなのでしょう」

「さあな、それは私にもわからぬさ。八柱力自体、初めての事例であるからな」

つ、つまり私達みたいな能力を持った人間が同時に八人もいたってことはいままでなかったってこと？

それで私達がどうにかこうにかしたら世界は大変なことになっちゃうの？

そういうことなの？

「いや、初めてではないか。この世界は一度変革を経験している……イニシャルインシデントがそうであったようにな」

「「え？」」

その時私とカナは同時に声を漏らした。恐らく、このことはカナも知らなかったんだ。

「イニシャルインシデント……ポケモンと人間のはじまりとされている瞬間だ。だがな、ポケモンと人間の歴史はそれよりはるか以前にさかのぼる」

どういうこと？　だって歴史の教科書にはイニシャルインシデントが全ての始まりだって……！

「イニシャルインシデントとは、人間がポケモンより優位になった時のことなのだよ」

そこでサカキが見せた凶暴な肉食獣のような表情を忘れることはないだろう。

「そうだ。イニシャルインシデントより古来、人間はポケモンより劣位だったのだよ。イニシャルインシデントによって『科学』なる力を手に入れるまではな」

イニシャルインシデントで科学を得た？

人間とポケモンって、一体なんなの？！

第十六章：カントー帰還　ＶＩ：八柱力（後書き）

皆さんは覚えていらっしゃいますでしょうか？

最初の方でそれとなく重要っぽく書いていた「イニシャルインシデント」・・・まあいうなれば始まりの起因たるものの正体・・・が今話で明かされました。

ルカ「まさかサカキに会うなんて；；」

まあサカキもいい加減「裏」ばっかで出すわけにもいかないしねw

ルカ「むぅーん」

ではでは、また次回～

第十六章：カントー帰還　ＶＩＩ：イニシャルインシデント（前書き）

さて、まあ書きたいシーンというのはすぐにでも書き上がってしまうものですね。

ルカ「なんか、嫌な方にしか展開してる気もするんだけど・・・」

まあ気にしない気にしない。それではルカ編ではクライマックスとなります今話、どうぞお楽しみください。

ルカ「私、頑張っちゃうから！！」

第十六章：カントー帰還　ＶＩＩ：イニシャルインシデント

人間がイニシャルインシデントで科学の力を得た？

私にはサカキが言っていることがまったくもって理解できなかった。

「この世界の人間達は元来、ポケモンに対抗する術を無くして続くはずだった世界だ。ゆえにポケモンが人を統べるといった自然の法則……弱肉強食にしたがっているはずだった」

サカキは手に取ったカードを机のリーダーっぽい機械に通して、後ろの窓の手前にパネルが現れる。

「だがイニシャルインシデントが起き、その時にこの世界を他の世界へとリンクさせた者達がいる……。それが八柱力だ」

映し出されるのは八人の人間のシルエット。そして、イッシュ地方のマップ。

「マコモという研究者が発見したイッシュの謎。それは遙か昔にイニシャルインシデントが起こった時の現象の痕跡だったのだ」

ま、ま、ま、待って。

もしかして、私達は……。

自然とカナを握る手の力がこもってしまう。

「八柱力とはポケモンの能力である技を使える人間のことだ。彼らが唯一、ポケモンに対抗できうる力を持っていたということになる。その彼らが、まるで導かれるようにしてイッシュに集い……そして、この世界に変革を招き入れたのだ」

パネルにはイッシュの中心部を囲う八つの六角形上に並んだ都市が赤く照らされていて、真ん中からは眩い光の柱が立っていた。

「他の時空へと繋がるゲート……それがイッシュ地方だ。イニシャルインシデントが起こり、ゲートがどこかの世界と通じた。その時に向こうの世界が持っていた科学という力をこの世界は得ることができたのだ」

なにやらどんどんと話がややこしくなっていくのを私は感じていた。というか、難しすぎるよ！

なんで、なんでこんな話を私達にするの？

私にはその時のサカキの真意がまるで見えてこなかった。

広く、薄暗い社長室の中でサカキという人物の支配力というものをひしひしと皮膚が敏感に感じ取っているのがわかった。

するとカナが割って入るようにしてサカキに問う。

「今、世界と言いましたよね？　人間が科学の力を得たのではないのですか？」

「君は実に聡明な娘だ。そう、確かにこの世界は科学という力を手に入れたが……それは人間もポケモンも一緒だったのだよ」

え……？

「ただポケモン達は科学の力を恐れた。それは自分達にとっては未知なる力だったからな。だが、人間は違った。科学、それは……ポケモン達に対抗できうる最初にして最後の手段だったのだよ」

だから人間はポケモンとは違い、科学の力を手にとったの？

「人間には縋るものが必要だった。弱者から強者へとなる為の力が、だ」

科学の力……。

「だがポケモン達は本能的にわかってしまった。このままだと人間は科学の力で、自然界はおろか、自分自身達まで滅ぼすであろうということを」

サカキが雄弁に語る演説に、私はどんどんとのめり込んでいってしまった。

「だからポケモン達は科学の力を行使ではなく、順応させる道を選んだ。人間の科学の力が暴走しないように……自分達の自己犠牲によって被害を最小限に収める為に……」

「ということは、もしかしてっ」

「そうだ。私達が今生み出したとされているこの社会において、ポケモンの力無しでは成り立ってはいないということだ」

サカキの言葉に、私は衝撃を受けていた。

それはつまりポケモン達が世界の為に妥協したってこと？　それ

って、ってことは……私達とポケモン達の関係はイニシャルインシデント前からなにも変わってないっていうこと？

「我々は常に弱者なのだよ。ポケモン達がいざとなれば、我々人間など一瞬で消えてしまう」

「だからあなたは、あんな化物を……！」

え、化物？

「そうだ。我々がポケモン達に対抗する為には人間が創ったポケモンが必要なのだよ。我々の遺伝子を引き継ぎながら、ポケモンの力を持つ兵器がな」

どういうこと？

「ミュウツーの力さえ完璧となれば、私だけでも生きながらえてみせよう」

ミュウツー？　一体、何の話なの……？

「ではあなたはなぜまたしてもゲートを開こうとしているのですか？　他の世界へと繋がり、新たに何を求めるんですか！？」

カナが声を張り上げる。

「何を言っている？　私は八柱力などには興味がない。強いて言えば、違う世界のことも今の世界のこともどうでもいいことだ」

「な、何を言って……？」

「私は一人の人間にして、男だ。男が常に欲するものが君たちにはわかるかな？」

男？

男が常に欲するものって……？

「優しさと力だよ」

優しさと力？

力っていうのはなんとなくわかるけど、優しさって何？　大の男の人から優しさがなんてきいたことがないから、私はますますわけがわからなくなっていく。

「ただ一人、いや一匹か……新たなる変革を望む者がいるみたいだがな。何を考えているのかはわからんが、そいつの好きなようにさせる気は毛頭ない」

こ、今度は一体なんの話をしているの？

「そうですか。わかりました」

え、カナ？　何がわかったの？！

「私の力もまだまだ至ってないみたいですね」

「八柱力など、今のこの世の中ではいようがいまいがさほどの脅威でも重要なファクターでもない。だが私は君たちをここへと呼んだ真意がわかるかな？」

そうだ。

私はてっきり八柱力だからここまで通されたものだとおもっていた。それはカナもそうみたいで、二人して改めて緊張が体全身を巡り始めていた。

「ハヤミ　ルカ、そしてテンドウ　カナミ……君たち二人を今日からロケット団の一員として迎え入れよう」

「「なっ」」

「これは君たちに与えられた選択肢ではなく、勧告だ。拒否をする場合、ここで命を落としてもらおう」

っ！？

いままで気付かなかった。

辺りの気配を見て取ると、部屋の隅にいたスピアーがその鋭い両手の針を私とカナの首筋に突き付けていた。

自然と生唾を飲み込んでしまい、その首筋を汗が滴る。

「最初からこうするつもりで、喋っていたのですね」

「私は君たちよりは修羅場を経験している。君たちの考えが甘かったということだ」

きっとカナは自分達が八柱力であるということをカードにサカキにいろいろな情報を聞き出そうとしたんだと思う。それは私には思いつかないし、でも、それでも上手く行くやり方だと思っていた。

だけど、サカキの方が一枚も二枚も上手だったみたい……。

「私が常に欲しているのは優しさと力だ。そして君たちは私の欲す

る力となる。八柱力にゲートを開かせる役割に魅力を感じはしない……だが、その能力自体に私は興味があるのだよ」

「一体私達に何をやらせようって言うのよ！」

そこで私ははじめて喰ってかかった。こんなの許せない！

「やっと威勢が出てきたようだな。なに、簡単なことだ。君たちには全国で指名手配されているダイゴが率いる一味を殲滅してもらう」

え……？

ダイゴ率いる一味って……。

「そうだ。君の兄ハヤミ　ケンと、そっちの姉であるテンドウ　カスミのいる一味のことだ」

そ、そんなのっ……！

「そんなのできない！」

カナが声を大にして、そう叫ぶ。

「ほお。ならば今ここで命を落とし、カスミの前に君の首をさらしてもいいんだぞ？」

ぞわっ！

サカキがカナになげかけた言葉に込められた殺意に、私の背筋は凍りつく。カナに至っては表情が更に暗くなっているのがわかった。

この男に、私達は近づくべきじゃなかったと。

それを私達は体と本能で感じ取っていた。

「い、いや……。そんなことするくらいなら、ここで死んだ方がましだもの」

「カナ……」

あんなプレッシャーに負けじと、カナは反論した。でも声の節々は震え、いままでサカキを直視していたカナの目線は泳いでしまっている。

「ふっふっふ、はぁーはっは！　なるほど、やはりお前達は面白い。私に盾突こうとする奴らなど、あいつら三人だけだと思っていたのだがな」

三人？　一体、誰のことを……。

「まあいい、スピアーやれ」

え、ちょっ！？

「スターミー！」

サカキの命令でスピアーが私達二人を突き刺そうとしたところに、カナの腰ベルトのボールに入っていたスターミーが【高速スピン】を繰り出して攻撃から防いでくれた。

「ほう。さすがと言ったところか？」

「言ったでしょ？　私には未来を見る力があります」

「ではさきほどのは演技か。私も君が若いというだけで見くびっていたようだな」

カ、カナさん、あなたさんはどれほどまでに度胸が据わっていらっしゃるんですか！

で、でも今はそんなこと言ってる場合じゃない！

「ガーディ！　スピアーの右上腕部に向かって【火炎車】！」

「がうが！」

ここは戦わなきゃいけない時なんだ！

カナの入れ替わり立ち替わりで私はガーディを出して、私の目で見えたスピアーのウィークスポットめがけて指示を出す。

「面白い。面白いな、さすがは八柱力の子たちだ！　スピアー、【ダブルニードル】！」

「すぴぁ！」

ガーディの技はスピアーに接触はするものの打撃を与えるまでには至らず、【ダブルニードル】を体に叩きつけられてガーディは吹き飛んでしまう。

「ガーディ、【火炎放射】！」

「があ！」

でも体勢を立て直したガーディはスピアーに向けて火炎を放射する。

「スピアー、【虫のさざめき】」

サカキはそれでも冷静な指示を出して、スピアーは【火炎放射】を相殺してしまう。

つ、強い……！

そう思っていた矢先、突如としてスピアーが奇妙な行動を取る。スピアーが翅を使ってなぜか跳躍したかと思うと、右側の羽がちぎられてしまった。

体勢を崩したスピアーはそれでも残った翅で床へと着地して棘を構える。

「カナっ！」

そう、さっきのはカナのスターミーが【高速スピン】でスピアーを狙い、翅を粉砕したのだ。

「【見破る】と【未来予知】の力か。ますます欲しいな、お前達の力というものがどれほどのものとなるのか……楽しみだ」

こちらが優勢だと思うのに、サカキは一向に調子を崩さない。

「だが、まだまだ経験不足だ」

「え？」

「うそっ……」

いままで敵はスピアーだけだと思っていた。だけどサカキが指を鳴らしたその時、部屋がライトアップされてそこには整列されたス

ピアーの群れが存在していた。

うわ、きもっ！

で、でも……これは絶体絶命ってやつだよね。

「敵を自分の懐へと招き入れたのだ。罠というものは二重三重では足りない。【未来予知】とはいえ、自分の持っている常識が考えれない現象までは見れないということだ」

「くっ……」

カナが歯ぎしりする。

そうか、カナの【未来予知】は未来を見ることができるけど……自分が理解できうる範疇までなんだ。未来は予想できても、予想外は予想できない。

「物事の見方は二通りだ。表を見るか、裏を見るか。先に表を見なければ裏が見えないように、裏が見えなければ表を見ることはできない……」

「……」

カナは黙りこくってサカキを見つめていた。こんなカナ、見たことない。

「まあいい。ならば貴様らに選択肢を増やそう。ダイゴ達の殲滅か、それとも世界のゲートを開かせないようにするかだ」

世界のゲート開かせない？　それってさっき言っていた……。

「選ぶのは貴様たちだ。時間はくれてやる、連れて行け」
「はっ」
そしていつからそこにいたのだろう。なんの物音も立てずに私とカナを掴んだ人がいた。
「ちょっ！　離して！」
しかし抵抗虚しく、私達はシルフカンパニー社の独房へと監禁されてしまった。

第十六章：カントー帰還　ＶＩＩ：イニシャルインシデント（後書き）

さて、自分でも書いてて大変なことが起きてるなってのがわかります。

ルカ「いや、わかってなかったらそれこそ大変だから；；；」

さて、最近ポケモンが名前しか出てこなかったのでちょっとバトルを入れてみました。

サカキの印象はもろポケスペ参考ですねｗ　スピアーが無数に整列していたら、でも恐いけど。

ルカ「恐いっていうかきもいよ」

ではでは～

第十六章：カントー帰還　ＶＩＩＩ：二人の答え（前書き）

さてややこしい話はもう少しだけ続きます。

まあこれで自分が出したオリジナル要素のある程度までの収集（伏線の）ができました。

ルカ「まあまだこれからなんだけどね」

まあね；；；　では、どうぞ！

第十六章：カントー帰還　ＶＩＩＩ：二人の答え

私達がサカキに捕まり、この独房に入れられてから一晩が明けた。

一睡もできるわけなんかなくて、私はカナの右手をずっと握ったままだった。

「ルカちゃん、ごめんね」

「そんなこと言わないでよカナ。カナがいてくれなかったら、私はきっと真実から目をそらし続けてたと思う」

「ルカちゃん……。でも、でも……こんなことになるなんて」

思っちゃいけないけど、でも確かにここに来なければこうならなかったってのはわかる。

「どうしようカナちゃん……。私ケンさんやお姉ちゃんに立ち向かうなんて無理だよ」

「……うん」

でも私達はあそこでサカキの条件を飲むしかなかった。じゃなきゃ、殺されていたから。

「でもね、カナ……私思うんだ。チャンスかなって」

「チャンス？」

「だってもしサカキに従うってことはどっちみちお兄ちゃんやカスミさんを見つける一番の方法じゃないかなって」

「……それは、そうかもしれないけど」

私は馬鹿だからわからないけど、でも従っておくのが一番なんじ

ゃないかなって思う。そりゃ納得もいかないし、嫌だけど、でも他に私に思いつくことは何もないから。

「あのね、ルカちゃん」
「うん？」
「私には一つ気になることがあるの」
「なに？」
「私の能力である【未来予知】の弱点をサカキは知っていたでしょ？」
「うん」
「私はまだ起きてから時間が経ってないし、あれから一度も寝てない。でもね、私が見た未来がどんどんと形を無くしていくのがわかるの」
「え？」

それって、どういうこと？

「なにかはわからない。でも、私はここでの未来を見たからここに来たの。こうなるって言う未来は見えていなかったから」

えっと。うんと。それはつまり、カナはサカキに会っても大丈夫だっていう未来を見ていたから乗り込んだ。

でも現実は違って、それでカナの見たはずのこれからの未来の出来事が変わっているってこと？

「私もよくわからない。私がきちんと夢を覚えてないからかもしれないし、まだ能力が完全に開花したわけじゃないかもしれない。でも、私は寝るのが怖いの……」
「カナ……」

そこでカナは私の胸に縋ってきた。
「大丈夫。寝る時も私は一緒にいるから」
「ありがとう、ルカちゃん」
「それじゃお話してあげるよ」
「え？」
「私がホウエンに行く時に出会った新しいお友達のお話」
「……うん。聞かせて」
きっとカナは不安で一杯なんだ。
だったらそれを緩和してあげるのが私の役目。それが親友ってものだって私は思うから。
私はサント・アンヌ号で出会ったスグラノ　ハルちゃんとカイチスミレちゃんの話をした。ハルちゃんがアルセウス教の巫女であることやスミレちゃんがスウセルア教の布教を目指していることなど。
一杯、一杯の話をした。
「私達と同い年くらいなのに、スグラノさんもカイチさんも凄いんだね」
「うんうんそうなんだ！　それにハルちゃんはバトルがすっごい強いんだよ！」
「凄いなー。でもルカちゃんも凄いよ」
「え？」
「アルセウス教とスウセルア教は犬猿の仲なのに、ルカちゃんがこうやって二人の間に入っているんだもん」

「え？　えへへ、そ、そうかなぁ？」
カナに称賛されて自然と頬がにやけてしまう。
「あの聖戦締約以降、二つの教徒はお互いの存在を認めあったけど……存続までは認めあってはいないから……」
「そうだったんだ」
二人の仲が悪いのはそのせいなのかな、やっぱり？
「あれ？」
「ん、どうしたのカナ？」
「もしサカキが言っていたイニシャルインシデントの話が本当なら、二つの教徒の対立が納得行く……」
「え、どういうこと？　だってスウセルア教は科学でアルセウス教はポケモンなんだよ？　あれ、待って……だったら矛盾するじゃん！　サカキの言っていることと」
そうだ、だってアルセウス教はポケモンと人間の共存を唱えてるんだよ？　スウセルア教が科学を重んじているのに、どうしてこうなってるの？
「ううん違うよルカちゃん。この二大教徒の本題は、本当に人間は科学の力を得てポケモンとの優位性を得たと思い込んでいるってことなの」
「え？　え……？」
「人間はポケモン達が妥協したことを知らなかった。それは私達も一緒。だって私達は潜在意識の中で自分達はポケモンより優秀だって思ってる……」
「そ、それは、そうかもしれないけど」

「だからポケモンと敵対関係になくなった人が次に敵としたのが同じ人同士なの」
「え？」

前まで天敵だったポケモンの次の天敵が同じ人間？

「宗教は、力を持っている人間が他の人間を統べる為にあるもの。つまりアルセウス教の訴える神のアルセウスは偶像なの」
「ぐ、偶像ってそんなことハルちゃんに言ったら失礼だよ！」
「そうかもしれない。それにアルセウス教もスウセルア教を立ち上げた人間も同じ人間の為を想っていたかもしれない……でも現実は二分化、ううん対立化だった」
「そ、それは……」
「厳密に言えばアルセウス教の発端が最初だったけど、それでも人間が人間を見始めたと言える理由としては十分なの」

人間が人間を見始める。それはポケモンを一に見ていないということになる。

つまりイニシャルインシデントがもたらしたのは科学だけじゃなかった。

「そしてそれ以上の対立化をややこしくしない為にポケモンは従ってきた。だってポケモン達には宗教の違いで対立するという原理が理解できなかったから」
「それって、人間がどんなに愚かなのかってことしか出てこないよ」
「愚か、なんだよルカちゃん。私達人間は……」

私達は、愚か？

私は愚かなの？

「多分、このモンスターボールも転送装置もポケモンの力がなければ成り立ってないと思う」

「それはポケモンも科学の力を持っているから？」

「うん、そう。そうだと思う」

ポケモンは私が思っていた以上に大きな存在だった。

友達や家族だと思っていたけど、それ以上にポケモンは大きいんだ。私達がきっとそう呼ぶことすらおこがましいくらいに。

「でもきっとこのことは世界に新しい抗争を生み出す。サカキはあれほどのことを知っているのに公表していない。彼はわかっていた、それでいて私達にはこの話をした」

「もしかして、私達はサカキに試されてるの？」

「そうかもしれないね。だからきっとルカちゃんが言っていたことが一番だと思う」

「え？」

カナは決意のこもった視線で私を直視する。

「ケンさんも、お姉ちゃんも大切な人。でも、それ以上に私はルカちゃんが大事だから」

「カナ……。いいの？」

「うん。だってルカちゃんだったら同じこと言うでしょ？」

「……えへへ」

選べと言われたら迷うだろう。それが人間だから。

でも決断するんだ。どんなに迷ったとしても人間だから決めることができる。

「これからロケット団だなんて、いきなり就職できたね」
「カナったら、そんなにポジティブじゃ駄目だよ」
「うん……。でもね、割り切りたいんだ」
「そっか、そうだね」

私達は互いの額を合わせて、両手を組み合わせた。

「絶対見つけようね」
「うん。その為に強くなるんだ」

シルフカンパニー社　社長室：

私達二人はその後すぐに社長室へと連行された。

改めて対面するサカキは、でも昨日最後に見たような恐い感じは

しなくて……普通に接することができた。といってもやっぱり緊張するけど。

「決まったのか？」

「は、はい！　こ、これからよろしくお願いいたします？」

「ふ、まあいいだろう。期待しているぞ、それではお前達はレイハについてダイゴ達を探してきてもらおう。レイハ」

「……なんでレイハが新人の教育係なんだにょ！？」

ひょこひょことサカキの机の後ろから現れたのは小さな女の子。だぶだぶなロケット団の制服に身を包み、頭の上にはニョロモを象った可愛らしい帽子をかぶっていた。

「かっわいい～！」

そして私は真っ先にそのレイハという子に抱きついていた。

「な、なんだにょ！？　は、はなれるにょ！　はなせにょろ～～～～！！」

「まあ頼んだぞ。こいつに強くしてもらえ……そしてダイゴを止めろ」

私はその時夢中でレイハちゃんに抱きついていて良く聞こえなかったけど、カナが割って入って私を阻止してくれた。

「はー、はー、はー！　お前、お前……絶対に許さないにょ！」

「あーんカナぁ～もうちょっと～……」

「お、落ち着いてルカちゃん」

だって、だってあんなにかわいい小動物この世に二人といないよ！？

「ん゛ん！」

そして重厚な咳払いに私は我に帰る。

「ボス！　本当にこいつら使えるにょろか！？」

「それは保証する。では連れてけ」

こんなやりとりをしながら、いつの間にか私はロケット団という組織になじみ始めてしまっていた。

あれ、こんなはずじゃなかったのに……。

私とカナは社長室を出て、レイハちゃんに連れられて一つ下の階へと向かった。そこはどうやらロケット団の幹部の人達が集合している部屋らしくて、ちゃんとレイハちゃんの部屋が存在していた。

「ねえねえレイハちゃん。好きなおかしってなに？」

「ちゃん付けするんじゃないにょろ！　レイハはレイハ様と呼べにょ！」

「ええ～いいじゃんいいじゃんレイハちゃんはレイハちゃんでいいよー」

「抱くんじゃないにょろ！　おいお前、どうにかするにょろ！」

レイハちゃんは私の腕の中でバタバタとカナに向けてなにか叫んでいる。

「いえ私は大丈夫です」

「なにが大丈夫なにょろ?！　レイハは助けろと言ってるんだにょ！！」
「結構です」
「こいつはなに言ってるにょろ?！　お前はお前でほっぺを触るんじゃにゃいひょろっ！」

う～ん、どこからどうみても可愛すぎる！

カナはカナでなにか諦めてるし、それならもうちょっとだけならいいよね？

「ねえねえレイハちゃん」
「なんだにょろ！？」
「レイハちゃんって何才なんでしゅか？」

赤ちゃん言葉でそう訊ねるとレイハちゃんはじたばたと暴れながら私の腕から逃れて、両腕を腰に当てて天井を仰ぐ。

「聞いて驚くにょろなかれ！　レイハは１８歳にょろ！　お前達より断然年上なんだにょ！！」

え～！　１８歳なの？！　１８歳でこんななの！？

「な、なんだにょろ、お前のその顔は！？　なんでそんなに目を輝かせてるんだにょ！」
「う～、確保ぉ～～！」

がばぁっと私は勢いに任せてレイハちゃんに抱きつき、レイハちゃんはなにやら奇声を上げる。

「もぉ～ルカちゃん！」
「に゛ょ～～～！？」

そしてカナはカナでなにか怒り気味だけど、とりあえず今はこの可愛い小動物を愛撫することに私は熱心だった。

その後レイハちゃんの幹部室でレイハちゃんのニョロボンからげんこつをカナと共にもらったのは言うまでもないかもしれない。

でも、可愛いんだもん！

こんな感じで私とカナはロケット団へと入団した。それが私達にとって賢い選択だったのかはわからないけど、正しいとは思ってる。

待っててねお兄ちゃん。絶対に見つけてみせるよ……それでお母さんも見つけて、皆と一緒にハナダシティへと帰るんだ。

そう胸に誓いながら……。

第十六章：完

第十六章：カントー帰還　ＶＩＩＩ：二人の答え（後書き）

さてレイハちゃん再登場です。

ルカ「かわいい！　かわいい！　かわいい！」

わ、わかったから、落ちつけ。

ルカ「次がたのしみ～」

第十七章：第三、第四のジム　Ⅰ：キリンの存在意義（前書き）

さてちょっと遅れましたが第十七章突入です。

ルカ「なんか私の回、中途半端じゃない？」

まあ研修期間だと思っておいてください。「裏」で補足入れるから

ルカ「むぅ・・・」

ではお待たせいたしました？　アユミとキリンのシンオウ編です。

ルカ「楽しんでいってね～」

第十七章：第三、第四のジム　Ⅰ：キリンの存在意義

ヒョウタとの対決、キララの死と、アユミは心に精神的なダメージを負いすぎた。

しかしアユミには、そしてキリンにも立ち止まっている余地はなかった。先に進まなければならないのだ。

それはキララの為であり、自分達の為でもあると言い聞かせながら。

炭鉱が爆破され潰れたクロガネシティでは日夜、土砂の撤去作業が進められていた。まだヒョウタとキララの遺体は発見されておらず、そうともなるとまだまだ見つかることはないだろう。

街の代名詞である炭鉱とジムリーダーを失ったクロガネシティは今後どうなってしまうのか。そんな後ろめたい想いを背負いながらも住人は一日でも早い復興を願うのだろうか。

かくしてアユミとキリンはクロガネシティを去り、北へと向かった。次のバッジがあるハクタイシティへとだ。

「おいアユミ」

「なんだい？」

キララの死から一晩、アユミは両目の下に隈を濃く残していながらも普段通りの調子に戻っていた。

「ハクタイにはどうやって行くんだ？」

「君は他人に頼る癖をどうにかした方がいいよ」
「いや、地図とか読めんし」
「君はつくづく使えないな……。ハクタイシティまではサイクリングロードを使うんだよ」

クロガネシティとハクタイシティをつなぐ一番の近道として有名なサイクリングロード。しかしながら南から北へと上がるとなるとかなりの労力を使うことになる。

「へえ。でもアユミ、お前自転車乗れないんじゃなかったか？」
「知ったような口を聞くんじゃないよ。なんの為に君がいると思っているんだい？」
「ああ、なるほど」

すでにアユミの分の荷物を持ちながらもキリンは両手を合わせて納得がいったのか頷いて見せる。

「ほら、さっさと行くよ。長居は好きじゃないんだ」
「へいへい」

今やクロガネシティは大騒ぎ状態であり、もちろん検問が敷かれている。だがアユミとキリンはそれをかいくぐって街の外へと出てきた。

アユミの綿密な計画とキリンの高い運動能力を持ってして二人はクロガネ炭鉱博物館の裏から街を抜け出した。

そして今丁度、とある傾斜を目の前にしていた。

「次はここか？」

「まあここを上がればすぐサイクリングロードへと辿りつけるね」
「よし、じゃあほれ」
「むっ……」

キリンがその場にしゃがみ込むと、アユミは不本意な表情を浮かべる。

ふくれっ面をしながらも自分ではどうにもできない為、アユミはキリンの背中に身を預けて首に腕を回す。

「しっかりつかまっとけよ」
「言われなくてもっ――――！」

キリンはアユミを背負いながら軽い身のこなしで急な斜面をひょいひょいと登っていく。

「君は本当にエイパム並みな動きをするね……」
「うらやましいだろ？」
「別に」

まだ朝靄が辺りを覆っているこの時間、誰もこの二人を見かけてはいないであろうが、むしろ見ていて欲しいというぐらいのものである。

垂直に近い岩肌を人一人背負いながら意気揚々に登っていくキリンの姿はアユミの指摘するような身のこなしなのである。

「ほら、大丈夫か？」
「大丈夫だ」

万人ならば遠回りをやむなくされる場面を人並みはずれた身体能力でクリアするキリンはアユミをゆっくりと下ろしてやる。

「まったく、君と一緒に来てよかったと思う瞬間だよ」

「なんだよそれ」

「君の唯一の存在意義ということだよ、馬鹿ということ以外のね」

「今日はいつになく手厳しいな」

「そ、そんなことはないっ！」

アユミは博識であるし、その小柄な体型を紛らわす為にきつい口調で話す。だがその手の内を返せば純情であり寂しがり屋なのである。

つまり簡単に言うと、キリンにおんぶされて胸がドキドキしたのをこうやって誤魔化しているというわけだ。

「ほらさっさと行くよ」

「へいへい。よっこらせ」

手に提げていた荷物を肩に担いでキリンはアユミの後ろについていく。

二人が登った場所から道なりに出るまで1キロ、すぐに見えてきたのはサイクリングロードのゲートであった。

サイクリングロードはなにもマウンテンバイクや二輪駆動車だけではなく自動車やバスなども通ることができる。

「こんな時間でも通れるのか？」

「通れるよ。それがサイクリングロード事業の魅力だってこと忘れ

たのかい？」

そう、今や全国で始まろうとしているのがサイクリングロード事業である。それは街と街、地方と地方を効率的かつ高速に交通するようにと立ちあげられたものであり、今注目されている。

各地方の中で最もこの事業が進んでいるのがイッシュ地方。イッシュの本社が資本を出して全国普及を目指しているのだが、あまりうまくいってはいない。

それにはイッシュ以外の地方は全体的に起伏が激しく、工事に着工できないのである。

さて、そんなことはさておき二人は二十四時間常に営業しているサイクリングロードのゲートへと入っていった。

巨大な一本橋、と例えればよいだろうか……それがサイクリングロードの魅力であろう。

「すみませんが、二人乗り用の自転車一つ」

アユミは受け付けカウンターの丁度頭一つ出たといった感じで自転車の注文をしていた。

「かしこまりました。両漕ぎにいたしますか、それともサイド付きで？」

「サイドで」

「はい、それでは自転車はハクタイゲートにてご返却ください。サイクリングロード通行料とレンタル料を含めて２５００円いただきます」

「キリン、お金」

アユミの後ろで控えていたキリンは、いきなり自分の呼び出しに驚きつつもアユミの要求に眉をしかめる。

「おい、お前それぐらい持ってるだろ」
「キリン、お金」
「だから――」
「君、私が言っていることがわからないのかい？　お、か、ねと言っているのだよ」
「ちっ！」

キリンはポケギアを外して受付嬢に乱暴に手渡す。

「こ、こちらでよろしいでしょうか？」
「お願いします」

さっさと受付を済ました二人はサイドカー付きのバイクの方へと案内され、ゲートを通された。

「側車付きって、お前……」
「言っただろう？　私は知で君は力だ」
「まあ最近運動もバトルもしてねーからいいけどよ」
「だったらさっさと行きたまえ」
「へえへえ」

アユミはすでにサイドカーにちょこんと座り、膝上に荷物を乗っけている。口調は変わらずとも目がうつらうつらしているあたり眠たいのであろう。

キリンも寝不足といったら寝不足の方ではあるがここに来るまでに体を動かしている為か、脳はしゃきっとしていた。

「よっしゃ、行くぞ」

「早く行って、くれ……」

準備も整い、キリンはサドルにまたがってパドルをこぎ始める。

まだひんやりとした暗闇の中を照らしているのは、橋全体に設けられた外灯のみ。しかしそれでも度々通り抜けるトラックのライト無くしても視野は十分に確保されている。

だがこの時間帯、キリン達以外に自転車を使っている者はいない。

というよりもあまりこのサイクリングロードを自転車でクロガネゲートからハクタイゲートまで行くものは多くはない。

なぜならば、ハクタイの方までは上へと登る傾斜となっている為かなりの労力を要するからだ。

しかしそんな傾斜も関係なく、キリンは自慢の脚力でどんどんとハクタイゲートまで登っていった。

おそるべし……。

「おいアユミ、着いたぞ」

「ん……」

スポーツ等が好きなアウトドア派であるキリンは自分のペースを保ちつつも、しっかりとサイクリングロードを満喫した。アユミが

寝ているのをいいことに、寄り道をしてみたり、朝日を拝んだり、軽めの食事を取ったりなどでハクタイゲートに辿りついた時にはもう誰もが起き始めるような時間帯であった。

しかしキリンがわざわざ遅くついたのにはわけがある。それはしっかりとアユミに休息を与える為と、そして彼女が眠っている間にキララの名を連呼していたからだ。

まだ彼女はキララとの別れを偲んでいたのだ。

「やっぱり君でも結構かかったみたいだね。ふぁ～」

「ああ、それよりもとっととジム行こうぜ」

「うん、そうだね」

そんなキリンの気遣いも露知らず、アユミはむくっと起き上がる。寝ぼけている時のアユミはかわいいことをキリンは孤児院時代から知っている。その為、扱い方もちゃんとわかっているのだ。といってもキリンはアユミよりも入ったのは幾年か後ではあり、常にアユミからは年下扱いにはされるが……。

眠気眼を服の袖でごしごしとこするアユミの愛くるしさといったらないだろう。それに眼鏡を外したアユミの素顔というものは大体いつも前髪で隠されてはいるがかわいいのである。

「またのご利用、お待ちしております」

と、受付にて自転車を返した二人はハクタイシティへとたどり着いた。

昔を今に繋ぐ街、というレッテルの貼られているこの街は西側にハクタイの森が存在しているように、自然に富んだところである。

クロガネシティとは一変していることが一目でもわかることができる。

「しかしこんな朝っぱらからジムリーダーなんているのか？」

「ジムが開くのは大体この時間からだよ」

「ひゅー、お前には無理だな」

「うるさいな……」

なので朝には弱いアユミは、キリンの煽りにもまったくもって反応が薄いのである。

「それじゃとっとと行くか。今日は俺でいいんだよな？」

「ああ、構わない。だが気をつけたまえ、ハクタイジムのリーダーはナタネ……草タイプの使い手だ」

「構わねえよ。弱点を克服してこその道だ」

「君は本当に理に適わない男だね」

二人がそう会話しながらジムの前へとたどり着くと、ジムの門が勝手開き中から一人の女性が現れた。

「ずばり来たねチャレンジャー、待っていたよ。あたしがこのハクタイジムのジムリーダーナタネだ」

ジムリーダーの風格を漂わせるその独特なファッションセンスはもはやハクタイの看板でもある。

ただ彼女がマゾであることは彼女は隠しているつもりだが、周知

の事実なのは御愛嬌である。

「それじゃずばりジム戦と行こうかしら！」

「望むところだぜ！」

なんだか好戦的なところはお互い似ているのだろうかとアユミが考えている間、彼女は何かがひっかかっていた。

「キリン、気をつけてね」

「ん？　お前が心配してくるなんて意外だな」

「馬鹿、そういうことじゃないよ」

「……ああ、わかってるさ。じゃあな」

キリンはアユミの意図を組んだのか頷いて去っていくと共にくしゃくしゃとアユミの頭を撫でてやった。

「むっ……」

不服そうな表情をアユミは浮かべながらも、黙ってジムの観戦場へと荷物をずるずると引き摺っていくのであった。

シンオウ、第三のジム戦が今から始まる。

ナタネはなぜ、この二人が来ることをわかっていたのか……。それは寝ぼけていたアユミに緊張感を走らせるには十分過ぎるファクターとなっていたのだ。

「気をつけなきゃね」

そうアユミはこぼして、辺りを警戒するのであった。

「これより、ハクタイジムリーダーナタネとチャレンジャーキリンのジム戦を開始いたします！」

そしてジム戦の合図が審判より高々と宣言された。

第十七章：第三、第四のジム　Ｉ：キリンの存在意義（後書き）

さて良い感じに切れたので、良い感じに切らせていただきました。

ルカ「きたない」

いやいやｗｗ　はっはっはｗｗ

ルカ「笑いごとじゃないでしょ」

うん、まあｗ

ルカ「じゃあ次は決着する回なの？」

多分ｗ　では～

第十七章：第三、第四のジム　ＩＩ：キリンの浅知恵とアユミの焦慮（前書き）

バトルというものを書くときにいつも思うのですが、パターンや作戦、トレーナー達の駆け引きというものはとても難しいと思います。

そしてそんな自分にとっての無理難題をほかの作者さんたちがこなしているのを読んでいると、なんだかとってもあこがれています。

ルカ「がんばれってことだよ」

・・・精進します；；

ではジム戦をどうぞ！

第十七章：第三、第四のジム　ＩＩ：キリンの浅知恵とアユミの焦慮

クロガネシティからサイクリングロードでハクタイシティへとやってきたキリンとアユミ。

そしてなぜか着いて早々にハクタイジムリーダーのナタネとの勝負へと展開してしまっていた。

「それじゃ私の初手はこの子、ずばりチェリム行ってきて！」

ナタネが繰り出したのはサクラポケモンのチェリム。日差しが出ていないときは蕾のままであるが、日の光を浴びると花開くとされている。

「なお今回のジムバトルで使用できるポケモンは二体！　交代はチャレンジャー、ジムリーダー共に認められています！」

審判はナタネのポケモンが出るのを確認してからそう宣言する。

「へ、わかった。なら俺はこいつだ！」

キリンはバトルを早く堪能したいのか、審判の言葉を聞き流すように頷いてボールを投擲する。

キリンの手持ちは二匹。つまり審判のルール説明が行われたときに、バトルできる条件を満たしていないと抗議しなければならない。

たいていの場合は、トレーナーたるもの手持ちを最大の６匹いるために必要ないのだがキリンのように少数体制だとそういう場合も

あるのだ。

そんな話はさておき、キリンが最初に出したのはサイドン。岩・地面タイプを誇るドリルポケモンではあるが、ここはハクタイジム……ジムリーダーは草タイプ使い。

ミオの時とは違い、サイドンにとって草タイプは最悪の相性。

だが彼にはほかに手持ちが一匹しかいないのだから、しょうがないといえるのだろうか。

さすがにナタネもキリンのポケモンを見て面食らっていた。

「今までに私のポケモンたちが得意とするタイプのポケモンを出してきたトレーナーはいたにはいたけど、さすがに岩・地面両方のでくるなんてね！　私が聞き及んでいた情報とは若干違うのかな？！」

アユミはナタネの言葉を聞きながらさまざまな憶測をたてていた。

おそらく彼女達の情報はシンオウ地方すべてのジムリーダーに知れ渡っているだろう。その中でアユミは自分達を客観的に分析し、わたっているであろう情報を自己分析してみた。

つまり先ほどのナタネの言葉は、キリン達が実力者であるということ。そんな彼らがまさかハクタイ戦において岩・地面タイプのサイドンを出すなどとは思いもよらなかったのであろう。そんな憶測をアユミは立てたのだ。

「へ、悪いが手持ちが二匹なんでね。最初はこいつで行かせてもらう！」

そしてキリンの返答にアユミは心底落胆と憤怒の情を沸き立たせるのであった。

『あの脳筋、なんでわざわざ自分のほうから敵に塩を渡すようなことを言うんだ！』

と。

「それでは試合開始！」

声高々にバトルの火蓋が切って落とされ、ナタネは冷静さを取り戻しつつ指示を繰り出す。

「チェリム、先手必勝の【日本晴れ】！」

チェリムがこもった声でなにかを呟くと、ジムの上方に擬似太陽のようなものが現れる。これもまたポケモン達の潜在能力が成せる技であり、それが一体どれほどの脅威となるかを人間はまるで理解していない。

自分の意思で天候を操ることさせ可能な生命体がポケモン。それは人が唯一の科学という力をもってしても、成功したとはいえないことをのうのうとやってのけてしまうのだ。

「サイドン、【火炎放射】！」

しかし今はバトル。人同士のポケモンバトルである場合、こういった思考など発生するはずもないのだ。

「そこらへんは常套のようね！　チェリム、【影分身】！」

技を使用、あるいは使用中において生まれてしまうのが隙である。その隙をどうお互いに突いていけるか、それがポケモンバトルの本質である。

つまり上手（うわて）であれば上手であるほどに隙を突くのと、隙を与えないことに長けていると言えよう。

チェリムは【日本晴れ】を繰り出したときからすでに【影分身】をする準備に入っていた。その隙をキリンは逃さまいとするが、【火炎放射】と命令を出すときに生まれるタイムラグがその隙を突くチャンスをつぶしてしまったのだ。

バトルは相手の先、そのまた先を読むことができなければ負けるのだ。

あいてが格上ならば必然的に……。

「サイドン、【地震】で追っ払え！　それで【火炎放射】！」

「チェリム、【神秘の守り】！」

ナタネのチェリムは【日本晴れ】によりその花びらを開いていた。

しかしながらサイドンの【火炎放射】は避けれないと踏んだのだろう、最悪の事態を想定してナタネは状態異常の発生を防いだ。

「ふーん、あなたも結構な場数踏んでるみたいね」

「なっ！？」

サイドンの魅力はその技の多様性にある。悪く言ってしまえば起用貧乏ではあるが、汎用性が高いとも言える。それはもはやトレーナーの腕しだいということだろう。

ナタネのチェリムは陽気そうな表情を浮かべており、先ほどの【火炎放射】をそんなにダメージとして負っていないのであろう。そこにキリンは焦りを見せる。

「チェリムの特性を甘く見ないことだね！」

そう、チェリムの特性であるフラワーギフト……それは晴れのときに攻撃と特防があがるというもの。つまり草タイプにとっては致命的である炎技を上げる【日本晴れ】の弱点を自らの特性でカヴァーしているのである。

「ちっ！　ならサイドン、【メガホーン】だ！」

とはいえ、今のサイドンの【メガホーン】をくらってしまってはひとたまりもないだろう。

だがしかし、

「正面突破は関心しないね。チェリム、【ソーラービーム】！」

「根性見せろよ、サイドン！！」

チェリムのかわいらしい甲高い声と共に発射される眩い光線は、一直線上にいるサイドンへを容赦なく包みこんだ。

「なっ！？」

ナタネは勝利を確信したのだろう。しかしながらサイドンの猛進はとどまることを知らなかった。

「まさか、【メガホーン】は【ソーラービーム】を無効化するために？！」

「虫タイプの技に草タイプの技はあまり効果がないからな！」

しかしいくらサイドンが【メガホーン】で【ソーラービーム】の直撃からのダメージを軽減しているとは言え、相手はナタネのチェリム……そんな無茶苦茶な戦法が通るほど甘くはない。

「でも君のサイドンはずばりボロボロ寸前みたいだけど？」

意表を突かれはしたが、見るからにサイドンはダメージを負い過ぎて倒れそうである。

それでもキリンは最初からサイドンでチェリムに勝とう等とは思っていなかった。

「くっ！　いい加減にとまったらどうだい！？」

余裕そうだったナタネだったが、【ソーラービーム】を全身に浴びながらも突進を止めないサイドンを見ていて焦りを見せ始める。

そう、サイドンは多大なダメージを追いつつもその足を止めないのだ。

「おしきれ！」

「……ォオン！！」

まるで持久走を完走しようとするへとへとなランナーが最後の気力でゴールラインへと達したようにしてサイドンは倒れこみながらもゴールラインのチェリムに【メガホーン】を掠めて戦闘不能へと陥った。

「チェリム！　よけて！」

サイドンが力果てる直前まで技を使っていたチェリムは当然サイドンからのダメージを受けると共に倒れこんできたサイドンから逃れる暇がなかった。

「サイドン、戦闘不能！　チェリムの勝ち！　チャレンジャー、次のポケモンへと早く交代してください！」

そしてこれがキリンの狙いだった。

チェリムの体重は重くて１０ｋｇ、それに対してサイドンは１２０ｋｇ。自分の１２倍重い相手がのしかかってくるとしたら、それは相手に焦りという精神的ダメージを与える。

しかものしかかってくる相手は微動だにしないのだ。

そんな彼のたくらみをナタネと審判はようやく理解したのだろう、もがくチェリムを見ながら審判はキリンへと交代を促す。

「チャレンジャー！　交代を！」

「ああ、悪い悪い。へへ」

そしてキリンは知ったようにサイドンをボールへと戻して、ナタネを一瞥する。

ナタネはチェリムを心配しながらも、はっきりとした敵意と憎悪をキリンへと向けていた。それもそうだろう、こんな卑劣な手を使ってくるのだ。

そしてそんな戦況を見据えながらアユミは熟慮していた。なぜキリンがこんな戦法を取っているのかを。

普段なら力勝負や直球勝負が好きなキリンであるはずなのに。

確かにキリンは【ソーラービーム】を根性で乗り切ろうとした点ではいつもどおりといえばいつもどおりである。しかしサイドンが戦闘不能となることをわかった上での、あの卑劣な手は明らかに敵からひんしゅくを買うのは明らかだ。

それを狙ってやっているということはつまり……。

「あのバカ、そういう意味じゃないだろうに！！」

そしてアユミにとってしてみればキリンの浅知恵なぞお見通し……。キリンはどこまでいってもキリンであることを、アユミはここでまたも思い知らされる。

「行け、キリンリキ！」

キリンリキ。まさにキリンの手持ちとしてはふさわしいといえるのだろうか？

「珍しいポケモンだね。でも……チェリム、【ソーラービーム】！」

まだ【日本晴れ】の効果は続いている。

「キリンリキ、よけろ！　【パワースワップ】、【ガードスワップ】！」

「なっ！？」

【パワースワップ】と【ガードスワップ】。それは相手の能力変化を自分と交換するといった特殊な技。

さきほどのサイドンとチェリムの戦いでナタネが言っていたチェリムの特性……。その特性を無効化することができると同時に能力の低いキリンリキにとっては非常にプラスとなるのである。

「ちぇ、ちぇりぃぅ……」

晴れのときに顔を見せるチェリムにとってこの特性はいわば必需的要素。それが奪われてしまえば晴れていても表情は曇ってしまう。

「これで御相子といこうか！　キリンリキ、【噛み砕く】！」

「チェリム！」

【ソーラービーム】連射による反動と能力値を下げられたチェリム。そして先ほどのサイドンからのプレスによってチェリムはその場から動くことはできなかった。

「チェリム戦闘不能！　キリンリキの勝ち！」

キリンリキの攻撃をもろに喰らったチェリムはもちろんダウン。

これで残るポケモンはお互い一匹ずつ。

一見互角……。しかしアユミは観戦席で一人下唇をきつく噛んでいた。

そしてその理由(わけ)に応えるかのようにしてナタネはボールをフィールドへと放るのであった。

第十七章：第三、第四のジム　II：キリンの浅知恵とアユミの焦慮（後書き）

さて決着は次回へと持ち越しですw

ルカ「なんかキリンさんらしくない戦いだね」

なんで？

ルカ「だってなんか考えて戦ってるみたいじゃん」

いや、それはちょっと酷いんじゃ；；；

ルカ「だってのーきん？　なんでしょ？」

それ以上言っちゃだめ！！

第十七章：第三、第四のジム　ＩＩＩ：アユミの予感（前書き）

さて、お待たせいたしました？

とりあえずＧＷも終わり、大学もはじまるし、いろいろとまた大変そうです；；

ルカ「いままで投稿しなかったのは遊んでばっかだって言い訳はしないの？」

だぁー！　それを言うなって！

ルカ「んふふーｗ　では、どうぞ～」

第十七章：第三、第四のジム　ＩＩＩ：アユミの予感

「行ってきなさい、ロズレイド」

ナタネの二番目のポケモンはロズレイド。スボミーの最終進化系であると共にロゼリアの進化系である、草・毒タイプのポケモン。

「おいおい、まためずらしいやつが出てきたな」

キリンははじめてみるポケモンをにらみつけながら興味津々に声を張る。

「きりりっ、きり！」

キリンリキに至ってはさきほどのバトルでは物足りなかったのだろう、しきりに蹄で地面を蹴って鼻を鳴らす。

「おお、おおわかってるって。とっととケリ着けるぜ！」

一方のナタネはキリンたちを見据えながら、さまざまな思考をめぐらせていた。彼女もまた、この新しい制度になってから改めて世界を再確認したうちの一人であるからだ。

しかし彼女は負けなかった。

今までに挑戦しにきたチャレンジャーの数は以前と変わらない。強い者もいれば弱い者もいた……。

しかしなぜであろうか。最近、強いだけでなく確固たる意志を持

つ者が多く現れてきたのだ。

『一体、なんだっていうの……？』

彼女はそのとき、その抱いていた疑問への答えを見つけることができないでいた。

だから彼女のやるべきことは、一つ。勝つこと、それだけだ。

負ければ殺される。

殺されなくても、逃亡の身となることは最近のジムリーダー達の相次ぐ死亡や失踪で明らかであるからだ。

『私は、負けられない！』

そう、彼女には負けられない理由がある。キリンと同じく、絶対に敗北は許されないのだ。

「キリンリキ、【サイケ光線】！」

キリンリキの頭部にある角からは七色に分解された光が放たれて、ロズレイドへと向かう。

「ロズレイド、【マジカルリーフ】！」

どうたとえれば最適なのだろう。

お互いのポケモンから放たれた七色の光は衝突しあい、そして拡散していく。しかしその残滓がどことなくファンタジスティックな

幻想を思い浮かばせる。

「【高速移動】で【踏みつけ】ろ！」

攻撃を繰り出すと共に、次への態勢をとっていたキリンリキはすばやい瞬発力で一気に敵との距離をつめようとするが、

「ロズレイド、見極めて【草結び】！」

「ロズッ！」

「きりっ！？」

軌道をジグザグにしながら進攻していたキリンリキであったが、いともたやすく足元を見極められてしまう。【草結び】……そう、このフィールドは全体が草花に覆われている。

ジムにおいてジムリーダーに勝つのが難しいと言われているゆえんはこれにもある。

フィールドはポケモンたちの住んでいる自然界を模して作られている。そのため【不思議な力】や【草結び】といったような技のアドバンテージをジムリーダー側は所有していることになる。

そのディスアドバンテージを乗り越えることこそチャレンジャーがバッジを得るために必要な要素である。

「相手に隙を与えるな！　【サイコキネシス】！」

「させない！　【リーフストーム】！」

次の一手、次の一手……その考察が求められるポケモンバトル。なので強い者ほど頭が良い……と、思われがちであるがそうではな

い。それがポケモンバトルの醍醐味ともいえよう。

そしてそれこそがポケモンに人が興味惹かれる実態でもある。

頭がよくてもポケモンとの信頼関係が築かれなければバトルにおいては見事に惨敗するであろう。そしてたとえばトレーナーが有能でなくとも、ポケモンが自らそのトレーナーを守りたいと思えばバトルで勝ってしまうこともできる。

そして、キリンにおいては直感的にバトルをするタイプであるがゆえにポケモンと同じ視点でものをみることに長けている。

それは己自身がファイターでもあるからなのだろうが、常に相手に隙を見せてはならないということを良く心得ているのだ。

飛び舞う草の嵐をキリンリキが念動力で阻止しようとしているが、キリンリキの体勢が体勢なために押し切られてしまい直撃を受ける。

しかし先のバトルで特防のあがっているキリンリキはまだ体力には自信があるようで、すぐさま立ち直ってロズレイドに身構えている。

「あのポケモン、なかなかやるな」

「きぃり〜！」

「こうなったら接近戦に持ち込むぞ、【ダブルアタック】！」

ロズレイドは高い特殊攻撃、防御を持っている分防御が低い。その要素をキリンが見抜いたかどうかは別ではあるが、キリンリキは先ほどのチェリムから攻撃力を上乗せしている。

もし当てることができたら、キリンたちにとっては良い一手となるだろう。

しかしながら素早さの面で言うと、ロズレイドのほうが上回っている。たとえキリンリキが【高速移動】をさっき使っていたとしても見抜かれてしまったのだ。

「ロズレイド、【毒づき】！」

「ろずれいっ」

キリンたちが情熱的であるとするならばナタネたちは悠然としている。

とくにロズレイドの華麗なる足運びはどことなく沈着冷静でいながらも優美さをまとっている。両手に咲いている薔薇がそう見えさせているのかはわからない、だが……。

キリンリキが首を振り回しての攻撃と、後ろ左足を使っての【ダブルアタック】は見事ロズレイドの両腕にいなされてしまう。

攻撃がうまい具合にあたらなかったのを身で感じたキリンリキは反撃を食らわないように数歩距離を置くが……瞬時にひざから崩れて倒れこんでしまう。

「おい、どうしたキリンリキ！？」

キリンも不思議でならなかった。なぜならロズレイドはナタネの指示した攻撃をしたそぶりをまったくもって見せなかったからだ。

「私のロズレイドに接近戦をのぞむなんて、ね」

「な！？」

キリンが困惑する前で、いとも簡単に勝負は決してしまった。

「あなたみたいなトレーナー……二度とごめんだわ」

「チャレンジャーのポケモン、戦闘不能！　よって、ジムリーダーナタネの勝利！」

そしてせかされるようにしてキリンとアユミはジムから追い出された。

そのあまりのことの運びにキリンは呆然とし、アユミに至っては怒りで頭が沸騰していた。

「あ、あのぉ～？」

「君はバカか！？　いや、訂正しよう……バカだったな！」

「な、なに怒ってるんだよアユミ？　そ、そりゃ負けはしたけどよ……」

「そういう意味ではないのだよ！　このバカ！」

キリンはジム戦で負けた。

しかし彼らにはなんら行動が起こされるようなことは何も無かった。

「そして私がこんなに騒いでも何もないということは何も無いということなんだね」

「じゃあさっきのはわざと怒ってたのかよ」

「いいや、本心だよ」

「……」

二人はジムから出た後に、近場のレストランへとやってきていた。
「なあ、なんで俺負けたんだ？」
「そんなのすぐにわかることだよ。君はロズレイドの【毒づき】にやられたんだ」
「でもよ、技出すとこなんて見えなかったぞ？」
「簡単なことだよ。キリンリキの攻撃がいなされた……そのときに触れたロズレイドの花二つ、あれが原因だ」
アユミはメニューを長々と眺めながら、呼び出しスイッチを押す。
「大体なんでだよ？　もしかして花自体にダメージがあったなんていうのかよ？」
「お待たせいたしました、ご注文お決まりでしたらお伺いいたします」
「この端から端まで、全部」
「え……？　全部、でございますか？」
「うん」
キリンの言葉を聞き流して、アユミは来たウェイトレスに注文を済ませる。
「君はなにも食べないのかい？　私の分はやらないよ」
「……このセットメニューを一つ」
「はい、かしこまりました」
去って行くウェイトレスを横目で確認したアユミはグラスに注がれた水を飲んで、キリンへと口開く。

「ロズレイドの二色の手の薔薇、あれには二種類の違った毒が入っている」
「なっ……」
「ロズレイドは基本攻撃力がそんなにない。特殊アタッカーとしては有力だからね」
「だったら勝ち目ねーじゃん」
「それをどうにかするのが君の仕事だろ」
「まあ確かにな」

常に格好良くバトルを終えたいと思っているキリンにとっては、今回のバトルの終わり方は不服なのだろう。

「といっても、君の手持ちならナタネ攻略は難しいだろうね」
「んなこたないだろ」
「それに私は怒っているのだよ。なぜああも簡単に敵に塩送るんだい」
「敵に塩？　俺なんか言ったか？」
「向こうは私たちのことを知っていたんだよ？　なのになんでわざわざ情報を提供しなければいけないんだ」

たとえ敵側が自分達の情報を掌握していたとしても、それは不確定であるという事実は変わらない。そう、本人達がそういわない限り。

アユミとキリンは二人だけなのだ。

そう、キララはもうこの世には……

「そうだ……」
「ん？」

「キララ……」
「おい、アユミ？」
「ジムリーダー達が私達の情報を知っていてもおかしくはない。でも、それはロケット団という組織から提供されているものとは言い難い」
「は？」

アユミがなにかをこれから切り開こうとした時、

「お待たせいたしました」

大量の料理が次々とテーブルの上に並べられていく。

「おいアユミ……こんなに頼んだのかよ」
「いつものことだよ。それじゃ食べるとしよう」
「キララのなんたらはいいのかよ？」
「ジムリーダー達はきっとなにか弱みを握られている可能性がある」
「弱み？」

アユミは四種類のサラダを早々に平らげながら、続ける。

「考えてもみなよ？　ジムリーダーの誰もが気付き始めているはずさ、自分が負けたら消されるってことをね。それでも任から下りないということは……組織から強制的にやらされているということだ」
「ふぅーん。でもよ、だったら組織もジムリーダー達を勝たせるために情報提供してるんじゃないのか？」
「いや、組織としてはジムリーダー達には負けてほしいんだよ」
「なっ？！」

五種類のスパゲッティがほとんど噛まれずといってもいいほどの

ペースでアユミの口へと消えていくのをキリンはまじまじと見つめながら、驚きの声を隠せずにいた。

「どうもおかしいんだよ、この新しい世界というのはね。矛盾点が多すぎる」

「矛盾点？」

「ああ、だって世界を手に入れたんだよ？　それほどまでの実力者が公の前でなにも力を誇示しない……何か裏がある気がしてならないんだ」

「まじかよ……おい」

そしてアユミはオムライスとパエリアを同時に処理しながら、口の周りにケチャップをつけてこう言うのであった。

「面白いよ。私は今、とてもうれしい」

そう言いながら口を拭うアユミの声は嬉々としていた。

第十七章：第三、第四のジム　ＩＩＩ：アユミの予感（後書き）

さてなんだかあっさりとしたジム戦となりましたが、次は「裏」ですので。

ルカ「ナタネさんサイド？」

予定ではねｗ　では、また次話で！

ルカ「じゃねー」

第十七章：第三、第四のジム　ＩＶ：キララの託したもの（前書き）

ルカ「今話と次話は結構読むのが大変かもしれないってＫａｒｙｕが言ってたよ」

というよりも、またもや伏線回収となりますのでご了承ください。

ルカ「結構前に書いてあったことだったっけ？」

そうだね。というかむしろ伏線っぽく残してないので、これで理解してもらえれば幸いです。といっても今話はちょっと触れる程度ですが。では、どうぞ

第十七章：第三、第四のジム　Ⅳ：キララの託したもの

ナタネから敗北を喫したキリンは今、アユミと共に夕食をレストランでとっていた。

相変わらずのアユミの食事の量に、キリンは食欲がうせるのを感じながらも彼女の話を必死に聞いていた。

「うれしいって、どういうことだよアユミ」

「うれしいんだよ。とにもかくにもね」

ステーキの肉を両頬にほおばって、アユミはフォークをキリンへと向けて告げる。

「私達の日常を奪い去ったやつらの親玉が、こうやって私達に刺激を与えてくれるんだ。くくく、それに応えなきゃいけないじゃないか……そうだろ？」

「おいアユミ、お前……」

キリンは危惧していた。

アユミは昔から勉強の虫と呼ばれるほどの秀才であった。なにを聞いても答えられ、成績においてはスクール歴代トップをたたき出してもいる。

それゆえに彼女はクラスの中でも浮いていたといわざるをえない。疎外はされはしないものの、彼女は孤独だったのだ。

誰からも理解されず、それゆえに殻に閉じこもる。

そんな彼女が今、嬉々としている。それは彼女が心からすべてを理解できずにいるからであろう。

自分の知らないものが、まだこの世界にはあるという認識が彼女に今刺激を与えている。

「私はただの革命としか思っていなかったけど、サカキはどうやらもっと上から物事を見ていたんだろうね。それを今、再認識できたよ」

「上ってどういうことだよ……」

「一つ一つ整理していったほうがよさそうだね」

「俺にもわかるように頼むぜ」

「ああ、承知しているとも」

アユミはすでにデザートへと手を伸ばしていた。口八丁手八丁とは彼女のことを言うのであろう。

彼女はケーキの乗った皿を手前に引き寄せて、上に乗っているチーゴの実をフォークで刺す。

主張に欠けたショートケーキを見つめながらアユミはキリンを見つめる。

「ん？」

「これが昔の世界だとしようか」

「昔っていうと、この上無しケーキがか？」

「そうだ。サカキがこのチーゴの実だとしよう……上に乗せると、どう見える？」

アユミはゆっくりと赤く煮て熟されたチーゴの実をケーキのクリーム上に乗せる。

「見栄えがよくなったな」

「そのとおりだよ。前の世界はなんの色気もない、つまらない世界だった」

「おいおい待てよ。まさかサカキはこの世界をよくしたっていいたいのかよ」

「客観的にいえば以前よりはマシな世界になっただろうね」

キリンには信じられなかった。このケーキがもしアユミの言うとおりの今の世界だとしたら、誰もが否定するわけがないからだ。

「中身はもちろん変わらないさ。ケーキでいうところの味はね……でも、サカキ自身の登場で世界は完成したも同然なんだ。だけど、サカキは違うものを見ていた」

「なんだよ？」

アユミは説明を終えたのか、ケーキにフォークを通して一部分を口元へと運んで咀嚼する。

「ケーキっていうのはね、ホールが普通なんだよ」

「……？　おいおい、まさか」

「そのまさかさ。今私達が見ているこのケーキは全体の何分の一かだ」

「でもそんなことといつごろ気付いたんだよ、お前は」

ぺろっとケーキを食べ終えたアユミはコーヒーで口直しして続ける。

「だから言っただろう？　今日のナタネを見てだよ。彼女は私達を待っていた……それはつまり、監視されて居所がばれているということだよ。そして私達を監視しているのは二人……ジムリーダー達の寄り合い、そしてロケット団の団員だ」
「っ！？」
「あまり周りを警戒するんじゃないよ、キリン」
「……あぁ。それにしても、どういうことだ？　なんで俺達なんかが」
「それについては私にもわからないよ。でもね、好機としか言い様がないんだよ」
「なにがだよ？」
「私達がジム戦にまたも敗北すれば、彼らのマークからは逃れられる」
「は？」

再戦するはずじゃなかったのかとキリンは問い詰めるが、アユミに一笑される。

「私達はキララの残した情報を手に入れなければならない。まあ、きっと大体が推測通りかもしれないが……そこにはサカキの目標があるかもしれない」
「ジムバッジをそろえるっていう俺達の目標はどうしたんだよ。それに、次のジム戦負ける気は俺にはないぞ？」
「なら私がやるよ」
「てか、ここで違う街に行ったほうが怪しまれるんじゃないのか？」
「そうだね。でもジムをあきらめるということは何も珍しいことではないよ」

ジム戦において何人もの挑戦者が現れる。そして敗北した者が再度挑戦しにくることは珍しい。

大体がジムリーダーと自分の力量の差に参ってしまうからだ。
「そうかもしれねーけど、俺は嫌だね」
「だったらさっき勝てばよかったんだよ」
「ぐっ……」

キララが残した情報。その元とはどこなのか？　そしてそれが手に入る場所とは一体……？

そのすべてをアユミは把握しているのか？　していないのか？
「でもよ、目星ついてるのかよ？　というかキララのかばんにはなにが入ってたんだ？」
「キララの手帳とモンスターボールだよ」
「モンスターボール？　でもあいつの手持ちは確か……」

キリンはキララが所有していたポリゴン2のことを思い浮かべる。
「どうやらこのポケモンがキララの切り札だったと思う」
「切り札？」
「つまり、彼女の両親が所有していたポケモンということだよ。彼女はあれほどのことを知っていた、となると彼女の両親が一体何者であったかは推測できる」
「……お、おい、誰なんだよ？」

アユミは少しの間目を瞑り、考え込むようにしてから目を開く。
「さあね」

そのときの彼女の表情には一種の憂いが帯びており、しかしキリンはそれ以上追及することはなかった。

「とにもかくにも、あの正月の日に起きた一連の事件は無視はできないということなんだろうね」

カントーの各主要街にて起こったテロ工作に見立てられたロケット団の自作自演は、もしかしたらなにかを隠すために行われたものであったのか。

はたまた、すべてにおいて実行された意味があるのか。

その真意はいまだ闇の中ではあるが、アユミは徐々にそれに近づいていっていた。

「とりあえず今日はネカフェで夜を明かそう」

「ネカフェ？　ネットカフェか？」

「そう。このポケモンを使って実験してみたいからね」

「へいへい」

ネットカフェ、それはサイバーカフェとも呼ばれることもあるがお金を支払うことでインターネット環境の常備されている個室ないしパソコンを使える場所のことである。

さまざまなサービスが提供されており、ポケモンたちと一緒に娯楽を楽しめるなどといったこともできたりする。

「お金はよろしく頼むよ。ナイトパック、二人分だ」

レストランでの食事を終え、またしても多大な料金を支払ったア

ユミであったが、食費に関しては自分で自分の分はきっちりと支払うようである。

そして店から出た彼らは近場にあったネカフェへと入っていき、レジ前でアユミはキリンにそう告げた。

「おい、お前も金あるだろ」

「さっきの食事でほとんど消えたさ。私は食べるためにバトルする主義だからね」

「とんだトレーナーだぜ」

いやいや言いながらもポケギアを機械に通すあたり、キリンもなれてきたのだろう。というか払わないといったらアユミは絶対に払わないことを身にしみて知っているのだ。

「それではＡ２４のお部屋となります。こちらの廊下のつきあたりとなっております」

「どーも」

キリンは店員から入店時間の書かれた伝票をもらい、アユミをつれてＡ２４の個室へと向かう。

「へー、結構広いんだな」

「そんなことはどうでもいいんだよ。ほら、そこを空けて」

「へいへい」

アユミはキララのショルダーバッグから取り出したボールを開いてポケモンを呼び出す。

そして現れたのはポリゴンＺ。キララの持っていたポリゴン２の

進化系である。

「おいおい、これってキララのポケモ……ん？」
「このポケモンはポリゴンZ。キララのポリゴン2の進化系だよ」
「へー、ポリゴンってここまで進化するんだな」
「でも妙だ……」

アユミは現れたポリゴンZをまじまじと観察する。一方ポリゴンZは見知らぬ二人に呼び出されて困惑しているようにもみえる。

「というか、なんで気がつかなかったんだろう……」
「なにがだ？」
「いや、ポリゴンについてだよ」
「は……？」
「ポリゴンは野生にはいない。ポリゴンは昔、シルフカンパニー社がはじめて人工的につくったポケモンとして脚光を浴びたんだ……」

そう。ポリゴンとはサカキがシルフカンパニーにて研究の成果として発表したものである。

そしてその研究データはオーキドへと託されて、ポリゴン2、ポリゴンZという段階を経た後にオーキドはマサラの悲劇で逮捕されてしまった。

そうしてときを経て、オーキドは再度サカキの下で研究を再開しミュウツーを誕生させた。

となれば、どうしてキララはポリゴンという試作段階のポケモン……言うならば不完全体であるポリゴン系を持っていたのか？

そしてなぜ二体もいるのか？

「もしかして、キララは……」

「おい、アユミ？」

「ごめんね、ポリゴンＺ……君のトレーナーはもうこの世にはいないんだ。だからキララの代わりに私達に力を貸してくれないかな」

アユミはじっとポリゴンＺを見つめて、その両手で体を触れる。

ポリゴンＺは電子音を鳴らして同意の意思を伝える。きっとポリゴンＺも勘付いていたのかもしれない。あるいはキララから言われていたのか。

「おい、アユミ？」

キリンは不安と焦燥が彼をはやし立てる。

「キリン、君は私のサポートを頼むよ……」

「は？」

「もしかしたら、ちょっと面倒なことになるかもしれない」

「どういうことだよ？」

アユミはポリゴンＺをデスクトップの横に設置されているポケモン転送装置にボールへと戻してから設置する。

「今から電脳のプールにポリゴンＺを泳がせて、必要な情報を手に入れる。私の指示は絶対だから、聞き逃すんじゃないよ？」

「なんだかよくわかんねーけど、わかった」

アユミがこれから行うのはハッキング。

もしキララの言っていたことが本当なら。もしここにポリゴンＺがいる意味がアユミの推測通りなら。

彼女は確証を得なければならない。

キララが、いやキララの両親がどうサカキとつながっているのかを。

そしてサカキの思惑とはなんなのかを。

知る必要があるのだ……。

第十七章：第三、第四のジム　Ⅳ：キララの託したもの（後書き）

ポリゴンについての自分なりな考察をもうちょっと深めたいと思いますので、次話もお付き合いください。

ルカ「結構長くなりそうだね」

まあアユミとキリンの立ち位置や過去は結構あやふやとなっているので、そこらへん回収してまいります。

第十七章：第三、第四のジム　Ｖ：二人の別れ（前書き）

さて、いろいろと進展しますがついてきてくだされば光栄です。

ルカ「なんか結構そういうこと言ってるけど、ここまで読んでくれてる人たちはついてきてくれると思うよ」

そう過信しちゃうのは身勝手すぎるけど、本当にここまで読んでくださりありがとうございます。期待に沿えるようにこれからもメディターがんばっていきますか！

ルカ「おー！」

では、どうぞ！

第十七章：第三、第四のジム　Ｖ：二人の別れ

ポケモン転送装置の仕組みというものは皆が熟知しているものなのであろうか？

いうなればポケモンたちが人為的に【テレポート】をされて移動するという画期的なシステムである。しかしそれにはさまざまな問題点があることも言わねばならぬだろう。

そう、これは開発されたシステムではなく……発見されたものであるからだ。

なぜ、どうやってポケモンが転送装置をもってしてとある座標から違う座標まで転送される原理は解明されてはいない。しかし開発者として名を知らしめたアキハバラ博士という人物は存在する。

だがアキハバラ博士は装置についてのインタビューを受けることはなく、姿をくらませている。

「じゃあ先ず俺はなにをすればいい？　アユミ」
「飲み物を用意してきてくれるかい。お茶で頼むよ」
「へいへい」

ポケモン転送装置はネットワークを介して、ポケモンの生体情報をデータ化しているものと思われる。だがしかし生命体のデータ化というのは人間では確認されておらず、これはポケモンにのみ適用される応用技術であるとアキハバラ博士は発表の時に説明した。

つまりアユミが今からポリゴンＺを使ってしようとしていること

はポケモン転送装置を通してコンピューターネットワークへと入り込み、ロケット団……いうなればシルフカンパニー社の情報を得ようとしているのだ。

「お待ちどさん」

「ありがとう。それじゃはじめるよ、いいねポリゴンZ？」

アユミの問いかけにポリゴンZはこくりと頷いてボールへと戻る。

彼女はボールを転送装置の台へと乗せ、パソコンを開いてなにやらキーボードを操作しはじめる。キリンからしてみれば、なにをしているのか皆目検討がつかないが……邪魔だけはしてはならないということだけは直感的に理解した。

さて話は少し遡るが、ポリゴンというポケモンについて補足をしておこう。

ポリゴンというポケモンは人工的に初めてつくられたものである。そして昔一般的に販売もされたりもしたのだが、高額な維持費と管理費が要求されたために廃止されたという記事をアユミは読んだことがあった。

その主な原因としてポリゴンというポケモンは高い演算能力を持っている為、扱いが非常に難しく……オーバーワークですぐにオーバーヒートしてしまうのである。

いわば高性能な生きたパソコン。それがポリゴンである。

なぜアユミとキリンはキララのポリゴンを見たときにそういった違和感を感じなかったのは、ポリゴン2が発表されたときにも一般

販売がなされポリゴンほどには表沙汰に物議をかもさなかったからだ。

しかしポリゴンZを見たときにアユミは確信した。

ポリゴンZとはポリゴン2の進化系ではなるが、能力は上がってはいてもバグが生じて開発されたものである。なのでよりバトル特化となったと言ってもいいだろう。

つまりキララが情報を集めるのに適していたポリゴン2を使っていたのは説明がつく。しかしキララから託された、おそらくキララの両親のであるこのポリゴンZはポリゴン2より高性能でありバグの類が見当たらなかった。

それならばかなりの説明がついてしまう。

キララの両親はただのジャーナリストではないということ。そしてこのポリゴンZはおそらくシルフカンパニー社で開発され、一般販売となったものではないということ。

アユミの読みがもし正しければ、このポリゴンZにはシルフカンパニー社のセキュリティをかいくぐることのできる唯一のプログラムを持っているということになる。

そして今、アユミはかなりの緊張感と高揚感を味わっていた。

鼓動は急上昇し、かすかに指先が震え、下唇に妙に力がこめられ、両目はパソコンのモニターから離れられずにいた。

すでにポリゴンZは転送装置の台からはボールごと消えており、

おそらくはすでに電脳世界へと飛んでいるのだろう。

そしてどれくらいの時間が経ったであろうか。少なくとも五時間か六時間か……。

アユミが動かしていた指を止めて、するとポリゴンZのボールが戻ってくる。

「お、おい、アユミ？　大丈夫か？」

キリンは彼女が終わるまでの間、ずっと見守っていた。

「は、ははは。とんでもない連中だったよ……ロケット団、いやサカキという人物はね」

アユミはどこか遠くを見るような目でそう微笑し、乾いた笑い声をあげる。

「どうだったんだ？　やっぱりいろいろとわかったのか？」

「まあね。でも、そのために払った犠牲は大きかったよ」

「は？」

アユミは転送装置の台にあったボールを取って、開閉スイッチを押す。するとその中にいるはずのポケモンは現れなかった。

「お、おい、ポリゴンZは？」

「消えたよ……」

「は？」

「追跡を免れるためにシルフカンパニー社のデータバンクで爆発してもらったんだよ」

「……は？」

つまりポリゴンＺはアユミにすべての情報を渡すだけ渡して自爆したということだ。

「今頃シルフカンパニーは大慌てだろうね。そして、私達も危ない……」

「俺はお前がやったことはよくわかんねー。でも、それは必要なことだったんだよな？」

「私が無駄なことをするような人間だと思うのかい？　心外だね」

とアユミは強気で言い放つものの、キララから託されたポリゴンＺを殺してしまったのだ。心境は平穏では決してないであろう。

「早く、ここを出よう。きっと、狙われている……。こんなところで騒動は起こしたくはないから」

「ああ、しっかりつかまっとけよ」

「……あぁ」

アユミがスクールの中で頭角を現していたのはなにも勉学だけではなかった。気の合う友人がいなかった彼女は常にパソコンを用いてさまざまなことをしていた。

キリンはアユミがスクールのパソコン前によくいることはしっていたが、まさかここまでできるようなことを習得していたとは知らなかったのだ。

そんな彼女を労いながら、キリンはアユミを背中に背負う。

「お前を守るのが俺の務めだからな。ここからは任せてくれ」

しかしアユミはキリンの言葉が聞こえていないのだろう、すやすやと寝息を立てていた。それを傍目に見ながらキリンは微笑む。

個室を出て受付にて伝票を渡すと共に、キリンは預けていた自分のモンスターボールを受け取る。

「あのお客様、大丈夫ですか？」

「ああ、問題ないです。んじゃどうも」

アユミを背負っているのだ、それは不審がられるのも不思議ではない。

「んで、こうなるってか？　とんだ、映画やドラマだよな」

キリンが裏通りに入って街を抜けようとした時、暗闇に混じって複数の人物に二人は囲まれた。

「ミサカ　キリンとカンバル　アユミだな」

「別にんなこと確認しなくてもわかってるんだろ？」

キリンはアユミと荷物を路地に下ろして、腰のベルトに手をのばす。

「今まで監視対象でしかなかったが、今ほど正式に抹殺命令が下った。覚悟してもらおうか」

「俺達にはやることが残ってるんでね、そうそうにやられはしねーぞ？」

囲まれた人数は5人。いくらキリンといえど、手持ちのポケモン

二匹では無理がある。

だが、引けはしない。

こうやって狙われている以上、アユミがやってのけたことには意味がある。その意味を、キリンは守りとおさねばならない。

「いけ、ドラピオン」

リーダー格であろう男はドラピオンを繰り出す。

「お前の首を刈って、ボスへと献上させてもらう。お前達もやれ」

「「はっ！」」

ドラピオンを出した男以外の連中はドクロッグをそれぞれボールから出す。

「ドラピオン、やれ」

冷たく機械的に発せられた命に従い、ドラピオンのするどい爪がキリンを切り刻もうとするが……

「ほぉ……。さすがにやるようだな」

体力の回復が済んだサイドンの自慢のボディがドラピオンの爪からキリンを防ぐ。

そしてサイドンの強靭な尻尾がドラピオンの頭部に炸裂して引き離すも、たいしたダメージを与えることはない。

するとドクロッグたちが一斉に踊りだし、サイドンを撹乱しながら迫りこもうとするが……

「サイドン、【アームハンマー】！」

両腕を振り上げて、サイドンの【アームハンマー】が地面のコンクリートに炸裂する。その衝撃によってドクロッグたちの動きは一時的に制限されてしまう。

「させるか、ドラピオン！」

しかし多勢に無勢、サイドンが次のモーションと入ろうとした時、ドラピオンの両腕が伸びてサイドンの腕をつかむ。

「【アクアテーっ！？」
「「ぐぁっ！」」
「がっ！！」

闇夜に包まれたこの路地裏で、雲から顔を出しはじめた朝日が照らし出したのは二人の人間だった。

ほかの面々は地面に伏し、彼らのポケモンもどうように意識をなくしていた。否、死んでいた。

「危ないところだったな、坊主」

そう言いながら、その男はキリンへと声をかける。男の服装はキリンたちを襲ってきた男達と同じ物。つまりは、裏切ったということなのだろうか？　現に彼のドクロッグだけが生き残っている。

「ずばり、私がいなかったら大変だったでしょうね」

そして驚くべきことは、もう一人の女性がキリンが対戦して負けたナタネ本人であったのだ。

「なっ……」

キリンとサイドンは一体なにが起こったのかわかる由もなく、ただ呆然と二人を眺めていた。

「とにかく、ここを離れるか。こいつらから本部への連絡が途絶えた途端、また追っ手がくるからな」

そういいながら男は上着を脱ぎ始め、下に着ていたシャツをズボンから引き出す。そうしただけでさっきの連中とは区別ができるようになってしまう。

「さああなた達も準備して」

一方のナタネはあの奇抜な格好ではなく、茶色と白といった地味目の服装に身を包んでいる。彼女がなぜナタネかわかったのは、彼女がつけているバンダナと髪型のせいであろう。

「一体、どういうことなんだよ」

キリンがやっと口を開いて問い詰めようとすると、男のほうからは彼を抑止するような声でキリンの肩に手が乗せられる。

「お前達のやったことは言うなれば大罪だ。そして今の世界で善がサカキの手にあることを再認識しろ」

「っ！」

キリンはにらみつけるような視線で男を射るも、男は毅然としたままアユミを肩に担ぐ。

「ナタネ、悪いな……つき合わせてしまって」
「ずばり、いいことはないでしょうけど……御武運を」
「ああ。行くぞ、ミサカ　キリン。俺について来い」
「お、おい、ちょっと待てよ！」

男がアユミを担いで先へと行ってしまう為、キリンは荷物を持ち上げて後に続く。彼のサイドンにいたっては何もわからぬといったままボールへと戻される。

そしてキリンは最後に振り返ってナタネを見た。彼を負かした最初のジムリーダーの姿を……。

彼女はキリンに向けて辛辣とまでは行かないまでも拒絶するような発言をした。だが彼女は自分達を助け、そして今は笑って見送っている。

それがナタネの最後の姿であることを、キリンは数日後に知ることになる……。

第十七章：第三、第四のジム　Ｖ：二人の別れ（後書き）

さて、最後に出てきた男なのですが……この人は新キャラではありませんのでご安心を。

ルカ「といっても覚えてる人っているのかな・・・」

まあ伏線らしき伏線もないのでわからないかもしれませんが、次回明らかとなります。

ルカ「それじゃ、またね！」

では！

第十七章：第三、第四のジム　ＶＩ：謎の男（前書き）

最近すんごく日中なのに眠くなって、いつのまにか眠ってしまうことが多いです。

ルカ「大丈夫・・・？」

疲れてるのかな・・・；；

ルカ「ちゃんとベッドで寝てよね」

あ、はい・・・・・・；；

第十七章：第三、第四のジム　ＶＩ：謎の男

カンナギタウン：

あれからどれほど歩いたのか？　しかし今、キリンはカンナギタウンへとたどり着いていた。

なぞの男の後についてきて、キリンはここまで来た。いくらほど歩いたのだろうか？　激しいみちのりを延々と7、8時間と歩き、その間男はアユミを抱きかかえたまま何もしゃべらなかった。

キリンがいくらたずねても、男はただ一言「黙ってついてこい」とまでしか言わなかったのもあるが……。

「おい、いい加減しゃべったらどうだおっさん」

カンナギタウンが見えてくると、キリンは一際眼光を鋭く光らせる。いつも大体の場合は考えなしのキリンでも、相手の男に自分がかなわないことは本能的に察知していたが……そろそろ堪忍袋の緒が切れ始めているのだ。なにせ、アユミを延々と担がれているのだ……ほかの男の手によって。

「黙ってついてこいと言ったはずだ」

「ってめぇ！」

キリンが食いかかろうとするが、あっさり足払いをくらってキリンは横転する。

「あの小屋が見えるか？　とりあえずはあそこで話をつける」

「ちっ！」

頬に地面の砂利をこすり付けられて、キリンは男が指差した小屋を目視する。歯軋りをすれば、かすかにだが砂のじゃりじゃりした感触が舌を伝う。

今ではすっかりと日が昇り、昼時である。しかしながらいまだに季節は冬……吐息は白い靄へと変わり、吹き抜ける風は肌をちりちりとさせる。

さらに緊迫とした雰囲気をもって、男とキリンたちはカンナギシティの郊外に位置するなんの変哲もない小屋の中へと入っていく。

「ん……」

「アユミ？　お、おい、大丈夫か？」

小屋のソファに男はアユミをおろすと、アユミはまぶたを瞬かせながら意識を取り戻す。

「ここは、どこだいキリン」

アユミはキリンの心配に答えずに、自分のいる場所の確認をすると共に目の前のなぞの男から視線をはずさない。

「ここはカンナギシティだよ、カンバル　アユミ」

「どうやら私たちは有名人のようだね、キリン」

そしてアユミはこういった事態を想定していたのだろう、冷静に男と会話する。

「だがお前が想像していたのとは少し違うだろうな」
「ああ、そうだね。そうであったなら、こんなソファに座らせてはもらえてはいないだろうからね」
そう、もしアユミが想定していた事態となっていたならば良くて拘束……最悪、死んでいたのだから。
「とりあえずお前も座ったらどうだ、ミサカ　キリン？」
「ちっ」
渋々とキリンは男の指示通りにアユミと同じソファへと腰を下ろし、男は彼らの向かいの椅子に座る。
「まずはお前がつかんだ情報を提示してもらおうか？」
ジャケットの内ポケットからタバコを取り出した男はおもむろにライターを点けて火を灯す。
「情報交換において必要なことは二つあるのだよ。信頼と信憑性だ」
「ふっ……言うな。いいだろう、俺から喋らせてもらう」
改めてアユミとキリンは男を見定める。
ボサボサになった無精髭に加えて彫りの深い顔立ち。シンオウの出ではないということは一目でわかる。厚い手のひらに加えて、がたいで言えば人並みなリングマといった感じだろうか？　少なくともアユミのような少女一人を軽々と担いで歩くのは朝飯前だろう。
しかしだからといって巨漢というわけではなく、着痩せするタイプでもあるのだろう……髭のせいで年をとっているように感じられ

るが、添ってしまえば１０歳くらいは若返るのではないのであろうか。

「俺の名はシラヌイ　ゲン。元国際警察……ポケポリと言ったほうがわかりやすいか」

「「！？」」

国際警察、あるいはポケポリ……それは国際犯罪や国際的指名手配犯を捕まえたりする特殊な警察のことである。しかし、なぜポケポリの人間がこんなところにいるのか二人は理解できずにいた。なぜならば今起こっていることは国内の問題であり、国際的ではないからだ……と思っていたからだ。

「言っただろう、元だってな。俺たちポケポリも自由に行動できるわけじゃない……国家主権の問題もあったりするからな」

「意外だね……しかし、こんなところにそんな格好でいるということはいろいろとありそうだ」

アユミは目上の人間に対しては口調を変えるものだが、目の前の男の前では取り繕わなくても構わないと判断したのだろう。

「順を追って説明したほうがいいか？」

「いや、詳しいことは後回しでもいい。それよりあなたが私たちの前に現れたのはシルフカンパニーの件かい？」

「まあな。まあ、まさかあんなだいそれたことをしてくれるとは思ってもなかったが」

「それで欲しい情報でもあるのかい？」

ここでアユミは話を進めるが、一つだけキリンは気づいたことがある。それはこの男が自分たちを救ってくれたということを知らな

いということだ。

「アユミ」

「なんだい、キリン。今忙し――――」

「こいつが俺たちを助け出してくれたんだ、ロケット団の奴らに殺されかけたとこを」

「……そうか、なるほどね。つまりあなたは私たちのことをずっと監視していたってわけか」

「頭の回転が早くて助かるな。それに、ゲンでいい」

少なくとも彼らの年の差は軽く２０を超えるだろう。しかし、ゲンはそう提示してアユミたちからの信頼を促す。

「わかったよゲン。なら私から話そう……ロケット団、いやサカキの目的を」

「ああ、頼む。俺の目論見通りにならないことを祈るがな」

ゲンの言い回しに若干引っかかるも、アユミは続ける。

「サカキの最終目的は二つに分岐する」

アユミは右手で2を示し、中指を下ろす。

「一つは異次元への扉を開くことで新たなるイニシャルインシデントを起こすこと」

それはミュウが事前に手にしたサカキの目標の一つである。

イッシュ地方の六角形に点在する八つの街が扉の鍵穴を示し、その鍵である八人の特殊な能力をもった八柱力。いかにして彼らが扉

の鍵として異次元へと世界をつなぐかはわからないがサカキがそれを望んでいることはしれている。

「そしてもう一つが、自分の滅びだ」

自分の滅び。それは自滅ということにもとれるが、ニュアンスが少し違う。

「自滅ってことか？」

キリンが愚直に質問してくるのをアユミは目で制して続ける。

「あのサカキほどの男だよ？　そんな単細胞じゃない」
「そうだな。しかし自ら滅びを求めているのか？」
「ああ。彼は世界を変えたいと願っている」
「世界だと？　だが、あいつは現にこの世界を変えたじゃないか」

思い違う点がゲンにはあるのだろう。

そう、たしかにサカキは世界を変革させた。だがそれだけではダメなのだ。

「発展した科学技術、円滑とした経済の流れ、より効率的な生活を手に入れた人間、そして人間社会という新たなる自然の形に慣れたポケモン達……。こういったサイクルができてしまった今、サカキはその循環を壊そうとしているんだよ」
「サイクル、だと……？」

人々が生きる時代というものは個人にとっては短いものであるが、歴史から見れば長いものである。そしてその中で様々な進化や発展

を人は織り成してきた。

だが、限界はやってくる。いや、限界ではなく……落ち着きといったほうがいいだろう。

高みを目指さなくても良くなったのだ。

「意欲の停滞……それが導くものは人の破滅だ。そう、サカキは思っているようだね……といってもここからは私の勝手な解釈だけど」

「なら、今のサイクルはどうなっているんだ？」

「今のサイクル？　崩れてはいないさ……言うならば更に流れが良くなったといえるかもね」

サカキの介入により世界は変わった。自作自演のテロ活動とその鎮火に貢献したと民衆に知らしめるほどの巨大な組織と企業を持ち、更には全国を統べるほどのカリスマ性がサカキという人物にはあるのだから。

「だが腑に落ちないな」

「なにがだい？　いや、今度はゲンの番だよ……言わなければならないことがあるんだろう？　聞きたいことはやまほどあるのだからさっさとしたまえ」

「ふ、そうだな。まずは俺が元ポケポリだったってことについて説明するか」

ゲンはタバコを床に落として、それを靴底で踏み躙(にじ)る。

「俺は数年前からサカキとロケット団を追っていた。個人的にはサカキをだ……それに効率がよかったのがポケポリになることだったんだがな」

「見た感じキリンと同じなのに、良くポケポリなんかに入れたね」
「案外、頭は回るほうだぞ？」

にっ、と笑ってみせるゲンの顔はとても優しそうでそれでいて頼もしい。

「ふん、それで？　なんでやめたんだい？　それとも、やめさせられたとか言うんじゃないだろうね」
「いや、自分からやめたさ。サカキに勘づかれる前にな……それでダブルスパイとしてロケット団にも入っていた」
「君はどこまでつかんでる……」

ゲンの口からダブルスパイという単語が出てきた時、アユミの表情が険しくなる。前髪のせいであまり伺えないが、彼女が放つ空気がピリピリと逆立っているのがわかる。

自分からわざわざダブルスパイと白状するスパイなど真意が見えない。

「そう警戒しなくてもいいさ。とりあえず、俺は自身の為に動いているだけだ。その中でお前たちは使えるだけさ」
「君は話が下手なのか、それともなにか言い含めているのか……おそらくは後者だろうけど、面倒な男だね」
「よく言われるさ」
「それで、君には依頼人がいるのだろう？」

ダブルスパイとまで言ったのだ。それはつまり雇い主がいるということになる。

「それはその内わかるさ」

「……まあいいよ。それで君はこれをどう見ているんだい？」
「俺はサカキという奴に個人的な面識がある。そして俺はあいつに家族をマサラの悲劇で殺された」
「「え？」」

マサラの悲劇。その単語は有名でありながらも、未だに数多くの謎をはらんでいるものである。

「そうだな、まずはマサラの悲劇の全貌を伝える必要があるのかもしれんな」

マサラの悲劇の全貌。

アユミとキリンは固唾を飲み込んでゲンを見つめる。

あの日の真実が今、解き明かされようとしていた……。

第十七章：第三、第四のジム　ＶＩ：謎の男（後書き）

さてシラヌイ　ゲンを覚えている方はいらっしゃるでしょうか。

ルカ「私とカナをハナダデパートの上で助けてくれた人だよね？」

そうそう、まあ病院ではルカを疑ってはいたけどね。

ルカ「あの人はなんであの時私にあんな話してくれたんだろう・・・？」

まあそれはおいおいわかりますよｗ

それでは、次話をお楽しみ！

第十七章：第三、第四のジム　ＶＩＩ：マサラの悲劇（前書き）

さてさて今回はちょっといろいろ整理しましたので、頑張って思い出していただｋれば幸いですｗ

ルカ「面倒くさい話って嫌い」

まあまあ。

最近雨が多くていやですが、頑張って参りましょう。

では、どうぞ！

第十七章：第三、第四のジム　ＶＩＩ：マサラの悲劇

「２０年前、マサラタウンで俺の家族が殺された」
「ま、待ってくれ……。２０年前のマサラの悲劇ではそんな報道はされていないはずだ」
「そりゃそうさ、その事実は上層部によって揉み消されたんだからな」

ゲンがそうつぶやきながら、新たにもう一本のタバコを取り出す。

アユミの動揺をよそに、ゲンは続ける。

「２０年前……俺がちょうど実家に帰省した時のことだ。サカキを筆頭に率いる少数精鋭による作戦が遂行されていた」

アユミとキリンはもちろん事件のことは知っている。

だが詳細な記述を読んでも全面に出ていたのはオーキド博士による陰湿な実験のことのみ。誰かが殺された、あるいは失踪したという事実は書かれていない。

「あいつの目的はオーキド博士の研究データ。そりゃそうだろうな、あんな規模の実験をしていたらあいつが見逃すものじゃないだろう」

さてここで一つ整理しておかなければならない事項がある。

オーキドの人工擬似生命体開発の実験はサカキによる依頼をもって行われていた。だから彼らは知らないのだ。

ゲンのように事情を知っている連中はサカキがオーキドの実験データを盗もうと試み失敗したと思っている。そしてサカキが直々にオーキドを監獄から出したのはその腕を買ったから……と推測したのだ。

だが事実は違う。

オーキドが少数精鋭でマサラを訪れていた本当の理由……。

それはゲンの家族を抹殺する為であった。

だがゲンもサカキ以外の連中も知らない……マサラの悲劇という事件がこのことを隠す為のカモフラージュであったということなど……。

「あいつらが俺の家を拠点にする為に……そして俺があそこにいるとわかっていたから……サカキは、サカキは……」

ゲンは苦い思い出を噛み締めるようにして、それでも話をしていく。

「あいつがあの時なんで俺を生かしたのかはわからない。だけどな、俺はあいつを一生許すつもりはない」

アユミは黙ってゲンの言葉を整理していき、ある疑問にたどり着く。いや、単純明快であったのかもしれない。

「君は、いつどこでサカキと知り合ったんだい？」

そう、話のつじつまはあっているが驚かされることばかりである。

なぜならサカキとこの目の前にいる男は同年代であるということは疑いようがない。実際にサカキはまだ５０に行っていない。

アユミが察するに２０年前の時点でサカキはグループのリーダーとしての素質をすでに備えていたということだ。

「俺はもとはハイアの出身でな。あいつは俺の幼馴染だった」
「幼馴染？」
「ああ。あいつは小さい時から人とはものの考え方がずれていた……そこに俺は憧れていたのかもしれないな」

ハイア地方、それはジョウトとホウエンの間に位置する場所。砂漠地帯であることで有名であり、存在している街の数はほかの地方に比べると圧倒的に少ないがいくつかの大企業を生んだりなどと一目は置かれている。

そしてサカキがそのハイア出身であるということをアユミは知っていた。

「だがある日、俺たち二人の前に謎の女が現れた」
「謎の女？」
「ああ。そいつはサカキに一つのモンスターボールを託して消えていった」

覚えているだろうか？　そう、サカキに託されたボールに入っていたのはミュウ。

昔、ポケ人がサカキに託したボールである。

「それ以降、あいつは変わっちまった。いや、本来のあるべき本性を開花させたっていったほうがいいのかもな」
「そこからサカキの知名度と名誉は上がっていった、そうだね？」
「ああ。あいつは実験室に閉じこもり、そしていつのまにか名声と富を築きはじめていた」
「そのボールにはなにが？」
「そこまではわからんさ。追求しようとしたが、あいつは俺のことなどまるで眼中にいれてなかったみたいだしな」

話を聞く限り、大学に入るにあたり二人に接点はなくなったらしい。

サカキは自社の立ち上げに成功し、ゲンはカントーへと上京してタマムシ大学へと通っていたらしい。

そして休みに入った時に実家から呼び出され、帰ってきた時にサカキ達に家族が襲われた。

「つまりサカキ達が表立った行為をしなかったのは、やっぱりオーキド研究所の爆発が原因なんだね？」
「良く知っているな。そうだ、あいつらがオーキド研究所へと行こうとした時に起きた爆発音のせいで奴らは撤退したんだ」

そう、マサラの悲劇と呼ばれる所以であるオーキドの研究が通報された原因がこの爆発にある。大規模ではなかったが、近くを訪れていた市民がこの爆発で研究所を訪れ、そこでその惨劇を目撃したのだ。

「あの後、絶望の淵に追いやられた俺だったが……まあなんとかなるもんだな、人生ってのは」

「もしやのろけ話がはじまるんじゃないだろうね」
「お前たちももう少し大きくなったらわかるさ、パートナーの大事さがな」
「知りたくもないね」

アユミはそっぽをむいてしまうが、前髪の下では目線がキリンのほうへと向けられていた。

対するキリンは先ほどの会話の内容が理解できずに、「パートナー？」とつぶやきながら首をひねっている。

「まあ家族というのはいいもんだ。自分の人生を投げ出してもいいほどにな」

そう言ったゲンの表情は若干の曇りを見せるも、タバコで一服ついて払拭させる。

「大学を出てすぐにポケポリへと入った俺は多忙な毎日を暮らしてたんだが、１４年前にとあるサカキ絡みの事件で一人の赤ん坊を救出したことがあった」
「どんな事件なんだい？」

そうアユミが訪ねたのは、彼女の知識の中で１４年前にあった事件で該当するものがなかったからである。

「表沙汰にはなってないが人体実験を行なっていたらしい。その実験体だったのかはわからないが、俺はその子を保護し、調査した結果……どうやらオーキドの研究とつながっていたことがあとあとわかったんだ」
「その事件、もしかして当時のシルフカンパニー社の下請け会社が

関与していなかったかい？」
「良く知ってたな、ああ、その通りだ」
１４年前とすれば、すでにサカキがシルフカンパニー社の社長として就任していた。そしてそんなシルフカンパニー社を危惧する人物が書いた記事を読んだことがあるのをアユミは覚えていた。
そう、確か書いた人物の名前は……
「ミキキ……」
そうである、若きし頃のミキキ　キララの父である。
「どうかしたか？」
アユミの様子がおかしいと判断したのか、ゲンは彼女に言葉をかけるがアユミは我にかえって首を横にふる。
「な、なんでもない。続けてくれ」
「調査がだいぶ進み、俺は再度マサラタウンへと赴いた。その時に、思わぬ邪魔が入った」
「邪魔？」
「ああ、お前たちも知っているだろう？　史上最年少でポケモンリーグとチャンピオンを屈したポケモントレーナーを」
史上最年少でポケモンリーグを制覇した男、それはもちろんあのサトシのことを指していた。
「まあ彼からしてみれば、俺は悪人に見えたんだろうな。バトルのせいで欲しい情報は入手することはできなかったが、それでも確証

は得られた」
「確証？」
「ああ、あのマサラの悲劇での爆発は人為的なものだったってことがな」
「人為的？　その真意は？」
「それがわからないで、迷宮入りってわけさ」

アユミは少し考え込むようにして、何か思い当たるも筋が通らないと思いその発想を切り捨てる。

「それで？　ゲンはこれからどうするんだい？」
「ん？　とりあえずはお前たちと一緒にいようと思うが？」
「なにさも当然とそういう流れになってるんだい！　キリンも何か言ってやったらどうだい！」
「んぁ？　まあ別にいいんじゃね？」
「き、君という奴は！　さっきまでこの男に敵対心を露にしてただろう！」

キリンは顔を真っ赤にして怒鳴るアユミをからかいたくてしょうがないのだろう。実際さっきの話の半分も理解できずにいたのだから多少のストレスがたまっていてもおかしくはない。

「案外そのおっさん悪い奴じゃないみたいだし、頼りになるんじゃね？」
「だからといってこんな馬の骨と私は一緒にいたくないのだよ！」
「おいおい言ってくれるねえ嬢ちゃん。だが、俺がいて損することはなにもないぜ？」

と言いつつゲンは懐からあるものを取り出す。

「そ、それは……」
「ああ、フォレストバッジだ」
ゲンが手に持つそれはフォレストバッジ、キリンが敗れたナタネのハクタイジムのバッジである。
「なぜ君がそれを？　まさか……」
「いや、それはないぜアユミ。俺たちを助け出したのがナタネとこのおっさんだったからな」
キリンでも直感で理解したのだろう。もし目の前の男がまだなにか隠しており、一連のジムリーダー達殺害に関与しているのではという憶測がアユミの脳裏をかすめたのだ。
「ナタネには悪いことをしたが、俺たちに許された時間は少ない」
「それは私がしたことが大きいのかな？」
「それもあるが、組織内で動きがあった」
「動き？　もしかしてＰｏｗｅｒ　ａｎｄ　Ｇｒａｃｅのことかい」
サカキにとっては不幸中の幸いと言えるのかもしれない。
サカキが始動させた作戦コード名、Ｐｏｗｅｒ　ａｎｄ　Ｇｒａｃｅはアユミのハッキング前に出されたものである。ゆえにその作戦を彼女に勘づかれることはなかった。
「そこまで掴めたのか、さすがだな。ああ、そのとおりだ」
「おいおいアユミ、なんだよその……ぱ、パワーなんちゃらってのは」
アユミは一拍置いて自身がモニターの中でつかんだ情報を口に揃

えて出す。

「Ｐｏｗｅｒ　ａｎｄ　Ｇｒａｃｅは伝説と謳われるポケモンたちを捕獲して、八柱力を覚醒させる作戦らしい。つまりはイニシャルインシデントを起こす為に必要なものがあるというわけだ」

「他には？」

「ロケット団の組織が関与しているデータなら得ることができた。でもサカキ個人の情報は全くもってデータバンクには入っていなかった……それはつまり、サカキ自身が組織に対して秘密にしていることがあるというわけだ」

「ということは、お前が言っていたサカキが望んでいる自滅っていうのは……」

「憶測の域を出ないね、それでも……」

アユミは軽く震え出した手を抑えて、意を決する。

「もし彼がそれほどの人物だった場合、私たちは未知の敵と遭遇することになるだろうね。それが人なのか、ポケモンなのか、それとも……私達の知らないなにものかが必ずこの世界を終わらせにくるよ」

サカキが望むもの。そしてそれを望まぬ者たちの真の戦は、まだ始まったばかりだ。

「

第十七章：第三、第四のジム　ＶＩＩ：マサラの悲劇（後書き）

勘の良い方はお気付きになるかもしれませんが、これでゲンという人物が何者かがわかったかと思います。

ルカ「なんか思わせぶりだったよね」

そんなこと言わないで；；；

それでは次話で！　おそらく内容的には今回よりも楽になると思いますので！

ルカ「じゃねー」

第十七章：第三、第四のジム　ＶＩＩＩ：八人目……（前書き）

梅雨入りですねー。

ルカ「あっめあっめちゃっぷちゃぷらんら～？」

雨、苦手です。

ルカ「えー、いいじゃん雨」

いやー靴もズボンもやられるから苦手です。まあそれも数日の辛抱ですよね；；

ルカ「ら～ん♪」

第十七章：第三、第四のジム　ＶＩＩＩ：八人目……

「仮にだ、もしお前の憶測があたったとしたら……どうする？」
「起こさせはしないよ。それに得た情報によれば八柱力の内、一人はこの世を去っている」

ゲンの不安の種をアユミはそう言って答える。

しかし真実を語るアユミの表情はどんどんと悪化していくのをキリンは感づいていた。

「それなら、あいつの野望は終わったんじゃないのか？」
「いや……どうやら代役ができるものがいるみたいだね」
「代役だと？」
「ああ、ポケ人さ」

その表現にゲンは固唾を飲み込まざるを得なかった。

もはや都市伝説とも言える存在であるポケ人。ゲン自身、ポケポリにいた頃はその類の資料を目にしたことはある。だがしかし近年ポケ人による表立った行動や発見情報がなかった為にそろほど気に関していなかったのだ。

「ポケ人は自然に存在していいのか、はたまた私たち人類とポケモン達の新たなる姿であるのかはわからない。でもサカキはそのポケ人を使ってイニシャルインシデントの再来を目論んでいる」
「……なるほど。ならばこれからどうする？」
「君みたいな大人が私みたいな子供に意見を尋ねるのは、愚直であるとは思わないのかい？」

アユミは憎たらしそうにいつもの口調でそう言い切るが、ゲンはそんな彼女に肩を上げて

「そんなもん関係ないさ。俺には時間も余裕もないからな、なりふりかまってなんていられない」

「そうか」

このゲンという男がどれほどの覚悟を持っているのかは二人には計り知れない。だがそうは言ってもアユミとキリンにもあまり猶予があるとは言えない。

「それなら仕方ないね。私たちは結託する必要がありそうだ」

「みたいだな」

「アユミに手だしたら、俺が許さないからな」

ゲンが差し出した右手をアユミがつかむ前に、キリンがそう釘をさす。

「き、君はいきなりなにを言うんだね！？」

「はっはっは、大丈夫さ。俺には妻も子もいる」

「べ、別にそういう答えを期待していたわけではないからね！？」

顔を真っ赤にしてあたふたするアユミに対して、まるで父親のような柔和な笑を浮かべるゲンと頭をぽんぽんとなでるキリン。

「ふんっ！」

自分がからかわれているのに不満を感じたアユミはゲンの右手を弾いて、そのまま小屋の外へと出ていく。

「付き添ってやりな」
「言われなくても、わかってるさ」
ゲンにそう言われ、キリンは即座にそう答える。
「だが覚えておけよ。あいつを苦しめるようなことがあったら、俺はお前を切る」
「ああ、わかっているさ」
どん、とゲンの胸元に指を突きつけてキリンはそう宣言してアユミの後を追いかける。
「俺に足りないものは、若さなのかもな」
と一人ぼやくゲンは窓の外でアユミに追いつくキリンの姿を見て苦笑するのであった。

カンナギタウンには古くから祠があり、そこにはパルキアとディアルガの姿が彫られている。
その方へとアユミはすたすたと向かっていき、キリンは頭の後ろ

に手を組んで黙ってついてきている。
「やっぱりね……」
「おいおい、どういうことだよこれ」
しかしながらその古き歴史を誇る祠は、いまや見る影もなくなっている。
「ここには昔、祠があってね。パルキアとディアルガというポケモンに関する情報が眠っていたらしい」
「へぇ……。でもなんでこんなことになってんだ？」
キリンが目の前にするのは入口が破壊され、ガレキの山とかしている祠であったらしきものであった。
「ロケット団の作戦は確実に実行されているってことなんだろうね。どこかで新聞でも買わないとわからないかもね」
「ポケギア使わないのかよ？」
「衛生を使って私たちの居場所を教えるかよりはね」
「な、なるほど……」
アユミは祠を見下ろしながら一息つく。
「ふぅ……」
「おい、アユミ大丈夫か？」
「……大丈夫なわけないよ」
そしてキリンはわかっていた。ここまで怒涛といっても過言ではないほどのことが連続して起こったのだ。

「仕方がないとはいえ、キララから託されたポケモンを……私は、私は……」

そう、ポリゴンZは犠牲となった。短い一時とはいえ、アユミが心を許した数少ない人間がこの世を絶ったのだ。しかし彼女がそれでも平静さを保っていられたのはキララが残していたメモにあった。

それはキララがアユミ個人へと残したものではなかったが、彼女の日誌手帳に記されていたのはミキキ　キララの覚悟であった。

その意志を受け継ぐことが、彼女に対するアユミのせめてもの手向けなのだ。

「アユミ、俺はお前がどこまで知ってるのかわかんねえ」

キリンは一歩アユミへと歩み寄って右肩に手を置いて、引き寄せる。

「ぁ」

「別に無理して抱え込む必要はねえよ。俺はさ、バカだけど……考えるのは苦手だけどよ……」

キリンはぽりぽりと右頬を指で掻いて、アユミを見下ろす。

「お前のことだけを見ることはできるからさ……お前のことだけを俺は守ってやれるから……だからだな、えっと」

アユミは自分の肩に置かれたキリンの手に自分のを重ねる。

「君は実にバカだな……。ちゃんと物事は整えてから喋りたまえよ」

そう言うアユミの口調は穏やかさを取り戻し、安寧としていた。
「その様子じゃ、心配ないな」
「ああ、おかげさまでね」
アユミは自身のコートを翻して小屋へと戻ろうとする。その後ろ姿を数秒ほどキリンは見守りながら、微笑して後をおう。
すると……
「やあ、探しましたよ……ミサカ　キリンにカンバル　アユミ」
「「！？」」
両手を上げて仰々しく二人の真後ろに立っていたのはロケット団の幹部の一人……バラッドであった。
「君は誰だい？」
アユミは注意深く相手の男を観察する。
「おや？　あなたならばすでに私の素性などわかっているのではないのですか？」
「まさか……ロケット団幹部……」
「御名答」
アユミのいやな予感が当たるや否や、彼女はベルトへと手を伸ばしてキリンを呼び寄せる。
「おっと、さすがはカンバル　アユミですね。さすがは八柱力と言

うべきですか」

くすくすと口元を指で隠しながらバラッドは笑いを浮かべる。

「八柱力？　ア、アユミが……？」

キリンは訳の分からないといった表情でアユミとバラッドを交互に見やる。

「っ……」

「まああなたほどの者でもさすがに動揺は隠しきれないですよね」

アユミがシルフカンパニーのデータバンクから探り出した情報の一つにあった八柱力に関するデータ。その中に自分の名前があったこと、ケンケンの妹がいたこと、同級生のリョウがいたことにアユミの疑問は深まるばかりだったのだ。

そしてなによりもミキキ　キララの名前も上がっていたことにも。

「自分が一体どんな能力を有しているのかわからない。でも安心してください、あなたはもうすでに発揮したんですよ……我々の組織データを入手したのが良い証拠です」

「っ！！」

アユミの目は見開き、瞳孔が揺れる。

そういうことだったのか、と。

「あなたが見た八人の名前……どういう因果かそういうことなのですよ」

バラッドの含んだ言い方に、アユミはさらに苦渋な表情を濃くする。

「おいアユミ、なんなんだよこいつは！」

キリンは自分のみが話についていけないもどかしさと焦りを感じながらも虚勢を張る。

「薄々感じてはいたけどね……君の目的は私の拉致かい？」

「ふぅむ、どうでしょう。たしかにお達しのあった任務ではそうしろと出てましたが……個人的にはあなたたちと戦ってみたいのでね」

バラッドはそう言い、ボールを一つ二人の前へと放る。

「あなたのことですから私の手持ちのポケモンのこともわかっているのでしょう？」

「エスパー使いの変装奇人、バラッド」

「おやおや……そんなことまで覚えていて下さるとは。さすがは八柱力、あなたの力はなんなんでしょうね？」

アユミはストライクをボールから出してバラッドのポケモンと対峙する。

「願わくば同じユンゲラー同士で戦ってみたかったのですが、構いませんね」

バラッドのポケモンはユンゲラー。そうあの鉱山でバラッドが脱出するときに用いたポケモンである。

「なぜ君は勝負を望むんだい？　君ほどのものなら私たちの前に姿を現さずにどうにでもできたのだろうに」
「人生において波乱はつきものです。その内の一つをこうやってつくりだしただけのことです」
「調子に乗りやがって……」

バラッドの弁舌にキリンはぐっと握り拳をつくり、

「アユミ、こいつは俺が……」
「ここは私に任せたまえ」
「でもっ！」
「何度も言わせるな！」

アユミが声を荒らげる。それだけでキリンはおしだまる。

そう、アユミは今憤っていた。バラッドに対してではない……自分の境遇についてだ……。

「私はまだここで終わるわけにはいかないんだよ。全てを知った今、私はその理由（わけ）を知らなければならない」
「理由（わけ）ですか、言い当て妙ですね」

ユンゲラーが片手のスプーンに炎をまとい始める。

「【炎のパンチ】か……。ストライク、【スピードスター】で牽制！」
「ユンゲラー、【テレポート】」
「見切るんだ、ストライク！」

大量の星による奔流がユンゲラーを捉えようとするも、その標的

は姿を瞬時に消していなくなる。
ストライクは羽を振動させ、自身の周りにおける変化を感じ取ってユンゲラーの出現を見切る。
「ストライク！」
しかしストライクの予感は外れ、ストライクが繰り出した鎌の一閃が切り裂いたのはユンゲラーの残像。つまり、ユンゲラーは最初の出現ポイントに自身の分身を出して隙をついたのだ。
その作戦が成功したのだろう、炎に包まれた右拳がストライクの胴を掠め取り、羽の一部を燃え尽くす。
「おや、期待はずれですね。あなたの力はこんなものですが」
「（ぎりっ」
アユミは奥歯を噛み締め、歯軋りする。
「終わりにしましょうか、ユンゲラー」
ユンゲラーが身悶えるストライクにとどめをさそうとスプーンを突き立てようとした時、
「「「っ！」」」
その場にいる三人が目の前で起きたことに動揺を隠せずにいた。
「面白いことやってるじゃないか」

ゲンが悠然と構えてタバコの煙を吹かす。

「そいつを捕まえなきゃいけねえみたいだな」

ゲンのドクロッグがユンゲラーの懐に入り、ユンゲラーは一撃のもとに気絶していた。

その動作を見切れた人間がいなかったからだ……。

第十七章：第三、第四のジム　ＶＩＩＩ：八人目……（後書き）

まあいろいろと謎というか、話の本筋を通していったのですがいかがでしょう。

ルカ「なんか今章は長いよね」

そうだね、まあ第四のジムに関してはまだどこかも書いてないしねｗ

では、それでは、ではでは～♪

第十七章：第三、第四のジム　ＩＸ：第四のジムへ（前書き）

長らくかかってしまいましたが、第十七章もそろそろ終わります。

ルカ「長い」

いやいや、まあまあｗ

ルカ「それにしても今回の理由は？」

大学って・・・思いの外忙しいんだね。

ルカ「・・・頑張れってことだよ」

精進します・・・；；

第十七章：第三、第四のジム　ＩＸ：第四のジムへ

「ほぅ……これはなかなか」

バラッドは自分のユンゲラーがやられたにもかかわらず、冷静な態度でゲンを見定めていた。

「【ふいうち】ですか、さすがのユンゲラーでもこれは無理ですね」

ドクロッグの右腕に埋もれるようにして倒れ込んだユンゲラーは、そのままバラッドのボールへと戻っていく。

「お前がロケット団幹部の一人か……」

「ええ、そうですよ。お久しぶりですね、チーフ」

「っ！？」

バラッドが含み笑いを浮かべながらゲンを直視する。

ゲンは、バラッドが手を顔前にかざして変えた違う顔を見て驚愕する。

「お前は……」

「はい、お久しぶりです」

声色まで若干変えてバラッドはそうゲンに親しそうな声で答える。

そうこのバラッドが変装している顔は、ゲンがポケポリにいた時の自分の部下なのだった。

「面白かったですよ？　あなたがロケット団のことを必死に追っている背中を見守ってきた身としては」

くっくっく、と卑下な笑声を上げるバラッドをゲンは睨む。

荒々しく太い眉が微動しただけだが、それだけでも相手を圧倒しそうなほどまでにゲンの表情は苛立っていた。

「俺もお前らの手中にいたってことか、笑わせるな」

ぎゅっと握った拳がぎりっと音を鳴らす。

相当なまでにショックだったのであろう。それもそのはず……ゲンがポケポリにいたとき、彼と彼の部下であったバラッドのコンビは高名だったからだ。

ゲンはバラッドのことを信頼していた。だがしかしその信頼も今ここで踏みにじられたのだ。

「まさかここで会うとは思ってませんでしたが、これは少し分が悪いですね」

「逃げるのか、貴様」

バラッドはユンゲラーが入っているのとは別のボールを取り出して、ネイティオを出す。

「ええ、あなたとはいつか決着をつけないといけませんし」

「ふんっ」

ゲンは鼻で一笑し、【テレポート】で消えたバラッドのいた場所

をただ見つめていた。

「おいおいおっさん、こりゃどういうことだよ！」

一部始終を何もわからぬまま見つめるだけで終わったキリンも、そろそろ限界が近づいていた。自分の大切な人が八柱力であったり、敵だと思っていた幹部がなぜかゲンと通じていたり等……頭の整理が追いつかないのだ。

「俺はあいつと昔ポケポリにいたときに組んでいた。今思い返せば、なるほど……怪しい点はいくつかあったんだな……」

ゲンは加えていたタバコを地面へと落とし、靴裏で踏みにじる。

「あいつがハナダの惨劇の時、妙に落ち着いていたのはそのためか……」

一人で合点しつぶやくゲンに、いらだちを覚えたキリンはゲンの胸ぐらをつかむ。

「おい、おっさん。何一人で納得してんだよ……！」

「落ち着け、ミサカ　キリン。今一番に優先しなければならないのはカンバル　アユミのケアなんじゃないのか？」

「っ！」

キリンはゲンの指摘により慌てて背後を振り返る。

彼の視界が捉えたアユミは、今にでもその場に崩れ落ちてしまいそうなほどに弱々しく……そして脆かった。

「小屋にもどるぞ。俺たちに残された時間は少ない」

そうゲンが言い、小屋へと踵を返すのと同時に……アユミは膝から地面へと崩れ、それをキリンが慌てて受け止めたのであった。

アユミが気を失ってから一晩が経ち、ゲンはキリンにわかりやすく今までのいきさつを説明した。

「つまり……お前の家族はサカキによって殺されて、それでその復讐の為にいろいろやってきたってことか？」

「それを理解するまでに、俺がどれほど苦労したかわかるか？」

さすがのゲンもげんなりしたのだろう、キリンの理解力の乏しさに逆に感銘を受けてもいいほどだ。

「う、うっせぇ……俺は覚えるのが苦手なんだよ」

「これで君も私の努力がどれほどまでのものか実感したようだね」

投げ捨てるように言い切るキリンに答えるようにして、ソファで寝ていたアユミがそうつぶやいて身を起こす。

「ア、アユミっ。大丈夫か？」

「心配をかけたね……でも、大丈夫だ」

アユミは自分の額を腕であてながら、ゲンの方を向く。

「大丈夫なのか？」

「微熱だよ、直に治まるさ……。それよりも、一つ確認したいことがある」

心配して声をかけたゲンに必要最低限な言葉でしか答えず、アユミは質問する。

「私達と君が協力するのは構わない。私は組織の情報を……君はサカキ本人の情報をどうやら持っているみたいだしね」

アユミの提唱する事項にゲンは首を縦に振って肯定する。

「だが問題は、全てを一方に話しはしないということだ。当然、私が隠している情報もあるし……君も口は硬そうだからね……言わないだろ？」

そう、そしてそれがネックとなる。

互いの情報を欲しい為に協力するにしても、ここが問題点となる。情報とは時に最高の切り札となりうる……自分の手持ちのカードを自分以外の相手に全てさらけ出すようなことを人はしないのだ。

するとしても、それは相手に騙された時か、自分が油断した時だけである。

そんな爆弾を抱えたままでも、彼らは結託するしかない。

「これを見ろ」

ゲンはコートの内ポケットから小型機器を取り出して、キリン達に渡す。

「なんだこりゃ？」

「小型テレビだと思えばいいさ」

指定されたチャンネルを視聴すると、キリンはその内容に驚愕する。

「な、なんだと……」

そこで報道されていたのは、キリン達が助けられたジムリーダーが事故で死んだという内容のものであった。

「ここまで来たら、もう限界だろうね」

「そういうことだ」

キリンが釘付けにされている報道を片耳で聞きながら、アユミとゲンは互いの意思疎通を行う。

「おいおい待てよお前ら！　人がまた一人死んだんだぞ！？　なにそんな余裕かましてんだよ！」

キリンの激昂。それもそうだろう、自分の窮地を救ってくれたジムリーダーが殺されたのだ。おそらく自分達のせいで、だ。それをゲンとアユミは一現象として片付けようとしている。それがなんともやるせなかったのだ。

「キリン、前にも言っただろう。犠牲はつきものなんだ……」

「っ！」

アユミの言葉にキリンは再度、自分達の誓いを思い出して座り込む。彼は頭を抱え込み、眉間にしわを寄せる。

だが、これでジムリーダーの失踪、または死亡が確認されたのはシンオウで三人目。もはや偶然の一致ではおさまらないだろう。

「今までは親子でジムリーダーをしていたトウガンとヒョウタになにかが起きた事件が絡んでいるという見方が強かったが、ナタネまで消された以上……ほかのジムリーダー達も動き出すだろうな。ジムリーダー達に課された新しい制約については？」

ゲンは淡々と事実を整理し、アユミの見解を待つ。

「ロケット団側としてはジムリーダーの存在は邪険されている。でも彼らにはそれ相応の力があるから、特定の人間が現れる為のふるいにかけているっていうところじゃないかな」

つまり、ジムを制覇する強いトレーナーをロケット団は欲しているということで間違いはないだろう。

「だがなぜ殺す必要がある？」

「確かに殺すことによってジムリーダー達もなにかを画策する危険

性は否めない。でもね、自身が殺されるということ以上に相手を制限させる脅しはないんだよ。それも確実なね……」

ゲンは合点がいったのか、顎に手を当てる。

「なるほどな……。確かに俺たちは殺されたという事実を知っているが、報道はオブラートに包んでいる」

「そうだね、それにホウエンで行方不明となっている双子のジムリーダーもロケット団の幹部だ」

ゲンはその事実を初めて聞いたのか、眉を片方ぴくっと反応させる。

「なに？」

「別段不思議じゃない話だよ。それにジムリーダーに幹部がいたからこそ、きっとこのジムリーダー達への制約は遂行できたと見て間違いないだろうね」

「……これからどうするつもりだ？」

「とりあえずは次のジムへと行くつもりだよ。そうだね、キリン？」

突然話を振られたキリンはとっさにニュースから視線を逸らして顔を上げる。

「ぁ？　あ、ああ、そうだな」

するとゲンは表情を険しくして問い詰める。

「なぜだ？」

そう、もしジムリーダー達が懸念を持ち始めているのにわざわざ

ジムへと向かおうとするアユミの行動をゲンは理解できずにいた。
「だからこそだよ。それにどちらにせよ私たちは狙われているのだろう？　ならここにじっとしているより、迎え撃つ方が情報も入るんだよ」
「えらい自信だな」
「君がいるからね」
「ふっ、なるほど」
アユミはとことんゲンをこき使う気でいるらしい。
「ならいいだろう、次はどこだ？」
「氷煌めく雪の街……キッサキシティ」

キッサキシティ：

あの後、すぐさま身支度を済ませた三人はキッサキシティへと向かった。

雪道だけあってか、追っ手に見舞われることはなかったが……ゲンが言うには監視する者が近くにいなくとも居場所はつきとめられているとのことだった。

まだ時期は冬……案の定、雪が絶えず降り注いでいる。

立っているだけで体温が根こそぎ削がれるという過酷な状況で良く生活できるものだ、とアユミはずっと道中心の中でつぶやきながら辟易としていた。

しかしいずれ来なければならないのならば、早いに越したことはない。そしてアユミには確認しなければならないことがあった。

「それじゃ早速、第四のジムに挑戦といこうか」

アユミはキッサキジムを目前に意気込みを吐く。

「次は……アユミがやるのか？」

「ああ、交代制だからね」

「そっか……」

キリンは若干渋るようにしてため息を漏らす。

「なんだいキリン？　君は負けたんだからおとなしくしておくことだね」

「へいへい」

アユミ達が挑む四つ目のジムはキッサキジム、氷タイプ専門のジムである。

ゲンとキリンを引き連れてアユミがジムに挑戦しようと、扉を開けようとしたがそれはびくともしなかった。

「？」

ジム内の電気はついているし、特段張り紙などの掲示も見当たらない。誰かがいるはずなのだが、呼び鈴を鳴らしても誰かが来る気配はない。

「どういうことだ？」

アユミが首をかしげると、ゲンも注意深く当たりを見渡す。

すると、ジムの奥……突如の爆発で大量の白雪が舞い上がるのを三人は目視した。

「「「なっ！？」」」

アユミは想定していた事象を思い返し、一人駆け足で爆発のあった場所へと進みにくい雪道を疾走する。

「おい、アユミ！？」

「行くぞキリン！」

アユミの突然の行動にゲンはすぐさま対応し、後を追う。

「おい、ちょっと待てよ！」

そして一拍置いて、キリンも後を追うのであった。

突然起きた爆発……それは一体何を意味するのか？

第十七章：第三、第四のジム　ＩＸ：第四のジムへ（後書き）

さて、淡々と進みすぎかなとは思うのですが・・・仕様ですのでご了承願います。

ルカ「第四ってことは、これからまた長く・・・？」

いや、その心配は必要ないよｗ

ルカ「なんだ、よかった」

そろそろケンやジン達も書きたいのでｗ

それでは皆様、次話でお会いいたしましょう！

ルカ「じゃねー」

第十七章：第三、第四のジム　X：キッサキ神殿（前書き）

お待たせいたしました。

第十章はこの話にておしまいです。というかちょっと長すぎた気もしますが・・・あ、それと補足は最後の方でさせていただきますねw

ルカ「なんかさ」

うん

ルカ「最近だらしないね」

・・・・・・・・；；

第十七章：第三、第四のジム　X：キッサキ神殿

キッサキシティ：

豪雪地帯としても有名なこのキッサキシティは、常に除雪車が運行していようとも靴が埋もれてしまうほどの雪が降り続ける。特に冬に至っては、街の者以外は外出するのも危うしといったほどに雪による障害は大きい。

だがそんな悠長なことではアユミ達の目的は達成されはしない。

そんな意気込みでジムへと訪れたアユミ達一行であったが、突如として起きた爆発音に促されてその場所へと急行していた。

常に、最悪の事態を想定しながら……。

ゲンが足の遅いアユミを担ぐようにして雪の中を闊歩し、そのすぐ後ろを荷物を持ったキリンが追いかける。

「わ、私は自分の足で歩けるのだよ！」
「えぇい、暴れるな。お前だとすぐ雪に隠れて見えなくなるわ」
「な、な、なんだって！！　こら、もう一度言ってみたまえ！！」

バタバタと手足を動かしてアユミはゲンの腕から逃れようとするも、無駄な努力で終わってしまう。

雪の間を掻き分けながら、ようやく三人が到着したのはキッサキ神殿の前だった。

「ここは？」

肩やカバンにかかった雪を払いのけながらキリンはアユミに尋ねる。

アユミはゲンの脇下に収まったまま、真剣な表情で神殿のことを語り始める。

「ここはキッサキ神殿だね。もしかして、もうあいつらの手が……？」

三人が臨む神殿の天井からは煙幕が立ち込めており、徐々に野次馬が集まり始める。

「おいおい、なんだありゃ？」

「なにかあったのかな？」

「うお、すげっ」

ただただ状況がわからず、単に起きている事象を見つめるだけでは埒はあかない。ならば取る行動は一つ。

「行くしかあるまい、もしロケット団が動いているとなるとややこしいことになる」

「了解だ。これも作戦の一つなのか？」

ゲンがアユミがハックし集めた情報のことを尋ねてみる。

「そうだね、でも……場所だけで日時や内容は書かれていなかった。つまり、サカキはこういうことも想定して作戦決行時と共に作戦内容の破棄も一緒に命じていたんだよ」

それでも、場所を特定できただけでも不幸中の幸いと言えるであろう。だからこそ、一番近場のキッサキシティへとアユミは来たかったのだ。

しかしながら、それでも手遅れかもしれない状況になっているのかもしれない焦りが彼女を急き立てる。

普段ならばキッサキ神殿は一般に入れるような場所ではない。それはとある資格が必要としている為である。

しかしながら今はそのようなことを考慮している時間はなかった。なぜなら、固く閉ざされているはずの扉は開いており、その向こう側からも煙が流れ出ているからだ。

アユミはとうに下ろしてもらうことを諦めたのか、ゲンに担がれたまま移動する。そのほうが楽であることを思い知り始めたかもしれないが……。

キッサキ神殿の中はさすがというべきであろうか、氷塊と化した岩盤や床に張り付いた氷が至るところで見受けられる。

そんな神殿の中を進む三人の前に現れたのはアユミの危惧通りの人物達だった。

「こちらキッサキ神殿班、準備完了。ホウエンからのレジアイスはまだか？」

リーダー格の印であろう、一人だけ黒いロケット団のベレー帽を被っている男が通信器越しにそういった連絡をとっていた。

そう、アユミ達の目の前にいるのは少数とはいえども十数人はいるロケット団の団員達だった。彼らはシルフカンパニーの一般社員ではなく、元よりサカキに仕えていたであろう生粋のロケット団員である。

そして彼らの後ろに控えているのは、巨大な石像だった。目と思われる七つの点が今にも動き出しそうなほどに、どこか不気味めいた雰囲気を醸し出している。

「レジギガス……」

アユミ達の登場にロケット団も気付き、アユミがぼそっとつぶやいた言葉をリーダー格の男は拾う。

「よく知っていますね、さすがは八柱力だ。しかし、お前たちの追跡班は何をしていたんだろうな。なんなら今ここで殺してやっても構わないんだぜ？」

挑発的な言葉で煽られるが、しかしそういった行動を相手は取りはしなかった。

「お前ら、一体何してんだよ！」

そしてここにいて何が起きているのか唯一わかっていないキリンが一人叫ぶが、アユミに腕で遮られる。

「相手の目的はこのポケモンを蘇らせることだよ」

「よ、よみ？　おいおい、まさかこのでかい石像がポケモンだって言うのかよ？！」

アユミはキリンとレジギガスを交互に一瞥して頷く。
「その通りだよ。これはレジギガス……さっきあの男がつぶやいていたレジアイスが揃えば、つまりもう彼らはレジロックとレジスチルを手中におさめている」
「おいおい、どういうことだよ！」
キリンはますますわからないといった声を上げる。
「あの石像を動かすには三つのポケモンがいる。その残りがレジアイスということだ」
そしてゲンが補足するように説明し、キリンは再度レジギガスを見上げる。
「ふふふ、しかし良くそこまでの情報をそんな少人数で集めたものだ。だがお前たちに俺たちを止める術はない……この女のようになりたくなかったらな」
くいっとリーダー格の男が首を向けた先を見れば、そこには傷つきポケモンたちと一緒にダウンしているスズナ……キッサキジムのジムリーダーの姿があった。
「関係ないね。それなら君たちの計画に支障が出ている間に片付けるだけだよ」
アユミはしかしそんな脅しに屈せず、モンスターボールを握る。
「ふん、威勢だけはいいようだな。やれ、お前たち」

「「はっ！」」

アユミは勘づいていた。

レジアイスが到着していないということは、作戦が遅れているということ。本来ならばホウエンからレジ三体が揃ってからキッサキ神殿を襲撃するはずだったのであろう。

しかし彼らには時間が無かった、揃っていないのにここへと乗り込んだのだ。それはつまり、ギリギリにレジアイスが届くということ。

あるいは、そうせざるを得ない状況に陥ったか。その理由付けとして最も有力なのはスズナの状態であろう。彼女がロケット団を見つけた、それを阻止しようとし返り討ちにあったのだろう。

許されている時間は少ない。

それまでにロケット団を倒し、この神殿からレジ達を遠ざけなければならない。

できるであろうか？

しかし、やるしかない。もしレジギガスが蘇ってしまえば、シンオウは無くなるかもしれないのだから。

「ストライク、ピジョット、ユンゲラー！　総決戦だよ！」

「そういうことなら俺たちも行くぞ！　サイドン、キリンリキ！」

「ここは加勢しなきゃならんわな。頼むぞドクロッグ」

繰り出される６体のポケモン達。

対するロケット団は各々が一匹ずつの１０体。リーダー格の男は通信器を片耳に当てたまま、ただ指示のみを出す。

「レジアイスの到着はもうまもなくだ。それまでの時間を稼げばいい」

「「はっ！」」

ロケット団員の手持ちはヘルガーやゴルバット、ヤミカラスにニドキングといった面々。どのポケモンも相当な訓練と場数をこなしてきたポケモンであることは一目瞭然であった。

「おいおいアユミ、行けるのかこれ？」

「やるしかないのだから黙っていたらどうだい？」

とは言いつつも、状況がすこぶる悪いのはアユミにもわかっていた。頼りになるのはゲンの実力なのだが、アユミは不確定要素のあるものは信用しない。

だからこそバカ丸出しのキリンのことを逆に信用できるのだ。

次々と指令を出されて躍り出てくる相手のポケモンたちを見据えながら、アユミは定まりつつある戦法を整える。

「キリン、君が盾だ。ゲンと私はフォワード、いいね？」

「サイドン、【鉄壁】だ！」

「いいだろう。ドクロッグ、【泥爆弾】！」

サイドンの肩へと登り、ドクロッグが広範囲に【泥爆弾】で相手

ポケモン達を牽制する。

「ピジョットは【吹き飛ばし】！」

「ピジョオオォォォ！」

ドクロッグ自身は飛ばされないように必死にサイドンにしがみつき、ピジョットによる広範囲な風が吹き荒れる。

ポケモンバトルとは常に少人数での対戦が見込まれる。そのため、今回のような大人数でのバトルというスタイルはロケット団の特権とも言える。そういった訓練を受けてきた連中なのだからアユミの策でも退けられたのは数匹だった。

「ヘルガー【火炎放射】！」

「ゴルバット、【妖しい光】！」

「ヤミカラス、【追い風】！」

「ニドキング、【岩雪崩】！」

ピジョットの【吹き飛ばし】にて強制的にボールへと戻らされたポケモンは6体。どうやら残った団員が班長並みの実力者なのであろう。

強制的に距離を取らされた為、相手は遠距離戦法でくる。

「読み通りだね。ストライク、ヘルガーに【シザークロス】！」

「サイドン、【破壊光線】！　キリンリキは【サイケ光線】！」

「ほぉ……ならドクロッグ、【毒針】でゴルバットを狙え！」

アユミとキリンの連携は以心伝心しているかのようにぴったりだ。そしてその作戦の全貌をゲンは汲み取る。

向かってくる【火炎放射】と【岩雪崩】をサイドンが全身で受け止め、【破壊光線】を放つ。しかし体勢が崩れた状態では命中性は下がる。それを補う為、キリンリキの【サイケ光線】がヤミカラスを狙う。

ストライクはヘルガーに向かって疾走し、それを視認したロケット団員がストライクを狙うように指示する。しかしストライクはギリギリのところで交わし続け、サイドンから放たれた【破壊光線】の真下を潜ってヘルガーへと近づく。

そう、サイドンの【破壊光線】はそれが目的。ストライクを敵陣へと近づけさせる為のもの。

そしてキリンリキの【サイケ光線】とドクロッグの【毒針】が空中のポケモンから悟られないようにする為の牽制なのだ。

「ヘルゥ！！」

ヘルガーへとストライクの【シザークロス】が炸裂し、【真空波】で止めを刺される。

そして牽制を受けて戸惑っているヤミカラスとゴルバットに、アユミのピジョットが【ブレイブバード】で畳み掛ける。

「ニドキング、サイドンに【冷凍ビーム】だ！」

「サイドン、【炎の牙】！！」

少しでもダメージ軽減と相殺を目論むキリン。しかしながらさすがにノーガードで耐えるまでにはいたらず、サイドンは膝から崩れ

落ちる。

「キリンリキ、ニドキングに【サイケ光線】！」

「最後に【岩雪崩】だ！！」

キリンリキの攻撃が最後に残ったニドキングに当たるよりもさきに【岩雪崩】が【追い風】の効果によって早められ、サイドンの盾がない今、ピジョットとストライクが倒される。

残ったドクロッグも痛手を負い、キリンリキは最後の力を振り絞ってニドキングとの相討ちに成功する。

「くっ！」

ポケモンを倒されたロケット団員達は歯噛みする。ポケモンが【吹き飛ばし】で戻された団員はしかし新たにポケモンを出そうとする気配はなく、何かの準備に取り掛かろうとしていた。

そしてバトルの様子を見ていたリーダー格の男が「ひゅ〜♪」と口笛を挟み、自分の顎下に突如として現れたアユミのユンゲラーを目下に確認する。

そう、アユミのユンゲラーは最初から【テレポート】で身を隠し、右手のスプーンを男の顎に突き立てていたのだ。

「やるなぁ、さすがだぜ。だが詰めが甘いんだよ」

獰猛的な表情で笑みを浮かべた男は、自分の左手を鳴らす。

「……っ！　ユンゲラー！」

アユミは気付いたのか、ユンゲラーの名を叫ぶが時既に遅し。ユンゲラーは自分の影から現れたゲンガーに【シャドーパンチ】を見舞われてノックダウンする。

状況は打破したと思われた。だが、彼らはエリートだった。

そんな彼らにアユミ達が太刀打ちできる時間も実力もまだ備わっていなかったのだ。

「それに、ほらよ……レジアイスが届いたぜ？」

と男が目を向けた視線の先、つまりは外壁が壊された神殿の外から一人の団員がリザードンと共に現れた。

「ここがキッサキ神殿か。ダイゴさんもいろいろと僕に無茶させるよな」

そう、ロケット団員の服装に身を包んで現れたのは……サトシだったのだ。

第十七章：完

第十七章：第三、第四のジム　X：キッサキ神殿（後書き）

さておそらく皆様の大半がキッサキジムでのジム戦を考えていらしたかと思いますが、自分はジムとまでしか書いておりませんのでw

にゃはw

ルカ「うわー、さいてー」

え、あ、はい、すみません；；

ルカ「それにしてもサトシさん、いろいろ出てくるね」

そうだねw　まあ次は久しぶりにジン達の方へと戻ります。

ルカ「なんかいろいろとロケット団の活動が目立ってきてるから、どうなるんだろう」

それではお楽しみに！

第十八章：それぞれの任務　Ⅰ：散った彼ら（前書き）

第十八章突入！

ルカ「いぇい！」

お待たせしまして申し訳ないです。一応十八章の構成の方をまとめましたので、今回よりは早く更新できるようこころがけます！

ルカ「あてにしないでね！」

ちょっ！？

第十八章：それぞれの任務　Ⅰ：散った彼ら

カントー地方：

「そして……こうなるわけか……」

セキチクシティ郊外に存在する飛行場にイッシュから帰ってきた男がいた。

バンダナで髪をまとめ、スーツを着崩した姿で降り立ったのはガイ。ハナブキ　ガイである。

ミュウにより言い渡された任務を果たしにきたのである。

「あの野郎……何が期限が五年だ」

そう、ミュウがガイ達に言い渡した任務……それは下記の通りである。

『あなた達三人には散らばっている八柱力を探し出してこのイッシュにつれてくること。それがあなた達の新しい任務よ』

ガイはカントーとジョウトを。モモはシンオウを。そしてジンはホウエンを。

それぞれが来るべき時の為に、五年以内に八柱力をイッシュへと連れてくる……それが彼らに課せられた任務である。

しかしいくらミュウといえども、完璧に八柱力の存在を限定でき

ない。本来ならばミュウ自身が赴けばはるかに時間は短縮できるであろうが、ミュウはイッシュを離れるわけにはいかないのである。

「手掛かりでもあるといいんだが、あいつもいい加減な野郎だ……」

ガイは荷物を肩に担いで、そのまま飛行場の出口からセキチクシティ行きへのバスへと乗る。

『八柱力の特徴は前述したとおり、アルセウスによってなにかしら特殊な存在の者。そして、おそらくはあなたたちに年齢が近いか低い子ね』

ジンが忘れないようにとメモっていた紙切れをガイは眺めながら、舌打ちをすると共に窓の外へと意識を向ける。

「なにが、グッドラックだ」

最後にミュウがガイ達に向けた言葉を彼は口にしながらゆっくりとまぶたを閉じた。

カントー空港はセキチクシティの郊外に存在する。それはサファリパークもあることから、ここ一帯は平原が広がっているのだ。

ロケット団を追放され、彼はカントーとジョウトにいる八柱力を探す。

ここカントー、そしてジョウトに存在する八柱力は合計で3人。それらはガイが見たことのある人物であるのは言うまでもないのである……。

シンオウ地方：

「うぅ〜、寒い……」

雪がまだその勢いを滞らせることのない土地へとたどり着いたのはモモ。トウリョウ　モモである。

桃色のマフラーを首に巻いた彼女は深く顔を埋めて、白い吐息を吐いていた。キリンやアユミ同様に船でシンオウのミオシティへとたどり着いたモモは一先ず宿を求めてホテルを探す。

「まあジンくんとガイくんはわからないけど、私は結構組織入る前から稼がせてもらってるからお金には余裕があるんだよね〜。んふふ〜♪」

心の中でそうつぶやきながら、モモは寒さに負けじと宿を探すのであった。

そして値段もリーズナブルなホテルを見つけたモモはその一室でベッドの上にくつろぎながら天井を仰ぐ。

「八柱力……か。連れてこいって……やっぱり生きたままなのかな？　まあ、考えるまでもないけど……」

モモはカメールの入ったボールを眺めながら、呟き、ぽいっとボールを枕へと放ってシャワーを浴び始める。

スレンダーな彼女の身体が湯粒によって濡らされ、沸き上がる湯気がもくもくと彼女を包み込む。

「期限は五年って……五年後に私ってもしかしなくても２８？　うわぁーオバサンじゃん」

などと彼女は一人で愚痴り、ローブに身を包んでシャワーから上がるとそこにはボールから出ていたカメールが寝息を立てて眠っていた。

「シンオウには八柱力が……二人か。もうちょっと情報が欲しいところだけど、情報収集は私の専売特許だからいいかな別に」

昔このダウンタウンで鍛えた諜報技術は今尚モモの体に染み付いている。

そう、ここミオシティは彼女が家族に見捨てられた因縁深いところなのだ。その地へとモモは戻ってきた。

それがミュウの謀るところなのかどうかはわからないが、だがあ

の性悪の考えることだ……いかんともいいがたい。

「ふふ、久しぶりに行ってみようかな」

髪を乾かし続けながら、モモは部屋のカーテンを開けて外を見る。そこに広がっているのは夜になり目覚め始めたダウンタウン……闇の世界である。

モモの呟きにぴくっと耳を反応させたカメールが起き上がり、モモのそばへと寄ってくる。

「あ、カメールも久々に味わいたい？」

「かめっ！」

「そうだよね……暗闇で輝くあの血の臭い……忘れられないよね」

そのとき部屋の窓に映ったモモとカメールの表情は、嬉々としていた。

そしてその日、ダウンタウンにて行方不明となった人物とポケモンはいつもより多かったという……。

ホウエン地方：

「ここは暖かいな……」

イッシュから飛行機でホウエンへとやってきたジンは上着内のシャツをぱたぱたとさせながら飛行機を降りた。

「新しい任務……ちゃんと成功させなきゃ……」

そうした固い意志をもとにジンはここホウエンへと赴いたのだ。

だが、しかし……

「でも、どうやって……」

あまりにも任務内容が漠然としている。それは組織というものに所属していた身としてはとても心許ないのだ。

通達されるときも報告するときもきっちりと決まった内容のものであったのが、今や五年という期限の間に八柱力をイッシュへと連れ帰るというあまりにも情報がなさすぎるのだ。

「いや、でも……」

そしてふとジンは思い至る。

「内容が漠然としているってことは詳細な情報が欠如しているということ。それはつまり、不確定な要素が八柱力にはあるということにつながる」

と、一瞬だけ思考を巡らせたジンはふぅ……とため息をつくと共にソファに寄りかかる。

「そんなの当たり前か……。ミュウ自身、知らないことなんだし」

ここホウエンに現在いる八柱力は二人。

そしてここホウエンには彼の兄も存在する。

これもまたミュウの計らいなのか？　それとも、また別の――――。

イッシュ地方：

「あなたもいかなくてよかったの、ミュウ？」
「私はそんな柄じゃないわよ。それに、調べたいこともあるしね」
「そ、そうしてくださると助かりま、す……」

書類の山の中で埋もれ死にそうになっているマコモを引っ張りだしながらアララギはミュウに尋ねる。

そう、ミュウは未だにこのアララギとマコモのいる研究所に身を置いていたのだ。

「ん？　これはおいしいわね」
「ココアよ、それならあなたも飲めるでしょ？」

アララギは自分のコーヒーの入ったマグカップをすすり、微笑む。

「ええ、甘いのね。これ」

興味津々と好奇心露にさせてミュウはココアをすすり続ける。

「それで？　調べたいものってなに？　八柱力について？」
「それもあるけれど、歴史についてかしらね」

ミュウは今一度ここではっきりとさせたいことがあったのだ。

「たしかにね。まあいいわ、おさらいでもしておく？」
「お願いするわ」
「それじゃあ、マコモ……準備して」

やっとこさ、崩れ落ちてきた書類をまとめあげたマコモはアララギの合図で反応して立ち上がる。立ち上がるが……

「あひっ！？」

ドサァ！　とまたもや書類が散乱してしまう。

「いいから、早くね」

「ご、ごめんね」

アララギに詫びをいれながらマコモはパソコンを操作しながらプロジェクターを下ろす。

ミュウが見つめる壁に天井からおろされたパネルを見つめながら、アララギは説明を開始する。

「２０００年以上前、それはつまりイニシャルインシデントが起こりこの世界に科学という力が誕生した日」

そのイニシャルインシデントが起こったのは、ここイッシュ……。

「その日から私たち人類の歴史は誕生した。けれどもそれは人間が望んだものであり、ポケモンが望もうとしたものではなかった」

自然界においてポケモンたちは世界を支配してきた。たが人類による抵抗……つまりは八柱力の存在により異世界へのゲートを開くことができたのだ。

「その異世界へと通じる門、それがこの地方にあるとされるハイリ

ンク」

スクリーン上にはイッシュの地方が浮かび上がり、真ん中に赤く光る円形の場所……それがハイリンクだ。

「そしてあなたが言う通りならサカキという男はこの時代に揃った八柱力を使って異世界への門を開けようとしている。それでよかったのかしら？」

「ええ、間違いないわ」

「でもなんの為に？　私ならもしこの世界のトップになったのだったら、ほかになにもいらないと思うけど？」

「それは私にもわからない。でもね、アノ人は常に求めているものがあるような気がする。そしてそれはまだ成し遂げられてはいない」

ミュウはそう自己完結し、アララギは眉をひそめながらも説明を続ける。

「まあいいわ。それでポケモン達は潜在意識の中にのみ科学の力を許容して、人間たちの発展に障害が出ないようにした。それはこの自然の摂理を重んじる彼らだからこそ成し得たことだった」

うんうん、とミュウは納得しながら頷く。

「あなたみたいに長生きしていると、やっぱりこの世界は壊れて見えるのかしら？」

「あら、そんなことないわ。面白いものよ、世界がどんどん変わっていくのを見つめているのは」

そういう性格なのであろう。

おそらくはミュウのようなポケモンもいれば、反対もいる。
「ただ他の長生きしている連中はどうかは知らないけどね」
ココアをまたもやすすり、ミュウは続ける。
「でもね、最近人間は驕り過ぎているとも思うけど……」
「え？」
「いいえ、なんでもないわ。こっちの話、さ、どうぞ続けて」
マコモはカタカタとパソコンのキーボードを動かしながら、次のスライドへと移る。
「そして現代に至るまで私たち人類は発展し、社会は人間主体で統括されている。でも実態を晒せば、自然をポケモンが主体で統括していることを私たちは知る由もなく生活している。そのツケは近い将来くるのかしら？」
アララギの質問にミュウはマグカップにうずめていた視線を二人へと向けて、にやっと微笑んだ。
「さあ？　どうかしらね？」
と……。

第十八章：それぞれの任務　Ｉ：散った彼ら（後書き）

さてお気付きかと存じますが、ジン・ガイ・モモはバラバラに行動することとなりました。

なので十八章はそれぞれにスポットを当てつつ、他のキャラたちとの絡みが多くなってまいりますのでその点ご了承ください。

あくまでスポットを当てるのは彼らなのでその点お間違えのないようにー。というか勝手にややこしくさせてしまい面目ありません；；

ルカ「じゃんじゃか行こうー」

おー！

第十八章：それぞれの任務　ＩＩ：ガイ：再会（前書き）

この十八章は各話ごとにガイ、モモ、ジンのローテーションで話を区切ります。ややこしいかもしれませんがそのためこの章はサブタイに誰主体なのかを明記します。

ルカ「面倒だね」

まあこの章限りにするつもりですので。

ルカ「どういうこと？」

詳しくはあとがきで、ではどうぞ！

第十八章：それぞれの任務　Ｉ：ガイ：再会

ヤマブキシティ：

ガイが先ず最初に赴いた場所、それは自分が元いた組織のアジトである。

ミュウによれば組織から見限られ、死亡とされているガイ達であるが……それはいわばかえって来れなくもないということにもつながる。

シルフカンパニーの社員兼正規ロケット団員であるならば本社から入ることも可能ではあるが、そうでない者……つまりガイやモモのような正規ロケット団員のみである場合は特殊なはいり方をしなければならない。

特殊とは言い切れないかもしれないが、彼らは本社の地下駐車場から入るのである。

駐車場の奥に普段であればロケット団の専用車が並んでいるはずだが、今は大体が出払ってしまっている。しかしそのことにガイはふとしか思考を奪われなかった。

「ここに戻ってくるのが、なんだか久しぶりに感じるぜ」

そんなに日にちは経ってはいないだろうに、ここ数日でガイ達に起きた出来事が怒涛すぎた。そういった感想が漏れるのも無理はない。

ガイはカードでロックを外し、暗証コードを入力して扉を開ける。

今のガイは情報が欲しい。そして集める術等今のガイが持ち合わせているわけがない。

ならば、やることは一つしかないのである。

ガイは拳をぎゅっと握り、手首を二回ほど回す仕草をする。他愛もない癖のようにも見えるが、ガイのそれは入ってくる者を監視するカメラに向けた合図であった。

組織の者に見つかってはならない。それは当たり前である。なのでここへ来る前に逆立てていた髪を彼は下ろし、滅多に着ないスーツを着用している。そして常に頭に巻いていたバンダナもしまっている。

ロケット団の団員は基本重要な任務時には制服を着用させられるため、出動のない時や事務業務がない時は私服で構わないとされている。

そして正規ロケット団員とはサカキが世界を乗っ取る前より彼に仕えていた団員のことを指し、それにより組織内での差別化および律令を保っているのである。回りくどいのかもしれないが、今やこの国でロケット団のネームバリューは向上を続けており、巨大な財閥である。

その本社がシルフカンパニーであり、その支部や支店は随所で見受けることができる。それこそがサカキの最大の強みでもあるのだ。

そんなもう言わば敵陣の本部である本社へとガイが戻り、そのよ

うな行動をしたのには一つの保証があったからだ。

「頼むぜ……」

うまくいくとは限らない、だがガイにはこれ以外の方法が思いつかないのだ。

ガイは普段通り慣れた通路を歩き、喫煙所へと訪れる。

ここにいれば誰かが入ってきたとしても背中を向けていられるし、見つかってばれることはない。胸の内ポケットからタバコを取り出して火をつける。

「しかし、おかしいな……。いくら今が昼前とはいえ、もう少し人影があってもいいと思うんだが……」

そしてようやく考えを巡らせるガイ。

そう、実際普段であるならば様々な任務が課せられる正規ロケット団員の出動、帰還姿があってもおかしくはないのだ。それがさっき見かけた車両の少なさにつながるのだろうか？

一本目のタバコが半分ほど終わった頃、喫煙所へと一人の中年男性が入ってくる。

背丈はそれほどない（といってもガイ基準になってしまう）が、どこかしら華奢な人物だ。茶色のスーツに身を包み、ガイの方へと寄ってくる。

「隣、いいかな？」

中年男性はガイが入口でした拳を回す仕草をさせてみせる。
「ああ、いいぜ」
「ありがとう」
男はそう礼を言い、懐からタバコを取り出してみるが火はつけない。良く見れば、それは子ども用のお菓子にあるタバコの形をしたキャンディであった。
「相変わらず好きだな、それ」
「イガイガもいる？」
「いや、いいさ」
そう気さくそうに話しながら、ガイは吸っていたタバコを捨てる。
言い出しにくそうにしながらも、ガイは中年男性に変装している自分の幼馴染に尋ねる。
「イミテ、状況を詳しく教えてくれねーか？」
「んなことだろうと思ったよ。でも、嬉しいよ……イガイガが帰ってきてくれて」
「……心配かけたな」
傍から見ればおかしな光景であろう。だがしかしこうするしか他、術はないのだ。
「イガイガ達が特別任務で出払ってから、組織の中では結構ゴタゴタしててね……。作戦コードＰｏｗｅｒ　ａｎｄ　Ｇｒａｃｅが発令されたり、こっちのネットワークに侵入者がハックしてきて情報

が盗まれたりしたんだよ……」
「なっ……」
「だからイガイガも分かるとおり、今は大体のメンバーが出払ってる」
「そんなことがあったのか……」

この中年男性に変装しているのはガイの幼馴染であり、まねっこ娘として有名なイミテ。彼女はガイがホウエンから戻ったとき、彼がロケット団に入ることを知り自分も志願した。

ただ彼女の場合はサカキが声明を上げてからなので正規ロケット団員としての立場ではないが、監視ルーム勤務として働いているのだ。そのことをガイは知っていた……だからこそ、ああいったマネをしてイミテに合図を送ったのである。

昔、子どものころに二人で思いついた二人だけの合図を……。

「Ｐｏｗｅｒ　ａｎｄ　Ｇｒａｃｅって言や、あの？」
「うん。おかげで仕事が減ったり増えたりで大変なんだからね」
「良かったじゃねえか」

こんなにも落ち着き、穏やかな笑みを浮かべるガイを見たことがあるだろうか？　少なくともモモやジンの前では無い……。そう、イミテが相手であるからガイはこんなにも和やかになれるのだ。

「むっ……。まあでもよかったね私が出世とかしないで、まだ監視課にいて」
「お前がそうそうに出世するようなタマかよ」
「べーっだ」
「ははは」

ポキッと口にふくんでいたお菓子を折ったイミテは、軽く笑うガイをよそに寂しげな表情を浮かべる（といっても中年おっさんの顔でではあるが）。

「あのね、ガイ」
「ん？」
「ガイは今自分がどんな状況にあるかわかってて、それで、ここへ戻ってきたんだよね？」
「……ああ」

イミテはガイの手を取って、目を潤して懇願する。

「だったら危険なマネしないでさ、私と一緒に暮らそうよ！　私は嫌なの……イガイガが……ガイが、また遠くに行っちゃうのが……」
「……イミテ」

イミテの変装能力は以前と比べて格段に上達している。それは長年付き添ってきたガイだからこそわかることだ。そんな彼女が変装時に欠かしてはいけない平常心を崩してまで自分に訴えかけたのだ。

だからこそ、ガイは言葉を選んだ。

「悪いなイミテ。でもこのヤマは俺だけの都合で蹴ったりできないんだ……」
「ガイ……」
「だから、教えてくれ。他に何か変わったことや、おかしなことをな」

イミテはガイの手を離して、ハンカチで涙を拭き取って暫く黙っ

て静かに「うん」と答える。
「ありがとな、イミテ」
「勘違いしないでよ、これはイガイガの為じゃなくてイガイガに早く帰ってきてほしい私の為にしてることなんだから」
「ああ、ありがとう」
「ばか」

今度はイミテからタバコ型のお菓子をもらいながら、二人は話を再開する。

「最近起きたことは、ボスが新たに二人の正規ロケット団員を配属させたことかな」
「なに？　今更正規の団員を？」
「うん、でも年齢が若いの。多分１５くらいじゃないのかな？　今はレイハちゃんの下についているみたい」

おそらくレイハはどこへいっても、内部の人間からはちゃん付けされてしまうほどにマスコット的立ち位置にいるのだろう……。

「詳しいことはわかるか？」
「え？　その新人二人のこと？」
「ああ」
「確か名前はハヤミ　ルカとテンドウ　カナミだったかな。以前は組織の監視対象だった人間が組織に入ることは珍しいことじゃないけど、まさか追跡中のジムリーダーの妹が入ってくるとは思ってなかったからね」
「んだと……」

どうしたの？　とでもいいたげな表情でガイの顔色を伺うイミテ。

ガイは過去を思い起こすように熟考し、そして口を動かす。
「そいつらは今どうしてる？」
「詳しいことはさすがに私は知らないけど、きっと任務に参加させるために準備してるんじゃないかな？」
「そうか……。他に変わったことは？」
ハヤミ　ルカとテンドウ　カナミ。少なくともルカのことは知っている。
だがテンドウ　カナミもガイは知っている。いや、知っているというより見たことがあるといった方が正しいだろう。
ハナダシティでの任務でハナダジムへと潜入したときに危うく見つかりそうになったからである。
どうしてその二人がここへ？　しかもロケット団へと正規メンバーとして入っているのか？　様々な疑問が浮かぶが、今は流すしかない。
「さっきも言ったけどハッキングの件だね。あのせいでシステムは一時停止しちゃったの……その間に何が起こったかは確かめようがない……」
「そうか。そこらへんの詳しいことは俺にはわからないな……」
「そうだね、でもそのおかげでなにかとＰｏｗｅｒ　ａｎｄ　Ｇｒａｃｅの実行に支障が出てきてる」
「本当か？」
組織の大掛かりな任務（まさにこのＰｏｗｅｒ　ａｎｄ　Ｇｒａ

ｃｅがそうなのであるが）は時間がものを言う。それが狂い始めれば後々に問題が浮き彫りになりそれが原因で任務そのものが破綻する恐れがあるからだ。

ハッキングの発端はアユミにある。だがアユミ以外にもどこかしらからの干渉があったとイミテは踏んでいるらしい。

「ガイ」

「なんだ……？」

「私はそろそろ戻らないといけない」

「……そうか」

昼休憩の間に出てきてもらったイミテにはそんなに時間があるわけではない。移動中に人目とカメラを避けてこの変装を済ませたのは彼女の手腕によるものであるが、迫る時間を止めることは叶わない。

「この子、あずけてもいいかな？」

そしてイミテはスーツのポケットの中から一つのボールを取り出す。

「おい、こいつはお前の……」

「私がイガイガの傍にいられないのなら、せめてこの子には居て欲しいんだ。私がイガイガを守ってあげられない分、この子がイガイガを守ってくれるから」

「イミテ……」

ガイは強くイミテを抱きしめた。（注意：イミテは中年男に変装したままです）

「絶対、帰ってきてよね」
「心配すんな。俺を誰だと思ってる」
「そうだよね、イガイガは弱いけど誰よりも優しいんだよね」
「ぬかせ」

そう言い残し、ガイは本部の地下から出た。

イミテのおかげなのか、うまく抜け出せただけなのか、ガイはマークされずにシルフカンパニー社を後にした。

欲しい情報は粗方揃った。

「イミテ、待ってろよ。五年なんて時間いらねぇ、すぐに連れ帰ってやるよ……八柱力とやらをな」

ガイはイミテから譲り受けたボールをぎゅっと握りそう誓うのであった。

第十八章：それぞれの任務　ＩＩ：ガイ：再会（後書き）

イミテのこと覚えてらっしゃいますでしょうか？

というかモノマネ娘の名がイミテなのはアニメ版を参考にさせてもらいました。

容姿はできれば一緒ぢゃない方が自分的には好ましいのですが混乱を避ける為詳しい描写ははぶかせてもらいますｗ

ルカ「それで？」

ああ、そうそう。おそらくはこの章以降は滅多なことがない限りガイ・モモ・ジン達の章は無くなります。

ルカ「なんかある意味ネタバレだよね？」

んなことありません！　ではまた次話でお会いしましょう！

ルカ「ばいばーい」

第十八章：それぞれの任務　ＩＩＩ：モモ：ロンリーシスター（前書き）

さて、今回のお話ですがつなぎ的な部分が多いです。

ルカ「つなぎ？」

そろそろいろんなキャラが交錯していくということですねｗ

ルカ「忙しくなりそう・・・」

一から始まった物語は分岐し収束する。それが自分が理想とする終わり方です。

それではどうぞ！

第十八章：それぞれの任務　ＩＩＩ：モモ：ロンリーシスター

シンオウ地方　コトブキシティ：

シンオウ地方で最大の都市であるコトブキシティ。

その中でも一際その存在感をアピールしているのは、言うまでもなかろうテレビコトブキである。建物の正面に設けられた巨大モニターには天気予報や最近起きた出来事のピックアップを流している。

「目新しいことは起きてない、か……」

モニターに流されているのはロケット団の宣伝や近々行われる例祭についてのＰＲ、そして気になることが一つモモの視界を過ぎる。

「ん？」

モニターに流されたテロップをモモは凝視する。

「トウガン、ヒョウタ、そして新たにナタネの死亡が確認。これでシンオウのジムリーダーの死傷者は三人にのぼる……か」

ふふっと微笑みを浮かべたモモはそのまま踵を返して近場のカフェへと入る。

ロケット団から支給された最新器のポケギアを起動させてメニューを開く。もちろん本部への自動更新機能はジンによって取り除かれている。

店の奥にある席を陣取って、モモはコーヒーを注文する。

あの組織がこの三人に最新機器搭載のボートと支給品を手配してまでミュウのいる島へと向かわせたのは、もちろん三人に自分たちが不用なものであることを勘づかさせないためだろう。

だがしかし、裏を返せば……彼女達に戦力を与えてしまったということに繋がる。

「ミオからはじまって、クロガネ……そして今度はハクタイか……」

モモはふむふむと頷きながらコーヒーをちびちびと飲んでいく。

「もし私なら次はキッサキシティかな」

カップの液体が消えたところでモモは立ち上がる。ポケギアで調べていたのはシンオウのマップ、そしてキッサキシティへの最短ルート。

誰がジムを制覇しているのかをモモは知らない。だからこそ行ってみなければならない。

分の悪い賭けではある。なぜならばモモが知っている八柱力の情報は、年齢は恐らく十代後半、そして特殊な能力を持っている者ということ。ただそれだけなのだ。

だとすれば、もしこのジムを制覇しているトレーナーが同一人物であるのであればビンゴとなる可能性が高い。

「私ってば頭イイ〜」

極端に単純かつ明快な答え。それはモモが考えるのが苦手だからだろうか？　キリンと似ている部分があるのかもしれない……だが彼女の場合はキリンより直感の働き方が異常なのであるが……。

懐からウォークマンを取り出して、寒空が広がる路上で耳へとイヤホンを装着する。

「ふんふふ～ん♪」

どこまで自由なのか。はたまたなぜそこまで自由でいられるのか。

それとも自由でないと、自由であることを自分に認めさせないと前へと歩き出せないのか。

これは数奇な人生を歩んできた彼女だけに許された行為なのだろうか？

先日　ミオダウンタウン：

「ひいぃぃ！　や、やめてくれ！」

一人の男が路地裏で悲鳴を上げる。

「あれぇーどうしたのかなぁ？　私はただ、知らないかってきいてるだけなんだよ？」

ぺちぺちと一匹のカメールが男の頬を叩く。その後ろには彼のポケモンであったであろうドクロッグが惨めな姿で地面に伏している。

「し、知らん！　俺は知らないぞ！」

「元正規ロケット団って豪語してたから付き合ってあげたのに、役たたずな男なんだねぇ」

モモの顔を見れば笑っているようにも見える。それはとても冷たく、そして固まっている。

「なら私の為に綺麗な赤いバラ、見せてくれない？」

「へ……？」

「さようなら、バイバイ」

モモが踵を返すと共に、カメールが殻にこもって男の顔面へと突撃する。

路地裏の奥は闇に飲まれ見えないが、そこで一人の人間の命が儚く散ったのは確実であろう。モモの後に続いてきたカメールは自分の水で血を流し、甲羅の穴からは水が滴り落ちている。

「次は誰かな？」

「かめっ」

その日、ダウンタウンで行方不明になった人間とポケモンの数は常時よりも多かったという……。

キッサキシティ：

キッサキシティのポケモンセンターでポケモンをあずけて待っている間、モモは再度備えられているテレビへと視線を向ける。

コトブキシティからキッサキシティまでバスを使っていた為、彼女はコーヒーを立飲みしながらニュースを追う。座りっぱなしなのはやはり女性にはきついようである。

モニターにはライブ中継の映像が映し出され、なんだか騒然としていた。

「ご覧ください！　キッサキシティのキッサキ神殿から白煙がこみ上げています！　一体どういうことなのでしょうか？　あ、今警察から連絡がありました。どうやらキッサキ神殿で眠っていた古代のポケモンが目覚める余兆を見せたようです」

スクリーンに表示されるのは詰責神殿の周辺。かすかにだが野次馬の姿も確認できる。

そこへ警察の人間が警告ランプを回しながら人の誘導を行なっている。

考えてみれば、ずいぶんとポケモンセンターには人が少なく感じた。しかし彼女はそれはここがキッサキシティであるからなんだと早合点していたのだ。

「正規ロケット団がただいま神殿内にて対処を行なっているようです。市民の皆様には最悪の事態を想定して街まで避難するように勧告がなされています！」

モモは最後の一滴を飲み干して、眉をひそめて考察する。

『キッサキ神殿？　あそこって確かＰｏｗｅｒ　ａｎｄ　Ｇｒａｃ

ｅの中にあった場所の一つだったような……』

作戦Ｐｏｗｅｒ　ａｎｄ　Ｇｒａｃｅの行動目標の一つは伝説、幻と呼ばれうポケモンたちの捕獲にある。サカキがなぜこのような行動を取るにいたったかは謎ではあるが、ただの余興ではないだろう。

しかしモモが懸念しているのはそのことではなかった。

『もしロケット団……しかも正規の連中が動いているならこんな派手な行動には出ないはず……。なにかあった、そう考えるのが普通よね』

モモ自身、正規ロケット団員として数々の任務を果たしてきた。あのハナダデパートの襲撃も正規の連中の仕事であり、その際も迅速かつ淡々と任務は遂行されたのだ。

なのにあれほどまでに表立った、いや目立ったことはしないはずだ。作戦が大規模で重要なものであればあるほど、だ。

『そういえば……』

モモは今ではひと月ほど前に起こったことを思い出した。そう、正式にロケット団内でツワブキ　ダイゴが要注意人物としてあげられた日だ。

あの日、ダイゴが仲間とするカントーのジムリーダーと四天王が銀行で起こした事件。あれも正規の連中がやろうとしていた仕事を邪魔されたときなのだ。

つまり、それほどの実力者でない限りは正規の連中がへまをしないということである。

「面白いことが起きてるんじゃない？　もしかしたら」

テレビの前で突っ立ってはいられない。空いた缶をゴミ箱へとスローインを決めたモモは受付へと踵を返す。

「行くしかないでしょ」

丁度良くジョーイによって名前を呼ばれたモモは、礼を一つ言うと共に急ぎ足でポケモンセンターを出ていく。

軽い身のこなしで雪をかきわけながらモモは疾走した。

それはまるで雪がモモの為に道を開けてくれているかのように見えるほど、彼女の身のこなしには無駄がないのである。

「もしこの騒動の発端がリーダー殺しに絡んでいるんだったら、早くもビンゴね」

キッサキ神殿：

「これは凄い野次馬ね」

街の外れにあるキッサキ神殿へ向かう道にはたくさんの人で溢れていた。

怒号と野次が飛び交う中、サイレン音が鳴り響いて止まない。

しかしモモはその中をかき分けながらどんどんと奥へと進み、警官が張った立ち入り禁止のテープを問答無用で入っていく。

「あ、こら！」

「ロケット団でーす、騒ぎの連絡を受けて駆けつけましたー」

モモは自分の持っている正規ロケット団の手帳を見せる。

「に、任務ご苦労様です」

と明らかに不服な態度を取られながらもモモは「ども～」と一言流して現場へと直行する。

今では正規ロケット団員の立場は警察よりも上である。この急な

制度の変更にほとんどの警察関係者は不満をこぼしている。

そして今ではモモがロケット団から追放の身であってもそのことを下っ端の警察官が知る由も確かめる由もないのである。

厳重体制をとっている神殿前の警官を通り抜け、モモはいそいで駆け出す。

こういう場合、警察へロケット団がなにをしているかが伝えられているのが常である。詳しく言うのであれば、警察は今やロケット団の駒であるということ……ただの見張り役として扱われるということである。

「あそこね」

小型双眼鏡で遠目ながらに起きている戦闘を確認するモモ。そこには対峙している2つのグループが存在していた。モモが向かっている方向に近いのは少年少女と中年男性のグループ、そして向こう側がロケット団。

バトルは終わっていたのだろう、そもそも戦う気がロケット団側にあるとは思えない。彼らはいつでも任務最優先なのだ……バトルに負けようが、彼はバトルをする意義などそもそも存在しないのだから。

モモは神殿内部の影に潜み、彼らを観察する。

手前の三人の顔は見ることができないが、奥にいる若い男をモモは知っていた。名前までは覚えていないが、かなり横柄な態度の男だったことは覚えていた。

そいつが高笑いしながら、彼のゲンガーがユンゲラーを倒すのを目撃する。

そしてその次に現れたのはリザードンと共に現れた青年の姿であった。

そのときモモは青年が放ったボールを受け取ったロケット団が三体のポケモンを繰り出すのを見た。レジ系の三体であるレジロック、レジアイス、そしてレジスチル。

すると正規団員達の後ろに控えていた巨大な石像が音を立てて動き出したのであった。

「うそっ……」

モモは予期せぬ出来事に身の危険を感じながらもその場を動かなかった。そして彼女はそこでキリン、アユミ、そしてゲンの顔を目視する。

そう、モモはそこで自分の弟であるキリンの姿を見かけるのであった……。

第十八章：それぞれの任務　ＩＩＩ：モモ：ロンリーシスター（後書き）

まあこの二人の関連性についてはあまり伏線が表立っていなかったのでわからなかった方が多いと思います。

ルカ「・・・うそ」

まあ細かいことは次回のモモ編で。

ルカ「次はジンさんだね！」

懐かしいキャラも出ますのでお楽しみにｗ　では！

第十八章：それぞれの任務　Ⅳ：ジン：受取りしもの……（前書き）

遅くなりましたが更新です。

ルカ「なんか今は台風で大変だね」

そうだね、なんだかまた若干進路が変わったようで・・・おかげでそんなに被害こうむることはありませんでした。

ルカ「休講期待してたのにね」

まあね；；w

ルカ「まあ、そんなわけでジンさんのお話どうぞ！」

第十八章：それぞれの任務　Ⅳ：ジン：受取りしもの……

ホウエン地方　キンセツシティ：

カイドウ　ジン改めツワブキ　ジンはキンセツシティへとたどり着いた。

情報を手に入れるなら少なくとも情報の行き来が盛んな場所、という安易ではあるが確実性の高い方をジンは選んだのである。

「戻ってきたんだな……」

そう、そしてホウエン地方はジンの生まれ故郷でもある。キンセツシティを西へ進むと位置するカナズミシティはジンの実家がある。

キンセツシティへジンは訪れたことが度々ある。それは父親の仕事に関連しているのだがそれは追追説明しよう。

「まずは」

ジンが最初に向かった先はキンセツジム。この街に相応した門構えは、このジムの主がどれほどまでにこの街を愛しているのかわかることができるだろう。

キンセツジムリーダーであるテッセン。

実に活発で陽気なことで知られるテッセンは街の人間からも愛され、彼自身もこよなく人々を愛している。それはロケット団がこの国を乗っ取ってからも変わらない。いや、むしろ以前に増して彼は

より元気な姿を人々に見せているといっても過言ではないだろう。

「お久しぶりです、テッセンさん」

ジンは早速ジムへと入り、ジムの仕掛けを修理している最中のテッセンへと話しかける。

「ん？　おぉ、君は……ジンくんじゃないか！」

がっはっは！　と豪快な笑い声と共にテッセンはジンのもとへと寄ってくる。

「相変わらずですね、テッセンさん」

「うむ、自分の仕掛けは自分で管理せんとな！　昔みたいに頼ってばかりではおれん」

昔？　と、ジンは疑問符を浮かべるが話はそのまま進む。

「ところでジンくん、少し外で話をしようか」

「え？　あ、はい」

ジンの視界に映ったのはキンセツジム専属の審判の姿。そう、彼もロケット団員である。

あいにくジンはカントー本部に勤務していた為、ホウエン支部の正規ロケット団員の顔は知らないし向こうも恐らくそうであろう。

「どうかされましたかジムリーダー？」

「いんや、なーにちょっと外へ出てくる。修理は終わったから試運転だけしててもらえるかの？」

「わかりました」

審判はジロリとジンのことを一瞥し、作業へと移る。

「さあ行こうか、ジンくん！」

「はい」

審判のジムリーダーへの監視が一番大きいのはジムバトルの時、つまりジムバッジが譲渡されるか否かを確認するのが最優先事項である。そのため、私生活への干渉は極力は行われない。

それはある程度の自由をジムリーダーに許さなければ、彼らがロケット団の脅威となりうる可能性が飛躍的にあがるからである。人の心をも巧みに操り、管理する……その能力にサカキは長けていると言わざるを得ない。

テッセンに連れられてジンは彼の家へと尋ねることとなった。

「ジムの方は大丈夫なんですか？」

「なーに、心配無いさ。最近は挑戦しにくるトレーナーが減ってしまったしの、悲しいことだわい」

「そう、ですか……」

とジンは言葉を濁す。テッセンはジンがロケット団に入っていることを知らない。

「それにしても久しいな。5年ぶりになるかの？　ジンくんは変わってなくてすぐにわかったぞ！」

がっはっは！　と豪快な笑い声でテッセンはジンにコーヒーを渡

す。

「ありがとうございます。テッセンさんもお変わりないようで」

「がっはっは！　まあ多少白髪は増えたがな！」

ジンとテッセンのつながりは、無論デボンコーポレーションという大企業を経営する親がいるからというわけだけではない。それはジンが昔関わった事件による。

野生ポケモン達が人間を襲うという事件。

今から約7年ほど前のことだ。カイナシティからカントーのクチバシティへと出るフェリーが突如野生ポケモン達に襲われた。

そのフェリーにたまたま乗船していたのがジン。彼は両親の意向でカントーのヤマブキシティのスクールへと通うことになり、その日が出発日だったのである。

そして同じフェリーにはホウエンのカナズミシティへとジムリーダーのツツジに会いに来ていた、ニビジムリーダーのタケシが一緒だったのである。

無論彼が岩タイプのエキスパートのことは周知の事実ではあるが、ツツジはカナズミシティにあるトレーナーズスクールの名誉教授を務めておりタケシに特別講演を頼んだのである。

美女の頼みとあったならば例え世界の裏側まですっ飛んでいくタケシである。彼女の頼みを聞き入れないわけがなく、カナズミシティでの彼の講演は大盛況だった。

そして当時１２だったジンもカナズミシティのトレーナーズスクールに通っていたのだが推薦でカントーの方へと通うことになったのである。

そんな折に彼らは襲われた。

ジンは成績は優秀であったがトレーナー専攻でなく、技術部門だったのでポケモンを所持してはいなかった。フェリーの乗客の中には腕の立つトレーナーはいたのだが、指示無く無造作に襲い来るポケモンたちの前に次々とやられてしまった。

そしてタケシはジンのトレーナーとしての資質を見抜いたのか否なのか、サトシが別れ際にタケシにあずけたフシギダネをジンへと貸し渡したのだった。

「そんなことないですよ」

ジンは苦笑いを浮かべながらテッセンからもらったマグカップに顔を埋める。

タケシは的確な指示で野生ポケモン達から乗客を守っていた。対するジンもフシギダネをうまく立ち回らせて対応していた。そこはさすがはサトシのポケモンと言ってもいいだろう、フシギダネはジンの不慣れな指示に２００％以上の働きでこたえたのだ。

そしてなんとか危機を免れようとした状況で、疲れと安堵の表情を浮かべたジンの一瞬の隙を狙って襲いかかってきたサメハダーの牙からタケシが身を挺して守ったのである。

サメハダーの猛牙はタケシの胸部へと深く食い込み、彼は瀕死状

態となった。
そしてその時に本土から救援にかけつけたテッセンの乗る船が合流したのである。
「あの時はお世話になりました」
「いや……あの時はジンくんがいなければもっとひどいことになっていただろう。惜しい人間を亡くしはしたがな」
「……はい」
二人が語っているのはタケシのこと。だが彼のことを今話すのには時間が無かった。
「時にジンくん、ここへはどうして？」
「今、人を探しているんです」
「ほお」
ジンは極力自分がロケット団にいることと八柱力のことを伏せながら話を進める。
テッセンに保護されたジンはそのときタケシに縋り付いて泣きじゃくっていた。自分のせいで人の命が奪われたのだ。
ジンが実家のカナズミシティへと戻るまでのケアをしてくれたのがテッセンであり、ジンにとってテッセンは恩人なのだ。そしてジンはテッセンのところへと良く尋ねることになり、その都度エンジニアリングの話に花咲かせるのであった。
「ふむ、そのジンくんが言う秀才の類の人物に心当たりがないこもない」

「本当ですか？！」

まさかここまでうまく話が進むとは思っていなかったのか、ジンの瞳に活力がみなぎる。

「ちょうど今日の夕方からスウセルア教代表の公演があるんだが、行ってみるといい」

「スウセルア教……」

ジンは身に覚えのある単語を再度口にして思い出す。

「確か、今の代表は……」

「うむ。カイチ一族の御息女であるカイチ　スミレ女史、彼女が今この街へと来とる」

盲点だった、とジンは考えを巡らせる。

スウセルア教、その単語をホウエンに住む者が知らないわけがない。ここホウエンは自然、緑と青に富んだ地方であるが、それと同時に自然と科学の共有に特化しているのだ。

それが現実している要因がスウセルア教。昔、アルセウス教から離反した団体ではあるがその勢力は今や元祖と並ぶほどまでに声明を轟かせている。

科学を著しく発展させたスウセルア教、その代表が１５才の少女であることはホウエン地方でもかなりの話題となった。そのことをジンが忘れていたのは、そもそも彼女が代表に選ばれたのが去年の秋……ちょうどジン達がカントーでサカキの作戦を実行するためにてんやわんやとなっていた時なのである。

「ちなみにその公演はどこで？」
「わしのジムでやるんじゃよ」
「もしかして、さっきのは？」
「うむ。ちょっとしたリクリエーションを頼まれての、その準備をさっきまでしとったのだよ」

今までスウセルア教の代表は年配の、少なくとも５０の齢を過ぎた男性であった。それが今スミレであることに、彼女が何かの能力に長けている……つまりは八柱力の候補に上がることは必然。

ジンはテッセンにその公演に参加できるかどうかを確認したところ、快く席を用意してくれることを約束してくれた。

「ありがとうございます」
「いいや、おやすいごようだ。ああ、そうじゃジンくん」
「はい？」
「これを受け取ってくれるかの？」

テッセンから一つ小さな袋を受け取ったジンは中身を確認する。

するとそこに入っていたのはダイナモバッジ、そうキンセツジムを制覇した証であるジムバッジが入っていたのだ。

「テッセンさん？」
「受け取ってくれ、ジンくん。君もわかっているかもしれないが、今の世の中は歯車が狂ってしまっている。そして我々ジムリーダーが置かれている状況……公表はされていないが、アスナくんとわしの友人であるクリちゃんとも連絡がとれん」

クリちゃんとはテッセンの友人であるカラクリ大王のことである。
そう、テッセンはカラクリ大王とは旧知の仲であり、二人でニューキンセツの再開発に着手していたのだ。
だが突然起きた謎の爆発事故、それを機にカラクリ大王との連絡が途絶えたのだ。
「わしは恐らく自由に動くことはできん。大人の事情を若者に押し付けるのは気が引けるが、受け取ってくれんかジンくん」
「で、ですが……」
ジンはジムバッジを見ただけでバッジから発信機が取り外されていることがわかった。新しく支給されたジムバッジを見てテッセンは最初から何が起ころうとしているのか一技術者としての見解から理解したのだろう。
その覚悟を、ジンは汲むしかなかった。
そしてテッセンはわかったのだろう。ジンがしようとしていることが、目指しているものがこの世界とは違うものであるということを。
「頼む、ジンくん。この国の負をただしてはくれないか」
「テッセンさん、頭を上げてください。似合わないですよ」
ジンは柔和な笑を浮かべて、そのバッジを受け取った。
「約束はできません。ですができる限りのことをします……そのためにも、僕はカイチ　スミレと会わなければならない」

第十八章：それぞれの任務　Ⅳ：ジン：受取りしもの……（後書き）

彼の過去は前にちょろっとしか出していなかった気がしたのでここで補強させてもらいました。

ルカ「結構重いんだね」

まあ、これで次回からは話がどんどん進展していきます。

ルカ「久しぶりにスミレちゃんが見れる！」

そうだねw

ルカ「それじゃ、またね！」

ではでは！

第十八章：それぞれの任務　Ｖ：ガイ：発見（前書き）

さてお待たせいたしました。待っていてくださる方・・・いますよね！？

ルカ「茶番はいいから」

はい；；

それではどうぞお楽しみください。

第十八章：それぞれの任務　Ｖ：ガイ：発見

ヤマブキシティ：

「サンキューなイミテ」

「ううん、いいよ。気をつけてね」

ガイは今や自分しか暮らしていない、というよりも名義が自分のになってしまった自宅の受話器を手に取っていた。

本人は機械やそういった類のものには詳しくはないが組織が裏切り者や離反者に対して行う監視のしかたは知っていた。前にも幾度かそのような任務をモモやジンと遂行したことがあるからだ。

基本的なカメラの設置場所やその角度、盗聴器などの隠す場所の基準や設定などが主だ。しかしながらガイの自宅にはそういった類のものが見当たらなかった。むしろ設置された痕跡も残っていなかった。

それはつまりガイが組織から見限られたことをこれ以上とないくらいに語っていた。

「ま、そのほうがありがたいんだが」

たばこを一本吹かしながら、ガイはイミテから受け取った情報を確認する。

本部に潜入してイミテとであった日の翌日、イミテは危険を承知でルカとカナについての追加情報をよこしてきた。

おそらく彼女はガイがここに滞在することがわかっていたのだろう。幼馴染としての、いや、女としての勘だろうか。

「本日レイハ・ニョロモンド幹部は新人である正規ロケット団員となったハヤミ　ルカ及びテンドウ　カナミをナナシの洞窟へと同伴させ、調査の続行を命ずる」

次いでガイのポケナビにメールとして送り込まれた情報をガイは再確認する。

「つまりはナナシの洞窟へ行けば、あいつらがいるってこった」

飲みかけのコーヒーをたいらげて、ガイはコートを手に取り外出する。ガイの母親が残していったバイクにまたがり、アクセルを入れる。

「八柱力……それがあいつらなら話は早いんだがな」

そうこぼして、ガイの頭はヘルメットによって隠される。

ロケット団本部　シルフカンパニー社：

「なんでレイハがこいつらを連れて行かなきゃならんにょ！？」
「任務ですので」
「だったら普段通りでいいにょろ！！」
「あなたは今は指導係もかねているのですよ？　部下の育成も立派な勤めです」
「に〝ょ〜〜〜〜！！」

いがみ合っているのはさきほど任務の内容を言い渡されたレイハ・ニョロモンドとサカキの専属秘書。レイハにとって今回の任務はいままで度重なるほど遂行してきた任務であり常に同伴者はいた。がしかし、そのとき同伴した部下は腕の立つものが多かった……当たり前である、あのハナダの洞窟を調査したのだから。今回はルカとカナの二人のみを同伴、それはつまりレイハが余計な神経を使わなければならなくなるということだ。

「怒ったレイハちゃんもかわいいよね〜」
「ルカちゃん、頬たるんでるよ」

ロケット団へと入ってから早一週間、研修期間ということで組織内の決まりごとを包み隠さず二人は教えられた。

ルカとカナがロケット団を利用するために入った、だがそれはサカキにはお見通し。にもかかわらずルカ達は組織の様々なことを知りえることができた。

たとえば組織の人間の構成人数。ざっとルカとカナが感知するところでは１００人弱。それは正規ロケット団員の数である。

そして少なくとも各地方の８つのジムにそれぞれ一人は審判として潜入していることを鑑みると大体４０人はジム配置。そして各地方の支部に派遣されているのが１０人ずつだとして、かなりの少数精鋭であることがわかる。

５つの地方の中にハイア地方が組み込まれていないのは、ハイア地方にはジムが存在しないからである。地方の大部分が砂漠で覆われてしまっているハイアでは特別保護区として協会により認定されている。

つまりハイアの住人はよっぽどのことがない限り他地方へは赴かないし、逆にハイアに訪れるのにも協会の許可が必要となってくるのだ。

以前は巨大都市オアシスとして名を馳せていたハイア地方の中心都市も今では閑散としているらしい。

そんな地方出身のサカキは何を思ってハイアから出てきたのか。そしてなぜハイア地方はここ数十年であそこまで廃れてしまったのか。

そういった疑問が残るが、今のルカ達にそのことを知るよしなどない。いくら夢で未来を予測できるカナであったとしても彼女が一体どういった理由でその未来をみるのか本人すらわかっていないのだ。

「命令に従わない場合は減俸ですよ」
「う、うにょ～……わかったにょ！」

くいっとメガネを押し上げて、秘書は最終宣告を言い果たす。

歯をかみしめながら、うらめしげに敵を睨みあげながらレイハは悔しそうに承認するのである。といってもその姿すらルカにとっては愛くるしく見えてしょうがないのだろう。

「やったー！　レイハちゃんと一緒だぁ！」
「えぇい、放すにょ！　離れるにょーーー！！」

そして最近ルカのそんな態度を見ているカナはあまり面白くなさそうにしていた。

『私だってルカちゃんといちゃいちゃしたいのに……』

普段は人見知りなカナでも、いやだからこそ親友であるルカを取られていい気分はしないのだろう。

「それでは早く行ってきてください」
「なんなんだにょ！！」

レイハの悲痛なる叫びは、しかし、だれからの救済を受けることはなかった。

ナナシの洞窟：

ナナシの洞窟、またはハナダの洞窟。そこがなぜ協会によって閉鎖されていたのかハナダシティの住人ですら知ることはない。

だが実際に無断で入った者達の証言によれば、とてもではないが洞窟内の野生ポケモンたちには太刀打ちできなかった。むしろ殺されかけたというものが専らであった。

協会側もバッジを最低８つは所持する者には特別な時には許可を与える。しかしそれはごく稀であり、過去協会によってこの洞窟に入ったことのある一般トレーナーは一人だけ……そう、サトシである。

彼がなぜ協会の要請あって洞窟へと入ったのは定かではないが、彼が今も無事であるということはなにかを達成できたということなのだろう。

「ナナシの洞窟……」

「入ったことないよね」

ルカは好奇心は旺盛ではあるが、あまり怖いものが得意なわけで

はない。自分の母親からも立ち寄ってはならないといわれた場所である、恐怖を感じない方がおかしいだろう。

しかしカナはいたって冷静であった。

「レ、レイハちゃん……ここでなにするの？」

「黙ってついてくるにょ！」

「カ、カナぁ～」

レイハにあしらわれてしまいルカは泣き入るようにカナに縋る。

「大丈夫だってルカちゃん。きっとレイハさんが助けてくれるって」

カナは冷静でいなければならなかった。なぜなら、彼女はみたのだ……夢を。

『私が夢でみたのはここまで。つまり、ここでなにかが起きる……。私がルカちゃんを守らなきゃ、私が……』

そう、カナはロケット団に入ってから未来を予知する夢を見ることがなくなった。そして彼女がサカキのことを夢見た後に見た最後の記憶がナナシの洞窟での出来事。

カナはここで一人の知らない人物と出会うこととなる。

今、ナナシの洞窟の奥へと探索しているのはレイハ、ルカ、カナの三人。レイハのニョロゾ二匹が彼女たちを先導している。その横に展開するように四匹のニョロモもついてきている。ナナシの洞窟という場所でなければ一種微笑ましい様子でもある。

「いいかにょ、よく聞くんだにょ」

レイハは慣れているとはいえ決して気を弛まさず、一人後ろでびくびくしているルカに特に力強く宣言するのであった。

「もしレイハから離れたら、その時は命はないと思えにょ」

今までは腕の立つ部下がいた。しかし今はそれが現状ではない。ならばなぜサカキはこのような危険な任務をレイハに下したのか？

『納得、絶対に納得いかないにょ……。この任務内容をこいつらに教えてもいいってことかにょ？』

そう、レイハの本来の任務。つまりルカ達が入ってくるまで彼女が遂行していた任務、それは……。

「ベーロー！」

「ニョ！？」

突如として大きな雄叫びと共にルカの目の前をなにかが通り過ぎる。そしてその先にいたニョロモが一瞬にしてさらわれる。

「ニョロゾ、【地球投げ】、【気合パンチ】！！」

連れ去られたニョロモの後を続くように暗闇の中をニョロゾ二匹は追跡し、指示された技を繰り出してニョロモを救い出して戻ってくる。

レイハは持っていたライトを灯して襲ってきたベロリンガを見下ろす。

「こいつもかにょ……」
「い、い、一体さっきのなんなの！？」
「ルカちゃん、落ち着いて！」

ヒステリーをおこしかけるルカをカナは必至になだめる。ここで大きな声を出すのはよくない、それに気がかりなことがまだカナを縛り付けている。

「とりあえずこいつも持って帰るにょ」

とレイハはボールを取り出してベロリンガを手際良く収容する。

「いつまでついてくる気だにょ？」

そして地面に屈んだまま、レイハはルカを見つめる。

「え？」
「お前じゃないにょ」

レイハの視線の先、つまりはルカの背後に彼女の視線は向かっている。

「さすがにばれるか……。さすがだな先輩」
「お、お前は！？」

そう、そこにいたのはガイ。イミテから情報を得てルカ達のことを尾行していたのだ。

リザードを従え、その後ろからなだれ込むようにして野生のサイ

ドンがどしんと地面に顔を伏せる。

「昔親父がここを究極の修行場として武道家達の間で噂されてた理由がようやくわかったぜ」

すまし顔でガイはそう笑みを浮かべる。

「ガイさん！」

「よぉ、ハヤミ　ルカ。何かの縁かもな」

「ジンさんは！？」

「すまないが俺一人だ」

「えぇー……」

ガイ本人は格好よく登場したつもりなのだろう、しかしルカとのやりとりで台無しに終わる。というよりルカの最後の一言でガイが寄りかかっていた岩壁から若干ずっこけたのだ。

「お前は、お前は死んだはずにょ！　ボスからもＫＩＡって発表されて！」

「ひゅ～ＫＩＡね。やっぱりそういうことになってんのか俺は」

元上司とこうやって威風堂々にガイはしゃべれるのはもはや彼が同じ組織に属していないからだろう。そしてこんなちびっこを上司として認めたくなかったガイの鬱憤も含まれているのは確実である。

「一体、なにしにきたにょ」

レイハは落ち着きを取戻し、冷静になる。

彼女がしなければならないのは目の前の男の処遇なのだから。

「お前には用はねぇよ、蛙女。俺が用のあるのはそこの嬢ちゃんたちだ」

ガイはレイハに向けていた指をゆっくりと呆け顔のルカと表情を曇らせているカナへと向ける。

「お前ら、八柱力なんだろ？」

目を細め、鋭い視線が二人を射抜く。

そしてガイはにやりと微笑む。なぜならルカとカナの肩が跳ね、背中が一瞬にして萎縮したからである。

第十八章：それぞれの任務　Ｖ：ガイ：発見（後書き）

ＫＩＡはＫｉｌｌｅｄ　ｉｎ　Ａｃｔｉｏｎの略称です。アメリカで使われてますね。

ルカ「ニョロモがベロリンガに連れ去られた時、飲み込まれちゃうのかと思ったよ」

まあそれも考えたんだけど、その描写を入れる必要はないとおもってんで。

ルカ「あんがいえぐいんだね」

いやーそれほどでも。

第十八章：それぞれの任務　ＶＩ：モモ：発見（前書き）

さてこの章での新しい取り組みですが、どうしても多視点となってしまうので難しいですね。

ルカ「暑い……」

そうだね、最近猛暑が続いてて暑いね。皆様もじゅうぶんにお気を付けください。では、どうぞ！

第十八章：それぞれの任務　ＶＩ：モモ：発見

シンオウ地方　キッサキ神殿：

「ハハハハ！　どーだ、みろ！　動き出したぞ、レジギガスが！！」

モモの遠目に映るのは確かシンオウへと配属の決まった内の一人。カントーでのポストを狙っていたのだが、それが叶わずその日より更に態度が横柄になっていったと噂で耳にした。

モモがミオダウンタウンで出会った男も以前まではそいつの部下だった者である。

「これはまずいよねー」

岩陰に隠れながら、モモは状況を静観しつつも焦りの色をみせつつある。

徐々に動き始めるレジギガス、それを取り囲んだロケット団員達。

「よくやったぞ貴様！　よし、お前らこいつを取り押さえろ！」

「「はっ！」」

ロケット団員の服装に身を包んだサトシが渡したボールから出たレジアイスは、手際よく他の団員によって規定の配置へと移動させられた。

レジギガスを三方向から取り囲んだとたん、あの巨大な石像は動き出したのだ。その配置の基準、そしてなぜレジギガスが動き出し

たのかはモモにもアユミ達にも知る由もない。

「確か、あいつの名前はシュラカ……」

モモがそう呼ぶ男の名、それは今視界に映るロケット団を率いている者の名だ。

「これで俺はカントーに戻れる！　この任務さえ終わればな！」

シュラカはそう叫び、懐から一つのボールを取り出す。

「させるかよ！」

するとゲンがシュラカに向かってボールを放り、中からガブリアスが現れてシュラカにその鋭い鎌を突き立てようとするが……

「させないよ」

シュラカを守るようにしてサトシが現れて、ゲンのガブリアスの攻撃をリザードンの尻尾で薙ぎ払う。

「くっ！」

「あなたは……」

「まさか、お前……！？」

ゲンは苦渋な表情をするが、次の一瞬にしてサトシの顔を見た瞬間に驚愕する。それは興味無さげなサトシの表情にも色をともした。

「よくやったぞ貴様！　さあ観念しろよレジギガス、お前のことは俺たちが都合よくつかわせてもらうぜ！」

まだ身体の自由がきかないのか、レジギガスはロケット団からの攻撃に反撃も防御もせずにダメージを受けていた。レジギガスの特性までもを熟知した上でのことだろう。だからこそ彼らはアユミ達が仕掛けに来た時、あえて加勢も応戦もしなかったのである。

シュラカが雄叫びをあげながらボールをレジギガスへと放る。そのボールの形状は紫色をしており、それはアユミもキリンもみたことのないボールであった。

しかしモモをはじめ、ゲンやサトシはその存在に気が付いていた。マスターボール……その存在を知っている理由は様々であるが、それがどういったボールかは三人は知っていた。

「リザードン、【火炎放射】」

だがそのマスターボールはレジギガスにあたる前にリザードンによる炎の放射によって遮られてしまう。サトシはゲンに向けていた視線を名残惜しそうに背けて自身の任務を全うする。

「なっ！　キサマァ！！」

シュラカは目の前にいるサトシに詰め寄ろうするが、リザードンによって腕をねじ伏せられる。

「悪いけど、これも僕の任務なんだ」

「貴様、何を言って……」

サトシはリザードンが自分の尻尾で弾き返したマスターボールを手に取る。

「試作品だけあって、トレーナー登録はされてないみたいだからね」
「お前、どこでそれを……」
寂しげな表情を浮かべながら、サトシはシュラカを見下ろす。
「リーダー！」
「貴様、リーダーを離せ！」
サトシの暴行に他の団員達が気付き、シュラカを助けようとするが……
「リザードン、【エアスラッシュ】」
ただ、リザードンが両翼を一羽ばたきさせただけで生まれた陣風が団員達を吹き飛ばす。
「それじゃあね」
「おい、待て！　やめろ！」
サトシはリザードンに乗り、そのままボールをやっとこさ立ち上がったレジギガスへと投擲した。一瞬にしてボールへと吸い込まれたレジギガスをサトシは受け取り、そしてそのままやってきた穴から出て行ってしまう。
その時、彼は最後にゲンの姿をとらえる。それはただほんの一瞥であった、だがそれで十分だった。もはやゲンはサトシにとっては過去の人物なのだ。
それは……あっという間の出来事だった。

体感覚にして僅か5分だろうか？　そんな短時間の中でロケット団が結構な人数で成し遂げようとしていたことを一人で敢行してしまえる実力とはいったいどれほどのものなのか。

「一体、なにが……」

アユミは茫然とするしかなかった。キリンとアユミの手持ちは残っていない。そして頼りのゲンもあっさりと足なわれてしまった。

そして想定してもいないことが起こってしまったこと、それがなによりもアユミを苦しめる。さっきの人物は、アユミの記憶が間違っていなければ史上最強のトレーナーであるサトシ……彼のリザードンを見て間違えるはずもない。文献と動画でしか見たことはないが、それほどまでにあのポケモンの圧倒的な力があることは見間違えるはずもない。

「おい、アユミ……何がどうなって……」

キリンも同様だった。そしてなにより自分たちの無力さにただただキリンは歯がゆかった。

そしてそれは相手側でもあるロケット団も同じであった。

「おい、早くあいつを追え！」

「は、はい！」

シュラカは怒鳴り散らしながら指示を送る。もはや統制など取れてはいない。あのロケット弾が、だ。

「おいお前ら、ここは退くぞ」

と、ぼそりゲンが口に出す。キリンとアユミにとってその言葉が意味することはわかっていた。

『逃げるぞ』

つまりはそういうことだ。

ゲンがアユミを担ぐタイミングでキリンとアユミは出ていたポケモンをボールへと呼び戻す。そしてそれを確認した団員の数人がシュラカに指示を仰ぎはじめる。

「お前はジムリーダーを頼む！」

「わかってるっての！　サイドン、キリンリキ最後の一仕事だ！」

ポケモンが離れた場所にいる際、ボールへと戻してから特定の場所に改めて出現させるほうが効率がいいのは一目瞭然である。キリンはポケモンたちをいったん戻して倒れていたキッサキのジムリーダーであるスズナのもとへと投球する。

キリンはスズナを背負い、キリンリキがユキメノコを、サイドンがマニューラをそれぞれ担いで退散を始める。

「あいつらを逃がすなぁ！　ゲンガー、【黒い眼差し】！」

「ゲンガァ！」

シュラカのゲンガーにより動きを封じられそうになるが、その前にゲンのガブリアスが躍り出て殿（しんがり）をつとめる。

「【流星群】！」

突如として天空から降り注ぐ隕石がキッサキ神殿の天井をぶち抜く。瓦解してくる瓦礫がアユミ達とシュラカ達との間に仕切りをつくる。

「くっ！　撤退だ！　レジ共の回収急げ！！」

最後に向こう側で見えたのはシュラカが的確な指示を出す姿だけであった。

「ガブリアス、こいつを頼む！」

ゲンは担いでいるアユミをガブリアスに託し、ドクロッグをボールへと戻す。

「どこまで逃げるんだよ！」

「とりあえずここから出るぞ！！」

キリンがゲンに指示を仰ぎ、洞窟の外を目指す。

「はぁ～い、ちょっと待ってねー」

アユミ達の背後で舞い上がる粉塵が迫りつつある中、一人の女性が立ちはだかる。そう、モモである。

「誰だ、お前……」

ゲンはモモを見るや否や、険しい顔つきへと変わる。

「まあまあそんなに怖い顔しないでよー。実はね、一つ助け舟を出そうと思ってね～」

そう突然言い出してモモはボールを取り出す。

「あまりロケット団を甘く見たらだめよ？」

「おいお前、何言って……」

モモにはわかっていた。ここがキッサキ神殿の最深部であるのに、どうやってサトシが天井から現れたのかを。彼らはここに滞在していた時間が長かったのだ、ならば熟知しているここの構造を。

「カメール、お願いね」

「かめぇ！」

カメールはモモからの命令を待たずとキリンのサイドン目掛けて【冷凍ビーム】を放つ。

ゲン達がそれに目を見張った時、カメールの技はぎりぎりサイドンの右肩の上を通り過ぎて背後に迫ってきていたグライオンに命中する。

「なっ……」

「どうしたのおじさん？　こんなことで注意が散漫するような人じゃないでしょー？」

そしてモモは感づいていた。ゲンがサトシを見てから明らかに動揺していることに。だからこそ、それを払拭したいがためにガブリアスにあんな強行技を駆使させたことも。

「あなたは一体……」

アユミは必死に記憶を探り、ひとりの人物と照合させる。

「まさか、トウリョウ　モモ」

「ごめいと～う♪　すごいのね、あなた」

嬉しそうにモモは手を一回叩く。

「なぜ君がここに？　だって君はＫＩＡ……」

「ＫＩＡかぁー、そうなるんだねやっぱり」

ゲンはその単語に眉をしかめ、キリンはスズナを担いだままただただ会話を聞いている。

「おいアユミ、なんだよＫＩＡって？　ていうか、こいつ知ってるのか？」

「こいつは死んだことになっているはずのロケット団員だよ、それもさっきの男と同じ正規の団員だ」

「なっ……」

ガブリアスに背負られたまま、アユミが注意深くモモのことを観察する。

「あははー、よく知ってるね～」

モモは嬉しそうに手を一回たたき合わせる。

「お前の目的はなんだ？　俺たちの敵か？」

ゲンの睨みが凄みを増し始めるのを見て、モモは微笑みながら「こわ〜い♪」とおどけてみせる。

「ふふ、それはあなたたち次第だから」

「なに？」

「私の質問に答えてくれればいいんだよ、あなたたちの中の誰が八柱力なの？」

モモの質問にキリンが即座に表情に変化を加える。

「なに言ってんだよ？　俺たちが八柱力なわけないだろ？」

「ありがとう坊や、やっぱりあなたなのね」

キリンが必死にごまかそうとしてもそれはことごとくお見通しのようである。

「アユミに触れるんじゃねぇ！」

モモがガブリアスの方へ歩み寄り、アユミに近づこうとするがそれをキリンが阻止しようとする。だがモモのカメールの吐き出した【水鉄砲】によって飛ばされる。

「キリン！」

アユミが叫び、その声が神殿のある洞窟内で反響する。ガブリアスもモモのカメールの実力よりも、カメールが自分のどこを狙っているのかが本能的にわかってしまいアユミを背負ったままでは動けずにいた。

そう、カメールはガブリアスの急所だけをただ見つめているのだ。

誰もが絶望的な状況にあったと思った、だが一向にモモが動きを見せない。いや、むしろカメールによって吹き飛ばされたキリンの方をじっと見つめている。

「キリン……？」

それは自分が幼い時に生まれ、離れ離れにされた弟の名前であった――――。

第十八章：それぞれの任務　ＶＩ：モモ：発見（後書き）

さてサブタイが連続して同じということで次のジンのもどういったものになるかはわかるかと思います。

なんだか主人公というか主要キャラ達を主要視点で描かないというのはなんだか不思議な感じがしましたｗ

では、また次回！

第十八章：それぞれの任務　ＶＩＩ：ジン：発見（前書き）

甲子園盛り上がってますね

ルカ「タイムリーなネタだね」

いや、もう岡山頑張れ！

ルカ「私野球はあんましわかんないや」

高校球児に負けじと、自分も頑張ります！

第十八章：それぞれの任務　ＶＩＩ：ジン：発見

ホウエン地方　キンセツジム：

「私たちに必要なもの、それは人が生み出した科学の力です。自ら活路を創り出さなければ、未来など予測できるはずがないのですから！」

その一言でジム内で拍手が喝采する。

用意されているフィールド上に設けられた特設ステージの上でカイチ　スミレのスピーチがなされている。

ジンはその様子をジムリーダーのテッセンとともに眺めていた。

「すごい人気ですね」

「そりゃあ、あの容姿だからな」

「ですね」

カイチ　スミレを生で見たことのなかったジンにとって、今目の前にいる彼女は同じ人間とは思えないほどに才気にあふれていた。

一度ステージに立ち、口を開ければ誰もが黙って彼女の言葉に聞き込む、いや聞き惚れてしまうのだ。

「私たちは遠い昔、アルセウス教から離反しました。それは別に神を信じないからではありません、神頼みでしか自分たちの人生を示せない同類の姿にあきれたからです！」

ずいぶんと辛辣だな、とジンは思ってしまうも彼女の意義主張になぜか強く反対できない自分がいることに気が付いてしまう。

「人の祈り、それが生み出す力の科学的根拠はあります。しかし、いえ、そもそもこういったことを分かり始めたのも科学の力があってこそ」

檀上でスポットライトを浴びるスミレの表情は輝いていた。それはサント・アンヌ号で彼女が見せていた表情とはまったく異なっていた。そう、今やこのステージは彼女の独壇場なのである。

「アルセウス教の教え、それは人を癒す万能の薬となります。でも私たちは身をもって知っている、その使用法を間違えれば猛毒にもなりうることを。そう、あの聖戦を私たちは忘れてはなりません」

聖戦、それはジンにとっても、そしておそらくシンオウの人間にとっても耳の痛い話だろう。発端は子供同士の喧嘩だときいているが、それが国をも覆うほどの戦争となった。

科学対神、それを人が代行した醜い争い。それでいくらの人間とポケモンが犠牲となっただろうか。

「人間とポケモンとは違う生命体です。彼らに対抗し、同じ線上に並ぶために私たちは科学の力を身に着けました」

スミレの話は続く。

「そして私たちはポケモンをも生み出した。それはポケモンが私たちに同調しなければならなくなった、その証拠が彼らの存在なのです！」

他の面々が聞き入っている間、ジンは違った観点からスミレの論説を聞いていた。彼がミュウからあの話を聞いたからだろうか？

確認のしようがない、だからこそどちらの意見も通る。そう、単なる存在証明の話にもつれ込むだけなのだ。

ベトベター、ポリゴン、ギアルやロトムなどのポケモンは人の介入がなければ存在すらも怪しかったポケモンたちである。そして人と触れあうことでその体を進化させたポケモンたちもいる。

そう考えれば、そういった面からみればスミレの話は筋が通っている。そう思えてしまう。

「だからといって私たち人がポケモンを支配していいというものではありません。ただ自分たちの主導権を放り投げてはならないのです。それはポケモンたちへの裏切りであるとともに、自我の放棄であるからです！」

そこでまたも拍手がジム内に轟く。徐々に立ち上がっていく人を見ながら、ジンもそれに倣う。

歓声とともにジムの空気が震える。スミレはその大声量をその身に受け止めながら、右手を掲げて応える。

「私たちは！」

スミレが声を張り、それと同時に観客は黙る。

「なにもアルセウス教と対立する気はありません！　ただ、彼らに

認めさせるのです！　この国のため、私たち自身のために必要なものは実態のない神という存在ではなく、自分たちの力で未来を切り開くための力！　科学なのだということを！　スウセルア教は皆様のより良い世界のために、これからも、そしてこれよりも一層精進してまいります！」

一呼吸あり、

「そして忘れないでほしいのは！　私たちだけでなく、あなたがたの力もあってこそ私たちは！　スウセルア教は未来を切り開いていけるのです！　御清聴、ありがとうございます！」

そして沈黙。

スミレの表情は輝いていた。熱のこもった演説で彼女の額を伝っていた汗が照明によって宙を舞い、きらめく。

「「ワアァァァ！！」」

突如として湧き上がる嬌声にジンは床が振動しているかと錯覚してしまう。

これを自分より年下な、１６歳程度の少女が唱えたのだ。何か特別な魅力が彼女にはあるのだろう。

「どうだったジンくん？」

「すごい、ですね」

お互いに寄り気味になりながらテッセンとジンは相槌を打つ。

「あれがカイチ　スミレ嬢のカリスマなのかもしれんな。ここキンセツで、スミレ嬢の人気はすさまじいからの」
「そうみたいですね」

ジンの視界からでも観戦席にいる観客の幾人かがスミレのおっかけであるような出で立ちをしていた。タオルや特性のバンダナを身に着けている男達の姿や、パネルやうちわを掲げている女性の姿が確認できた。皆、さまざまな格好ではあるがスミレ嬢やスミレ様のプリントが垣間見える。

それほどまでに幅広い人からスミレは慕われているのだろう。

「それでは最後に、ここのジムを使わせていただいたテッセンさんにちょっとした仕掛けを用意していただきましたのでそれをもって今日はお開きにしようと思います」

檀上に設置されていたマイクをスミレは両手で抱え、そのまま深い一礼をする。

大体の場合、客が退屈しないように見世物や表示物は最初か途中に持ってくる。しかしスミレの場合はそんなことをしないでも十分に素晴らしい演説をやってのけた。

「どれ、行ってくるか」
「いってらっしゃい」

テッセンが腰を上げて、裏方の方へと回っていく。

「今日ご紹介するのは、スウセルアがカントーのシルフカンパニー社と共同で開発に着手しているプロジェクトについてご紹介します」

そこでジンは驚きを隠せないでいた。いや、忘れていたのだ。

自分たちのボスであるサカキがどういった人物であったのかを。彼ならばスウセルア教と組まないわけがない、そう、なぜならスウセルア教はその教団自体で孤立した企業であるのだ。デボンコーポレーションなんかとは格が違う。

たとえサカキがデボンを掌握できようともスウセルア教は下手をすればロケット団よりも強力な組織体を持っている。ならば組むことのほうが明らかに有益なのだ。

しかし、いや、いったいなにを……？　そう思っていたジンの目の前にいきなり飛び出すものがあった。

「これは……」

それは立体映像で現れた、とあるポケモンバトルの模様であった。ただ単なるポケモンバトル。二人の少年による一対一、バシャーモとラグラージの試合（バトル）である。

だが途中でバシャーモの【火炎放射】とラグラージの【濁流】が狙いを外れ、相手のトレーナーにあたってしまった。もちろん、ポケモンたちの技である……ただ事ではない。

そうポケモンバトルとは究極のスポーツなのである。それも死を隣り合わせにした。

普段であるならば相手のトレーナーを故意であっても偶然でも傷つけてしまったら、公式試合では中断される。そうしなければどう

なるかをジンはあのミュウのいた孤島で嫌というほどに体験した。

「ポケモンバトルにおける事故、それがいかに多いのかを皆様はご存じかと思います」

スミレが続ける。

そう、ポケモンバトルにおいてトレーナー自身も過酷なバトルという状況になれなければならない。ポケモン達と一心同体、それほどまでに以心伝心しなければ頂点をとることなどできないからだ。

それはサトシであったりダイゴの体を見れば一目瞭然だった。特にダイゴの弟であるジンにとって、彼が毎日どれほどのトレーニングをしてきたかは口では表せない。

「危険を人が負うことはない。未来のバトルはより安全に、そしてより安心に行われていく。それがこれです」

スミレが上着のポケットから取り出したのはインカムと、とあるチップであった。

「技マシンのロム化に成功した技術を応用し、一時的にポケモンたちに負担をかけずとも遠距離からトレーナーの指示が届くようにします。それによりトレーナーはフィールドをより細かに見渡しながら、相手に送られた指示を聞くことなくより高度なバトルを強いられることとなります」

立体映像は切り替わり、フィールドには二体のポケモンしかいない。バシャーモとラグラージとのバトルとなり、その二匹の戦いは先ほどのものより、より白熱したものとなっていた。

「これが実用化されることとなれば、いつでもどこでも人間にもポケモンにも安全なバトルが実現します」

スミレのプレゼンに一同は唖然としていた。それもそうだろう。ここまでに技術が発展しているとは思っていなかったのだから。しかし反応は大絶賛だった。

たくさんの拍手を受けながら、スミレは檀上を下りていった。

ジンは観客席に残ったまま、テッセンを待った。かなりの観客が演説を聞き終えジムの外へと出て行った頃、テッセンが戻ってくる。

「どうだったかねジンくん？」

「テッセンさんはどう思ってるんですか？　あのバトルのこと」

ジン自身、実感がわかずにいた。スミレの理想はわかる、だがそれがはたしてうまくいくのかはわからないのだ。画期的であるのは認めざるを得ない、が。

「ふむ、そうだな。これもまた新しい時代の幕開けなのかもしれんな」

「え？」

「今はどこでもバトルが楽しめるが、昔は正式な立会人がいなければバトルは行われてはいけなかったのだ」

「そういえば、そうでしたね」

もはや歴史の授業となってしまうが、今のようにポケギアなどの端末が出るまでは立会人不在のもとでのポケモンバトル及び金銭の受け渡しは協会の法律で禁止されていたのだ。

だがそれもまた時代の流れとともに変わり、どこでもいつでもバトルを楽しめる時代となった。そして今度はより安全にという傾向に人の思考がなっていくのも仕方のないことなのか。

「まあそんなことは本人に聞くのが一番だろう？」

「そうですね」

ジンは立ち上がり、テッセンについていってジムリーダー専用の控室へと案内される。扉にはカイチ　スミレ様という紙が貼り付けてあった。

ノックと返事の後、テッセンは扉を開ける。

「あ、テッセンさん、今の度はありがとうございます」

「いやいやスミレ嬢の演説を生で聴かせていただいてこちらとしてもお礼を申し上げますぞ。がっはっは」

スミレは礼儀正しくテッセンにお礼を言うと、ちらりとジンの方へと視線を向けた。

「ああ、そうじゃそうじゃ、実は紹介したい者がおってな。こちらデボンコーポレーションの二男で、時々世話をしているツワブキジンくんだ」

「よろしくお願いします」

ジンは一歩前へと出て、スミレへと手を差し伸べる。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

勇猛果敢という言葉が女の子にしては似合うと檀上にいたスミレには抱いていたジンであったが、こうやって直接会うと実に一般的な少女なんだなとジンは思ってしまった。

「彼が君に話があるというのでな、退散させてもらう。それでは若いものはゆっくりな」

と言って、テッセンは控室から出ていく。そのほうがジンにとってもありがたい。部屋にはスミレと、スミレの従者であるサル、そしてジンだけが残った。

「あの、お話とは？」

さすがにスウセルア教とあってデボンコーポレーションの関係者ってだけではくいつきはしないか、とジンは思いつつもさっそく口を開く。

自分でも驚くくらいに大胆になったのかな、あの二人のおかげで……と思ってしまうくらいにジンははっきりと尋ねた。

「カイチ　スミレ、君は八柱力だね？」

逃がさぬようにとつかんだままのスミレの手が急に力が入らなくなったのを、ジンは決して見逃さなかった……。

第十八章：それぞれの任務　ＶＩＩ：ジン：発見（後書き）

科学とポケモン、まあ人とポケモンな話なわけではありますがどうなんでしょうね。

ルカ「なにが？」

考えることは人様々。ならその表し方も様々だけど、そんな当たり前のことを文章でいかに伝えるかってのは難しいんだなって。

ルカ「一応いろいろ考えてるんだね」

失敬な……。まあ、では次回お会いいたしましょう。

あ、それとツイッターはじめましたｗ

ルカ「Ｋａｒｙｕｇａｒｙｕで検索してみてね～」

では～

第十八章：それぞれの任務　「裏」：この世の理（前書き）

最近、メディターにおけるテーマというものが意外にも難しかったことに苦戦しながらも楽しんでいます。

ルカ「難しい話は嫌いです」

なんかさ、こう複雑なことがたくさん交差してくれることで表面上は単純に見えるようになっているんだよ。

ルカ「だから？」

あ、いえ、なんでもありません；；

それではどうぞ！

第十八章：それぞれの任務　「裏」：この世の理

シンオウ地方：

「それで？」
「なによ？」

アララギとマコモが使用している研究室の真ん中で宙に浮いたままのミュウが聞き返す。

「なによって……あの三人をそれぞれその地方に赴かせたのには理由があるんでしょ？」

そう言い直すアララギは、しかしその本題には興味なさそうにしながら自身の研究論に目を通していた。きっと飽きてきたからそんな話題を振ったのだろう。

「なによ今更」
「いいじゃない、別に」

とりわけ何かをしていたわけでもないミュウは天井の方を見直して、それで軽く首を横に振る。

「どうでもいいじゃない」
「あなたねぇ……」

はぁ、と嘆息するアララギを横にマコモが突然立ち上がる。

「どうしたの？」

「新しい報告があるよ～！」
マコモがあたふたとパソコンのモニターに映し出されている情報を読み上げる。
「シンオウのキッサキ神殿で爆発事故があったみたいー」
彼女が言っているのはモモがちょうど立ち寄っていた場所である。
「ふぅーん、モモもさっそく面倒ごとを起こすのね～」
ミュウはそこではじめてモモの名前を口にする。そのことにアララギは唇をにやりと曲がらせる。
「あら、なにもかもお見通しって顔ね」
「そんなことないわよ」
ミュウは床に足を着き、窓の方へと向かっていく。
「ポケモンにもいろいろいるけれど、特殊な存在の念を私は感知できるわ。だから多少なりともどの地方にどれくらいの念がいるかはわかるつもり」
ミュウのように希少種とされているポケモンは他の希少種の存在がどこにいるのか特定できる。それゆえに、お互いの聖域には干渉しないようにしているのだ。それは、この世界の均衡を……自然を守るために。
「そうね、だからこそあの三人をそれぞれ行かせたのでしょう？理由を聞かせなさいよ」

「あなた相当暇なのね……」
「私もききたーい」
今度はミュウがため息をつき、外の景色を楽しむようにして口を開き始める。
「モモにはシンオウ、あそこにはモモが求める者がいるのよ」
それはきっとキリンのことだろう。なぜミュウが彼らのことを知っているのかはわからない、だが理由はそれだけではないようだ。
「ガイにはカントー、あそこにはガイが乗り越えなければならない者がいる」
それはレイハのことなのか、それともまた違う人のことなのか、定かではない。
「ジンにはホウエン、あそこにはジンが会わなければならない者がいる」
ミュウはなにをもってしてそういっているのか？　それはダイゴのことなのか、あるいは八柱力の内の誰かなのか。
「まあ、あれよ。面白いことになりそうだからよ」
「でもあの三人なら5年も待たなくてもすぐに終えて帰ってきそうだけどね」
アララギの読みは正しい。そしてそれはミュウも承知のはずだ。
「いいえ、絶対に5年後よ。あの三人が帰ってくるのは、ね」

ミュウは遠くを望むようにして窓から見える海の向こうを眺める。
「どういうこと？」
持っていた書類をいったんおいて、アララギがミュウの方を見向く。
「どういうことって、そういうことよ。理由なんていらない、そう必然的にわかるのよ」
それはポケモン特有な能力とでもいうのだろうか？　ヨーテリーやガーディ、はたまたピカチュウなどが地震が来る前にそれを察知できるというように人間には理解できないことを本能的にわかってしまうのだ。
「それってなに？　人間にはわからないってやつ？」
「そうね、人間にはわからないわね」
少し悲しそうにつぶやくミュウをアララギとマコモが見守りながら、アララギが椅子から立ち上がる。
「そういえば、少しイニシャルインシデントについて調べたんだけど」
「なんでまた？」
「そうねぇ、最近暇で暇でしょうがないから……かしらね？」
「なによその自慢げな顔」
ふふん、と鼻を鳴らすアララギ。彼女が大体こんなしぐさをする場合は新しいなにかを見つけた時だと相場が決まっている。

「どう考えてもイニシャルインシデントよりも前の事例についての文献や記録がどこにもないのよ」
「それは、つまり？」
「あなたの考えも含めて考察するとね、私たち人間という種はイニシャルインシデントが起きた時にこの世界へと連れてこられた……そういうことよ」

しばらくの沈黙が流れる。それがもし本当のことであるならば、それは相当な一大事である。

「つまり、ここはもともとポケモンしか住んでいなかったって言いたいの？」
「ええ、その通りね」
「でも、なんで……」

何かを言いかけてミュウは口を噤む。

「そういうことね」

ミュウは押し黙ったようにして声を殺し、アララギを見据えて彼女は渋々しくうなずく。

「ええ、ポケモン達の進化がどう行われたのか明確な情報がいまだに研究として得られないのは……私たちとポケモンの間に明確な遺伝子のつながりが欠如しているから……ということなのかしらね」

ハイリンクによるパラレルワールドとの交錯。それがはじめに起きたイニシャルインシデントであるとマコモは踏み、そしてそれをミュウは肯定するような言動を発した。

つまりハイリンク……ポケモンのみが住んでいたこの世界にハイリンクによって違う異世界から人間だけが連れてこられた……かもしれないという仮説が今立ち上がったのだ。

『もしそれをアノ人が知っていたというのなら、アノ人は一体ハイリンクを使ってなにをしようというの？　ポケモンと人間の共存を望んでいたはずなのに、このままだと反対のことに……』

ミュウが悩んでいる表情をよそ目にアララギは続ける。

「なんで向こう側の世界の人間はここへ来ることを望んだのか。それとも望んでいなかったのか。はたまたその逆なのかはよくはわかっていないけど、きっと説明できるはず。そしてそれを立証してくれるのはポケ人の存在だと私は思っている」

ポケ人。またしてもここでその単語が飛び出す。

「もしかしたら彼らは本当に不幸な存在だったのかもしれないわね」

科学者としてそれは不謹慎なのかもしれない、情を動かしては絶対であるはずの結果に支障をきたすことがあるからだ。だが一流の科学者であるアララギがそうこぼすのも無理はないのかもしれない。

ポケ人、それはポケモンと人の間にできた望まれない存在。その定義すらアララギの仮説によって多少は見方が変わっても来る。

彼らがもしポケモンの世界にやってきた人間の仲介役としての役割を果たした存在だったとしたら？　そうでもなければこの世界は最初から他方がもう一方を支配するといった秩序の中にあっただろ

う。

だがそんな文献は残ってはいない。

もし初めて邂逅した彼らが無駄な血を流し、畏怖を抱くことなく、お互いの恐怖心を和らいだ存在がポケ人にあるのだとしたら……彼らはあまりにも非道な仕打ちを歴史上されてきたということになる。

それも人間側からの一方的な排除を受けて、今ではその数すらわからない。

「あなたたちのような希少種でもその時の記憶はないのでしょう？」

「……そうね」

そしてそれらを裏付けるようにミュウなどの希少なポケモン達にはイニシャルインシデント以前の記憶がない。それは時を司るものたちでも同じなのだ。

行ける年代に限界があるのだ。だがそれを限界などと思うことは、彼らにはない。

「ま、そうなればそうなったでどうやってポケ人が生まれたのかとかいう疑問は出てくるのだけれどね」

「人間の考えることは時にはおぞましいほどに賢いわね」

「ふふ、ありがとう」

すべてを自然の享受だとして受け止めるミュウ達ポケモンは、アララギのようにそんな風に考えることができない。それは人間はもとはこの世界の住人でないからかもしれない。

「そうしたらますます私の研究の答えが見えてきたかも」
「え、どういうこと？」
今までは口を出してこなかったマコモがアララギのその一言に反応する。
「ベトベターやヤブクロンの存在はもしかしてポケモンと人が共存を成し得た故の産物かもしれない……いいえ、証なのかもしれない」
人間に自然の怒りを……自然が危機に陥っていることを知らせるために具現化されたといわれるポケモン達。それらの存在は母が愛をもって子をしつけるために怒鳴るように、それは自然がポケモンを介して人間を受け止めたということなのではないだろうか？　そう考えれば考えるほどに煙に巻かれた視界がはっきりとしたものへと変わっていく。
「つくづくこの世の人間なる存在はみじめなものよね」
圧倒的弱者、それが人間なのであるとアララギは言っているのだ。皮肉以外のなにものでもない。そんなものを世間に発表できるはずもないのだ。そう、人間のみが固執しているこの社会という鳥かごの中では……。
「そんな風には考えたことがなかったわね。私たちは現れるべきところに現れる。あなたたちのように私たちに名前までつけなければいけないほどに面倒くさくて弱い生き物……。それでも私たちはあなたたちを受け入れる……受け入れない理由がないから、それが自然の循環なのだから」
人間の尺度とポケモンの尺度、そのスケールの違いがここまでの

軋轢を生んでいるのだろう。

それを共存と呼んでいいのだろうか？　いや、そうでも言ってられないと人間の方が機能していけなくなるからだろうか？

「なら私もそろそろ行くわ」

「あら、おでかけ？」

ミュウは研究室の扉の方へと浮遊していき、認証キーを入力して開く。

「ここにいる八柱力にいろいろ聞いてくるわ」

「あなたが積極的に動くなんて珍しいわね」

「そうかもね。でも、なにか見えてくるかもしれないわ」

アララギの仮説を聞いてミュウもなにか思うところがあったのだろう。

「そう……なら、いってらっしゃい」

「おみやげよろしくで～す！」

手を振る二人の人間の友にミュウは微笑み返し、ビルを後にする。

ミュウが会うべき人間は……いや、八柱力とは？　ミュウはその存在の念を感じ取りながら向かっていく。

『アノ人がやろうとしていることはこのことなのかもしれない。だとしたら、私はアノ人を排除する……』

サカキとミュウ、彼らの思惑は遠く離れていながらも交錯し衝突

する――――。

第１８章：完

第十八章：それぞれの任務　「裏」：この世の理（後書き）

第十八章、お楽しみいただけましたでしょうか？

今後の予定としましては、幸いにもまだ夏休みなので良い執筆ペースをみつけられればなと思います。

そして章によるキャラの交錯が頻繁になっていくので章分けのタイトルが変わっていくかもしれません。

ではでは～

第十九章：聖戦が残し産物　Ⅰ：御触れの石室（前書き）

ケンの章を書いたのが半年以上も前になるのかと思うと、時間の流れの早さなり遅さなりを実感しておりますw

ルカ「そういえばご無沙汰だったね」

メディターの進み的にルカの章を始まりの基準としているので、いろいろなキャラの立ち回りや謎が解消できると思います。

ルカ「それでは、お楽しみに～」

第十九章：聖戦が残し産物　Ｉ：御触れの石室

ホウエン地方：

「ぐっ！」

「ちゃんと捕まって、ケンくん！」

カスミさんの大声に俺は必死に答える。勢い良く流れる海流に身を制御できなくなりつつも、カスミさんのポケモンにしがみついて海水を飲まないように気をつける。

送り火山からフエンタウンへと訪れた俺達は、そこのジムリーダーであるアスナさんの行方不明情報を確認した後キナギタウンへと赴いた。

ダイゴさんの知り合いである民宿に俺達八人は一晩の休息を得た。マサキさんはトクサネシティに残り、サトシさんは別の用件で一旦カントーへと戻っていた。

俺達は翌日に御触れの石室へと向かう為、キナギタウンの西側……１３４番水道へと向かったはいいものの……。

「ごふぁ！」

「ケンくん、大丈夫！？」

西方向に流れる速い潮流に逆らわないというものの、一本でも筋を間違うとそのままカイナシティまで流されて逆行できないらしい。

リードはされているとは言うものの、ゴール地点のわからないジ

エットコースター（視界一面水）に乗せられたような気分だ。

横で声をかけてくれるアンズの為にも必死に堪える。てか良く他の面々は平気だな！　さすがジムリーダーってとこかよ！！

「溺れる……」

「ナツメ、あんたちゃんと捕まりなさいよ！」

必死な俺をよそにナツメさんとカンナさんのいつもどおりの悶着はこんな時にでも健在らしい。というかナツメさんに体力がないからカンナさんがきっちりフォローしているんだろうな……。

「楽しいですね」

そしてそんな二人を微笑んで見守るのがいつものエリカさん。着物姿でないエリカさんにもそろそろ見慣れてきたと言わざるを得ない。

「大丈夫かーお前ら？」

潮に流されること２０分。実際それだけの時間なのに永遠に潮流に運ばれていたような感覚に陥ったながらも、なんとか目的の場所へと辿りつく。

なぜここだけ潮が避けるようにしてぽっかりと穏やかな空間が構築されていた。なんとも不思議な異空間だ……まるで誰かに忘れられたかのような、そんな変な錯覚に陥ってしまう。

「ここからは【ダイビング】だ。頼むぞ」

「はいはい、わかってるわよ」

「了解です」

カスミさんとカンナさんのポケモンたちに連れられて俺達一同は海の中へと【ダイビング】を使って潜っていく。

【ダイビング】を使ったのは初めてだったが、なるほど確かに妙な技としかいいようがない。気圧の変化と酸素の供給をポケモン達がつくりだした気泡を人間が利用して対応するのだから。若干ポケモン達の生臭い臭いがするが、それも数十秒としないうちに慣れてくる。

奥へと向かえば向かう程に俺達の頭部をすっぽりと覆う気泡は小さくなっていく。でもそんなに奥深くまでは進まないみたいだな……あそこに見える窪みは？　点字か？

先頭を進むダイゴさんが右手を上げて全員に合図を送る。後方でしんがりをつとめるカスミさんは俺みたいな不慣れな者をアシストしながら役目を果たしている。

「ぷはぁっ！」

「ふぅ！」

アンズと俺は同じタイミングで水面の上から顔を出す。そこは洞窟だった。

ただの洞窟……ではないだろう。なんなんだ、ここ？

「ここが御触れの石室？」

俺はカスミさんのポケモンに洞窟内へと押し上げられて、辺りを

見回しながらそうつぶやく。

「ああ、そうだ。ここに俺達が開かなきゃならない扉がある」

「扉？」

この時、俺はダイゴさんの言っていた扉の意味がわからなかった。しかし思い知ることになるんだ……ここがどういった場所なのかを。

洞窟ないに整列された岩壁に描かれた巨大な点字……それはかなり昔に彫られたものであることが明確にわかるほどに。

「とりあえず見てな」

ダイゴさんがメタグロスを取り出して勢い良く地面を掘り始める。

「この下ってこと？」

カンナさんが訝しむようにメタグロスの動向に気を配っている。

「下から感じる……人々の怨念と叫びの塊が……」

ナツメさんは目を瞑りながらそんな不穏なことを声にする。怨念ってどういうことだ？　それに叫びって……。

「それじゃ行くぞ！」

ダイゴさんが掘り終わった穴に飛び込んでメタグロスの上に着地する。その後は順々に飛び降りていき、女性陣のほとんどは俺とダイゴさんで受け止める形となった。

「それじゃナツメ、頼む」
「はい」

ナツメさんは超能力者としての実力を秘めているとはされているけど、古代学者でもあることはあまり知らされていない。古代のオーパーツ、そういった類のものにまで彼女は精通している。

俺たちが【穴を掘る】で降りた階層は最初の空間よりは小さいものの、見慣れた点字が存在していた。ナツメさんが点字を読み取り、それにしたがって部屋を移動していく。

俺だったらどれも同じ空間にうんざりするところだが、しかし一体どういうとこなんだここ？

「ケンくん、大丈夫？　顔色が……」
「いや、大丈夫さ。ありがとなアンズ」

海底にある洞窟だからだろうか？　体調が地上とは勝手が違うんだろうか？

「ここだな」
「ええ」

ダイゴさんとナツメさんが目標地点にたどり着いたのだろう、行き止まりとなった小部屋の壁面を見て頷きあっていた。

「あの、ダイゴさん」
「ん？」
「ここって、一体？」

俺はダイゴさんにそろそろ真意を聞き出す。ここが一体どういった場所なのか？　ポケギアで調べてみても御触れの石室なんて場所は存在しない。

「聖戦って知ってるか？」

聖戦。その言葉はスクールに通う者なら一度は歴史の授業で習うものである。

「はい、アルセウス教とスウセルア教との戦争ですよね」

「ああ。聖戦を終わらせた契約の地……それがここだ」

聖戦を終わらせた契約の地？

「スウセルア教はアルセウス教打破の為につくりだした最終兵器があった場所だ」

スウセルア教の最終兵器……。あった、場所？

「百聞も一見にしかずってな。カンナ、頼む」

「はいはい」

カンナさんは壁の前に立ち、二つのボールを取り出して壁にある二つの丸い窪みにはめ込む。

「そのボールは……」

見たことのないボールであった。

モンスターボールでもなく、全体的に黒く、そして表面が若干で

はあるが荒い。いや、これってもしかして。

「あれはぼんぐりから出来たボールですわ」

そう告げたのはエリカさんだった。ぼんぐり……確か、モンスターボールの原型といわれている……そんなものをどうして？

すると突如として二つのぼんぐりで出来たボールは壁に吸い込まれ、壁面が揺れはじめる。

「きゃっ」

「だ、大丈夫か？」

「う、うん。ありがとう」

不安定となった足場でよろめいてきたアンズを俺は支える。アンズも体調が悪いのだろうか？　いつもなら、こんなこと……。

そして震動は二つの雄叫びのような鳴き声によって静止する。もはや絶叫に近いような甲声（かんごえ）が洞窟内に響きわたった。

「これで鍵穴は開かれたな」

ダイゴさんはどこかにポケナビをかける。こんなところまで電波が届くかは謎だが、誰かに連絡をとっているのだろう。俺はアンズの肩に手を添えたまま、様々な思考を巡らせる。

一体さっきのはなんだったのか。あのボールにもしポケモンが入っていたのなら、どうなったのか。ここはどういった用途でつくられたものなのか。疑問は残る。

「ナツメさん、ここはどういったところなんですか？」
「ダイゴの話、聞いてなかったの？」
「いや、まあ大体は。でも実際になにがというのは……」
「そう……。カンナ」

普段のナツメさんの顔からは表情が汲み取れない。どこか儚げな感じはするんだが、だからといってそれだけではなにも計れない。

「あん？」
「説明、してあげて」
「エリカ、パス」

カンナさんは面倒くさいのかどうなのか、自分に振られたものをエリカさんへと渡し……

「カスミさん、お願いできます？」
「え、わ、私ですか？」

年功序列なのかどうなのか、このまま行くとアンズへと振られかけないがカスミさんはそんなことはしなかった。

「ここはね昔スウセルア教のつくりだした最終兵器であるポケモンが開発されたところなの」

は？

そのとき俺は、カスミさんが何を言っているのかわからなかった。ポケモンを開発？

「か、開発って……」

「スウセルア教は科学の力に長けていた。ならばポケモンも人間も苦しまずに戦争の戦況を変えようとして開発していたのがこの洞窟の主であるレジギガスなの」

スウセルア教……それは人とポケモンがよりよい人生を過ごすための向上を常にやめないこと。それがポケモンの開発だって言いたいのか？　そんな昔からこんなたいそれたことを考えていたのか？

「レジプロジェクトと今の私たちは言っているけれど、昔は神殺しと呼ばれていたみたい。ただレジギガスをつくったはいいけど、レジギガスは単体では動くことはなかった」

「え？」

「あまりにも一撃の火力に念頭を置きすぎたせいで、最初の初期動力……つまりスイッチね。それが足りなかった」

「スイッチ……」

「レジギガスは稼動すればするほどに体内における力を増幅させる。でもそれには時間がかかるの。だからスウセルア教はホウエンからシンオウまでの長い距離を使って、レジギガスを投入したの」

「もしかして、敵地に着くころにはフルパワーになっているようにですか？」

「そのとおり」

さすがにわからなくなってきた。

「はじめての取り組みだったからかはわからないのだけど、スウセルア教は三体の新たなるポケモンを完成させた。それがレジロック、レジアイス、レジスチルとされているレジギガスのスイッチよ」

カスミさんの語っていることは恐らく事実なのだろう、だったらこんな場所が存在するわけがない。

「この三体がつくられた理由ははっきりとしているけれど、なぜそれら三体なのかはわからない。でも今から私たちはそのレジ系の三体を回収にしにいかないといけない」
「え？」
回収？
「それぞれのレジ系が封印されている扉を開ける鍵穴、そこがここ御触れの石室なの」
連絡を取り終えたダイゴさんと目線のあった俺は、彼の微笑みを見てなにか嫌な戦慄を覚える。
この人は一体、なにをしようとしているんだ？

第十九章：聖戦が残し産物　Ⅰ：御触れの石室（後書き）

レジ系については次話でももう少し掘り下げていきます。

ルカ「点字とかって読めないや；；」

そうだね、チャート片手に解読したのはいい思い出だよw

それではまた次話お会いいたしましょう。

ルカ「ではでは～」

第十九章：聖戦が残し産物　ＩＩ：孤島の横穴（前書き）

えっと、ちょっと時間がかかってしまいましたが更新です。

まだ夏休みなのにリアルの方が忙しくて慌ただしいんです；；；　まあそんなことは皆様には関係ないので、更新頑張ります。

ルカ「楽しんでいってね～」

第十九章：聖戦が残し産物　ＩＩ：孤島の横穴

御触れの石室：

「レジギガスは今、シンオウ地方のキッサキ神殿に封印されている」

ダイゴさんが得意げな笑みを浮かべて俺の方へと振り返る。

「それがシンオウの契約での地だ。スウセルア教はアルセウス教にレジギガスを渡し、他のレジ三体をホウエンの各地に封印することで聖戦に終止符を打つ形となった」

だったら今更その封印を解いてレジ三体を回収しに行くっていうのは……。

いや、それよりも

「聞いている限りだとスウセルア教のほうが優勢に聞こえるんですが」

「ああ、そうだな」

そう、もしスウセルア教がわざわざ最終兵器であるレジギガスを敵陣に渡したということが納得いかない。劣勢である側になぜ？

「だがアルセウス教にも切り札はあった」

「え？」

アルセウス教側の切り札……。

「神の鉄槌だ」
「神の鉄槌……？」
実際にアルセウスが出てきたということなのだろうか？
「三獣神であるユクシー、エムリット、アグノムだ」
確か、その三匹は……アルセウス教を代表するモチーフとなっているはずのポケモンだ。
「実在が確認されている彼らはその三獣神を使って聖戦を掌握しようとした」
「どういう……」
いくらなんでもたった三匹のポケモンでそんなことが可能なのだろうか？　いや、レジギガスの話を聞く限り一体でも戦況は変わるのだ……ありえない話ではない。
「ユクシーの能力を使った記憶消去、エムリットを用いた感情コントロール、そしてアグノムを使った人心掌握による完全なる人間兵器の量産だ」
なっ……。
「昔の連中の考えることはえげつないだろ？　それをしかも味方側に行使したのがアルセウス教だ」
信じられない。そんな、非人道的なことが許されるはずが……。
「昔ならありえる。だからこそスウセルア教は対抗すべくしてレジ

ギガスを開発した。迷いなく敵を殲滅できるような兵器をな」

聖戦……その言葉の響きがこんな過去を隠し通す為の隠語だったとは思いもしなかった。

「でも、だったらなんで今レジギガスを……」

「言っただろう？　俺達に足りないのは勢力だ。それを補うのにレジギガスの他にはいない」

確かにそのとおりだ。そのとおりだが、なにかが違う気がする。

俺達がレジギガスを使ってしまっていいのか？

「ちょっと、ダイゴ！？」

「どうしたカンナ」

突如としてカンナさんが怒号をあげる。明らかに焦燥を漂わせている。

「レジロックとレジスチルがロケット団に奪取されたってマサキが！」

「なに！？」

な、なんだ？

「そんな、さっき封印を解いたばかりなのに！」

カスミさんまでもが取り乱し始める。

「ど、どうなって……」

俺には何が起こっているのかわからなかったが、察しはついた。もしかしたらロケット団に先を越されたのか？

「泳がされていた……。ならば、今までことがスムーズに運んでいた理由付けとなる……」

ナツメさんのその言葉に俺は気がつく。そう、少なくとも俺の行動は相手に見張られているのだ。なのになにも成されなかったのには訳があるはずなのだ。

なのに……。

「急いでここから出るぞ！」

ダイゴさんの先導で俺達は急いで御触れの石室から退却する。

「サトシくん、俺だ……レジアイスのほうを頼めるか？　そしたら連絡をくれ、合流しよう」

俺はダイゴさんのやり取りを片耳で聞きながら、アンズのそばについていた。カンナさんが殿（しんがり）をつとめている、というよりも走るのが苦手なナツメさんを引っ張っているために必然的に他より遅れてしまっているのだ。

「お前、自分で努力すること覚えろ！」

「カンナ……これからもよろしく……」

「ちっ！」

エリカさんがここの最深部へと来るときに辿っていたルートに【

宿り木の種】を撒いていてくれたおかげで俺達は難無く洞窟の入り口までへと戻ることができた。

「今まで干渉がなかったのは俺達がここまでやってくることを見越していたってことだ。くそっ、とんだ失態だ」

ぼそっとそう呟くダイゴさんを俺は見逃しはしなかった。悔しそうな、それでいて怒っているようなその声を俺は初めて聞いた。まさかここまでダイゴさんが感情を露にするなんて……。

「よし、来るときと一緒だ！　カスミ、カンナ、頼むぞ」
「はい！」
「了解」

出てきた水ポケモンたちに俺達は掴まりながら順次【ダイビング】で抜け出していく。

「よし、わかった。引き続き調査のほう頼んだぞ」

潜り際、ダイゴさんがそうポケナビに語りかけるのを見て俺はそれがミツルさんあてのものなのだろうと予測した。言っちゃ悪いが、ミツルさんは良い人なんだけどいかんせん影が薄い……。

そういえばミツルさんも別行動だったなぁ。

「行くよケンくん！」
「ああ、行くぞアンズ」

１０５番水道：

ここが、レジアイスのいる場所なんだろうか？

俺はアンズと、カスミさんと一緒に孤島の横穴へとやってきていた。

ダイゴさんと他の面々はレジロックとレジスチルの方へと赴くと言って、別れたばかりだ。予定通りに行けば、すでにサトシさんが中にいるはずだ。

俺達の仕事はサトシさんが無事に任務を終えて出てくるまで邪魔が来ないようにするためだ。

「大丈夫かな、サトシ……」

カスミさんはやっぱり心配なのだろう。中にいるであろうサトシさんの安否を気にしている。任務とはいえここ暫く会っていないのだ、気になるのも仕方がない。

「大丈夫ですよカスミさん、サトシさんならきっと」

「うん、そうだね。ありがとうアンズちゃん」

カスミさんとアンズが仲良くしている様を俺は傍目に捉えながら、周辺への警戒を怠らない。

孤島の横穴……こんなところにあるとは思っていなかった。ほかの場所が陸続きであるから、ロケット団の魔の手からは逃れられたのだろうか？　それともサトシさんがすでに始末した後なのか……。

「でも、私が言うのもなんだけど……」

くすっと悪戯っぽい笑みを浮かべたカスミさんは俺達二人を見たまま、

「なんだか妬けるなぁ、二人を見てると」

「「え？」」

俺とアンズの声は重なり、同調する。そして、お互いの視線も……。

な、なんで俺こんなに顔が熱くって……

「も、もう、カスミさん！」

「えへへ」

アンズがカスミさんへとちょっかいを出されたことに反撃しに行くが、二人の仲睦まじさに俺の方が嫉妬してしまいそうになる。

……なに考えてんだ、俺？

「あ、カスミ！」

そんなこんなで三人で過ごしていると、突如として背後から聞こえてくる声があった。

振り返ると、それはサトシさんであった。

「サトシ！」

俺達の前だということも忘れて、いや忘れるほどにカスミさんは待ち望んでいたのだろう。お互いに抱き合い、カスミさんの瞳は潤いをふくんでいた。

ってか、いつのまにこんなに二人は進んでたんだ？　いや、こんなことを考えるのも無粋か？

と同意を求めるようにアンズへと視線を移すと、アンズは両頬を染めていた。

「アンズ？」

「え？　あ、う、ううん、いいなぁなんて思ってないから！」

「は？」

「な、なんでもない！！」

あわてふためくアンズをよそに、サトシさんは一言二言交わした

後俺の方へと歩み寄ってきた。
「お疲れ様です」
「ううん、案外そうでもないさ。それよりこれから僕はシンオウへと行かなきゃいけない」
「え？　まさか、レジギガスを？」
「そういうこと」
ダイゴさんはサトシさんにワンマンプレーをさせる気なんだろうか？
いや、まあ俺がついていったところで何も変わらないというか……逆に足でまといか？
「大変じゃありませんか？　前までカントーに行っていたのに」
「うーん、そうだね。でもカントーへ行ったのは僕のわがままだからね」
以前サトシさんに口調について言及したことがあるが、今考えると差し出がましいことしたな……。
「でもここからシンオウまでって……」
「心配には及ばないよ。それに僕にしかできないことは僕がやらなきゃいけない」
そんな風に言われたら俺は何も言い返せない。
「あ、そういえば」
サトシさんは思い出したかのようにしてジャケットの裏へと手を

入れる。

「それって……」

「そう、ヒートバッジだ」

な、なんでそれをサトシさんが？　だって俺達がフエンシティへ行ったときにはジムリーダーのアスナさんすらいなかったのに……。

「これはね、ルカちゃんから預かってきたものなんだ」

え？

「サトシさん、なんて？」

「カントーで偶然ルカちゃんに会ってね、ケンくんにこれを渡してくれって頼まれたんだ」

サトシさんは何を言ってるんだ？　だってルカは……母さんの実家にいるはずじゃ……。

「なんでルカがこれを？」

「詳しいことはルカちゃんに聞いた方がいいかもね」

放心状態の俺の手のひらにヒートバッジが乗せられる。

俺はそれを眺めながら、ぎゅっとバッジを手に握りしめる。

「あいつ……あの、バカっ！」

あの野郎、ホウエンまでやってきて……。それにこれを手に入れることがどんなに危険なことなのかを俺は直感でわかることができ

た。

あのばかやろう。ばかやろう、ばかやろう、ばかやろう！！！

「ケンくん」

アンズが俺が握り締めた拳をぎゅっと手にとって包んでくれる。

「ルカ……」

俺の呟きに、サトシさんは肩へと手を置いてくれた。

「帰りたいかい？」

「……いいえ、あいつは今カントーにいる。それだけさえわかれば十分です」

ヒートバッジを再度確認して、

「あいつはずっとまっててくれますから。そんなことあいつは自覚してないかもしれないけど」

あいつは、ルカはそんな奴だ。

きっといろいろ悩んでも、結局は自分に一番正しいことをやってのけている。そんな奴だから、俺はあいつを信じることができる。

突拍子過ぎて、ヒヤヒヤさせられるけどな。

「ありがとうございます、サトシさん」

「ううん。それじゃ、行ってくる。カスミ、二人を頼んだよ」

サトシさんがカスミさんへと目配りして、カスミさんは胸に手を当ててみせる。

「任せて。それよりも、サトシも気を付けて」

「ああ、行ってくる」

サトシさんはリザードンをボールから出して、そのまま天高く空へと飛び立った。

「それじゃ私たちも」

「「はい」」

俺達はこのあと、マグマ団のトップと会わなければならない。次の作戦の為に。

「ありがとな、アンズ」

「ううん、妹さんの為にも頑張ろうね」

「ああ」

俺の手を包み込んでくれていたアンズの両手を俺はぎゅっと握り返し、そのままカスミさんの後を追う。

一刻も早く、俺はルカや母さんの待つハナダシティへと戻るのだ。いつもの日常を取り戻す為に、俺は……。

第十九章：聖戦が残し産物　ＩＩ：孤島の横穴（後書き）

さて今回は久しぶりにケンとルカのからみ？　というかサトシ越しですが接点を合わせてみました。

ルカ「お兄ちゃんに会ったら、ゲンコツくらいそう；；」

再会出来る日が来るといいね。

ルカ「なにそれ……」

いえいえ、それでは次の更新をお楽しみに！

ルカ「じゃーね～」

第十九章：聖戦が残し産物　ＩＩＩ：契約

煙突山：

「俺を待たせるとは良い度胸だな？」

マツブサは猛禽のような鋭い視線を俺たちに向ける。

マグマ団を率いていたマツブサは昔ダイゴさんによる妨害で壊滅的被害を受けた。今まではアジトでひっそりと復活を狙っていたところにダイゴさんからの誘いがあったわけだ。

念願の紅色の珠を手に入れ、マツブサは表面上ではあるが協力をすることとなった。そしてアクア団のアオギリもである。

ダイゴさんの命で俺とアンズ、そしてカスミさんは彼らとの待ち合わせである煙突山までやってきたというわけだ。

「……」

体裁だけでも協力関係にはあるが、お互いを信頼したわけではない。

俺はだんまりを通して、軽い会釈だけをする。

「ふん、まあいい。それよりも俺たちはどうすればいいんだ？　グラードンは目覚めさせたがいまだ仮死状態だ」

復活させて仮死状態にさせた？　グラードン特化の研究において

は頼れるのは文献ではなくマグマ団だとダイゴさんは踏んだのだろうか？

「あなた方の判断に任せます」

「なに？」

カスミさんがダイゴさんからの言伝をマツブサに伝える。

「グラードンはあなた方に委ねます。陸地を増やすも良し、ロケット団を殲滅するも良し、アクア団をつぶすも良しです」

「……くっくっく、読めない男だなぁダイゴというやつは」

いくらなんでもそれはないだろう……と俺は思うが、マツブサは愉快そうに笑い声をあげる。

「マツブサ様？」

部下であるマグマ団の一員がマツブサに駆け寄る。

「いいだろう。それは今ここでお前たちをつぶしてもいいということだよな？」

天を仰ぐマツブサの片目が俺たち三人を睨み付けながら、見下す。

「っ！」

俺はアンズを守るようにして立ちはだかるが、マツブサはそんな俺を一瞥して豪快に笑いだす。

「くっくっく、まあいい。心得たとダイゴに伝えておくんだな。行

くぞ、お前達」
「「はっ！！」」
複数人の部下を連れてマツブサは煙突山頂上から下りていく。
「いいんですか、カスミさん？」
「……ええ」
アンズがカスミさんを見上げながら心配そうな表情を浮かべるが、カスミさんは毅然としたままマツブサが消えるのを見送っていた。
「あいつ、本気だった」
「う、うん」
マツブサは本気で俺たちをやる気でいた。何が奴の気を変えたかはわからない……でも、あのままにしておいていいのだろうか？いったいダイゴさんは何を考えている？
「私たちも行きましょうか」
「え？　あ、はい」
「はい」
カスミさんの言うとおりに従い、俺たちは次の目的地へと急ぐ。
なぜこのような回りくどいやり方をとっているのか？　それはGPSによる位置特定を避けるためである。俺の不手際によってポケッチの電源を消さなかったために、ダイゴさんの作戦には狂いが生じた。
しかしそのことについてダイゴさんも、他の人も言及してこなか

った。それはダイゴさんのミスであるからと、くくってしまったのだ。

だから俺は精一杯働かなければならない。とがめられることはなくても、俺の責任であることに変わりないのだ。

「ダイゴさん達との待ち合わせ場所は？」

「キナギタウンよ」

そういえばアクア団のアオギリへと会いに行ったエリカさん達はもうキナギへと着いているのだろうか？　俺たち三人はサトシさんとの合流で時間を費やしたため、もう日も傾きはじめていた。

「キナギにつくころには夜になりそうですね」

「そうね。どうせなら下山してフエンの温泉にでもつかりたいところだけど」

「またみんなで来ましょう！」

アンズがそう言って流れ始めている陰気なムードを払しょくしてくれる。

「そうだな、またみんなで……」

俺は取り戻すんだ。ルカや母さんとまた一緒にいつものハナダシティでの日常を……。

心のどこかでそれが絶対に叶わない幻想だと知っていたんだ。そう信じなければ自分自身の心が音をたてて壊れてしまうことを。

「あのカスミさん」

「なに？」

こんな不安を抱いてしまうのは、俺が完璧に皆のことを信じていないからだろう。信じたいのに信じられない。

仲間の内でもなにか闇があり、真相を隠してしまっている。そう、ダイゴさんはそういう男だ。だから今なら、カスミさんになら何か尋ねられるかもしれない。そう、ポケナビについてだ。

あの日、サカキに知れてしまった俺のポケナビの番号。それをダイゴさんに報告しても、ダイゴさんはそのままにしておけといっていた。その時はダイゴさんが前に話していた妨害プログラムを信用していた。

だが今、御触れの石室でロケット団にこちらの動きが掌握されていたとなっては……例え全ての非が俺にないとはいえ俺のミスだ。

「ちょっと聞きたいことがあるんですけど」

「いいよ、私に答えられるなら」

「実は……」

問いかけようとして、俺は口を紡ぐ。

もしダイゴさんが俺に何かを隠し、それをカスミさんが知っていたとしたら単刀直入に聴くのは……。

「カスミさんはポケナビに振り当てられた番号については知っているんですか？」

「ケンくんのは何番だっけ？」

「7です」

「そっか。ごめんね、実は私も知らないんだ」

カスミさんは何かを知っている。

知っていないならば俺の番号なんて聴くはずもない。だが、会話はこのまま続けなければならない。

「俺のポケナビが逆探知されていて、これは破棄した方がいいんじゃないですか？」

「うーん、そうだね。でもきっとダイゴさんはケンくんのポケナビを囮として使うことも考えているかもしれない。ちょっとひどいかもしれないけど、ダイゴさんならそう考えているかもしれない」

だろうな。

そう、ポケナビを俺が未だに持たされている理由はそこにあると考えていた。それだと合点がいく。いくんだが……一つのわだかまりが俺の中から抜けない。

ダイゴさんは侮りがたい。だからこそ、こんな単調な考えでかたづけて自分を納得させていいのかってことだ。

「そろそろ行きましょうか」

「あ、はい！」

俺とカスミさんはアンズが先に用意してくれた三匹のペリッパーに捕まり、キナギへと急いだ。

上空へと飛び立ち、煙突山を見下ろす標高に至った時……俺はなにか紅く光るものをみた気がした……。

キナギタウン：

例の民宿に着くと、そこには予想だにしていない人がいた。マサキさんである。

「よぉケンくんやないか。えろう頑張っとるな」

「あ、ども」

カタカタとノートパソコンをいじっているマサキさんに軽く会釈した後、先に到着していたエリカさんに事情を伺う。

「あの、エリカさん」

「私達あお連れしましたの」

「あ、そうなんですか」
「ええ、ですから私達もたった今到着しましたのよ」
そうだったのか。しかしマサキさんまでここに来てるってことは本格的に……。
「なんだか急に降り始めてきたな」
言いながら民宿のロビーに入ってきたのはダイゴさんだった。その後ろにはミツルさんがぴったりとついていた。
「そうですね」
一体今から何を話し合うというのだろうか。
「皆集まってるな。それでは次の作戦に移行する」
ダイゴさんの一声で俺達は別室へと移動し、小さなホールへと場所を変える。
「マツブサとアオギリへの交渉ご苦労だった。奴らが取る行動は早々にわかる、今降り出した雨がその合図だ」
合図？
なんの合図だと言うんだ？
「そしてサトシくんがシンオウへと出発した。恐らく明後日までにはレジギガスを連れて戻ってくる」

明後日って、早すぎないか？　いや、サトシさんならありえるのか……。

「サトシくんが戻ってくる間、俺達は空の柱の攻略に移る」

空の柱って……。確か古代に造られた建造物で、雲を突き抜ける程の高さのやつか。だがなんであそこに？　あそこにはなにもないってホウエンリーグ協会調査団が記していたはず。

その時のホウエンリーグ協会のトップは……！？

「空の柱にて俺達はレックウザの捕獲に専念する。その為には全員に協力してもらう必要がある」

だから全員がここに集結するというのか。でもマサキさんは？

「わいはレックウザのデータを取る為に一緒に行かせてもらうで」

そういうことか。

しかしレックウザ、聞いたことのないポケモンだ。グラードンとカイオーガについては古伝で名前だけは知っているが、実際どんなポケモンなのかは知る由もない。

でもこんなメンツで挑まなければ負けてしまうほどにレックウザというポケモンは強敵なのだろうか。いや、そうなんだろうな。

「出発は明朝。霧に紛れて出発する」

確かにそれなら人目を凌げる。

「質問、いい？」

カンナさんが腕組みをしながらダイゴさんを睨みつける。というかいつもカンナさんはあんな目付きをしているな。疲れないのか？

「ああ、どうしたカンナ？」

「私らにマグマ団とアクア団にあんなこと言わせたのはグラードンとカイオーガを復活させること。そして暴れさせるつもりね……」

暴れさせる？　なにを言ってるんだカンナさん？

だって復活させるのはさせたけど、それはロケット団を壊滅させるために。

「そうだ」

「そうだって、あんたねぇ！　このホウエンを潰す気でいるっていうの！？」

カンナさんはその二体のポケモンがどれほどの力を持つかを知っているんだろう。きっと俺にも想像を絶するほどなんだろう。

「そう取られても仕方はないが、言ってなかったか？　俺達の第一目標はこの国を取り戻すことだって」

「奴らを見逃してたらまた私たちのことでとやかく言われるのわかってるじゃない！」

そうだ。あのテロ行為もダイゴさん達のせいにされた。なら今回も同じことが起きるだろう。

「言われたら言われたでいい。お前たちは俺の言った通りに動いてもらう……それは契約した時交わしたことだ」

俺はそこで言葉を失った。

ここにきて発せられるこの人たちの繋がりだ。契約、だって？

ダイゴさんがその言葉を口にした時点で、他の人たちは押し黙ってしまった。

一体、なんだっていうんだ？

この人達はなにがあってダイゴさんについてきたっていうんだ？

第十九章：聖戦が残し産物　ＩＩＩ：契約（後書き）

次号、衝撃の――！！

ルカ「前書きなかったね」

うん。思いつかなかったというか、まあ次話で今話のグダグダ感を挽回しようと思ってるからね。

ルカ「それじゃ、またねー」

では！

第十九章：聖戦が残し産物　Ⅳ：烈空の覇者

空の柱：

「これで任務終了だ。ご苦労だった皆」

ダイゴさんだけが一人、空の柱頂上で俺達を見下ろしながら右手にボールを握っていた。その中にはさっきまで死闘を繰り広げ、やっと手に入れた烈空の覇者であるレックウザが入っている。

マサキさんを含む俺達８人は地べたに這いつくばっていた。それはレックウザとのバトルで体力を消耗しただけではない……。目の前のダイゴさんによってひれ伏させられたのだ。

「今をもってお前たちとの契約も終了だ。後は自由にこの腐った世界で生きていくがいい」

何を、言って。くっ、体が動かない。

ダイゴさんのメタグロスが繰り出した【重力】が俺達も、ポケモン達をの自由をねじ伏せているのだ。

右頬に伝わってくる床石の感触が妙にひんやりとしていて、それが俺の恐怖心を駆り立てる。それと共に嫌な考えが脳内をめぐっては、どんどんと悪い方へと加速していく。

「まあ心配するな。すぐにまた改変が始まる」

「ダイゴ……何を言って……ぐっ」

カンナさんが自力で立ち上がろうとするもせいぜい腕が上がるくらいで、すぐに地面へと押し戻されてしまう。

なんで、なんでこんなことに！

「レジギガスにレックウザ。この二体がいれさえすれば俺はこの国を取り戻せる」

名の知れたジムリーダー四人に四天王一人、そして熟練ポケモントレーナーのミツルさんに元ホウエンチャンピオンだった人物が一丸となってやっと衰弱させることのできたレックウザ。野生であるがゆえの乱暴な力の使い方に翻弄はされたものの、統率のされた俺達の攻撃の前でどうにか攻略できたのだ。

そんなポケモンがダイゴさんの手に渡り、もし彼が言うことを実行しようものなら対抗できる人物などいるわけがない。あのサトシさんだって危うくなる。

「ぐぅ……うぅぅ」

「だ、だいじょぶか、アンズ」

「ぅ、うん、大丈夫」

アンズは苦しそうに顔を歪め、俺の方へと必死に手をのばそうとするがそれをダイゴさんのハッサムによって遮られる。

「くぁっ！」

「なっ！」

メタグロスのアンズにかかっている【重力】だけが解除されたのか、ハッサムは右手の鋏でアンズの手首をつかみあげる。

「アンズ！」

【重力】という技は広範囲のものである。それゆえの効力なのだが、ダイゴさんはそれを特定してコントロールし、ポケモンに制御させることができる。それだけで実力が顕著に現れるんだ。

だがなぜダイゴさんはアンズを？　離せ、離せよ！

「まずは裏切り者に制裁を加えなければな」

「え？」

苦悶に表情を歪めるアンズにダイゴさんは歩み寄り、彼女の襟を掴む。

「さすがは忍だけのことはあるな。親子揃っていろいろとやってくれる」

「ぐっ、そんな」

アンズがなにをしたって言うんだよ！

「お前たちも騙されていたみたいだから言っておこう。アンズはサカキからの刺客だ」

なっ……。

は？

アンズの髪が無造作に揺れる。ダイゴさんのアンズを掴む拳に力が入っているんだ。

「こいつのせいでいろいろと支障は来したが、まあなんとかなるだろう」
「ダ、ダイゴさん、わ、私……」
「黙れ」
「くは！」

アンズは容赦なくダイゴさんに頬をひっぱたかれる。

「アンズ！　ア、アンズを離せ！」

俺は思いっきり声を出して叫ぶが、ダイゴさんからの冷たい視線に俺の腹は急速に冷えていく。

なんなんだ？　誰なんだこの人は？　これが俺の知っているダイゴという人物なのか？

「な、なんでですかダイゴさん！」

この中で一番ショックを受けているのはミツルさんだろう。俺の見た限りでは、ミツルさんが一番ダイゴさんの傍にいた。いつ、いかなる時にでもだ。

「ミツルか。お前は良く働いてくれた。せめてもの情けに、お前だけは生かしといてやる。ハッサム、やれ」
「ハッサム！」

赤い鋼鉄で体を覆うストライクの進化系は、その左手をミツルの頭部へと振り下ろす。ガツンという音と共にミツルさんの頭部は床へと叩きつけられ、彼の意識は奪い去られる。

これで他の全員に、ダイゴが本気であるということが確実に明白となった。

「な、なんでや、なんでなんやダイゴはん……」

ダイゴさんは、マサキさんを一瞥し何も言わないままアンズの方へと向き直る。

「おかしいとは思ってはいたがな。泳がせておいて正解だったか？」

「くっ……」

なんで？　なんでだ？　なんでアンズがサカキの手の者だって……。

「困惑しているみたいだなケン。ならば教えてやる」

ダイゴさんが俺を見下しながら淡々とアンズを疑うに至った行動を列挙していく。

「トクサネでのサカキからの通信、あれは起こるはずのないことだった。ケン、お前のポケナビはダミーナンバーじゃなかったってことだ」

「でも、それだけじゃ！」

「ああ、そのとおりだ。これだけじゃアンズを疑う要因にはならない」

「なら！」

俺はずっとアンズと一緒にいた。アンズがなにか怪しい行動にでたとこなんて、見たこともない。

「俺達が一緒に行動する時、必ずロケット団からの接触があった。それは御触れの石室でもそうだった」
「そんな」
「だから俺はアンズをお前と組ませた。アンズが下手に動けるようにしながらな」
「な、に？」

もしアンズを疑っていたのなら手元に置いて監視をすることができる。なのになんで何も知らないような俺と組ませたんだ？

ま、まさか……。

「そうだ、情報源が皆無なお前といてアンズが何かをサカキへと報告することはできない。もどかしかったんじゃないか、アンズ？」
「くっ」

悔しそうに眉を曲げるアンズに容赦ないダイゴさんの腕力が加わっていく。

「アンズちゃんを放して！　放しなさい！！」

カスミさんが視線を合わせられずに叫んでも、それはダイゴさんには届かない。

「のちのちの為にお前たちも始末しておいてやるから安心しろ。ハッサム」

ハッサムの両腕が銀色に輝き始める。あ、あれは……。

ダイゴさんはアンズを放り投げ、その先に構えているのは技を繰り出そうとしているハッサムの姿が。

「や、やめろぉ！」

「俺に歯向かった報いだ」

ハッサムの両手はアンズの頭部へと狙いを定め、ものの数秒でアンズの脳天はかちわられてしまう。

「アンズ！」

「アンズちゃん！！」

鈍い音が鼓膜を震わせる。

「間に合ったかな」

「戻ったか、サトシくん」

「これはどういうことですか、ダイゴさん」

「なに、最初から今まで全て予定通りだよ」

現れたのは【アイアンテール】でハッサムの【ブレイククロー】を防ぎきったサトシさんのピカチュウだった。

「さあサトシくん、レジギガスを渡してもらおうか」

「渡すとでも思っているんですか？」

「ああ、思うね。なにせ」

ダイゴさんが指を鳴らし、それを合図にカスミさんの絶叫が響きわたる。

「カスミ！　やめろ！！」

カスミさんの顔は俺からは後部しか見えないが、それが沈んではならないほどに床へとめり込んでいた。このままじゃ、カスミさんは……。

「ならばレジギガスを渡すんだ。また親友を失ってもいいのかい、サトシくん？」

「くっ！」

「あ〝あ〝あああぁぁぁぁ」

耳を塞ぎたくなるような壊音に、サトシさんはレジギガスの入ったボールをダイゴさんに投擲することで止ませる。

「ご苦労だった。それでは、さよならだ諸君」

そして次の瞬間、ダイゴさんは目の前から消えた。恐らくテレポートだろう……。急激に体を圧迫していた不可視な力が消え去り、俺達は解放される。

「ア、アンズ！」

「くぁ、こほっ、かはっ」

俺は地を這い蹲りながらアンズのもとへと寄って、彼女を介抱する。

「大丈夫か？」

「ぅ、うん、ありがとうケンくん」

俺には信じられない。アンズが、アンズがサカキの送り込んだ刺客だということが。

だって、だって、そうだとしたら俺がアンズに抱いていた感情はどうなっちまうんだ？　消えるのか？　それとも俺の心の奥底でへばりついたまま落ちなくなるのか？　わからないんだ。

「カスミ？　カスミ！」

頭部を圧迫された為だろうか？　脳への酸素が行かずに軽い失神状態に陥っている。

ナツメさんをカンナさんが抱き起こし、エリカさんは自力で座り上がる。ミツルさんは未だに昏睡状態におり、マサキさんに至っては持ち込んでいたレックウザのデータをそのままダイゴさんに奪われてしまった。

「ケンくん」
「サトシさん……。カスミさんは？」
「ああ、気を失っているだけだ。それよりも、何が起こったのか教えてくれないか？」
「え？」
「何が起こったか、教えてくれ」

とても落ち着いた表情でサトシさんは俺を直視する。

この人は、強いんだな。そう直感した。

俺はアンズを抱えながら、ゆっくりと語りだす。ここで何が起こったのかを、そしてレックウザとの戦いがどれほどのものであったのかを。

カンナさんとカスミさんがレックウザの尾を凍らせて対空でのバランスをなくさせる。エリカさんが状態異常の技でレックウザを翻弄させ、ナツメさんが体力を消耗させる。ミツルさんとダイゴさんが主力となり正面からレックウザを押さえ込み、俺とアンズとで側面から攻め込む。

それでやっとこさ勝ち取ったのだ、勝利を。少なくとも３０匹以上いたポケモン達を相手にレックウザは対抗し、こちらの戦力を大幅に削った。

俺のポケモンもニューラを残してはほとんどが瀕死状態になった。

そしてやっと一息つけるかと思った途端に、ダイゴさんが反旗を翻したのだ。彼が最初からこのつもりでいたのか、そうでなかったのかはわからない。

でも、結果的にダイゴさんは俺達を利用したんだ。

くそっ！　くそっ！！

「わかった、ありがとうケンくん。それじゃ僕はいくよ」
「え？　ど、どこに行くんですか！？」
「ダイゴさん……いや、ダイゴをぶっ潰しにさ」
「え？」

サトシさんはカスミさんの頬を愛でて、そしてすくっと立ち上がる。

全員の視線がサトシさんに集まり、史上最強のトレーナーは声を張った。

「これから、きっと大規模な戦闘が起こると思います。そしてそれはきっと各地にも被害が及ぶでしょう……」

そしてここからサトシさんが俺達に言い渡す。

「皆さんにはここホウエンで事態の縮小に専念してもらいたい。アクア団とマグマ団を止めてください」

空の柱であるからそんなにも感じなかったが、ここへ来る途中はずっと天気雨だった。そして度々に天気の入れ替わりが激しいのが今ならわかる。

「僕はダイゴを止めにいきます」

サトシさんはリザードンに跨り、そしてそのまま空へと飛び立った。

こうして俺達は取り残されてしまった。

それぞれの心に深い傷を負って、俺たちは世界から取り残されてしまったのだ。

第十九章：聖戦が残し産物　ＩＶ：烈空の覇者（後書き）

台風の影響で外出できない＞＜

ルカ「すごかったねぇ」

それとこの話、実は投稿していたと思っていたら実行を押していなかったというオチ；；；

ルカ「ちょっ」

なはは；；；　ま、まあとにかく無事更新です！

第十九章：聖戦が残し産物　「裏」：整いたる舞台（前書き）

久しぶりの裏ということで、今回スポットをあてたのはいつもどおりの面々です。

ルカ「そして久しぶりの前書き」

そうだねw　ぶっちゃけ前書きがいるのかどうかもあやしいですが今までの癖なのでやらせていただきます。

ルカ「報告は？」

遅れてしまい申し訳ありません！！

第十九章：聖戦が残し産物　「裏」：整いたる舞台

ヤマブキシティ：

ヤマブキシティにそびえるシルフカンパニーの建物はもはやこの街、いや国の象徴として君臨している。今までに国のトップが存在していなかった為に、それ専用の施設は存在しなかった。各地方に点在していた協会の上層部、つまりは四天王及びチャンピオンによって統制は取られていた。

つまり国のリーダーであるサカキがどこでなにをしていようが、彼の存在意義が今までにいらなかったために幾分かは自由に動けるのだ。それこそ彼が突然のクーデターないし制圧に乗り出した要因の一つともなっている。

「レジギガスが奪取されたもようです」
「そうか……。裏の裏をかかれたというわけか？」

サカキは表情を何一つ変えず、ただじっと自室の社長室からヤマブキシティ全体を見下ろしていた。

いつぞやケンに電話をかけた時とはうって変わって……。

「この私がこの座から降りることはこれより3年間はありえない」
「は、はぁ」

一人語りだすサカキを、後ろに控えている秘書が戸惑いながら相槌をうちはじめる。

「ただ、これからの戦いでロケット団の戦力の大半を失うことは覚悟しなければならないな」
「そうなのですか？」

サカキは全てを達観しているのはもはや言うまでもないだろう。だがどこまでを彼が掌握しているのかは依然闇の中だ。

「ミュウツーの調整はどうなっている？」
「はい、ただいまチイラの実による投与を行なっています」
「そうか、やっとか」
「オーキド博士によりますと、そろそろかと」
「なら間に合いそうだな」
「はい？」

何に間に合うのか？　それを秘書はわからずにいた。だがサカキの部屋にいるもう一人の女性は笑みを携えながらソファから立ち上がる。

「あの娘達も間に合いそうなのですか？」
「気になるか？」
「当たり前です」
「なに、きっとレイハが守ってくれるだろう。それに面白い奴が最近接触してきたらしいからな」
「そうなのですか？」
「手塩にかけて育てた連中だ、なにもバトルに強いだけがこの世界のルールではない」

サカキは火の沈んでいくヤマブキの街を一望し、一瞬ではあるが哀愁を漂わせるため息をついた。

「さて、残るは舞台を用意することだな。ホウエンの英雄には華々しく散ってもらうことにしよう」
「これがあなたの描いたシナリオなのですか？」
「シナリオか……。ただ悲しいな、この物語には主人公もライバルも存在はしない」

サカキは自身の椅子に深く腰を下ろし、告げる。

「いるのはただ悲しく世界を見据える老いぼれだけさ」

地下、研究棟：

「やっとここまでたどり着いたの」
「やっとかや」

オーキドとリョウが見つめる培養液のタンクにはミュウツーが静かに眠っていた。

コポォ、コポォと空気の泡がてっぺんのほうまで伸びて行きは消える。

「十の種類に及ぶ木の実を調合した培養液。全能力の向上に、長時間に及ぶボール外活動も可能となったはずじゃ」
「そもそもなんでそんな制約があっただ？」
「ミュウツーの細胞は未だ完全ではない。外気に含まれる微量な公害物質のみで、細胞の崩壊がはじまってしまう」
「難儀やのぅ。そんで？　どれくらい出せられるようになっただ？」
「五分じゃのう」
「みじかっ」
「文句を言うでない。これが科学の限界じゃ」

ふぅーん、とリョウは今一度ミュウツーを見つめる。

ミュウの遺伝子をポリゴンという組織体と組み合わせ、その核となっている他のポケモン達の生命エネルギーの塊であるポケモン、ミュウツー。

そして希少な木の実を調合された培養液により、実質ミュウツーは最強のポケモンとなった。

「これでわもダイゴとか言うやっちゃに対抗できるようになったわけだが」
「強敵じゃぞ、あのダイゴという男は」
「知らん知らん。強ければいいんや。それに、わには倒さなならん

もんがいるけん」
「……そうか」
オーキドはそれ以上何も語らず、せかせかとミュウツーの状態を管理しているマシン上に指を走らせる。するとタンクに入っていたミュウツーがボールへと収容され、それがリョウの手元へと転送されてきた。
「そんじゃ、いってくーけん」
「うむ、健闘を祈る」
「別にそうはおもっとらんくせに、無理するもんじゃないけん」
「ふっ……」
リョウはミュウツーをホルダーへと装着し、そのままエレベーターの方へと姿を消したのであった。

キッサキ神殿：

「くそがくそがくそがくそが！！！」

身内だとおもっていた男に突然襲撃され、目的のレジギガスをまんまと奪われてしまったシュラカは激情を露に雄叫びをあげていた。

「先ほどの目標をロスト！　尋常ではないスピードで誰も追いつけません！」

「追いつけませんじゃねーんだよ！　維持でも捕まえろ！」

「はっ、は！！」

「くそが！」

報告にきた団員の襟首をつかみ取り、そのまま吐き捨てるようにして放り出す。

「さっきの連中はどうなった！」

「いま追跡中ですが、崩れ落ちてきた岩盤によって進路が遮断されています！」

「とっととどうにかしろ！」

「はっ！」

焦燥が焦燥を呼び、シュラカの思考能力を徐々に徐々に加速しながら奪ってゆく。

全ては完璧に進行していた。レジアイスの搬送の時も連絡はあった。その直後にサトシがレジアイスを横取りしたのである。

「ずいぶんの荒れようですねシュラカ」
「あぁん？！　誰だきさっ……！？」

配属部隊の一員にそう告げられ、シュラカは鋭い視線でその人物を睨み口淀んだ。なぜならその団員の顔が取り剥がされて、新たに現れた顔はロケット団における幹部の一人だったからである。

「バラッド……さ、ま」
「無様でしたよ、例え身内であっても味方であり信頼できる人物とは思わないことです」
「な、なぜあなたがここに……」
「八柱力である者がここへと訪れそうな気がしたのでね、ちょっと混ざっていました」

シュラカのような者では例え他地方のリーダーを任されたとしても、実力でいえば幹部達の足元にも及ばない。それほどに能力における差が歴然としているのだ。

それはつまりシュラカの下についていた面々がいきなりのバラッドの登場に困惑しているのは言うまでもない。

「それよりも、この失態はどう償っていただきましょうか？」
「ぐ、そ、それは……」
「別に上に報告するつもりはありませんが、任務の失敗が組織の中でどう処理されるかは知っていますよね？」
「それは、はい……」

サカキという絶対的指導者のもとにおける規律というもの。それはジムリーダー達が敗北をするとともに権利、及び命を奪われると同様に厳しいものである。

そう、任務の失敗はそのまま死を意味する。だからこそ彼らは常に用意周到、そして真剣であった。

だが度重なる成功の連鎖に気が緩んでしまったのか、と問われれば今回においてそれは違う。なぜならば、そう……イレギュラーが発生したからである。

サトシ。

この人物が介入することでいとも簡単に奇襲を許した。そしてその責任はシュラカにもある。なぜならば彼は彼の性格上、自分の配下における団員の顔を覚えていなかったからだ。

少数精鋭ということは連携がものをいう。だがシュラカは命令系統における力による秩序及び統制を選んでしまった。それはシュラカが尊敬しているサカキの組織の動かし方と同じだったのである。

だからこそ彼は失態を犯してしまった。そしてそれは同時にサカキのことをただ敬虔していたにすぎず、理解するには至っていなかったことを意味する。

「どんな事態が起きても、それを完璧に遂行するのが私達ロケット団です」

「くっ」

「だからリーダーを任されたあなたには責任を取ってもらうことになります」

「ぐっ……」

ロケット団の規則をシュラカは心得ている。だがその反面、ここ

で潔く殺されるのは彼の流儀には反している。そう、ここで死ねるわけがないのだ。

「バラッド様」
「はい、なんでしょう？」
「八柱力を監視、及び捕獲も我々の任務です」
「そうですね」
「あの連中をなんとしてでも捕まえて参ります」
「……いいでしょう」

まるで苦いものを強く噛み締めるようにしてシュラカは頭をバラッドに下げた。

「あなたの活躍をここで見守るとしましょう」
「では、行ってまいります。いくぞお前ら！」

シュラカは第二のチャンスをもらうとすかさず団員を率いてアユミ達の後を追い始める。

「「はっ！！」」

幾人かの戦闘要員がシュラカに続こうとして彼の後ろについていこうとする。が、しかし……

「とでも言うと思いましたか？」

突如として現れた一筋の虹色がシュラカの胸を突き刺した。

「ぐぁっ？」

シュラカが最後に視界に納めたのは自分の前方へと伸びていく七色の光線だったであろう。それは残滓をちらつかせながら消え、身内の命の灯火を奪っていった。

「任務失敗は死を意味する。それはあなたが一番わかっていただろうに……」

「シュ、シュラカ様？！」

他の面々は突然のシュラカの死に沈黙してしまう。これが、自分たちの組織における幹部という人物なのだということを再認識させられたのである。それはすなわち頭の切り替えを要求されるに等しい。

「さあ、あなたたちがどうしなければならないのかわかりますよね？」

「「はっ！！！」」

そしてそれができるのが、正規団員である彼らなのである。だからこそ、ロケット団は強い。

「さあ、楽しい狩りの始まりです」

バラッドはもうすでに見えはしないアユミ達の姿を望みながら、嬌笑に口を歪めるのであった。

第十九章：聖戦が残し産物　「裏」：整いたる舞台（後書き）

あまりもう新キャラを出したくはないというのが本音なので、シュラカさんは登場と共に退場いただくのは最初から念頭にありました。

ルカ「それにしてもバラッド怖いね」

うーん、まあこれでも自分では抑えている方なので描写は軽目にしました。

ルカ「あれで？」

まあね。というか裏ではもう一人にスポットを与えるはずが文字数的にきりがいいのでこうしました。

ルカ「次も裏？」

いや、それはもうちょっと話数挟んでからということで、では！

第十九章：聖戦が残し産物　Ｖ：打倒ダイゴ（前書き）

遅れてしまいましたことお詫びいたします。

今日でメディターは二周年を迎えることができました。これからも頑張っていきますのでよろしくお願い致します。

ルカ「はっじまるよー！」

第十九章：聖戦が残し産物　Ｖ：打倒ダイゴ

空の柱：

空は快晴。

こうやって天を仰いでいたら、心が澄み通っていくのだろう。緩やかに流動していく小さな雲の塊が、まるで天使のようになにもかもを許してくれそうで……。そして、何もかも忘れさせてくれそうで……。

「しっかりしな、ケン！」

俺を幻想の淵から生き返らせてくれたのは、カンナさんの手厳しい怒号だった。

アンズを懐に抱いたまま放心していた俺の体は彼女のぬくもりを再確認しはじめる。

そうだ、アンズっ！

「アンズ？！」

「ケン、くん……」

「大丈夫か？」

「それ、さっきも聞いてたよ」

はにかみながら、アンズは笑みを浮かべる。それが俺を安心させようとしての表情であることが痛いほどにわかってしまう。

だから俺には信じられないのだ。アンズが、敵側のスパイだったということが。また、また俺は大切な人間との絆を失ってしまうのだろうか……。

「シット！！」

カンナさんが激情を露わにして、先の戦闘にて飛び散った岩床を蹴り飛ばす。

俺の視界にいるだけでもミツルさんとカスミさんはぐったりと倒れたままであり、エリカさんがカスミさんを、マサキさんがミツルさんの看護にあたっている。

「大丈夫ですか、カスミさん？」
「うぅ、あ、エリカさん？」
「大丈夫ですよ」
「え？」

エリカさんが優しくカスミさんの頭を撫でている。

「そう、だ。サ、サトシは？　サトシはどこにいるの？」

痛みがまだ晴れないであろう頭を片手で抑えながら、きょろきょろとカスミさんはまだ完全に回復してはいないであろう視界を頼りにサトシさんを模索していた。

「サトシさんは……行ってしまわれましたよ」
「え？　どこに？」

カスミさんは虚空を眺めながら、それはサトシさんが飛び立って

いた方角を……。

「ダイゴさんを追いに、ですわ」

「ダイゴ、さん……」

恐らくサトシさんでもダイゴさんを見つけることはできないだろう。あの人は【テレポート】を使ったのだ。それがなにを意味するかは同じエスパータイプを持つ俺ならわかる。

あの人の実力を鑑みれば、当に近くにいるはずがない。

「大丈夫でっか、ミツルはん！」

「う……マサキさん？」

「どないして、こんなことに」

マサキさんは苦渋の表情を浮かべていた。それもそうだ、あの人は勝手に自宅から拉致られて賛同したとは言ってもダイゴさんに付き合わされたまま見離されたのだ。

研究者として、一技術者として一体どれほどダイゴさんに貢献したのだろうか。それは俺には計り知れない。

そういえばカスミさんやアンズから聞いたマサキさんの拉致事件にはこういった経緯があったと聞いた。最初に報道された銀行強盗の報道のさいに取り上げられた車両はアンズ達が乗っていたものだった。

カンナさん達はダイゴさんから指示された口座に資金を振り込んでいた最中に、ロケット団の強盗団と出くわしたらしい。ポケモンを使っての強奪行動に目を見張ったアンズがロケット団員を自身の

手で一掃、彼らが乗ってきたバンを乗っ取って次の任務であるマサキさんの誘拐へとことを移したらしい。

だから報道では保護されたロケット団員達が一般市民扱いされ、そのまま元々ロケット団員達が使っていたバンが反抗用のままであったが為そのままニュースで取り上げられた。

一体それがなんの口座であったのかはわからないが、今はそのことについて考えている場合ではなかった。

「ケンくん？」
「アンズ……」

俺は傍にアンズを抱きかかえたまま近くにいるのに、どこかしら距離を感じてしまう。そう、俺は一つの真偽を確かめなければならない。

カンナさんがナツメさんを抱え起こしてはいるが未だ苛立ちの念は消え去っていない。

「あのね、私……」

そして俺はわかっていたのだ。彼女の心情を。だけど、言葉にされないとわからないのだ。

でも、聞くのが怖い……。

「私はっ」
「アンズ」
「言わせて」

「ああ」

この短期間で俺とアンズは惹かれあうようにして距離がどんどん縮まっていった。それは同年代であることもあるだろうが、なにか相通じるものがあったからだろう。

それがなにかは知らないが。

「私は確かにお父上の命により、くノ一としての責務を果たしました。でも、それは一度だけ……。あなたに出会って、私はわからなくなったのです」

「アンズ。もしかして、それがアンズの悩みだったのか？」

時折アンズが見せていた影。その原因が俺にあったというのか？

「だから、だから私は逃げ出せなかった。あなたを忘れたくない、裏切りたくなかったから……。あの日から、私は……」

アンズの両目に溜まった涙が彼女の頬を伝う。揺らぐ瞳から流れ落ちる雫は愛おしく、俺はその輝きを口付けで受け止める。

「え？」

「俺もだ」

彼女の頬から唇を離し、俺はアンズをゆっくりと抱き寄せる。

「俺もアンズを忘れたくもないし、裏切りたくもない。あの日、アンズに約束した通り」

「ケンくん……」

そう、あの日。俺とアンズがトクサネシティ攻略後に赴いた送り火山で、俺はアンズを怒らせてしまった。その原因がなんであったかはまだわからないし、それはきっとアンズの口から直接聴かなければならないことだろう。

だが俺はアンズの傍にいると誓った。

それが彼女の、当時の彼女として在り方を狂わしてしまったのであれば俺はその責任を取るつもりだ。

例え彼女がなにものであっても、もしダイゴさんが言った通りのことをしたのだとしても、今の俺にとって許されないのはダイゴさんの方だ。

「今、俺達がしないといけないことはダイゴさんを止めることだ」
「うん」

カンナさんが頭をかきながら、片目を閉じたまま空を見上げ始める。そしてそれはカスミさんも感じ取ったことなのだろう。

「嫌な天気ね」
「そう、ですね」
「カスミ、あんたはもう少し休んでなさい」
「い、いえ、そうも言ってられないですよね、これ」

カスミさんが空を指さして、カンナさんは頷く。

何があるっていうんだ？　俺は釣られて空を見上げるが、快晴としか言いようがない天気にしか見えない。

「見たことないわ、こんな天気」
「はい、私もです……。レックウザがいなくなったから？」
「もしかして」
「はい、そうかもしれません」

レックウザがいなくなったから？　どういうことだ？

そんな疑問を払拭してくれるように、答えは自ずと天から降ってきた。大量の雨だ。

「なっ！？」

突如として空を曇り空が覆い始め、シャワーのような豪雨が俺達を襲う。それは疲れきった俺達の体温を冷やし、体力を削いでいく。避難するか？　と、そう思い始めた頃にまたもや異変が生じた。

一挙に雨は上がり、今度は照りつける太陽の日差しが俺達の肌を焼き殺さんとしてくる。

未だ地面で伏せっているポケモンたちも異変によって意識を戻し始めたのだろう、困惑したような表情で起き始めた。

「全員ポケモンを戻して、建物にもどるわよ！」

そう先頭をきって指示を飛ばしたカンナさんのことを、俺はその時心底頼れる人なのだということを悟ったのかもしれない。俺はニューラとキュウコンをボールへと戻し、アンズに肩を貸しながら空の柱内へと戻っていった。

空の柱内部で俺達は互いに何かを語らねばならないとわかってい

はいるのに、誰も一言として喋り出す人はいなかった。ショックの方が大きいのか、それとも頭の中で整理ができないのだろうか。

俺は身勝手ながらにもアンズを置いて、皆の前に躍り出た。

「あの、いいですか」

皆の視線が俺に集中する。

「下っ端にいる俺でも、わかります。今、俺達がしなければならないことがダイゴさんを追うことでもなく復讐することでもない……。そしてダイゴさんへと一歩近付く為にも必要なことが、この異変をまず沈めることであることも」

そう、きっとこれはマグマ団とアクア団の仕業だろう。いや、そう仕向けなければダイゴさんはレックウザが現れないことを知っていたのだ。

それにあのダイゴさんの豹変ぶりを俺達が信じるわけもない。

そりゃたしかに裏切られた、裏切られたかもしれないけど……

「そうだな。あいつの顔をぶん殴らないと私の煮えくり返った腹は静まりはしない」

氷結の女王として恐れられているカンナさんの背後からはメラメラと燃え盛る怒りのオーラが放たれていた。

「私はサトシを追う。その為のことならなんだってっ……っ」

「大丈夫ですか、カスミさん？」

カスミさんとエリカさんも異論はないみたいだ。

「僕も、ダイゴさんに聞きたいことがありますから」

ミツルさんはそう言って俺に微笑みかけてくれた。この人はいつも自分を犠牲にしているから、優しいんだろうな。きっと自分が一番ダイゴさんに尽くしていたというのに。

「わいは、下りさせてもらうわ。きっと自分らに着いていってもあしでまといになるだけや。でもできるだけのサポートはさせてもらうで」

「マサキさん、ありがとうございます」

「なーに、ケンくんも頑張っとるんや。わいも頑張らんとな」

マサキさんがコガネ出身であってくれて良かったと思ったのはこれが初めてかもしれない。ムードメーカーとしては十分なほどに空気を和ませてくれる。

「ナツメさんは？」

ずっと黙ったまま俺を直視し続けているナツメさんに俺はおそるおそる尋ねる。

「必要事項」

「……ありがとうございます！」

美白肌に泥がついてしまっていてもナツメさんが纏う独特な雰囲気は取り払われはしない。そんな自我をこういった状況でも保ち続けられるこの人たちを俺は心底尊敬する。

「アンズも、今までよりももっと働くのよ」
「カンナさん……。はい！」

そしてカンナさんはこれから起きうるであろうメンバー内の摩擦要素をその一言で取り払ってくれた。最悪、俺だけでもと思っていたがアンズのことは皆知って黙っていたのかもしれない。

俺は自分の胸が底のほうから温かくなっていくのを感じ取ることができた。

「まあ、いいわ。これから私たちはマグマ団及びアクア団の殲滅、及びグラードン・カイオーガの沈静化へと移るわ」

カンナさんが懐から出したタバコに火を灯し、俺達面々の顔を一巡した。

「はい」
「☆※●▽！」

カスミさんは昔旅に出ていた時と同じようにして髪を後ろで一つに束ねた。スターミーもボールから飛び出し、体を回転させてその意気込みを見せつける。

「これから忙しくなりそうですね」
「らーふぅ！」

エリカさんは自前のカチューシャを取り外して埃を払う。エリカさんのラフレシアが頭部からアロマの香りを漂わせる胞子を噴出し、辺りを和ませる。

「仕方がない」
「ごすごーす」

ナツメさんは汚れてしまった自分の服を不満そうに見下ろしながら、顔の泥を拭う。主人の服をぱたぱたとゴーストが一生懸命に埃を払う。

「やりましょう」
「れいっ！」
ミツルさんは拳をぎゅっと握り、前へとかざす。同じようにして彼のエルレイドもポーズを取る。

「わいを怒らせたらコワイでぇ」
「ぶい？」

マサキさんはノートパソコンを突き出して意志を露にする。連なるようにしてイーブイも声を高々に鳴く。

「絶対に止めようね」
「いとまぁ」

アンズは俺の腕へと手を伸ばし、見上げてくる。彼女の腕にしがみついているイトマルも俺を見上げ、力強い瞳を向けてくれる。

「ああ、絶対にな」
「にゅら！」

ああ、そうだ。絶対に止めるんだ。

ダイゴさんが何を考えているかはわからないからこそ、俺達はあの人を放っておくわけにはいかない。その闘志はニューラにも伝わっているみたいだ。

「なら行くわよ。私たちの手にかかれば伝説のポケモンの一体や二体、問題じゃないわ」

「やぁーど！」

カンナさんの自信にここにいる誰もが疑うことを知らなかった。そう、俺達ならやれる。やるしかないのだから。

「打倒ダイゴ！　あいつをぶっ潰す！！」

「「おう！」」

やってやる。やってやるんだ！

第十九章：聖戦が残し産物　Ｖ：打倒ダイゴ（後書き）

活動報告でも申しましたが、これからも引き続き執筆を続けていく所存です。

安定した更新ペースを維持したいと思いながら、これからも精進してまいります。

まだまだケンの章は終わりません。どうぞお楽しみに！

第十九章：聖戦が残し産物　「裏」：会見（前書き）

それではちょっとした伏線を回収すると共に佳境へと入ります。

ルカ「私の出番はいずこへ・・・・」

ではどうぞ～

第十九章：聖戦が残し産物　「裏」：会見

ホウエン地方　各所：

レックウザが捕らわれてから半日、ホウエンの各所で異変が生じていた。

「ご覧ください！　ホウエンの各所にて異常事態が起こっています！」

今やどこの家庭のテレビでも同じ内容のニュースが報道されている。

「冬だというのに、ここカナズミシティの気温は真夏日を超えています！　もはや外に出ることすら、紫外線が強く、かないません！」

何十回と日焼け止めを塗ろうが、この直射日光の下では役には立たないだろう。アスファルトが燃えるように熱くなり、外気がそれによって歪みはじめている。

「こちらはトクサネシティです！　見てください、この大雨！　さすがに車は走っていません、視界もこれ以上降ると前方も定かではありません」

バケツをひっくり返したみたいな、とは良く言ったものであろう。叩きつけてくる雨の多さに、その場で立っているのもやっとだ。それでも報道を続けるのは、プロ魂の賜物である。

「一体このホウエンで何が起こっているのでしょうか！？　先ほど、

協会の方からはまもなく会見を行うとされていましたが……初の試みとなっています！」

会見。

それはこの危機的状況において試される、サカキの策略でもある。このチャンスを見逃さない、それがサカキという男でもある。

ホウエンの西半分が強い日照りに悩まされ、東半分が豪雨に苛まれている。それを引き起こしているのはマグマ団及びアクア団。しかしその元凶は彼らにグラードンとカイオーガの封印を解く為の鍵を与えたダイゴにある。

そして、会見は開かれる。

あふれんばかりのフラッシュと拍手によって迎えられたサカキは一張羅に身を包み、片手を上げて騒音をやめさせる。

「ホウエンでの異常事態は恐らく封印されていた伝説のポケモン、グラードンとカイオーガによって引き起こされている可能性が高いことがわかりました」

画面の向こうでも、会場内でのどよめきが伝わってくる。

「そしてポケポリの協力もあり、犯人の特定も確認しました。以前我々の団体名義で活動し、複数のジムリーダーと四天王と結成したテロ組織の主格であるツワブキ　ダイゴであることも確認しました」

どよめきは広がる。それは画面の向こう側でも同じことである。

自分たちの地方を統べていた元ホウエンチャンピオン。その張本人がこの異常気象を引き起こしているのだという真実を突きつけられたのだ。

「ただいまポケポリと協力し、ロケット団から正規団員数名をホウエンへと派遣しました。事態は必ず収束させます、ご安心ください」

サカキの声を聞いてしまうと、その重鎮さにどこかしら安心感を覚えてしまう。それは敵にしてしまいたくないと思わせてくれるほどに信頼の置けるものでもある。

「そこでホウエンの皆様にお願いがございます。決してむやみに外出するのは控え、今日明日と自宅で待機していただきたい。激しい作戦が展開されることによりどこまで人的被害が及ぶかわかりません」

丁寧な手振り身振りに慎重な説明に誰もが危機感を覚えるもパニックへとはいたらない。誰もがサカキの次の言葉に夢中となっている。

「そして他の地方の方々にもお願いがあります。ただいまをもってホウエンへの渡航を全面ストップいたしました。ホウエンは今より厳重体制下に置き、事態が収拾されるまで立ち入りは許されません」

これでホウエンは孤立する。

それがサカキの狙いなのかはわからないが、もはや一般市民にとってはそれは仕方なのないことだと割り切ってしまうだろう。

「それではこれにて臨時会見を終了いたします。ありがとうござい

ました。それでは質問の方へと移らせていただきます」

この国はもはやサカキ無しでは回ることはないのだろうか……。

キンセツシティ：

「大丈夫ですか、スミレ様？」

「あ、ああ……しかし、これは……」

キンセツシティは丁度ホウエンの中央にあることから異質な感じの天気雨を受けていた。

「ありえません！　藍色も紅色の珠は両方ともスウセルア教の本部で保管されているはずです！」

「だが、他に説明がつかない。誰かに盗まれた？　だが、どうやって？」

カイチ　スミレが今や次期頭首として一目置かれているスウセルア教の本部であるカイチ家。その実態はロケット団からの干渉などを受けずともに独立しており、その資金繰りはホウエン全土にまで及ぶ。

科学という名目を追求してきた彼らはもちろんホウエンに伝わる伝説のポケモンについても調べはついていた。そして彼らが目覚めた時に現れるとされているレックウザの存在についてもだ。

だがそれを科学的に証明は未だにできていない。だからこそ彼らは珠二つを自分たちで厳重保管し、謎が解明されるまでは世間への公開及び発表も控えていたのだ。

そう思っていた。

「スミレ様、これをご覧ください！」

「……っ！」

スミレとサルは今キンセツシティのホテルにいた。サルが指さした先のテレビでは丁度サカキの会見が行われている頃であった。

「これは……しまった！　サル、家へ連絡を入れろ！」

「は、はい！」

親指の爪をかじり、スミレは焦りを覚えていた。

これがロケット団が引き起こしたことなのか、それとも彼が言っ

ているダイゴの仕業かは定かではない。だが一つ言えることはある。この機をサカキが取り逃すわけがないということを。

サカキはこの事態を鎮めることでホウエンでの知名度を絶対的なものにしようとしている。長くこの地で拘ってきたスウセルア教を押しのけようとしているのだ。

「そうは、させない！」

そしてそれは決して見逃せるものではない。だが出鼻はくじかれてしまった。

「本家との連絡が取れません！」

「何？！」

もう乗り込んでいるということか！　とスミレは未だ愛想笑いを浮かべているサカキという男の器量を甘く見ていたことを痛感する。

「戻るぞ！」

「はい！」

もしかしたら昨日出会った男もロケット団の者だったのか、とスミレは勘ぐりはじめていた。

キンセツシティでの講演後、ジムリーダーの紹介であるからと油断していたのかもしれない。今やジムリーダーの全てがロケット団の管理下に置かれていようとも、キンセツのジムリーダーであるテッセンは違うものだと思っていたのに。

そうスミレは後悔の念を露わにしながら、身支度をしているサル

の尻を蹴り飛ばして怒鳴る。
「荷物は他の者にやらせておけ！　急ぐぞ！」
「は、はいぃ！」
呼び名よろしく、赤くなりそうな尻をさすりながらサルは電話で車の手配を済ませながらスミレのコートを取り出す。
スミレは素早い動作でコートに身を通しながら、ジンに言われた言葉を思い出していた。
『カイチ　スミレ、君は八柱力だね？』
あの確信した笑みをスミレは見た。つまり、自分が八柱力だということがバレてしまったということだ。身内にも数人にしか明かしていない秘密をなぜあのような人間が知っていたのかはわからない。
そう、スミレにとっての一つの足枷……それが自分が八柱力という存在であることにあった。ポケモンの持つ技を継承する人間、それを昔から八柱力と呼ばれており同時代には八人の人間にしか現れないという希少な現象。
しかし同時代に八人の八柱力が現れる可能性は極めて低い。それは八柱力となった人間が死んだ後、誰が次に継承し、その才に気づくのかわからないからだ。
「スミレ様、待ってください！」
「さっさとしろ！」
科学の発展を促すスウセルア教の私が、なぜ解明できないような

八柱力という存在なのだ！　と、スミレは胸中で煮えたぎる嫌悪感を自分へと抱いていた。

そのことが世間に知られればスウセルア教の名声は途端と崩れさってしまう。しかしスミレの扱える能力というものが、スウセルア教にとっては有効活用できるものであった。

それゆえに彼女はこの若さでスウセルア教を背負う立場にある。

ギリッ……スミレは奥歯を噛み締める。

自分が背負った業、それを必ず自分の手で終わらせる。八柱力？　バカバカしい。私の価値がそれだけではないことをスウセルア教にも、アルセウス教にも知らしめてやるのだ。

それこそがスミレの野望であった。

その為に不必要で邪魔な存在はいらない。その一つがロケット団でもある。

だが今はそのことを念頭にいれている場合ではない。もしこの異常気象がグラードンとカイオーガによって引き起こされているものだとしたら、スウセルア教のトップとしてその事態を収めなければならない。

「一体、どうなっているというんだ！」

バタン、と強烈な音を立てて自家用車の扉は閉められる。オートであるというのに容赦なく、それほどまでにスミレは激昂していた。

ルネシティ：

「なんとしてでもカイオーガの進行を止めさせろ！」

カントー四天王が一人、カンナの怒号が皆に知れ渡る。

「くっ……！　頑張ってくれ、サーナイト、エルレイド！」

ミナモシティの沿岸部でカンナ、エリカ、ミツルの計三人がマサキのサポートを受けながらカイオーガと対峙していた。

「ほらほらどうしたどうした！　お前らも思う存分暴れろ！」

「「イエッサー！」」

アクア団の元帥、アオギリ。彼は今手に藍色の珠を持ち、カイオ

ーガを完全に支配下に置いていた。そして彼らアクア団も自らが対抗してきている。

この数を、いくら強者として名を轟かせているトレーナーであっても防ぎきることは難しいだろう。

「いいか！　直にロケット団からも部隊がやってくる！　それまでの時間稼ぎに集中するんだ！」

「ですがカンナ、私たちのポケモンはレックウザ戦で……くっ！」

「わかってる！　だが、やるしかない！」

エリカの草ポケモンが唯一アクア団の団員達のポケモンを食い止める手立てとなっている。だが、徐々に一匹、また一匹と数に圧されてボールへと舞い戻っていく。

カンナとミツルはカイオーガによる攻撃から市街を守るのに手一杯であり、レックウザの時より苦戦していた。

だが彼らにも勝機がないわけではない。マサキからの連絡によりサカキの会見模様が伝えられ、ホウエンのポケモンリーグ協会からもジムリーダー及び四天王達の出撃命令もくだされたという。

敵任せにするというのは癪に触るが、そうでもしないと彼らに勝ち目はない。敵の敵は味方、そういう捉え方ではないが今はそいつらに頼るしかない。

「しっかりやれよ……。ラプラス、【絶対零度】！！」

「ラープゥーーー！！」

それは今、グラードンとマグマ団の方へと向かったケン達へと送

られた言葉であった。

第十九章：聖戦が残し産物　「裏」：会見（後書き）

さて、次話はケン達のグラードン戦へと参ります。

グラードンをどう描写するか、頑張りたいと思いますw

では！

第十九章：聖戦が残し産物　ＶＩ：陸の頂点に立ちし者

煙突山：

「ふはははは！　もう手遅れだというのに、来たか！」

煙突山から、その巨大な頭角を露にしていたのは俺達が復活に助力したグラードンであった。その全身に溶岩を身にまとい、大きく見開かれた眼球が下界を見下ろしている。全身がもうもうと白い気体を放っていて、それほどまでに途方もない熱さを誇っていることがわかる。

「愚かだな！」

そして仰々しく両腕を開いて天に向けて笑っているのはマグマ団のリーダーマツブサであった。

俺とアンズ、カスミさんとナツメさんの四人がグラードンの足止めを任された。マサキさんからサカキが行なった会見のことも耳に届いている。

つまり俺達がなさなければならないことはなるべくグラードンを牽制し、マグマ団の戦力をできるだけ削ぐ。それがいかに無謀であり、無鉄砲であることかは皆が承知の上だ。

でもやるしかない。

俺達にできること、そして俺達にしかできないこと、それがこれなのだ。

「アンズちゃんとケンくんはグラードンの相手をしてくれる？　いくらマツブサがグラードンをコントロールできるとはいっても、相手は野生ポケモンだから」

カスミさんが俺達両方の手を取って勇気づけてくれる。それでも、やはり緊張はする。

だが自然と負ける気はしなかった。いや、負けるというよりはしくじるといった方がいいのかもな。

「アンズ、頑張るぞ」

「うん」

フエンタウンに隣接している煙突山の麓に俺達はいた。上を見上げれば、マグマ団のアジトであろう三合目辺りにずらいと団員が並んでいる。そしてロープウェイがある八分目に、マツブサが仁王立ちしている。

遠目でわかりにくいが、それでもグラードンの姿は視認できる。

空気そのものを震撼させるグラードンの雄叫びは、耳を塞ぐものではないにしろ、その振動がまるで臓器を殴りつけるような重みをまとっている。それほどに、グラードンというポケモンが伝説と謂われる所以を感じ取れる。

「それじゃナツメさん、頑張りましょう」

「先手必勝」

ナツメさんのバリヤードが現われ、マグマ団員達のいる周りへと

十枚の【マジックコート】を展開させた。

「【怪しい光】」

バリヤードが【バリヤ】や【リフレクター】を繰り出しながらそれを踏み台にし、煙突山を駆け上がっていく。そしていきなりの宣戦布告に戸惑っているマグマ団員達に向かって【怪しい光】をかけた。

マグマ団は各々にポケモンを取り出し対処しようとするが、それもナツメさんの術中の中であった。

基本特殊技を防ぐには特殊技を用いる。だが、彼らの周りには【マジックコート】が展開されている。それが意味することは、彼らの自滅及び破滅である。

「行くぞ、アンズ！」

「うん！」

俺達はバリヤードが作り出してくれた【バリヤ】を踏み台にしながら山を駆け登っていく。基礎体力はお互いに鍛えてはいるが、走っても走っても頂上へと辿り着けるのが逆に遠くなってしまうような幻覚に苛まれる。

それはグラードンの特性によるものだろう。事前に得た情報も今ここで感じているものも全ては異様な熱気が原因である。さっきまではカスミさんのポケモンの【水遊び】によって暑さは軽減されていたものの、この状況下においては焼石に水のようなものである。

「情けない者共だ。グラードン、全てを焼き払ってしまえ！」

マツブサが右手に握っている紅色の珠が光り出す。自身の肩をクロバットによって持ち上げられたマツブサは、上空へと上がりグラードンからの攻撃を避ける。

またも空気が震える。ビリビリとまるで肌がしびれるような咆哮と共に現れたのは、大量に噴火した溶岩であった。

「「！！」」

俺とアンズは噴出された紅蓮の液体に、すぐに危機感を覚えた。

「【光の壁】」

まるで雪崩のようにして押し寄せるマグマに、俺達が成す術はなかった。だが展開されていた【光の壁】が一気に収束して二人を囲み始める。ナツメさんのおかげだ。

何十という層に、分厚く特殊技を防ぐ壁に守られる俺達であるがグラードンの【噴火】を正面から受ける。ニューラを呼び出し、【凍える風】を展開するもあまりの熱さに焦げ死にそうになる。

「ぐっ……」

「う、くっ」

全身から汗が吹き出し、それが蒸発して乾いてしまいそうになる。マグマを真正面から体感できるのはこれが一生に一度きりでありたいと願いたい。次々に【光の壁】が割れていき、その度に熱さが襲いかかるようにして上がっていく。

「ひぃぃ！」
「マ、マツブサさまぁ！！」
麓の方では身動きができなくなったマグマ団が取り残されていた。ポケモンは大体が【怪しい光】で混乱したままなのだ。
「ナツメさん！」
カスミさんの合図に合わせてナツメさんがこくりと頷く。
「【ハイドロポンプ】！」
俺たち同様にある程度の高さまでやってきていたカスミさんがマグマ団達に向かって大量の水を放出する。だが、あの程度ではマグマを防ぎきれる量にはならないだろう。
しかし熱さにめげそうになるも、ナツメさんとカスミさんがジムリーダーであることを実感させられる。あの短時間でナツメさんはマグマ団を覆っていた【マジックコート】を反転させたのだ。
そのおかげでカスミさんのポケモンが繰り出した【ハイドロポンプ】はその威力を倍増して、迫り来る溶岩へと直撃した。大量の湯気が生まれ、視界が奪われるもなんとか耐え切れることができたようである。
そしてそれは俺達も同じであった。
「行けるか、アンズ？」
「行けるよ！　アリアドス、【糸を吐く】！」

煙突山の斜面を溶かし、焦がし尽くしたマグマの残骸をよけながら俺たちはナツメさんが示してくれる道を目指す。アンズのアリアドスに掴まり、俺達は飛ばされた強靭な糸の方へと飛んでいく。

最初からこうしたかったが、戦力は少しでもキープしなければならなかった。だが今は時間が惜しい。次にもう一度【噴火】を使われたら一溜りもないからである。

眼下でカスミさんがマグマ団の避難を手伝っていた。一瞬にして戦況は転化していく。

「ほう、やるな。だがこれはどうだ？　グラードン、【地震】だ！」

グラードンが天を仰ぎ、哭(な)く。すでにその全長を露にしたグラードンはその両腕をかざし、地面へと叩きつけた。煙突山の斜面が振動し、巨大な亀裂が発生すると共にいきなり岩盤が崩れ、隆起しはじめる。

用意されていた道筋である【光の壁】や【バリヤー】の足場が、真下から蜂起した岩盤によって次々と壊されていく。アリアドスの糸によって空中移動をしていた俺達は一旦無事である足場へと下りる。そして被害はそれだけではない。残っていたマグマが辺りに散乱し、飛び跳ねる。これでは迂闊にグラードン自体に近づけはしない。

こうなったら、いちかばちかだ。

「アンズ」
「なに？」
「いちかばちか、やってみていいか？」

「……それしか、ないみたいだね」

ナツメさんに頼めば成功率は保証されているだろう。だが彼女は今、下の方で俺達のサポートに回るほど手が空いていない。だったら……。

「はははは！　どうしたどうした！」

巨大な力を手に入れ、己に陶酔してしまっているマツブサを見上げて俺は賭けに出ることにした。そう、グラードンは今苦しいはずだ。野生でありながら、強制的に従わされているのだから。

「このままロケット団を待っている余裕はない。ならせめて、これ以上被害が広がるのを防ぐ」

「そうだね。それしか、ない」

俺とアンズはお互いに新たにボールを手に握る。

「いくぞ！」

「うん！」

お互いに身を寄せ合い、俺はボールから呼び出すと共に叫んだ。

「【テレポート】！！」

異空間へと引っ張られるような嫌な感覚を感じながらも、意識を集中させて目標地点をイメージする。

視界がぶれ、俺たちが現れたのは上空。そう、眼前に見えるのはクロバットの四翼だ。

「なに?!」
「フォレトス、【大爆発】です!」

ケーシィをボールに戻し、アリアドスが出した【クモの巣】の上へと落ちていく。

その最中に空中では閃光と共に巨大な爆発音が轟く。

「やったか?」
「あ、あれ!」

アンズがフォレトスを戻し終えると、何かが飛んでいくのが見えた。赤く光るその珠は、紅色の珠だった。さすがは古代兵器と称されるだけあって、あれだけの衝撃じゃ壊れないんだろう。

「くそっ!　小癪な真似を!」

咄嗟にクロバットがマツブサの盾となったのだろう。その背中は焼けただれ、右翼は半分ほど吹き飛んでいた。それでも主人を安全に地面へとゆっくりと下降して着地させる。

「珠はどこにいった?!」
「これの、ことですか?」
「貴様!!」

飛来していった紅色の珠をアンズがアリアドスに命令して回収していた。これが紅色の珠……触れただけで狂気に取り込まれそうになる。その力を乱用したくなってくる。

「わかってはいたがな、貴様らが俺達を利用していようとしていたのは」
「それはお互い様です」
「ふんっ！」

お互いの腹を探りあっていたのは最初からわかっていた。それをぶり返すということは、マツブサは完全に俺たちのことを舐めきっている。子どもだと思って甘く見ると、痛い思いをするぜ？

いくらマツブサがマグマ団のトップであろうと、こっちは二人。しかも一人はジムリーダーになるほどの腕前を持っている。負けるはずがない、そう思っていた。

だがこの時、俺は懸念していた。そのジムリーダーのポケモンが発動した【大爆発】をゼロ距離で喰らって、マツブサのポケモンはギリギリであるが耐えていたということを。

「ぐっ！」
「きゃっ！」
「大丈夫か、アンズ！？」

そしてもう一つ懸念していたことがあった。

そう、野生と化したグラードンだ。ギロリと鋭い眼光が俺達三人へと向けられる。頂上近くまで来てわかったことが一つ。いかにグラードンが巨大かということだ。

コントロール下に置かれていた怒りと、長年の眠りから覚まされた苛立ちがどれほどまでにグラードンの中で増幅されているかはわからない。だが、その両目が血走り明らかに興奮しているのはわか

る。

殺気だ。途方もない殺気。その怒りを鎮める為には……やるしかないのか？

「ふ、ふふ、ふはははは！　いいぞグラードン！　その怒りをぶつけろ！　そしてこの世界を陸地で埋めてしまえ！」

焼け野原と化した煙突山の斜面では、もはや火山灰で覆われていた過去の姿は見る影もない。怒気に満ちた古代ポケモンの咆哮と、狂気に駆られた一人の男の奇声が山全体を覆ったのだ。

第十九章：聖戦が残し産物　ＶＩ：陸の頂点に立ちし者（後書き）

遅くなりましたが休日のおかげでなんとか更新。

またちょっと忙しくなるので、お待ちいただければ幸いです。それにしても、久しぶりの執筆となると思うように筆が進みませんね……；；　どうにかせねば……。

第十九章：聖戦が残し産物　「裏」：陸と海を憎む者（前書き）

遅くなりましたー。無事学祭も終わり、波乱な週末は終えることができました。それに伴う大学側の仕打ちを回避しながら、なんとか更新です。

第十九章：聖戦が残し産物　「裏」：陸と海を憎む者

数十年前、ホウエンの地にて産声をあげた二人の男の子がいた。

その二人は幼少の頃より優秀であり、いずれは両親の営む会社を受け継ぐであろうと言われ続けてきた。そして彼らもまた、それが自分たちの人生のあるべき道だと過信していた。

しかしとある事件をきっかけに彼らの道は大きく変動することとなる。

それは彼らがホウエンでトップを誇る大学へと入り、地学を専攻としていたときである。お互いの顔は見たことがあれども、名前も素性も知らない頃にそれは起きた。

ホウエン地方を突如襲った大地震である。

この災害により、ホウエン地方の東岸沿いが壊滅的な被害を受けた。そしてそれに巻き込まれたのがお互いの家族であった。

二人の内の一人、マツブサという男は大学にて海洋地質学をとっていた。そしてもう片方の男、アオギリは地質学に熱中していた。しかしその地震を堺に、二人は己がとっていた専攻を恨むようになった。

それは自分達がとっていた学問で全てを失ったと思ったからである。マツブサは家族を巻き込んだ津波を恨み、アオギリは家族と家を巻き込んで倒壊させた地震を恨んだ。

それからマツブサは海を憎み、アオギリは陸を憎み始めた。

不幸中の幸いと言うべきであろう、彼らのもとには両親が残した多大な財産が残った。二人は学生運動から各々の活動をはじめた。それがマグマ団とアクア団の第一歩である。

最初は二人の気合に興味を持っていた者は多かったが、それでも学生時代が終われば一人、また一人と抜けていった。熱気になっていた学生も、それぞれに自分の仕事、家族、人生の為に消えていった。

しかし二人はあきらめなかった。全てをそれぞれの野望の為に人生を費やしてきたのだ。

マツブサはボランティア団体の総括をするという企業を立ち上げた。ボランティアという名義で植林や伐採活動の廃止を徹底的に訴え続けた。しかし、その裏ではそういう状況下に運んでいく為の策略などを他社と練り、その上場金で稼いでいた。グループはたちまちに大きくなり、その時にはすでにマグマ団という少数精鋭ではあるが幹部候補の人員は揃っていたのだ。

知らされてはいないが、マツブサの会社が大きくなるにつれ年を追うごとに火山の活性化と砂漠の広大化が続いていたという。それは植林をするために苗木を集め、伐採会社を貶めることを続けてきたのである。

そしてアオギリという男も、また、悪事を働いては自身の企業を肥大化させていった。彼は水ポケモンを救う為に、徹底的な公害を海水に及ばせた企業をことごとく潰していった。起訴に次ぐ起訴、勝訴に次ぐ勝訴でその圧倒的強さを世間に誇示させた。

一見、合法的に見えても内部告発を促すために誤情報を各企業へと流したりなどの情報操作を行なっていた。そしてその悪徳な手段を見抜いたアオギリの試練を乗り越えた者たちがアクア団の幹部として名を連ねている。

そんな彼らが一斉にその活動を本格化しはじめたのは数年前。とある研究者が古代のポケモンにまつわる古文書を発見したのがきっかけであった。その古文書の発掘に手助けしてたのがマツブサとアオギリの二人が経営していた子会社だったのだ。

その古文書に興味を示した両人は、同じタイミングで古文書を盗み出した。それが彼らの事実上初めての接触となった。発見された古文書は三つ。陸の書をマグマ団が、海の書をアクア団が、そして残ったのが空の書。

独自に莫大な費用を使って研究所をお互いの基地に作り、それぞれ読解に力をいれた。封印された古代ポケモンであるグラードンとカイオーガは発見したものの一向に復活の兆しをみせない二体に彼らは頭を悩ませた。それもそのはず、なぜなら陸と海の書には彼らの復活方法は記されていなかったのだ。記されていのは彼らが封印されるに至った経緯とその生態についてのみ……。全てが書かれていたのは空の書、だがマツブサもアオギリもそれに気付かなかった。

だからこそ彼らは煙突山を故意に活性化させることで異常現象を引き起こし、古代ポケモンが刺激されること望んだ。しかし、彼らの計画はとあるトレーナーによって拒まれた。その後、彼ら両組織は徐々に衰退していった。たくさんの部下を犠牲にし、一丸となって日々努力した日々が彼らには存在した。

だが、追い込まれ、何もできなくなって窮地に立った彼らに残された道は、今までに積み上げてきた事業を続けることだけだった。

それから数年、彼らはまたもや思いがけぬ人物から助力を得た。そう、ダイゴである。

両組織を破滅へと追い込んだ協力者が敵対していた組織へと手を差し伸べたのだ。その存在を世界中にテロリストとして名を馳せた後にだ。

二人は彼の提案を飲んだ。というより飲むしかなかった。ダイゴは紅色と藍色の珠を入手していたのだから。そしてダイゴの提案はただ古代ポケモンの復活のみであった。そこに二人は引っかかった。ただでこんな男が珠を提供するはずがない、と。だがそれならそれでダイゴの策略に飲まれるのも悪くはないと二人は判断した。

一度は失敗し、身を滅ぼしかけた二人である。世界征服のチャンスがもう一度あるのならば、今度こそ全てを投げ捨てられる覚悟ができていたのだ。

それから二人はさらにその覚悟を深めた。

陸に溺れた男マツブサと海に埋もれた男アオギリの新たなる戦いは、こうして始まったのだ。そして今、彼らはホウエン地方を巻き込んだ新たなる波乱を巻き起こしたのであった。

カントー地方　マサラタウン：

「ついたぞ」

一人の男が車内から降りて、後部座席の扉を乱暴に開ける。

「んよいっしょ」
「大丈夫、レイハちゃん？」
「ちゃん付けするんじゃないにょろ！」

ここはマサラタウン、オーキド博士が引き起こした事件のあった町である。トレードマークであったオーキド研究所はすでに跡形がなく、彼が所有していた広大なポケモン用の広場しか残ってはいない。

「待って、ルカちゃん」
「あ、うん」

一番最後に降りてきたカナの手を取りながらルカは以前自分がこの町へと来たことを思い出していた。あれからほんの数ヶ月しか経っていないのに、もうずいぶんと昔のことのように感じる。あの時感じた冷たさも、季節が春に向かっていくようにだんだんと温かみを持った記憶へと改ざんされていく。

「ったく、まさかまたここに戻ってくることになるとはな……」

そしてここまで三人を連れてきたガイはオーキド研究所跡を眺めながらぼやく。

「いいからとっとと案内するにょろ！　お前の話したことが本当なら、レイハも思い当たることがあるにょろ……」

可愛らしい容姿であっても、レイハ・ニョロモンドは幹部なのである。それゆえに選ばれた要因があることは明白。それに彼女に関して言えばそんなにバトルが強いというわけではない。

そんな彼女があの危険なナナシの洞窟にて活動してたのはどういうことなのか、それを他の三人はさきほど知った。そう、レイハは野生の感がずば抜けているのだ。だからこそあいった戦法を取って屈強な野生ポケモン達を倒すことが可能なのだ。

それをガイはひしひしと感じてた。そこではじめてレイハの実力を見たからだ。だからガイは感じていたからこそ、あえてバトルを挑まなかった。レイハをあえて話の輪から外すことで、レイハの幼児心を働かさなければならなかった。

ルカとカナに突きつけられた八柱力という単語。そしてレイハも言葉は知ってはいたが本質を知らなかった。ガイから聞いた話をも

とに、レイハは三人を連れてマサラタウンへと行くように促したのだ。そして確認したいことがある、と。

「一体この研究所になにがあるっていうんだ。ここはもう何回も調べられて……」

レイハは得意げに自身の帽子の鍔を抑え、不敵にガイに向けて笑みを漏らす。

「ふっ、わかってないにょろね。ここには一度たりともサカキ様以外の幹部は訪れたことがないにょろ」

「それがどうしたって……」

自信に満ちた口調で言葉を連ねるレイハに、ガイはその内容に触れるも……一人の少女は興奮気味に息を乱していた。

「みてみてカナ！　レイハちゃん探偵みたーい！　かっわいいー！」

「ちょ、ちょっとルカちゃん。落ち着いて」

そんな甲高い声が耳に煩わしいのだろう、ぴくぴくと肩を痙攣させながらレイハは振り向いて、

「黙るにょろー！！」

と、かわいいと言われたことに反応したのか顔を真っ赤にして両手を振り上げて叫ぶのであった。

「怒られちゃった！　ねえ、抱きついてもいいかな！？」

「もう、我慢してよルカちゃん！」

と、しまいにはカナにまでもお咎めをくらい、ガイは一人三人の少女を眺めながら嘆息するのであった。

『やってらんねー』

と、心の内にこぼしながら。

「……こほん、続けるにょろ」

「……ああ、頼む」

ルカを一人車の中にとじこめおえたガイとレイハは後ろにカナを控えさせて話の続きを再開する。

「幹部が訪れなかったことが、そんなにキーなのかよ」

「そうにょ。つまり、サカキ様の暗黙の圧力がかかっていたんだにょろ」

「どういう、ことですか？」

ガイの質問とカナからの質問に挟み撃ちされたレイハはオーキド研究所のある丘を登りきって告げる。

「つまり、レイハ達が来てしまえばわかってしまうことがあるということだにょ」

「……なるほどな」

「たしかに」

ドンドン！　と、泣きながら車窓を叩いているルカなぞには目もくれずガイとカナの二人は納得したように首を縦にふる。

「でも、どうしてそんな圧力がかかっていたんですか？　知ってい

たら尚更興味が湧くんじゃ……」
「そんなのここに来る必要はなかったからにょ。そんなところに、ぶらっと立ち寄るほど幹部達は暇じゃないんだにょろ！」

と、誇らしげに胸を張るレイハではあるがロケット団に入りレイハのことを知っていたガイとカナは二人して疑問を抱かずにはいられなかった。それもそのはず、幹部質の中でレイハだけがいつも本部におり、暇を見つけては彼女の趣味に没頭していたからである。だがあえて二人はそこに触れないでおいた。

「さあ早速拝むとするにょろ！」

そんな気楽そうに見える彼女ではあるが、レイハはガイからもたらされた新たなる情報をもとにオーキド研究所のことを指針した。それはつまり、オーキド自身も八柱力に関わっている可能性があると見出したのか、それともまた別の事柄についてなのかは知る由もない。

だがガイ、カナ、そして軟禁されているルカはこの後、知ることになるのだ。昔に隠され続けられていた真相を……。世界を支配しているロケット団のトップであるサカキが何十年も前に計画していたことの真相を……。

「だーしーてーよー！！」

そんな時が一刻と迫っている中、ルカは未だに外からの鍵を開けてもらえることが叶わず叫び続けていた。

第十九章：聖戦が残し産物　「裏」：陸と海を憎む者（後書き）

さて、気になりますケンの本編は次話から再開です。

やっとこさグラードンとカイオーガを出すところまできました。あとはどう処理するかの話へと移りますが、楽しみにしていただければなと思います。

そしてそろそろ更新速度をあげたいと思いつつも、なかなかそうはいきませんね；；

第十九章：聖戦が残し産物　ＶＩＩ：制限時間５分（前書き）

一週間ネットが来ず、執筆停滞しておりました。

待たせてしまい申し訳ございませんが、やっと更新できました！

第十九章：聖戦が残し産物　ＶＩＩ：制限時間５分

煙突山：

くっ……どうする？！

狂乱したグラードンが唸り声を上げている。このままだと先ほどコントロールされて制御されていた力が暴走する恐れがある。

しかし今の俺とアンズにはこんなグラードンを倒すどころか足止めすることも困難だ。それは例えカスミさんとナツメさんが加わったとしても、だ。

「全てを焼き払え！　焼き払うのだ！！」

まるで全てをなげうってしまっているようにマツブサは吼える。この場所にいれば自分も巻き込まれかねないというのに……。

「とりあえずここから離れるぞ！」

「わかった！」

グラードンがもし紅色の珠による支配下から脱した時の想定はしてはいたそれは完全沈黙、あるいは暴走。前の事例ではグラードンによる暴走は確認されてはいない。その前に無力化されたからだ。

そして切り札も使ってしまった。

そう、ケーシィだ。あいつの【テレポート】でグラードンの隙をつく為の賭けだったが、先のマツブサとの戦いで使ってしまった。

「アリアドス、【糸を吐く】でロープウェイまでお願い！」
「ァリドス！」

俺とアンズはアリアドスに掴まり、そのまま吐き出された糸に引っ張られるようにしてロープウェイまでたどり着く。ぐるぐるとロープウェイのロープに巻き付けられた糸の束ねの上で更に近くにグラードンを視認する。

とりあえずでかい。とにかくでかい。大きさ的にはそうでもないが、グラードンというポケモン自体が被っているそのオーラに圧倒されてしまう。

「作戦通りに行く？」
「どうだろうな。なんか通用する気がしないな」
「私も、同感」

苦笑いでアンズも濁すが、ケーシィを用いる手がなくなってしまった今となっては事前に考えた作戦は上手くいこうにない。それはグラードンの手足を封じてどうにか時間を稼ごうとするというもの。しかしあの暴走っぷりではいとも簡単に拘束が解かれてしまうだろう。

「マサキさん、後どのくらいでしょうか？」

耳につけたインカム越しに指示を仰ぐ。向こうとの通信は常に保持しているが、先ほどまではカイオーガの方面で混戦していたみたいだ。

「おお、ケン君かいな！　こっちは今ようやっと落ち着いたところ

や！」
「それじゃロケット団が？」
「そういうことや！　そっちにロケット団がつくんわ……5分後や！」

5分。それがなにを意味するのか、俺よりアンズのほうがわかっているみたいだ。

「きついね」
「そんなにか？」
「5分でしょ？　ちょっと厳しいよ」

たしかに、ここまでやってくるのにも数分としか経っていない。それはマツブサがグラードンをコントロールしていたから、可能であった。

「くるよ！」
「げっ」

アンズの視線の先、そこで雄叫びをあげたグラードンは猛火の如くに炎を吐き出した。まるで空気そのものが焦げてしまうかのような圧倒的火力に、俺とアンズはよけるのに必死であった。跳躍してなんとかかわすものの、足場にしていたロープは完全に蒸発してしまった。

ここのロープウェイは設計上、もし火山が噴火した場合に備えて巻き込まれない位置に設置されている。そしてそれはさきほどの【噴火】による攻撃もまぬがれてはいた。だがこうとなってしまっては完全に消滅するほか道はないだろう。

「マツブサ、あんたも逃げろ！」
未だ高笑いを続け、目の焦点があっていないようにも見えるマツブサに声をかけるも反応は返ってこない。
「ケンくん！　マツブサはもう……」
「あいつをここで放っておけば死ぬぞ！」
そうだ、さっきの業火が俺たちに放たれたのは良かったものの次にマツブサを狙った場合、あいつに生き残る術はない。
「でも、マツブサは！」
「だからだよ！　だから見殺しにする気はない！　しちゃ、ダメだ！」
俺の訴えをアンズは理解してくれたのかどうかはわからない。だが、賛同はしてくれたみたいだ。
「わかった」
「さんきゅー」
マツブサの頭部めがけて俺はボールを投球する。コントロールだけは良いみたいで見事に命中。マツブサがくらっとバランスを崩したところでボールが開きニューラが飛び出す。
睨むようにしてこちらを向くニューラに俺は両手で謝り、そのままマツブサの目の前に【冷凍ビーム】による壁を形成する。
その輝きに気がついたのだろう、グラードンがマツブサ達の方を目視する。

「今だ、アンズ！」

アンズは煙突山の斜面を駆け抜けてマツブサの方へと駆け寄っていく。さすがくノ一……速いな。手刀によりマツブサを昏睡状態にさせる。即座に追いついてきたアリアドスの糸でグルグル巻きにされたマツブサは引っ張られるようにして後方へと放り投げられる。

アリアドスの糸は良い緩衝材となる。たとえ高くほうられたとしても衝撃は吸収されてしまう。といっても乱暴なやり方だけどな。

とはいっても麓にいたカスミさんとナツメさんによって無事受け止められる。

後は、こいつだけだ。

グラードンはまたもや一条の火炎を吐き出し、マツブサのいた場所……つまりはアンズが今いるところを狙う。直撃の前にニューラの設けた氷の壁は蒸発してしまいそうになるが、なんとかギリギリ回避する程度の時間は稼げた。

駆け回るアンズを狙ってグラードンは炎で追っていく。その時間稼ぎは長くは持たない……だからこそ俺は回収することができないがアンズのスピードについていけるニューラを送った。

アンズから借りたボールを手に、俺はグラードンめがけて走り出す。ダイゴさん……いや、ダイゴの別荘地下で鍛錬した成果はあったみたいだ。こっちには背を向けているグラードンに向かって、俺はアンズから託されたボールを投擲する。

「頼んだぞ」

傾斜の激しくなった凸凹斜面を必死に登りきって、肩が呼吸に連動していても気には留められない。早くしなければさすがのアンズも体力の限界が近いだろう。あの熱気の中では死んでしまう。

「グライオン、【砂地獄】！」

自分のトレーナーとは違う指示でも、さすがはアンズのポケモンだ。ちきんと言うことを聞くようにしつけられていたようだ。

ボールを放ったスピードからによる加速でグライオンは一秒とかからずグラードンの背後につく。火山口の中に【砂地獄】を形成する、それは普段なら容易い。しかし今グラードンがいるのは溶岩の中だ。

アンズが一体どういうトレーニングをすれば、こういった技が可能となるのかはわからない。恐らく、俺には一生かかっても無理だろう。俺にできる精一杯のことは相手の思いもよらない戦略を考えることだ。それで常に勝ってきた。それでも負ける時は相手が俺よりかしこいか、単純にポケモンの力の差でしかない。

つまり、俺がアンズとバトルをした場合……結果ははっきりとしているというわけだ。って、今はこんなことを考えてる場合じゃない。

なにが起こったのかというと、グラードンがもがき始めたということだ。

これで俺達の役目は終わった。

単純明快だ、それでいい。これが可能だったのも、今までの鍛錬の成果だ。どっと疲れが押し寄せてくる。だが、きっと今からが一番大変なのだろう。

「ケンくん、クロバットに掴まって！」

遠くからのアンズの声が耳に届いたのと同時に、クロバットが俺の背中を鷲掴む。

「うぉっ！？」

すぐそばにグライオンも合流し、グライオンに掴まってアンズも麓まで滑走していく。途中でニューラとアリアドスをボールに戻し、混乱しているグラードンを俺達四人は見上げる。

「よくやった」

それがナツメさんの精一杯の賛辞なのだろう。いつもクールなナツメさんが、息を乱しているすがたは早々お目にかかれそうになさそうだ。

「お疲れ様、二人とも」

カスミさんは目一杯の笑顔で出迎えてくれる。麓のほうが【水遊び】のおかげで上のほうとは比べ物にならないくらいに冷えていた。通常ならこれでも暑いと感じてしまうだろうにだ。

「いえ、それよりもここからだ厳しいですね」

「そうね」

そう、ロケット団が5分以内に来るということの本当の意味。それは5分までにグラードンの足止めと、俺達が無事に撤退できるまでの時間ということだ。今のところ、制限時間は1分を切っている。

それに俺達には見放すことのできないマグマ団の連中がいる。いくら悪事を働いていたとはいえ、最後の最後でリーダーから捨てられたのだ。俺達のように……。

しかし見捨てられてもなお、マグマ団の団員達はグルグル巻きにされたマツブサの介抱にあたっていた。それほどまでにマツブサという男が彼らにとって大きな存在なのだろう。

「助けていただき、感謝する」

と、そこで俺達四人の前に現れたのは幹部らしきマグマ団の一人だった。

「いいえ、それよりももうすぐロケット団が来るわ。あなたたちも逃げないと……」

「そのことについてだが、詳しい話を聞きたい。それで、提案がある」

提案。その単語に俺達の視線は一気にその幹部へと集まる。

「私たちも組織の人間だ。非常時に取るべきことはわかっている」

それはつまりリーダー格の人物が居なくなったときの想定だろう。

「隠し通路がある。一先ずはそこへ避難しよう」

「ナツメさん」

カスミさんが一番年長であるナツメさんに確認を取ると、夏目さんは厳しい目線をその幹部に向けて目を閉じて頷いた。

「わかりました。それではお願いできる？」

「ああ、承知だ。者共！　マツブサ様を連れてゲートＧＲに向かえ！」

その幹部の鶴の一声で、団員たちは統率のとれた動作で麓近くに生えている林へと移動する。大きな声を出さずに、迅速な対応を見せたのだ……。今の今まで困惑していた彼らがだ。

「それではお続きください」

罠、であるかもしれない。だが、今の俺達に彼らを見捨てて行くという選択肢はなかった。ましてや、今となってはばれずに撤退することもできない。

幹部である彼女に続いてカスミさん、ナツメさん、俺、そしてアンズが追いかける。

俺は最後に苛立たしく火山から抜け出せないグラードンを一瞥して、そのまま林の影の中へと消えるのであった。

第十九章：聖戦が残し産物　ＶＩＩ：制限時間５分（後書き）

さて第十九章も終わりが近づいて参りました。

暫く執筆をしないと、再開するときに手間取ってしまうのはしょうがないんですが逆にストレスがたまってしまったりします；；　解消するためにまた書くわけですが・・・（永遠ループ

本来ならグラードンをかっこうよく倒す！　ってのが王道なんでしょうが、自分は現実味を重視します。といっておきながら、よく見ると現実味ないんですけどね；；

久しぶりの後書きでテンションがあがったＫａｒｙｕでしたｗ　では！！

第十九章：聖戦が残し産物　「裏」：暗躍者（前書き）

交互にケンの物語と裏が進行しているのでややこしいかもしれませんが、付いてきてください！お願いします！

第十九章：聖戦が残し産物　「裏」：暗躍者

ホウエン地方：

「どうなされますか、ハル様？」

「難しいわね……」

暗闇の中、ハルと呼ばれた少女が難しい声を出す。

彼女の周りに集っているのは怪しげな装束に身を包み、大きなテーブルの上にホウエンの地図を広げていた。その後ろには全国地図が控えていた。

ホウエンの地図には煙突山辺りとルネシティ東部の海面が赤いマーカーで丸付けされていた。その位置は明確にマグマ団とアクア団のアジトを指していた。

「このままではロケット団が事態の鎮静をなしてしまいますが」

「それは構わないでしょう」

「ですが、それでは……」

そう、ハルが率いるこの集団はアルセウス教。彼女たちは今、このホウエンで起こっていることの対応について談義していた。

「アルセウス教はこの度のホウエンの騒動には加担いたしません」

「ですが！」

「黙りなさい！」

「……」

ハルもわかっていた。アルセウス教の本拠地であるシンオウがロケット団によって支配下に置かれてしまった今、ロケット団との連携は重要となってくる。しかしそれを重要視しているのはアルセウス教の推進派の連中であり、ハルのような保守派にとってはロケット団との協力は拒否している。

ただそれが意味することはロケット団との対立。それは推進派も保守派も望んではいないことである。だからこそ、彼らは今のホウエンで起こっていることに対しての対処に困っていた。

ロケット団の助力として動くのか、ロケット団より先に動くのか。その決断の時が刻一刻と迫っていた。

「ハル様！　ご決断を！」

そしてハルは後ろに控えていた両親に会釈して、その場にいるアルセウス教の者達へと告げた。

「私たちはこれ以上ロケット団の前でイイ子でいる気はありません。あの日、ロケット団に私たちの居場所を奪われた私たちには……」

そう。あの日、つまりはロケット団が全国を制覇した時にアルセウス教の本拠地は彼らに乗っ取られてしまった。だがそのことは一般には公開されてはいない。サカキはアルセウス教が持つその圧倒的支配力を利用することを選んだのだ。例えその宗教が薄れつつあると言っても、シンオウに置ける政治や歴史の背景には必ずアルセウス教が轡（たずな）をひいていたのだから。

だからハル達一家はサント・アンヌ号にてこのホウエンの地まで流された、否、左遷されたのだ。しかし彼らはアルセウス教のトッ

プとしてそのような仕草は見せないでいた。ただただ自分たちがアルセウス教の者であるプライドを保ち続けていたのだ。

そうであったからこそ、あの時ハルがルカに会えたのは僥倖と言えるのかもしれない。心の持ちように幾分のゆとりと、このままではいけないという責任感を持つことができたのだから。そして彼女はその目に焼き付けた。ロケット団の誇る圧倒的<力>というものに。

「それはシンオウの彼らを見捨てるということですかな？」
「いいえ、違います。シンオウに残された彼らの為にこそ私たちは抗うのです」
「ですが！　今の我々にそのような戦力はありませんぞ！」
「誰が武力を用いると言ったのです？」

ハルという少女はメディターを目指す一人の少女と出会った。

その少女は一人だった。一人で自分の大切な人の為に頑張っていた。ロケット団によって、サカキという男によって日常を奪い去られてしまった少女だった。

私情が混じってしまっているのはハル自身もわかっていた。だが、そういった人間がいる。例えアルセウス教の人間でないにしても、そういう人たちがいるという事実は消えていない。

「無駄な血を流す気などありません。私たちは神アルセウスのこどもたちです。神の御心を持つ者、己の信ずる道を進むのです」
「「はい！」」

ホウエンにて活動を行なっていた全てのアルセウス教の内通者が

ここに屯っている。数は少ないけれど、彼らには誰にも負けない絶対無二の力があった。それは信仰である。

信仰心とは一見夢幻のものに見えようとも、それは人を動かす原動力ともなる。その道理をハルは人一倍理解していた。だからこそ、人の上に立つ、立てる存在なのである。

もし今のハルが、ルカがロケット団に所属していると知ったらどう思うのか。少なくともハルは、アルセウス教の君主として立ち振舞っていると同時にルカの友人として今の戦況を傍視してきた。そしてこのホウエンの地にて考慮しなければならない存在もいる。

スウセルア教。

彼らの動向も未だ目立った動き無し。このホウエンにて起こっている異常現象。そして集った三つの勢力。

ロケット団による侵攻に最後まで抗い続けたこのホウエンの地で、また新たな火種が弾けんとしていた……。

ジョウト地方　アサギシティ：

「待たせたな」

一人の男がジョウト屈指の港街であるアサギの埠頭に足を下ろした。

船荷などを収容する巨大な倉庫が群れる内の一つに、その男は入っていく。するとそこで待ち構えていたのは複数人の男女。

「いいえ。それよりもホウエンは凄いことになっているようですね？」

一人の女性が男へと歩み寄りながら、そう尋ねる。

「なに、計画通りさ」

男はつかつかと深奥部へと歩いていく。

「しかし良いんですか？　あのような手では向こうの方々がかわいそうに思えますが」

「敵の裏をかくには、まず味方から……と言うだろう？」

「あまり良い気はしませんね」

男の傍若無人さに青年は納得いかないように言葉を濁すが、男は構わないように振舞う。

「しかし良くこれだけの人間が集まってくれたものだな」

意外そうに男はここへと集った面々を見渡して感嘆する。

「まあ誰もがそれほどまでに不満を抱いているということだよ、元ホウエンチャンピオン」

「棘のある言い方じゃないか、マツバ」

暗闇からいきなり現れた気配に男は感づき、不敵に笑みを浮かべて迎え出る。

「こっちとしては街が好き放題にされて困ってるんですよね。もう、信じられません！」

ぷんぷんと頬を膨らませているのはこのアサギのジムリーダーであるミカンである。冬だというのに彼女のトレンドマークである純白のワンピースは健在である。頭には白いニット帽、肩にも同色のカーデガンとしっかりと耐寒対策はできているようではあるが。

「そう怒るなミカン。それよりもダイゴ、ちゃんとフォローは入れるんだろうな？」

「無事終わったらな」

先ほど闇から突如として登場したエンジュシティジムリーダーであるマツバの言葉にダイゴは簡潔に答える。

「お前なあ……」

「時間がないからな。それにホウエンに奴らの注目が行っている今しかチャンスはない」

ホウエンにてカントーで集った協力者達を裏切ったダイゴ。そんな彼が今いる場所はジョウト地方。もはやカントー地方とは目と鼻の先にあるところである。

「まあいいさ。俺達もいつお前が独断専行……いや裏切るかわからないからな、手短に予定通り終わらせられるのなら終わらせよう」

そしてここまでの経緯を知っているマツバだからこそ、今のダイゴとも話ができた。

マツバが秘密裏に集めたジムリーダー達はそれぞれにロケット団への不信感を抱いている。そして誰もが一様は信頼のおける者たちだとダイゴも思っているのだろう。それはもちろん、勝手な行動は取らないであろうという意味において、ではあるが……。

「それでも僕はダイゴさんのやり方には納得いきません。そしていつかこっちも裏切られるとわかっている人と協力だなんて……」

さっき不満をこぼしていたのはキキョウシティジムリーダーのハヤトである。

「そう言うなハヤト。確かに虫のいい話ではあるし、勝手が違う。だけどな、こんなことをするなんて向こうが予測できるか？」

「そ、それは……」

「そこが狙いなんだ。こちら側の混乱は相手に付け入る隙を与えてしまうが、その付け入る隙をこちらのチャンスとして活かすにはこういったやり方しかない」

「……マツバさんがそこまで言うなら」

ダイゴは目配りだけでマツバに謝礼すると、それを勘繰ったマツバはもう二人の協力者へと向く。

「異存はないか、シジマさんにイブキ？」

「無論だ」

「ないわ」

目を瞑ったままタンバのジムリーダーはコンテナの上で瞑想しており、フスベのドラゴン使いジムリーダーのイブキは同じコンテナに背をあずけたまま手短に答える。

「さすがにジョウトのジムリーダー全員とはいかなかったか」

「ああ……。ツクシとアカネに関しては年が年だからな」

それは彼らを信頼しないという意味ではない。意味ではないにしても、まだ十代前半の彼らには荷が重すぎると判断したのだろう。

「それじゃ、チョウジのヤナギさんは？」

「あの人は、完全にあちら側の人間だった」

「なに？」

ダイゴの問いにマツバは声を潜めて耳元で伝える。

「どうやらヤナギさんが裏で手を引いて奴らをジョウトへと引き込んだらしい」

「そういうことだったのか」

「ああ。それこそサカキという男が侮れない。さすがのワタルさんもヤナギのじいさん相手には分が悪いからな」

様々な陰謀が裏で行われ続けている今、なにが起こっていても不思議ではない。ダイゴのステージは今、ホウエンからジョウトへと移った。そしてホウエンの騒動がまだ続いている中、ダイゴとジョウトのジムリーダー達によるステージが始まらんとしていた。

イッシュ地方：

「見つけた」

「……誰、ですか？」

「そんなに警戒しなくてもいいわ、最後の八柱力さん」

妖艶に満ちたその声の主はミュウ。その言葉が向けられるのは白き龍レシラムと黒き龍ゼクロムを従える一人の少年に対してであっ

た。

ここがどこなのか？　それは人が踏み入ることのできない領域であるのかもしれない。そもそも現存する場所なのかも、この異様な空気の中では定かではない。

だがそこには少年がいた。その肩にゾロアというポケモンを乗せながら。

「八柱力？　……それにしてもお姉さん凄いですね。レシラムとゼクロムがこんなにも警戒しない人なんて会ったことないですよ」

「あら、いつ人間だなんて言ったかしら」

「え？」

まるで世界そのものを諦めてしまっている眼をした少年をミュウは楽しげに見つめて止まない。なぜなら彼女はこういった人間を弄ぶのが大好きだからだ。

「まあ、今はそんなに時間はないから後にしましょう」

「何を言っているんですか？　それに、用がないならお引き取りください」

あくまでも腰を低くして少年はミュウへと言葉を連ねる。しかしその口調には抑揚の一切が見受けられない。まるで何にも感心がないようである。

「あなたの望みはなにかしら？」

「……消えて、無くなりたい」

「ならその望み、叶えたいと思わない？」

「できるならとっくにしてるさ」

少年がレシラムとゼクロムを従えているのではない。レシラムとゼクロムが少年を監視していたのだ。それは彼が八柱力の一人であり、この世界の均衡を担う貴重な存在であるからだ。

「N……その名前があなたの全てを物語っている」

ミュウは口が裂けてしまいそうな程の笑みを携えて、Nという名の少年の耳元で囁く。

「あなたの望みを叶えてあげるわ」

と……。

第十九章：聖戦が残し産物　「裏」：暗躍者（後書き）

ということで今回取り上げたのはハル・ダイゴ・ミュウ（N）の三つでした。

出番の回数的にもそれぞれにスポットを当ててておきたかったので、後ちょっとした伏線回収もかねて；；

それでは次はケンですが、それにて第十九章は終わりですw　お楽しみに！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2554i/

ポケットモンスター　メディター

2011年11月29日01時46分発行